

鷹の6本のツメ

ひとりのリク

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【注意書き】

原作113巻までのネタバレが含まれています。

原作知識ありきで書いています。

予めご了承ください。

【概要】

WBC・WBAミドル級王座統一戦後のIFストーリー。

3階級制覇を終えた鷹村を中心に、己の目標へと向け、着実に成長し続ける漢たちの物語。

・ライトヘビー級編— 完結—

・Next Champion編— 完結—

・クルーザー級編

【Next Champion編】

遡ること3年。

舞台裏として済まされてきた5人のボクサーの物語が明かされる。

山田 直道、千堂 武士、アルフレド・ゴンザレス、板垣 学、速

水 龍一。

憧れるものに手を伸ばし、或いは抜け出せない現実を直視し、もしくは焦がれるほど求めるあと1度への執着から。

幕之内が敗北を喫した直後から、“彼”の物語は急激に加速する。1つの変化が次の舞台を呼び、原点から外れていた者たちを巻き込んでいく。

2023. 6. 5 (月)

5人のボクサーの物語、メインイベントを飾るのはアルフレド・ゴンザレス。

ただ1人、あと1度への執着3度目の挑戦を掴み取った最凶のボクサー。

神話崩壊への最後の一手として求めたのは、生涯の好敵手である千堂、そして好敵手を降した幕之内だった。

理性×死神と化学×暴力、神々の最終決戦を刮目せよ

【クルーザー級編】

夢を追い、栄光から堕ちたボクサーたちの『もう1度』が語られる。

目次

ライトヘビー級

WBCスーパーミドル級タイトルマッチ 1

ヘビー級チャンピオン 5

ライトヘビー級タイトルマッチ決定 12

木村 タツヤVSエレキ・バッテリー 20

リングに現れた燕 29

恐怖に挑むために 38

引退した男より 51

青木 勝VSパイヤ・ダチウ 62

時間を止める拳 74

降りしきる記憶 その1 89

降りしきる記憶 その2 97

降りしきる記憶 その3 101

幕之内 一步VSアントニオ・ゲバラ 108

僕のボクシング 117

はじまりの分岐点 123

ティム・フェザント 130

ライトヘビー級タイトルマッチ 記者会見 134

鷹村 守VSティム・フェザント 138

1秒後の生存 142

波紋の障壁 152

唯一無二の宝刀 160

辿り着いた深淵 174

王とは 185

王の強さ

198

Next Champion

物語の中心を取り巻くものたち

203

ハンマーナオに託すもの

213

今井 京介の征く道

221

今井 京介VSハンマーナオ

227

憧れの拳

237

最後の試合

249

冥界送りの拳

253

理性に突き立てる牙

257

WBCフェザー級タイトルマッチ 記者会見

260

アルフレド・ゴンザレスVS千堂 武士

264

夜空に挑む

267

浪速が雪崩れ征く

279

モード・ミキストリ

288

表裏・死神

301

限界の先へ

316

贈るもの

324

板垣 学の慢心は消え去った

327

星を追う残骸

332

最後の日本フェザー級タイトル挑戦

335

3分間の壁

345

過去と現在、そして自分自身

352

新しい扉

357

去る者の伝言

369

はじまりの挨拶	377
埃塗れの翼	381
ジシヨウ最強	388
カウントのないリング	395
○のボクシング	404
逸脱していく影法師	409
2つの右拳	415
鴨川軍団、再始動	422
さらば、ミドル!	430
最後の調整	435
2人の王者	443
WBC・WBAフェザー級王座統一戦	448
狩場の技術	451
歴史に届く	461
世界最高峰	471
決意、継ぐ	481
限界の先で待つ者	486
ストリクス・ワール	490
前座に立つ者たち	493
ストリクス・ワールVS鷹村 守	497
始発の1つ前から、未来へのいっぽ	506
幕之内 一步の約束	512
世界を彩るもの	519
リボルブ・ゲイル	528
木村 タツヤの再起戦	533

リボルブ・ゲイルVS間柴	544
執るか、潜るか	556
黄金の舞台	563
撃鉄は落ちた	574
死神の帰結	583
病室で3人、先のこと	594
速水 龍一の骸	600
悲運な天命	607
後ろ姿はだれの影法師	619
速水 龍一の吊い	633
9度目の再起戦	642
蛟 剣哉	651
蛟 剣哉VS速水 龍一	658
俳優のしがらみ	672
ロード・オブ・スター	680
昇龍伝説／失墜伝説	688
死神の決断	705
行くで幕之内!!?	712
準備万端	722
決意、固く	736
Mythology of termination	745
太陽に届け、表裏無き拳	750
数少ない弱点	760
化学への試練	770
暴力と闘神	779

なんだよ、リカルド

神話の果て、星屑ダンス

グラシアス

最後の報酬

794

808

821

836

ライトヘビー級

WBCスーパーミドル級タイトルマッチ

空はすっかり暗くなり、街灯と建物の照明が目立つ時刻を迎える。こうして人々の喧騒は訪れ、酒に女に酔い耽るお祭りの合図となるのだが。

今夜は「また」一風変わった、漢と漢の狂宴によって、後楽園ホール周辺は熱狂の渦と化していた。

『や、やった決まった！ここに、ついに決着！』

しばしの静寂の後、後楽園ホールから轟く狂喜乱舞の祝福。

通行人はホールの外に張り出されているポスターを見るや、外に漏れ出す歓声に納得する。ああ、またあいつがやり遂げたのだ、と。一人、誰かがふいに笑う。

後楽園ホールの会場、リング中央で告げられる勝利宣言に、一人の漢が右拳を突き上げていた。

彼に釣られるように、観客たちは伝説の瞬間に総立ちとなっていた。男も女も関係なく、人間が持てる限りの雄叫びを上げる。身体に発生する熱を放出するように、喜びを惜しみなく表現していた。

『WBCスーパーミドル級タイトルマッチ、
新チャンピオン、爆誕!!!』

会場中の注目を浴び続けるそれは、ボクシング。

今宵、鷹村 守の世界タイトル挑戦が行われ、試合は鷹村のKO勝利により幕を引いた。

「本当にすげえよアンタ！」

「やっぱ人間じゃねえや！」

「おめでとうございます鷹村さん！」

右拳を下ろした鷹村は、次にボクシングジムの後輩たちのはしゃぐ様を見て笑い合う。

「これだから鷹村の試合は見逃せねえんだ」

「チャンピオンを圧倒とか、人間やめてやがる！」

「それでこそ鷹村だーッ!!」

客席では、試合終了の余韻に浸るボクシングファンが語り合い、新たな交友を広げていく。

日本ボクシング界の先陣を行く鷹村。迫力のある試合を何度も行い、湧き上がる観客の代償として大きなダメージを受けていた。血を流し、視界が閉ざされるほどまぶたが腫れ、気を失いながら戦う。アキシデントが重なり、だがそれでも最後には相手を倒す。

それが鷹村 守という男。そういう認識が、世界に広まっていた彼だった。しかし、今回のタイトルマッチを通し、普段と違う変化に誰もが気付いていた。

「視界も、両足も、拳も異常はねえ。故障は言うまでもないが、ダウンもゼロだ。どうだ会長、これでちったあ安心しただろ!!」

リングの上でニカツと歯を見せる鷹村。

大きな外傷はなく、目に見える疲労を感じさせない堂々さ。

彼のトレーナーであり、鴨川ボクシングジムの会長、鴨川 源二は、そんな鷹村の声に大きく頷いた。

「ようやった、鷹村。誰にも文句を言わせぬ、完璧なタイトルマッチじゃったぞ」

「4つ目のベルト。ようやく3階級、半分まで終わりだ」

チャンピオンベルトを受け取った鴨川は、鷹村の腰に巻きながら話に耳を傾ける。

「こっからはダメージ抜く時間なんて必要ねえ。さっさと階級上げて、パパッと6階級制覇するぞ」

「ダメじゃ、とは言えんくなってきたな。出切る限り早く準備する」
ダメージが無い、とは嘘だ。

試合中に受けたパンチだけがダメージではない。鷹村は試合のたびに減量に苦戦し、体力の温存も危うい状況なのだ。減量に慣れはなく、相手の土俵で勝負することを強いられている。

だから鴨川は俯き、いまの喜びを噛みしめる。

鷹村がアキシデント無くタイトルマッチを終えたことを、我がことのように喜んだ。

「ゴホン」

綻んだ頬を引き締めるように、ゴホンと咳払いをする。

「だが、まずはスポーツマンらしくせんことには、それも遠くなるぞい」

鴨川が振り返った視線の先、鷹村は釣られて顔を上げる。

180cmを超える長身、白人茶髪の男性。セコンドに左肩を支えられながら、右手はしっかりと差し伸ばしている。

「オメデトウ、タカムラ」

腫れた右まぶたに似合わない笑顔は、鷹村の王座獲得を心から祝っていた。

試合前とはうって変わり好意的な態度は、紳士という言葉がとても似合う。

「なんだ、もう起き上がって大丈夫なのかよ?」

それに対して鷹村はこれだ。

元チャンピオンは心配ないとジェスチャーするが、鴨川は違った。

「この馬鹿者!!?」

鴨川はリングの上ということを忘れ、鷹村のボディにストレートを放つ。

「いてッ!クソジジイ、テメーがダメージ増やしてどうすんだ!」

「もつと礼儀を弁えんかあ!日本人らしく挨拶するんじや、ホレ」

うるさい奴だ、とグググち呟きながら鷹村は一步前が出る。

「シンジている。キミが、ヘビー級チャンピオンになることを」

「……日本語、うまいじゃねえか。」

言われずとも。このベルトの分も担いで頂上に駆け上がるからよく見とけ!」

「ダハハ、そのコブシならウソはつけないな」

チャンピオンと握手を交わすと向きを90度右へ。

インタビュアーの女性の方に歩き始めた。ニコニコ笑顔の視線は豊満な胸へ。

鷹村のことをよく知る者たちは、そこで爆発する。

「鷹村ちゃんと挨拶しろ!」

ヘビー級チャンピオン

スーパーミドル級タイトルマッチ後。

元チャンピオンは日本の記者を控え室に通し、インタビュウに答えていた。最初こそ遠慮がちだった記者たちも、彼の度量の大きさを目の当たりにしてからは悠々としたインタビュウとなる。

彼の顔は敗者が浮かべるものではなく、出し切ったという満足感が見えた。それほど差を目撃した。

「ようやく酸素を吸った気になれる」

インタビュウを終えて控え室を出た藤井は、喫煙室でタバコをふかす。煙の向こうに、スーパーミドル級タイトルマッチを思い返していた。

『高層ビル屋上から百メートル先の屋上へ、命綱無しの綱渡りをするような緊張感のあるファイト』

と、元チャンピオンは例える。

2Rまでは両雄クリーンヒットはなく、リング中央から離れることなく砲撃戦が繰り広げられた。ダック、スウエーは勿論、ときおりストッピングを交えながら主導権を奪い合う。

あそこまで堅実な鷹村は珍しかった。

3R序盤、慣れに任せて相手の一手先を封じクリーンヒットを奪う鷹村。残酷にも、このラウンドから鷹村が終始リング上を掌握し、王者の足を完全に奪った。

行く先々を封じ、これでもかとチャンピオンの攻撃力を奪ってみせたのだ。

4Rの開始のゴングが鳴るも、あくまでも冷静に攻め立てる鷹村。鷹村は知っていたのだ。足を封じられた王者には、逆転する術があることを。

だが、観客は皆、鷹村がインパクトのある一撃で試合を終わらせると信じていた。

それだけに、冷酷なまでに反撃の隙を与えずにトドメを刺したとき、勝利への歓声が5秒遅れた。

試合後、元チャンピオンはこう語った。

『ここまで完膚なきまでに私を叩き潰した人物は二人目だ。これまでタカムラとの防衛戦に臨んだチャンプたちは、おそらく6階級制覇が夢ではないことを実感している。私も、タカムラの6階級制覇を応援したくなつたよ』

記者たちが驚きの声を上げ、また元王者の器に感心したところでインタビューは終了。

控え室から退席するとき、彼は最後にこう言い残した。

『ライトヘビー級の壁を越えたとき、6階級の頂点はすぐそこだ』

『ライトヘビー級の壁……？』

『イエス。私がスーパーミドルのタイトルホルダーだった理由がそこにはある』

おそらく、記者の半分が分かってりや上出来といったところ。

元チャンピオンの本来のウエイトはライトヘビー級。彼は約二年間、減量を行なってまでスーパーミドル級を戦場としていた。

その理由を鷹村が知っていて、この試合に臨んでいたとしたら。

「そうまでして避けたいボクサーか」

夜風に当たったのでもなく肌が身震いしていた。

俺が戦うわけでもないのだが、一抹の不安はある。

だが、その心配は外れてくれる。少しずつ減量苦から解放されていく鷹村なら、という未知の領域がそう思わせてくれる。



最後に一本のタバコを吸い終えて後楽園ホールをあとにする。

タイトルマッチのあとは相変わらず人が多い。だが、鷹村の試合を見れば人混みもまた良い味のひとつだ。

「今すぐに記事に落とさねえと、この快拳は明日じゃ伝えらんねえな」
何よりも、次に鷹村が挑戦するライトヘビー級について調べておく必要がある。3団体の王者たちはそれぞれ把握済みだが、ここ最近の2団体については消極的な試合が多い。

引退間近が一人、王座に胡座かいてるやつが一人。残るはやはり…。

「……あれは」

そのとき、視界の奥に見えた人物の顔を見て、いつの間にか目を見開いていた。

日本人の人混みに紛れ込み、その男は頭一つ分以上飛び抜けている。金髪の白人、明らかにアメリカ人だと分かる逞たくましい身体は、周囲の注目を集めている。20mは離れていたが、彼の周りを人が避けているのが見て分かった。

サングラスを掛け、心許ない変装のせいかな近寄りがたさを増している。そんな男を、俺は知っている。

「ま、待ってくれー」

人混みで、周りの目もはばからず声を上げていた。

この機を逃せば、次にいつ出会えるかなんて分からない。そんな大物が、どこかの記者と話すのでもなく、観光気分で歩いている。

ボクシングを愛するものとして、その意味を聞かずには明日を迎えられる気がしないのだ。

「ウェイト・ストッパー・フリーズー」

滅茶苦茶な英単語を口にして、とにかく気を引こうという作戦だ。人混みを掻き分けて、少しずつ近く。

それが功を奏したのか、男はこちらに気づいて振り向くと。

「オット」

ニカツと笑顔を見せるや、人混みを掻き分けて走り出した。

「なっ!？」

巨漢が人混みの中をグングンと進むなか、こっちは逆に吞まれてしまいそうだ。人にぶつかり、足に引っかかりそうになり、まともに走れる場所じゃない。

流れにのりながら、男が通った後の隙間に辿り着いた。しかし、男は人混みを抜けている。

「くそ、なんでスルスル動けるんだチキショウー」

おっさん達の怒鳴り声も構わず人混みを抜けたときには、目立つは

ずの男は見当たらない。少しの間、目を離しただけでこれだ。

それでも諦めきれず、人混みの端にいるサラリーマンに尋ねる。

「ちよつといいか！金髪のアメリカ人、それも巨漢の男がどこに行つたか見なかつたか？」

「お、落ち着け！そいつなら、橋を川沿いに下りながら走つてつたよ」

あの目立つナリなら間違いはないだろう。

礼を言つてあとを追う。

全力ダツシユで1分、川沿いの通りに出た。

駅に続く道から外れたから人混みは薄くなる。この周辺がさして興味を惹くものがないからだ。退屈な川沿いが続くが、もう見慣れた。そう、見慣れたものしか見当たらないなら、あの巨漢はどこにもいないということ。

それが分かるや川沿いに走り、近くの角を曲がる。いくら速くとも、川沿いを走り続けていれば見えるはずだ。

住宅地を適当に走つて撒こうとしてもおかしくはない。向こうに土地勘がないという前提で、片っ端から住宅地を駆ける。

せめて、いまの気持ちだけでも聞きたい一心で走る。

鷹村 守の“最終到達点にいる人物”だから。

「ゼエ、ゼエ、ゲホツ」

10分後、夜の街灯の下で息を切らしている自分が情けなくなつた。巨漢の影すら見当たらず、ひたすら住宅地を走り彷徨うだけ。まんま不審者だ。

ヒゲでも剃つておけば、と後悔しながらトボトボと歩く。

ここまで来たら、記事にしなくてもいいから話を聞きたい。たまたまあそこに居た、なんて言い訳は通じない。間違いなく今日のスーパーミドル級タイトルマッチを観ている。

さらに歩き続けるが、巨漢の男など初めからいなかったかのように静かだ。

夜空を仰ぎながら、白い息を吐いた。今さっきのことは忘れて、今日の記事を書こう。そう思ったそのとき、真上にあるはずの街灯が無いことに気づく。

なぜか、と聞かれても分からない。

「探しているのは、私かな？」

街灯を覆うなにかが、こちらに話しかけてくるまでは呆然としていたからだ。

「ギャアアアアア!!」

頭上の街灯を遮っていたのは、巨漢の男の頭部だった。

気さくに話しかけてきた唐突さに、思わず声を張り上げて後ずさつてしまう。

男は愉快そうに、アメリカ人独特の笑い方をする。

「あんなに必死に追いかけられると、少し楽しくなっちゃうじゃないか。こっちだと避けられてるからね、新鮮だった!」

「なん、で…いや、それよりだ!」

遠く見るよりも逞しく、神殿の柱のように見惚れてしまうほどの腕。やはり近くで見上げる容姿は、一目で敵わない相手だと理解できてしまう。

「アンダーソン、で合っていますか?」

当たり前のように日本語を話すあまり、相手が異国の人ということ忘れてしまう。

「イエス、ジャパニーズ」

それほど、揚々と答える楽しい表情が目の前にあつたのだ。

さきほどの緊張もどこへやら。

「そういう君は?」

「失礼しました。私はこういうもの…字は読めます?」

名刺を渡すと日本語、それも漢字を理解しているらしい。問題なく話がすすんでいく。

「記者さんだね?これは困ったよ、うん。私はプライベートでここに來ている。我が師にも内密に、タカムラの試合が目的だね」

「それは、個人的に興味湧いたということですか?」

「ノー。私だけではない。アメリカのボクシングファンの間では、タカムラのごとは話題に上がりっぱなしさ」

「耳にはしています。ライトヘビー級、クルーザー級は最近チャンピ

オンの入れ替わりが少ない。それほど、重量級現役チャンピオンたちとランカーの差が離れてしまっている」

だからこそ、鷹村の快進撃は注目を浴びている。

減量苦を背負いながらのタイトルマッチをこなし、全てに打ち勝ってきた。少しずつ枷が外れていく鷹村なら、緻密なボクシングを打破してくれると期待が集まるのだ。

「まあ、彼らが話題にする以前から、私はタカムラのことを注目していたんだけど」

「ほう！いつ頃の話か聞いても？」

「ウーム、これはシークレットだ。しかし、いつか話したいという矛盾も抱えている」

考える素ぶりを見せるや、片目でウインクなんてするアンダーソン。似合うのが驚きだが、次の言葉にはもつと驚かされた。

「親愛なるジャパニーズ、この話の続きはタカムラが私のもとまで来たときにしよう。私とのインタビューをアポイントでどうだ？」

ここで下手を打つよりもマシだという直感が、俺に即断の後押しをする。

「オーケー、そうこなくっちゃな！」

「ハハハッ！じゃあ今日の話もそのとき記事にするといい。あ、もちろん日付は伏せてくれ？」

「なるほど、本当の狙いはソコですね？」

「オーツト、勘弁してくれよ！面倒ごととはできるだけ片付けておきたいんだ。アメリカ人の誇りにかけて嘘はつかない！」

「鷹村は遠くない日に貴方と会いますよ、アンダーソン。」

だから、取材のことよりも負けることを気にした方がいい」

レクス・アンダーソン。

WBCヘビー級チャンピオン。

40戦にもなる試合全てを、4R以内にKO勝ちしている最重量級の怪物。

別名は、^{王者}キング・^中オブ・^{王者}レクス。

アメリカの頂点が鷹村をマークした。

それも、いまに始まったのではないというのだ。
なにか因縁のようなものでもあるのだろうか。

「フ、ハハ！もちろんだ！」

ふと思ったことは口に出さず、笑顔で別れを告げる。

最後に握手を交わし、アンダーソンと別れて今日のタイトルマッチの記事をまとめに行った。

ライトヘビー級タイトルマッチ決定

鷹村 守がスーパーミドル級防衛戦を3度こなし、その全てを7R以内KO勝利で終えた頃。

鴨川ボクシングジムの2階、事務室のソファに鷹村 守は腰掛けていた。その横で、青木と木村は立ち、似合わずも背筋を伸ばしている。会長の椅子に座る鴨川と、その横に立つ八木。彼らの真剣にして、疲労が抜けている様子に只事ではないことを察しているのだ。

「なあ、次の試合が決まったんだろ。それも、とびっきりのがよ」

鴨川は、待たせたと云って、八木に視線で合図をする。

笑顔で答え、八木がここに集めたことの第一目的を明かす。

「鷹村くんのライトヘビー級タイトルマッチが決定した」

「おお！ ついに来たか、2年近く待たせやがって」

「忘れてるんじゃないかとヒヤヒヤしたぜ八木ちゃん」

「毎月僕に言ってくるくせに…」

後ろを向きながら呟く八木に対し、青木と木村はご満悦だ。

「んで、次はいつだ。4階級目のベルトが手に入る日は」

「相変わらずだね鷹村くんも。その調子なら、9月のタイトルマッチも安心して見られそうだ」

「まずは2ヶ月後の防衛戦、そこから4ヶ月後にライトヘビー級じゃ。油断はするなよ」

5月の防衛戦に向けて調整中の鷹村。

そこから一年半ぶりのタイトルマッチだ。高揚はすれど、油断はしないのは誰もが知っている。

「団体はWBC、チャンピオンの名前はティム・フェザント。長期戦を得意とするカウンタータイプじゃ」

「フン、宮田の上位互換程度か。軽くコテンパンにして焼き鳥にして食ってやる」

「いよっ大将！」

「あんたが一番！」

鷹村の悪ノリに青木村がはやし立てる。

そんな二人に八木は言葉をさす。

「君たちも浮かれてはいられない。前座として、青木さんと木村さんの試合も決まったんだよ」

「鷹村さんの前座だな！任せてくださいよ！」

「…なんか嫌な気がするのはいのせいかな？まさか、やつらじゃねえだろうな八木ちゃん」

興奮する青木、なにかを察する木村。

「そう、そのまさか。青木くんはパイヤ、木村くんはエレキだ」

「ギャーハハハハ！お前ら変なやつに好かれてやんの！」

「うっせえ！こつちも好きでやってんじやないんだよ！」

青木はパイヤ・ダウチ、木村はエレキ・バッテリーと過去2回の試合を行い、両者2回とも引き分けている。

相手は両者とも国内王者。着々と防衛戦を重ね、未だに陥落していないのだから驚きだ。

「三度目の正直、向こうもチャンピオンだ。意地でも勝ちにくる。二人とも、チャンピオンになりたいのなら絶対に落とさなきゃいけない」

そんな相手を選んだことの意図を、二人は薄々感づいている。

国内王者になるための通過点、そうトレーナーは言っている。王者になるために、王者を乗り越える。シンプルに分かりやすい壁だ。

「ついこの前、篠田くんがパイヤとエレキのビデオを入手した」

「まじかよ、最近見ないと思ったら俺たちのために…すごいな！」

「そこまでしてくれてたのか。というか、よく手に入れましたね。見当たりませんが、いま篠田さんは何処にいるんですか？」

「人の心配より己の勝利を見据えておれ。お主らのポテンシャルは過去最高と言っている。次は、そのポテンシャルを対戦相手に活かせるよう、イメージトレーニングじゃ」

鴨川 源二、篠田に対してこのような態度ではあるが最大の感謝をしている。いま、フィリピンでエレキの情報を掻き集めている篠田に、このことは黙っておくように言われているのだ。

来週帰ってきた篠田は、トレーナーとして幾分も成長している。青木と木村を勝たせるために、一つの答えを見つけてくるだろう。

「青木、木村ッ！」

鴨川が話を終えようとしたとき、鷹村が立ち上がる。

「どうせこのままやっても、引き分けが関の山だ。てめえらには迫力が足りん」

鴨川と篠田の考えに早速邪魔を入れる鷹村。鴨川が杖をぶん投げようとしたところで、言葉の続きに耳を傾けたことで手が止まる。

「俺様はなんでもできる。そのせいで相手から技を分捕ぶんどってしまうように、俺様を見習えば間違いなく勝てる」

「む……」

鷹村がまともそうなことを言っている。

鴨川は悩んだ。いまのうちに止めるべきか、助言ならば言わせても良いのか。

「なんだよそれ。エレキ相手じゃ特質したもんは余計な手荷物になるだけだぜ」

「バイソン戦のせいで余計なことに気づいたからな……」

そんなもの選択するだけ時間の無駄だ。

しかし、ここ最近の鷹村の勤勉さを考えるに、篠田の苦労を軽くできるとは思えない。

「イメージトレーニングだ」

「それはいま会長から聞いた」

「俺らの試合に興味持つてくださいよ」

「そうじゃねえよ！そっちこそ話は最後まで聞きやがれ！」

「ぎゃっ！」

青木が理不尽に蹴られて、そのことで鴨川が叱責する。

「まあ、言いたいことは分かる。というか、言っても分からんから先にそう言っておく。今から俺様が言うことは、聞くよりも実際にやってみた方が早いからな。というわけで行くぞー！」

ブツブツと言いながら事務所を出ていく青木と木村。

鷹村があとを追うように立ち上がったところで、鴨川は真意を聞いて

た。

「鷹村、貴様も調整中の身じゃ。そう余裕があるわけでもあるまい。本当に大丈夫なのか？」

「いまだから見倣えるもんがある。こいつらの事は心配すんな。男子三日会わざれば刮目して見よ。小者の頂点なんぞ、いい加減とれつてんだ」

ふん、と鼻を鳴らし事務所を出ていく鷹村。

「鷹村くんなりの考えがあるんですよ、きつと。絶好調のエースを信じましょう」

「篠田くんの努力を知つとる間柄じゃ。ワシもそう思いたい」

鷹村の背中を見送ってから数分後。

『こいつ減量中のくせ、顔を見ないと思つたらそんなことしてやがつたのか！』

『そんなこととはなんだ！練習の合間を縫って床屋に頼み込んだんだぞ！！俺様の好意を無駄にすんじゃないやねえ！！』

『んなもん好意と言えるかあ！』

開けた窓から騒がしい声が響いてくる。

「会長、なぜか1階からバリカンの音が聞こえますよ……」

「う、うむ……」

鴨川は机に両肘を立てながらうなる。

これもまた聞き慣れた風物詩となっている。バカをやっている門下生をよそに、鴨川はすでに別の人物のことを考えていた。

「奴らにとつては日常の一つ。鷹村が少しでも善意でやるとなれば、また違う未来が訪れるやもしれん。

それよりも、ワシが一番心配するのは“小僧”じゃよ」

「……」

「もう2年は経とうとしておる。ゴンザレスに負けてから、WBCに勧告を受けるまで一切の試合をしてこなかった。これでも相当見逃されてきた方じゃわい。

その理由を作ってくれた千堂には感謝せねばな」

世界の人間全てに平等に刻まれる時間。

それは負傷し、目に見えない枷に囚われている選手も例外ではない。

鴨川が心配の声を向ける人物はロードワーク中。

己が納得できるまでリングに立つな。そう告げてからリングに戻ってくるまで長く、忙しく、絶えず苦悶と闘ってきた。

「千堂くんが注目を集め続けてくれました。だからこれまで準備期間を設けることができました」

「幕之内 一歩の再起戦」は半年後、鷹村の前座の一つとしてエントリーされる。

「しかし、だ。たとえ1Rだろうと、10秒だろうと、次に危険と判断したそのとき、せめて止めるのはワシのタオルで…。選手として終わる前に、ワシの手で止める」

咳を数度繰り返す鴨川は、事務所の外を見ながら呟いた。



鴨川ボクシングジム1階、シャワールームにて。

「貴様らも日本ランカーの端くれ、それもベテランときた。イメージトレーニングの10や20はやってきたことだろう」

シャワールームの最奥で仁王立ちの鷹村。その前には椅子が一つあり、背中しか見えないことから気味の悪さは最高であった。

「だがな、それじゃ足りん。試合見てりや分かる。突拍子のない動きならともかく、ただのコンビネーションでやられてたんだ。

俺様から言わせりや、勝つ気あんのかって話よ」

青木、木村はシャワールームの入口で立ちながらも、奥まで進む勇気を踏み出せずにいた。鷹村の言葉に思うところがありながらも、鷹村が放つ言葉ゆえに頷いていいものではないからだ。

「鷹村さんのミドル級王座統一からは俺ら負け無しですよ。もうすぐ日本ランキングも1位ですし、それだけ力を入れている」

「…それでも不安が拭いきれないのは確かですけど。まだ上にいける手段があるんなら、迷わずもらいますよ」

青木がそう言うや、鷹村は振り向いて満足そうに頷き。

「青木、木村。お前らは今から対戦相手になれ」

「…はい？」

ニンマリと笑い、二枚の写真を取り出した。

青木にはパイヤ・ダウチ、木村にはエレキ・バッテリー。

パイヤはブロッコリーのような髪型、エレキはてっぺんにイナズママークの肌が見えている。なにを思っこの髪型に行き着くのかは、未だに謎である。

「随分と前に負けたら髪型合わせるっつー話しただろ。今回は負けないために髪型をコレにしろ！」

「なんでそうなる！それが嫌だから勝つために練習するんだろが！そんな髪型にされて練習なんざできるか！」

「くそっ！やっぱりロクなことじゃ…」

逃げるために背中を見せる二人に、鷹村はボソリと呟く。

「勝ちたく、ないのか」

それは卑怯にも、的確に二人の心を掴む言葉。

どれだけでも作戦でも、誇りある限り食らいつく精神でボクサーをしているのだ。ほんの少しだけ、と話を聞く姿勢に二人は入った。入ってしまった。

「もう残された猶予はねえんだろ。ならこれまで以上に練習時間を積まなきゃならん」

「ぐっ…」

「だが、身体が弱すぎる貴様らにとっては、シャドーを追う時間すら食り尽くさなきゃならんはずだ」

「そ、それは必要なことですが…そこまでする必要は…」

「俺様はイメージ 트레이ニングを毎日やっている。それも実践に近いやつだ。事実、最近順調だ。貴様らも見てきただろう」

「確かに…鷹村さんほどじゃなくても、俺たちもそれに寄せるためにイメージしやすい姿がいいのか？」

「そ、それでもあの髪型はねーだろ」

「決定!!」

「ねえ俺の話聞いて!？」

鷹村が両手を叩くや、シャワールームのドアが勢いよく開け放たれた。そこには10人を超える男性、それも。

「げえ、門下生どもー!」

「青木組まで!？」

鴨川ボクシングジムの門下生は、あからさまに鷹村に命令された様子。意外なのは、青木を持ち上げるヒョロヒョロした背格好の赤松、でっぷりとした体格の黄桜の二人く通称：青木組くがいることだ。

彼らは青木に憧れて鴨川ボクシングジムにやってきた。ゆえに、鷹村の命令でも動かない不屈の精神を持っている。はずなのだが…。

「バカな！なぜお前らが鷹村さんの方にいる!？」

「お前の人望もこういうもんってことだろ!」

否。

「青木先生、これは全て勝つためです」

「先生なら、必ず乗り越えられます!ですから、耐えてください」

たまたま、鷹村と同じことを考えていたにすぎない二人。青木に勝ってほしいため、方向性が一致した鷹村と横並びに突撃しているに過ぎない。

「さあ、俺様が床屋で培った散髪力をここで解き放ってやる!大人しくしろ!」

「こいつ減量中のくせ、顔を見ないと思ったらそんなことしてやがったのか!」

「そんなこととはなんだ!練習の合間を縫って床屋に頼み込んだんだぞ!!俺様の好意を無駄にすんじゃねえ!!!」

「んなもん好意と言えるかあ!」

日本ランカー二人、されど相手はボクシングの門下生10人以上。背後には3階級制覇の鷹村 守。

結果は言わずとも。

「木村あ！」

「青木い！」

無惨。

両者の髪型は、対戦相手と瓜二つ。それも、絶望的に似合っていない。形容などない。

しかし、悲しくも鷹村と青木組が導き出した答えである。

「絶対、絶対に負けねえからな！」

「つたりめえだ、絶対に倒してチャンピオンになるんだ」

両者、大粒の涙を流しながら右手と右手をガツチリと握りしめる。握手を越えた漢同士の誓いを声にする。

「あのブロッコリー／＼イオズマに誓うぜ」

「ギヤーツハハハハハハハハ!!!」

笑い転げる鷹村をいつか見返してやる、そう深く誓う。

2ヶ月後、鷹村はスーパーミドル級防衛戦を4R15秒でKO勝利した。

木村 タツヤVSエレキ・バッテリー

刻は1999年10月、場所は後楽園ホール。

すつかりと陽は落ちたが、ホールには眠る気配のない興奮が灯っている。

鷹村 守が防衛戦をやるたびに感情は燃え上がり、階級を上げるとに世界が拓けていく。これほど人々の注目を浴びる者はおらず、ゆえに常に全盛期を突き進んでいく。

『タイトルマッチまでの四試合。そのどれもが注目のカード、期待を高めてくれる人選です。』

さあ皆さんお待ちかね！歴史に残る1ページへ向けて、最初の対戦カードが始まります！』

解説の声に続いて待ちくたびれた観客らが声を張り上げる。

すでに入場を終えた二人の選手がリング中央で対面していた。

『入場を終えた両雄がリング中央で睨み合う。一步も惹かないその姿勢は、絶対にお前を倒すというメッセージか!』

ジュニアライト級2位、木村 タツヤ。

フィリピン 同級比国王者、エレキ・バッテリー。

「鷹村さんが待ちくたびれてる。前座らしくさつさとケリ着けようぜ、エレキ」

「…タツヤ」

半年前、鷹村によって頭頂部にイナズママークを入れられ散々な目にあつた木村。その影もいまはなく、向き合っている表情から万全の状態であることが確認できる。

『2度の引き分けは因縁となり、3度リングで対峙した。今宵求めるものは勝利、それ以外は眼中にないと言わんばかりに火花を散らしている！』

闘志を燃やす男が二人、望む勝利は一つ。

「両者リングサイドへ！」

互いに背を向け離れる間も、ひたすら欲に忠実な牙を研ぎ澄ませます。背中越しに伝わるほど二人に緊張は無く、正面を向けば噛み殺すので

はと観ている方が声を潜めた。

異様なプレッシャーが会場に広がり、静寂な間が訪れたとき。幾つもの勝利と敗北を産み出してきた、ボクサーの拳を解き放つ鐘の音が打ち鳴らされる。

『さあゴングが鳴る！鷹村の4階級制覇に勢いをつけることができるか、木村 タツヤ！』

試合開始の合図もまた、両者にとって取るに足らない礼儀でしかない。勝ちに拘り、焦らされ続けた男が二人もリングの上にいるのだ。最早、客席や解説の声など届くはずもない。

リングの上には拳が4つ。

相手を殴る拳が2つ、そして――

「お前が行けると判断したんだ。開幕から主導権獲ってこい！」

トレーナーの集大成、己のプライドに応えるための拳が2つ。

(ああ、絶対にここは譲らねえよ)

リング上で細かく鳴り響くステップに迷いはなく、全くの同時に射程圏に踏み込んだ。

開幕、初撃に選んだのはジャブ。

放たれる左拳二つは、様子見などカケラもない。試合の流れを攪うためのもの。

⌋
!!!
⌋

リング中央、二つの左拳が小気味良い破裂音を掻き鳴らす。聞くに3つの差し合いは、ほぼ同時に放たれるも牽制で終わる。間合いを確認した両者は半歩下がる。

後の先、流れを掴むための一手は決まらず。速さに自信のある左を準備しているぞ、と互いにメッセージのやり取りを終える。

ここで両者に共通する感想がある。左手に伝わる感触が、想定外の成長を遂げていると確信を得たことだ。

エレキはその場で構え直し、次に来たる一撃を撃ち落とす準備を整えた。

「そうか、お前さんは今の差し合いだけで守りに入るのか。本当に、それでいいんだな？」

控え室、鷹村が呟いた視線の先。

木村は、その慎重な姿勢を見て、小さくジグザグにステップを刻み前進する。2歩目でその意図を察するや、エレキは視界の奥に映るリングサイドへと視線を移した。

(コーナーに追い込む気か)

後ろを見るまでもない。あと2歩下がればコーナーを背負わされてしまう。足を止めようというのが木村の作戦だと判断。即座にその場を離れ、位置を入れ替え、逆にコーナーに追い込むため前に出た。(ちよつとお話でもしようぜ。改めて自己紹介するからよ、ファイリピンチャンプ比国王者！)

脇を通り抜けようとするエレキにジャブを放つ。ダツキングで躲し潜り込むや、右腕を引きボディの姿勢を見せた。その引きが最高潮に達したのを確認、木村は強引に右ストレートを打ち下ろした。

堪える体勢どころか、カウンターを合わせてくると思わなかったエレキは左腕を上げ、急いで姿勢を上昇させる。空振りを狙うその行為は、しかし肩を押されるかたちで押し戻されていた。

視線の先、息を呑んだのはエレキ。体勢を整える間も無く、木村の追撃の右ストレート。

左足でリングを押しスウエーで躲すが、その差は紙一重。あと半歩踏み込んで入れば、意識は砂嵐に飲み込まれていただろう。そして、後退はここで止まる。背筋に伝わる冷んやりとした温度は、あまりにも危機感のない死地。

エレキが瞬く間にコーナーに追い詰められた。

『木村が開幕に飛ばし、エレキをコーナーへと追いやる！いつもの木村とは違うペースに我々だけでなく、エレキも困惑を隠しきれません！』

(もう少し振り大きけりや届いてたか。あの体勢からスウエー間に合うのかよ、つま先の踏ん張りが強エ)

(あのジャブは私を懐に潜り込ませるためのもの。完全に振り抜いていなかった。やはり、カウンターを警戒しているか…)

数瞬の思考から木村の行動を把握する。両足でリングを踏みしめ

る直前、木村はまだ立ち直れていないエレキの足を確認していた。

(まずは、強引にこの場を切り抜けさせてもらおう)

(だが、自慢の足は浮いちまつてるぜ！)

エレキはカウンター、もしくはフックでコーナーを出るつもりでいる。荒くとも、粗くなければ瞬く間に突き放せる。木村に対してはそうまでしてでも、開幕を譲ってやる気がないのだ。

間髪いれず木村はジャブを放ち、あくまでも様子を見ないことをアピールする。ガードした下から覗く瞳は、ひたすら両肩の動きに注視している。

そして、一瞬後に来るであろうと予測、カウンターを放つために左を構えたとき。エレキは、怯むことなく踏み込む木村を見て、次に己の足元に視線を移した。

(足がまだ着いていないツ!?)

(気づかれたが打て！打てる！)

出遅れたのはエレキ。

そのつもりで右ストレートを放っている木村。

誤差コンマ何秒の決断と実行は、一切の無駄なく、カウンターの隙すら与えなかった。

『ワン・ツーがこれまた鋭い。ガードを固めたエレキ、木村のワン・ツーに渋い表情を見せている。得意のフットワークを活かすことができない!』

しかし、互いに疲労を抱えていない。カウンターを狙った左をとつさに引っ込めることで、不安定ながら木村のストレートを防いだ。

代わりに、再びコーナーに押し上げられてしまう。

(ま、そう簡単に行かないってことね)

(視野が狭すぎる。自身のことすら把握できていないなんて、笑い事ではないぞ…)

木村は右を打つつもりでモーションを見せ続ける。

エレキの判断力が著しく低下していると分かり、フェイントを織り交ぜてガードを揺さぶる。

顔面、ボディストレートと打つ間にフェイントとジャブを挟む。こ

の単調なサイクルをコーナーで2巡ほど凌いだエレキは、しかし反撃に移ることが許されなかった。

(腰をつかませさせてたまるかってんだ。地に足着かないまま体力を削り落としてやる)

(ぐっ、前屈みになる瞬間をストレートで押し戻される。カウンターのための連結部^{足腰}が離される。

ダメだ、ガードだ。脱出の機を待つしかない)

放たれ続けるコンビネーションを、心の中でカウントを打ちタイミングを計る。いつても飛び出せるよう、すぐさま立場を逆転させるために。息を潜め、エレキは会心の隙を誘い続ける。

(クソっ、ガードが思ったより上手え。場数踏んでるだけあるぜ。このままじゃ、俺の腕がバテて逆転されちまう。

チキシヨウ、怖いけど予定繰り上げて狙うか：？やれるか、俺)
ジャブを放ちながら、左足は真正面に踏み込んだ。

木村がこの試合で初めて見せる体勢は、右ストレートから続けざまに放つ右ボディ。腕を引き寄せる直前で腰を落とし、エレキの上がつたガードが間に合うまいと放つ。

(ボディ……私の右ストレートの方が速い、ここで脱出する！)
(もらったッ！)

ボディを狙う体勢へと移行する一瞬を、エレキは見逃さなかった。慣れ親しんだフォーム、常に想定し続ける一閃は準備を整える。

『ボディを狙う木村に合わせて、エレキがすかさず左足を構え直した！木村完全に狙われているー！』

開始僅か1分、すでに心の奥底が仕留めろと言わんばかりに沸き立っている。急かすな、とは吐き捨てられない。もう終わらせなければ、次の一瞬にはこちらが倒されているだろうと予感する。

故に、フィニッシュブローのごとき右ストレートを打ち抜いた。

(こ、いつ！)

目を細めなくなる打撃音。

エレキの右拳が打ち鳴らした先に、赤い拳が一つ。そして、その奥で光る瞳が動き出す。

『き、木村打たない！左を引つ込めてエレキの右ストレート^{カウソーター}を誘っていた！』

打ち終わり、それも当てるためのものを防がれた。その隙は、このラウンドにおいて命取りとなる。

前のめりに生き急ぐ様を木村は待ち構えていた。

ゼロ秒後、もう一つの拳は飛び出す。

右ストレートはエレキの左ガードを打ち砕く。再び装填される右拳を見つめながら、瞳は左腕が弾かれたことをようやく認識していた。

電流が流れたかのように痺れる左腕、眼前で放たれる右ストレート。このとき出来る抵抗といえば、顎を引き歯をくいしばることくらいだった。

直後、エレキの顔面がコーナーへと叩きつけられ、鈍い音をホールに響かせていた。

『二発目の右ストレートが決まる！オープニングヒットを木村が大胆に決めたあ!!』

ホールが歓声に湧き上がる中、次に轟く打撃音は左ボディ。

ゆらり、ガードが下がった隙を逃さず、右ボディが炸裂した。

かつて放たれた痛恨の一撃と似た衝撃に、エレキの意識は最悪の形で浮き上がる。

(ボディ、だとオ!?)

私が打ち込まれたのは右ストレートだった…気を、失っていたのか!?)

(気づいたか、だが腕に力は入らないはずだ)

鍛え上げたボディに鈍く伝わる恐怖。無意識下で打たれたことで、本能が拒絶する。打つな、離れろ、つき飛ばせ、と。

(ありつたけを持つていかれる……！ラウンドで、背筋が凍る思いなどしたことがない)

(次は10秒眠ってもらうぜ。そのための練習をしてきたんだ)

砕けかけの腰で、死に物狂いに眼前のボディに左を突き出す。

(少しでも、判定勝ちに持ち込もうと考えていた私の失敗だ)

力を込めていない拳など、誰が恐れるものか。

恐怖から逃れるために出した左は逆手に取られ、ワン・ツー、右ボデイのカウンターとなり体力を削られる。

（あの拳は、恐ろしい。過去2試合のドロローなど、参考にもならない。どう猛な闘志を、宿している――）

視界は回り、視野は青に塗れ、身体の機能は麻痺する。

抗いような壁に押し付けられる、屈辱の瞬間が異国の王者に訪れた。

『左右の連打、そしてボディが鋭く打ち込まれた!!!』

これにエレキたまらずダウンンン!!!

いきなり勝負が決まるのか!?!』

レフェリーが駆け寄る。しゃがみ込み、リングにうつ伏せに転がる相手を覗き込む。

（どうだ、カウントなんざ必要ない！終わらせろレフェリー！）

コーナーに着いた木村の念はしかし、レフェリーのカウントにより断たれる。

「先制、練習の成果が現れましたね！」

「正直、ここまでは思いませんでした。早くても2ラウンドだろうと…木村は私の予想を軽く越えてくれました」

「うむ、じゃがあやつも、ここで頬を緩めてはおらん。相手が立つてくると分かっておる」

リングを左拳で叩きながら、大きく息を吸い込むように口を開け、エレキは勢い良く起き上がった。

ここまでのカウントは7。

『た、立ち上がった！雄叫びとともに飛び起きるエレキ!!審判が近づき様子を確認する。』

……両手を交差する、試合続行だ！』

（このカウントでコーナーから這いずり出た。こうしなければ、私は奈落に落とされていた…。このダウンは、私にとっては運が良かった）

（ヤロウ、いまのカウントで立ち直ったか）

再開と同時にリング中央に飛び出す両者。

(…凌ぐ、だけで終わるつもりはない。駆け寄ってこい、勝負を決めにこいたツヤ)

(なら、照らし合わせていくとするか)

コーナーを背負わないために飛び出したこと、そして足を使わずに構える様子を木村は確認する。いま相手が出来る最大の抵抗というのを、過去の経験から知っているのだ。

木村は徹底したアウトボクシングで、手負いの相手の状態確認をするに留まっていた。

(どうだ、カウンター狙えるか？まだ踏み込めそうだが、いまは1ラウンドつてのを念頭に入れなきやな)

(足が動かないからこそ、走ってきたところにカウンターを狙いたかった)

ジャブ、ストレート、ボディがガードすれすれを通り抜け、着々と疲労を負わせていく。

逸る気持ちもあるが、真正面から見続けることで抑制できていた。(いまほどアウトボクシングをやられて苛立つことはないぞ)

カウンターを狙うエレキにとっては、前傾姿勢になっていることが仇となってしまった。

1分30秒、黙々と体力を削る作業が行われる。開幕のもう攻とは180度違う絵面に、別人なのかと疑いたくなる。

残り10秒を伝える拍子木が2度打ち鳴らされても、その手を緩める気は微塵もなく。

木村が慎重に、確実な勝利のみを求めていることの裏返し時間はすぐに過ぎた。

「そこまで、ゴングだ！」

1ラウンド終了の合図。レフェリーが割って入り、両者が自陣へと戻っていく。

静かに歩く木村とは対照的に、大きく肩を揺らして歩くエレキ。

『第1ラウンドが終わりました。恐ろしく冷静に相手を攻める木村、被弾がゼロという驚きは、次のラウンドへの期待に変わっています』

！』

「ここ最近の木村は別人じゃねーか！」

「対戦相手、フィリピンじゃ相当強いって有名なのに木村やべえぞ！」

「いける、いけるよ！KO勝ちで繋げーっ！」



「篠田さん、まずは開幕もらってきましたよ」

「よくやった木村。ダウンを取って熱くならなかったのは流石だ。あの様子、まだまだ万全のカウンターを打てるようだからな」

「ええ、それはビデオで見たから分かります。ここ数十試合、ダウン後のカウンターで沈めたケースばっかりだ」

篠田がフィリピンで掻き集めたエレキの試合。その全てを脳裏に刻み、ひたすらイメージトレーニングに直結する。実に半年、エレキを倒すまでの過程を考えて動いて試して、この試合に臨んだ。

「カウンターのタイミングを計ってやがる。打つたび冷や冷やもんですよ」

「ああ、もうコーナーを背負わせるのは厳しいだろう。だから練習を思い出すんだ、私のミットとエレキとの誤差を埋めてこい！」

「うす、必ずものにしてきますー！」

最後の試合を迎えるために、目先の壁に全力で立ち向かう。

ボクサー生命を終えるその時は、まだ先であると確信している。その時間も僅かであると理解している。残り少ないボクサー人生、その時間に手を抜くなど出来るはずがない。

だからこそ、木村 タツヤの調整にぬかりはない。

リングに現れた燕

ブザーの音とともにセコンドがリングの上を降り、再び二人だけの死闘の舞台が仕上がった。

一呼吸を終えたであろう間を挟み、2度目のゴングが鳴る。

(まずは、その足がどこまで動けるか見極めるぜ)

コーナーを飛び出した木村とは反対、エレキはガードを固めて警戒心を剥き出しに歩み寄っていく。

ダメージを負ったはずの身体だが、まだ芯から崩れる段階ではない。強引に行くことは即座に辞め、カウンターを取られないためにヒットアンドアウェイへと切り替える。

ジャブ、ストレートにフェイントを交え、揺さぶったところを一つ当てていく。クリーンヒットではなく、蚊が刺す程度のもの。時折、エレキはストレートに合わせて踏み込むが、その分だけジャブで距離を取られる。

ポイントを稼ぎながら自分のボクシングを行わせない。間違いなく、リング上の流れは木村が掌握しつつあった。

(…俺の動きを見てやがる。ダウン取られたくせに恐ろしく冷静だ。

ガード越しの拳がタイミングを計ってんのが嫌な味出しやがる)

(この男、前半から積極的に攻めてくるボクサーではなかった。この数ヶ月でパターンを変えている。それもおそらく、私への対策だ)

打ち終わりに小さく腰をつかむモーションは、木村の内心に大きく冷や汗をかかせている。

――半年前、鴨川ボクシングジム事務所――

「これが、エレキだっていうのかよ……?」

口をあんぐりと開け、テレビの枠を思わず掴みながら映像を観ていた。

「事実だ。この目で見てきた、そしてお前と戦った頃の粗は限りなく

克服している。間柴と遜色ないくらいの強敵だ」

5試合、全てカウンターKO勝利。

一瞬でも宮田に重ねて見た自分がいる。

宮田ほど速さはない。目で追えるし、まだ付いていけるだろう。

だがその分、打たれ強さは上だ。

「カウンターが決まればほぼ一発KO。腕力というより、足腰を鍛え上げたボクサーだ。減量している宮田にはない耐久力もある」

打たれた分、タイミングを計り調整を加え、乱打や渾身の一撃に合わせてカウンター。

忍耐強く、最適のカウンターを仕掛ける行動力は恐ろしい。打たれ強いせいで強引な踏み込みもやってくる、相討ち覚悟のカウンターなんて最悪もいところだ。

「狼狽^{うろた}えるどころか、笑いかえしてるな」

篠田が呆れながら笑う声で、自分の頬に触れる。

すると、気づかないうちに笑っていたのだ。

「だがな木村！お前だつて負けず劣らず成長している。だからこそ、日本タイトルマッチに向けた最後の調整として、エレキ・バッテリーを選んだ」

「言いたいことは分かっているぜ、篠田さん。確かに、エレキを倒せりやタイトルマッチに向けた対策も取れそうだ」

視線は合わずとも、挑戦状が叩きつけられたことはよく分かった。

「感謝するよ。だから絶対にKO勝利してみせる」

（せいぜい覚えて、様子見してる。まずは基本から身体に刷り込ませてやる。木村 タツヤつて男の根本を呑み込め！）

（まさか、1ラウンドの貯蓄を10ラウンド持ち逃げする気か？）

エレキの試合を観たからこそボディを打ち込む距離に入り込まない。

ビデオ越しにカウンターの速さを知っている。どこに顔があれば

一発で負けるか。ボディを叩き込まれたとき、起き上がれない選手を見てきた。

映像を観ているときも、その後も寒気が走った。2回のドロローに持ち込んだ相手だとはとても思えない。映像の中のエレキ・バッテリーが、まるで自分を倒すために成長している気すらした。

(落ち着け…。いまの私のカウンターなら、多くても2発で仕留められる。だと、いうのに…！)

エレキが攻めあぐねている状況は、木村の作戦通りと言える。

ダウン後、エレキが慎重にカウンターを狙いに行くのは分かっていた。勇敢にも相手の距離に飛び込んで、足腰を駆使して一刀両断のカウンターを狙うのだ。

(エレキの試合を観て分かった。こいつの弱点はボディだけじゃねえ！KO勝利の9割がカウンターだ)

1ラウンドのダウンを取るまでの攻撃、その後のポイント稼ぎのアウトボクシング。

ボディは1ラウンド目で打ち込まれ、状況次第で5、6発で打ち抜かれる危惧がある。

そして、2戦目でドロローに持ち込まれたドラゴンフィッシュブローが控えている。

中か、外か。

エレキの意識はリング上のあらゆるところへと向けさせられている。自分がいま何処に立っているのか、相手の射程圏までどのくらいか、次に繰り出すべきは？次はなにを狙ってくる？上か、下か？

(腕力にも自信がねえってことだろ。フットワーク殺して腰を浮かせりゃ、コーナーほど背負いたくないよな?)

2度のドロローが余計な力みを生む。

場数を踏み、国内に敵無しとされる男は、1ラウンドの奇襲で完全にリズムを狂わされていた。

2ラウンドも1分30秒が経過、徐々に擦り傷にも積み重ねてきたダメージを感じてきていた。右を嫌がり、空振りさせようと半歩引いたとき、小刻みにステップインする木村。

まるで想定していたかのように、即座に態勢を立て直した。

(なんていう、絶好のタイミングで!!)

木村が放つのは、ワン・ツを嫌い顎にガードを置いたところを狙った左ボディ。左を見届けてから強引に左フックを打つエレキ。

(これに合わせてくるかよ普通!?)

両者の拳が同時に着弾する。

木村の左は綺麗なフォームで、ダメージを通す音が響いた。対するエレキは木村の顔面を捉えていたが、手打ちがすぎた。

『相打ち！しかし木村にダメージの様子は無い！エレキ、先々を封じられ明らかに嫌がっている！』

(び、ビククリさせやがって！倒れるまで続けるのはしんどいぜ、こりや)

(ぐっ…、自分でも驚くほど被弾が多い…。そしてカウンターが、打てない…私の拳は、届かないのか?)

グローブ越し、手打ちの軽さを痛感する。

(……まだ、だ。当てるまで早まるな)

ダメージが入らない。いや、そういうボクシングをやらされている現状に、混乱を飲み込むほどの危機感が溢れる。

(このままではダメだ、狂ったペースを取り戻すには、守りに徹するなと愚の極み!!?)

ゴングやダウンで仕切り直すことは不可能。被弾の隙間にこそ活路を見出す、肉を切らせて骨を断つ戦術へと気持ちが切り替わった。

(左は潜る、右はガードする。留守になったボディに、鋭く一撃をお見舞いする)

木村のワン・ツ、フェイントの癖は粗方覚えていた。雰囲気心がのまれかける度に、打ち込まれる拳の音と衝撃が染み込んでいく。荒く、それでもリズムを変える即効性の薬としては十分であった。

ガードを上げ、ジャブの打ち終わりに合わせて一気にトップギアで踏み込んだ。

(タイミングは計り終えている…!)

(チー！無理やり捻じ込んできやがった。

狙いは…右っ！)

木村のジャブは頭上を掠めていき、伸びきったときにはエレキと見上げる形で対峙していた。

残るは右拳だけ。万全の警戒態勢で待ち構える左腕があるため、重い一発を受け止めることができる。懐に入り込まれたら右で突き放すよう、木村の身体は組み込まれている。

エレキの勇敢な選択に会場中が息をのんだ。被弾の覚悟があり、木村の左はあと一瞬だけガードが間に合わず、放たれるカウンターの右はそれほど鋭い。

誰もがのんだ息を吐くよりも先に、着弾音が緊張の間を駆け抜ける。

「――？」

言葉にならない小さな疑問符を声にしたのは、いったい誰なのか。声を吐き漏らした張本人すら気づいていない、勢いを断つ一発。

『エレキの身体が左によろけた！完全な不意を突いたこれは?!』

身体の重心が呆気なく左に傾いたせいで、狙い澄ました右は木村の鼻先を通る。エレキは訳もわからず、リングに近づく己の身体を止めるため、左足で踏ん張った。

(ぐっ、なんだそれは?!?私は潜り混んでいただろう…!)

(鼻先掠った…が、間に合った!)

会場がどよめくなか、右頬に残る拳の感触でようやく理解する。

(左、フックか!?)

(打ち終わり、合わせてこれるだろ。だからって易々とやらせると思っうか?)

左フックまでを把握するも、それが視野の外側、ジャブから変形するフックまでは理解できなかった。

技の一つとして名前もあり、かつて幕之内 一步がフェザー級タイトル初防衛戦で大苦戦したものの。

「あれは、真田の“飛燕”！小僧が真田とやるときの対策で真似させたが、あれを完成させていたのか」

二人、ロードワーク中に黙々と練習していました。あいつもガム

シヤラなんです。減量中、気力を削がれながらも貪欲に己を研究し、相手のことを考え続けた結果をようやく手にし始めました」

直線、或いはボディのみで組み立ててきた試合で、初の横がクリー
ンヒット。ワン・ツー、ボディの影に忍ばせた一発。

視野が狭くなるまで待ち続け、少しの力でカウンターを寸断できる
一手を呼び寄せた。

「パンチが当たらずエレキは焦っていた。右のカウンターは木村が出
させたもの。この時のためにミットを持ち、そして他にも考えられる
攻防は全て覚えさせました」

篠田はフィリピンから帰国後、青木と木村を呼びミットを打たせ
た。打たせて打たせて、バカみたいに頭を振らせてダッキングさせ、
弧を描かせてウイービングさせた。

『意識が逸れたところに右ボディが突き刺さる！』

(篠田さん、見えるぜ。どんどん視野が広がっていきやがる。ヤツの
動きに、俺のイメージがびったり合わさり始めた)

練習が終わったらDVDを観せて、観せ続けて、持ち帰らせてイ
メージと打ち合えるまで観せた。

(もういっちょくろえやああああ!!)

(コーナーに押される…ボディ…ッ!!)

木村 タツヤの視覚情報と脳裏に刻み込まれた、篠田のミットとの
誤差が着々と埋まっていく。

考えるよりも先に手が出る。寸分の狂いもなく、フェイントに揺さ
ぶられず、自信が確証へと変わる瞬間。

あるのは人間の奥底に眠るセンス。危機管理に根付いた瞬発力が、
僅かな誤差だけを生んでいく。

「私の知りうる限りのエレキ・バッテリーの間だ。練習で染み込ませ
たパターンは、エレキが試合中に必ずとつてきたものだ。

お前の拳なら必ず大丈夫だ、自分を信じるんだ！」

浮上する身体が怯える。エレキの神経にヒビが入る。

積み重ねていくほど火薬を詰め込まれていく恐怖が、咄嗟にボディ
へのガードへと繋がった。

間に合った、間に合ってしまった。1秒も空いた守りを貫くことはなく、堅牢な檻は再び閉じられる。それは僅差の出来事で、檻が閉じた瞬間、木村の矛は打ち放たれた。

すれ違う新幹線のごとく、あつという間のこと。

『下がったガードを見破るようにストレートを叩き込む!!エレキ後ろに吹き飛んだああ!!』

右ストレートは、エレキの顔面へと着弾する。

『この試合2度目のダウン!!!』

篠田に叩き込まれた経験がガードを見破る。先に経験している事実は、世界挑戦可能と言われる国内王者を凌駕しうるのだ。

2度目は仰向けにリングに尻を着く。木村は努力の成果を実感しながらコーナーへと戻った。

(スウエーで逃げてる所を殴っちゃった。くそつたれ、いままで仕留めなかったんだがな)

(ストレート、だど。ここはボディを狙ってスタミナを奪うところじゃないのか?)

すぐに立ち上がったのは、座り続けていたら動揺によって心が押し潰されると分かったから。立って、フラつく自分を確かめなければ正気など保てる状態では無いのだ。

カウントを続けるレフェリーをよそに、視界の奥に映る2ラウンド目の残り時間を確認する。

『すぐにエレキが立ち上がります。しかし、その目には明らかに動揺が見えます』

目を見開いて、うめき声を漏らす。ボディ打ちを避けた理由がそこにはあったのだ。

(残り2秒!?ボディをガードするように仕向けられた?スタミナを奪えないと確信してのストレートか...?)

最悪だ：いまのは勝負を決めに来たということだ)

精神がよるめきながら、身体は覚束なくボクサーとしての仕事をこなす。覇気に欠ける両腕が上がり、レフェリーが試合を再開させた。

『あゝっ、試合再開の合図と同時にゴング。第2ラウンド終了です』

(…)

ため息が漏れる会場。歓声の声。

誰が想像しただろう。

(…)

あと10秒あれば木村はリングを飛び出し、エレキの顔面に渾身の
一撃を放っていた。それだけの殺気で木村は、コーナーに戻るエレキ
と視線が合っただけで想像させていたのだ。



自陣に戻る足取りは重く、成果どころか自身の誇りを欠けて辿り着
いた。設置される椅子に座りながら、その意思を伝える。

「私のカウンターは、日本人には……木村 タツヤには届かないのだ
ろうか」

カウンターを徹底的に封じられ、頭脳戦を仕掛けられ困惑する姿
に、エレキ陣営は勢いを失いつつあった。

「2ラウンド、クリーンヒットがないことは驚いている。キミのフツ
トワークを殺し、必殺のカウンターを封じる。」

彼は、物凄く頭を使っているのだろう」

「……それを実行できる時点で、もう」

セコンドはエレキの言葉を遮る。

「覚えているか、エレキ。タツヤは減量をしている。いまのペースは
間違いなく6Rすら戦う体力が残っていない」

「……ああ。だから、それがどうしたんだ」

「うかうかしてられない。キミが全力のタツヤと再戦を熱望してい
たのだ、5RまでにKOするプロセスを立て直す必要がある」

会場の中でただ2人。

エレキの心中を知る者だけが出来る、メンタルリセットがある。

「次のラウンド、カウンターをするな」

「…冗談か？」

木村は倒さなければならぬ。この男にドロ―したから世界に飛

び出せない。ランカーとて倒せる、だが日本に住むあの男だけは越えなければ話にならない。

そう国内で言われ続けた。

あの日々から抜け出したい。

打開策は、簡単な言葉だ。

「打て、打ち負けないようにフットワークを活かし、ひたすら打ち合いを身に浴びせるんだ。そして、思い出してこい」

瞳に宿るのは、純粹な心。勝ちたい、それだけの意味。

「^{木村}ダウンの屈辱が、キミを高めへと導いたことを」

トレーナーには、もう一つだけ見抜いていることがある。

木村 タツヤがカウンターを封じるため、理詰めをしていること。エレキの一挙手一投足に全神経を注いで、確実な一手を実行している。それを逆手に考えると、体力と精神の消耗は想像を超えている。（それをキミが調べてくるんだ。ラウンド毎ごとに変わりゆく、敵の容態を）

木村 タツヤの燃料は、半分を切っている。

恐怖に挑むために

3ラウンド目は互いに静かな立ち上がりを見せる。

意外なのはエレキ。2度のダウンをしたというのに微塵も焦りが表に出ていない。

静かにステップを刻む木村は、これまでを些事とでも言いたげな冷静さに警戒心を強めるほかない。

本人の試合勘というものがあと2年、巻き戻つていれば間違いなく2ラウンドまでの勢いに任せて飛び出していただろう。

(さつきと様子が違いすぎる。まさか持ち直したのか…？それとも、青木みたいに虚勢張ってるのか？)

誰が言わずとも、組み立ててきた試合を簡単にひっくり返せるカウンターを封じるほかない。緊張感を維持し続け、遅くともあと6分でケリを着ける。

12分間でKOするイメージトレーニングが精一杯で、エレキという男と渡り合うにはそれほど全力を凝縮しなければならない。常にエレキの動きに注目するのは必然であった。

(自信を取り戻せ…か。こんな指示は無かった。とても困惑するし、いまだから踏み出す勇気が足りない。)

だが、このまま行き着くと負けることはしつかりと分かる)

片やエレキの心境も危うげながら、己が折れることへの抵抗が薄らいでいく。玉砕を掲げて踏み出すなど考えておらず、全細胞に上書きする命令は突撃。

グローブで口元を隠しながら、静かに深呼吸を2度、ゆっくりと行う。

(いまを変えたい。負けたくない。だから、弱気な私に別れを告げよう)

つま先のつかみ具合を親指で確認し、グリーンランプが脳内で点灯した瞬間、一気に飛び出した。

(いきなりかよ、止まれ！)

ここまで散々苦しめ、ダウンを取ってきたワン・ツを木村は選ぶ。

篠田の持つミットを思い出し、忠実に、距離を確認し拳の握りを最も緩めて放つ。着弾を確信した瞬間に握り締めた拳は、しかし。

『エレキ大袈裟にダッキング！荒々しく頭を振り木村のワン・ツーツいに突破あー！』

（近距離戦は、頭を振り避ける。経験が少なくとも、多くの試合を観て本番に活かすことはできる）

不慣れな一面ダッキングを見せつつこれを掻い潜る。飛燕で追撃するはずが、頭は飛燕が放たれるとき射程外へと避難しており、木村はガードを上げる。起き上がりに一息も無くワン・ツーツーツを打ち返す。

打ったワン・ツーツーツが木村と違うのは、誰の目にも明らかな差。

（速い…けど、アホみたいに軽すぎるー！）

ジャブは貫通することなく、ストレートに足を止めるだけの威力はない。サンドバッグに試し打ちするような速度極振り。

この試合で先制して打つにはややダメージを抱えているせいもある。ろくに軸足は定まっておらず、後ろ足と腰とが連結してないせいでストレートの凄みすらない。

基本の確認に手間をとるかと思われた直後だった。連結部の見えないボディ、計画性のないアッパーを徐々に織り交ぜていき、懐で細かい作業へと移り始める。

（どこに落としたり、なにをすればこれまでの努力に報いられる!?!）

「飛び込んできおった。それも、まるでカウンターを考えておらんフットワークにコンビネーション。無理やりペースを奪いにきた!」
「しかし、冷静さを失っているようには見えません。あくまでも意図的に、リズムを作り直すつもりです!」

コンビネーションに意味はなく、パターンなど考えるだけ無駄。それはエレキの瞳を見て分かっていた。その確認のため、ガードをすこしずらただけで手打ちのようなフックが割り込んでくる。

ヒリッと痛む頬のことはすぐに無視し、受けたときの速さをひたすら脳内で分析する。どう動けばいまのエレキの勢いを止められるかと。

（初見だからって対応できない、じゃあこれから先も話になんねえ。

横ならガード間に合う、直線は右だけ気をつけて潜れ！)

エレキの回転力は衰えぬまま、リング全体を見通せるようにステップを刻み、コーナーへ追い詰められることを嫌う。

全速力のフットワークで木村の戦術を打ち崩しにかかった。

だが、ここで止まる道理などない。ワンを被弾し、ツーンをガードを挟みながら無理やり突進する。

(データラメに打ち続けられるのも今のうちだ。1分ありや目が慣れてくる！)

(このラウンド、考えがまとまるまで絶対に倒れない。ダウンせずコーナーへと戻り、全力の私を取り戻して次のラウンドに繋げる)

それを押し退けるように量産するパンチの連続。

距離を詰め、即座に離れ、細かくパンチを放ち、これまで木村が組み立ててきた試合を一気に崩しにかかる。

(速、速く……こいつ、どんどん腰入れてきた。やべえ、勢いにのせちゃマズい！)

グローブに伝わる感覚に、チクリと突き刺さる崩壊の予兆。四散するパンチは次第に、2つ、3つと纏まりを見せはじめ。

1分間、好き放題に打ち続けてきたエレキのパターンが変わり始めた瞬間を見逃さなかった。

ここで寸断できなければ、カウンターを装填されてしまう。それこそ最も恐る事態だからこそ、木村はここでエレキの強引な攻めに乗っかることを選んだ。

5回の攻防を経て、左右の拳が同時に着弾音を響かせた。

『相打ちイイイ！今度は両者にダメージが残っている！』

右ボディを歯を食いしばり耐えるエレキ、左フックを顎を引いて堪える木村。

(てめっ、んな試合やってこなかっただろうがッ！)

(鍛えてきたボディを易々と貫けると思うなッ！この窮地から脱するための被弾ならもう覚悟している！)

よろめきながら、先に立ち直ったのはエレキ。

リングに沈むことを許さないとばかりに、強引に左アッパーを放

つ。木村は、ガードした腕によってアッパーを感知することができない。だが幸運にも、アッパーはガードへと放たれる。

ここで不運だったのは、アッパーが意識視界の外から放たれたこと。ガード越しに伝わる衝撃は軽くても、意識はわずかに宙を舞う。

(や、べ…手を)

浮遊する意識のなか、ビックパンチにもならない右を真横に振り放つ。硬く握りしめる拳は、壁のくぼみに指を引っ掛けるように、なにかを押し払う。

突進の最中、左足を上げていたエレキは、外からの不意の一撃に巻き込まれて軸がぶれる。

(ぐっ、向こうも大胆になってきた。力はまだある)

(あ、危なかったっ!!!)

スウィングじゃなけりや距離空かなかった！ナイス俺エ〜！

(だが、見えてきた。考えるまでもなく、木村のしていることは単純なことだったんだ)

フォームが整うギリギリのところ、エレキは大振り気味の右ロングフックを放つ。同じくフォームを直すよりも先に、右ボディで足を奪おうとする木村。

(フックを出さない。これが証拠だ。私のカウンターの威力を殺すため、フォームを崩すためのフック。)

だが、フォームを崩して打っているいまは温存している。私を倒すための技なのだろう？)

互いにガードを破ることなく、この攻防を経てエレキは後ろに飛び退く。

(あと1分で3ラウンドが終わる。)

試せることは1つか2つ、フィニッシュのため、判断材料を集めることに集中する)

(ランダムで打ってんのか知らねーが、フェイントが全くない。いまのに慣れちまったら、フェイント混ぜられたとき大惨事だ)

呼吸が繰り返される。

1つ吸い込むたびに緊張が増す。1つ吐き出すと距離が縮まる。

(この2分のインファイトと、残り時間のインファイトでどういう反応を見せるのか。それ次第で全てを決める)

脱力する肩、やや前傾に構える左。合わせ鏡を見ているような感覚が会場を包んだとき。

(くる…)

片方の身体がガードを固め、前に突撃を開始した。

『エレキ再び飛び込んだアー!』

これを止めるためワン・ツーをガードに押し込む。勢いが落ちたところで、さらに右ストレートを放った。

拳が止まるのを確認するや、あまりにも手応えのない衝撃に本人が驚いてしまう。

不発、とまではいかない。

(距離は、どこにいったんだ?)

至近距離で睨み合う状態を前にして、木村は無意識にガードを固めた。

「細かいステップインで右ストレートを踏ん張った?!」

「次の右ストレートが来る前に、肩から飛び込んで距離を詰める。簡単にやってのけたが、下手をすれば側頭部に直撃してもおかしくはない」

2度目のストレートに合わせて距離を詰め、ショルダブロックを実行していたエレキ。虚を突いたことで守りに回った木村を、至近距離で攻め立てていく。

2つ、次に3つ、そして4つと直線が続く。リズム良くガードを叩く左右のコンビネーション。赤い軌道を微かに残しながら、様子を伺うようにガードに揺さぶりをかける。

(…:そりや、インファイトでペース取れてたんだ。一息ついたからって、変えられるもんじゃないわな)

攻めるエレキのそんな姿に、篠田が持っているミットが重なる。

そして、練習中の感覚でジャブを放つ。エレキはこれに反応し、ダッキングでかわした。このとき、あと1つだけ打ち込める拳が、幻影だけではあるが見えていた。

一連の流れを見て、木村は内心で気づく。

(さて……)いつ、データラメじゃない。肌がヒリつくこの感じ……このコンビネーションは……！)

イメージと合わなかったエレキとの距離間。されどタイミングは変わらないコンビネーション。

1、2ラウンドとカウンターを封じられ、3ラウンド序盤のデータラメな猛攻。

カウンターが狙えないと、狙う姿勢ではないからとインフアイトに応じていた。闇雲な突進と思ったところを詰められ、無様にもエレキの壇上に上げられたのだ。

(さあ、いつでもカウンターを打てるように軸足を地に着けた。この違いをもう分かっているだろう、タツヤ！)

(スウエーすればカウンターを炸裂できる位置で、被弾覚悟の攻防……)

リング上、両者の後退が止まる。

引けば押し飛ばされ、よろければ斬り落とされる。

エレキにとつても、木村にとつても、この至近距離戦を譲らないのには訳がある。

エレキは言うまでもない。ヒットアンドアウェイ、アウトボクシングを実行されたが最後。そのラウンドは近寄ることもできず、再びリングに沈むことになる。

木村の場合、カウンターへの恐怖心だ。あと数センチ後ろは爆心地。エレキの放つカウンターがKOを叩き出してきたスポットである。僅かながら腕を畳ませられる懐でなければ威力を殺せない。あとは外に脱出するほかないのだ。

(パターンを戻したらガードの隙間を狙い打たれたツ。確定だ、タツヤは私を研究して来ている!!?)

(外はもう無理だ。意表を突ける1ラウンドだからできた)

また仮に、運良く脱出後できたとしよう。

次は、頭をフル回転させてアウトボクシングに徹しなければならず、下手を打てば長期戦になる。そうなれば10ラウンドまで、ひた

すらカウンターに追われ続ける恐怖と戦うのだ。

(こっからは、練習量がものをいう！)

(よく分かったよ、この身に必要なことが。まだ足りない研鑽を、キミが私に教えてくれた)

故に、至近距離から先に逃げた方が必殺の餌食となる。

互いの強かさを知る者同士によって成立する、意地の張り合い。

(なんせ、もう1つのカウンター対策にうってつけだからな)

(世界に行くため、最も重要なカウンター封じをここで破ってみせる) 緊張が慎重さを呼び、少しでもカウンターを狙われる位置にすれば回避に移る。フェイントに釣られるどころか、フェイントと分かったうえでボディを打ち込む。それでも、エレキの手数だけは抑えることができず、ボディを除く場所は被弾により薄く腫れ上がっていた。

解説の声も大人しくなるなか、あつという間の1分が過ぎゴングが鳴る。

『第3ラウンド終了オー！火の出るような打ち合いはエレキが僅かに上をいく！今度は木村が渋い顔をしています』

両者、コーナーに戻る背中が語る。

たとえ10ラウンドまで至近距離戦が続こうと、次のラウンドで仕留めにいく。



ホール全体が静かに音を揺らす。

3ラウンド終了時点で実力は拮抗している。拮抗にまで盛り返されている、という表現が甘めにみた採点だ。

両陣営がコーナーへと戻り、選手に指示を出す。

ここで犯したミスが1つ。

「エレキ、そろそろ仕留めにいけるか？」

「感謝する。早々にタツヤと視線を合わせることができた。いや、昇りつめた、と言うべきだ。なら、撃ち落とす手段を実行してくるはず」
片方は4ラウンドということを思わせない、フィニッシュへ向けた

策を練っていること。

「インファイトを続けたいっていう顔だが、やはり体力の問題か？」
「集中力も、10分もてばいい方ですからね。篠田さんのミット打ちのおかげか、もう慣れました。このままいかせてください」

「分かった。だが焦るな、必ず仕掛けてくる。ドラゴンフィッシュブローへの警戒はとくに強いはずだ」

「ええ、なにを考えているか判断してきます。いける、と確信するまでは、絶対に打ちません」

もう片方は幸運にも、相手が狙っている必殺ブローを避け、慎重に歩を進めていくということ。



頬は赤く、腕には普段よりも多い汗。

腹が赤く、呼吸は前へと向けて進む。

己のダメージこそ身を奮い立たせるのだ、と拳を構え視線を交差する。それが、誰もが息をのむ合図。

『ゴングと同時に両者飛び出す！なんと再びインファイトだ！』

木村はガードを上げ、低姿勢で距離を詰めることでボディ打ちを極力させない。むしろ、積極果敢にボディ打ちでエレキのカウンターに仕事をさせないように立ち回る。

ガードの間髪も入れさせず、足を止めるべく右ボディを放つ。

（ボディのタイミングは把握した。易々と食らうものか）

ボディだけは受けるまい、とグローブを握りしめガードをする。両者が体力を奪われたくないのは明白。

ならばボディ攻めは一転、直線と直線が掠め合う。

（フェイントをしつこく混ぜてガードをガチャガチャにさせてやる！

意識を分散させて渾身のボディを入れる。それさえ決まれば、一気に攻め落とす）

（踊らされるな、あの目はボディを狙っている。ボディは鍛え上げた

が、それでも弱点と言えてしまう。心の奥底に、崩壊の亀裂がある。この試合の緊張は、それを容易く砕いてしまう)

そう思う矢先のこと、エレキの視線は畳んでいる木村の右腕に惹きつけられていた。ストレート、アッパー、フックと脳内で照らし合わせてもどれも違う。

低い姿勢、という点が警戒を強める。左腕はボディ打ちを防ぎ、右はカウンターのタイミングを計りやや前へ伸びる。ならば、ガードが下がりつつあるのだ。

(違う、ドラゴンフィッシュシユブローか!?)

顎、頬、側頭部。そのどれもが無防備にさせられるよう誘われていたと結論が出た。

身を起こし、牽制の意味も込める右腕を必殺ブローの着弾地点へと備えさせる。次の瞬間、赤い拳は打撃音を響かせた。

『左ボディがエレキを捉える！上下の打ち分け、一枚上に行くのは木村だ!!』

(ぐ、左ボディッ！)

(しゃあー！！??)

木村が見せた必殺ブローのフェイントに、咄嗟にガードを上げたところにボディを突き刺す。

(必殺ブローを喰にしてきた…)

続けざまー発、反応が遅れたエレキに左ボディが突き刺さる。

(あと一発でボディを貫くつもりだ。あの拳なら、それを可能にするだけの意志を込められるッ)

(ボディ打ち込んで、頭のほうを外に放り出させる)

(なら、狙われたところをショートアッパーのカウンターで打ち上げてくれる)

今度は右ボディに構え直し、身体の酸素全てを吐き出させるためにギリギリまで踏み込む。筋肉が反応したのは、右を引いたとき。

木村は小さくスウエーし、強引に飛燕を放った。鼻先を掠める赤いグローブの奥、回り込むフックだけが当たる。

(厄介なフックだ。至近距離でもカウンターを狙えば即座に割って

入ってくる。ならば、早々に逆手にとらせてもらおう)

被弾して続けざま、右を構え飛び込む。木村の打つジャブをダツキングたとき、まるで翻るかのごとくフックがエレキの頬を右に弾いた。この作業に木村は右を構える動作を混ぜるのが2回続き、姿勢を上げた。

(ジャブをスリップで避けたところで、打ち戻りのジャブはフックへと変化させて対応してくる。大袈裟なダツキングならかわせるだろう、しかしそこも織り込み済みで狙うはず)

(いま、俺に飛燕を出させたか!?)

左で遠ざけようとするエレキを、ガード越しに覗きながらいまの動作を考える。これが勝負を仕掛けてくる布石ではないか、と。

(……誘いにのってやる。飛燕^{フック}の打ち終わり、俺が右を構えるのを見たよな?)

1分が過ぎても至近距離が解けることはなく、集中力の限界というものも迫りつつある。

(その被弾さえ知っていれば、右ガードを上げてフォームを整える。左はボディ打ちを狙い、右カウンターを誘う)

(期待通り右を、振り抜いてやる。右は、エレキに警戒されてる。逆にこれじゃなきや、俺はカウンターに反応できねえんだ)

篠田のミットに基づいた中間距離のイメージを、無理やり至近距離に変換し続ける。いま備えている引き出しを片っ端から開けていき、ほぼ紙一重の差でカウンターを凌いでいる。

(出させないなんて不可能に近い。次に放つカウンターを撃ち落とすて、心ごとへし折って試合を終わらせる)

至近距離、咄嗟の思い出しが木村を生きながらえさせている。

これまで経験の少ない距離が、エレキの緊張感に良く働く。

(手が震える、余計な緊張で足が止まりそうだ。タイミングを間違えたら最後……。それでも、必ず狙ってくるカウンターを止めなきや勝てない)

だが、そのときも遠くはないとどこかで知っている。

最終ラウンドまで立つなど、目の前の好敵手を前に不可能。

(タツヤの考えには感服する。私一人では、このラウンドで仕留められていた)

(落ち着け、狙っていることを悟られるな…それが無理なら、俺の拳に注意を引き付けろ)

乱打戦に持ち込まれて6分が経とうとしている。

木村は、乱打戦の最中でエレキが打ち込んだパンチの種類を全て把握していた。無策に思える3、4ラウンドの攻防からすでに逆転の種を蒔いていると考えるからだ。

(この乱打戦のなかで実行しよう、最高のカウンターを。そしてキミのことを胸に、私は世界へと行く!)

(乱打戦に持ち込んだ理由はカウンターだ。選りすぐり、一撃で沈める瞬間を待ち続けている)

腕を、足を休めることなくフィニッシュへの順序、最後の仕上げが終わりつつある。

(肘の角度が変わった瞬間、右ストレートで打ち抜いてKOだ!)

(備えろ、装填しろ、早まるな、確実に後出しするんだ!)

イメージと足腰の連結が両者同時に完了した。

ここに浮かび上がる差が1つ。

どれだけ前から、いまこの瞬間を思い描いて練習を積み重ねてきたか。

(どう来る、なにを選ぶ、まだ攻めるか、逃げるのか!?)

(大人しく打ってこいよ、ぶっつけ本番だ来いやあッ!!)

カウンタータイプと聞いて、思い出した人物がいる。

沢村 竜平。

フェザー級で一步と激闘を繰り広げ、デンプシーロールを無傷で破つてみせた天才。

そいつがジュニアライト級に上がり、間柴 了とのタイトルマッチが決まったとき、どう攻略するのかを考えた。

間柴が、ではない。俺が、沢村をどう倒すのかを、だ。

間柴が負ける場合、俺は沢村を攻略してベルトを獲る必要があつ

た。

国内に沢村と並ぶカウンタータイプなんて、あと一人くらいしかない。だから今後のためにと密かに練習していた、一発勝負の小技。

『両者が打ちに行つた！この緊張感に終止符をうてるか!?!』

エレキの拳は空振り、木村のジャブがガードを叩く。

姿勢を屈めるエレキはさらに踏み込んでいき、左を後ろへと引いた瞬間、飛燕が飛び出す。

『飛燕を防がれた！続けざまに狙う右をエレキが狙っている！』

両者が思惑通りに動くなか、木村の様子の変わりに気づいたのは極少数人。練習風景を知る者、実際にその技を間近で見た者。

「カウンタータイプがリズムを崩される要因の一つ、スイッチ!!」

拳に注目する者が大多数のなか、木村の軸足が入れ代わたことに気づける要因は少なすぎる。至近距離はその最たるものであった。

左右逆転は、着弾地点を狂わせ、全ての予定調和を乱す。

前へと飛び出す右は、ガードを下げたエレキの意表を突き、カウンターが間に合うはずもない。

「不器用だがカウンターに被せやがった！これでエレキのカウンターは——」

これを実行するとき、緊張で震える足を誤魔化すために練習を積んだ。

緊張にのまれないために走って、走って…減量苦を抱えて走って、土台を作り込んだ。

自信を持つて拳を振りぬくために何度もイメージをした。

あらゆるコンビネーションから打てるように毎晩遅くまで動いて、1回限りのカウンター崩しは出来上がった。

「——ああ、不発に終わる！」

両者の距離が交錯する。互いに前足が懐を捉え続ける。

幻覚を見せられているように、白い光が視界をぐるりと駆け回り、そして。

この試合で1番とも言えるカウンターは、延滞などなく骨に衝撃を

伝え、筋肉に恐怖を刷り込み、口からマウスピースが吐き出された。

顔面からリングに沈みゆく、木村 タツヤの口から。

ぐるじい ツ、くうき どうしで
マツトが こえが いやだ
なん で なん (?)

たとえば、確信を持って拳を握ろうと、油断や驕りは許されない。

観てきた試合の数々で、一撃のカウンターが勝敗を決するのを知っているのはどちらか。

だから、イメージのなかで何度も、こうなったら負けるだろうと。そんなことをつい考えていた自分が、いまここにいます。

「あ、ああああ!!!」

どこからか、男性の驚愕の悲鳴がホールに響き渡る。

『ダ、ダウン!!! スイッチを使った木村の拳は空を斬り、エレキのカウンターが無残にもボディを打ち抜いているウウツ!?!』

ぱくぱくと動く木村の口から、努力の結晶が砕ける音がした。

引退した男より

数える程度の敗北は積んだが、無駄な負けは一つもない。

尊敬するフィリピン王者たちは敗北から多くを学び、謙虚かつ堅実なボクサーとして名を馳せてきた。それが誇らしく、彼らに恥じないよう、負けたときこそ己を見つめ直してきた。

そうして国内王者となり日も浅い頃、とある島国で試合を行なった。

結果はドロー。前半追い詰めていたものの、たった一つのボディを受けてしまいダウンした。そして、弱点をさらけ出した私は後半手が出せずにリングの上を降りた。

母国に帰ると、待っていたのはため息を文字に落とした記事だった。

「気を落とすなエレキ。またやり直せば良い」

そこから鍛えた。

どうしようもなく鍛えるのが憂鬱だったボディを、ただガムシヤラに使い続けた。

スピードに自信があつた当時、徹底したアウトボクシングを貫く私の懐に潜り込める相手は少なかった。パンチ力に欠けるため磨き上げてきたカウンターは、ボディに届かせることなく相手を沈めてきた。

これで学んだ、次は勝てる。

そう確信し、国内王座を防衛し続け、私の株は上がっていた。ときには世界ランカーと試合をして勝った。王者の名として、歴史に泥を塗らないための努力が見えてきた。

その頃に、再び島国での試合の話が持ちかけられた。相手は同じだ、断る理由がなかった。

「どっちつかずなど、ただ苦しいだけだ。

今度こそ…」

だが、再びドローに終わる。

鍛え上げたボディは貫かれず、ゆえに勝ちを確信して慎重さを見失ってしまったのだ。

顔面へのブローによって、再びダウンした。のちに、ドラゴンフィッシュブローという名を持ち、かつて東洋太平洋チャンピオンとなった男を追い詰めたものと知る。

母国に帰ると、世界に挑むことなど自惚れだという記事に囲まれた。

歯を、食いしばった。

あの男にさえ勝てれば必ず、間違いなく世界に通用すると分かり、悔しさが全身を包んだからだ。1つめのドロウは、そのことを意味していた。私は、気づくまでに2つめのドロウを刻んだ。

「やり直すわけでもない、この焦燥感…。もう嫌だ、2度とドロウなどしない」

『顔面がらリングへと崩れ落ちた木村。表情は何えませんが、間違いなく効いている。審判が駆け寄ります、どう判断する!?!』

木村 タツヤとの相性だけは最悪だ。

ドラゴンフィッシュブローを受けてから、その一撃を受けたくないためにスイッチの練習を始めた。

登りつめた拳に倒されないために練習したに過ぎない。

距離感を狂わせ、空振りさせ、カウンターを叩き込むために辿り着いた答えだった。

(心の奥底から安堵した。最高の一撃が決まった。タツヤの心を折つたと確信できる)

望んだ形で努力が実りはしなかった。しかし、そのことに心の底から安堵した自分がいる。コーナーに戻る足が震えているのが分かり、次にその原因が頭の中に浮かんだ。恐怖だ、これはダメージなど微塵もない、一か八かの賭けに勝利したあとの余韻だ。

ドラゴンフィッシュブローが来ると思った。カウンターを合わせ

る直前、距離が違うと思った。さっきの囷は伏線で、ここで打つのだと。

まさか、スイッチをしていたなんて思いもしない。

偶然……たまたま……それが、この逆転劇の正体。

このことを口にだすことは無いだろう。

この1敗が、タツヤの誇りとなつてほしいから。



「スイッチ、だとおお?!?!」

「木村の初出しのスイッチに、エレキもスイッチで対応してきおつたツ…狙っていたのか、これを!?!」

篠田、鴨川は共に驚愕していた。

木村のダウンによって、エレキの軸足が入れ替わっていることを知った。

エレキの足さばきが読めないほどに何気なく、しかし咄嗟に動いている。

「狙っていたボディを、逆に狙われた。これはマズいどころじゃねえ。警戒してないとところに一撃、立てるか怪しいぞ」

控え室、目を細める鷹村。

駆け寄ったレフェリーにカウントをしろと言わんばかりに、木村の拳はリングを叩いた。死にかけの瞳が訴えることは1つ。

引退するなら、悔いのないように。

それに応えるかのように、レフェリーはカウントを開始した。

『無慈悲のカウントが始まる。ガラ空きのところボディブロー、これでリングの底から這い上がれなかった選手を我々は数多く見てきました。木村も、3度目の試合にして屈してしまうのか!?!』

(最後の情け…ありが、てえ)

“1”度でいいと願っている。俺が欲しいモンを手に行けるなら、苦痛を噛み砕かなければいけない。

どれだけ惨めだろうと、這って掴みに行けと言う。その1度が、目

の前に現れない。

「綿密に積み上げてきたものを壊された。身体だけではない。心のほうを折られてもおかしくはない……!」

あの日、青木が次の敗北で引退を決意した日。そこから俺も腹を括った。もう分かっていたからだ。次に負ければチャンピオンベルトはもう"2"度と巻けない。

「私の、情報収集不足だ……サウスポーを相手にした試合がなかった。いいや、私が雑誌を読めていればこんなことには……ッ」

己への戒めを濃く思い出すのが、練習中でも減量中でもなく、ボディブローで悶絶しているとき、とは。

しかもよ、これはエレキの弱点だったところじゃねえか。

"3"度目の試合がこのありさま。

(空気、吸うのが、キツイ)

格段と成長しやがってる。ただ打ち合いすりや勝てる相手じゃなくなつた。コイツずっと待っていていやがった、俺から流れを奪う一瞬を。それをモノにするだけの技術を、淡々と磨き上げたやつ拳だ。俺が初めてみせたカウンター対策のスイッチに、スイッチを被せて来やがった。偶然じゃない、必然的に起こることだったんだ。

「タツヤ……タツヤああああ!!!」

呼吸することが億劫になる。積み重ねた努力の土台が音を立てて崩れていく。

もう、"四"の"五"の言つて、心と身体を削るのはやめにしよう……。分かつていた。

間柴とのタイトルマッチで、俺は全てを出し切っていた。

間柴 了とのタイトルマッチ。試合前から、負ければ引退すると宣言していた。

そして、俺は引退した。

「木村 達也は引退しました。これからは、木村 タツヤに改名して

1からやり直します！」

そこからは、自分でも呆れるような生き様だ。

誰かが負ければ引退を考え、自分が負けたら誰かを連れてボクサー生命を終えようとしていた。

引退をチラつかせる度に、視界に一瞬だけ割り込む影がある。

そいつは土手に寝転がり、夕焼け空を見ている。呑気でいいな、と思いつながら。気になるくせに誰なのかを考えることなく、また同じことを繰り返す。

減量したくない。

その言葉を呑み込んで、青木の背中を見ていた。

伊賀 忍という倒したい相手を見つけた、とはしゃぐ姿に水を差せなかった。

だから、それにのんびり付き合っていこう。ぐだぐだと、誰かのためにでもなくいつの間にか時間を浪費していた。

そんなある日、1本のDVDを見た。

引退したあとに見ようと大事に仕舞っていた、自分のタイトルマッチ。負けたからこそ、振り向かずにチャンピオンになってやる。なんて考えていたが、モチベーションのない自分にはそれを守ることすら忘れていた。

気づけば、2時間。同じ試合、同じシーンを何度も。自分が間柴にボロボロにされる姿を見続けていた。

画面にかじりついて、震える両拳を握りしめたとき。部屋に差し込む夕日を見て、走り出していた。

（また、夕焼けが見える）

身も心も、宙に放り出せば楽になる。それなのに俺は、昔の光景を思い出して顔を上げていた。

（違、う）

やつのボディ打ちより、夕焼けを見て歯をくいしばる自分がいる。

夕焼けが見える。もどかしく、辛い気分に襲われる土手に座り込み、夕焼け空に当たる1人の男の背中。その男のことを、DVDを見て思い出した。

(おれ、だ)

木村 達也の涙が焼き付いて離れない。

もう、木村 達也はやりきったと言う。

背中では、そう語っているはずなのに。

俺はまだ、リングの上に立っている。

あと3センチの差が、リングに舞い戻るきっかけだった。

負けたら引退、ならば。俺はとつくの前に負けている。誰に負けたわけでもない、自分自身に負け続けてきた。1人だけしか知らない戦いの、1人だけしか知らない引退試合。何度続ける、もう何度、自分を欺けば気がすむのか。

(立てる…だから、)

因縁の相手がいない？そんなもの、俺がチャンピオンになれない理由にはならない。"半年だろうと、何年かかろうと構わない。

自己満足するまで戦って、打って、走って。

"七"転"八"倒しながら憧れに着いていきたいんだ。

ここで起き上がれなくちゃ、もう自分の試合を見ることもできなくなる。木村 達也が押してくれた道は、ここで終わりにできない!!!

「嘘じゃねえぞ、達也ああ!!」

『木村が雄叫びとともに立ち上がったーさあ、審判の判断は!?!』

次負けたら引退。

それは誰にも曲げさせない誓いだ。曲げさせないくらい強くなる。間柴や沢村のような怪物と渡り合えなかったことを悔やむくらい、この道を駆け上がる。

木村 達也、お前の涙を無駄にさせない。

涙でぐちゃぐちゃになった視界で、それでも俺を見てほしい。いまリングにいるのは、夢の途中だけけれど。

もう1度、タイトルマッチへ。

あの日の涙を連れて、今度は2人で行くんだ。

「ボックス！」

『試合続行の宣言とともに、上半身が猫背になる木村。やはりボディブローの被害は甚大っ!』

ホールは解説の声に耳を傾け、同じ意見だと押し黙るほかになかった。

もはや、2ラウンドまでを圧倒していた影はどこにもない。空元気、これ以上の例えはない状態。

反撃できるのかすら疑問の選手の背中を、それでも押す声が1つ。
「~~~~ッ!まだなんだな、立ち向かうんだな木村!なら止めん!最後まで俺はお前を信じる!」

篠田の声によって、ゆっくりと前に進み始める。

(勝ちを確信するには、自分を過大評価しすぎた)

(回復……無理、だ、体力が……)

出来ることは、エレキが100とすれば、木村は1つか2つ。

100というありつたけの全力を、たったの60秒に満たない時間のなかに注ぎ込む。驕りのない、細心かつ誇り高い姿勢。

『残り1分で勝負を決めるためにエレキが飛び出します!ここを凌げるのか、それとも夢が潰えるのか!』

この差を覆すなど傲慢で、都合の良い夢を見ているにすぎない。

ぐらつく身体、迫りくる脅威。

近寄らせまいと放つ左が、冷静な判断に欠けていると語る。左を潜ればボロボロの身体が、サンドバッグのごとく隙を見せている。

(もらった!)

尖った右拳が振り抜かれる。

完璧なカウンターが炸裂。折れ曲がる木村　タツヤを見届けようと向けた視線は、90度左へ。

(は、んげきだ?!?)

木村は諦めなかった。

飛燕がエレキのボディ打ちの勢いをわずかに殺し、辛うじて痛み分けにもつていく。

至近距離で視線が交差する。ここにきて後退などあり得ない。あ

と1発決まれば意識を断てる確信が、拳を持ち上げた。

(カウンターのモーションを見ている訳ではない。これまでの研究が、私のカウンターに反応するよう身体に染み込ませているッ)

(最後、まで…あがくぜ)

木村の瞳に宿る熱量が、エレキにそう思わせる。身体が倒れてもリングに沈まない理由は、見えないところにあると確信させた。

(その拳は私を倒せる。恐らく、心で打っているのだ。ならばこそ、私はそこを砕きに行く)

瀕死の身体が放つのはワン・ツー。練習で磨き上げたそれは、手負いであろうと躲すのは困難。1、2ラウンドでの恐怖がしつこく身に染みている。

負けじと、ツーを被弾しながら右拳を構えるエレキに、再び右拳の直線を放つ――。

『なんとこの土壇場でフェイント、エレキ釣られてボディがガラ空きだ!』

放つ、振りをした。

(ッ――!)

(もう、俺がやれることは分かっている)

連続の右が教えることは、流れを一気に搔つ攫うという残酷性。警戒心に震える身体は、無意識に顔面の守りを固めていた。

(倒れるまで、打ち続ける)

土壇場、間に合わないはずのガードは、着弾の直前に拳の軌道へと割り込んできた。

エレキとて、これまでを無駄に過ごしてきたわけではない。あと1発で貫かれると分かっている弱点を、易々と打たせるはずがないのだ。

『ああーッ!これをエレキ難なく防ぐ!そこに待っているのは』
続けざまに放たれるジャブをかわし、再び潜り込んだ。

待ち構えるのは飛燕。先刻から知っていて構える右は、ガードのためではない。大きく飛燕の外から振り払う軌道。

「飛燕にカウンターを合わせ心ごと折りに来おった!」

「木村アツ……アツ!!?」

飛燕が着弾しようとも、右フックのカウンターが勝つ。飛燕が着弾する瞬間、エレキはヘッドスリップを実行する。

木村の側頭部へ迫り来る大砲に、誰もが息を飲んだ瞬間。

『あ、あああ!!飛燕にカウンターの被せにきているッ!』

——1羽の燕が、鮮やかに舞い上がった。

『か、顔が打ち上げられるッ——!』

最悪の一撃を空から見下ろし、悠々と飛び回る姿に、誰もが目を奪われていた。

『なんとショートアツパーがエレキの顎を跳ね上げたああッ!ボディが再びガラ空きだ!!』

前のめりの身体、ダラリと下がったガード。

対するは、地に足を着け、最後のチャンスを狙う大砲。

「上下、上下と揺さぶってきたエレキの意識を見逃さなかった。ガムシヤラに動いて、一瞬の盲点をこじ開けたんです!」

「その飛燕は、初披露!」

脳を揺らした。

エレキの世界が泥濘にハマったように不安定になる。

「数度だけ見せた飛燕、そのフックをここでショートアツパーに切り替えやがった。しかも、相手が飛燕に慣れてカウンターしに行ったところを狙った」

息が切れ、スタミナが無くなった。瀕死の身体で呼び込んだ、決死の勝負。

「あとは、あいつの想いに拳が応えるのみ」

石のように固い関節を動かし、鉛のように重い指先を握りしめ、いまにも崩れ落ちる身体を、意識だけで立たせる。

(なぜ、私は照明を見ている。まだ、試合は終わっていない…勝って、いないだろう)

(うごく、うごく、動けよ——)

身体が沈む。

渾身、最後の1撃のために力を溜める。一步誤れば、そのまま力尽

きる足腰を、前へと踏み出した。勝利を掴むために。

(あ、ああ！違う、アッパーを食らったのだ。私の右は、空振った)意識が回復する。状況を把握するや、たまらずバックステップを選び、足先の神経からの信号がないと気づいた。負けたくないとして立っているだけで、脳が敗北を認めたとき、これは瓦解する。

上半身だけで凌ぐ必要があり、足先に信号が送れないと自覚した1秒後、これが優先的に回復すると分かった。

(さ、曝け出したボディが狙われるツ：畳み掛けられたら、負けるツ：！)

精神が身体を動かしたのは、こちらも同じだった。

電撃を浴びたかのように左腕が騒ぎ、ボディへの経路を断った。

真ん中を打ち抜く勝利宣言を破るために。

『即座にボディをガード！ここにきて弱点を死守する！木村間に合わなかったかあああーツ!!』

否、こと勝利の宣言を掲げるには、木村の姿勢は低すぎる。ボディ打ちに耐えきれず、背筋が伸びきっていない。

それでは誰も、彼の勝利に気づくことはないだろう。

(まだ終わりじゃねえ!!!)

振り掲げるものは、勝利の旗。

天へ向けて高く、観客へと向けて大つぴらに、己を奮い立たせるために前へと。心の赴くままに掲げる、旗の名前は。

(届けええええええ!!!)

標準が合わさったとき、赤い拳は眼前に迫っていた。

他の拳が割り込む隙間など、1ミリたりともない。

弧を描き大空を振り上げる、必殺ブロー。

『ドラゴンフィッシュブロー炸裂!』

ボディへの警戒と恐怖が、必殺ブローの直撃を実現した。

吹き飛んだエレキの身体は、倒れることなくコーナーにしがみつ

く。
『この試合初のテンプル！エレキ再びコーナーに釘付けエー！』

勢いに身を任せ、大きく歩み寄る。

まだ相手の意識はある。戦意もあり、構える拳が両者を迎えた。打ったほうも、打たれたほうも満身創痍。肩で息をする姿を見て、同時に拳が放たれる。

（ありつたけ、俺のありつたけぶつけれ！打て、まわせ、もう後はねえ！燃料残すな、出し切れ!!ここだ、ここで決める!!!）

右、左、直線、ボディ、アッパー。

殴り、殴り、打って、打って、守りを忘れて打ち合い。

どこから血が流れているのかも分からずに。相手が倒れるか、自分が死ぬまで打つ覚悟で拳を動かし、そのときはきた。

（そ、うか）

右が、エレキの頬を直撃。

次いで聞こえる音は、膝から崩れ落ちる身体。

ここに、勝負は決した。

『レフエリーが割って入る！両手を振りあげて、ついに』

木村 タツヤと戦えば、世界へ行けると…なぜ確信したのか。

キミの拳には、負けた者が知る意志が込められている。

（私に足りないものは、きつと）

確信を持って言おう。

過去の負けをただ乗り越えただけではない。

負けた自分を連れて、リングに上がってきていたのだ。

『三度の因縁に決着!!木村 タツヤ、ついに強敵エレキ・バッテリーを撃破!!!』

逆転劇で試合を終え、両拳を振り上げる木村に、会場中が応えた。

木村 タツヤ。

4 R 2分59秒KO勝利!!!

青木 勝VSパイヤ・ダチウ

後楽園ホール、世界戦の前座で拍手喝采というのも珍しくはない。だが、木村の勝利を祝うものとしては、鷹村が苛立つくらいに湧き上がり、木村本人が困惑するほど。

「お、大げさじゃないですかね…。やりすぎだって鷹村さんに怒られそうだし」

「皆さん、次はタイトルマッチだと思っっているんだ。それだけお前のことを応援してくれている。

だから掴むぞ、頂点」

「……根性、みせてやります！」

篠田に肩を貸されて、木村はよろよろの右腕を観客に向け上げながら退場した。

インターバルで熱が冷めることもない。

なにせ、次の対戦カードも注目を集める男が登場するからだ。

注目度に反するようにホールから明かりが消えてゆき、照らし出した入り口が視線を誘う。

『木村 タツヤが見事KO勝利を収めてくれました。この勢いを繋ぐため、鴨川ボクシングジムが送り出すはトリックスター！』

木村と同じく、日本タイトル挑戦に最も期待を集めるボクサー、青木 勝の入場です！』

「待つてました！」

「お前も木村に続けエー！」

「曲者勝負、今度こそ決着してくれよ！」

だが、ホール中の期待の声は一転。

入場する青木の姿にポカンと口を開けてあっけに囚われる観客たち。

『こ、これはどういうことだ!? 青木、コートを頭の上から被り奇抜な入場! どこか落ち着かない様子です、もしや調整ミスか!』』

「……この馬鹿者」

「こんな事態は考えもしませんでしたね…」

「め、面目ないとしか言えません」

頭を抑えながら入場する青木。後ろからついて来るセコンドたちの表情は、減量に失敗した鷹村を見るがごとく暗い。

『セコンド達の足取りも心なしか重い！しかし、青木は仕掛け人。これも策の一つかと疑いをかけてしまいます。いったい、なにが起きているというのか！』

彼らとて積年のプロ。こうもあからさまな表情を表に見せること自体が珍しい。それほど深刻な故障が青木の身に起きているのだ。

『リングインしてもコートだけは被り続ける！念のためにとレフェリーが確認に行きました。』

：なんとレフェリーの表情も曇りました。どういうことなんだ!?!』
「事前に話は聞いていたが…」

コートのなかを覗き込んだレフェリーも、唸りながらリング中央へと戻っていく。

『こ、困惑するばかりですが、それでも戦いの刻はすぐそこだ！さあ続いては、3度目の勝負を勝ち取りに来る男！』

超曲者、パイヤ・ダチウの入場!!』

入場ゲートの先、ホールへと姿を現わす男の姿に再び会場がどよめく。

『ああーっ！なんと、パイヤ・ダウチも青木と同じくコートを頭から被っている！事前に打ち合わせをしたかのような入場に、会場もざわつきが止まりません』

「な、なんだなんだ!?!」

「パイヤのやつも顔を見せねーのか!?!」

「仲良しかお前ら!」

多種多様の反応、この2人だからこそ気になってしまう。

変幻し続ける試合を知るだけに、余計に注目を寄せている。くだらなさで笑おうと、呆気に囚われてなにも言えずとも。

『両雄リングイン！中央に歩み寄り、そして』

魅力ある選手として、観客は受け入れるのだ。

向かい合う両者は、足先だけで相手を確認する。あと1歩という距離で、または打ち合わせたとしか思えないほど全くの同時にコートを翻した。

『同時にコートを放り投げる！なんだ、コートの下にはいったいなにがあるというのだ……』

コートは互いのセコンドがキャッチ。

ついに開け放たれたビックリ箱の中からは、闘志を宿す鋭い目をしたボクサーが2人。視線を修正することなく、そこにいることを分かっていたと言わんばかりに睨み合う。

だが、それは2人にしか分からない勝利宣言である。

2度のドロウから成長し、決着を求める終着点。

変化に気付いたのは観客たち。

『あ、あぁー……ッ!!!』

両者の頭部。

青木の角刈りヘアート、パイヤのブロツコリーヘアー。馴染みある両者の髪型とは裏腹に、両者が立っている場所は真逆。

目をこすつても変わらない。

青木の髪型がブロツコリーヘアートとなり、パイヤの髪型が角刈りヘアートとなっている。

『髪型だつ！両選手の髪型が入れ替わっているウウー!!』

青木とパイヤも、周囲の反応でようやく視線を上に向けた。

「な、なんだと!？」

目ん玉が飛び出した、と錯覚するほどの驚きよう。

お互いに口をあぐりと開け放つ。

「くだらねえ挑発してんじゃねーぞー!」

「ややこしいだろうが！レフェリーが間違えても知らねえぞー!」

「どっち応援すりゃいいんだあ!？」

青木には成長できないところがある。

「くそーっ！俺のせいじゃないってんだ！あのバカ鷹村に言ってくれよ！」

鷹村という悪魔がいることだ。

「前日に行った床屋、おかしいと思ったんだ！なぜか鏡はないし、周りの客はニヤニヤしてるし、髪切り終わったら全員で絶賛するし！

つい良い気分になって帰っちゃまったじゃねえか！」

前日、青木が理髪店に行ったときのこと。

青木は不運にも、鷹村が修行（脅迫）しに行った理髪店で髪を切ってしまった。鴨川ボクシングジムのメンツは地元では名が知れ渡っている。当然、青木が鷹村の一味ということも知っている。その理髪店、鷹村の手によって客はパイヤとエレキの髪型にされていた。

その悲惨さにたまらず店主は鏡にカバーを掛けたのだ。

実験台にされ不満爆発寸前のところで、青木という餌が投入。

「当日になって近所の床屋が休み…謀られたな」

「向こうはあからさまなパフォーマンスじゃ。ここは助けられた、と思うしかない」

対戦相手であるパイヤの髪型にするまで、秒読みであった。

『それでも時間を過ぎていく…この試合を止めるのはどちらかの拳のみ。予測不能の試合がいま、始まります！』

罵詈雑言が飛ぶ異様な雰囲気の中、前座第2戦目の幕が上がる。



パイヤ・ダチウ。

スタミナ不足という弱点を抱えるボクサー。前半でKO勝ちをすることが多く、そのために小賢しい技を使い相手を攪乱する。

青木 勝がまひやく曲者と賞賛するほどの予測不能な行動をとる。

ライト級インドネシアチャンピオン国内王者として5年以上も君臨。近頃は様々な国で試合を行い、ライト級の猛者たちからKO勝利を収めている。

過去2回、青木 勝との試合を行い、どちらもドローという結果に終わった。

（くそ、俺の髪型にするとはふざけたパフォーマンスをしゃがって。やったからには絶対に勝つてことだろうが、そうはいかん）

その相手に、謀らずも同じ行動を取っていたかと思うと、青木は腹

が立たずにはいられなかった。

割合の多くは鷹村に対してだが…。

（俺の動揺を誘うつもりだったんだろう。新しい変化についていけな
いまま、勝負を決めるつもりだったな！残念、こっちは半年前のテ
メエの状態を知ってんだよ！）

是が非でも勝たなくてはならない。ここでドロ―以下はバカにさ
れるところか、一生の恥が決定。ボクシング史上稀に見る煽りとして
語り継がれるだろう。ならば、せめて勝っておかなくては。

と、くだらない未来が脳裏を過る。

ひと呼吸。

試合開始の合図とともに、これらの思考に蓋をする。

こんなにも冷静でいられるのは、篠田のビデオから事前に情報を
知っているから。パイヤの弱点も、あぶり出せているからに他なら
ない。

半年前までのパイヤは、相変わらず相手を翻弄して一撃を打ち込
むボクサーだった。スタミナも後半はもたず、ときたま泥試合になる
ことも。

弱点を長所で補うボクサー、それがパイヤ。

弱点を克服し、およそ苦手というものが見当たらなくなったエレ
キ・バッテリーとは別タイプ。

視線が捉えるのはパイヤの全体。

前回、右腕を鍛え上げ、ココナッツ・パンチという必殺技を脅威的
なものとしてきた。そのぶん左は細かったのだが。

（篠田のビデオ通り、左腕も太くなってやがる。あのおかげで戦績も
殆ど6 R以内でKO勝ち。冗談抜きに1回のダウンが命取り。ここ
は様子見でいきてえところだが…）

のそりと動き出すパイヤとは真反対、木村に倣うようにコーナー
を飛び出した。

『あぁつと青木コーナーを飛び出す！ブロッコリーが対角線上に移動

を開始!』

(モタモタしているとペース取られて、ココナツツパンチでおねんねだ) 開始わずか3秒で互いの射程距離に踏み込む。

オーソドックスで狙うのは主導権。先刻の試合、開幕で木村が掴み取ったモノはのちの流れに大きく影響していた。どこから伏線を張るのか、いつからフィニッシュへの段取りを考えておくか。

(言われるまでもねえ)

友の試合で触発される男がここにいるのだ。

心を惹かれるだけのモノが、主導権にはある。

(こつちも、開幕から全速全開でいくぜ!!)

勢い良く選ぶ先制は、ダブルパンチ。

ジャブを放つパイヤだが、ダブルパンチが先に当たったことで進行方向がブレ、空振りする。

流れるようにワン・ツーがパイヤの顔面を捉えた。

『青木攻める! 正統に攻めるとは予想外、観客席からもどよめきと歓声が同時に聞こえます!』

パイヤも青木に続くように、ワン・ツーを強引に打ち返す。右の打ち終わりを狙うソレは、この半年間、篠田が持つミットにより覚えたパターンのも一つである。

伸びる右を戻しながら、左を肩ごとガードにまわす。それでガードのタイミングは完璧。

しかし、先制のワン・ツーを喰うかのごとく。

左ガードに触れるジャブは止まらない。ガードを押しつけ、青木の姿勢がわずかに逸らされる。

(つ——、つえエ!)

『今度はパイヤの反撃! ガードを吹き飛ばすジャブに青木驚愕の表情!』

想定を大きく上回る威力は、次に来る右の破壊力の想像を膨らませるには容易い。上体が逸れた勢いにのり、右腕を引きながら即座にスウエーを実行する。

運良く、と言うほかない。右ストレートは眼前で進撃が止まり、そ

の風圧に目を見開くだけで済んだのだから。

(なんつく迫力だこの野郎：風圧で鳥肌立つちまつたぞ！)

初っ端から一か八かの動きに本心は汗をかく。

パンチの回転は速くはなくとも、絶妙にカウンター気味な打ち方で大ダメージを狙っている。それが大振り気味パイヤの弱点となつているのはすでに確認済み。試合中に気づかれたからと修正出来るものではない。

ここだ、と心の中でタイミングを合わせる。上体を逸らしながら、装填した右腕を射出。縦に放つボディに感触が伝わる瞬間、握り締めた拳を素早く引き戻す。

『ああと、右の打ち戻りを青木が見事打ち抜く！奇抜な体勢からのボディにパイヤ反応できない！』

腹筋に鋭く刺さるボディは、パイヤの眉を中央に寄せる程度には嫌な仕事をした。

腹が効けば腕が自然と下がる。そこへ、準備していた左フックをすかさず滑り込ませ――。

「ぶえっ！」

パイヤの放つジャブと相打ち、両者奇妙な悲鳴を漏らす。どちらともに怯んでも可笑しくはない打撃音だが、ここに執念の差と言うべきものが出た。

(なんの、引き下がるか！)

下から殴り上げる右、続けざまに再び左フックで顎を振り揺らす。情けない声が漏れる。追撃のチャンスだと動く右腕を構えた瞬間、パイヤの目が光るのを確かに見た。

折れつつある上半身に構わず、リングの真上を滑空する右腕が偶然にも目にとまる。青木にはこのとき、しなるヤシの木が見えていた。ココナッツを標的に撃ち放つ、脅威の兵器として。

左を戻すには間に合わず、離れるには重心が前に傾きすぎている。とつさに歯を食いしばり覚悟を見せるや、左拳を中心として身体を引き寄せる。

低姿勢、左ガードを構えた。刹那、ココナッツは左ガードへと衝突。青木の身体は3メートル後方へ弾け飛んでいく。

『うああっ！ガード越しに青木が吹き飛んだ！この破壊力に渋い表情をみせる！』

（スマッシュユミみたいな打ち方しやがって…！ガードした腕がビリビリするっ）

ふん、と鼻を鳴らし身体を支える。

左グローブを口元に置くと、痛さと驚きが一気に溢れ出した。それで終わり、試合前から覚悟していたことだ。弱音を吐くのは上手に、そして即座に気持ちを切り替える。

（いいぜ、何度でもココナッツぶん投げてこいよ。全部飛び跳ねて、泳いで潜って、ヤシの木ごと食ってやる！）

そこから第1ラウンドはあっという間に過ぎた。

打ち合うことを止めず、クリーンヒットもなく。肌をかすめるパンチが飛び出し、パイアの右がガード越しの青木の顔を曇らせる。白熱と言うべき時間は、残り10秒を告げる拍子木が2回鳴るも続く。ここにきて、青木の右ストレートがパイアの顔面へと直撃。ふらりとよろけた隙に踏み込んだところを、パイアは起き上がり右を構え直す。

（ああチキショウ死んだふり多すぎだー！）

パイアの右が炸裂すると思われた直後、レフェリーが両者の拳を打ち止めた。

『第1ラウンドのゴングが鳴る！パイアのパンチを上手くかわす青木がやや優勢、試合の流れを掴んでいる』

「曲者勝負じゃないのかあ!？」

「違エよバカ、青木が相手に小細工させてないんだよ！」

「いいぞ青木！そのままボクシングで倒せ！」

予想外の展開に興奮する観客。

両者の差は、その声に比例しているということだ。

コーナーに戻るとき、青木の視線の先がふと客席に向く。運命の糸を辿るように見たものは、自慢の女であるトミ子。大きく手を振り、激励してくれていた。



確かな手応えとともにコーナーに戻り椅子に座る。

出迎える篠田は表情こそ変えないものの、口調は弾んでいた。

「良くやっているぞ青木。ガードした腕は大丈夫か？」

「想定以上に威力ありますよ、ココナッツ・パンチ。4、いや5発か。懐に潜り込んで威力殺したから痺れはとれました」

己の研究成果、半年間のミット打ちは確実に相手を追い込んでいく。青木が信じて着いてきてくれる証拠が、リングの上で発表されたのだ。

だからこそ作戦をもう1度確認する。

「徐々にスタミナが無くなつて大振りになる。5ラウンドまで体力を削れば、間違いなくカエルのカウンターが決められる。それまで絶対に焦るなよ」

「そのための半年間、ですからね。ココナッツ・パンチの軌道もだいたいわれました。あとは空振りさせてやりますよ」

生半可な覚悟、練習量では実行不可能。

パイヤとの消耗戦にもつれ込む過程、ココナッツ・パンチを受けることは想定済み。想定したからこそ受けてはならない。結果は泥試合一直線、判定負けは必須。

「それより気になるのは…」

しかし、ここで問題点が1つ浮上する。

「試合前、記者がパイヤにインタビューしたときの言葉か」

藤井記者が同僚から伝言を頼まれたと言う。相手はパイヤ、驚きつつ聞くと珍妙な言葉だった。

「パイヤ選手は、3度目の試合への意気込みを聞くとこう答えたそうだ」

「時間を止めてみせる」

「何度も考えたがさっぱり分からん。物理的に不可能なことなわけだし、レフェリーの買収なんぞ敵地だから不可能。

ホラ吹きつて言いたいところだが…パイヤだからなあ」

誰もが答えを出すことはできない。意味が分からないままリングに上がった。

「そんなこと出来はせん。」

じゃが、無策というわけでもあるまい。なるべく事が起きんうちの決着が望ましい」

鴨川の判断は誰もが頷くこと。

篠田に背中を押され、青木は立ち上がる。



第2ラウンドが始まるや青木は飛び出し、パイヤに不慣れな戦いをさせ続ける。

『なんと、パイヤの強烈なパンチを見ても退かない！打ち合い上等、曲者っ気ゼロ!!髪型が気にならないクロスレンジ!!!』

勢いある拳が飛び交うリング。

1分間続くなか、パイヤの身体に徐々にダメージが蓄積していく。

「この半年間、インファイトを想定したミット打ちばかりでしたからね。パイヤのパンチ、ほとんど当たってません！」

青木は小刻みに、忙しく動き続けてパイヤの拳を空振りさせている。それでもアッパーやフックは時折受けてよろけ、気合いで殴り返していた。

「元より、今日この日のために練習を積んできたのは」

『青木のワン・ツーからコンビネーションが決まっていく！重低音がパイヤをジリジリと後退させる！』

それが、パイヤにとつて最悪の噛み合わせとなっていた。自慢のパンチで怯まず、姿勢を崩すための縦横を無視される。

「曲者勝負にもつれ込まない、という青木なりの意表を突く作戦のため！インファイトでパイヤの小技を封じていきます！」

自分のスタイルを貫けない、という苛立ちは早くも現れつつある。

右、左、右と大振りのストレート。続けざまに右、右、右…！ココ

ナッツが次々と放り投げられる大砲斉射のなか、リングすれすれを動き回り一気に間合いを詰めた。

(自分のペースを見失いつつあるな。んな大振りが当たるわけねえだろ！)

大振りの隙は言うまでもない。

パイヤの苛立ちの代償は、渾身の右フック。難なく頬を打ち抜くとよろめき、これを好機と左ボディを返した。

「ああっ！」

これが悪手となる。

振れば凶らずも当たる距離にいる両者。苦し紛れに放ったジャブが、ガードの隙間を縫うようにして青木の顔面にヒット。逆に、青木の左ボディは、垂れていた右腕によりガードという形となる。

(くそ、まじかよ……！)

わずかな間、一瞬だけ飛ぶ時間。

苛立ちの代償である左はパイヤに味方した。

「このタイミング、絶妙な間は……！」

揺れる頭が元に戻ったとき、両者の動きがピタリと止まる。交差する視線、大きく見開かれているのはパイヤのみ。青木はコンマ数秒遅れて、リングの上に意識が戻ってくる。

気がつけば、己の目は自分の姿に釘付けにされていた。

(こ、こいつ無理やり……っ)

身体が動かない。

見開かれる目、髪型だけ角刈りの男と自分の姿が重なってしまい、余計に沼にハマる。

『ああっ……このタイミング、このモーションは……！』

知っている。青木は、この技を使い続けてきたからよく分かっている。

対応が遅れたが最後、例え自分であろうとも釣られてしまう。戦士の本能が騒めき、同調圧力を越える拘束力によって誘導される。奈落へ急転直下、KOへのカウントダウン。

青木に出来る行動と言えば1つくらいだ。

己の意識を闇へと葬り、そのときを待つことのみ。

(よそ見くっ!!)

かくして、魔の矛先は真横へと振り放たれる。

唐突な技に油断していた観客は、パイヤに釣られて、全く関係のない方向を見る。静寂を打ち破ったのは、仕掛け人であるパイヤが踏み込んだ直後。

「!?」

烈風に吹かれたかのごとく、後方へと吹き飛ぶ影が1つ。

角刈りヘアーがリングに沈み、ブロッコリーの下からは赤いグローブが歓喜を表現している。

『な、なんとよそ見を破ったあああ?!?青木のストレートが向きなおるパイヤを吹き飛ばす!!』

仰向けにパイヤがダウンだああ!!!』

一部始終を見ていたのは、解説とセカンドくらいのものであった。

篠田はガッツポーズをとり、青木は拳を振り上げる。

困惑するホールの観客を置き去りにして、レフェリーのカウントが告げられていた。

時間を止める拳

よそ見に誰もが釣られるなか、最もその餌食となる青木は逆に、パイヤのよそ見を打破してみせた。ホールが困惑ぎみに盛り上がる様子は、控え室にいる鷹村からもよく分かる。

しかし、鷹村でも分からないことが1つ。

「な、なんだあ!?! どうやってあの技よそ見を破りやがった、青木のやつは！お前も完全に釣られかけてたじゃねえか！」

過去、青木のよそ見に全て引っかけり、まるで回避方法が分からないのだ。そのくせ青木がよそ見を破る。これほど腹立つことが鷹村にあるだろうか。今日という日において、この腹立たしさを上回ることはないと言えよう。

「す、すごい…なんであんなことができるんだ…」

興奮する鷹村の横、驚きの声を漏らしたのは幕之内 一步。いまの反応は、よそ見に釣られなかったこと。そして、よそ見破りを理解したことを意味している。

当然、鷹村がこれを聞かない手はない。

「一步オ！お前、分かったのか!?!」

「え、ええ。分かったというよりは、見てましたので」

「なにイ、見てただとオオオ！」

一步、ここで自分の発言を後悔する。

精神統一に専念するべきだった、と。

ここは切り替えて、早々に話を終わらせるべくこの一部始終を説明する。

「ええつと、その。なんと言いますか、とても単純だけど普通はまずやることがないというか。高度な心理戦を飛び越して人間離れしてるというか………単純に言う」と

「簡単に言うとは？」

「ごくり。生唾をのむ静寂が過ぎ、こう続けた。

「見ていませんでした」

「どつちだバカ野郎！」

張り倒される幕之内をよそに、映像の向こうではパイヤが立ち上がっていた。



カウント6つで立ち上がり、試合開始の合図が告げられる。

拍子木が2度、歓声のなかでも響き渡ったところでパイヤがリングを蹴った。

(目はしっかりとやがる。なのに残り10秒で突っ込んでくるか普通!?)

繰り出されるワン・ツーをガードするも、力任せにすぎた。思い切り後退したことで、コーナーを背負ってしまう。そこを狙うのは、必殺の右――。

「ストップ、ゴングだパイヤ！」

しかし、ゴングとともに両者の間に割って入るレフェリーにより、右拳が伸びることはなかった。

優位な立場から一転、窮地へと追い込まれた状況はゴングによって救われていた。

第3ラウンド、打ち合いは止まるところを知らない。

ガード越しに打ち、数あるパンチの1つがすり抜けては顔を上下左右に弾き飛ばす。ここに変化が加わったと言えるのは、青木の被弾率が上がっていること。

第2ラウンドまでパイヤと青木の被弾率、8:2程度に済ませていたものが、いまは7:3にまで押され始めていた。

1発だって軽視できる威力ではない。それはお互いに言えることで、単純に耐久値だけでみるのならパイヤは青木の倍はあるだろう。

以前ならコテンと倒れてもおかしくはない手数。なおも力強くリングを踏みしめているのは、これこそ単純な話である。

(くそっ、ココナツ・パンチ封じるのに躍起になりすぎて、カエルが打てねえ……！)

お互いが、必殺パンチの被弾無く過ごしているからに他ならない。打たせず、しかし打つことできず。リング中央、打撃と打撃が縄張りの主張を譲らない。

(——ぐ、まだ良いパンチ打つじゃねえか)

真つ向勝負は五分と五分。

必殺パンチに頼れないと分かった者が、次の一手に転じるまでそう遠くはない。たとえ、一度は見破られた技を使っても。

『パイヤの右アッパーがっいに青木のガードを弾いた！このラウンドはじめて無防備になる！』

間髪入れず、左ジャブが青木の視界を霞かすませる。

今度は顎を引いて歯を食いしばったぶん、意識が浮くことはない。それでも、視界が相手を映したときはすでに技を仕掛けられていた。

『このモーシヨン、またもパイヤがよそ見を使う！果たして、次は成功するのか!?!』

(きた、まぐれかどうかを確認するために)

角刈り頭が不意に動きを止める。

その下で、憎たらしいパイヤの両目が驚愕の色に染まる。交差した視線はこの瞬間、あろうことか全く違うなにかを見ているのだ。対峙する相手以上に注視するなど、いったい何事であろうか……？

惹かれないはずがない。

(ああ、釣られちまう。後から見たヤツは、無意識に視線の先を見せられる)

知っていても抗うことは難しい。

至近距離で拳を交えるなか、ゆらりと視線を揺らしてリングから外れる。精神を集中して必殺パンチを受けまいと立ち回っているのだ。心を心で掴まれるようなもの。

魅了の一種とすら言える、魔の手を。

(ならよオ、身体に全部放り投げちまえばいいんだ)

青木は、視野を遮断し、闇のなかに浮き上がる篠田のミットめがけて普段通りに拳を打ち抜く。

『つ、釣られない！いやこれは釣りようがない！青木は目を瞑っている!!そのままダブルパンチがパイヤに突き刺さったああああ!!』

二つの赤い直線は顔面へと着弾。

大きく仰け反りながらロープにしがみつぎ、辛うじてダウンを回避する。

『再びよそ見破れる！これこそ、よそ見破りの正体だああ!!』

確かな感触を確かめて開くまぶたは、想像となにひとつとして違わない。

これは、練習云々の問題ではない。練習の意表を突く技こそがよそ見であり、本番でなければならぬほどのくだらなさがある。篠田すら知らなかった、曲者という孤独ゆえの攻略法だ。

「なにイー！目を瞑ったってのか!?真面目にボクシングやれ！」

控え室の鷹村、実況の声にキレながら視線は真横へ。

「鷹村さん…釣られたあとに目を瞑っても意味ないです」

「…」

そうこうしているうちに、第3ラウンドの拍子木が鳴り響く。

(だいぶんへろへろになつてきたな。あと少し粘れば、いける！)

外の音もお構いなしに踏み込む。

ジャブは容易く顔をとらえ、続くアッパーもパイヤの顔を跳ね上げた。それでも、パイヤは根気強く右を持ち上げる。

フック気味、というよりは疲れからくる軌道が定まらない右ストレート。脇がしまっていないがゆえに、最高のチャンスとなる。

(大振りきたあ！カウンターできる！)

揺れる赤い拳に、左外から側頭部目がけて――。

「そこまで！2人ともゴングだ！」

またも、ゴングによって不発に終わる。

『第3ラウンド終了。国内王者に遅れをとらない青木、これは決着も近いか!?!』

(ちっ、運が悪かったか)

悠々と、青木はコーナーへと戻っていく。

対するパイヤの顔にも、微笑が含まれていた。

—
—
—

「……おい、おかしくないか」

「え、なにがですか?」

第4ラウンドも中盤に差し掛かり、青木が果敢に攻めるなか。

控え室で鷹村がそう呟く。

「パイヤのやつ、2ラウンド目でよそ見を破られて、3ラウンドでまたよそ見した。どうしてだ?」

「どうしてって…。たまたま青木さんが釣られなかったからとか?」

目を瞑っているの知らなかつ……。っ!」

隣に座る一步は、自分の言葉を途中で区切り息をのんだ。

知らない、そんなはずがない。なにせ、インターバルを挟んでいるのだから。

「そうだ、1分間を挟んだにも関わらずだ。セコンドたちも釣られたか?」

んな訳ないよな、なんたってパイヤのセコンドだ」

「青木さんのよそ見破りを知らないわけじゃない。むしろ、分かっているパイヤ選手は2度目のよそ見を実行した?」

「…間違いなく。ならよ、いまリングの上で、現在進行形でなにかを企んでいる最中とみた」

一步は、鷹村の言葉に間髪入れず立ち上がる。

不安がつのるばかり、という表情で。

「あ、青木さんに伝えないとっ!」

「待て、そこまでやれとは言っていない。セカンドでもねえやつは、戦ってる男の背中を信じ続ける」

2度のドロロー、日本タイトルまであとわずか。そんな青木を無意識のうちに心配している一步を、だからこそと鷹村は引き止める。

「で、でもー！」

「控え室にいる以上、リングに上がるやつを信じるのが仕事だ」

それに、と付け加える。

「こうして気づいただけでも十分なのかもしれん。なんせ、青木のこ
とだ。髪型のせいで、逆に気づくこともあるだろう」

「あれは鷹村さんのせいじゃないですか…」

軽く蹴りを入れられる一步。

画面の向こうでは、ゴングと同時にレフェリーが割って入り、パイ
イヤの右ストレートが不発に終わる。

その姿を見送り、青木は息を吸い込みながらコーナーへと戻って
いった。



『第5ラウンドも終わろうというなか、青木が攻める！』

作戦通りと言おう。

このラウンドから、パイイヤの拳からは鋭さが欠けていた。ガード
にまわり、ときおり牽制するように右を振るうが青木には届かない。

（時間を止める、だったな。そりゃ俺を動揺させるためのブラフ！混
乱すればするほど、言葉の意味不明さに嵌っちまう）

攪乱のときは終わった。

防御は最小限に、攻めて攻めて攻め続ける。打撃音はパイイヤから
響くものばかり。

（小細工だけが俺じゃねえ。曲者同士分かるだろ、ピリピリと脳が痺
れてるだろ？）

曲者同士、青木が狂わせた歯車はみごとにパイイヤのペースを崩し
ていく。

（分かるぜ、悉く自分の技が通用しないもどかしさ。お前を見て思い
出す、伊賀とやり合ったときのことを）

あのととき、なにもかも届かなかった。

積み重ねてきた努力、その場しのぎの技、勝利への執念。なによりも、タイトル挑戦への熱意が欠けていた。

伊賀 忍には勝てる見込みがなかった。

（そんなやつに勝つために練習してる。これまでの技が通用しないヤツを倒すために、真っ向勝負に屈しちやなんねえ！）

いまは、分からない。

闘志を燃やす相手はいま、東洋^O太平洋^Bライト級^F1位にまで登りつめ、近々指名試合でタイトルを獲得だろう。

かつて負けた頃よりも強くなっている。そんな相手の姿を知ってなお、戦ってみなければ分からない。

（だから全員倒す。絶対にKOだ！もう泥試合でモタモタしてる暇なんげない。

パイヤ、お前との因縁にケリ着けなきゃそれも始まらない！）

ココナツツが装填されたのを見てガードを上げた瞬間、パイヤの拳が止まる。

なにごとか意識を集中させたとき、次にクルリと振り向いて背中を見せていた。そして気づく。

『第5ラウンド終了！息切れのパイヤ、たまらずゴングと同時にコーナーへと下がっていく！』

（そうか、ゴング鳴ってたのか。ようやく底まで見えたぜ。次のラウンドで終わりだ、パイヤ）

少しの体力を残してコーナーへと戻る。

わずかに上がる視線の先、客席で祈るように見守っていてくれるトミ子が、さらに活力を与えてくれる。

（見ていてくれトミ子。もう俺は、情けない姿を見せて心配させたりしねえ。胸張ってお前のもとに帰るぜ）

拳を上げて彼女に応え、考えをまとめ始める。

篠田と話したことは少ない。

勝負を決めてくること、パイヤの体力は確かに底を尽きかけていること。自分はまだ余裕があるからと。

端的にやり取りを終えて送り出してくれる。

「焦るな。いま勝てなくても、次のラウンドもあるんだ」

「おう！」

第6ラウンド開始のゴングが鳴り響く。

小細工ごと叩き伏せ、これを最後の段階と見据える青木。

パイヤほどのパンチャーに打ち勝たなければ、次はないという自覚が一步先に出る。

(体力のある限り、打って打って打ちまくる。カエルはトドメ刺すときだ、その瞬間を見極める青木^{おれ}！)

最短、最小の力で赤い線を走らせる。

対面する髪型が、パイヤの顔を自分に寄せていく。打たれてヨボになり、辛抱ならないと大きさにスウエーをして。そこにボディストレートが無常にも足を止める。

だが、なおも打ち返してくる。コンビネーションに割り込み、一々スタミナを奪う拳を頬で感じる。打てど削れ、打たれれば息を吐き、相手を底に押し付けようと意地の張り合いへともつれ込む。

分かる、これは死んだふりの範疇。まだ反撃する余力があるヤツ^{おれ}の顔だ。だから最後の一步、カエル^{必殺}までの工程を温存する。

『小さいパンチをまとめていく青木！相手は足元がふらついている、もうすぐ倒れる前兆か!?!』

ホールの観客がヒートアップしていく。

曲者勝負に終止符を打つ瞬間を前にして、正当なボクシングが功を奏することに興奮を覚えたのだ。

熱狂に押されて、徐々に後退していく。伝説の一端として、恥じぬよう前進する。

息が切れかけながら、まだやれると踏ん張る。相手の顔だつて間違

いなく苦痛に歪んでいるのだ。

(上、上、上とくりや、下がガラ空きだ食らえッ)

もう、パイヤの体力だって底が見えてもおかしくはないはずだ。そう考えていた直後。放った左ボディが直撃、パイヤの瞳が揺れ動き、視線が下へと落ちていく。

そのときは突如として始まった。

『あぁーっ！パイヤがダウン！この試合2度目、もうへろへろという様子！曲者対決が終わるのか!?!』

(確かに手応えがあった。だが、まだ完全に終わったわけじゃない)

肩で息をしながら、右膝をリングに着ける。

顔を上げることすら億劫の様子で、両拳で身体を支えてカウントを拒む。

『5カウント、試合が再開します。だが、もう虫の息。果たして嘘か、本当か？青木がその拳で確かめに行く!』

(残り1分だが逃すなんてできるか！1回でダメなら2回ダウン奪って試合終了だ)

レフェリーが止めてもおかしくはない。

ガードを固めるはずが、デコが丸見えのせいで情けなく見える。あはもう腕が上がらない証拠、死んだふりなら間抜けもいいところだ。

一気に駆け出す。

回復の隙など与えない。ここは冷静に、そして熱く相手を倒しにくい絶好のタイミングである。

2つの左拳が突き出される。

どちらも申し分ないキレがあるが、ここに蓄積するダメージの差が出た。

青木の拳のみが顔面に着弾し、パイヤの拳は右に逸れた。より太くなった左腕は、スタミナ切れにより制御の範疇から逸脱しつつある。それでも止まらないのは、青木が勝負を決めにきているからだ。ここで退けば、間も無く叩き伏せられる。

両者が歯を食いしばり、更なる一撃を見舞おうと前へ。

振りぎみのパイヤに対して、一直線を突く青木の拳が着弾数を重ねていく。パイヤのジャブが青木の顔面に触れた瞬間、ゆらりと上体が逸れていた。

顎で踏ん張りながら、右ボディがパイヤにカウンターとして炸裂。にゆるりと動く青木とは正反対、後ろから引つ張られるように仰向けに沈んでいく。

『再びダウンンン!!今度は背中からリングに沈んだ!これは決まったか!!?』

リングをのそりと転げながら、その手はロープへと伸びている。反対側まで辿り着き、カウント9でレフェリーにしがみつくようにして立ち上がったパイヤ。まだやれると構えてアピールし、覗き込むレフェリーを負けじと覗き込んだ。

「ボックス!」

『続行だア!どう見てもスタミナ切れ、もはや打つ手なし!それでも残り30秒、生き残れるかパイヤ・ダウチ!』

(いける、あと1撃で...!)

ガムシヤラ、ヤツの状態はその一言で全てを表せる。

それは、ラツシユをかけるこちらだって同じだ。

(いけ、打て、もぎ取れっ!)

倒す、あと1回という魅力が緊張する心を突き動かす。

痺れる乱打戦、一撃必殺の右を潜り続け、ようやく終着点が見えた。行くしかない、掴むしかない。もう1分だって対面したくないほど精神を使い続けている。

1発で全てが台無しになる世界がここだ。ゆえに、起きる前に全てを終わらせなくてどうするという。

そのために練習を積み重ねた。

自信をもって、いまここで振り抜く――!

『な、なんだ?!』

いつ試合が終わるのか。

凝縮され、一層の注目を浴びるリング上。飛び交う拳がピタリと止む。

パイヤが右を振り抜こうとし、ガードを固めた青木。
しかし、パイヤの右は打つどころか、だらりと垂れ下がったのだ。
必殺のソレが放たれないと理解した直後。

(なんで止まるっ、いや動かないのか！)

ならこれでサヨナラだ――)

その音は、青木の耳に届いた。

コン、と打ち鳴らされる小気味良い報せ。

大きく息を吐きながら、パイヤは振り向く。重い足取りで、自陣へ向けてインターバルに喜びの声を漏らしていた。

(っ……、くそ。少し、熱くなりすぎた……)

静まり返るホール。

第6ラウンドの終末の音が届く。

青木は、パイヤに倣い背後のコーナーへと戻っていく。
その背後で、黒い影が行動を開始しているのも知らずに。

――
――

控え室、震える声は幕之内。

「な、なんで振り向くんですか……鷹村さん!？」

青木が振り向いた同時刻。

その事態に呆気に囚われた幕之内が目にしたのは鷹村。彼は「第6ラウンドが終わっていない」にも関わらず、なにかに惹かれるように真横を向いたのだ。

意味は、聞かなくても分かっている。

それでも、聞かずにはいられない。

「この俺様が振り向いただど!？」

「鷹村さんが釣られたツ……まさか、あれも……!？」

鷹村が釣られた、その表現に嵌る意味など一つしかない。

「よそ見」がリング上で実行された、という意味のみ。

果たしてそれは、どういうロジックなのか。

残された10秒で考えて把握するなど、至難極まりなく。

誰が想像しよう。

時間を止めることが、本当にできるなど。

「あ、あああああ！ダメだ青木さん！いまの音はゴングじゃなくて拍子木ですよ!!」

「アイツ、パパイアの動きに集中しすぎて周りの音が聞こえてねえんだ！ガード下げた今、ココナッツ・パンチなんざ食らったら——」

篠田の叫び声がホールに轟くも、時すでに遅く。

パパイアは青木の真横に飛び込み、右腕の装填を終えていた。

第5ラウンドまで欠かさずに実行してきた“拳”がある。

ラウンド終了時に鳴らされるゴングと同時に、相手に着弾する直前で拳を止めること。乱打戦の最中、パパイアはこれだけは必ず行ってきた。青木にしっかりと見せ、ガードをさせながらラウンドを終える。己のスタミナが許す限り、5ラウンドの印象をしっかりと焼き付けたのだ。

第6ラウンド、2度もダウンしたのはわざとでもあり、本当だ。巧く拳を受け、致命打だけは避けた。そして迎える拍子木、残り10秒を知らせる音はきた。

5回実行してきた拳、これを拍子木が鳴る直前に実行。2度のダウン、目前の勝利という至極の餌で己に集中させる意識を、一気に断ち切った。

この10秒間、青木の意識はインターバルへと切り替わる。

リングの上にながら、リングの外へ。

つまるところ、セコンドの呼びかけに気づくまでの数秒間、青木勝の時間は停止した。完全無防備な時間を、パパイアは生みだしてみ

せた。

「ばばっ……あああ青木まだだ！」

後ろみろガード固めろオオオオオ!!」

ジャブですら受けたら危うく、そんな人間が必殺パンチなど受けたあとなど想像するまでもない。

よそ見の究極形態、振り返り。初出しにして、その技はたった1人の男を欺くに足る威力を備えている。2度のダウンを囮とするKOへの執着心を逆手にとった、諸刃の剣。

『あ、ああああああ！なんとという策士、なんとという曲者！この男、はじめからこれを狙っていたのかあああ!!?』

この術中から逃れるのは、いまの青木には無理である。

倒すと決めたことが出来なかった。それは、客席で見守ってくれるトミ子への申し訳なさからきていた。

それは、次のラウンドを戦い抜くための英気を養うためでもあり、ここにおいて。

(すまねえトミ子——)

彼女の姿を見て、青木の歩みは止まる。

トミ子が両目を見開き、驚愕と恐怖で塗れる顔を見た瞬間。

(な、なぜ……その顔をしているんだ)

その表情の意味に困惑する。

トミ子が目を瞑りかけ、顔を覆い、驚愕の表情を見せるとき。それは決まって、青木 勝がボロボロに追い込まれたときだ。

確かに、いまの自分は満足な身体ではない。それでも、トミ子の表情が腑に落ちない。

(俺はまだ、ダウンしてない……っ!?)

そう思った直後、視界は真下へ向けて急降下していた。

それは、奈落へと墜ちるせいかな？

(違う、まだ——)

そう、否。

青木の身体に染み込んだ本能が、その体勢を選んだのだ。

(まだ終わってないんだな、トミ子！)

勝利の女神は、しっかりと俺の目を見ている。
その瞳が、泣かせたくない一心で青木を突き動かす。
強風が吹く。

リングの上、青木の遙か頭上を赤い突風が突き抜ける。

『あアーツ!!!ココナッツパンチが空振りだあああ!!!しやがみこむ青木、これはっ…!』

しやがみこむ。

試合の最中、行動範囲が限られる姿勢。

何百と打ち続ける青木にしか分からない、絶好のタイミングというものがある。

警戒されれば最後、離れたが届かず。スタミナ切れなら飛ぶことも困難。何度も何度も何度も悔やみ、幾度その拳が届けば良かったかと思いつながら。

2度と同じ状況で不発に終わるまいと、鍛え上げた足腰が唸る。

見上げた先には、渴望するベルトの代わりに、大きく主張する弱点が曝け出されていた。

ここに、勝利を求める跳躍は成った。

『青木のカエルパンチ炸裂ツ!!飛び上がりのアッパーがヤシの木を激しく揺らしたア—!!』

右拳が前のめりになったパイヤの顎を弾き飛ばす。

もはやココナッツ・パンチを打てたことが奇跡だった彼には、踏ん張るだけの力は残されていない。揺れる意識は白く、照明との判別すら出来なくなる。

『ココナッツここに落下!3回目のダウンとなり、自動的に青木の勝利が確定!!!』

「しやああああ!!!」

「きやああああ!!!やったわ久美ちゃん、まちやる勝った!!!」

静寂が一転、大歓声となりホールが轟く。

勝利の雄叫びを上げ、ここに勝者が決定した。

6R 2分59秒、KO勝利!!

東^O洋^P太^B平^F洋^Fライト級7位獲得!

降りしきる記憶 その1

「もう一度、いまの言葉を心して言ってみろよ。」

ロードワークの邪魔をしに来た、その訳を……！」

梅雨が近づく5月の朝6時、ランニングウェアに身を包む二人の男性が対面していた。

荒げた声の主は宮田 一郎。会話を振った人物に向けるそれは、殺意や敵意といった類いのものではない。本人ですら意識せずに出していた、純粹無垢な疑問でしかなく。

恐ろしくタチの悪い、楔くわくであった。

「意味も、言い方も変えない。だから謝りも、撤回もしない。」

宮田くん、もう僕を待たないでください」

お願いする、という立場としてはあまりにも姿勢は真っ直ぐだ。

しかし。ひどく勘違いしている、とはカケラも思っていない。

「呆れたぜ。怒りを通り越して落胆するばかりだ、幕之内。お前に言われなくてもいずれライト級うら級えに行く」

淡々とした口調で宮田は答える。

暗に、それは思い違いだと指摘している。

「今はその準備をしている。分かったらさっさと帰れ」

「これからのために必要なこと、なんだ……」

「俺にお前の驕りっぷりを見せることが？」

驕りっぷり、確かにそうだ。

何年も宮田をフェザー級に縛りつけているのは他でもない、宮田くんに憧れて世界の地に辿り着いた自分。

嫌でもわかる。ランデュー戦以降も宮田くんがフェザー級にいる理由なんて、それしかない。

「……」

宮田の骨格は、本来ならジュニアライト、もしくはライト級の身体だ。階級を落とせばそれだけ体格差で優位に立てる。しかし、宮田の場合は限度というものを無視していた。

身を、そして精神を削ぎ落とす日々。そんなものが人間を続けられ

るとは思えないだろう。

幕之内はそんな宮田に対して悩んでいた。

「驕り……。うん、本当にそうだと思う」

宮田 一郎が尊敬するボクサー、父親を引退させた選手。その息子との対戦により、幕之内との試合が流れてしまった。あの日から、どうしようもなく道が違えてしまったのだ。

試合が終わったあと、フェザー級に耐えられる身体ではないと階級を上げるはずが、未だフェザー級にいる。無理な減量を続けて、フェザー級に固執する宮田に自分がなにを言えば、苦行を辞めてくれるのか。

「なにが言いたい」

ボクサーになる前。

はじめて負けた相手、そしてはじめて勝った相手。それが宮田 一郎というライバルで、憧れの存在。同じ鴨川ジムである宮田は、幕之内とのスパーリングに負けてから移籍。

理由は、プロのリングで決着をつけるため。

何度も巡り会う機会があった。ただ、そのたびに運命の悪戯いたずらが邪魔をする。かれこれ8年を経た。しかし、フェザー級のリングに2人で昇ることはない。

運が悪かった、宮田くんにも理由がある。仕方がない、僕には試合を組むだけの力がない。何もできない、ごめん…。

「これまで、色んな人たちとリングの上で戦ってきた。どの人も強くて、僕だけだと勝てる相手じゃなかった」

ゴンザレスに負けてから数ヶ月、さまざまな葛藤が幕之内のなかを駆け回る。

また、宮田くんと距離が空いてしまった、と。

「背中で会長が見守っていてくれなきゃ、前に進むことすらできなかった」

運命の悪戯、それだけで割り切れるほど浅い関係でない。

幕之内 一歩のいまを築いたキツカケの一つでもあるのだ。

だから悩み、考えた。

「だけど後ろだけじゃない。進むための道しるべを見せてくれたのは、もう一人、ずっと…：リングの上に行ったんだ」

答えは、とても簡単なもの。

「まだ、宮田くんの背中を追い続けているんだ。なんでだろうって考えて、ずっと分からなくて。だけどある日、ロードワーク中に納得した」

なぜ、練習を続けるのか。

なぜ、ボクシングを続けるのか。

少しばかり遠い日になってしまい、同じことを繰り返すことを目的としつつあった。

見失いかけていた、大事なもの。自分の目標。

「僕は、必ず宮田くんを…。宮田 一郎からK。O勝利する。それが僕の目標で、ボクシングが大好きな理由なんだ。

だから絶対に逃げない、どんな壁も乗り越えてみせる！」

思い至ったことは、最初の頃と変わらない夢だ。

この対決だけは、簡単に諦めきれない。

「これまでの全部に、もう裏切らない！」

だから宮田くん、後から追いかけるよ！」

幕之内の張る声に、宮田は大きく息を吸い込んで空を見上げる。

「なんだ、やっぱお前…：バカ、だな」

目に見えない枷が、ようやく外れた気がした。

二度目の敗北から引きずり続けている心の重りを、自らの決心で霧散させたのだ。

「羽は、もう無くなった…」

踵きびすを翻した宮田の背はすぐに遠くなり、曲がり角で見えなくなる。

その姿が陰に消える直前、右拳を上げ人差し指を天に向けていた。それが別れの挨拶とともに、彼なりの返答とも言えたのかもしれない。

3ヶ月後、宮田 一郎は東洋太平洋フェザー級のベルトを返上。

ライト級へと上げた1年後、指名試合によってWBCライト級タイトル挑戦が決定した。

両国国技館。

WBCライト級タイトルマッチ、その夜は早くも3ラウンドを迎えていた。

『止まらない!!リングを駆ける両者の疾走音が止むことを知らない!!!』

拳が空を滑る。

一閃するごとにステップ音は3つを超える。両者休む間もなく、射程距離に入った瞬間からフェイントを織り交ぜていく。

上半身が止まった場面を見ないほど軽やかに、機敏にパンチを量産する。その数は互いに3ラウンドで300を超えた。

「宮田のスピード、フェザー級の頃より上がってないか!？」

「そりや間違いないが、その宮田が突き放せないあのチャンピオンがやばすぎるだろ!」

両者300発、全弾不発。

決してタツチボクシングではない。アウトボクシング、ときには勇敢にインファイトを仕掛けながらも。

宮田の拳は王者の座に擦らない。

「お、おい……それどころか宮田のやつ。徐々にパンチがかすり始めているか!？」

チャンピオンの左ジャブが頬を横切る。

目を細める宮田。そこから次々と、ジャブが宮田の顔に狙いを定める。

同身長、同体重の条件で戦うなか、ここにきてようやく差が見え始めていた。

『ああ……挑戦者の頬を掠めるジャブの数々!スピード勝負、先に手にするのは王者なのか!?!』

最短、最速、一切の無駄が省かれた攻防。

たった一本のみ用意される栄光の道に乗り上げたのはチャンピオン。

『宮田の足に着いていくどころか、徐々に差をつけていこうとするチャンピオン！かつてない速度に瞬きも許されません！』

「っ……………」

雷雲を振り払うかの如く、超光速の左右コンビネーションが宮田のガードに刺さる。移動しながら打つていい威力ではない。足がもつれ、パンチの軌道がブレてもおかしくはない。

それを、宮田一郎という選手を相手に、カウンターをもらうことなくチャンピオンは実行してみた。

『っ、ついに宮田がコーナーに押し込まれてしまったああ！』

リング全体を使っていた先刻が嘘のごとく。

観客の目はただ一点を見つめていた。

「イチローは過去最速の挑戦者だ。彼を捉えるための研究に費やした日々の成果は、間もなく観衆の目に映るだろう」

昨晚の記者会見、チャンピオンはそう言い放った。

（イチロー、君のスピードはどの階級を見ても追いつける者はいない。日本の鷹ホークでさえだ）

このときを想定して、数々の準備をしてきたからだ。

（最速の王者として名を売ってきた僕すら、君のスピードには追いつけない。この試合、元より前半に全てを賭すものなのだ。）

イチローのカウンターを受けず、いかにしてコーナーへ追い込むか。当たり前の定石だが、これほど困難とはね）

チャンピオンは気を引き締める。宮田を過去最強、最速の挑戦者と断定しているため、昨日の宣言を悔れない。

「宮田選手に質問です。このタイトルマッチへの意気込みをお聞かせください」

「4ラウンド」

「…………よ、4ラウンドといますと？」

「チャンピオンのK.O勝利の8割は4ラウンド目だ。そこを越え

られないようじゃ話にならない”

“な、なるほどー！ありがとうございますー！”

スポーツにおいて、必ずしも体重が軽ければ速いという訳ではない。筋肉が程よくついていなければ瞬発力も無く、動きに機敏さが欠けていく。

そして、ボクシングのライト級ともなれば速さにおいて理想の体格に近くなる。

減量により速さを増すように見えた宮田のフットワークは、肌触りの悪い泥をシューズに詰めていると言っても差し支えない。フェザー級の舞台では、羽を満足に広げたことなど一度たりともない。

少なくとも、チャンピオンはそう読んでいる。

（コーナーに追い詰めてからではダメだ。コーナーに押し込んだ刹那の隙で勝負を決める。一瞬でも時間を与えてしまえば、たちまちカウンターが私の意識を断つからな！）

浮いた足、背後の壁、足は封じた。

グローブ越しに握り込まれる右が一直線に走る。

『不完全な体勢の宮田に、無情にもチャンピオンが距離を詰めた！』

振り抜かれた右拳は必殺。

宮田の顔を寸分違わず捉えた――

『クリーンヒット……トお……!?』

間違いなく、捉えたはずだった。

苦悶に歪んでいるはずの顔は、頬を横切る拳を涼しげに見つめていた。

（バカな!?）

チャンピオンの拳は、コーナーを打ったにすぎない。会場中が錯覚したのは、宮田の首捻りスリッピング・アウェイによるもの。被弾すら魅せる技術は、眼前の歴戦の王も騙す。

3ラウンドまでノーヒット、それでもなお、底を見せていなかったのだ。

宮田は、スリッピング・アウェイ刹那の隙をもってチャンピオンの足に枷をはめた。直後。

伸ばされた右腕の側面を、雷神の右拳が駆け抜ける。

(あのとき……！)

記者会見 あのと時の話にならない、と言ったことはつまりッ)

世界前哨戦まで、宮田のフットワークは他の追隨を許さなかった。追いつくことはハナから叶わず、かといってついて行けば即座にカウンター雷撃でダウン。

誰も、彼の底に届かなかった。

一方、チャンピオンは届いた。

否、垣間見せられたのだ。

遙か上空。霹靂の向こうへと誘われていた。

天上に轟く、雷のなかへ。

(K. O宣言だったのか……!?)

赤い閃光がチャンピオンの顔面を打ち飛ばす。意識も、精神も、神経も割く伝統の一撃。落雷が一本の木を霧散させる。

これが鍛え上げた、ただのカウンターだというのだから驚くほかない。

「タイミングを計り続けておった。競り合うように見えていただけ。

ここまでできたか、宮田」

「宮田くんの、本気のハンドスピード……！」

客席最前列。

崩れ落ちるチャンピオンを目撃しながら、幕之内の視線は宮田へ。力強く開かれる瞳には、たった一人の男にだけ向けられた意思があった。

“待っている——”

「宮田くん……」

視線が交差する。

1秒に満たない宣言は終わった。

『あ………圧倒ウウウ！宮田一郎がオープンングヒットを決め、それがダウンだああああ!!』

駆け寄るレフェリーは、仰向けのチャンピオンを見るや即座に両手を交差する。

『レフェリーが試合を止めた!』

……な、なんと、試合終了!?!』

日本人ボクサー現役◆人目となる、世界王者がここに誕生した。
『やりました、獲りました!』

WBCライト級チャンピオン誕生!!

その名は、宮田 一郎!!!』

雷神の名が世界に轟いた瞬間であり、ここから1年間。つまり、鷹村のライトヘビー級挑戦に至る日まで敗北なし。

彼はいま、他の団体からの王座統一戦を断り、今もその座を死守し続けている。

一重ひとえに、ベルトが一つあれば夢が叶うという理由で。

降りしきる記憶 その2

これは、宮田 一郎の世界戦が決定する直前のお話。
ある晴れた昼、のどかな時間が流れる空のした。

山奥のペンション『義男』にて、2人の年老いた男性がベンチに腰をかけ話していた。

「幕之内きパンチドランカーの疑いがあるだニ？」

「ああ…。いまは休養を与えておる。しかし…」

片方は猫田 銀八。鴨川の古き友人で、戦後の日本において拳闘家として活躍した人物。

「それでも練習を辞めてないんじゃないだニか？」

「そうじゃ。ここ最近、あやつはロードワークをこなしとる。愚直にも、ワシとの練習をなぞるようにな」

「幕之内き正直者すぎる。そのおかげで成長したも同然。身体は、恩をそう簡単に忘れられん。嬉しい話じゃないだニか？」

「…………そのことで、聞いておきたくてな」

こんにち、鴨川が猫田のもとに訪れたのは、他でもない幕之内のこ
と。

幕之内 一步は、ボクサーとして短命なスタイルをなぞっている。
小柄ゆえに相手の懐に飛び込んでいくため、選手を広く見渡しても被弾率はトップの位置にいる。とくに、顔面への衝撃は強力なものが多
い。ストレート、カウンターをよく顔面に受けるため、いつ脳障害に
悩まされてもおかしくはない。

そんなとき、アルフレド・ゴンザレスとの戦いに敗れたのち、パン
チドランカー疑惑が持ち上がったのだ。

「そうか、ワシのことを聞きに来たんだニね」

戦後、ボクシングが拳闘と呼ばれていた時代。

拳闘家であった猫田は、パンチドランカー症状に陥り引退した。そ
の苦悩を見てきた鴨川は、猫田の心境に触れることはしなかった。そ
れが当初、ともに戦ったことのある猫田への敬意でもあったのだ。

「……………言いにくいなら、無理にとは言わん。パンチドランカーと付き合うその心境は、おいそれと触れていいものじゃない」

だが、いま鴨川のボクサーにパンチドランカーの嫌疑がかかっている。引退を告げるかを悩み、結論が出ない日々を過ごし、猫田のもとを訪ねた。

「じゃが、怖くてたまらん。2人も、この手で人生を狂わせてしまうかと思うと、止まるようにしか頭が回らない。

ワシは、なにを終わらせればいい……」

大切におもう選手の人生を、己の采配ミスでこれ以上台無しにできない。

なにか正解で、どれが残忍な最期なのかを見極めるため。

かつての盟友に助けを求めた。

「よくぞ訪ねてくれた。幕之内のために、参考にするといいだニ」

「猫ちゃん…感謝する」

猫田は、間髪入れずに返答した。

「段々と言うことを効かなくなる指先、不意の眠気は起きているかぎり隣に付き纏っている。そんな、誰にも言えないという孤独と戦う毎日だニ」

生涯、言うまいとしていた猫田の過去。

鴨川と猫田は、拳闘家として凌ぎを削った仲。

ライバルとして互いを高め合っていたとき、ある試合で放った鴨川の拳が猫田のなにかを狂わせていたのだ。

「そうして臨んだ最後の試合は、言うまでもない。あのとき、リングのうえで積み上げてきたものが崩れていった気すらした。

誇りも、自信も、なにかもが…」

言うまでもない。

猫田がパンチドランカーとなった原因の一端は鴨川にあった。尾を引いたまま“負けられない”試合に臨んだ猫田は、あと一步届かなかった。

鴨川は、話を聞くなかで胸を痛める。猫田のことを、そして幕之内のことを考えると、これ以上の話を聞くのは失礼にあたると思ったか

らだ。

席を立ち、話を止めようとしたとき。猫田は、鴨川の考えを見透かしていたとばかりに声を張った。

「そして、それはすぐに取り戻せたんだ二」

「…な、なんじやと？」

動きが止まる鴨川に、すかさず言葉を続ける。

「ワシの届かなかった拳は、やつに…アンダーソンに届いただ二。源ちゃんが、ちゃんと届かせてくれた。あのとき、リングの上だったからこそワシは納得した！」

失くした自信は、失くした原因でしか取り戻せんだ二！男さそういう生き物だ二、拳闘に生きるヤツにしか分からない誇りさある！

リングの上で握った拳さ打ち込めんまま降りて、それで悔いが無いと言えるだ二か!?!」

「わ、ワシにも……………」

鴨川にも、セコンドという立場がある。

それでも、即座に言い返すことはできない。

「ワシに、悔いはないだ二。」

源ちゃんは、選手に悔いを残させてもいいだ二か？」

猫田は笑顔で問いかける。

鴨川が思い返したのは、拳闘家としての自分の最後。

「いまは気づける者がたくさんいる。幕之内さ、幸せな環境下にいるのがよくわかる。源ちゃんの心配は、きつと伝わっているだ二。」

男はこういうとき強くなる。それは、源ちゃんが誰よりも知っているはずだ二よ」

その言葉に、鴨川は。

そして、幕之内 一步の再起戦半年前。

鴨川ボクシングジム事務所で、鴨川は椅子に座り外を見つめていた。

「もし、小僧が望むならば。老いた誇りよりも優先すべきことがあるなら……」

ここまで、少くない出来事があった。思うこともあり、そのたびに遠くなる自分の過去を振り返る。

「…止めじゃ。そのとき、もう結論は決まつとる」

拳闘家たる自分に誇れるような最期を。

そのために、不慮による引退などあつてはならない。じきに、種は芽となる。幕之内の成長を、誰よりも確信するからこそ。

「悔いが残る試合など、させてたまるか」

鴨川の頬から小難しい皺しわは消え、純粋な子供のように空を見つめていた。

降りしきる記憶 その3

宮田 一郎が世界王者となり半年が経った。

世間の大賑わいは徐々に落ち着きをみせつつ、その熱の逃げ場として1人の男に注目が向けられていた。

事務所にて、注目を浴びる男、幕之内へと告げられる再起戦の相手。「アントニオ・ゲバラ。フィリピン出身、フェザー級世界ランカー最年少のいま最も勢いのある選手の1人じゃ」

「一歩くんはもうすぐ3年も試合に出ていないことになる。それに、彼は生粋の左利きだ。とても厳しい試合になるのは間違いない」

鴨川が手渡した1枚の写真。

好青年、誰もがそう言うであろう顔つきの男性が写されている。

戦績、相性、己の立場を鑑みずに幕之内は即答する。

「やります、やらせてくださいー！」

「気合いよし。じゃが、それだけじゃ越えられん。これから半年間、みっちり左利き対策を詰め込む。また、1からじゃ」

「はいー！」

「下で準備をしておくように。無論、両手両足のおもりは外しておけよ」

元気に挨拶を返し、幕之内は事務所をあとにする。

見送った鴨川はすぐに椅子から立ち上がらず、ぽつりと。

「懐かしい感じじゃわい」

誰にも聞こえない声を出した。



リングの上で鴨川と幕之内がミット打ちに勤しんでいる。

「左利きは右利き相手に顔を狙われたとき、左に頭を倒しやすい。こちらの右ストレートを外し、射程圏外に出られるからな」

左利きの癖や基本となる動き。

「もし自分から行ってダメならば待つてみる。ウィービングでパンチ

を空振りさせ、そこにガゼルを打つ！貴様ならそれだけで簡単に手が届くじやろう」

応用による幕之内の立ち回りかたを、ひたすらミットで教え続ける。

「左利きを相手に、なぜ左回りをするかは分かっているか？」

「はい、基本だけは押さえられています！」

右利きと左利きが向き合うと、それぞれの前足が飛び出します。このままだと打ちにくく、相手の内側に入り込むとストレートで迎え打たれます」

シャドーをしながら説明する幕之内。

ストレートで迎え打たれるときなど、顔がリアリティに溢れすぎて横で見ている青木、木村がひいている。

「相手の外側に踏み込めば、こちらのストレートが顔面に届くので、左利き相手には右拳をジャブのように使う！」

ポジションニングの取り合いが重要です！」

説明に加えた動きを終えると、鴨川はひとつ頷く。

「そうか、よう把握しとる。最初は左に行けばいいが…それを封じられたときの話、お主は右に、右に回り込んでいけ」

「右に、ですか…？」

「そうじゃ、右じゃ」

幕之内の説明、左利きに対する立ち回りは一般的かつ最も合理的なもの。そこを、鴨川は逆の動きをしろと言う。まるで読み解けない意図に頭を傾げる幕之内。そして、リングの外でシャドーをしている2人が飛びついた。

「会長、右回りじゃセオリーと逆ですよ!？」

「そうですよ、左に回って安全圏から打たないと！」

「はじめはワシもそう考えておった」

それを制する鴨川。

「左利き相手には右拳を主軸に戦う。じゃが、小僧のことじゃ。ジャブのようにちまちま狙ってたら、いたらんダメージをもらうのが目に見える。」

「小僧の右を活かさないのは勿体ないわい」

無論、ここには左利きに対するポジショニングを出来ることが前提となる。

「向こうもそれは承知で来る。可能なら1ラウンドK.Oを狙ってな。」

相手のビデオは観た。そのうえでワシはこれを教える」

鴨川は、セオリーだけでは世界を越えられないことを分かっている。その手段として、左回りが潰されたときの右回り。幕之内が不利に見える舞台で、迷わず進める道を伝える。

「左ジャブで相手を牽制し、剣道でいうところの鏝迫り合いの役目に徹底させる。相手が左ストレートを打ってきたところを、ダッキングでかわして左足横まで踏み込んでみる」

言われた通りに右奥へと踏み込んだ。ふと鴨川のほうを見た幕之内は、ようやくこの意味を理解した。

「こ、こっちは…」

「左利きへの2つ目の狙いどころ。右を思い切り打てる一瞬の死角じゃ、咄嗟に出すパンチは右のショートフック、或いはショートアツパー。」

ほれ、小僧の左ガードで届かんじやろう」

「…確かに、一步の踏み込みに目が追いつくのは難しい」

「そこにウィービングしながら入り込まれりやたまったもんじやないな。けどよ、踏み込む足を入れ替えるのは難しいですよ?」

「ならば小僧、避けてみせろ!」

距離をおいた鴨川の声に合わせ、再び踏み込む。右ジャブを搔い潜り、ポジションを取ったところへと合わせてきた右を、大きく弧を描き。

「この2年間以上、一步のやつ両手両足に重りつけてたな…」

「こ、こんな動きできるのか普通?ブライアン・ホークみたいな気持ち悪さだぜ」

辿り着いた瞬間を目撃する青木と木村は、驚きに声を震わせた。

「懐に飛び込んだが千載一遇、右を振り抜け!」

「……………はっ、はい！」

そこからは、ひたすらガードの練習に徹していた。あらゆる姿勢から、驚異的な体幹を活かすために避け、回り、引く。デンプシーロールに似た動きは、その日続いた。

「それにしても、やけに避ける練習に没頭してるな」

「ああ。今日はまだパンチ一つも打ってないしよ。なんかまた企んでるな」

こうして半年間、左利きとガードの練習を繰り返す日々を送った。

再起戦前日。

はじまりの木の横に、一直線に長く引かれた線がある。

鷹村によって引かれた線の名前は、彼曰く。

「人外の、境界線…」

人のまま踏み込むな。

そう言われたまま、3年間避け続けてきた。

線の前に立ち、深呼吸。夜の風が身体に染み込むのを感じながら、右足をゆつくりと上げた。



再起戦当日、控え室。

青木の試合が終わり、次は自分の番が迫った。目を瞑り、最後に集中力を高める。

(思えば、僕が足踏みしている3年間で色々なことがあった)

千堂さんは世界中を激震させる試合をして、宮田くんは圧倒的実力で世界の壁を突破した。鷹村さんは大激戦区スーパーミドル級を制し、敗者の星と呼ばれるチャンプから大絶賛を受けた。

ほかに、山田くんや板垣くん、それに速水さんの2度目のタイトルマッチもあつたんだ。

「そのあいだ…」

僕は、止まってしまった。

色々と答えを出したのに、前に進めている実感が湧かない。

「……ぽ、お…、一歩！」

彼の横、先程から声をかける男にも気づかずに。

ついに辛抱ならないとばかりに、幕之内の耳を引つ張り、彼こと鷹村が怒鳴り声を上げる。

「おい、俺様を無視するとは何様だっ！」

「うわぁーっ!?!?ごごご、ごめんなさい！」

反対側どころか、ホールにさえ響くのではと思う音量に堪らず悲鳴を上げていた。

「か、考えごとをしていました。久しぶりの試合なので、心頭滅却して落ち着こうと…」

「ほう、そのわりには顔がニヤけていたぞ。さては久美ちゃんかアー!?」

「ちちち違いますって！宮田くんのごとでちよつと…」

「なにイ、男のこと考えてニヤけるなアホがあ！」

立ち上がった鷹村に背中を蹴られそうになり、慌てて回避行動を取り床に転がる。ギヤーギヤーと騒ぎながら鷹村を宥めたあと、幕之内は話しかけられた内容を鷹村に聞いた。

「次は言わんぞ。」

リングに上がってお前はどうしたいんだ？」

「………勝ちます。勝って、会長に僕はやれるんだって見てもらいます」

「なんだそりゃ」

鷹村はため息を吐く。

「ジジイがそんなこと頼んだのか？」

そして、天井を見上げながら幕之内に聞いたです。

「そんな気持ちじゃ、がっかりするだろうな」

咄嗟に出た言葉。

だからこそ問う。

誰が、なんのために求めるものか。

「お前、負けるぞ」

「ッ……」

鷹村が危惧していたことが1つ。

3年というブランクからくる、試合に対する姿勢の歪み。ゴンザレスに負ける前から見えていたものが、試合から離れることによって多少マシになっていた。

だが、やはり。

試合を前にした幕之内には焦りがある。

誰もが見ていてイラつくほど、昔との心意気が変わっている。小難しいことを知りすぎたのだ。バカの1つ覚えに頭ふって、基本を軸にボクシングしてる頃のほうが強いと言える。

そう内心で評する鷹村は、こういうときに発する言葉を1つだけ知っていた。

「バカ野郎！ウジウジ考えるのはテメえの性分じゃねーって話だろうが！

リングの上から離れて忘れたか、いや忘れてんだなガハハハ！」

それは、単純な目標を与えること。

「1ラウンドだ」

「え……？」

ポカンと口を開ける幕之内に、大声で繰り返す。

「1ラウンドでK.O勝利してこい!!!俺様の4階級制覇が成る日だぞ、それくらいの気前の良さを見せやがれ!!!」

「は、はい!!」

眉間に人差し指を押しえつけ、出入り口のほうに放り出す。

バランスを取ろうとフラフラする幕之内に、ぽんと手を置く手が1つ。

「話は終わったか？ならばいくぞ小僧！」

鴨川は、もう次の試合の準備を整えて待っていた。

振り向いた鷹村に、先の声に負けじと返事をする。

「はい、行つてきます！」

通り過ぎる足音。

ようやく安息の時間が訪れる。

「一歩、踏み込んでみろ。"その覚悟"くれエしてんならよ、前が見えなくとも立ち止まる暇なんざねえぞ」

ぶつきらぼうに吐きすて、鷹村はゴロリと寝転がった。

緩む口元は、いったいどんな予感があったのか。

見たものは沈黙のみだ。

沈黙に答えを聞けど、返事はない。

そのころ、ホールでは歓声が響き渡り新たな幕を開けようとしていた。

幕之内 一步VSアントニオ・ゲバラ

騒乱とも言うべき青木のK.O勝利がホールの余韻を良きものとしている。

間違いない、次の試合はタイトルマッチ。再びライト級王者となった王島 総司が相手。噂では彼に挑戦状を叩きつけているという。これを応援するほかになく、報われない結果が日の目を浴びる可能性に一憂する観客たち。

騒めきから数分、青木への興奮を語り合った彼らは次第に口数を減らしていく。

更なる激闘を求める熱が、観客の期待に込めて光を抑え込む。

反抗するように、一筋の注目を浴びる扉へと視線が惹きつけられた。

「いよいよだよだ二」

決闘の扉から漏れ出す光は、誰にとってもこの日で最も待ち焦がれたものと言える。

『ここまで白熱の試合が続きました後楽園ホール。先輩2人の勢いに乗るのは、いま最も復帰を望まれているこの男だアー!!!』

なぜならば、鷹村 守の世界戦以上に期間が空いていたからだ。

『ファンの間で引退するのでは？と不安の声が出ていました。世界前哨戦で敗北、リングの上から姿を消して3年が経とうとしています』解説の声に耳を傾ける観客の脳裏に、3年前の幕之内の敗北が過ぎる。

『彼の敗北は2つ。最初の負けは日本ボクサー界を牽引してきた男、伊達 英二によるものです』

惜しくも、そして新たな幕開けになってくれる。そう願ってから3年、ついに来たこの日に思わず口元が綻んだ人は少なくない。

『その再起戦、我々は目撃した。一回り成長し、更なる武器を手に堂々と復活する姿を！』

扉が開かれる。

ゆつくりと、静かに、控えめに光がホールに差し込んでくる。いま

から入場する人物のように姿勢の低い、不思議な感覚を漂わせていた。

『ならば、2度目はなにが起こる!?』

今宵注目すべきは、その一点に尽きます!』

そして男は、光の向こうから現れた。

『風神、幕之内 一步ここに帰還!!』

朗らかな表情、落ち着きのある足取り。

両グローブを口元に寄せ、軽く左右に揺らしながら入場するさまは、いつか見ていた頃の幕之内と変わらない。

観客は、そんな彼を大声援をもって迎え入れた。

「幕之内待ってたぞおおお!!」

「遅いんだよバカヤロー!」

「本物だ、ついに本物が帰ってきた!」

重なる声に、上半身を揺らしながら幕之内は応える。

「ありがとうございます、頑張ります!」

右に左に上に下に、深々と頭を下げながら身体を動かし続ける。

「不器用かーっ!」

「ウィービングしながら挨拶してるぜあいつ!」

「やる気十分じゃねーか!」

WBCから勧告を受けるまでの3年間、幕之内はひたすらに己と向き合い続けてきた。

ときには衝突もあり、なかには甘い時間もあった。3年という刻、多くはやはりボクシングと向き合う時間となる。

鷹村は言った。

“人外の者だけが棲む場所”

世界の頂点を目指す者たちをそう断言した。

幕之内に、お前は違うと言ったのだ。

“人のまま踏み込んでくるな”

悩んで、どうするのか分からない時間ばかりを積んだ。

再起戦に臨む前、その線の前に立った。

その答えは、試合の結果となる。

『彼が再起戦に選んだ相手は、同級世界ランク8位!』

続けざまに告げられる、世界の扉。

『フィリピン王者として1年と半年、5度の防衛後にタイトル返上。世界10位の選手と対戦。6ラウンドK.O勝利を納めてから注目を浴び、1試合ごとにランキングを1つ登っています』

光の向こうから、朗らかな顔の青年が姿をあらわす。

(僕たちには力が足りない。)

お金も、経験も、そして大人たちの複雑な事情だって絡んでいる)
『敵地慣れしている彼に緊張は見当たりません。それは幕之内の強打にも臆さないと意味なのか!?』

(あの世界”元2位”に退かないキミを倒せば、もっと僕たちは成長できる。)

絶対に勝ってみせるよ、みんな)

悠々とリングに入り、準備を終えるゲバラ。

両者がリング中央へと歩み寄り、審判の話のあと、グローブを合わせる。それで戦意を確認するや、コーナーへと戻っていく。この試合、2度と挨拶を交わすことがないと確信したからだ。

『世界へ再始動する幕之内。左利きとの対戦は初となります。この試合、全くもって予想が付きません!』

最終ラウンドまで長引くことがない意思確認。

K.O勝利で幕を閉じる気迫そのもの。

試合に臨む姿勢は、両者互角。

『試合開始のゴングが鳴る!』

リングサイド、先に行動を開始したのは幕之内。

相手がコーナーから離れていないうちから、リズムを小刻みに取り、全身を使い左右へと揺らす。距離が空いていることは些末な問題であり、0秒後にいかなる攻撃が降りかかろうと全て避けるつもりでいる。

すでに迎撃態勢が完了していることは、ゲバラですら理解できるほど。

「いつも通りの幕之内だ」

「あのウィービング見ると落ち着くな」

「ああ、後樂園ホールに来たって実感するぜ」

再起戦、ブランクは3年間。話に聞くそれらはすでにゲバラの念頭から離れつつある。幕之内がみせる油断のなさは、同級WBAの頂点に君臨する男、リカルド・マルチネスに通ずる恐ろしさがあるからだ。強固に閉じる両腕、止まる様子のない振り子運動。決して基本を厳かにしない、鴨川トレーナーの教えを貫き通す。差し合いを直前にして相手の堅実さを、ゲバラは垣間見た。

静かに始動する駆動音が、両者の緊張を段階的に上げていく。

サウスボイ（左利き対策はこれまでやってきた。大丈夫、会長を信じるんだ）

対角線上。前に飛び出すのは右腕。

鏡と向き合うような感覚は、幕之内にとって試合で初めての体験。国内ランカーレベルの左利き選手を呼び、経験を積んできた。だが、彼らに共通することが一つ。幕之内の豪打を前にして、1ラウンドと持たなかった。

故に、世界ランカーともなれば別次元の話であり。幕之内が頼るものは、会長との左利き対策の猛訓練となった。

（ピーカブ・スタイル。聞いていた以上に圧が重い）

呼吸を繰り返すごとに前へ。

（先に僕からいく。大丈夫、いつも通り…）

的が大きくなる代償と引き換えに前へ。

（ここだ、足を止める！）

射程圏が重なるうともさらにに前へ。

（行くぞ、絶対に譲っちゃいけない！）

二つの影が中央へ飛び出す。

音が鳴る。

響く重低音から連想するものは痛々しい映像。人が車両に跳ね飛ばされるような感覚を観客は味わう。だが、ここに通路はあれど道路はなく、当然だが自動車は走っていない。

ソレがボクシングという競技で鳴る音なのかとリング上に目を向ければ、ゲバラの右拳ジャブが幕之内のガードに深々と突き刺さっていた。

「な、なんつう音だ!？」

「相手の右拳が鳴らしたのかよ!？」

「あんなの食らったら、いくら幕之内でも…」

もはや肉の音はどこにもない。

骨と骨が衝突した。試合早々でありながら継続できるのかと不安がはしる。3年間のブランクにより、試合感覚はどうに無くなってしまったのか、と。

事実、幕之内のウィービングには足りないものがあつた。

左利きを相手にしたときの距離感を間違えていた。結果、ゲバラのジャブは最大の威力を発揮する地点で着弾する。

(~~~~ツ!?)

(も、もう届いた)

完璧なジャブを放つゲバラの口元は歪んだ。

触れたものの感触に、思わず表情に出てしまっていた。リングの上では決して触れるはずのない、鉄のように硬いもの。グローブ越しに、あつてはならない鈍器が隠されているのではないかと。

(違う…これは、間違いなく手だ。手なんだ…)

全身に鳥肌を立てながら、目を見開いた。

そんなものはない。不正などの類いはないと理解できる。だからこそ、この拳で打たれた自分を想像して生唾を飲んだ。

(近づかせちゃいけない!)

(構うな、このまま入り込むんだ!)

迫り来る赤い壁は、恐ろしいほどに人である。

めり込んだ右拳を引いて、次弾装填とバックステップの信号を身体に入力する。思考の挟まる余地もない当然の行動、鳥肌も関係ない迷いのない状態から。

ステップインが巻き上がる緊張の音を散らし、閉じる両拳の奥から力強い危険信号が鳴る。

1ミリたりとも離れることなく、赤い壁はゲバラの目前で静止する。

ゲバラの右足より外、奥に踏み込んできた幕之内の左足が発射台の

完成を意味していた。

(折り畳まれた!? ジャブこれに密着できるのか!?)

(気をつける、この人も世界ランカー。絶対にくる…)

ゲバラの右拳と幕之内との距離はゼロ。

緊張が走る。誰もが知っている。この距離で幕之内がどこを打つたとしても敗北勝利目前必至。

『な、なんといきなり密着ウウウ!!』

出るのか、いきなり決められるか幕之内!』

ゲバラは、幕之内という選手のことを少なからず知っている。世界ランカーとなったことで得た情報網から、限りなく最悪に近い相性だとは分かっていた。彼ほどのパンチ力に迫るフェザー級ランカーはいない。

(開幕だ、退くな、左ストレートなら!)

(僕のボクシングを、やりきるんだ!)

パンチを受ければ敗北濃厚、だが。

ならばこそ、これにカウンター右を被せる。

その実績は、すでに証明ゴンザレスが実践したされている。

「流石、世界ランカー。若くしてフェザー級8位に登りつめるだけの判断力じゃ」

「ええ、勇敢なるゲバラ…。絶対に攻めどころを間違えず、勝負どころを逃がさない」

立ち向かうゲバラを見て、鴨川と八木は驚きの声を出した。

「一歩くんのデンプシーロールですら、彼は突破の糸口を掴んでくるでしょう」

「だからこそ、3年のブランクに相応しい相手と判断した」

右拳を握りしめる鴨川が見つめる先。

リングのなかでは、同じ拳を一步が握っていた。

右拳の装填を終えた。

眼前で見るだけでも肝が冷える光景を前にして。

(…だ!)

ゲバラは、覆い被さるように左拳を振り抜いていた。

相打ちだとしたら、意識を繋ぎ止めるための心が必要だ。リング中央から弾き飛ばすつもりで左を握ったのだ。それだけの覚悟を胸に秘めなければ、真正面から迎え入れるなどできはしない。

心持ちにおいて、ゲバラの行動は幕之内の先をいった。開幕最大級の火力が放たれる、その予感には幸か不幸か的中——。

(いくぞ！)

——的中、していた。

リングを踏み捻り、目下の火薬庫が最大速度で谷を描き、急停止する。

間一髪、真下を通り過ぎる黒い大砲。不発の左が物語るものは、グローブの色と同じ危険信号。

世界は広く、我流のボクサーもちらほらと点在する。異色な存在である歴代の人物と比較しても、いま幕之内が見せる姿などリングの上で見たこともない。

左足が飛び退いたかと思えば、右足で懐に踏み込んだ。ここまでのならよくある話だ。しかし、ゲバラの左ストレートを避けるためにウイービングし、右足一本でバランスをキープするなど。地面ストレスを頭が滑空し、浮上する姿にゲバラの脳は追いつけていない。

(ウイー、ビング！踏み込んでたじゃないか!?)

試合前より幕之内が最も警戒しているのはゲバラの左。世界ランカー3人を切り崩した左は、映像越しですら直撃すれば敗北という確信に至る。

「ゲバラの判断力はピカイチじゃ。」

しかし、だからと手が出せないほど小僧の踏み込みは甘くはない。左を被弾することなく打つ。これに尽きる。

ゲバラの予感的中が逸れた原因は1つ。

幕之内には、鴨川との練習の積み重ねがある。

たったそれだけのこと。

これまでと、なにも変わらない。

(しかも、なんだその体勢は……まさか、右足だけで打つつもりか!?)
(会長のミット目掛けて！)

幕之内の脳裏によぎる、練習風景。

”左利き相手でも自分のボクシングを押し通してみろ。

左回りでダメと思えば右に行くんじや。

思いきりぶつかれ!”

「いけ、小僧!」

練習の成果は、こうして現実と重なる。

視線の先。

(右!!!)

幕之内の拳を受け止めた鴨川の顔が、ふいに綻んだ。

ボデイの内と外で、拳大のモノが爆発する。

人間の生命機能はあつという間に泥と化す。肉片でもなく、部位欠損でもない。いつそ失くなってしまえと思うほど、イタズラに課せられる荷重。

一瞬、なにが起きたのか分からない。

取り返しのつかない事態に、恐怖だけが脳髄に突き刺さる。

ガ、ッ!)

一瞬、宙に浮く。

それでようやく、内側から昇る衝撃に気づく。

なにをできるものでもない。揺れる景色の向こうは、砂嵐を映していた。

ことの末端を地獄の苦しみによって知った身体は、うつ伏せにリングへと沈んだ。

『か、かか開幕ダウンを奪ううううッ!!』

3年ぶりのヒット、3年ぶりの豪打、3年ぶりのダウン。

一瞬に凝縮される幕之内の懐かしい姿に、観客が黙っているはずがなかった。

「この音だよ!これが聞きたかったんだ!」

「待ってた、待ってたんだよこれを!」

「まつくのうちいいいいいいいい！」

『たった10秒、大砲1発によって悶絶の世界ランカー⁸!!!』

これが幕之内 一步だああー!!!』

拳を突き上げ、ある者は立ち上がり、やがて波長が重なっていく。幕之内の名を呼び、ホールの外にも轟くほどの勢いを生む。

とうの本人は、歓声よりも先に鴨川のほうを向いていた。

(どうじゃ小僧。世界の波は見えたか?)

(見えました、会長。ありがとうございます!)

おもて面には出ない喜びを、頷き1つで確認する。

この調子で飛び込んでいけ。

はい！終わらせてきます！

そんな会話を終え振り向く。

ゲバラの状態は、レフェリーがストップをかけてもおかしくはない。い。

歯をこれでもかど食いしぼり、首筋を浮かび上げながらも身を起さず。なぜ立ち上がれるのか、と。きみの悪さを漂わせながらレフェリーの顔を覗き込んでいた。

(来る……ゲバラさんの目は、試合を投げ出した目じゃない)

幕之内の確信は、レフェリーの合図とともに現実となる。

『なんと続行だ！ゲバラ立ち上がるが、しかし足が覚束いていない。ダメージは深刻だ！残り時間でケリを着けに行けるか幕之内ッ』

早期決着の予感に、ホール中が声を張り上げだす。

僕のボクシング

『開幕10秒、幕之内の超変則ボディブローによってゲバラがダウン！辛うじて立ち上がり試合が再開しましたが、果たして1ラウンドを凌げるのか!?!』

その身体は、10秒前とは打って変わり、死に体と成り果てつつあった。対角線上で始動する足踏みを聞くだけで、膝が折れそうになる。

『幕之内やはり飛び出したーッ!』

いまにも嘔吐を繰り返したくなるほどの不調に陥り、あごと足先に強力な引力が発生したかのように身体が縮こまる。

万全な体勢で臨んだ男とは思えない変わりように、観客たちは大興奮の声をもつて応える。

当然だった。

アントニオ・ゲバラにとってここは敵地^{アウェイ}。

「相手は小柄だ！ジャブで牽制して、バックステップで距離を取るんだア！」

味方は背後から指示をくれるセコンド。

そして、遠い地で自分の帰りを待つ人々の情景のみ。

歯を食いしばり、現実にも目を向けろと己に激を飛ばすしかない。そうしなければ、必然的に負けが決定するからだ。

(ジャブ…ブ…ういゃ、あれに、効くのか!?!)

突風が吹き荒れる。

一撃。どの部位をもつて守りに徹しても、たった一撃で貫いてくる。理不尽な災害級の拳を前に堪らず1歩下がっていた。

ボディに打ち込まれた一撃は、心の芯をも削る。

(止められる自信が全くない。打ち込まれた痛みが、僕の右拳^{ジャブ}を否定するよ…)

それでも、^{風の前の静けさ}所詮はその程度でしかない。

(左、大砲で迎え撃つしかない…。はなれるオオ！)

なぜならば、超至近距離において幕之内から発生するモノを一言で

表すのなら、竜巻。

目の前で巻き起こる風は、触れたが最期終わるモノ。通過上に立つことは自殺行為に等しく、やり過ぎすほかに手段が見当たらない。

しかし、ここはボクシングの舞台。逃げ場など、誰一人として用意されることのない戦場である。

(?!?)

リング上の空気がねじれる。フェイント、リードジャブ、ロングフック。あらゆる牽制は、巻き起こる竜巻の前にはあまりにも無力。絶えずウィービングをしながらゲバラの周囲を移動する幕之内は捉えられない。

甚大な被害から放つ拳は、なにより斬れ味がない。

空振りしたジャブの真上を、暴風が駆け抜ける。

(避け、——ギ!?)

咄嗟に上げた左ガードに、幕之内の左が突き刺さる。

くらり、膝が笑う。

竜巻に抗うことが叶わない。

それでも、一途の望みがあると信じて目を開く。

(拳は、どこだ……いや、どれだ!?)

眠気とも言えない脱落感。一発をガードするだけで心身が削れていく。

幕之内の、全くもって容赦のない動き。右から左から、ときには地面から飛び出すように突風が身体を攫いにくる。油断のなさ、そして停止しない様子にフェイントすら実弾に見え始めていた。

(見、ろ……拳を、見つけろ……っ!)

次々と巻き起こる竜巻。

左利きだから生かされているだけの猶予。右ガードが、ほんの僅かながら試合の終わりを先延ばししている。

ゲバラはそれを分かっていた。

そこに甘んじるようでは捉えられるはずがない、と。

(視界が霞む……どれが正しいのか、分からない)

全身を丸め、レフェリーに止められないように被弾を最小限に足を

動かす。ギシリと内側から嫌な音が鳴るが、構っていられるほど時間がない。1ラウンドの間であれば無理を通せる、そう思い込んでひたすら抗う。

(愚直、真摯、根性。死に際を歩く戦い方を…捨てたんだね、君は。資料とはもう別人…)

2度、3度とガードに叩き込まれる。

歯を食いしばり、折れるものかと顎をひく。

「なんだあれ!? ずっとデンプシー・ロールをやってるのか!？」

「いやあれウィービングだろ!? あんなに動けるかよ普通!」

「いけ幕之内っ!」

世界への挑戦は、いつもこうだった。

周りは敵だらけ。

(この期待に、僕は潰されて、しまうんだね…)

それでも、世界の麓ふもとにまで迫るだけのセンスがある。どれほどピンチであろうとも、相手は同じ麓を渡り歩く者たちに変わりはない。この手が届くときがくる直感がある。

ゲバラは、何度もここから勝利への糸口を手繰り寄せたのだ。

ガードの隙間から見た景色。

赤い拳が右から左へ放たれた。

『フック炸裂ウーっ! ゲバラの身体が左へ大きく崩れゆく!』

(…いや、いや。彼の右は…彼の、左は…!?)

数度打ち込まれた拳から、恐怖とともに握りしめた確信。根拠はない。しかし、培われてきた勘は、ここにきて最も信頼できる希望へとなった。

薄れゆく意識のなか、ゲバラは。

(……こゝに、来る…!)

勝利を掴むため。

嵐の障壁に向かい手を伸ばした——!

『寄りかかるそこは死地!』

ついに逃げる場所もなくなった!』

コーナーに張り付くように整える。

肩幅より広くとる足は、入ってこいと相手を誘う。無理なく、最大限打ち返すように構えた。

極端な話、コーナーに沿えば左利き対策のポジションニングなど関係ない。ゲバラのように外への道を塞げば、ど真ん中しか残らないからだ。

ゲバラにとって最も優位な体勢で、何度と決めてきたカウンターを仕掛ける絶好の機会。

(なにかを、狙っている…！)

(いつも、通りに…！)

届かない拳が、1度だけ届くのなら。

意地を張ってでも、恐怖を噛み締める価値がある。

予測不能なウイービングにも即座に反応できるように、左ショートフックを選ぶ。潜れば右の振り下ろし、守れば右であごを打ち上げて勝負に出る。過去から学んできた幕之内という選手は、一分いちぶの隙がある。

右の一撃は、必ずまた打ち込まれると。

(思い出せ、会長との練習を！信じて踏み込むんだ！)

(みんな、信じて待ってくれている。だから、動けっ！)

両者が、信じる者のために拳を握る。

互いに、力の限り踏み込んだ直後。

先に拳を放ったのは、ゲバラであった。

真正面へ飛び込んだ幕之内と、距離を計り左を真横に一閃。直撃の感触はない、と確認する間もなく右を打ちおろす。もはや目標を見えない。ウイービングすると確信があるから放てる拳は、現実となった。

(そこは、空いていたじゃ、ないか…！)

突き刺さったのはガードの上。

渾身の一撃は起き上がる幕之内を怯ませるに至らず、ならばと。ねじった腰を勢いのままに振り返した。

想像していなかった反撃を前に観客が息をのむなか。

堅固に守られる頭部を横目に、ゲバラは限界を迎えた。

(ありがとう、っごいします…！)

全て、ガードできました、会長！)

(そん、な…丁寧なガード…、しら、なかった)

突風が右拳の下を通り抜ける。

苦し紛れのソレとともにゲバラの顔が後方へ弾き飛ばされ、リングの上にタオルが投げ込まれた。

ただ一瞬の出来事に、声を挟むことも表情を変えることもない。

ホールに伝わる爆発音が物語る、静寂に潜む興奮。

「ゲバラという男の知る限りを身体に染み込ませてきた。土壇場で狙う手段は、賭けのようなパンチを繰り出す。

小僧は己のどこが狙われやすいか、ずっと自分の試合を見つめ直しておった。きつとそのときは、過去の試合を参考にするだろう、とな」

レフェリーは慌てて幕之内の腰に飛びつき、試合の勝者を教える。

「相手の土俵に一度上がらなければならぬ理由などない！我が道を押し通してこそボクシングじゃ」

「二歩くんの妥協を許さない練習は、それだけで驚異的な仕上がりを見せてくれました」

それで、ようやく竜巻はおさまった。

入れ違いでホールから湧き上がる歓声と祝福の数々。

『き、決まりました…！ラウンド27秒、試合終了です！』

顔を上げた幕之内が思ったことは、謝罪。

(ごめんなさい、会長。)

新型デンプシーロールは、まだ使えません)

人外の者だけが棲む場所、その境界線を前にして。

幕之内は右足で、木陰となった境界線の片隅を踏んだ。

こうやって、いつの日か。

人外の境界線を塗りつぶして、鷹村さんのもとまで行きます。

そんなメッセージを込めて。

(だって先に、報告したいことがあるからです)

もう1つ込めたメッセージがあるのだが、これは後日。

いまは、喜びの限りを口に出す。

「会長！ぼく、まだまだボクシングができます！」

満面の笑みで伝えられる報告。

晴れ晴れとした表情に、鴨川はゆっくりと、我がことのように喜びを噛み締めて首を縦に振り答えた。

「……………うむー！」

幕之内 一步。

1 R 27 秒 K・O 勝利！

W B C・W B A ランキング 8 位獲得！



「やりやあでできるじゃねーか。勝ち気 120%、それだけでいいんだよ。」

“余計な意識”はリングの上に不要だ！

控え室、鷹村は呟いた。

表情も、声の抑揚も、言うまでもない。

勝利を祝うものなのかは、本人のみが知るから。

「世界、ちったあ見えたる。そつから先はビックリするくれえ早いから気を緩めんじゃねーぞ」

ベンチから起き上がり、右拳を握る。

幕之内は言ったとおりのことをやった。

モチベーションは最高頂を迎える。

この熱気を、ようやく解放するときがきた。

「さて…次は、俺様の番だ」

後樂園ホール、最後の試合がついに始まる。

はじまりの分岐点

ときは3階級制覇よりも前にさかのぼる。

WBAミドル級チャンピオン、リチャード・バイソンの試合に鷹村はK・O勝利で幕を閉じた。

日本人重量級統一王者の誕生に、祝福の言葉が次々と並んだ。不遜な態度を差し引いて、世間がボクシングにより熱い眼差しを向けるようになり、より上の階級へマツチングする機会も恵まれる。

当の本人も、相変わらず傲慢さをひけらかしながら一歩たちをこき下ろしていた。大魔王の名に恥じない横暴さは健在どころか、加速していく一方である。

良いことづくし。

被害者は生まれるものの、世界へと触発されるボクサーが増えたことは間違いなく事実。大魔王の行進、唯我独尊は生涯止まることを知らなかったはずだ。

しかし、しかしである。

はじめの一步の分岐点
この物語のIFが、ここから先にあるということ語りなければ、真に始まったとは言えない。

「負けた………?」

ジジイは、タオルを投げなかったんじゃないか
それは。

ふとした拍子に、統一戦のビデオを観る機会が訪れたとして。

「投げたタオルが、青木と木村に回収されただけって言うのかっ!?

なんなんだそれはああああああっ!!!

あのクソジジイ、んなことしてやがったのかっ!」

はつきりと記録された、とあるワンシーンを鷹村が知ってしまったとしたら。

「お、俺が……負けたと思われていた。

あの牛野郎に、俺が………!!?」
天狗になった鼻は折れ、ようやくIFは幕を上げる。



失意の底。

鷹村の心境を片付ける表現だ。

ゴミが散乱する自宅の隅に一人。

深夜3時を過ぎようという時間だというのに、眠気はまるでなかった。

窓から差す月のあかりに照らされる瞳には、人としての精気や覇気がない。現実を見ていなかった。繰り返して脳内で流れる、リチャード・バイソンとの試合。リングの中と外。自分視点とカメラ視点を照らし合わせながら、屈辱の瞬間は20回目をむかえた。

「……………!!」

歯ぎしりの音が響く。形にできない悔しさが胸の奥で暴れまわる。

「認めねえ…」

負けを。勝ちながら負けたことを。

会長の期待に応えられなかった時間があつたことを。

結果も、過程も、無意味に変えていたのは自分だったことを。

この発端は、書店で見かけた1冊のスポーツ雑誌。

ガセ記事、粗探しを書くことで有名なソレの表紙に、また自分の名前が載っていた。普段は目にも止めないのだが、珍しく気が変わったのだ。

どんなケチをつけたのか、内容次第じゃ乗り込んで騒いでやろう。暇つぶし程度にそう決め手に取った。

5分後、スポーツ雑誌は散り散りとなる。

“本当は負けていた!”

「んな、はずが…!」

“投げ込んだタオルのキャンセルは有り?無し?”

「ば、馬鹿な!？」

「鷹村は最強なんかじゃなかった!」

「この写真……マジ、なのか?」

会長がタオルを放り投げた瞬間。

タオルを協力して掴んだ青木と木村。

僅か2枚の事実が、鷹村の心に深く衝撃を与えた。



その日から、3人と真正面から話すことができなかった。

湧き上がる怒り。誰に対してのものか分かっている。そして、それを振り撒くことは、鷹村の自尊心が許さない。

楽しくない。青木を、木村をバカにしても昔ほど楽しくない。

程なくして、木村が突如、引退する。理由は語らずとも、減量苦が大部分を占めるのは明らかだった。

青木は、試合数が激減した。負けはしないものの、惰性で続けているのは分かっていた。

幕之内は療養の名目でジムに顔を出さない。ときおり顔を合わせるののはホールか国技館。会話は続かない。

板垣はよく分からなかった。ジムに顔は出すものの、黙々と練習をしている。なにかを考えながら、板垣じゃないボクサーの動きをする。

「なんだ……オレは、なにをしているんだ」

次々と鴨川ジムからは人が離れていき、次第に活気も遠のいていく。会長の顔もかんばしくなく、シワは増えているように見えた。

分かる、寿命が見る見るうちに縮んでいる。誰のせいだ、なんて聞く必要もない。なんせ、どうすればいいのかを分からない。

表現できない苦痛から逃れるように、次の対戦相手とのシャドウボクシングを行うようになる。

多いときは、日に100試合を超えた。

減量苦と向き合うには、これしかなかった。

そして、さらに刻は流れる。

鷹村は1つのケジメをつけに鴨川ジムを訪れる。

理不尽さはなく、理性と知性を取り戻した一人の漢として鴨川と対面した。

「会長、WBAのベルトを返上してくれ」

前を向くことしかできないと気づいた。

前に進まなければならぬ。これまで背負い込んだ余計なもの含めて、ガチャガチャ音を立てながら駆け上がる。

やるか、やらないか。結局、それしかない。

「理由を聞こう」

この日、人知れず。

「認める、あなたのボクサーでも負けるときがある。

オレだって完璧な人間じゃなかった。以上！」

鷹村は1つの敗北を胸に刻んだ。

「鷹村……」

ずっと、うえを見ていた。

世界の頂上に登り詰めると、ふもとの景色は見えなくなる。

「まだ遅くはない。防衛戦と突き放した後輩の面倒、同時進行じゃバカ野郎。」

オレの目だぞ。

鷹の目だ。欲しいもんを見るための目が、よりによって地上を見れないでどうするっていうんだ。

「おう、朝飯前だ！」

人の目には分からない1つの黒星。

後輩が背負い、その苦労を越えてきたもの。

大魔王の皮は剥がれ、先陣を行く漢を取り戻していく。

後日、WBAミドル級タイトル返上とともに、WBCミドル級防衛戦を発表。防衛後、WBCミドル級タイトルの返上とスーパーミドル

級への挑戦を宣言し話題を呼んだ。



さらに刻は流れる。

「お、俺の………右目ッ!!!」

鴨川ジムの地下リング、鷹村は一人で膝をつき、右目を抑えていた。全身には噴き出さんばかりの汗。

「っ、ついてる……?!いい、いやそれよりも……」

荒れた呼吸で、己の正常を確かめる。

「イカれ始めちゃいると思っただが………こりや、マジでどこまでもつか分からねえ」

大きいため息を吐きながら、誰もいない部屋で一人呟いた。

鷹村がイマしていたことはシャドウボクシング。

次の階級、ライトヘビー級に君臨する最強の男をイメージしたものの。

スーパーミドル級に上がってからは、対戦相手をイメージして毎日シャドウボクシング、家ではイメージトレーニングを積んでいる。

そのために必要な対戦相手の情報を集め、試合のDVDもあらゆる場所から取り寄せている。

そして、ティム・フェザントと最初のタイトルマッチを行った。

ライトヘビー級のウェイト、79kgに合わせた己をイメージ。過去の試合からフェザントの全盛期まを創り臨んだ。

フルラウンド戦い、4度のダウンを奪い、3度ダウンした。結果は判定勝ち。壮絶な試合の代償として、精密検査により網膜剥離と診断、引退した。

ここまで悲惨な結果は初めてだ。スーパーミドル級タイトルマッチでさえ、8ラウンドKO勝利から始まったというのに。

(……まじか)

未来を閉ざす無様さに呆れる。

全ての選択肢が引退の岐路に立っていることを深く理解した。

サンドバックを叩いてジムを出た。

家について明かりをつける。

家の中には見渡す限りDVDと雑誌の山。

“無敗神話を破るのは誰だ!?!?”

“パウンド・フォー・パウンド第1位に輝くのは”

“1年目達成!!? たった1つのクルーザーの冠”

“重量級王者たちとの格差”

“リカルド・マルチネス⑥”

“レクス・アンダーソン④”

“レイヴン・ザック⑧”

“スナイプ・ロア②”

『フェザントには、ギアを上げるといふ概念がないのだろう。30戦を超える試合でステップを刻んだことがない。

待っていても口に入ってくる食料。対戦相手にはそんなイメージしかもっていない』

『驚くことに、後退したこともない。つねに前進し、その驚異的な攻撃で試合を終わらせている』

『一撃必殺を狙う挑戦者も多いが、どれだけ緻密に計算して狙おうと彼の前では無力。ジャブを打つこともできずにリングを去るばかりだ。そして、彼らの心を最も傷つけたのは…』

『彼は壁が大好きだ。よくロープやコーナーを背負い戦う。よほど心地がいいのだろう。彼は歓声を嫌うから、ファンの近くで試合をしたという気がないことだけは間違いない』

穴が空くほど読んだ雑誌の文書、擦り切れるほど再生したDVD。

一つのDVDを手にする。

題名は“タイム・フェザント④”とだけ。

シャドウに続き、鷹村 守はタイトルマッチを行う。

現実と遜色のないイメージトレーニング。毎日毎日、魂を削るよう

なボクシングのゴングを鳴らす。

何百回と観たティム・フェザントの試合から、完璧な勝利を掴むために。

それから、イメージでの試合数が400を超えてから試合数は覚えていない。

言えることは1つだけ。

タイトルマッチ当日の朝。

最後の試合を行い、いまの自分の肉体を再確認し、4R2分20秒でK.O勝利できるという確信。1年間の積み重ねてきたイメージが、納得の結果をもたらしてくれる。

不敵な笑みとともにホールへ入場した。

タイム・フェザント

幼いころから、フェザントには波紋が見えていた。

水面に落ちた雫から発生するように、森羅万象には波紋がある。

人の善し悪し、物の価値、果ては明日の天候に至るまで。

一挙手一投足に微かな揺れが存在する。

物は動かずとも、真価に適する揺れをする。

これら全ては体感という域にあるため、本人以外が知る由はない。

物心つく前から波紋について話していたフェザント。両親は、このことを神さまからの祝福だと喜び、波紋の本質をフェザントの身になつて早々に理解した。

子のために成せることを。という心情を掲げる人間だからできたのだと、のちにフェザントは考える。

「人と話しなさい。物に触れなさい。将来、かけがえのない財産となり幸せを掴めるから」

両親は休日のため、多くの場所に連れていった。

世界を旅して、美しい自然と触れ合い、数えきれないほどの人と話をした。善良な人から、犯罪者に至るまで。誘拐中の人間を見破ったこともあれば、テロを目前にした男を説得したこともある。

安全と危険を交えながら、波紋の見方を深く理解するのに10年は経っていたという。

人と接するほど感情の起伏や行動が読めていく。物の真偽も、本物の美術に触れていたから贋作を見抜くのは容易い。

あらゆる感情が解ることから、自分自身の表情はおざなりになっていた。ちよつとサボるつもりが表情筋は硬くなつてしまった。そんなとき、父親はこう言った。

「よく聞くんた。いまは見えるものだけに頼っているが、人の本質は心にある。いつか、お前の波紋が通じない人間が現れる」

言葉を聞きながら疑問に思うことはなかった。

ここまで出会わなかっただけ。自分のような人間がいるのなら、対となる人間もまたいる。

「我々に絶対はない。その目も、限界がある。そのとき戸惑うだろうから、落ち着いて呼吸をするといい。これまで学んだことを思い返すんだ。」

失敗や負けが世界に存在するのは、とても必要だからだよ」

父の言葉を聞いたその日から、フェザントは青年としての行動範囲内でアメリカ国内を探し回った。そんな人間がいるなら見てみたい。話せば自分をさらに磨くことができる。

ある日、机の上に積んだ本を見た父は驚きながら観察する。

「これは……ああ、見ればわかる。本だ。SFにミステリー、スパイとジャンルもバラバラ。なかには料理本まであるのか」

ここで自分の考えを読めるのだろうかと興味が湧いたので、フェザントは、これらに共通することを父に問う。

質問に頭を回すこと3分、無言だった父は答えた。

「著者、だね」

感嘆の声を漏らすフェザント。理由も聞く。

「お前を育てていなければ、或いは司書でもなければ分からない。これらの作品の著者は、みな現役だね。誰一人も筆を置いていないだろう？」

正確に言うと、会える人物だからこそ読んでいる。どうだ、正解か？」

参った、とジェスチャーで答えた。

本の文章から、波紋が通じない人物を探していたのだ。

波紋が見えない人物を書いた著者であれば、本人もまた波紋が見えないと考えた。なんの根拠もないが、フェザントには己の勘に絶対の自信を持っていたため、なんの問題もなかった。

そんなおり、彼は1冊の本を見つけた。

それは、小さな王の物語。

ありふれたファンタジーであり、誰もが好む展開。いつも正しく、彼の後ろには誰しもが付いていく。

少しだけ違ったのは、王の意思をおおやけに語らなかつたこと。1つだけの正解を設けず、読者に想像力を魅させてくれる。

物語では、王が登場すると波紋はピタリと止む。節々にも、王が介入する場面では波紋が薄くなっていた。ついに見つけた。

綻んだ表情は、著者にアポのため連絡をしたとき崩れてしまう。著者は、不運にも持病の悪化で連絡をした日の早朝に亡くなっていたのだ。

波紋が消えることを知った。

しかし、方法は分からない。

ヒントは“王”。ならば、探すほかない。

現実世界に、物語の王のような人物を探すようになった。

さまざまな手段がある。いくつもの将来を選べた。

限りある人生の時間だからこそ、1つのことに時間をかけることが大切だと知っている。仕事という膨大な時間を費やすものに、慎重になるべきなのだろう。

しかし。街中で見かけたボクシングジムが目に入ると、激しく揺れる波紋を見て己の生涯歩む道を確認した。

産まれて十数年。物事を即決したのは、この日が初めてだった。

以後など語るまでもない。

フェザントは、その才能を存分に発揮している。

試合間隔3ヶ月を止めたことはなく、対戦相手も選り好みしたことがない。フェザントを倒せると豪語するボクサーがいれば、西へ東へ行き、そのたびに相手の全てを引き出してきた。

一切の感情を表に出さず、ただ波紋の揺れに注視し続け己の世界に没頭する。

形容のできない特殊なさまは、やがて野性の勘と表現される。

不特定多数に打ち明けたわけではないため、周囲がフェザントの目のことを呼んでいるわけではない。自然と、超人的なデイクフェンス能力を評するのに適した言葉がこれだった。

そんな彼をファンたちは『無感の王』と呼んだ。



後楽園ホールには、フェザントのことを良く知る関係者が続々と集結する。ライトヘビー級タイトルマッチ、観客動員数の3割がフェザントのファン。

対戦相手はパウンド・フォー・パウンド第5位。

いま最もボクシング界に激動をもたらす男。

鷹村 守の存在に、フェザントが深い興味を示していると察したからだ。

パウンド・フォー・パウンド第3位、現役被弾率ワースト1位と十分な肩書きはもつが、それでも対の人物をまだ見つけていない。

なぜ世界王者なのか、それが証明される日になる。この防衛戦の決定後、フェザントはそう答えた。

こうして。

フェザントの王を探す旅は、日本へと踏み込んだ。

ライトヘビー級タイトルマッチ 記者会見

試合前日の計量は両者問題なく通過した。

一言も会話はなく、記者たちの声にも応えることはない。

無言で語る。いまは待て、と。

誰も、鷹村へと口を開ける者はいなかった。

時間は過ぎ、夕暮れ。

某ホテルにて、両者は再び顔を合わせる。

記者会見、ただ2人の王者へと向けられる注目。

先ず記者の口から飛び出したのは、やはり鷹村に対して。ライトヘビー級タイトルマッチへの意気込みだった。

「折り返し地点になる。スーパーミドル同様、アキシデント無くさつさと試合を終わらせてやる。見たいだろ、5階級目」

その返答は、記者会見に臨む者たちの誰もが鷹村のコンディションが整っていることを確信させるもの。減量苦も緩和され、肉付きは頼もしさを数倍に膨れ上がらせている。

記者たちの期待が膨らむなか、次にマイクを握ったのはチャンピオン。

国籍はアメリカ合衆国、身長185cmと鷹村よりやや低めの白人。目元まで伸びる、空気を含んだ金髪。

彼の瞳は、ただ黒い。映すものは日常風景であり、これからも変わらない日々が続くという当たり前。となりに座る鷹村という男への認識であり、視線が1度も動くことはない。

開いた口から発した言葉には、やはり抑揚がなかった。

「彼の次の試合は同階級WBAタイトルだ。

栄光に輝くベルトを腰に巻いて、4階級制覇という偉業は成される」

過去のフェザントの記者会見をなぞるだけ。

言葉は違えど、鷹村への敗北など考えもしていない。

記者たちは肌で感じる。ブライアン・ホークやデビット・イーグル、かつて鷹村が大苦戦した相手と同じ。一筋縄では終わらない人物が

そこにはいるのだ。

「俺様を相手にどこまで引つ張れると思ってるかは知らん。だがな、グローブ付き合わせんのは試合前の1回だけだ」

「……ああ、ライトヘビー級では1回だ。」

この試合を最後にクルーザーに行く。また拳を合わせに来い」

鷹村は翻訳を聞くとフェザントに視線を向ける。相手は微動だにせず、腕を組み、記者会見が終わることを待っていた。

この場にこれ以上の意味はない。あとは拳を突き合わせることだけを考えて、鷹村は口を閉ざした。

愛想笑いすら浮かばない、張り詰める緊張感。

記者たちの額の汗が顎から落ち始めたとき、記者会見は終わりを迎えた。

最後に立ち上がり、歩み寄る両者は視線を交わした。

いや、記者たちからは交わしたようにしか見えなかった。

「……………」

互いの瞳には、明日の試合の光景しか見えていない。

交わしているのは拳。いつ顔面を捉えるのかを、水面下で黙して狙っていた。

「……鷹村ッ」

鴨川の制する声はハッキリと聞こえている。

「王とは、なんだ」

ぼそりと呟くフェザント。

言葉の意味を理解した鷹村は。

「貴様が王の座を降りるときにすれ違うヤツ」

視線を外すことなく答えた。

「オレ様だ」

「……………」

数秒後、同時に踵を返す。

真反対に歩き出す両者が会場を離れたとき、異様な緊張感が記者たちの首元から離れていった。

「な、なあおい。いまのって…」

ティム・フェザントの瞳と、鷹村 守の闘争心が。

「ああ…どっちともK.O宣言していったぞ…！」

試合前日にきて勝利予想を眩ませた。



ライトヘビー級タイトルマッチ当日。

第1試合開始数分前、後楽園ホール出入口で。

「ま、待って…この人混みっ、のまれちゃう！」

「……モタモタするな」

スーツ姿の列を横切る肩が並んだ男性が2人。

片や顔にいくつもの裂け傷があり、さらに気味の悪さと恐ろしさを備える表情。自然と人が空間を作っていくタイプだ。

もう片方は柔和かつ端整な顔で、先を歩く男とは無縁そうな出で立ち。外を好まず、部屋にこもり読書に耽るイメージがある。

強面の男性は難なく列を抜けるも、もう片方は列の勢いに負けて流されつつあった。

「き、聞こえませんかよ沢村コーチ!!なんて?!」

「はあ……」

「ぬぐっ、ちよほんとに東京の人ってなんでこんなに歩くの早いんですっ！」

やっとこさ抜け出たときには、沢村と呼んだ男性はホールのなかに入ろうとしていた。たまらずゼーゼーと息を吐く。

「帰宅ラッシュに巻き込まれてんじゃねえ。あれくらい掻き分けろとかげ疾景、そのための拳だ」

「ぜったい違いますよ、コーチの指導はときどき間違ってます」

疾景と呼んだ青年をよそに、そんな荒々しい言葉を吐きながらホールのなかへ入っていく。

「けど、この試合をタイトルマッチ観る意味は俺にも解ります。

すっごく勉強しろってことでもんね！」

「行くぞ、もう試合が始まる」

「メインイベントだけ観るんじゃないや……あ、なんでもありません。いま思ったことは口に出しません」

スツと持ち上がる沢村の拳を見て、とかけ疾景は身を引いた。

（幕之内のファンっぽいもんなあコーチ。あくまでも自分を負かした相手なのに、よくもまあ二タリ顔ができるもんだ）

思考すら読んだのか、沢村は目を細めて呟く。

「ふん……名古屋から来たのは遊びのためじゃねえぞ。ベルトの獲得合点する相手の視察も兼ねてる」

「——木村 タツヤ」

とかけ疾景は内心で木村のことを羅列する。

引き分けを最後に姿を見せなくなっただと思ったら、およそ1年と半年後に復帰。怒涛の試合を重ねて最後の日本タイトルマッチに熱を注いでいる、30近くのベテランボクサーだ。

しかし、しかしだ。

たしかに遅めの全盛期を迎えてはいるが、この目で見ておく必要性は感じない。コーチのカウンターを受け継いだ俺なら……。

「不満か？あんなヤツ、と思ってるだろ？それでも見ろ。4ヶ月後、この意味を痛感する。目に焼き付けておけ、ヤツらの目を」

「目、ですか」

「勝つヤツの目を知っておけ」

言い終えた沢村は席を探しに行く。

目のなに見るのだろう、と考える疾景は数秒遅れて後を追った。

鷹村 守VSティム・フェザント

ホールは幕之内の完全復活に興奮冷めぬといった様子で、ざわつきが絶えない。

宮田が階級を上げたとき、幕之内がリングに戻らないという根も葉もない噂が不安を煽っただけに尚更だろう。

あと1つか2つ試合をすれば、次は世界の頂きに臨む可能性もでてきた。日本中が揺れることは間違いのない事実である。

だが、今宵の主演は幕之内にあらず。

ホールに散らばるライトが観客たちの意識を戻しにきた。

『皆さん、お待たせしました。ただいまよりメインイベント、ライトへビー級タイトルマッチを開始します！』

前座、全てが一味違った。

頂点へと向けて一心に駆け上がる。全員がその熱をもっている。観客たちがあてられた熱は、中毒性のある厄介なもの。メインイベントともなれば、タガが外れんばかりの熱狂へと変わるに違いなく。

『まずは挑戦者の入場だアア!!!』

なにもかもは、不敵な笑みを浮かべる最強の男のためにこそ。それぞれが贈る応援歌ともいえた。

入場口が開かれた瞬間、煙が全方位に四散する。鷹の羽ばたきによる伝説の幕開けは、3人の贈り物を手にしたことを意味した。

『満た3階級制覇しようされても、満た一切をK.Oしようされても、なおも空腹だと詠うたう。現代に生きる大

魔王は今宵、飢えを満たすために一つの階段を駆け上がった！』

入場口から吐き出す煙を巻き込みながらリングに駆け上がる姿は、まさに観るものを惹きつける存在。

最強の戦績と最凶の破壊力を持つ男。

『32戦32勝32K.O!!』

WBC・WBAミドル級王座統一戦以降ダウン無し。

『スーパーS・ミドル級タイトルマッチではチャンピオンを圧倒。成長の底知れず、試合のたびに強くなる！』

男たちの憧れを一身に備える姿は、魔王。

ああ、ならば。彼について行く者たちは皆、どこかタガが外れている。彼の敗北など想像もしない、夢を見続ける幸福の最中。邪魔が入るなど疑いもしない。

『ここは地上四合目、我々の知る鷹と思うなかれ。最新の両翼が後楽園ホールに熱風を巻き起こす！』

日本の鷹が、頂上への一步を踏みしめたっ！』

鷹のユニフォームが全身を包み込む。

重力に従いゆらりと鷹村の全身を覆った直後、両拳を突き上げて咆哮した。

「いくぜ4階級制覇!!」

即座に反応する観客たち。

鷹村に合わせて拳を突き上げ、思い思いに声を張り上げる。

「待つてたぞ鷹村！」

「この勢いに続けえええー！」

「負けるなんて思ってたねーよー！」

熱狂が常にピークを迎える。

前座の試合の興奮冷めることなく。全てを加速装置に変えて、夜の雰囲気を目方につけた。

『鷹村の声に観客が応える！会場が鷹に染まろうというとき、青空は夜へと様変わりだ』

暗転する空。

即座に赤へと塗り替わるホール。重低音のドラムが心拍数を掴み、ホールの雰囲気を強引にも注目させる。

『日本の鷹^{最強}を沈めに來たるは、^{アメリカ}米国の王者！』

解かれた扉の向こうに、一筋の眼光。

現れる影を視認した観客は一同が生唾を飲み込む。

『無味・無相・無流・無敗……。あらゆる感情を表に出さないがゆえ、彼の底を見たものは誰もいない。』

あまたの試合に臨み、2階級制覇達成するもなぜ、実力が未知数と言われているのか。

その理由は戦績にある！』

悠然と響き渡る足音。

次いで色を帯びる全容。

黒を基調とした黒い波模様が刻まれるロングシューズ。蒼いボクサーパンツの両サイドに黄色い縦線。

白い肌と空気を含んだ金髪は見るものを惹く質感がある。そして、見たものは視線が交差した瞬間に目をそらす。黒く、誰も踏み入ったことのないほどに深い、暗い海の底を思わせる瞳に怯むからだ。

『38戦38勝、K.O勝利数はなんとたったの2!』

「ポスターのK.O数は間違いじゃないのか!？」

「嘘みたいな戦績だ!これまでのチャンピオンたちに比べてずいぶんと、なあ…?」

「そんな非力なチャンプさつさと倒しちまえ!」

宮田 一郎は呟く。

「……あれが、無感の王か」

静かにリングへと向かう男の顔を見て、思わず息をのんだ。宮田にとって、フェザントのカウンターを鷹村がどこまで封じることができなのか想像できないためだった。

『ほとんどの試合がフルラウンド、神経張り詰めるリング上で生き抜く男。しかし侮るなかれ、この戦績だからこそ歴代最強と謳われている!』

「嘘だろ、どうしてそんなやつが!？」

「ライトヘビー級って、K.O連発してなんぼじゃねえのか!？」

「わけわかんねえよ!」

解説について観客が反応する。

宮田は、観客たちか理解していないことを責めはしない。もし知ってしまえば、試合開始前のいま、これほどの熱狂ぶりを見ることは叶わない確信があるのだ。

『過去最大の異彩を放つ王者がリングイン!』

WBCライトヘビー級チャンピオン

ティム・フェザント

VS

WBCライトヘビー級1位

鷹村 守

役者は揃った。

リングでは、試合開始のゴングが鳴るそのときまで、両選手が口を開けることはなく。

「いつも通り、行ってこい鷹村！」

「最強の鷹を撃ち落として答え合わせといこう！」
ただコーチの言葉に1度頷くのみ。

ついに、終夜の第1ラウンドの幕が上がった。

1秒後の生存

戦いの幕が上がり、瞬きの刹那すら視覚情報の遮断が許されない3分間が始まる。

向かい合う両者は、正四角形で囲まれた檻の中でありながら、構えることなく視線を交わす。重心移動、腕のリーチ、漏れ出る殺気までもを読み取り、先手をうかがう。

リング上の雰囲気は拳が慣れる。手のひらに空気を握り、最初に構えたのは鷹村。徐々に中央へと歩を刻み、いまだに観察を続けるフェザントへと飛び込む機会を待つ。

開始10秒、中央へと到達したとき。右足親指でリングを押し込み、仏頂面を崩すために駆け抜ける準備を整えた。傍目からはその挙動を見抜くなど至難であり、悟らせることなく懐に入り豪打を見舞う自信が鷹村にはあった。

飛び出す直前、フェザントの懐に入り込んだイメージを先に走らせた。

「
」
同時に。

グローブの紐を鷹村へと見せて、頭部を隠すように構える。グローブの奥から覗かせる瞳に迷いはなく、構える時間内で懐に入る余裕はなかった。

(……んだよ、そこまで読めるのか。目は合わせねえくせしやがつて、変な野郎だぜ)

コーナーを背負うことなど、不利な状況ではないという自信。狙っていたタイミングを逃し、その場で狙いなおす。

そして、多くの観客は困惑した。フェザントの構えが、これまで見てきたボクサーの構えとは似ても似つかないことに。

利き手を顎に、そうでない手を前に構える攻防兼用のスタイルが主流。どの階級だろうとチャンピオンの多くがそんなスタイルを選び、ボクシングの歴史を築いてきたのだ。

「直接見ると、威圧感が凄まじいですね」

ボクサーのスタイルに数あれど、“手のひらを相手に向け続ける”ボクサーはそういない。

ピーカブスタイルの幕之内 一步とは真逆。そして、これこそフェザントが王者たる理由の一つ。

「ストッピング。相手のパンチを伸びきる前に止め、リズムを断つための技術。タイミングを間違えれば一気に攻め入られる、ハイリスクな防御じゃ。」

下手がやれば伸ばした腕なんぞ弾き飛ばされる。しかし、フェザントは達人の域を超えとる」

プロアマ問わず試合のなかで数度使用する場面は見られる。しかし、フェザントは違う。ストッピングを軸に試合を行う。

「野性の勘を手綱にする男。」

鷹村が挑戦したストリクス・ワールが、減量をしてまで対戦を避けていた理由じゃ」
元スーパーミドル級チャンピオン

鴨川は胸を張り、鷹村を真っ直ぐに見る。

前評判を越えてこそ我がボクサーだと信じているのだ。

「それでも、鷹村はスーパーミドルのころから準備をしておった。この開幕を打ち崩すために……。動くぞ！」

コーナーを背負うフェザントが1歩前に出る。

互いの射程距離が重なり、顔面を捉えるまでとなる。そこから鷹村も半歩刻み、ついに大砲が的へむけて装填を終えた。

都度5度、射程距離に入ってから鷹村が殺気を込めて打ち込んだ回数だ。フェザントは全てに手のひらを合わせてきている。そこには瞬きすら割り込めない遅延があった。

そして、6度目。

鷹村のイメージがフェザントを捉えたと同時に、それは完了した。

(いくぜ——)

それ即ち、フェザントの僅かな隙間を狙い打つための先制である。

何百、何千と繰り返した先制。そのなかから選りすぐる鷹村のジャブは過去最高に澄まされ、光のような速さを実現する。絶対の自信を

持って、コンマ数秒の拳を放つ。

『緊張の間を強烈な打撃音が吹き飛ばす！』

鷹村が重い沈黙を——』

ジャブの発射と同時に。鷹村の自信は、鷹村自身の勘によって否定された。否、それを肯定しては甚大な被害が出ることを解ってしまったのだ。

(———っ)

左拳にのしかかる隙間なき壁。

殺意すら覆う技術。出鼻を挫く、その体現。懐に入った影を視認していない。対峙する男は、それをやってのける人物だという認識がある。だからフェザントの右拳が見えたのは、後付けに過ぎない。

繰り出したジャブは影。そう放てば理想という、それだけの偽物。鷹村の迫力が見せた幻影は、間もなく消え失せた。

(———ちィ!!?)

衝撃地点から響き渡る炸裂音は、瞬きの間に2度巻き起こる。不意の行動に解説は無意識に言葉を合わせる。だが、最後まで言いきれない。

『な、なにが起きた!? 両者ポーズは変わらず！』

しかし2度の打撃が会場に響いたのもまた事実！』

音にだけ反応したものの、リング上の景色はさほど変わりがない。狼狽えながら解説するのをよそに、鷹村は射程距離から離脱する。

(ジャブを……！)

俺様のジャブを止めた拳句、アッパーだとお)

手応えのない左拳、刃を捌いたかのような痛さの残る右拳。

鈍い打撃音2発は鷹村の懐で鳴り響いた。

ジャブが発射台から打ち放たれる……腕の伸び始めを抑え、ジャブの力を利用してフェザントの手首が鷹村の顎へと上昇。鷹村は、それを右肩を内側に畳みこむことで小回りの利く拳で弾き飛ばした。

(くそっ、しっかり見てたのにストップピングされちゃった。しかも1ラウンドのパンチに合わせてくるなんざ、今までなかったじゃねえか!!)

目を見開き、オーピングヒットをいまかと待ちわびる観客は困惑した。どうして鷹村が退いているのか、理解ができないからだ。

仕方がない、ここは世界。

動作一つに理解を深める間もなく、戦況は常に進み続ける。

(そつちがどう来ようが、当たる弾を見極めてやる)

細かく刻むステップの1つに合わせ、先ほどよりも鋭さが増す。次こそは打ち抜いた、と打った瞬間の確信は再び虚無へと落ちていく。

『う、打ち始めを止めている!?なんと鷹村の超光速ジャブが、いとも容易く封じられたアー!!』

前移動に注いだ左拳の力が、容易くフェザントの右によって押さえ込まれる。そして、鷹村が次弾を装填する間に打ち上がる赤い拳。右ロングアッパーを、スウェーにより紙一重でかわした。

『なんとそこからフェザントのアッパー!およそ人間の技とは思えないが、これが歴代最強の理由!』

(つ……このアッパー、風圧だけでヤバいと分かる。下手に当たりや^{まぶた}瞼切れて目が血で塗り潰される)

だが、それ以上は退かない。

ストツピングの攻略こそが山場だ。1秒でも早くヒットを奪い、勝利の鍵を握るほかに試合を終わらせる方法はない。

2度目のジャブは見切られていた。

アウト^長レンジ^{距離}をこれ以上見せては、のちに使えなくなってしまう。即座に判断を終え、1度目同様、ミドル^中レンジ^{距離}へと踏み込んだ。

『鷹村再び踏み込んだ!果たしてフェザントのストツピングをすり抜けられるか!』

ジャブの軌道に割り込むかたちで、ゆらりとフェザントの右が這い寄る。そのさまは形容しがたく、死角の外から近づかれたように反応しづらい。

覆い被さるフェザントの左。3度目、打ち上がる赤い花火はスウェーにより空振る。後ろに移動した重心は、大砲の射程距離が十分であることを確認。

(まずは、抉じ開けるつつっ!!?)

右ならば、ストッピングが届く頃には押さえ込めないほどの威力に達する。一分の無駄なく放たれる、トツプクラスの鷹村の右ストリート。

右足がリングを捉え、親指の付け根から回り、腰から脇に威力を伝達。最後に届く右拳は、装填完了時点で最大威力と遜色なく。命を奪い去る勢いで、右ストリートは打ち出された。

右腕が半ば伸びたところを、フェザントの左拳が打ち止めに割り込む。直後に轟く爆発音。

「~~~~No way」
越えやがった

吹き飛んでいくフェザントの左拳。

しかし鷹村の右ストリートも伸びきることはなかった。左右の挨拶が済んだと、攻撃の手は次の動作に移る。

気味が悪いのは、フェザントは眩きを残しながらも表情を変えないこと。

(狙い通りだ、顔面吹き飛ばアす！)

後ろへと背中が逸れて不安定な姿勢。

これならばストッピングも意味をなさない。鷹村の左は小回りをし、間に合うはずのない側頭部テンポルを狙う。

ストッピングの範囲：鷹村のポーディングを乗り越える。伸びた左フックはもはやガードするしかなく、この距離、姿勢でその心配はいらない。

鷹村の左拳は最高の形で開幕を飾った。

リング上で描かれたのは、横と縦の赤いクロスライン。

『相打ちイイイっ!! オープニングヒットは両者同時! 視線がリングの外を仰ぐ!』

(ぐっ、あ!?)

左フックの内側から突き上がる右アッパー。

手打ちではない。不安定ながらも、しっかりと腰の入った拳。その意味を分かるや、脳裏に過ぎる後輩の顔に再び背を押される。

視線が戻る。ひるむ様子は微塵もない。

様子見は終わった。当初予定していた通り、下積みの時間へ動きを

転換する。

(強いだけじゃ、この境界線は越せないツ。凶々しいヤツのテリトリーは、俺様の手元まで届きやがる)

弾数を増やし、徐々に回転を上げながらストップピングの限界を測る。

(それに……)

「フェザントは前半をストップピングで様子見し、試合のリズムを完全に我がものとするボクサーじゃ。それが、これまで後半でしかみせたことのないカウンターを挟んできた」

鴨川が過去のデータとの違いをあげる。

(野郎の気が早エ。これまでのデータ全部覆した。

36分もリングにいる気はないらしいな)

耳に聞こえずとも、鷹村もまた同じことを考えていた。

「鷹村を迎撃するために入念な準備をしてきておる。それほどに隙がないと判断されたのだ、いまのあやつは」

(俺様がそのことを考えないワケないだろ。

すぐにぶち壊してやるよ、その鬱陶うっとうしい壁を)

拳の準備を整える。

狙うは一撃、そのために放つ数は千を覚悟した。

ジャブ一発足りとも同じものは用意しない。角度を変え、速さを変え、間隔を変えて。右を交え、あらゆる手段で壁を壊し、流れを手にするために。

『様子見もほんの一呼吸、すぐさまミドルレンジで勝負を挑む鷹村!』

赤い点が走る。

僅かに下から打ち込まれるジャブは、しかし。拳に手のひらを重ねる、たったそれだけの壁に阻まれる。次いで迫るのは、壁が槍となり押し寄せるカウンター。

打ち、止められ、首を回し、また打つ。鋭く、鈍く、真正面から打ち抜くすべを探す。被弾はカウンター、こちらは打つ手が不発。

(くそがっ。狭い箱んなかで拳振り回してる気分だ)

それでも、打ち続ける。

フエイント一切無しの正面突破に捧げる。
打った数だけ跳ね返る拳。

左右のコンビネーションは続かない。ストッピングとカウンターにより即座に寸断され、肌を掠めるたびに後退させられてしまう。フエザントがゆらりと詰め寄ったとき、勢いのないジャブを放った。たちまち閃くストッピング。ハンドスピード任せのカウンターが飛び出す。鋭利な角度で顎を狙う拳を、腰を回して軌道から逸らした。頬の皮一枚掠め取られながら、右拳が王の顔へと駆け上がる。

響く重低音。固い感触を確かめる間はない。眼前に立つフエザントが肩でブロックしたと分かった。ヒットしていないという確証だけを得て、ならばと。

(ボデイがガラ空きだ)

ストッピングが外れた左の1cm先はフエザントの腹。視線を落とすことなく、足腰を回せば捻れが生まれる。一気に最大出力に到達した拳は、一撃でボデイを貫くため放たれた。

「ポス、という音。」

わたで殴ったような、ボクシングに相応しくない衝撃。

(なんだよそりゃあ!?)

左ボデイを止める可能性は考慮していた。それでも、ゼロ距離射撃をボデイで吸収されるとは予想外にもほどがある。

『なんと！ミドル級でイーグルを悶絶させたボデイが、フエザントには効いていないのか!?!』

「違うっ！やつめ、ボデイ打ちに合わせてさらに踏み込んでおった。いまのもストッピングの1つということじゃ!」

理解したとき、すでに遅かった。噴き上がる右フックに咄嗟に反応するも、勢いは流せない。

目に見えて分かる被弾。フエザントが先にクリーンヒットを奪い、追撃が幕を開ける。

左に揺れる鷹村の視線の先には、フエザントの左拳。危険だと分かりながら、避けられる余裕はなく。一直線に打たれるジャブは3つ。

(ぶあー！クソが拳が硬え！)

ストツピングの柔らかさはどこにもない。貫通力に特化した左を
まともに受け、頬から血が伝う。

ジャブの入れ替わりに来るものなど確認するまでもない。咄嗟に
固めた顔の右ガードに、間髪入れず打ち込まれるフェザントの大砲^右。

ガードの意味を辛うじて果たし、鼻からの微量の出血と、後方に弾
かれる引力で被害を押しさえ込んだ。

『ガード』と弾き飛ばされる！

やはりストレートの音は寒気を誘発させます！』

もどかしい壁がそびえている。

攻撃力が晴天に届こうと越えられない、地の底のごとき壁。

(ふんっ。ひとまずは)

鷹の目は、着地点を見定めるように標的を眺める。

どんな場所であれ、越えられない壁はない。両翼を静かに畳みなが
ら視線がそう語っていた。

『ここでゴング。第1ラウンド終了です！』

(イメージの1割程度の誤差っつーとこか)

ぐるりと肩を回しながら、鷹村はコーナーへと戻っていく。

フェザントは無言で歩き、両手のひらを見て目を細めた。



「間柴と沢村の攻防を思い出すな」

客席に戻った木村が呟く。

「沢村のやつ、間柴のフリッカーに最初はストツピングで処理してた
な、そーいや。けど、フェザントはあそこからもう1つ手が加わって
やがる」

「ストツピングから間髪入れずにカウンター。手首の筋肉がもちませ
んよ普通は」

青木、幕之内も頷きながら、実物のストツピングに目を見開いてい
た。

「ブライアン・ホークの上体反らしよりは現実的だがよ、あんな綺麗な止め方は見たことがないぜ」

「筋肉の使いかたに無駄がないだ二。筋肉を余さず使っているから、腕力や脚力だけじゃ実現できないことやってのけてるだ二よ」

猫田は細めた目で王者の強さを再確認した。

そこに、体幹だけなら鷹村を越えている、とも加える。

「あのチャンピオン…。とんでもないモノを備えている。理屈を振じ伏せる類の武器を」

—
—
—

「そう暗い顔すんな。想定範囲内ってやつよ。ストップピングがちよいとばかし上をいつてるくらいか」

コーナーに戻り開口一番、鷹村は言う。

「貫くのは難しかりう。フェザントのストップピングは、パンチを打つ瞬間を確実に抑える離れ業。そこから力を込めようものなら、さつきよりも重いカウンターを返してくる」

「あんまりに見惚れる動きだったもんで、見逃しちまった。しつかりとオレ様を観てきてる」

鷹村の感心が対戦相手の強さを示す。

フェザントの動きに面を食らったという様子。

「小僧のスタイルと似ておる。あれなら左右どちらも止めに入れるな。」

それを、左の止め^{ストップピング}めは貴様の右だけに焦点を当てていた。その強打の意味を解っているからじゃろう」

「やり難くてしかたねえ！」

「早急にお主をマットに沈めようとしておる。相打ちの右でも退かなかった。しかし…」

鴨川の顔を確認した鷹村は立ち上がる。

「オレ様だつて無策じゃねえさ。そこんところは実行してきてやつから、どかつと立って待つてろ」

練習を積み重ねてきた。

試合で成果を見せ、表情を曇らせないためだ。

それを実行すると視線で伝え、第2ラウンドの幕は上がる。



客席の一角、さまざまな国籍の観客で埋め尽くされていた。

彼らはフェザントの知り合いやファン。

遙々^{はるばる}より、フェザントのインタビュー記事を読んでから駆けつけることを決めていた人たちだ。

彼らは驚きの声を上げていた。

「フェザントが、1ラウンドから被弾だなんて」

「ああ、私の記憶にはないよ」

「タカムラ、やはり格が違う」

フェザントが1ラウンドで被弾することは過去なかった。

みな、その事実を知っているからこそ緊張している。

今回の相手は普通ではない。とてつもない事件が起こるのでは、と。

それでも、声援を送ることはしない。

フェザントがそれを好まないと知っている。

ただ黙して、試合の行方を見守っていた。

波紋の障壁

1ラウンド、鷹村が与えたクリーンヒットはない。

3年間、苦戦のない勝利を見届けてきた観客たちは生唾を飲む。バインソン戦以来、イーグル戦に似た世界の壁がいま立ちはだかつている。リングから漂う重圧に、思わず拳を握りしめていた。

ともすれば、注目する点は1つ。いつ、鷹村が突破口を見つけるのか。観客の期待を背に、ゴングとともに鷹村が駆ける。

(たしかに、俺様の攻撃は通じてない。いまのやり方じゃ腕が疲れるだけだ)

鍛え、磨き続ける左が封じられた。

右は、それでもフェザントのもとに届いた。

やるべき道は、右で作っていくのだと誰もが思う。

(しかしだー！ストッピングから逃げたように捉えられるのは気に入くない。真正面から破る！)

鷹村は、こう考える。

右だけ、大砲しか打ち出せないボクサーが果たして恐ろしいか？

否。右を狙おうものなら、瞬きのうちに打ち伏せることができる。少なくともそのラウンド、1つの武器しか持つてこない相手にペースを握らせることはあり得ない。

無数の攻撃手段をもつ相手に、武器たったの1つ。それは、基盤から崩れつつある朽ちかけの斜塔。芯、そして心ともに貧弱に違いなく。誰がそんな道を通つてやるものか、と左腕を脱力させた。

2ラウンド先制、鷹村は外からのジャブを選択。

『ああっ！また止められてしまった！完璧なはずのジャブがチャンピオンに通じないっ!!』

無論、フェザントの前では長距離であろうと当たらない。

ストッピングと同時に踏み込んだフェザントは、顎に鋭く打ち上げる。赤い花火を視線で追った。拳の感覚がタイミニングを計り終えたとき、大きくバックステップした。

「おい、ジャブは止められるじゃないか！ほかの攻め方に変えろよ！」
野次が飛ぶ。

ここの住人たちは、なにか不満があれば即座に口から飛び出す。辛抱ならないのだ、自分たちの応援する背中が縮んでいく姿が。

「ああ、また止められるー！」

分かっている、その野次の意味を。

何十と飛んでこようと、その手で握りしめる実力がある。

野次には実力で応える、鷹村の流儀。

(なら、こうだ——！)

発射台に覆い被さる右手のひら。

左拳に影が現れたとき、発射台はその場で弾を“打ち終えていた”。

「——」

闇を穿つ爆発。

「越えやがったNo way……」

障害物の消えた空間へ、有無を言わさぬ第2射が撃鉄を鳴らす。

ガードが間に合うはずがなく、ついにジャブはフェザントの右頬を打ち払うことに成功した。

『と、突破ああ!! 2ラウンド2発目、鷹村のジャブがチャンピオンの壁を破壊したあ!』

「いまジャブ2発打ったよな!?!」

「う、うめえ……! 1発目でストップピング弾いて、すぐに2発目を打ったぞおい!」

「すごいです、2ラウンドでチャンピオンの鉄壁の壁を攻略しましたよ!」

体勢を整えなおすまでの約1秒、ジャブとフックを隙間に叩き込む。

右を合わせて挟んでみるものの、それが直撃することはなかった。だが、止められるのではなく払われた。

思考の隅にいまの攻防を置き、企ての成功を一気に加速させるため踏み込む。

「まだまだ二、右の警戒解くまで攻め続けるだ二!」

被弾しても足を浮かせることはなく、視線の端には必ず鷹村を捉えている。異様な空気を感じながら、左拳を放つ。

王の手のひらは、先ほどの感触を覚えている。五指が吹き飛びそうな破壊力、咄嗟のガードが間に合わない貫通力。

全て覚えた。次のジャブ、必ずストツピングを成功させる確信をもつ。揺れる波紋を見定め、右を伸ばした。

「^{チッ}tu^ッt——」

が、視線は気づけば左を向いていた。

ジャブで弾かれたあと、鷹村はフェイントを1つ混ぜフックを押し通したのだ。

『今度はチャンピオンの左を避けて着弾！右は打てずとも左がヒットを量産する!!』

(野郎、2度目で止めようとしやがったな!?)

んな早く適応されてたまるかあ!!)

左右でコンビネーションを組み立てていく。

なにをすればすり抜けていけるのか。見定めを行う余裕を無理やり作っていた。

フェザントのセコンドは驚愕の声を漏らす。

「たしかにストツピングの攻略は誰もが思いつく。だが現実に行うできるボクサーはいるはずもねえ。そう勝手に思ってた自分がバカだった」

セミロングの髪を掻きながら現実を受け止める。鷹村ならあり得ると考えていた。そのうちストツピング攻略を実行して、ヒットを量産していくと。

想定外とはまさにこのこと。2ラウンド初っ端に実行しきってみせるとは夢にも思っていない。

「タイムの反射神経が出遅れている……。ちよいと手数が少ないな。

聞けタイム!!前に出ろ、準備開始!!!」

フェザントへと指示を出す。

事前に準備をしていることが分かる迅速さで、聞き届けたフェザントも大振りの右で鷹村を無理やり引き離す。

(直感がビリビリ言いやがる、意識を集中しろと。

セコンドの指示で野郎の気が変わったか?)

構えを上げた直後。

これまで前に出ることに消極的だったフェザントが、左の構えを通常状態へと戻した。

このとき、初めて視線が交差した。

左が動く。

目がその信号を脳に送り届けたとき、鷹村の頬に左拳が触れていった。

「は、速いつー!」

王がこの試合初めて見せるジャブの速さに、鷹村はスウエーが間に合わず浅く受けてしまう。

鷹村の左と遜色のない速さにホールがどよめいた。

仰け反りぎみのところへ右が唸る。

肩を内側に畳むことで腰のひねりが少ないながらも左ガードを割り込ませた。鷹村は右を忍ばせながらバックステップを行う。

(……本腰入れて打ちに来たか)

王がこの機会を逃すはずがなく、左足を真正面へと飛び込ませてきた。追撃の左、読み通りのイメージと照らし合ったとき、同時に踏み込み背後から右を振り上げる。

ジャブの外から視界の死角を最短距離で駆け抜ける、オーバーハンドライト。数々の試合を終わらせてきたK・Oパンチの代表。これを鷹村が実行するのだ、止められるはずがない。

左の軌道が突如として直角に曲がる。左拳は勢いを殺すことなく、ぐるりと180度回転し、王の上半身もまた反りぎみに回った。

鷹村のオーバーハンドライトは頬の直上を通過し、重い空振りの音を鳴らす。

(やるじゃねえか)

「ひ、飛燕だ!ジャブをフックに変えて上半身を捻りやがったぞ!」

「オーバーハンドだぞ!見えてなかったはずじゃねえのか!」

(あからさまに見ていなかった。来るつつう直感だけで避けたのか?)

よそ見をする余裕がないことは本人が分かっている。いまのオーバーハンドを避けられたことよりも、避けられた意味に思考がとられてしまった。

(げ！野郎の大砲が見えん！まずいつ)

仰け反ったなら、反り返る。

背後に回した左よりも先ず前を向いたのは顔。正確には、鷹村の位置を把握するための瞳。

避けられない。サイド、バック、カウンターのどれもがこのとき間に合わないと確信する。左足先でリングを押し、目一杯に軌道から逸れながら首を捻る。

鷹村の目測とは裏腹に、王の射程距離からは辛うじて離脱していた。斜め後ろに避けようとしたことが功を奏したのだ。

だが、相手はフェザント。その瞳には、己の大砲が当たらないことは見えていた。大砲の着火は止めることなく、さらに敵地へと足を踏み入れていた。

「あそこからステップインじゃとお!」

スリッピング・アウェイ
首 捻 りは間に合わず。

正確には、右の直撃を受けてから無理やりに首を回したと言ったほうがいい。気絶しない程度の緩和で命を繋ぐ。

『直撃イイ！チャンピオンの射程距離が長いっ、鷹村首捻りが間に合わなかった!』

意識にすら直接雪崩れ込む大砲の衝撃。

(ぐ、ああ……!)

一気にロープまで吹き飛んだ鷹村。

しがみつくと余裕も惜しんでガードを上げた瞬間、壁を抉じ開けるための大砲が続けて打ち放たれた。

(腕が、痺れる……！サンドバックなんざシヤレにならん!)

腕に残る衝撃を顔に受けたときを想像し、防御態勢を前傾へ移す。フェザントのように身を寄せ、脱出の機を狙う。

ショートアッパーとショートフックはいずれも破壊力より連射、貫通重視。インファイトを望まない様子を確認すると、うち1つ。左アッパーに合わせてボディカウンターを狙う。

(~~~~~!?)

「~~~~~?」

鷹村の顔が打ち上げられ、フェザントの腹に鈍い衝撃が響く。

互いに強烈なパンチをもらいながら反対の拳を準備する。

次はフックとボディのクロス。歯を食いしばり、顔色を変えずに次を打ち出した。顔を、腹を、なにかを見定めるように全て違う箇所を相打ちしていく両者。

「どうして鷹村は打ち合いを続けるんだ!?

あのままじゃ前半で身体がボロボロになるぞ!」

はたから見ても異常、そして心踊る熱戦へと様変わりしていく。

どちらも退かない。退く選択肢を捨て、己の拳が最強だと独尊の限りを押し出していく。

「なにか、見つけ出そうとしている。あやつ、フェザントのなにかに気づいたから、相打ち覚悟でそれを探ろうとしておる」

4度目の相打ち、ロープを背負う鷹の身体が衝撃に耐えきれず左に揺れる。

「相打ちから先が拓けない。逆を言えば、その先のビジョンだけははっきりと見えておるのじゃ」

返すフックがガード越しの鷹村をコーナーへと叩き込む。磔台に上がるも、鷹村にはまだ先のビジョンが霞んでしか見えていない。想定を上回る不自由な戦いに、まだ全身の連携がとれていないのだ。

それでも迎え撃たねばならない状況下、歩み寄る王との間に影が1つ。

レフェリーが割って入り、3分間の死闘の終わりを知らせる。

(2ラウンド終わりのゴングか…)

王は相も変わら^あず表情を崩すことなくコーナーへと戻っていく。数度の後退をした挑戦者と、未だに後退しない王。

『第2ラウンド終了……。チャンピオンの守りを打ち砕いた喜びもつ

かの間、驚異的な判断と反射速度に挑戦者圧されてしまいました。どうする、ここから巻き返せるか鷹村!？」

王の期待に潰される姿に、観客はたじろぐことしかできなかった。



「ちくしょう、あとちよつとだったのにゴング鳴らしゃがって」

「そういうルールじゃろが。それで…なにを見つけた」

イスに座る鷹村に問う。

「どうにも気になんだ、あいつの前評判。野性の勘なんて言われてやがるが、どうもやり合った感じじゃ違う気がする」

鷹村も分かっているとばかりに答える。

フェザントを相手に謎解きをやる気はサラサラない。という考えに引っかけりを感じたことを疑問に思い、鴨川に解答を探す。

野生の勘、それは鴨川にとって未知の領域。

やろうと思つて身につくものではない。こればかりは助言も答えも導くのに日月単位の思考時間があるだろう。

「鷹村、1つ確認しておったな? ストッピングをするときと、そうでないときの違いを」

「ジャブに合わせたときはカウンター入った。恐らくは止めることもできるんだろうが、やらないってわけじゃない」

八木は疑問を口にする。

「えっ、どういうこと? だって鷹村さんの右を受けるなんて自殺行為じゃないか!」

「そうではない。右の衝撃を殺しておるからじゃろう?」

「……あつ!」

鴨川の表現で気づく。

1ラウンド終盤、鷹村のボディ打ちを軽減したときのことを。

「微妙に芯を外してやがる。気色わりの感覚だ」

「ストッピングと似た要領だろうが、真似できるものではない。じゃが、打ち合いは極力避ける。貴様の分が悪い。」

次のラウンド、行動パターンを変えてくる可能性は大きいぞ。様子見からいけ！」

鴨川によって送り出される声で、次も必ず戻ってくると心に決める。それは次のラウンドでは決着がつかないことを確信したのことももある。焦りはなく、下準備のために費やすことを選ぶ。

「時間も体力もまだたっぷりある。こんな序盤で倒れちまったらライトヘビー級に上げた意味がねえからな。

突破口をまずは見つけてくるぜ」

深呼吸を終えると、第3ラウンドのゴングが響いた。

唯一無二の宝刀

ホールの雰囲気は曇天のように暗い。行き先の見えない不安が心の何処かに隠れているせいだろう。

ゴングが鳴りステップを刻む鷹村は、そんな空を見上げて笑う。一筋の光が漏れていることを、誰も気づいていないことがおかしかった。

何度、この両翼だけで難攻不落の山を昇ってきただろう。無理をまかり通す、理不尽そのもの。

(性に合わないが……しのこの言う余裕もねえ)

あと少しの時間、この天候を変えることは難しい。曇天に触れるには高度も、勢いも足りない。

(ストップピングの届かねえところから削ってやる！)

ギリギリまで我慢して、一息のうちに全てを終わらせる。晴天へと変えるとき、試合終了の鐘を鳴らすのだ。それだけの大仕事でなければすぐに曇ってしまう。

鷹は勝負の一瞬を見極めるため、翼を大きく広げた。

『速いっ！階級をあげてもスピードは健在だ！』

開幕でギアを上げる。

フェザントが見せることのないステップで掻き乱し、流れをものにしてしまうという作戦。

1 撃目、高速のジャブは、しかしストップピングの前には無力。目で追ってもガードが間に合わないはずなのに、これが止められてしまう。続けて迫るカウンターをバックステップでかわし、再び左を構える。

2 撃目、ステップインとともに放つ。これは容易く反応され、右が覆い被さった。しかしである。サイドステップで直角に、外に回り3撃目を打ち込んだ。

(バレたか)

フェザントはカウンターを打たず、シヨルダーブロックではじいた。ここで右を振り抜いてもいいが、良くて相打ちになるのは目に見

えている。打ちどころが悪ければ最悪の事態もあり得る。

『なんと珍しい。鷹村、ヒットアンドアウェイでチャンピオンの隙を探す!』

「ふん、驚きもせんか。いまからやることを分かっているような腰の座りようじゃ」

小刻みに呼吸を繰り返し、その数だけ左を量産する。

前面180度、カウンターを掻い潜り打つ。打つたびに不自由さを感じ、身体に打ちかたの修正を入れていく。同時進行で右のフェイントを出し続け、ひたすら最善の方法を探す。

(なにかある。このウザったい壁に通用する方法はあるはずだ。完璧なら今ごろ神にでもなっつてんだろ!)

シャドウとイメージ、両方で重ねてきた試合との誤差。

1、2ラウンドでクリーンヒットは数発打っていた。ジャブの連射が決まれば、一気に畳み掛けることも想定できた。

フェザントは、右に対する警戒心が異常に高いのだ。左の止めがブラフに見えるほど、右に対する集中力は欠けない。

「随分と警戒されていますね」

鷹村の攻めきれない背中を見て、八木が呟く。

「過酷な減量を背負い試合に臨んだ鷹村は、世界王者クラスには一撃で試合を終わらせることができなかつた」

「逆に、ここなら…。減量苦が減った鷹村にはそれが可能と?」

篠田の言葉に鴨川は頷く。

「スーパーミドルのときから、鷹村はフェザントを倒すために準備しておる。3階級制覇は派手じゃない、と言ってきたときはどうするか迷ったくらいじゃ…」

「鷹村はスーパーミドルの防衛戦では極力地味な試合に徹底していましたからね」

「らしくない、と一時期言われていた。じゃが、そこまでしなければフェザントを倒せない。減量せずとも枷を付けていた」

スーパーミドル級タイトルの決着を思い出す。

派手なK.Oではなかつた。あれには、そんな意味がこめられてい

ただ。

「チャンピオンは、それを察している。自分に久方ぶりのダイナマイトパンチを炸裂させることを見抜いておる」

このラウンド、鷹村は外からの攻撃に徹底。

終盤はフェザントが前に出て時折パンチが交差するが、クリーンヒットはやはりなく。

「だから足を使っているのだ。」

次のラウンド、鷹村は勝負に出る。フェザントに自分のパンチを慣れさせない：同じものを出す前に勝負を終わらせるために」

両者の拳が、それほどの破壊力であることを暗に伝えている証拠でもあった。

3ラウンドの鐘によりコーナーへと戻っていく。



フェザントを出迎えたのは、セコンドのニンマリ顔だった。

「なあフェザント、オメーさん内心でご満悦だろ」

「……………」

「あれで満足しないわけねーじゃん。これまでのチャレンジたちはそろそろ青ざめていたからな。」

ストップピング対策は振じ伏せられて、かといってダウンもさせられず。いつまでこの地獄が続くんか？っつー恐怖がジワリと襲ってくる」

セコンド、カレリア・アーテは椅子に座るフェザントの背中を叩く。

「それがない。かな〜りあっさりとストップピングを破ってきた。あれを抑えるのは無理なんだろう？」

「……………」

「これまでのチャレンジはヌルい。」

オメーのレベルに揃えてこれないやつばかりだ。我こそは、と名乗りでてくるのは嬉しいけど、結局は泥沼から抜け出せない」

フェザントたちのインターバルは変わっていた。

無言で過ごすフェザントをよそに、ロープにもたれながらカレーリアは思ったことをつらつらと話していく。

これがいつものインターバルで、とくに作戦会議をすることはなかった。

「オメーが万が一の可能性を待つのも分かる。そのために12ラウンド、ひたすら相手を追い込んでたんだ。

だが、私は過去のチャレンジャーたちを忘れる。

あいつらとマモルは別だ。もう来るぜ。あのモンスターはヤバい。

私の読みでもK.Oするか、されるかでしか決着できない命運を背負ってるぞ?」

映画や面白い物、ときには愚痴だったり悪口。

そんな時間が試合中、計11分間。

フェザントへのアドバイスが必要なかつたとき、話すことができなくなった。そんなおりフェザントは、3分間の集中力をもたせてほしいと言いい、これが始まった。

細やかな楽しみがあるから、期待もする。

相手に、自分の見たい景色を期待してしまう。

また。

ごく稀に、こうして相手のことを考察することもある。天候の変わりにもありもしない期待を寄せている。

「判定勝負とは生涯無縁。なにせ、勝利に見放されることはマモルにとって引退と一緒よ」

「鷹が地に降り立つまで長引かせることはできる」

そして、ごく稀に。フェザントが口を開く。

「そりゃ羽根を捩^もいで、の話だろ」

「おれの目は、その結末を否定している。

あいつからは見たことがない波紋が見えるからだ。手を出せば不思議と新しい波紋が発生する。

おれは、おれ自身の成長を止めはできない」

珍しく興味を向ける対戦相手への、最高のK.O宣言を聞いてから

送り出した。

「そ。じゃあ野暮つたいことは止め。

切り札、久しぶりだからって出し遅れるなよ」



焦らされ続けた。

入念に下準備を実行する…それも年単位だ。辛抱を抑え込む理性の紐は、すでに先端からほどけている。

「っし」

第4ラウンド間もなく、鷹村はフェザントとの距離を詰めた。

放った左が止められたとき、拳を捻り右手を引つ掛ける。これでカウンターを封じる。

(全快で突き離す！追いつく暇なく沈めてやるぜ)

踏み込みと同時に右で斬り込んだ。

下から弾きあげ軌道を逸らして威力を殺された。

手応えがある。外からでもダウンさせるイメージはあったが、それで勝つには性分に合わなさすぎる。なにより、実際に手を合わせるとイメージやシャドウより僅かに上だ。

突き出した拳がストッピングを破り、着弾することで確信に近くなる。ここまでできて決めつけることができないのは、イメージのなかで何度も遭遇した場面があるせいだった。

「よし、行け鷹村さん！」

「決まる！…ここからコンビネーションに繋がれば…」

勢いついた直後。

鷹村の短距離ジャブが空撃ちする。

ストッピングを捉えることはなく、手元で止まるそのジャブの上空を、王の右拳が通過した。

(む、むっ!?)

打ち払われる頬に顔を歪める。

これだ。イメージで危惧した場面、フェイント。

『鷹村のジャブが空をきる！その隙にワン・ツーが決まった！』

「これもやはり、試合でやることが少ない。

「ぐぬ…実際にやられると厄介極まりない！」

「ストッピングですら気をつかうのに、そこにフェイントも混ぜると鷹村さんの負担は計り知れませんか」

フェイントが加わり、鷹村は目を大きく開く。

（こっからが本番だ。）

やつの打ち止め^{ストッピング}を破るためにや連射ジャブかストレート。

あつちは破られないためにフェイントを織り交ぜてくる）

最短、最速、最小の被弾で試合を終わらせる方法。

（それもこれも、全部フェイントで騙していく。）

その気色悪い顔をぶつ飛ばす条件は整ったぜ！

フェザントの全力を引き出し、右と右のカウンターで打ち負かす。

はやくも勝負どころと踏んだ鷹村は、ギラつく目で一撃必殺を狙い始めた。



赤い閃光が現れては散る。

鳴り止まぬ轟きは1つ1つ形を変え、数を相殺するように交差する。1つも衝突せず、1度も交差しないときはない。肉体を掠めるだけで心を削ぎ落とし、風切り音を聞くものには立ち上がる勇気を無くさせる。

息継ぎ、瞬き、口元、表情筋。

取り留めもない、試合中に役に立つかわからない情報までもを考察し、次の1打を放つ。繰り返すこと百を超し、縦横無尽に最善の道を進んでいく。

「ダメージ最小限にストレートが飛び交ってる…」

「なんでどっちも当たらないんだよ!？」

最短距離を最大破壊力で舞う。

論理的に成功する可能性あれば実行する。

不足分は気持ちで押し切る。

「打ったときの姿勢で次に打つ場所を判断してるんだ二」

理屈を飛ばした先。

直感と経験が全てを背負う舞台。

「お互いに相打ちじゃ満足できない。ここで退けば負け認めたも同然。ゆえに、そのときが試合が動くときだ二！」

前に突き進む両者が僅かでも退がるなど考えられない。退がらなければ、負かす。

『振り回す！お互いの大砲と大砲が肌一枚掠めるミドルレンジ。次の瞬間にヒットしてもおかしくはない！』

至極簡単で単純、しかし破ることが最も難しい均衡は。

『あ、ああ！』

鷹村のステツプインから崩れ始める。

『鷹村の目にも留まらぬ右がフェザントを打ち抜いた！』

きっかけさえあればよかった。感覚さえ分かればもっと早くに追いつめていた。

「ようやく、掴んだか」

「…」

それは、慣れ。

なんてことはない。フェザントの計り知れない“勘”を、鷹村の“勘”で理解してしまえばいい。

毒をもって毒を制す、とはこのこと。鷹村にしかできない、鷹村だけのフェザント攻略方法。

対抗できる武器を、あらゆる知恵と要素を駆使して先に相手に当ててしまえばいいのだ。

「オイオイ、簡単そうにやってくれるじゃん。いまにも後退しそうじゃないか、私の王サマは」

そして、先に当たったもの勝ちがフェザントも同じ。

「いいや、当てることは厳しかろう。これまでフェザントは似たことを何度もやってきた。それに対して鷹村は、必ず違う要素を取り入れている。」

慣れさせる前にたたき伏せるのが理想じゃ」

鷹村の勘は、真の意味でフェザントの勘を見抜いたわけではない。フェザントの姿勢、肩の動き、足の向きから打つ場所を予測。拳が飛び出した瞬間にクロスカウンターを仕掛けるもの。

足を止めて交差する拳、今度は先に出ていたはずのものが減速した。

後出しした鷹村の左腕へ右腕の肘が突き立った。強引かつ勢いが止まることなく成される早業。

(この野郎…！)

テメエが打たれながら冷静に分析しやがるか?!)

理屈は分からずとも、意図を読み取ることは容易。

デタラメな後出しで王門を潜り抜ける鷹に対し、王は自ら門にて撃ち落としにきた。

「なんじゃと。鷹村のリズムにももの数発で追いつくのか?!」

地上から放たれる一矢が、鷹の顎を急上昇させる。

「ま、甘いわ。打たれたモン見て解析するのはお手の物よ。

ああ、これまでこんなに打たれたことはないから、こういう返しは見たことなかっただろ？」

慣れを寸断する。流れを掻き乱す。

狙い澄まされた一撃から戦況が裏を向く。

それを肌で感じない鷹村ではない。

鷹の勘が見破るのに時間は要らず。

なおも王を越える拳を打つ。

「…はっ!? ヤローめ…」

『カウンターが難しいアッパーに、挑戦者アッパーで返す! 両者の顔が宙を仰いだ!』

「フックを打つ捻りが利かん状態で良い選択じゃ」

揺れる視線のなか歯をくいしばる。

フェザントは波紋が見えていないわけではない。

見えているが間に合わない。

鷹村の戦術は最短距離を駆け抜けて打ち抜く。もつと内容をつま

びらかにすると、殺気による幻を意図的に出していること。

(マモル、その殺気フェイントをどこで試していた)

過去のフェザントの試合からイメージトレーニング、シャドウボクシングをしていた頃の経験則で実現する殺気フェイント。

1つや2つではない。確実に10を超す幻がフェザントを襲っている。

(おれと、何度試合をした…)

全くの同時、動けば動くほどかさばっていく。鷹村の存在が無数の波紋を生み、フェザントの波紋は、その全てを拾っている。

否、拾ってしまっている。

(飽きるほどシャドウをやった。狂うくらいイメージした。おれ様が無様にリングを去る場面は10や20じゃない)

(まだ、完璧ではない…。しかし。握りしめている勝機を、確実にものにするだろう)

そんな事実を知るよしもない。ただ、最大の挑戦者を倒すために前に出る。

波紋にストツピングを充てがうのは間に合って半分。

そのどれもが空振り、かつて体験したことのないダメージが刻み込まれていく。

「嘘だろ…！タイムが、押されている!?!」

「まだ後退はしていない。迎え撃ってはいるが、マモルのパンチが次々と決まってしまう」

「まだ序盤だぞ?!?!慌てるんじゃない!」

カレリアの舌打ちが耳に届いた。

「ふん、オメーらタイムのなにを見てやがった。

あいつのこと知ってんならちったあ我慢してろっ!」

声は聞こえない。

やけに…落ち着いていることだけは分かっていた。

ミドルからインファイトへ。

鷹の進撃は門を越えた。

侮ってなどいない。だが、長く待ちぼうけだ期待が、怠惰に変わっ

ていたことを王は認めざるを得ない。全力を出していた。その全力にすら錆びがついていて。

『クロスカウンターがチャンピオンに決まったア！その破壊音に思わずたじろいでしまいそうだ！』

頬から落ちる血が神経に教える。

“長い疑問は、この先で解ける”

「……っ！」

見るべきものは変わらない。

項垂れた身体を起こし、そのときを待った。

『そしてあのチャンピオンの膝が崩壊寸前ッ！あとひと押しで倒れそうだ!!!』

つまるところ、そのときとは。叛逆トドメの一撃。

第4ラウンド、2分19秒。

どう猛な一撃で膝が笑う王。

火のでるような差し合いで先をいった者が狙うのは、息の根を止める一振り。

ライトヘビー級ともなれば、偶然振り抜いた一撃で失神など容易く行える世界。どのボクサーも一撃必殺を狙えるなら、鷹が捉えた獲物が次の瞬間に生きているなど不可能。

(っ、左でくたばれ！)

ゆえに、王は座して待った。

2分20秒。

数多の試合を見てきた。多くのボクサーは自身の拳に自信を持ち、積み上げてきた戦績は気高い誇りに変わる。

世界の頂上まで登りつめるにつれて、そこから無駄なものが消えていく。例えば慢心、遊び心といった、足元を掬われる要因。それらを限りなく無くしたボクサーは強い。

「私の王が王たる所以、ストップピング。ティム曰く、波紋に触れるように手を乗せたらいいという。そんな技術を教わるでもなく、波紋に倣い王座まで登りつめた男」

強いは支柱となり己を支える。誰もがそうだ、例外はない。

試合中、優勢であれ劣勢であれ。機械と謳われるボクサーであれど、その支柱は必ず波紋となり表れる。

心がある、ならば期待がある。闘志が燃える試合を望み、それが叶わないと解ったときでもいい。

想いをのせる拳とは、得てして己の支柱によって打ち出される。

「それがだ。じゃあ殴って波紋を止めたらいいじゃねえか、つて聞くと簡単じゃないそうで」

フェザントは、その波紋を止めることで意識を断つ。最も強いものを打ち抜かれた相手は、声も出せないまま膝をつく。

「確固たる誇りに満ちた波紋を止めなきゃならんらしい」

幾度目の交差する右と左。

後から出で、先に着いた王の右拳。

鷹の側頭部に鈍い音を残す。

次いで空振る必殺の一撃。

「その目だけが打ち抜ける、唯一無二の宝刀。」カウンター

私は、ステイ・ナイト永い夜と呼んでいる」

王の目から、鷹の波紋が消えて無くなる。

全てではない。生命として当然の、生きる機能のみが波を打つ。しかし、闘争本能に駆られる波紋：支柱は全て消えた。

「——たか、む」

突如停止したことで驚きに満ちるホール。

たったいま王を追い詰めていたはずの男は、ボクサーとしての意識を断たれた。

「さ、単発で最も恐ろしい左を堪能あれ」

だが王は、止まる鷹へ向けて左構える。

波紋を断つ……脳と身体の神経を乖離させる一撃。

次いで打つ、脳の機能を落とす打ち下ろし。

闘争本能から遮断したと確信するからこそ、これを傲慢だと判断した。誰にも割り込む隙を与えない。いつでも、誰かの声で立ち上がる男だからこそ。

王の最大の敬意を表した左は、迷いがなかった。

「……な、に！」

王の左拳に乗せられた右拳。

紛れもなく鷹のソレは、夜を終わらせる一撃を打ち止めていた。

直後にリングに倒れこんだ鷹村に駆け寄るレフエリー。告げられるダウンの宣告によって慌ただしく時間が動きだした。

『あ、あああ！<rb

側頭部</rb><rp>(</rp><rt>テンプル</rt

><rp></rp><rb></ruby>が決まりダウンだアー！！』

じつに3年ぶり：バイソン戦以来のダウンですっ！！』

「鷹村さんッ！！」

「鷹村アアア！！』

惨事かと思われた直後。

鷹村は飛び起きて息を吸い込んだ。

『しかし鷹村、即座に立ち上がる！』

目には混乱が見られる。

「違う：頭に来たからとか、怒りに任せて立ったんじゃねえ。いまが何カウント目なのかを理解できないから直ぐに立ち上がる必要があった。」

ヤロー、タイムのトドメをどうして止められた？」

カレーリアの読み通り、鷹村は意識を失っていたことを、レフエリーのカウントを聞いて理解していた。

(この野郎、オレ様渾身の左ストレートにカウンターを合わせやがった。……が、ちよいと分かったことがある)

(左を、抑えられていた。打つときまで気づかなかった：？？そんな波纹、出していなかったはずだ)

レフエリーが再開を告げる。

「ちと混乱してるか。私だって寒気がした。」

マモルのいやあな扉を開けちまったか？」

(あの目、あの感覚は知らない。お前はたったいま、なにを見ていた) 残り20秒、試合が動くことはなかった。

互いに牽制し合い第4ラウンドは終わる。

王が攻めなかった理由は単純だ。

カレーリアに考察を聞くため。ここで不用意にできれば、仕留め切れる気がしなかった。



「鷹村、意識はあるか!？」

「見ての通りだ、焦るんじゃない！」

鴨川の心配も無理はない。

ここにいる鷹村を知るもの全てが、久しぶりにダウンをするシーンを見たのだ。完全に意識を断たれて即座に立ち上がる。

ダメージがないように見せているものの、このとき手足にコンマ数秒のラグを起こしていた。

「野郎、どんなパンチ打ちやがった？」

「右のテンプルじゃ。まさか、あんなに静かなパンチで意識を断てるとは思わなかった」

20秒間やり過ごして一息ついたとき、自分がたいして動いていなかったことにも気づいた。深刻さと言うまでもない。次に食らえば落ちる。

「気を抜いてなくとも、タイミングさえ合えば失神は狙えるからの。となると、チャンピオンのパンチは全て失神を狙っていると考えるも過言ではなさそうじゃ」

1度目のダウン、意識が無くなったとき。

唯一、触れたことがある。

「ふん、まあそのおかげで攻略の糸口を掴んだ」

「…右か？」

「気づいてたか」

最後の1撃を止めた右の手。

「勘で捌いてた野郎のパンチだが、これでようやく分かった。見てるだけじゃ気付かなかったが」

思わずニヤケが口元に出るほど、自信のあるものを手にしていた。
「王の姿ってやつを見とけよー！」

辿り着いた深淵

第5ラウンドの幕が上がる。

聞き慣れた、心地良い鐘の音をどこか他人事のように聞き流す。チャンピオンは相変わらず、バカの一つ覚えと言うように待ち構えている。

ダウンを取った余裕からではない、とは分かっている。ステップも刻まずに自分と対等、もしくはそれ以上の実力で渡り合っていることが腹立たしく思えてきた。

「いいさ。オレ様はガラじゃねえからな。身体に全部任せて、貴様を殴り飛ばすだけだ」

駆ける直前、息を吸い込んだ。

世界のリングでこんな時間があることだけは、目の前にいる強者を抜きにしても悪い気はしない。

「よーやく、イメージの使い方が解った」

面白おかしく呟く。

そこから、すでに違っていた。

人を凌駕する存在と相対して掴んだ感覚に、自分の経験を染み込ませる。

：呼び起こす。そんなクサイ言いかたが合っている。1年間、ティム・フェザントの影と戦い続けてきた記憶。苦悶し、引退の恐怖を実感した夜。最強を自負する己が、試合で負けずともボクサー生命が断たれた幻影。

それらを、単なる糧と考えたことがここまで苦戦した理由だ。そうじゃなかった、そこで終わってはいけなかった。

少しでも苦戦するなら、イメージと常に戦い続ける。ノーミスで終わらせることは可能だ、誰が相手でも必ず道はある。それが出来ないのは、そのときだけで終わらせてしまったからだ。

オレ様の戦いは、ベルトを巻くまで終わらない。

オレ様の戦いは、ベルトを巻いても終わらない。

オレ様の戦いは、勝つまで勝ち続けることだ。

「……」

まぶたを開ける。

1秒の時間で整理した。ほんの些細なことだったが、この程度でも充分。

振り向いた視線の先。

アホ面を並べるバカどもに声を送る。

「声が出てねえぞ」

聞こえたかは知らない。

「鷹村さん、がんばってください！」

こういうとき、一番聞こえるのはお前の声だ。

「フツ…当たり前だ！」

ぐるりと右腕を回して応えた。



コーナーを蹴る鷹村を待っていたのは、予想に反したフェザントの先制攻撃だった。

左はストツピングの翻りよりも疾く、やはり重量級には似つかわしくない風切り音が鳴る。そして、鷹村も合わせるように外から右を被せて最速のクロスカウンターとなる。

互いに振った拳を相手に伸ばしながら、頭部を同時に後ろに回す。頬にかすり傷を残し、一撃は決まらないまま砲撃戦は幕を上げる。

「」

背後で騒がしく声を張る観客の声は、この二人の耳にはもう届かない。聞こえるのは仲間とパートナーの想い。

「t u t」

先に抜き出たのは、鷹村の左。

ストツピングを軽々と打ち壊し、王城に次々と砲撃を繰り出していく。1つ止められれば2つ、それも止められれば3つ。それ以上は拳が追いつかないものの、殺気が加わり衛りを掻い潜る。

(…!)

再三の警告音が王の脳裏に響く。

その正体を理解している。だが、どんなものが来るのかが分からない。先ほど、鷹村を仕留め損ねた左拳に力が入る。

最早、王としての立場など崩れた。

ここは死地。出遅れたら最期、己の勝利が手の届かない場所へいつてしまう。

だというのに、目に映る波紋が消えていくさまに理解が追いつかない。波紋が消えていくと理解しているが、なぜ見えないのかが理解できない。

「~~~~~ツ!!」

「遅いッ!!!」

王は知るはずもない。

鷹村が味わってきた、誰にも言えない苦痛の日々を。この日、このときのために準備を進めてきた、数えきれないほどのタイトルマッチを。

ただのイメージ、されどイメージ。鷹村ほどの人間が行うイメージ、シャドウならば実践といっても遜色はなく。いま、持てる限り、分かる限りの全てを照らし合わせていく、鷹村の瞳は。

イメージに合わせて打つ。

イメージが先に打ち抜き、現実が重なり合う。

数々の修羅場を乗り越えてきた彼の本能いしきはついに、潜在する境地へとたどり着く。

(マモル、お前はついに…)

繰り出したジャブは影。そう放てば理想という、それだけの偽物。

否、それは先ほどまでの話。このとき、鷹村の迫力が見せた幻影は現実となる。

(おれを越えたのかッ)

一閃、体軀を揺らす。

反応する素振りすらできず、城の壁面が一気に崩壊を始めた。

人間の反射速度、限界に到達しているとまで言われるフェザントの

守りが後手にまわる。

見えている波紋は囷、身体を削るのは見えないなにか。

見えなければ逆に見える、などと理論を再構築できるほど相手は純粹ではない。フェザントの常識を覆し続けるいまの鷹村には、波紋をどうこう弄り倒したところで使いものにならなくなってしまうた。

大歓声がホールを揺らす。

鷹村の覚醒に心を踊らす。

一方的に叩き込まれる拳に声が出る。

本能に委ねた数あるうちの1つが頬を打ち抜く。それが他とは違ったことは、フェザントの位置が変わったこと。

「……私の王が、退いた……!?!」

10を超える強打に目を細め、至近距離を嫌った。

『つ、ついにフェザントが後退したああ!!』

ここまで来ておいて逃すはずがない。

退いたぶんよりも更に踏み込みジャブを放つ。直近のパンチでは最も弱いそれは、趣旨が全く違っていた。

距離を測った。どこかで理解し肌に寒気が走った。

「うおおお!! ついにきたぞ!!」

「あとは倒すだけだ! いけ鷹村!!」

だが、その警戒さえも。

「逃してはならんっ!」

「テiiiiイムツ!」

(わかつてるよ!!)

(ようやく、か……)

最後の一発として、強い確信を持った拳でさえ。

本能を相手には無意味だった。

渾身の右が炸裂する。

守ることが愚かで、なのに避ける暇が与えられない無慈悲にして、ボクサーに対する最高の手向け。

フェザントの左頬に着弾した音を聞いて、次に吹き飛んでいく巨体を見送って。観客たちが興奮を声に変えるより先に思ったことは、果

たしてチャンピオンは生きているのか？だった。

1秒の間に駆け抜けた思考。あとから押し寄せるものは、王座交代に期待を膨らませる熱狂の渦。

『こ、言葉にならない右ストレートがチャンピオンに直撃！』

そしてこれがダウンとなったああア!!!』

ロープによれかかり項垂れ、視界は上がらないまま座っている。

駆け寄ったレフェリーの確認により、カウントが開始される。

『チャンピオン座り込んだまま動きません。観客席の外国人もみな驚きの表情。こんな場面、予想できなかったからでしょう』

「嘘だ、そんな！」

「なんなんだ、あいつは…!?!」

「あのタイムが、追いつけていない」

そこに崩れていく威厳があった。

独りでなんでも出来る人間は王となり、皆が尊敬と謙遜をする。見ていて安心できて、絶対の安定感と強さを誇る。異質ながら世界に浸透した王から、それが欠けた。

証拠に、タイムの観客たちは絶句し言葉を失っていた。

（くそッ、始めてづくしだ。力で押し負けて、挙句にすぐダウンだ…。それに、あんなストレートも試合中では味わったことない。

アメリカでも中々見ない威力だ、本当ならリングに上がるべきだろう）

カレーリアは舌打ちする。

なにがどうなったのか分からないまま王の玉に傷がついたのだ。動揺もするし、タイムの動向により注視する。だから言葉を、こう続けた。

（けどね、私は足じゃなく、喉を動かす）

余裕はないが、笑っていた。

自分の王が地に伏せながらも、逆に王に対する信頼は増していた。

「タイムの顔、見てみるよ…!」

「ま、まじかよ…あのタイムが…」

観客が気づく。

鷹村に塗り潰されていくホールのなか、静かな異変に目を凝らした。

「あந்தのその顔を見て止められるほど私は過保護じゃあない。笑う顔も初めて見せるね」

のそり、そんな効果音が似合う立ちかたをする。

怠さはない。呆気なく立つ姿は驚くことに、ダメージのカケラもないように見える。

「なら次は初めての逆転さ、ステップ刻め！」

むしろ、逆だ。

フェザントの釣り上がる口元、ギラリと滾る瞳、見るからに漲っていく闘志。

王として決定的なものが崩れていった。その認識が間違っていると、直ぐに鷹村は考えを改める。

「まあ、そう簡単に終わらせちゃくんねーか」

鷹のツメは、見えない枷を知らずのうちに外していた。

イメージのときから引つ掛かっていた、フェザントの底。きつとそこを開けたのだ。底に着くと同時に終わらせたかっという考えが終わる。

レフェリーの合図が告げられる。


ならば、やることは1つ。

速攻で倒す。いまの流れを断つには試合を止めるか、1分後のゴングを待つかしかない。

待つまでもない。

表情に余裕があれど、本当と嘘を混ぜこぜにしたに過ぎない。効いている事実は、誰よりも己の拳が知っているからだ。

深い瞳をする王は、迫る寿命の刻限を前にして。

「I  ve ^{ああ、} missed ^会 you ^た so ^{かっ} much ^た much ^ぞ」

「……」

淀みのない拳が打ち込まれていく。

なんら変わりのない、されど本能に寄り添う最高峰の連射は、リン

グの上で空砲と化した。

「ジャブのキレで予想はしておったが…」

あらゆる重心を落とし、深淵に潜るかのごとく鷹村の視界から影を消した。

塗り潰した空気が反転したかのような寒気。目前で、とにかくマズいことが起き始めたことだけを理解し。

「鷹村ッ、下を見ろ！」

そして。ソレは、鷹村のイメージにはない。いや、そもそも1度たりとて試合で見せたことがない。イメージ、シャドウで対峙した影の全てが霧散していく。

真新しい、予想もつかない身のこなし。

異常に低く、異様な速さのフットワーク。

左、右を縦横に走らせる。

が、普段見ない直角のステップインが拳を振り切る。

「――！」

影が並ぶ。

並走し、鷹村の腰を軸にステップが地響きを立てる。

突き放そうと拳を量産するが、あまりにも懐に潜り込みすぎるせいで距離感も掴めないまま空打ちした。

無闇矢鱈と拳が空を斬り幾度。

混乱を拭いフットワークに重点を置こうとしたとき、再び鷹を撃ち墜とす弾が標準を合わせた。

眉間、リバー、顎と急所を狙うそれを。

「グ、つゝゝ」

身体を振り、無理やりガードを挟み込んで拒否した。

だが、視界を横切りざまに放たれた衝撃を見逃していた。

右頬に直撃し、口内に鉄の味が広がる。

静かに舌を転がし飲みこむ。足は揺れていない、まだ故障には至らない。

警告音が報せる。打て、当てろ、止まっではいけないと。

いまの鷹村なら、本能でねじ伏せることができる。

(クリンチでもないくせに打ちにくい！クソめ、ストップピングといいこれといい手が出せ……む?!)

ではなぜ、無駄も迷いもない今で追いつかれるのか。

「ドラゴンフィッシュブローの連続か!」

「違うだニ！アレは、ストップピングだニ！」

「なに言ってるんだ猫田さん、打ち止めてないじゃないか。アレのどこが……」

鍛え抜かれた全身の衛りを停止する。

機能しないものを使う必要はない。一方的に攻められるのなら、戦い方を組み替え、都合の良い噛み合い場所を探す。

それが、誰も見たことがないフェザントの姿。

ストップピングを新しい姿へと変えた最適解。

「チャンピオンの低姿勢：もしかして、ずつと」

「鷹村さんの右腕にピッタリくっついてやがる！」

「左腕もだ！鷹村さんのパンチ潜って片腕の死角に入り続けたんだあのヤロウは！」

見えなくなつた波紋、探していた人物との念願の直面がフェザントの技を新たな局面へと昇華させた。

本能が天敵に値すると告げる直後。

「んな小細工が通用す、つ!」

ただがむしやらに、全力で寒気が走つた場所に腕を振り上げた。がすりと音を立てた直後、頬を掠る拳。

掠つた拳は、間違いなく失神の一撃。

先ほどの拳とは別格の凍てつく雰囲気を纏う。

フェザントの身体が、新しいスタイルへと即座に馴染んだことを意味する。

波紋は見えている場所と見えていない場所がある。相変わらず繰り出す拳の波紋は、前兆すらない。しかし、自信の支柱だけはいつも見えている。

本能を剥き出しにする鷹村からは絶え間なく、誇りと自信の支柱が表れている。むしろ、それこそが鷹村がフェザントを追い詰めた正体

でもあった。

ならば、たとえ真正面であろうと実現できる。高速でステップしながら弾丸を打つ現状で、成功させることにみに注力する。

(そこでもない、あそこも違う。これでも、どれでもねえっ…が！)
皮が剥がれていく。

鷹の成長も生命のやり取りのなかで加速する。

急所と視認困難な拳を、片腕を常に封じられながらこなす。

ただ観察し続けることに時間を費やす。精神の疲労もさることながら、体力でさえも底に尽こうかという移動。

(追いつけ…！)

周囲の音が聞こえたのは、両者の拳が顔面に直撃したときだった。

相打ちにより、必殺の一撃から逃れた。

それでもフラつく身体は、フェザントも同じ。

そして、時間は切れる。

『…、ここで第5ラウンド終了！ファイトスタイルの突然の変更にホールが息を飲むなか、勝負は次に持ち越されました！』

フェザントの深淵を、ついに明かした。

第5ラウンド、瞬きも許されない時間が終わる。



王が現れた。

無性に、心が揺れていた。

その旅になんの意味があるのかは分からない。だから、意味があったと分かるまで続ける旅。

「長くはもたないね？」

「……………」

カレリアの声にいつもの無表情で返す。

言わずとも分かっている。長い旅の終わりが見えたせいだろう、目的地向けて全力で走り出している。

「好奇心に身を委ねるつもりはない。…波紋が見えなくなつた。だか

らおれは、アーテのボクシングを信じる」

「オメー……」

鷹村のボクシングに対する学習能力は、現代のスーパーコンピューターの遙か頭上をいく。波紋が見えなければ、即座に対応する必要があり、その頼りは練習だ。

そんな言葉が出てくるとは予想外のカレériaは、ポカんと口をあけて、次の瞬間には笑いを押し殺していた。

「な、世界を旅して目的を見つけた感想は？」

「あんなやつが目的地で納得いかん。…もつと、静かな人間だと予想していたから、アテが外れた」

やはり喜怒哀楽が欠けているが、会話は弾む。

フェザントがようやくやく見せた困惑。これ乗り越えたさきに待つものが彼の疑問の答えと分かるから、笑い声が漏れてしまう。

「クク……そーかい。私は予想通りだったさ」

「……………」

「そう不思議に思ってたやあオメーさん勝てないよ？いまのオメーはチャンピオンって風貌じゃなくなっちゃった。

だからねタイム、物語の王になれ。

探してたモンがそこにあるんだろ？まずは勝て」

カレériaは、鷹村から聞くのではなく、フェザント自身が答えを導き出せることを示唆した。

「さ、自分で捻り出してきな」

大きく張る声に押され、男は歩き出した。



“王とは、なんだ”

チラリと過ぎる問いかけ。

知りたいものを知ったとき、たまたま王がソレを持っていたに過ぎず。それ以外に道がなかったわけでもない。

「ローダッキングでもなく、ずっと低姿勢を維持してのボクシングは

知らん。あれは、さつきだけのものと思いたいが…」

「やれる、だろうな。あいつは、あのスタイルを勝つまでやめない。もしかすると、オレが破れば次のモンを用意するかもしれん」

否、元より。

男は王などではなかったのだ。

アレは、そういう意味ではない。

問いかけられた者が、自らと立場を逆転したさきのことを聞いていた。無論、勝敗云々も含めてはいるが、この場合は拡大解釈していい。「分かることは、急造品のくせしてオレに通用するってことだ。いいじゃねえか、新しいストッピング。やつの全部を越えてベルトぶんどってくる」

どっこらせ、と立ち上がる鷹村。

「それと、しよーがなく教えなきやなんねえ。王つてのがどういこうとか。

会長^{ジツイ}、あんたの言う通りだ。

余計なもん削ぐよか、両立したほうがカッコいい」

自らが押し退け、その過ちを正してきた道。

綺麗に整うことのない凸凹砂利道を踏みしめる。

「……そうさな。いまのお主なら、あのチャンピオンに言えることの一つや二つある。

その背中を見せることが返事となろう。

小僧たちも待っておるぞ、無事に帰ってこい」

次に帰ってくるとき、決着がついている。

ニツと口元を上げるボクサーの顔がそう告げた。

傲慢から道を外れた男が、外道を辿り迂回したいまがある。チャンピオンのことを知らずとも、求められる答えを手にしている男だ。それを示す資格と自信が、勝敗の行方を決めることになる。

かくして、終幕のラウンドは両者を引き合わせた。

王とは

片や王を探し続けてきた、特殊な力に愛された男。

波紋と向き合い、波紋から学ぶことを終えたあと。次は波紋が見えない存在に興味を持ち、世界を巡ってきた。

そうして幾年月、ついに目的を見つけた。

だが、疑問はまだ解消されない。

“王とは”

言葉じゃない。拳で問い、答えを得る。

そうしなければ、胸の奥にあるもどかしい気持ちに届くことはない。セコンドに言われて気がついた。これは、一人で解決するものはなかった。

疑問を口にして、誰かに問いながら、答えを聞くたびに心のなかで首を横に振っていた。いつしか、ただの独り言となり、自分自身で見つけることに意味があると置換していた。

その認識は改める。

目の前の男がそうさせた。彼もまた最強の1つであり、頂点を目指し続ける者。分かる、この目が答えが出ると教えてくれる。

(アーテ、キミの言葉は芯にくる)

拳を前に出す。

対角線、答えを出せる者も同時に拳を前に出していた。

『な、なんとK・O宣言!!!それも、チャンピオンと挑戦者が全くの同時に!!!相手へ向けて拳を突き出してお前を倒すと言っている!!!』

…違う。答えは、もつと別のところから取り出せるはずなのだ。

(前に進めば、きつと答えが分かる)

だから、背中を見てくれる人のために飛び出していった。



両者に小難しいことを考える余裕などない。
どちらも最強。

人を見る目も、野性の本能も。

人が乗り越えていける道理がないくらいに美しく、繊細な神経で成り立つ人間。ただ、どちらも最強ゆえに、1つの頂上が崩れる。破壊と創造を繰り返す人間の縮図にして、多くの人の間近にあるからこそ最強。

鷹村のイメージは、さきのラウンドの“スタイル”を観察し、すでにその身を捉えることを可能としていた。それだけでも精神を消耗し、脳の隅に嫌な音が鳴り響いた。

フェザントの目は、見える波紋に触れるため、矢継ぎ早に打ち放たれる拳を避けながら距離を詰める。体力を多く使い、凡そ防御困難の攻撃を経験と直感に任せ掻い潜る。

「……………」

そうしてお互いが危険地帯に身を投じ、刮目する。

信じるものは目に見えるもののみ。現実を直視し、されど己の現実からは程遠い位置へと意識を置く。

体力の残りを知ってしまえば心がブレーキをかける。明日の自分のことを考えると消極的になってしまいうから。

だから、いまこのときは身体のこととは忘れてしまおう。身体に帯びた熱が冷め、現実を引き戻されるまでは、絶対に止まることが許されない。

「……………」

リングに刻まれる足音。

2人から鳴るそれは、ことフェザントがたてると異常なものとなる。まだ1分間しか刻まれていない事実^に違和感すらあるが、鷹村はすでに順応する。

先制、鷹村のイメージが影を捉えた。

寸分違わず、踏み込んでくる場所に拳を合わせる。

傍^{はた}から見れば空振りと思えるタイミング。しかし、それはフェザント

の速さに追いつけないからではない。

鷹村の殺気フエイントに対抗するために編み出されたソレは、片腕の死角に入るという荒技である。だが、前提として接近することが求められるため、まずは距離を詰める必要がある。

当然、鷹村は距離を詰める一瞬に勝負どころを見定めた。

それを承知のため、懐に潜るために編み出されたフットワークでなければならず、フットワークは最短距離を駆けるなんてものではない。波紋の揺れに対応し、波紋として見えない動きを予測し攻撃と防御を隙間に注ぎ込む。

最高効率で己の限界に挑戦し続ける、狂気の域へと達する。

『止まらない、バックステップを知らないとばかりに円を描きひたすら拳を突き出していく!』

両者は現実で肉体と、本能で殺気フエイントとのせめぎ合いを繰り広げていた。

止まることを忘れ、リング上を駆け回り、揺れ動く影を追う。

一閃、一閃、また一閃。

一分いちぶの隙を探して、長きに渡る答えを求めて。

その想いが先に届いたのは……。

「チ———!」

浅く、しかし精神を大きく削る一撃ジャブ。

先制を奪い取ったフェザントは、その勢いを次々と拳に乗せ、流星のごとき連打を繰り出す。

『当たらない…フェザー級もかくやというフットワークに重量級のパンチが飛び交うなか、どちらも肌を掠めるだけ!』

いったい、いつ均衡は破れるのか!』

最速の左ですら直撃すれば必殺。

デタラメだと吐き捨てたい直感は、バカにできるはずもない。

紙一重の攻防。

無意識に鷹村は歯を食いしばり、フェザントは口角を上げる。共に自覚のない行為が、それほどの世界だと称える。

外殻を削り合う時間に終わりを告げるのは、直後。

中に飛び込む拳と、それを阻止する拳が交差し、退けば負けの究極の意地に亀裂が生じた。

クロスカウンターとなり、両者の頬を打ち抜く。
ぐらついたのは――。

「鷹村さんッ!!」

相打ちなら辛うじて耐えられる、と。

その認識に疑問を持たなかったのが、間違いだった。

相打ちですら、フェザントの拳は意識を刈り取ることができると。

第2ラウンドで相打ち合戦をしたことが。そして、スタイルを変えてから相打ちをしたことで、フェザントはこれを可能にさせていた。

まだ完成していない。しかし。

「……………、そつ……………」

身体に通る芯を折るには、十分な威力。

停止する足が回復するよりさきに、フェザントの渾身の右が頬を打ち抜く。ただそれだけの事実は、仰向けに倒れる姿を受け入れろと言う。

『あ、ああ……！鷹村！ここでこの試合2度目のダウン！』

チャンピオンの2発があまりにも強い……強すぎる！』

脳に電流すら走らない。

意識だけが残り、なにも動かない身体にただ震える。

ただ、幸運でもある。鷹村の放った拳もまた、中に入り込むフェザントを叩き伏せるために渾身の威力を込めていた。

(馬鹿野郎……避けたつもりなのに合わせてきやがった。

まだ底があるか……………！)

この時点で本来なら飛んでいたはずの意識がある。その意味は、相手もまた被害は甚大ということ。無感の王、という呼び名は伊達ではない。表情どころか、身体にすら異常が現れないのを見るに、最初のダウンのときは誘われていたということだ。

そして。こちらは間違いなく10カウント内で神経は回復し、戦線への復帰も間違いなくできていた。

ホールが鷹村の名を呼び、コールが響く。

「おいやべえぞ、カウントしちやいるが鷹村さんピクリとも動かね！」
「声出しましょう！鷹村さんがんばって!!」

「いや、ここは任せろ」

外野、青木たちは動かない鷹村を見て早とちりする。

「俺らせっかく勝ったのになア!!」

一人だけ負けちやうのかなア!?!」

それは木村の煽りだった。

歓声で騒つくホールでも、鷹村の耳は仲間の声をたしかに聞き届ける。

(――動く!!)

いたって単純な神経を併せ持つ鷹村は、痺れの抜けた感覚とともに一気に立ち上がる。

これもまた、復帰の一端を担ったことだろう。

(木村、よくぞ言った)

復帰に盛り上がるホールをよそに、鷹村は声のしたほうに首を回す。

「あとで死刑」

レフェリーにこっち向けと言われながら、グワリと笑いそう呟いた。

「凶暴な笑みを向けてるぞ…」

「…お前ら、一緒に逝こうぜ」

「ぎっけんな!」

「木村、安心するだニ」

「ね、猫田さん…!」

「ワシの裏山に墓地作るから、みんなで入るだニ」

「アンタが言うとシヤレになんねえよ…」

続行の合図とともに喜ぶ観客たち。

そして一転、リング上の2人の意識は、1秒ごとに揺れ動く髪先すら体重移動のための判断材料として解析、処理を開始する。

(さて、次は…?…?間違はなく、断ちにくる)

(……………)

頭と同時に、敏捷性でも遅れをとるわけにはいかない。より速く、より先に相手の急所を穿った者の勝利。複雑な点と点が幾重にも繋がり、最終的にシンプルな直線となる。

——一息に駆け、交差する2つの拳。

最強と最凶が互いの意識を持ち去ろうと放たれる。

1ミリの狂いで全てが終わる。少しの悶絶が敗因となる。

互いに蓄積したダメージを噛み殺し、相手の苦汁が頬から垂れる一瞬をひたすら待つ。

フェザントの応援に来ていた観客たちは、いつしか立ち上がっていた。

初めて知る姿に、全てを注ぎ込む熱にあてられて。フェザントは声援を鬱陶しそうにしているから、と。いつの日にか眺めるだけに徹していた観客たちは、立つことで彼の戦いに参加する。

(……………)

(普段は静かな観客が……立った?)

情景に映る景色に割いた思考も即座に溶け込む。

それを無駄か、必要なものと処理したかは分からない。疑問が残ったことは事実。そこに、なにか思うものがあつたのかもしれない。

普段なら、外野が煩いと感じない。

実際、静かに大人しく観ている、と公言したこともある。なのに、それを言った本人は悪い心地がしない。

(よオ、分かるか、あの意味が)

(……………なんだ、なんなんだ……………)

一切緩まない攻防のすみで、互いに蓄積する言葉。

長年の経験を吐き出し、もしかするとこの感覚が探していたモノなのかもしれない。そう期待感に煽られる。

しかし、それで拳の冴えが失われることはない。むしろ、一秒でも早くその謎に触れたいと、感覚が研ぎ澄まされていく。

(分かるかは、貴様の人望次第だ)

鷹が、深淵に向けて急降下する。

ただ肌を掠めることすら無事では済まなくなった、未知なる領域

に。臆することなく入り込む。

鷹村は、そうして生きてきた。

相手の舞台に立ち、全ての悪条件を大胆に打ち砕いてきた。

承知のフェザントは、舞い降りる脅威の迎撃に移る。

一合で意識を刈るために、三合の急所へ打ち込んでいく。それを三合のカウンターで迎え撃ち、六合の殺気フェイントと実弾で打ち返す。

数の暴力、打ち合いで人としての底にヒビが入っていく。順応し、次の一手を用意する世界。押し通すものに差があつたとすれば、先に知っていた者だ。

(~~~~~ツ!?)

右腕の死角、ほぼ側面に到達したフェザントの左拳が3度の轟音とともに上空に弾け飛ぶ。

飛び込んだ瞬間、拳を放つ直前、そして体勢を整える前に。本能に呼び起こされる瞬発力と腕のバネが、フットワークの刹那を捉えた。

死角を作るフットワークに対し、またこうとも言える。

死角を作るならば、壊せない死角もまたない。

鷹村は、ただ純粹な力をもって成し遂げた。

死角を先に壊されたところに、避ける場所はない。即座に立ち直りボデイを打ち込むも。

予め用意されていた拳には出し勝てるはずもなく、えげつない勢いでボデイがフェザントにめり込み、倒れ込んだ。

直撃。五臓六腑が弾け散るかというほどの苦痛が身体の中を駆け巡る。

全ての意識が砂嵐に変わり、呼吸すらまともにできない。

なにもかも投げ出したくなり、言うことさえ辞めようと握りしめる意識を緩め。

「ティイイイムっ！」

声が、視認すらできるほどの波紋大声が響いた。

(……………!)

カレーリアの声。

怒鳴りとも、悲鳴ともとれるそれは。1秒後に気を失うフェザント

の意識を引き留めた。

「よし俺たちも声出せ！」

「ティム！無茶を通せ！勝つんだ！」

「フェザント、俺たちお前のK・Oが見たいよ！」

「お前がナンバーワンだアア!!」

あとを追うように、次々と背後から波紋が発生する。かつてないほど重なり合い、決定的な苦痛をさらっていく。

目を開く、大きく開く。かつて見たことがないほどの波紋。自分が受けたことのない大歓声。

それだけだというのに。

(王は…)

そこら中から発生していた波紋は、消えていた。

(王とは、そういうことか)

正解の1つを見た。

これは、多くの人の期待。

おれの読んだ王は、この逆のことをしていたんだ。

小さい国ながら、全員のことを想い、愛していた。

目先や己のことだけではない。文字通り、全て…!

目に映ったもの全て、宝のように想い続けていた。

おれの、理解が及ばない波紋。見えなかったものが、ようやく見えていく。

(思いもしなかった。この場所に、おれ自身が立つてはじめて気がつくなんて…。こんな波紋、ここでしか見れないはずだ)

なら、浸らずにいては自分が崩壊してしまう。

ダウンから立ち上がり、フェザントは天井を仰ぎ。

「Fu………Fu ha」

言えない快感に震えながら、笑い声を漏らす。

「Fu ha ha ha ha……!」

その瞳が交差したとき、言葉を交わした。

“お前を倒してこの期待に応える”

レフェリーの号砲とともに、負傷も誇りに換えて走る。

interlude

「ワシが鷹村にしてやれることは少なくなった。リングの上において、口を出してやれることも数えるだけじゃ」

鷹村の名と、フェザントの名が響き渡るホール。

鴨川の表情は言葉にしては柔らかい。

「間違いを重ねる鷹村に気づけず、ずいぶんと苦勞をかけてしまった。孤独になるあやつを見たときに後悔した。捻じ曲がる性格とその意図、理解できる者はおらん」

それもそうだ。

鷹村の名を呼ぶ声には、後輩の姿があるのだ。

ジムの内部分裂後、久方ぶりの姿に懐かしさすらある。

「……なにより、小僧たちの声援がある。チャンピオン、分かるか。あれが王の姿。完璧などではない、不純物に塗れた……だからこそ理解のできる人間じゃ」

鷹村にできる助言は少なくなった。

鴨川が求めた光景が、これからは代わりを務めると確信して試合を見守っている。

interlude out

▼
いったい、何人の幻を打ち抜いては越えられただろう。

果たして、何度の問いを繰り返しては霧散したのか。

そこに恐怖はない。期待に応える絶対の自信があり、誰も脆さを求めてはいない。己に負けた人間が、立ちはだかる脅威に勝つなど夢物語。たとえ理屈や理論はあろうと、人間にとって心が折れたままでは立ち上がれない。

前に進む以外に道はない。

フエザントが踏み込む。

アウトからミドルへ、迎撃の大砲を警戒していたが、すんなりと侵入に成功した。

「これで、オレたちの勝負は成立した」

鷹村は茨の道を選んだ。

目下で鎌首をもたげるフエザントの挑戦を受け入れる。そう受け取れる姿勢は、最強としての生き方だからこそその大胆不遜であった。

(貴様の壇上でオレが勝つ！)

(勝つのはおれ達だ!!!)

勝負の最高潮が始まる。

五体から力が抜け、ふと思いつ出したときに視界が揺れる。王者も、挑戦者も不十分な状態で腹の底から絞り出した力を押しつけていく。

疾る王の姿に見開く目。

鷹村の渾身の一撃を受けてなお、その敏捷が下がることはない。ミドルで連発する拳が円を描くフエザントに当たらず。

この土壇場、フエザントが見つけ出した答えが鷹村の極僅かに揺れる波紋を視認した。鷹村の本能やせいを読み解き、上回るための手段を探りしている段階。最早、この状態が完成すればフエザントに勝つ手段が無くなる。

恐らく鷹村は気づいている。フエザントが疑問を解消すること、なにかしらの勝機を掴むことを。だが、望んでいたことは全力全霊の相手を倒すこと。元より、如何なる状況であれ、最終的な敗北だけは考慮の外だ。

一切の無駄なき野性の勘と、一切を見知する天性の勘。

最強の男がふたり。

壮絶な笑みがふたつ。

そして。

「~~~~ツ、~~~~!!」

ただ直進で、速いジャブがフエザントを打つ。

波紋を置き去りにした一発。避けようと思ったときには二発目がボディに突き刺さる。

技の起こり無く放たれる鷹村の拳。これまで避け続けられてきたはずが、ここにきてフェザントの波紋を貫通した。

両者共に才と実力は同量。ここで僅差となったのは、己の実力と向き合う時間だった。

冴え、研ぎ澄まされる野性の勘が抜きん出たのだ。

急所を狙えば急所で返す。

なにかの拍子に裏返る拮抗は、鷹のツメが離すことを許さない。血飛沫が舞いながら、勝利の一筋を求めて波紋を凝視し、悉く打ち抜かれる。全てを碎かれようと、優勢に立とうとも前傾姿勢は崩さない。

運命の刻は終わりに向け刻まれる。

(王か：^{オレ}考えたこともあつた、なんだろうってな)

フェザントの問いを掛けられるよりも以前。

鷹村は、その難題に直面していた。

(ちよいと前までは邪魔と思つてたやつらがいた。急に、熱が冷めちまつてた。構うのが面倒になつてた。

だから切り捨てた。そして、切り捨てさせようとしていた。オレはな、6階級制覇の障害として、ジムの後輩を認識してたんだよ)

スーパーミドル級を制覇し、宮田があとから世界を獲つた。

それ以前、“荒れている時期”を思い返す。

暴君、そう言われる姿が思い浮かぶ。

壊れていた。心が、身体が。

言うならば、まだ治らない傷。抱えきれないと思い、一度は捨てた者たちを思い浮かべる。

(いつしか離れていた。お守りがなくなつて、すつからかんになったジムを見てな……会長の横顔見て気づいた)

鴨川の寂しく見据える姿を見て、間違っていると気づいた。

捨てることに意味がない。なにより、鴨川 源二はどんな負傷を背負つてでも仲間を見捨てる真似はしない、と。

自嘲した。まさか、今更、自分が恩師に習うことがあるとは思つて

いなかった。

(その程度すらおぎなりにするヤツが強いなんざ笑わせてくれる。

背負い込んだ量だ。王の器はバカどもの数だけ大きくなる!!)

申し訳なさを飛び越して、捨てたものを拾うために尽力の限り動いて、いまがある。懐かしく、古臭いヤツらが後ろにいてくれる。これから先、彼らに言葉で伝えることはないだろう。だから、拳で伝える。これからもついてこい、と。

(オレは…オレ様はっ——)

ボディに放り込まれる一撃に、ついにフェザントの足が止まる。

間断なく踏み込み、鷹村は右を振り構えた。僅かな隙間、拳を滑り込ませるだけの隙間が広がる。

「千載一遇のチャンス…!」

「構えを、見られたっ!狙われる!」

波紋が、剥き出しの支柱が道を示した。

握りしめる右で、生涯最高の威力を確信する。

(…見えた、振り抜け!)

起死回生、必殺の一撃が、鷹村の眉間を打ち抜く!

(もう間違えん、もう間違えた。

漢は、同じ後悔を二度としないために動く!)

——が、効かない。

フェザントの一撃は、たしかに鷹村の意識を断つため、鷹村の剥き出しの支柱を穿った。世界全土、この一撃で倒れない人間はいないはずだ。

ならば、世界を越えずしてなにが挑戦者か。

鷹村の身体は、精神は全てを上回った。

誰よりも堅く、なによりも高く、起死回生の一撃が届かない空へ。

(これが、オレの王だ!!)

世界最高峰から一気に降下し、絶勝の一撃を叩きつけた!!

抗う余裕はない。

フェザントの視線は、死すら覚悟する一撃を受けたわりには澄んでいた。体験したことのない浮遊感。強さに押されることの意味を、そ

の肌で感じ取る。

フェザントの脳裏、王としての姿を目に焼き付けるとともに。

鷹村のことを、好敵手^{もと}として受け入れていた。

『飛び込んだセコンドによって試合の幕が降りました！無感の王、タイム・フェザントを下し、鷹村 守が4階級制覇を成し遂げた!!!』
まぶたを閉じるとき、心残りに思ったのは、自分の名前を呼んでくれた人たちに酬^{むく}いることができなかつたことだ。

6 R 2分49秒 K・O勝利。

鷹村 守

WBCライトヘビー級タイトル獲得

王の強さ

世界が注目するボクサーは、重量級とは馴染みのない小さな島国からの乱入者。

私……カレリア・アーテは、マモルのことを「エラー」だと断定していた。

初挑戦の世界タイトルへの道のりは、減量20kg越を間髪いれず2連続で行わなければならない。当初はブライアン・ホークの勝利を疑わなかった。元からイカれている人間相手なのだ、マモルは殺されても文句は言えない。

データだけを見て目にとまるものがなかった。ゆえに、ブライアンがジャンクになり帰国したことを知って驚いた。

「脳障害を起こすほどの被弾」

「殺人パンチによるダウン」

「減量苦によるスタミナ切れ」

「怒り狂うブライアン・ホーク」

試合内容の抜粋、そしてビデオを観て私の価値観の見方は変わる。正気だった。

マモルは勝つために減量を耐えたのだ。

天衣無縫の型、ブライアンを相手にするため。壮絶な環境に身を投じ、歴代最強と同じリングに上がる覚悟を掴んだ。狂気のブライアンと立ち並ぶため、正気のまま狂気の域に辿り着いていた。

その代償を知りながら、なおも歩み続ける。

それが彼の正気の沙汰なのは分かっていた。なら、どうして歩めるのかが分からない。

長い疑問は、今日のリングで晴れた。

「つたく、ここはベットじゃないっていうのに。得たものが気に入らなかつたようだね、ティム。新しいスタイルまで疑されちまえば、少しは不満そうにするもんだよ普通は」

カレリアは、目下で幸せな顔をしながら気絶しているティムの頭を撫でる。すると、小さな吐息を吐きながら深い瞳がうすらと開い

た。

「起きたかい、ティム。玉座を降りて旅をした気分はどうだ？」

「……………出きった」

「かーっ、そこまで言い切っちゃまれたら言うことないよ!! さあ立ちな。新しい旅をするために、出発の挨拶をしよう」

肩を支え立ち上がる。

「……………ふん。いつかりベンジしてみせる」

目標を1つ見つけたフェザントを、これも良い風だと頷き進み出した。

(マモル、貴様なら「最古の壁」を砕けるかもしれない)

誰が思ったか、そう予感したときには鷹村の前に立っていた。



「王サマってやつが見えたか？」

鷹村が問う。

気だるそうに、しかし真っ直ぐに瞳を向ける。矛盾したソレこそ、この男の内面なのだ、フェザントはいまなら理解できた。

「ここがフェスティバルになっている。恐怖なく、統一感ある場所に立てば嫌でも思い知る」

波紋が見える。

なにかもを背負い込む屈強な精神。

異常を抱え、死の淵を歩き、地獄の底を歩ききってみせた。

ティム・フェザントを相手にやりきった男は、まさしく天下第一に名乗りをあげる資格がある。

「そう……………」

「……………フツ、認めよう」

おれの新しい旅を祝い、そしてマモルの6階級制覇を祈願し、右手を差し出し。

「オ・レ・サ・マ・だ」

「……………What?」

刹那、視界を覆う過去最大の波紋に思考が止まる。
不愉快極まる表情と波紋に、右手が痺れるようだ。

「……………ぬッ」

「ぶ……………クク、カカカツ……………」

鴨川が顔をしかめたときには遅く。

カレリアは鷹村の態度がツボに入り、しかしタイムの手前であるため笑いを噛み殺していた。めっちゃ下向いてる。

「どうだ野郎ども！王の姿ってやつを見せつけてやったぜ！」

いつの間にか持っていたマイクを通しての発言。全観客が啞然とするなか、言葉が続ける。

「ライトヘビー歴代最強は散った！野郎の次のタイトル挑戦は同級W
BAだ!!」

そしてオレ様は有象無象を蹴散らして5階級、そして6階級制覇だ
!!!

一瞬にして精神年齢小学生となりはしゃぐ姿に、フェザントは右拳を握りしめて。

「行くぜクルーザー級！」

「フアアアアック!!!」

全力全霊をもって殴りかかった。

「テメエが先に言ったんだろうが離れやがれ！」

「このカスが！貴様からベルト奪い返す！」

アレよアレよとリング上は人外魔王再戦の場となる。

「うわああ、元チャンプが殴りに行ったア!?!」

「鷹村も迎え撃ったぞー！」

「いいぞりベンジマツチだ!!」

「やっちまえタイム!!」

「鷹村初防衛飾れよ!!」

観客も便乗、隅のほうでは賭け事すら始まる始末。

『わー！誰かあの暴走機関車を止めてー!』

「日本でアレを止められるやつは…」

試合後とは思えないほどにリングの上から人が逃げたあと、同時に

抑制の声が轟く。

「このバカタレッツ!!」

「ほら帰るよッ!!」

首根っこを掴まれた両者。

間も無く騒動は収まり、こうして4階級制覇達成の夜は終わりを迎える。

「あの人らしくないもんだろ…」

「暴走するなかによく交ざれるもんだ…」

「チャンピオンのトレーナーってすごいです」

「さ、控え室に行くか!」

「祝いの1つくらいじゃ機嫌直んねーだろうなあ」

「良いじゃないですか。鷹村さん、とても楽しそうです」

「……………だな」

後輩たちもまたそれに続く。

リング上を去る直前、カレーリアが鷹村に耳打ちをする。

「マモル、アンタいいモン持ってた。目には気をつけるんだよ〜?」

「お前：日本語上手いんだな」

「タイムの忠告だ、よく考えちゃいるんだろうが…お節介とは思ってほしくないね」

決して鴨川には聞こえない声。

その宣告は、鷹村の耳に残り続けた。

—
—
—

鴨川ジム事務所、鴨川の机の上に置かれた一通の手紙。

流暢な英語が記された差出人とともに、開けられた封の隙間から覗く紙がある。

そこには英語でこう書かれていた。

『アメリカで待っている』

“招待状”が添えられた場所に、次の舞台が待ち構えていた。

Next Chapter 『クルーザー級編』

coming soon…… A.D 2023 spring

!!

Next Champion

物語の中心を取り巻くものたち

廻り、削り、心を狂気に傾ける宴が終わろうとしていた。

観客が向ける視線には二人の男しか映っていない。例外なく込められた意味はただ一人、幕之内 一步の勝利を望むこと。

相対する男はWBAフェザー級2位、メキシコの死神、アルフレド・ゴンザレス。

前半、全くと言っていいほどに手が出せなかった。世界の技術に翻弄され、完封される時間が続く。それを幕之内は全霊で受け止めて、打たれ続けるなかで僅かな希望を掴むためにデンプシー・ロールを解禁する。

これが功を奏した。徐々に劣勢が均衡へと変わっていく。いつまでも倒れない幕之内に苛立ったゴンザレスは、大振りの一撃でトドメを刺そうとした。その一撃を掻い潜り、反撃の一打を見舞うとガードされる。しかし、ガード越しですら効く理不尽な一撃にゴンザレスはダウン。ついに世界との隔壁を打ち砕いた勢いに勝利の予感で会場が震える。

序盤まで手が届くことのない試合を見せられてきた。必勝のパートナー、理不尽の押し付け、抜群の適応力が悉く潰された試合だった。『幕之内とゴンザレスの火の出る打ち合い！』

ここが勝負の分かれ目、両者退くことなく相手を殴り続けていく！』

両者が握り締める右拳に馳せた想いはなにか。
観客も、選手も、セコンドですら読み取れない。

ただ、確かに握り締めたものがあることを感じ、最後の行方に己の右拳も握り締めていた。

直線が2つ、リング中央で交差する。

『右と右のカウンターが炸裂っ！これが……』

1つはグローブが歪み、球状のものがしわを寄せながら着弾先の意識を刈り取る。

1つは伸びた先で勢いを失い、僅かに天井へ浮かび上がったのちに真下へと下降する。

「小僧オオオッ!!!」

崩れる身体は幕之内。

投げ込まれるタオルが散々たる結論を会場中へと報せる。

『これが、挑戦者の夢をリングに叩き落とす！』

試合終了了…。幕之内、世界の壁を前にして崩れ落ちていく。会場の悲痛な叫びが敗北を告げています…』

こうして、幕之内 一步はアルフレド・ゴンザレスに敗北した。

リングから立ち去るゴンザレスは一度だけ振り向くが、言葉を残すことなく階段を降りる。

幕之内 一步、世界前哨戦にて敗北。

そして、ここが原点から乖離する分岐点。

物語を動かしてきた男が復帰するまでの間、その背中に追いつこうとする者たちの応援歌である。



「先輩ッ!!!」

観客席でその声はひととき大きな悲鳴だった。

しかし、皆が同じ気持ちであったため、代弁してくれた程度の認識しかなく。振り向くことすらできないほどの衝撃で動けない人が大多数。声の主など気にする余裕は、1秒後にはホールの失意に飲み込まれていた。

声の主は立ち上がり、両眼を見開いて現実を凝視する。試合終了のゴング、幕之内の敗北ということを受け入れることができない。世界からの選別に弾かれ伏す姿に、自分の心が大きく揺らぎ呼吸が乱れる。

憧れの男、数多の人間に勇気を与える愚直な姿がいまはなく。無事

を祈る簡単なことですから、視界が揺らいでままならない。

「そんな……あの倒れ方は普通じゃないっ！」

「直道、落ち着け！ほら深呼吸だ、深呼吸っ！」

直道と呼ばれた黒髪長髪の男を呼び止めるのは、隣に座る中年白髪の男性。背中をさすり、まずは自分を取り戻させることに専念させる。

「直道！幕之内さ負けた。だが必ず帰ってくる！お前の憧れの背中は負けたくらいで霞むんか!?違はずだ！」

「……ッ！……は、はい……はいっ……！」

山田 直道は焦点が定まらないまま、八戸会長の言葉に生返事をする。気休めにしかならない言葉だというのは、繋がった眉毛が小刻みに震えているのを見れば分かること。

試合中、幕之内が打たれるたびに両拳を震わせ、必ず突破口を見つけると信じていた。それが叶った矢先の急落下。幕之内に憧れて、彼の背中を追い続ける直道にとっては精神的ダメージが大きすぎる。

「気になるか……幕之内のところさ、行くか？」

八戸会長は悩んだ末に幕之内の見舞いを促した。

浅い呼吸から徐々に深呼吸へと変える直道。両拳は震えているものの、瞳はすでに憧れを見据えるものを思い出している。

「いえ……。いまは掛ける言葉を持ち合わせていません。少しだけ先になります、僕なりに、先輩にエールを送ります」

「……よし、よー言った。直道、お前さ鍛え上げてきた拳なら必ず幕之内に届く。ワシが届かせてみせる」

「日本の頂点に行きます。あそこなら幕之内さんに届くものがあるはず。きつと、なにかを動かせる」

直道は決意を口にして、目前に迫る頂きに向けて立ち上がった。

八戸会長は不思議そうに声を出す。

「鷹村の試合は見なくていいんか？」

「……あの人は負けません。」

いまの鷹村さんの背中には追いつけませんよ」

メインイベントを置き去りにして、直道はリングを見ると目を細め

て言い放つ。八戸会長は真意を聞かずに立ち上がり直道に続く。

鷹村をそう評した直道の両拳の震えは治まり、しかし表情は哀しげなまま会場をあとにした。



「幕之内さん……」

崩れ落ちる憧れの人を見て、今井 京介は驚愕に顔を歪ませた。試合中、負けが思考の片隅に浮かぶたびに消し飛ばしていた。これまでがそうだった。どんな逆境も跳ね除けた男なのだ、今回も絶対に勝つてくれると信じて疑わなかった。

結果、幕之内 一步は敗北した。

憧れの人が勝ち続けられるとは思っていない。誰だつて負けるときがある。同じプロボクサーとして、信念がぶつかり合う結果は予測不可能だと重々承知している。

京介はそのことを体験した一人。勝つこと、負けることを一人のライバルから教わったのだ。当初の試合を思い出して握りしめる拳は、会場の熱にあてられていつもより固くなっていた。

「なにをしている、俺は。今すぐにでも身体を動かして、先に進まないといけないだろう。」

負けて心が折れようと、必ず彼は立ち上がってくるぞ。"効いた"からリングから降りる人じゃない」

苦節、乗り越えたライバルとの死闘。

あのとときの緊張と興奮を思い出す。それまでに味わってきたガムシヤラな努力が背中を押し続ける。まだ見ない強敵を倒し、目標に辿り着くためのモチベーションは日々膨れ上がっていく。

幕之内の敗北で削られるほど、京介の戦意は薄くない。

「貴方が止まったのなら、俺はその分だけ進むまで。近く、必ず貴方と同じ舞台に立ちます。どんな場所でもいい…俺は、幕之内 一步に勝りたい」

日本フェザー級王者は踵を返す。

彼の瞳には次の試合、半年以内に行われる次の対戦相手のことが映っていた。



「負けてしまったか……」

観客席で一人、一際小さな眩きを漏らした。

会場の落胆の声には彼も漏れず。しかし、負けたことに対しての受け止める早さは会場で一二を争うほど、負けとの親密度が高かった。隣り合う心友に語りかけるように、そして仇敵に白い牙を見せつけるようにして笑う。

「さて、俺の声は届くかな……。いいや、届けないといけない。じゃなきゃ、幕之内くんの戦いが無意味になってしまう。

立ち上がってくれよ。幕之内 一步には、大勢の心を励ます才能があるんだから。俺もそうだった。……また、そうしてみせる」

笑みの矛先は敗北。

そして、自分自身。

幕之内 一步を拒んだ世界に身震いした。

幕之内が技術で到底及ばない。ステツプイン、パンチ力は日本や並のナショナルチャンピオンを凌ぐ彼ですら、世界の舞台では左手であしらわれた。

今回の試合、逆転劇を生んだのは持ち前のスタミナあってこそその奮戦だ。

「……………できるさ、やらなきゃ誰がやる」

幕之内にはガード技術が足りず、相手のクセを逆手に取る応用力が及ばず、そしてインファイトで打ち負けてしまった。

全て、いまの自分に足りないものだ。そう思いながら右拳を握りしめる。

だからこそ、リングで復活する必要がある。

復帰ではなく、勝利をもって。

「俺こわみたいれになる前に皆んな引退した。

それぞれが夢を追って…。目標を見つけて…。

こんなにまでなつて残つた俺は、きつと君の背中を追いたい馬鹿野郎だ。この滾るものだけは、あの頃から続いている。だからここにいる」

己に課題を一つ乗せて、速水 龍一は湿布まみれの身体を翻した。「ボクシングがそれだけの魅力だつて、皆んなに教えるまで俺はリングを去らない。幕之内くん、キミだつてこのまま下がる男じゃないだろう」

速水 龍一。

アマチュア時代無敗、インフアイター殺しとして名を馳せた。

幕之内 一步との試合にて初黒星。その後、ジュニア・フェザー級を戦いの場に変えてタイトルマッチに行くも、奮戦惜しくも敗北。

以降は敗北のみを重ねて0勝7敗と、散々たる結果を残している。身体は壊れかけている。それでもリングを降りないのは、ボクサーとして辿り着きたい場所があるからだつた。



また、とある人物のもとに報せが届いたのは数日後。

アメリカ合衆国の有名なボクシングジムにて、元気な男の子の音が響き渡る。

「ミゲル、ミゲル！ きつき郵便の人に個包を貰つた！ これはマクノウチの試合のビデオだよね！」

ぴよんぴよんと跳ねまわるのはウォーリー。

インドネシア元フェザー級王者にして、かつて幕之内 一步と激戦を繰り広げたボクサー。

「ここから、それはビデオなんだから丁寧に扱いなさい。世界2位のボクサーとマクノウチの試合だよ」

ウォーリーに促すのはミゲル・ゼール。

名伯楽と呼ばれ、数々の世界王者を生み出してきた。

かつて、ブライアン・ホークというジュニア・ミドル級王者を誕生

させたものの、鷹村 守によって撃墜させられている。

「あ、試合結果は言わないでね。僕の目で見届けるから」

事務所に駆けていくウォーリーを見送り、ミゲルはベンチに腰掛ける。

ミゲルは一足先に試合の結末を知人から聞いていた。

幕之内の敗北を知り、悔しさが一番に込み上げてきた。鴨川の教え子を突破したのは自分の選手ではなく、無敗神話に執着する世界ランカー。それも、ウォーリーと似た試合展開から逆転を押し返したという。

自分ならウォーリーを勝たせてやれたはず、と。もう戻らないことをひととき悔やんだ。

それはウォーリーがまだ上を目指せることを証明したことになる。

ウォーリーよりも格上がいて、やはりリカルドという男とは壁があることも再確認した。

己の未熟さを忘れぬように噛みしめて立ち上がる。

向かう先はウォーリーのもと。

試合時間終わり頃に事務所に入る。

「……………マクノウチ、やっぱり変わらない。」

キミの突進、倒れない気持ち、いま観ても身震いしちゃう。またボクシングを教えてほしいな」

試合終了の合図を見届けて、ウォーリーはしんみりと視線を上げる。

「ウォーリー、これが世界だ。人生の全てを賭けてきた、そんな次元の話置き去りにする。凡人の強靱な努力が振じ伏せられ、幾億とミットを打つ拳がリングに沈む。」

経験と努力、そして一握りの天才が集う場所だ」

「うん、なら僕は全部使って戦うよ。チャンピオンも、ベルトを狙うボクサーも、みんな倒すんだ。そうすれば強いつてことになる」

ウォーリーの真っ直ぐな返事にミゲルは頷く。

自分の最後の太陽を守り、強くしてみせると再び心のなかで誓う。今回の幕之内の試合、これこそミゲルが危惧した最悪の幕引き。ボク

サーを壊すのはトレーナーであり、セコンドであり、勝利に執着する者。刻には必要なモノに裏切られる愚かな行為。

「ミゲル！ボク、ゴンザレスと戦いたい」

幕之内との試合後、ミゲルが鴨川に忠告したことを無駄にしてしまったとしたら、とても残念なことだ。

幕之内がパンチドランカーになる可能性は非常に高い。頭部への殴打が多い選手に、右と右のカウンターが決まったのだ。仮に引退すれば鴨川の心はどうなるか。旧友として気にかけてしまう。

なによりも…。

「ゴンザレスはマクノウチ以上にボクシングを知っている。強いからじゃなくて、世界を知っているから！だから、持つてるもの全部欲しいなあ」

ウォーリーの目標が1つ無くなること。

それがミゲルにとって重要なのだ。

「それでね、ゴンザレスの次はリカルド。

ボク、彼のジャブにカウンター合わせたい。あのジャブを見切れたら、もうジャブに翻弄されなくなるから。

リカルドも倒したらマクノウチは戦ってくれると思うー！」

「ああ、そうなるといいね」

リカルドを材料にしようと考えてる辺り、本気だということが良くわかる。笑い飛ばすこともしないし、ミゲルもまたリカルドを倒すつもりでいるのだ。師弟揃っての考えなら、目標に突き進むことに迷いはない。

「良い心掛けた。マクノウチに追いつく機会が来た。

あと1試合を挟んでWBCジュニア・フェザー級タイトルマッチに挑戦する。まずは1度、世界の壁を築きなさい」

ウォーリー、WBCジュニア・フェザー級4位。

幕之内戦以降、インファイターを主に対戦相手とし、様々な手法を用いてK.Oを築き上げている。研ぎ澄まされる拳、天衣無縫のスタイルに第2のホークと称されるほど。

最強へと向けて、今日もミゲルの指導のもとグローブを構えた。

「…………バカが。ジジイの拳に傷つけやがって」

控え室、モニターを眺める鷹村 守は反吐を掻き出すように呟く。
苛立ち、ただそれだけの暴言。

大魔王が痼癢を起こす。表現としていま一つ物足りないのは、鷹村が大人しく座っているからだろ。ここがリングならば相手は血塗れ必須。鷹村のモチベーションはたった今、全てが殺意に塗り替えられた。

「小物はこれだから苛つく。ゾンビになりや良いってもんじゃねえ。ゾンビになって客は喜ぶだろうが、コーナーで待つやつのこと考えてんのか」

なにもかも上手くないかない。

なにを上手くやりたいのかも、ブチ倒したい相手も目の前にいない。

スーパー・ミドル級王者、ストリクス・ワール。

ライトヘビー級王者、タイム・フェザント。

2つ上を見るだけでも癖の強い戦績のボクサーがいる。その先に辿り着くまで、あと何年待てばいいのだろう。悪いのは誰か、くだらないことを考えるのを止めたのはいつか。

言っても仕方がないことを、それでも言い続けるヤツに……。好きなものを負う資格が果たして……。

「プロ失格だ、一步。そこを代われ。」

お前に、コーナーに帰る資格はねえよ」

チラつくノイズを蹴散らす。

嫉妬を否定して、重なる影を投影して。

それでも削られる歳月は止まらない。

誰よりも傲慢な態度に、周りを曇らせて。

コーナーに戻る意味を自問した。

答えは…どこかに置いてきた。

メインイベントを飾るため、空っぽの高揚感に苛立ちを詰め込んで立ち上がった。

ハンマーナオに託すもの

雨雲が空を覆い、道行く人が空にため息を吐く昼過ぎ。

青森県某所、八戸拳闘会事務所にてその発表が行われた。

「ナオ！日本フェザー級タイトルマッチ、3ヶ月後に決定したべ。もう、後戻りはできんくなった」

おっとりとした風貌、童顔寄りの男性の背筋が伸びる。

山田 直道は八戸会長の言葉に強く肯く。

ナオという呼称は、直道のリングネーム“ハンマーナオ”から取っている。

「相手は今井 京介。2度の防衛は1ラウンドK.O。将来を有望視される挑戦者たちを、スピードと攻撃力で振じ伏せとる。速さだけなら日本フェザー級に敵さおらん」

スピード勝負での敵無し。

それは天才児、板垣 学のことも含めた言葉だ。

日本王者決定戦、フットワークを武器とし、好敵手でもある板垣を1ラウンドK.O。観客の予想を遥かに上回る決着となった。

東洋にまで視界を広めても、宮田 一郎しか板垣のフットワークについていける選手はいない。

自身が板垣に一撃を打ち込む姿すら想像出来ていなかった。そんなおり、京介は板垣を速攻でもって叩き伏せたのだ。

「今井は幕之内に強い拘りさもつとる。ナオさ幕之内と戦ったべ？3ヶ月後の今井、過去最高のパフォーマンスでお前ば叩き潰しにくるのは間違いない。

けんど……いまのナオさ今井倒す術もつとらん。

なにもかも、あと一押しがない」

その事実が直道との実力差を表していた。

「…それでも、決めたことです。僕ができる先輩への応援は、これくらいしかできません。

現役のうちに、あの人に見てほしい姿がそこにあるんです」

彼の両拳は僅かに震えていた。

改めて告げられる言葉。

決定打はある。しかし、それは通用するほど甘い相手ではない。“タネ”が割れている以上、小細工どころか当てること自体が困難だ。

直道には、今井 京介を王座から落とす実力が足りていない。挑戦すること自体、無謀なことだ。

八戸会長は全てを知ったうえで、老いた身体で大きく胸を張る。

「ナオを気後れさせるために事実を言ったんやなか。今井の全てを上回って勝つために現実ば再確認した。

……秘策がある。今井さ倒すのに欠かせない男おる」

「秘策、ですか？」

直道の言葉に頷くと八戸会長は入り口に視線を向ける。

ガラリと音を立ててドアを開け、黒人男性が笑顔で入室してきた。

「こんにちは、初めまして」

丁寧に一礼をして視線を交わす。

異様な訪問者はナオを驚かせる。

「彼はジェイソン・オズマ。昔、うちのジムにいた。いまはOPBF ジュニア・ライト級ランカーさしとる」

「し、知っています……！フックを武器にK・Oを連発していることで話題に上がりますから！」

興奮気味に身を乗り出しながら、オズマの差し出した握手に両手で応える直道。

ジェイソン・オズマ。

かつて新人王トーナメント第1試合で幕之内 一步と対戦。

4回戦とは思えない迫力ある試合を繰り広げ、惜しくもK・O負けとなった。その後は復帰戦でK・O勝利を収めるが、基地の異動により本国へ帰国。

アメリカでもボクシングを辞めることはせず、重量級世界チャンピオンが在籍するジムへ通い、プロへの道を再び掴み取った。

戦績は10勝3敗。

負けのうち1つは幕之内、残りのうち1つはヴォルグ・ザンギエフ

との試合。

ヴォルグの世界挑戦以前、全団体世界ランカーから嫌われ避けられていたヴォルグとの試合をオズマが望んだ。

4ラウンドK.O負けとなったが、ヴォルグの試合間隔に穴を開けること無く世界戦に繋げた影の功労者である。

「ありがとう、ナオミチ。」

でも、気負わないで。いまはただ、ボクシングに向き合って、最高の自分を見つけてほしい」

「…まさか、秘策というのは!?!」

ヴォルグの世界挑戦後のインタビューで知った情報を脳裏に羅列しながら、声を震わせて八戸会長に言葉を求める。

「そだ。いまから1週間、ワシとオズマでナオの武器さ仕上げる。今井ば1ラウンドK.Oするつもりで鍛えていく」

「手加減しない。勝つための方法、練習あるのみ。」

一生後悔しないため、いま踏ん張ってください」

最後のベルト挑戦。

「日本一、必ず獲るぞ!」

「よろしくお願ひします!!?」

感謝を込めて一礼し、思いもなかった助っ人、オズマと共に過酷で駆け抜けるような時間は始まった。



八戸会長は直道たちが退出したのを確認して、机の下に隠していた己の両拳を持ち上げる。

「……今井にはオープンハンドのような反則は通用せん。泥臭く、噛ませ犬としての戦い方は叩き伏せられる」

己の実力不足が、自分のボクサーの足を引っ張っている。

この事実が幕之内 一步を前にして痛感させられたこと。

オズマ、そしてハンマーナオは幕之内に敗北を喫した。

「ワシに策はない…。オズマ呼べたのも運さ良かった。声を掛けて、

偶然来てくれただけだべ…。

1週間…！オズマは休暇を揃えて遙々来てくれた。この時間さ無駄にはできない。ナオの努力、踏みにじりたくなか！」

試合の組めない貧弱さに何度絶望したか分からない。

時間が経ち、トレーニングを積んで実力はついた。だが、周りは直道のタフさを嫌い、八戸拳闘会という年中金欠ジムとの対戦の非合理性で避けられて復帰も見送り続けるしかなかった。

「じゃけど、こんな老いぼれの弱音さ見せるわけにやいかん。

幕之内を励ましたい気持ち、曇らせる資格なか…。

最後の試合になるなら、勝たせたいんがトレーナーの心情じゃ。例えナオの居らんとくころでも、己の情弱さ嘆く暇は無い」

時間を置いて、ひっそりと復帰し試合を大急ぎで組んで、ようやく漕ぎ着けたタイトルマッチ。

「諦めん。これがワシの最後の教えだ」

全てを教え、最後に残るモノを授けるため。

八戸は魂に喝を入れ、事務所をあとにした。



八戸拳闘会のリングで2ラウンド中盤が過ぎようとしていた。ガードの隙間をこじ開ける滑らかな曲線が直道の頬を打ち抜く。

「ぐ、あ…!？」

「もつと、腰下げて。ガードが無理ならダッキングです」

立て続けに反対から迫る風切り音に反応し、無理やりガードを割り込ませる。しかし、ガードは気づけば破壊され、斬り返しのフックが頬に直撃、リングに倒れ込んでしまう。

(ツ~~~~!?)

なんていうフックを打つ人なんだ…。ダッキングする直前を狙ってフックを打ち込んできたぞ!?

それに、僕が軽々と吹き飛ばされるなんて…)

豪快に飛んだ直道を見て、驚きに染まったのは当の本人。

「OH!? 大丈夫デス……。ごほん、さあ休むかファイトか選びなさい」

しかしキリツと表情を引き締めて、直道に背中を見せながら続きを促す。

(あと、内面は優しい人みたいだ)

(オズマ、厳しくは頼んだけど、お前には似合わなかったな……。けんど今更言いにくい。真面目すぎんが、そこがお前の取り柄なんだけんど)

立ち上がり、スパークを再開させる。

ヘッドギア有りとはいえ、直撃すれば失神も夢ではない威力。

(日本人にはない柔軟で強靱なバネ。鮮やかすぎるフック、そこにジャブのフェイントも混ぜてくる。とてもじゃないが、カウンターなんて合わせられない)

この日、オズマに拳が届くことはなく。

3度のダウンを味わい、幾度ものパンチング修正を行いスパーク練習は終わる。あとはひたすら反復練習だ。

―翌日―

リングに上がり10分も経たず、オズマの猛攻によって膝をつく。肩で息をしながら思考を回すのは、とある異変のせいだ。

(昨日とは動きが違う。フックを打つ回数が格段に減った。代わりにボディ、ストレートのコンビネーションで捕まってしまう。…まるで別人だ)

立ち上がり、再開を促す。

その直後、低姿勢から突進するオズマは直道と密着しインファイトを強行する。

(なにより…頭を突きつけて来るから荒くて仕方がない。いったいどうしたんだ…?)

(……)

インファイトに臨めば打ち負ける。直道の打つ距離より短く、背後に貫通する拳に辛うじてガードで耐え抜いたときブザーが鳴る。

(ハア、ハア……。いけない、昨日のオズマさんとイメージが違いすぎて、このラウンドもなにもできなかつた)

(……………)

コーナーに戻り、息を整えながらコンディションを確認する。

まだ行動に支障は出ないと解り、ならばとインファイトの対応に考えを巡らせて。

(流石のインファイトだ……。懐に潜り込まれたらガードで手一杯になる。このままじゃ、今井さんにだって打ち勝てない——)

整ってきた息が一瞬乱れた。

それが気づきからか、驚きからか、それとも感嘆からなのかは直道にも分からない。ただ、無意識に振り向いてオズマと視線を交えたことで確信したことがある。

(いや、待て……。さっきの動きは!?)

(分かりますか、ボーイ。ボクはナオミチの対戦相手のことを知っています。会長さんに聞きました、ビデオを沢山観せてくれました)

心当たりがある。

オズマの急なスタイルの変更、インファイトには何度も映像で観た人物の姿と重なるものがあるのだ。

(全て、キミのために。ボク、心を鬼にする)

(なんて人なんだ。僕の対戦相手を知って、そのスタイルに限りなく近づけてくれているんだ。

一晩で仕上げてくれたのか……?)

：オズマさん、貴方は本当に優しい人なんですね)

オズマは今井 京介を知っている。

正確なことは分からないが、兎も角……彼はファイトスタイルを今井に寄せて、攻略の糸口を掴ませようとしている。

(だから、すべてのフック教えます。キョースケ倒すタメにボクと会長の武器の使い方方を身体に叩き込む。それが短期間で教えられる、ボクのベストだ!)

直道は頬を叩く。

もう2ラウンドも無駄にしたことを後悔し、直ぐに前を見る。

(全部、タイトルマッチだ。どのラウンドも落として良いはずがない。だからリングに立つ以上はタイトルマッチなんだ)

意識をより尖らせる。

オズマ、そして会長の厚意に応えるため。

ここがスパーであることを忘れて、眼前の王者に飛び込んでいった。



オズマの滞在期間1週間はあっという間に過ぎていった。

「オズマ、本当に助かった。感謝してもしきれん……！」

「ボクのほうこそ、皆さんと会えて良かった。それにファミリーのためなら、いつでも駆けつけマス」

八戸拳闘会の面々が見届けるなか、オズマは1人1人に別れの挨拶を告げていく。

最後にオズマが立ったのは直道の前。

練習のときの厳かな表情はどこへやら。

本来のオズマの顔が直道を直視する。

「相打ち……懐かしかった。」

ボクと幕之内、互いを知ったのが相打ちからだっタ」

スパーを重ねるにつれてダウンは減り、6日目にして直道はダウンゼロにまで辿り着いた。

最終日、遂に直道はオズマからダウンを奪ったのだ。

「オズマさんのおかげで勝ち筋が見えてきました。この恩は、ベルトを獲って証明します」

オズマが差し出した手に応えて、頭を下げて感謝を伝える。

顔中湿布塗れ、それでも溢れんばかりの感謝にオズマは頬を緩ませる。八戸拳闘会は本当に暖かい場所だと、心の底から喜んだ。

「もしダメだと思ったら……負けそうになったら、そのときは相手も同じように心が挫けそうになっていマス。だから、そんなときは前へ進んデー！」

直道の肩に手を置いて、オズマは別れの言葉を残す。

「ボク、マクノウチに負けました。ナオミチの尊敬するボクサー、あのときは痛くないフリしてた。アレ強がり。真っ直ぐで、思わず手が竦んだ。」

ナオミチ、マクノウチと似てる。だから進めマス！」

負けそうなときに必要で、勝ちたいときに背を押ししたい一心で励ます。当日、応援できないからこそ、3ヶ月後の直道に届けるつもりで過去を贈る。

「次が最後のリング、そんなものは試合終わって決メル。」

けど、最後の試合になったとしても後悔しないように、全力を相手に見せて。

そうすればマクノウチにもキツト伝わる」

オズマの真意は言わずとも、直道や八戸会長にしつかりと伝わった。

「ナオミチの拳、会長の拳、ジムのみんなやママさんの拳、それとボクの拳、ベリーベリーストロング。」

期待は良いことばかりじゃない。けど期待、拳に宿るもの。会長言ってた、期待は想いだと。

ボク、ナオミチが勝つと信じています。けっば^頑張^張って！」

最高の激励を残し、手を振りながら八戸拳闘会をあとにするオズマ。

その背中が見えなくなるまで、直道は手を振って見送った。

駆け抜けるような3ヶ月を猛特訓に費やし、試合は瞬く間に訪れた。

今井 京介の征く道

日本フェザー級王座3度目の防衛が決まった次の週。

音羽ジムのリングでは2人のボクサーがスパarringsの真っ只中、ヘッドギア有りとは思えない切迫した雰囲気放つていた。

「おい、本当にスパークかよ…」

「かれこれ3ラウンド、休まずに打ち込んでるぜ」

「今井さん、ベルトぶん獲る勢いだな…」

1人は日本フェザー級チャンピオン、今井 京介。

左右の連打、下への打ち込みを織り交せて本番と遜色ないスタイルで臨んでいる。風切り音を聞くだけで本気度が知れるほど、相手を容赦なく叩き伏せる意思を理解できた。

しかし、どれも不発。

頬を、肌を掠めることもできず、ミスブローとして次々と処理されていく。

「今井さんの猛攻を近距離で全部避けれるのか!？」

「日本チャンプと東洋チャンプであんな差があるのかよ」

「いや、大きく避けてるから宮田さんも余裕はなさそうだぞ」

相対するのはOPBFフェザー級チャンピオン、宮田 一郎。

板垣を捕まえる脚力、瞬発力を最短距離で躲し、そしてカウンターを一閃。K.Oに匹敵する炸裂音がジムに轟き、練習生たちが息を呑んだ瞬間。京介の身体が1メートル退き、急ブレーキを両足で行う。見上げれば、両腕で一撃を防いだ京介が苦渋の声を漏らしていた。

「今度は止めた!」

「けどバランスが崩れたぞ」

「宮田さんが倒しに行った!」

確実に顔面を打ち抜く右ストレートを、誰もが呼吸を忘れて見届ける。ただ1人、京介を除いて。

ヘッドスリップ、上体逸らし、そんなもの京介には出来ない。この場でガードが間に合わない以上、やることは1つ。踏ん張った足で前に押し出し、右拳を打ち出した。

「っ……！」

「が、あア……ッ！」

京介の拳は宮田の頬を掠め、逆に宮田のカウンターは顔面中央を矢的の如く打ち抜く。たった一瞬、京介の意識が全ての行動から切り離される。

宮田が返しの左フックでトドメの一撃を放り込もうとして。

「よし、そこまで」

トレーナー、父の待ったがかかる。

左フックは顔面に触れるに留まり、そのまま尻もちをつく。身体が動き始めたとき、宮田の意識はリングから逸れており、状況を大方理解した。

「何故だい、父さん」

「熱くなりすぎだ、時期を考えろ。お前は1ヶ月後に防衛、今井くんは3ヶ月後だ。減量も始めている、詰め込みすぎるな」

「……………オーケー」

そうしてグローブの紐を緩め、宮田はリングを降りる。

あとに残された京介は天井を仰ぎ、まだ遠い背中を再認識した。

「根を詰めすぎじゃないのか。」

3ヶ月前からそのペースじゃ、そのうち筋を痛めるぜ」

スパ―後、身体を休めた京介が黙々とサンドバッグを叩いていると、宮田が声をかけた。

強打を打ち、見ているほうが同情を寄せるほどにサンドバッグは揺れ動いている。自身への労りが欠けたよう見えた宮田は、京介の心境を探るために接触した。

「ハンマーナオは成長してリングに上がる。」

「いまの俺では勝てません。必ず追いつかれて、負けてしまう」

「……………なに？」

予想外な返答に思わず声を漏らす。

宮田はハンマーナオのデータも知っている。

幕之内と対戦した選手の戦績やスタイル、集められるものは全て手元にある。そこから京介のタイトル防衛の話を聞き、再度ハンマーナオについて情報を調べていた。

結論は6：4で今井が優勢と見ている。

勝敗で言い切らないところは宮田の人生経験からだ。

「感覚で分かります。追いつかれる雰囲気を感じます。やつは、俺のすぐ後ろにきている」

なにかの視線を感じた素振りでも背後を確認する京介を見て、ボクサーとしての感覚がそうさせているのだと理解した。

「……………良い熱だ」

もう言うことはない。

京介の体勢を確認した宮田は背を向けて出口に向かう。

グローブを肩に掛けたとき、深呼吸が聞こえたかと思つた次の瞬間。

「宮田さん、貴方は感じるものがないんですか？」

「……………どういう意味だ」

チクリと。

肌に針が刺さつたような感覚に不快感を覚え、京介の発言の意図を問い返す。

その意味を、心のどこかでは解っていないながら。

「幕之内 一歩以外に負けない、そう確信しているのか？と聞いています」

宮田 一郎の現状を非難するとも聞こえる言葉。

京介は宮田のことを嫌ってはいない。わざわざジムに足を運んでまでスパ―をしてくれる宮田に感謝すらしている。口下手ながらも至らぬクセを指摘する姿勢には尊敬すらある。

そして宮田の減量苦、遠のいている夢のことも耳にしている。

宮田本人の口からは決して弱音など聞かない。

寧ろ、幕之内との対戦を熱望する意志しか知らない。

だからこそ、こう言いたいのだ。

なぜ宮田 一郎は動かない？と。

「負けるさ。負け続けて、ここに居るんだ」

その返答が京介の求めたものかは本人には解らない。

立ち去る背中では酷く痩せ細り、減量苦以上の苦悩を垣間見た。



それは数ヶ月前、幕之内 一步の世界前哨戦敗北後にまで遡る。

右ストレートのカウンターによって失神K.Oとなった幕之内。あまりの惨状から容態が気になり、もし邪魔でなければ様子を見ようと控え室に向かったときのこと。

通路をあと1つ曲がれば控え室に続く道に出るところで、曲がり角に立ち聞き耳を立てる人物を発見する。

「あれは……ハンマーナオ？」

幕之内とタイトルマッチをしたときの面影はなく、短髪でおどおどしい容姿のフェザー級ランカーがそこにはいた。こちらに気づくことなく、曲がり角の先をジッと見つめていた。

誰がどう見ても不審者だ。試合を控えた鷹村 守、たったいま試合を終えた幕之内が直ぐそこにいるのにいただけでない。注意しようと踏み出したとき。

「限界が来てるんだよ、一步の身体は。」

——だからもう、諦めろ」

鷹村 守の冷酷な言葉が廊下を駆けて耳に届いた。

「…はっ。」

数メートルは離れているのに、すっかりと耳に言葉が残る。だどいうのに言っている意味は咀嚼しきれず、しかし根本だけは飲み込めたのか意識がクラリと視界を揺らす。

少し視線を落とせば、ハンマーナオの両拳は固く握り締め震えていた。あれは恐怖ではなく、怒りによるものだ。なにせ、自分が同じく

両拳を震わせているからだ。

怒りの矛先は鷹村。

なぜ、幕之内を引きずり落とすような言い方をするのか。

なぜ、物を捨てるような感覚で諦めろと言えるのか？

なぜ、お前は安堵したように発言できるのか……！

「…………それは小僧に聞く。お主は試合に集中せい」

その後、即座にその場を離れた。

あのまま居ては怒りに塗れていただろう。そうならば世界の頂点を防衛するボクサーに試合前に喧嘩をふっかけていた。それは同じボクサーとしてやってはならない。

だから、早足で離れた。

きつと、ハンマーナオも同じだったはずだ。

俺のあとを追うように離れたに違いない。

なにせ俺たちは、同じボクサーに憧れているから。

—
—
—

あのときのことは誰にも話していない。

話せるはずがなかった。

俺の知る限り、鷹村さんと幕之内さんの仲は悪くない。引退を促す

にしても、ああも毛嫌いする言い方は絶対にしない。

だというのにあの態度。なにが起きたのか、本当は知りたい。

好敵手である板垣に聞けば情報は得られるだろう。

「…………俺は信じている。幕之内 一步は終わらない。あの人タダで負けるはずがない、そして何もせずに復帰もない」

全ての困惑を飲み込む。

少なくとも、自分がやるべき事は眼前の防衛戦を乗り越えて東洋に行くこと。余所のジムに首を突っ込める余裕はない。

「だから俺も」進める。

お前も、簡単にへこたれない。そうだろう、学」

渾身の右ストレートを放ち、そう呟く。

そして3ヶ月間、ハンマーナオ対策を尽くし切り、今井 京介は日本王者の看板を背負い試合会場へと赴いた。

今井 京介VSハンマーナオ

陽が暮れ、夜は音も無く訪れる。

その日はやけに澄み渡る夜空で、輝く星を見上げたら嫌なことも忘れることは間違いない。しかし今宵は星空の刻ではない。

行き交う人々の興味は地上に燦々と輝く大阪府立体育館。隙間なく埋まる観客席は、試合を早送りするような感覚で見続けていた。とにかく試合が終わるのが早く、後半になるにつれて勢いと歓声が上が

る。そんな夜も、じきに終わりを迎えようとしている。

『フェザー級に舞い戻ってきた男が一人。』

15勝1敗、ジュニアライト級から復帰し1年半で2度目のタイトルマッチへたどり着いた。過酷な連戦の理由は一つ、そこに憧れの先輩がいたから！』

幕之内 一步との戦いを最後に、直道の容姿で戦ってきた。

直道は、鴨川ジムの内情が良くないことを察している。

鷹村の様子を見れば一目瞭然だ。直道が練習生、そしてプロ試験に合格するまでの鷹村とは別人もいいところ。青木、木村、幕之内は彼の少なくとも暴虐で悪影響を受けていると予想できる。

鷹村になにが起きたのか。

直道は予想ができていた。

しかし、言葉は届かない。

なにも持たない直道の言葉を鷹村は聞かない。

だからこそ、幕之内 一步にこの姿で戦うハンマーナオを見てほしい。

厳格にボクシングと向き合う姿だ。

挑戦を諦めない人は貴方だけじゃない、と。

『ならば王のもとへ行くのは道理。』

吹き荒ぶ王道を押し退けんと、かつての姿を誇りに堂々のリングイ

ン！』

2度目のベルト挑戦の舞台を踏みしめる。

(考えることが思い浮かばない。

なにも考えなくて良いくらい、悔いのない時間を過ごせたからかな)

泣いても笑っても、これが最後のタイトル挑戦だということを理解している。だからこそ心身は自分でも驚くほど落ち着いている。八戸会長、オズマさん、ジムの人たち、そして母に支えられて立つリングは重圧感がない。

普段のコンディションよりも高く、程良い緊張感が戦意を研ぐ。

コーナーから前に踏み出して、正面に一礼をする。

次に右へ向いて一礼、そのまま反対に向き直り一礼。

最後にコーナーにいる八戸会長へ姿勢を直し一礼。

感謝を込めて。

勝利に向けて。

憧れの人と同じように、いつも通りの自分でいられるように礼儀を伝えた。

(見ていてください、会長。僕の…最後のリングです)

ハンマーナオの意思表示が終わったとき、赤コーナーから歓声が沸き起こる。

『3試合連続1ラウンドK.O.、圧倒的差をもって挑戦者を恐怖の底に叩き落とす王者が登壇！』

先頭を行く音羽会長はフェザー級王者のベルトを掲げ、威風を切りながら歩く。

後ろに続く今井 京介は淡々と歩く。

京介の表情は柔らかい。それはあくまでも、表情が分かりやすいという意味であり、決して闘争心が欠けているわけではない。

見つめる先はリング、先導する者がいなければ駆け上がるかのよう
に瞳は闘争に手を伸ばしている。

『スピード、パワー、ともに日本一級品。

フェザー級驚異の撃墜王は今宵も1R、K.O狙いだ！』

リングへの階段を上るごとに目が開かれていく。

熱視線が交わったのはリングを踏みしめた直後。

『前座セミアイナルを飾るのは日本フェザー級チャンピオン！』

今井 京介、いま堂々のリングイン!!』

京介の表情は板垣との再戦のときに似て滾り続けていく。

お淑やかに見える瞳には、リングに上がる者のみ解る言葉が浮かんでいた。

“奪い獲ってみろ”

『さあ、勝負の第1ラウンドが始まった!』

試合開始の合図とともにガードを固め、両者は合わせ鏡のごとく同時に向き合う。

(勝負の山は開幕。3試合連続1ラウンドK.O、幕之内さ意識した記録だが被弾はほぼ無い。

そんな相手がナオにこれまで以上の殺意を向けとる。負けるな、ナオ。そげな八つ当たり圧し返してやれ!)

怯えなど許されない。

リングに上がった瞬間、いかなる地点であれ不屈の戦意を持たなければならぬ。

過去相対した全ての拳とのやり取りは、いまこの場所でひととき忘れる。

王者への挑戦、そして王者としての心構えは両者がない。

あるものは一つ。

幕之内 一步の拳を知るか、否。

京介も、ナオも。

交わした視線が、好敵手との緊張感を上書きしていくのを待たずに身を戦てよがせた。

『両者同時に飛び出したッ!』

(1ラウンドで僕を倒したいというなら、僕はアナタを1ラウンドで王座から引きずり落とします)

(そう来るだろうと思っていた。お前ほどの打たれ強さを1ラウンドで沈めれば、東洋に行く自信になる)

リング中央、直線に踏み込む両者は左拳を構え終える。オーソドックスから放つジャブ。

誰もが開幕の様子見だと理解したとき。

ナオは発射のために緩めた左拳、そして脱力した肩と脇を反射的に締め込んでいた。

瞬間、ナオの身体は停止した。

(づっ!?)

強引、その一言に尽きる。

日頃の修練からは考えられないほど荒々しく、投げやりのごとき袂れを見せるジャブがナオの左ガードを打つ。

「京介のやつ、あとのこと考えてないな」

「ジャブだけで山田くんを止めた…!?!」

声を漏らしたのは駆けつけた板垣と幕之内。

戸惑いの声は板垣、幕之内だけではない。

会場のあちこちから、京介の喧嘩腰の先制に物珍しいと声を漏らしていた。

(…いや、違う)

受けた衝撃と相手の眼を照らし合わせて合致させる。

京介の眼に怒りや嫉妬心は見えない。

純粹に、ハンマーナオを倒すための初手。観客の困惑をも引き出す、ナオの心情に揺さぶりをかける一撃。

それがなにより挨拶であり、ナオに対する評価。

油断や奢り、練習の怠りなど一切ないと知る。

(臨むところだ…!)

開幕、様子見にインファイトを選ぶほどの忙しなさ。

両者踏み込む足に迷いはなく、初めからわかりきったことを意味する。

続いて放たれる京介の右ストレートに、左ガードを上げて前進。重心を落とし、ナオも同じように右を構え、右と右のカウンターを合わ

せる。

(魂胆が見え見えだ！)

迫るナオの右を見ず既にダッキングを実行。

続けざまに放り出す左アツパーがカウンターとして、ナオの顎を跳ね上げた。

(ぐっ!?)

『オープニングヒットはやはりチャンピオン!』

だが、腰は浮かない。

京介の拳は振り抜くことなく、ナオの顎を打つに留まる。

打たれながらも逸れることのない視線が京介の足を動かさない。

ナオはその場で右脚の親指を外に回し、僅かに残る力を左拳に乗せてボディを放り込んだ。

(っ！それが突破方法か！)

京介も、ナオも最初の拳のやり取りを終えて、最初に拳を止めたほうが流れを持っていかれると判断を下す。

ステップを最小限に、強打者の意地が両者を焚きつけた。

ナオは右脚の親指を内側に戻して右ストレートを選ぶ。

京介は左アツパーを顎に引き戻し右ストレートを放つ。

鈍い音は2つ。

歯を食いしばる人間も2人。

『両者の額に右と右が直撃!!?』

だが耐える、まるで効いていないと退がらない!』

右を戻す瞬間も視線を外すことはない。

立ち位置と重心から、次に最適な行動を取る準備に入るからだ。ほんの一瞬、両者の決断は全くの同時。

次弾、両者は別々のパンチを選び取る。

ナオは左肩を右に傾け、フックの動作を見せる。

京介は左ジャブを選び、ナオの左フックの軌道から外れるように半歩バックステップを刻む。

(これは…!?)

次の瞬間、真左から飛んできた拳によって、顔は左側へと撃ち抜か

れていた。ナオの左フックのみがヒットし、カウンターとして今井の攻撃を寸断した。

僅かな隙間、ナオはステップインし、視界の外から右ボディを叩き込む。

(チっ…!!?・出し抜かれたッ)

数種類あるフックからナオが選んだのはバックフック。後退し、相手のパンチを交わしながら打つロングフックである。

手を伸ばし、拳を緩ませながら弧を描き、ヒットする直前で拳を握り締めて威力とスピードを上げるロングフック。

八戸会長直伝のフック、その使いどき。それをオズマがフックに繋げる判断力をスパ―で鍛えたことにより、ナオは京介を相手に主導権を奪い獲ってみせたのだ。

「おっしやあー！いいぞナオ！」

「今井ガード上げろ！流れを掴ませるな！」

両陣営が声を張る。

(ガードを、上げ――!!)

コーチの声が届き、脳が理解するよりも先に映像が脳裏を過ぎる。それはハンマーナオの研究過程で注目していた、とあるパンチ。最も警戒するべきだとしていた危険信号が全身に駆け巡り、トレーナーの声を警報音で掻き消した。

咄嗟にガードを下げ、体勢を起こす。

ボディへのガードのみを目的とし、テンプルに対するパンチを考慮しないブロッキング。その場だけを考え、あとに繋がらない雑さ。京介のボクシングには中々見ないものだが、直感は現実となった。

(さすがに研究している。真ん中は割れない)

動作を見ずのガードは、鳩尾に打ち込まれるはずの右拳を押し留めていた。

(マグレですら鳩尾は打たせない)

幕之内さんにすら効く拳だ、油断できん！)

ソラー・ブレキス・ブロー
鳩尾打ち。

ナオがかつて幕之内との対戦で使用した、一撃で動きを止めるボ

デイ打ち。決まれば地獄の苦しみとともにリングに沈む、ボクサーが試合中に受けてはならないパンチの代表格だ。

ナオはこの一撃を狙い打ち込むまでが巧い。

パンチ力による衝撃も加わり、当たればK.Oに繋がる。だから警戒される拳で、意地でもガードする必要があった。

(だけど、僕の回転力を舐めないでください！)

無論、ナオたちはここまでも織り込み済みである。

瞬く間に切り返す左フックがノーガードの右顎を打つ。

負けじと左アッパーを返す京介に対して、折り畳んでいる右で外に払い除け、右アッパーを放つ。右を受けながらも、京介は払われた左拳をオーバーハンド気味に振り回した。

(俺の観察力を舐めるなッ!!)

切り返しの速さは申し分なく。ゆえにナオの右拳が即座に側頭部に戻ったとき、左拳の襲撃を覚悟した直後にスウエーを実行する。

スウエーした理由は単純。

ナオの肩の動きを見て、下から拳を上げるものだと確認したからだ。ボディにはガードを置いたため、例えば右を強引に打ち込まれてもアッパーカットで反撃できる。

両者、己を信じて利き足に力を込める。

そして、打撃音が会場に響き渡る。

『間一髪！ハンマーナオのカウンターを見切っていた！』

ハンマーナオの左拳が京介の右ガードに妨げられる。

速く迫るも身体に届くことはない。左の着弾を見届けて、呆気なく弾かれる左がナオの肩まで跳ねる。意識を下に向けるための小細工のつもりだったのだろう、と威力の無さを結論する。

反撃のために右拳の準備を始め、即座に視線を上げる。オーバーハンドを叩き込んだ左が、主導権を取り戻すために戻ってきた。

(鳩尾打ちに意識を向けさせ、本命は右ストレート)

ナオの壇上に踏み入れる。

左拳を真正面からの一撃を守るために備え、右拳の準備を整える。「スウエーすればボディ打ちという二段構えか。ならこちらは踏み込

んで右を被せる！」

距離を一息で詰めたことにより、ナオの体勢は右ストレートを放つには不十分すぎる。左拳は論外、腰を入れて打つよりも先に王者の一撃が放たれるのは誰が見ても明らかだ。まだ着地も定まっていない左足を他所に、京介の右ストレートは利き足から力を汲み上げた。

「ナオ…ッ」

右拳が一直線に疾る。

淀みなく、ブレもせず、魅せるように右ストレートが豪快な風切り音を鳴らした。

「——なっ?!」

瞬間、左側頭部に飛来する赤い物体。

名前の確認も出来ず、止める隙間も無い。自分で漏れ出る言葉すら聞き取れず、顔面に身体が引つ張られながら真横に吹き飛んでいく。脳が揺れて思考が纏まらない。そのなかで唯一、自分のことで解ることは悔しさに混ざるダメージ。ハンマーナオは自分よりもうええに行く、という現実だった。

「今井イイイ?!」

「きよ、京介ッ?!」

コーナーサイドでは音羽会長が、観客席では板垣が驚愕のあまり声音を制御しきれない。

京介の身体には力がなく、やがて地面と並行になり、正面から落ちて小さく弾んだ。

『た…た、倒れたあああ！なんと最初のダウンは王者、右のカウンターフックが炸裂！挑戦者、王者を1ラウンドで沈めにきた!!』

開始40秒でいきなりの決着なのか!？」

観客は予想を覆されたことで興奮し、歓喜と興奮の熱を会場に響き渡らせる。

「よーやった、よー狙い澄ました…!」

フックのポジションニングだけなら、お前は日本一だ。それはワシとオズマが保証する！」

八戸会長は静かに、喜びを内心に抑えながらも拳を握り締めた。

予想を遥かに上回る展開、そしてタイトルマッチ初のダウンにハンマーナオの自信をより強固なものにできた。これ以上に最先の良いラウンドはかつて無かった。泥臭く、ときには反則に手を出してダウンを奪うことで生き延びてきた噛ませ犬役から、しっかりと抜け出したと実感していることは間違いない。

過去のイメージを塗り替えるにはリングの上で戦うしかないのだから。



試合の思わぬ展開に一番驚いていたのは板垣だった。

「1ラウンド、それも1分足らずで京介をダウンさせた!? 遅れを取るようなパンチは無かったはずだろ…それなのに、どうして!？」

全ての行動を見たうえで、京介が苦戦するような動作は無いように見えた。ハンマーナオのパンチの当たりどころが悪かったのか、というほうにしか考えが落ち着かない。

混乱気味な板垣に幕之内が知る限りを伝える。

「山田くん……ハンマーナオがフック系のパンチを使うのは珍しいんだ。打たせて打つ、打たれて前進する。僕と似ているスタイルだけど、横の動きは得意じゃなかった」

「じゃあ、今井はハンマーナオのフックに無警戒だったってことですか?」

ギリ、と歯を食いしばる。

パンチ力がなく、急所をひたすら打つてようやく今井からダウンを奪った板垣。こうも目の前で呆気なく、華麗とも言える動作でダウンを奪われる好敵手を見せられては歯痒さで心が埋まっていく。

「…もう立ち上がる。フックが来ると分かれば、京介なら対処できるはずです」

「そう簡単な話じゃないと思う。傍目からは分かりにくいけど、ハンマーナオの取り入れているフックは絶妙に防御の隙間を狙っている。

それに、鳩尾打ちに加えてフックを意識を取られたら、このラウン

ドで巻き返すのは難しいよ。ハンマーナオが勝負を決めることもありえる」

幕之内の評価は最良目などではない。

しっかりと現状を見て、タイトルに臨む姿勢がそう言わせたのだ。

「……………京介っ」

歯痒いながらも否定材料が見つからず、好敵手の立ち上がる姿を見守る。

一瞬だけ見えた横顔には焦りや疲れはない。

京介の意志を垣間見たとき、試合再開の合図が言い渡された。

憧れの拳

側頭部から足元に駆け抜ける熱さで意識が覚醒する。

即座に自身の状態を確認し、両拳をリングにつけて上半身を起こす。ブレる視界を掴み、顎を上げながらやつの思いで足裏がリングと並行になり、10カウント以内の復帰を果たした。

「……………」

ダウンから立ち直った京介が真っ先に確認したことは、ダウン直前の記憶だった。

（な、なんてフックだ……。鮮やかすぎて、打ち終わるまで反応できなかった……。）

左足を、踏み込んでいたのか……！）

ナオの左拳をガードし、手元に戻るのを確認したときに左足の軸を京介の足元に置いていたのだ。左打ちの感触が弱かったのは、京介に反撃させるため。カウンターのために視線を上げさせて、自分もまたカウンターを狙っていた。

敵ながら褒めることしか出来ないほど洗練された動き。

（ヤツはダッキング気味に……。デンプシー・ロールのようにフックを打ち下ろしたんだ）

逡巡し、自らが叩き落とされた一撃に辿り着く。

どこまでを考えていて、どこからが身体に染み込ませたものなのか。

（これまでのハンマーナオとは違う。4ヶ月前までの試合にはフックは多用しなかった。……まだ判断するには足りない、打ち合って徹底的に詰めていくぞ）

（……退く気配はない。きつと僕から情報を引き出すつもりだ。なら、見極め終える前に打ち倒すまでだ！）

見極め、努力を打ち果たすために試合継続の意思を示す。

様子を確認したレフェリーが試合再開の合図を言い渡した。

「残りは2分ある、動き鈍いうちに前さ出ろ！」

コーナーから飛び出したナオは両拳を鼻につけ、接触時の反撃に警戒する。

(勿論です会長!)

駆け寄り、射程範囲に入る手前で低姿勢となり踏み込んだ。

ボディによる一発ダウンを狙われるなか、京介は半歩退がり距離を見定め、ボディストレートを打ち込む。ナオの前進は減速し、ガードした腕が開きかける。それでも攻撃に移行し始めるナオに、僅かに開いたガードへと割り込むようにワンツートを打ち込んだ。

『ツーが挑戦者のガードをこじ開けた!』

(なんて威力だ!?)

(大人しくしやがれ!)

ギリ、前歯を強く噛みしめて己が打ち出す拳に勢いを乗せる。顎を引き、身体の軸を一気に回転させて左拳を軌道に移した。

ナオのガードを通り抜け、右頬に反撃を見舞う。

(立ち直りが早いッ)

左フックを受けながら、京介の動揺の無さに感心する。

ダウン直後の襲撃を止めることに慣れている。いや、この事態を視野に入れて予め練習をしていた可能性が高い。インファイターからの主導権奪還は、ナオだけじゃなく、それこそ幕之内にも有効な手段だろう。

(だけど、止まるほどじゃない!)

ダメージはある。しかし、ナオの打たれ強さは予想を遥かに上回っていた。打ち戻りに合わせて踏み込み、左拳を真下から打ち上げた。

(ぐあ!?)

タイミングが最高に、最悪に噛み合った一撃。

打ち戻しの隙間から顎を上げられて、京介の意識が僅かに上に飛ぶ。次に現れるのは京介の懐に作られた安全圏内。ほんの数秒、体勢を立て直すまでそこは威力のある拳は振り込まれず、勝負を仕掛けるには十分な世界となる。

『強引! 相打ちでも構わないと一気に畳み掛ける挑戦者!』

チャンピオンこれにたじろいだ! 防御に力が入らない!』

(僕が勝てるなら今が最後のチャンスと思え！)

ダウンした直後なら強引に突破できる！するしかない！)

攻撃力極振りの前傾姿勢に移行する。

目の前でガラ空きになった鳩尾に右ボディを打ち込む。

(させるかッ！)

横から振り回すように左腕で右拳の軌道に割り込んだ。しかし、腰に力が入っておらず、被弾は避けられない。鳩尾打ちを逃れたものの、次に待ち構えるパンチを受けられる姿勢とは程遠い。

歯を食いしばった直後、左ボディのコンビネーションをもろに受ける。

ガードは苦し紛れの抵抗。

腰を落とし、ナオの強力な一撃を万全に防がなければ終わりがすぐそこに迫っている。主導権を奪い返すことは簡単ではない。インファイターにペースを握られたとき、奪い返すまでに数発の被弾しなくても、取り返しのない事態に陥ることは珍しくないのだ。

京介は、やるべきことを解つていながら。

(グ、ギ!!?)

あと1秒で整う体勢に辿り着けず、迫る右アッパーにはスウエーを出来るほどの余裕もないまま直撃を浴びた。

間断なく左右のボディが深々と突き刺さる。

響き渡る打撃音。

誰が聞いても分かるほどに手応えのあるそれは、京介の行動に大きく重い枷を付けたと実感させた。

事実、京介の目は大きく見開かれ、苦悶に表情が歪んでいる。たたらを踏み、後退が停止したのは背後に聳えるコーナーポールによるもの。

(これで動きが止まる!!?)

浮いた腰が王座から落ちかける姿を見て、ナオは右ストレートを構える。

油断などない、目一杯にタイミングを手繰り寄せた瞬間。

(――、打ち返せッ!!?)

交差する右と右が流れを四散させる。

(ぶあ?!?)

(重いツ…だが!)

『王者巧い!!? コーナーによりかかり体勢を無理やり起こし相打ちに持ち込んだ!』

絶好のチャンスは、王者の意地と技量で打ち崩された。

ふらつき、安定性のない足場。

ふとした拍子でどうにでも崩れる均衡。

ここを制した者が勝利へと大きく歩み寄る。

(よーやく、止めたぞ…!!)

(あそこから間に合った!?)

とくに京介がそれを自覚している。

3ノックダウンに近づくことなく、過去最強のインファイターに打ち勝たずには寝てもいられない。

覚束ない足元は負けられないという意識ますいでダメージを抑え込んだ。瞳に熱を灯し、眼で語るにはあまりにも膨大な量をぶつける。

開け放たれるスタイルに淀みがない。

突き刺した感情のなかから、眼前で拳を構える男に真っ先に伝えたもの。それは無意識のうちに溢れ出ていた、歯を食いしばりながらも笑う口元てきい。

(急所を打ち抜かれた人の動きなのか!?)

(彼にも日本一になる器がある…!)

なら俺は識もてる全てで打ち勝つしかないだろう!

ナオの精神は怯まない。

だが、試合中に見る血混じりの笑みを放置できるほどの余裕はない。

まだ途絶えていない主導権を加速させるため、ナオはガードを固めて確実に逃げ場を無くす。

背後に下がることの出来ない京介は、僅かなスペースで足場を立て直し、鋭くガードを破るために力を溜める。

そして両者の大砲が火を吹いた。

示し合わせたように互いが互いの左頬に直撃する。頬に手応えのある一撃を浴びながらも、王者は拳を僅かに前方へ流す。身体がやや前傾に調えられた瞬間、一呼吸早く挑戦者へと反撃を見舞った。

反対側からの斬り返しは十分に予想出来るものだ。

ナオは歯を噛み締めて耐え、ワンテンポ遅れて拳を打ち返す。右ボデイが突き刺さる直前、ガードの内側をアッパーカットが滑り込んだ。ナオの拳は減速し、浅くしか入らずに後退を余儀なくされた。

(回転が、上がっている…！)

京介は身体に掛かる負荷を最大限に、かつ最小の動きで拳を放ち終える。一曲集中、最もリラックスできる打ち方を以って更なる強引をナオに押し付けた。

『王者の豪打が挑戦者を押し退ける！』

コーナーからリング中央、打ち合いが再び始まった！』

腕力だけでは越えられない壁がある。東洋、そして世界に目を向けたとき、インファイターの短期的爆発力は寒気を覚えるものだ。幕之内にもまた同じことが言えよう。インファイトによる被弾、損害による減速の最中で豪打に打ち勝つことが求められる。

最小の回転で最大の威力を放つ位置取りは京介の課題だ。ここにかけて、高みへと登りゆくために積み上げてきた練習の成果を発揮し始めていた。

(譲るものか。この場所近距離で負けるわけにはいかない！)

ナオが2発打てば京介は3発。

1つ避けて追撃し、確実に京介自身のペースへと引きずり込んでいく。

「インファイター同士でも、主導権を握るのに幾つもの種類さある。パワーと回転力、ありきたりで一番差が出るところで拮抗したら、次は知識と練習がものを言う」

八戸が拳を握り締めて見守るリング上。

ナオは押され始め、京介のペースに離されそうになっている。

これだって想定のうちだ。オズマとのスパーではもつと打ち負けている。打たれ方が下手だったナオも、日が経つにつれてダメージの

少ない場所へ無意識に動くようになってきた。

現状、誰の目に見ても一気に劣勢となったナオ。あれこそ、本命の一撃を打ち込むためのボクシングをしている。

「相手を識り、倒すために身体を鍛える。長期的に伸ばす体力とは違い、対戦相手に合わせた対策は試合が決まってから身につける。」

そこにはセンス、観察力、そして経験が求められるシビアな時間だ」音羽が両手をリングに乗せるほどに拮抗する展開。

京介はペースを取り戻し始め、強打者との打ち合いに噛み合っている。だが、まだ完璧ではない。ハンマーナオの一撃を緩和するためのパンチも挟み、板垣戦のごとく集中力を注いでいる。

心身ともに、加速度的に消費して疾走しているのだ。

「ナオは懸命に、いまま過去も調べ尽くした」

「今井は慎重に、いまま過去も識り尽くした」

両陣営、ただ選手を信じている。

必殺に繋げる瞬間を、固唾を飲んで見守る。

「ナオ、止まるでねえ。身体に染み込んだモン信じろ」

「今井、そのまま行け。経験を積んで壁を乗り越えろ」

速撃と豪打、真つ向のぶつかり合い。

減速を度外視した主導権の奪還、瞬きを惜しむ王者撃墜への一手。リング上で円を描き、歪に直角を作り突き進み、中央から離れることなく拳が行き来する。

（ようやく実感できた。ハンマーナオの打たれ強さは俺を凌ぐ。

幕之内さんとの試合を観ていたから感覚が麻痺していたんだ。あの人のパンチ力が異次元すぎるだけだ）

チラついた憧れのパンチが京介を成長させる。

ハンマーナオの拳と重なることはない。だが、ハンマーナオが無意識のうちに幕之内を意識していることは読み取れる。

ずっと止まらず、ひたむきに走り続け、拳を握り締めてきたのだ。少しでも憧れに近づくため：日本の頂点に立つために。

（強いわけだ。俺とは違う環境で、ずっと幕之内 一步を追っていたんだから。）

……貴方を倒す。倒して、握手を交わしたい」

ハンマーナオの先に立った者として、同じ志しを持つ男として。

自分の先にいる幕之内の背中に追いついたとき、こんな男と戦えて良かったと伝えるため。京介は誇り高く拳を握り締めた。

（もうフックにも対応し始めている……。打つたび、位置取りを変えて的を絞れないように変えてきた。ミスブローを誘っているんだ）

腰を据えて、度胸を握りしめて、打たれることを割り切ったインファイト。幕之内よりもデیفエンスが下手で、リーチが長くないナオの生命を削る戦法。ゆえに、打たれるなかで最小のダメージに抑えるための受け方をナオは深く理解していた。

（一度コーナーに戻ってしまえば状況整理される。次のラウンドじゃダメだ、ミスを怖がるな…僕には打つことしか出来ないんだから）

全ての土台は幕之内の拳。

打ちかたも、打たれる緩和も、幕之内に習い、教わった。

いまは違う。

あの頃よりも余裕を持っている。八戸会長、ジムの人たち、そしてオズマさん。沢山の人たちに背を押されて、日本一の激情の最中を歩いていられる。

背中を押してくれる人のなかに幕之内 一歩はいない。あの人はずっと先で、想像よりも険しい道の途中で右往左往している。幕之内よりも先にいる、バカでどうしようもなく格好良い一人の男が放つ影牢によって。

（前につい意味がなくても、前に出ることだけは忘れちゃいけない！それが僕にできる、たった一つのことなんだ！）

正解などいつ出せるか分からない。

だから進む。オズマさんに教わったように、苦しいことを一人で抱え込んでしまわないように。これは己だけの戦いではなく、王者との真剣勝負。ここまで打った疲労は、相手に苦渋を負わせている証拠なのだ。

——喉が渇く。

10ラウンドを戦ったかの如く、両者の疲労が積み重なっていく。

——酸素が足りない。

止まれば負けると己を焚きつけ、休みなく打ち合う。

——そして、均衡は崩れた。

「づ、っ……い！」

手数で上回っていた京介は、ナオのリズムを読み取って弧を描きガードを割り込ませた。ジャブを流されたナオは即座に体勢を取り繕おうとするが、既に準備を終えていては敵いはしない。

「う、おオー！」

必殺の右ストレートが一直線にナオの顔面に着弾する。

さらに踏み込み、左拳で悶絶必須のボディ打ちを成功させた。

挑戦者の見開かれる目が如実に語る。

身体の芯に届いた一撃。当然だ、身体をへし折る勢いで放つたのだから倒れないはずがない、と。無意識下で手応えを確信しながら、京介が眼前で目撃したものだ。それはあらゆる苦痛を打ち消す、固い決意だった。

（あのひとを励ますんだ……！そのためリングに上がったのに、あのひとり呆気なく膝をつけてなるもんか……！）

下唇を噛みしめ、数秒の猶予をナオは作り出した。

（学もそうだった……。幕之内さんの周りは、誰もがここから強くなるんだ）

悔りはしない。

もし一度も負けていなければ、きつとここで油断していたはずだ。

板垣に判定負けをしているからこそ冷静でいられる。

負けは悔しく、そして掛け替えのない学び。その成果は何度だって発揮できる、そのうちの一度がここだ。

両者、右拳を握り締めた。

（これが僕の、最後の一步だツ!!?!!?）

（ハンマーナオの渾身が来る……!!?!!?）

両者の右は全くの同時に顔面に着弾する。

勝負の分かれ道はこの先。

拳を打ち抜けるか、どうか。

余力のない2人にとって、打ったパンチを耐えられることは体力を削られることに等しい。打ちきり、余分な力を流して次に繋げることで勝利に近づく。

ありったけを拳に注ぎ込み、最高最上の一撃を繰り出す。全ての経験を宿した拳の衝撃に先に心身が揺らいだのは。

「……ナ、ナオ！」

打ち負け、上体が逸れる挑戦者。

成し遂げたのは、王者の執念だ。

後ろに吹き飛ぶナオは、電飾を眺めながら。

“ナオミチ、マクノウチと似てる。だから進めマス！”

最高の励ましを思い出した。

だからもう一度、苦痛を飲み込むために下唇を噛みしめる。

“ボク、ナオミチが勝つと信じています。けっば^頭張^張って！”

どれだけ動けるかは未知だけど。

なおも、憧れへの一步を忘れない。

(ツツツまツツツだだ!!)

(打ち返してくるのかっ!?)

リングを踏みしめ、一気に距離を殺した。

綺麗に終わる試合など1つもなかった。

今更、終わりを見誤ったところでどうということはない。ここにきて、意地汚く足掻かなくて誰に胸を張れるというのか。

残された体力は両者になく。

一撃、ただのジャブでさえも受け、放つだけで気を失いかけないほどに活動と昏倒の境界線を彷徨っている。肉体の危機で止められるか、意識の切断で終えるか。迫られる選択肢のなか、勝利に漕ぎ着けるものは最早、前を見続けられるかにあった。

だから、ここで諦める姿をナオは知らない。

肉体の限界など知っている。もう目前にある深い底。己の限界の先ではない。これは意識が落ちる場所、奈落であり試合の終わり。ナオのボクシング人生の終了を意味する崖だ。

『挑戦者、意地の突撃！』

チャンピオンもダメージを堪えながら迎え撃つ！』
這い上がれるほど崖は優しくはない。

ならば、起死回生の一撃は眼前。

(狙いは……！)

右拳で構え、見定める先は鳩尾。

一発逆転として申し分のない急所。

前傾姿勢となり、体重を乗せた右拳は直線を描く。

(……だなッ!!?!!?)

肌が炸裂するようにガード音が響き渡る。

それは柔らかく、軽く、速く、そして呆気ない。

(ソーラープレキサスは囷……ッ?!)

(貴方なら、止めると確信していた!!)

容易にガード出来たこと。

そして、渾身にしては貫通しない威力に京介の直感が結論を出した。

事実、鳩尾打ちを単体で狙うなど愚の骨頂。それはフェイントであり、距離を詰め寄るための投げ銭にすぎない。本命は近距離に持ち込み、最強の一撃を叩き込むことにある。

己の限界ギリギリまで身体から体力を引き絞り、最後の1撃を止めたと確信するまで魂の掘削は終わらない。

交わす視線、意味することは単純。

ナオの次弾からボディ打ちが排除されたこと。

京介は勢いに圧され、相打ちも望めないこと。

「狙いはフック……！フィニッシュブローのつもりか!？」

「お前ならいける、叩き込めナオ!!」

ナオは腹の底から二酸化炭素を吐き出し、鋭く左拳で一文字を描いた。

「——ッ！」

視界が白く霞んだのはどちらか。

「ミス、ブロー……!？」

流れゆく身体を追いながら、八戸が絶望の吐息を漏らす。

『王者のダッキングが僅差で先を行く!』

先に間に合ったのは、王者の判断力。

フックを避ける基本、そして反撃の糸口であるダッキングがガラ空きのボディを眼前に捉えた。

(打てええええええええええええええええ!!!!)

両足で力を捻り出し、右拳が威力を増す。

腰で加速させ、貫通力に磨きがかかる。

練習の積み重ねが咄嗟の反撃にも適応し、考えうる最大威力を振り絞り、勝利の一撃は叩き込まれる。

「ぐ、オ……………アア!」

京介の右拳は、ナオの左腕に減り込み、腰ごと廻る左腕によって後方に流された。

(な、ぜ……………?)

あるはずのないガードに気を捉われた。

(違う、それもフェイン——)

直後。

項垂れてしまう己を引き裂くように、ナオの右拳が真横に斬り返された。

受ける体勢など準備していない。

右拳は顔面を穿ち、京介の身体が後方に吹き飛ぶ。

「京介ッ!!!」

板垣の悲鳴が歓声に混ざる。

「打ったと思わせるほどの勢いだっただんだ…!」

ハンマーナオのフェイントが見抜かせなかった」

幕之内はリング上の事態をいち早く察した。

フックの専門家をも欺く、鮮やかに完成された動作。

ハンマーナオの努力が抉じ開けた突破口。

(あとは、倒れるまで…打っただけだ!)

勝利へ駆ける。

たたらを踏んだ京介がガードを構えるよりも早く、ナオのジャブが中心を押し通る。だが京介は耐え、それどころか前傾姿勢に移り腰を

入れた。

(俺も……お、れも、全……力、で……)

互いが最後の一撃として選んだ拳は右。

その瞬間、互いが目を見開き、視線を交わす。

勝利を掴むため、筋肉の疲労、疲労による昏倒を退けて右拳を振り抜いた。

「打ち………かえ——」

ハンマーナオの頬を掠め千切る右拳。

(ああ、チキ、シヨウ……その拳が……)

今井 京介の視線を落下させる右拳。

(幕之……内さんに、見えちゃった)

会場に響き渡る、膝から崩れ落ちる音。

(ああ、あ……勝ちたい……幕之内、一步、に)

ボヤける視界、客席で立ち上がる男に手を伸ばしながら。

(おなじ、リング、に……—)

今井 京介の意識は深い底へと沈んでいった。

動かなくなった王者を見届け、挑戦者は戦いの終わりとともに右拳を掲げた。

1ラウンド2分55秒、ハンマーナオタイトル王座獲得!!?

最後の試合

湧き上がる歓声は体育館を揺らす。

僅差でありながら、圧倒的な破壊力で日本の頂点へと登り詰めた挑戦者に、惜しみのない称賛が降り注いでいた。

『崩れ落ちたあああつ！チャンピオンの拳が空振りし、そのままうつ伏せにリングへ！』

10カウント要らず！レフェリーが手を交差させて試合終了の合図です！王座奪取、ハンマーナオが新チャンピオンとなりました！』
ナオはリングの上で余韻に浸っており、あと数十秒はこのままだろう。

「ナオが幕之内さ伝えたいメッセージ全部詰め込んだ。よー頑張った、本当にありがとう、ナオ…」

八戸会長は涙を流しながら、勝利を果たした自分のボクサーを見ていた。それも数秒のこと、涙を拭うと階段を駆け上がる。

ロープを潜ると、ナオが気付いて満面の笑みを浮かべた。

「会長…僕、チャンピオンになりました…！」

「ああ、しっかりと見てだ！ナオのフックは日本一だ！よく険しい道を走り抜けてくれた…！」

「またも涙ぐむ八戸会長。」

その喜びはナオにも計り知れない。

長年、金欠ジムで選手育成にも苦しみ、何人も挫折して去っていった人たちがいた。そしてようやく、日本一を取ることができたのだ。これほど誇らしく思ってくれるから、この一勝がナオも何倍も嬉しく感じる。

そして、沸き続ける歓声を前にして困惑もしていた。

「すげえ試合だったぞー！」

「幕之内に近づけたじゃねえか！」

「そのまま追いかけていけーっ！」

こんなとき、どんな顔をしていいのか考えてすらいなかった。身体中に駆け回る歓喜がより行動を制限する。まだこの雰囲気に浸っていたいと、そんな誘惑と戦いながら自問し。

(こんなとき、先輩なら……)

答えを幕之内に求めていた。

想像したのは、丁寧な礼を返す姿。

幕之内らしくて、憧れの姿を見てとしてピッタリな行儀。

気付けば身体が動いていた。

ロープぎわに寄り礼をする。

同じように時計回りに、客席にできるだけ近づいて四面方向へ礼を返した。最後の礼を終えると、会場から一斉に拍手が祝福となってナオに降り注ぐ。

祝福を受け取っていると八戸会長がベルトを持ってきた。

かつてない笑顔とともにナオの腰に巻かれ、より一層大きな拍手が

贈られる。

(最後の試合でベルトを巻ける。

それも、先輩がいた場所のベルトだ……！)

ベルトの心地に酔っていたとき、ふと視線が一点を見つめる。

そこには、立ち上がって拍手を送り続ける幕之内の姿。

八戸会長に負けずとも劣らない笑みで祝福されて、この試合が無駄ではなかったと実感できた。

これが最後の試合。

(先輩……やりました、僕にもベルトが取れました……！)

目標達成に大きく近づけたことを胸に抱き、姿勢を正す。

大きく息を吸い込み、ボクサー生命最後の一礼を世界一尊敬するボクサーへ。

(ありがとう……)

送ろうとする途中。

幕之内の隣で立ち上がり、呆然と立ち尽くす男を見た。

「京介……」

それは板垣 学。

今井 京介の好敵手といえるボクサーだ。

(……………また、僕は)

ナオはそのまま姿勢を起こし、リングへと戻る。

「…ナオ？」

ナオは八戸会長に視線を送る。八戸の目は、ナオの瞳に灯る熱を感じとり息をのんだ。

リング中央では勝利者インタビュアーが待つており、挨拶からおめでとうと、ありきたりの流れで始まる。

そして話題は直ぐにきた。

「この試合を最後に引退ということ、とても残念に思います。引退後、王座には誰が名乗りを上げると思えますか？」

「そのことで僕は多くの人に謝り、そして訂正しなければいけません」「え、ということとは…？」

事前の話と違うことに困惑するインタビュアー。

間髪入れず、ナオの視線は移る。

「僕がフェザー級で戦えるのはあと1度です。全力で頑張りますので、皆さんどうぞよろしくお願いします」

視線が交差した相手は、板垣 学。

そう言い残すと再び会場が揺れる。

インタビュアーは終わり、ナオたちは確かな足取りでリングを立ち去っていった。

ナオの宣言に驚いた幕之内は板垣を見る。

「ハ、ハンマーナオは本気…だった。板垣くん…」

「僕を見ていました」

リングに上がれと、言っていました」

京介に敗れてからといもの、ここ数試合で気が乗らず判定勝利しかしていない。モチベーションに大きく左右される板垣のコンディションはいま。

「僕は、あのチャンピオンを倒します」

先輩に追いついて、京介を越えた男を知りたい…！」

タイトルマッチ当日に最高のものとなるよう、精神構造が練り直さ

れていた。泥試合をする気など毛頭ないと、滾る声音が幕之内にそう思わせるほどに。

Next Champion編

ハンマーナオVS板垣 学

2021 spring!!?

『大波乱の日本フェザー級タイトルマッチはこれにて終了です!』

司会が慌ただしい会場にアナウンスを入れる。

『それでは、ただいまよりメインイベント』

今宵、観客たちが席に座るのは日本タイトルマッチだけが理由ではない。

さらに大きく、熱狂が約束された舞台。

『WBCフェザー級タイトルマッチを開始します!』

世界最高峰の1つを目撃するためだ。

冥界送りの拳

アルフレド・ゴンザレスは幕之内 一步との“世界前哨戦”を勝利で飾り、メキシコへ堂々の帰還を果たした。幕之内という脅威を打ち消し、たどり着いた3度目の無敗神話への挑戦。

2度の敗北から成長し、過去最高のコンディションに近づいている。このまま、半年後に挑戦すれば必ず拳が届くと、そう確信して挑戦を申し出た。

『ノーだ』

「……………は？」

受話器の向こうから、リカルド本人による挑戦権の剥奪を言い渡される。

なぜ、も。

待った、も。

『いまのキミとは、試合を組まない』

絶対王者の冷徹な言葉を前にしてしまえば、挟む余地など微塵も無かった。



「くそ、くそつたれ…！」

暗い夜道、男は胸中にある悔しさを夜空に向けて怒鳴る。

「資格がないと言いたいのか!？」

2度も負かした俺には用が無いということか!？」

怒号。

憤慨に塗りたくられる感情。

行き場など始めからない憤怒。

何度、何故を問い直す。

何度も、何故を繰り返し返した。

答えは解っている。

己の無力さ。

無敗神話に手が届かないことを知っているから。

「……………っ、ふ。はは、は」

そんな、下劣極まりない下卑を嗤いで否定する。

それはリカルド・マルチネスを理解していない人間の答えだ。

ゆえに断言する、違うと。

「確かに、その言い分は半分だけ理解する。あんたの背中を追い続けているだけの俺じゃ、あんたにはそう見えるんだろうな」

無敗神話が望んでいるものは強敵ではない。

無敗に泥を塗りたくる無礼な存在を。

神話の玉を完膚なきまでに砕く意志を。

孤独を忘れさせられるような夜を見たいのだ。

「俺は……小さな拘りを棄てる。神話を打ち砕く、生涯最高の準備を整えていくぞ。」

待っている、リカルド・マルチネス」

更なる高み、などと言うまい。

何度この言葉を吐いて負けた。

何人がそう言っつてリングを去った。

こんな言葉を繰り返しては歴史を辿るだけだ。

己が積むべきことは幾らでもある。

憧れを過去のものにする、倒すための手段が足りない。

反省と研鑽に取り組むべく、ゴンザレスは夜の路を駆け出した。

半年後、メキシコにて。

WBCフェザー級タイトルマッチが開催されていた。

『せ、世界王者が悲惨な姿でリングに伏せた……！』

WBAに長年君臨するリカルドからしてみれば見劣りするWBC

王者。名誉と屈辱が付き纏う看板ゆえに、やはりランキング1位とは決定的な差が生まれたもいた。

体力も、精神も鍛え抜かれたディフェンシブタイプ。

WBCフェザー級王者、ビリー・マツカラムはいま、赤く腫れた両腕を力なくリングに投げ出していた。

否、その顔に精気は微塵も無い。

10カウントを告げられることもなく、試合は幕を閉じた。

ビリー・マツカラムはゴンザレスに敗北し、一夜にしてリカルドにも手が届かないことを痛感させられた。メキシコの地で、これ以上ない屈辱に塗れて意識は冥府の底へと沈んでいく。

『世界の壁など無い…いや、とうの昔に越えていた！』

王座についたとき、世界の頂きに辿り着いて夜空を見上げる。思うことは、まだ太陽には程遠いということ。

『挑戦者アルフレド・ゴンザレス、2ラウンド無傷！王者の両腕を壊し、無防備な顔面に止めを刺した!!』

ゴンザレスは、世界の頂きへたどり着いた。

ベルト奪取は過程でしかない。

フェザー級ランカーの殲滅に熱を注ぐ男の次なる獲物は別団体王者。

世界の器を体感し、貪り、そして飢えが加速するのを実感する。王者を倒したことの充実感は大して得られず、直ぐにでも次の対戦を渴望し始めた。

『WBCフェザー級1位、アルフレド・ゴンザレスが圧巻の試合を魅せつけた!!2ラウンドでチャンピオンをK.Oし、新チャンピオンここに誕生です!!!』

経験を欲する怪物が1人、メキシコの地で誕生した。

祝福が注がれる。

それは同時に、リカルドとの差を実感させられる。

リカルドの勝利に祝福はあっても、誰もがそれを当然のことだと認知している。それが世界最高峰、PFP1位に君臨する男。

ゴンザレスはここから、休む間もなく新たな路で追い抜くために駆

け出した。

理性に突き立てる牙

WBCフェザー級タイトルマッチが行われた数日後。

浪速拳闘会、事務所に入った千堂 武士。

ジムに来て練習ばかりで、事務所には呼んでも中々来ないというのに、あまりにも珍しい訪問。ただごとではないと、柳岡は千堂の真っ直ぐな瞳を見て立ち上がる。

それを確認して、千堂は柳岡へと宣言した。

「柳岡はん、あえて断言するで。」

「いまのワイじゃゴンに勝てへんわ」

「千堂、お前……」

開き直りも、甘さもない。

事実を目の当たりにした男の瞳に、柳岡は苦し紛れの慰めすら見当たらぬ。

千堂の好敵手、幕之内 一步を倒した男。

アルフレド・ゴンザレスに挑戦状を叩きつけたのは昨日。

ゴンザレスの試合があることも、王者に就くことも想像に容易かった。

翌日、昼のタイミングで話を持ちかけ、難航すると予想していたマッチングはすんなりと受理されたのだ。

そして今日、淡々と千堂は柳岡に告げた。

負けが見えている、と。

「幕之内とゴンの試合、あれからずっと観てんねん。観て、どうするかはなんとなく分かる。けどな、対峙すればアッチはそれを上回るっちゅーことも想像つく」

ゴンザレスに幕之内が敗れる瞬間を肉眼で見た。

そして、次に倒すと決めたときから幕之内戦のビデオを取り寄せてもらい、ゴンザレスのことを観察してきた。

そうすれば、いつものように自信が付き、突破口は自ずと見えてくる。そう考えて時間は経ち、ついに試合も決まったがまだ雲を掴むように倒し方は定かではない。

「ミキストリ引つ張り出すまでが分からへん。どないすれば、幕之内を打ちのめした男に手が届く……?」

そこだけ、ワイに経験が足りん。まだ負けてもないのに、やる前からこんなん言いたくないねんけど、認めな進められへん」

視線を落とし、握りしめる右拳。

自慢の拳も届かなければ意味はなく。

進むための活路を探し、事務所に訪れた。

柳岡もまた、千堂の様子に気付いていた。

恐らくはゴンザレスについてだろう、と。

だが、千堂は黙々と練習をこなし、練習量を増やして基礎練に打ち込むばかり。自信があるのか、つけるためかも分からない。

たちが悪いのが、千堂自身がなかなか彷徨っていることを認めたくないのだ。ボクシングを好きだからこそその負けん気。長い付き合いから、千堂の行動は凡そ想定しているものでもあった。

「もっとゴンの資料が欲しい。ビデオ、他にないか?」

「……ちよつと待つとれ。各方面に当たってビデオ取り寄せてもらうさかい。数本だけやが、K、O、判定それぞれ2本は意地でも手にしたるー!」

「ほんま恩にきるで。試合で返させてもらおうわ」

すでに知り合いのツテに頼み込み、ゴンザレスの資料を掻き集め始めていた。

不必要ならそれも良し。必要なら尚のこと良し。

千堂とゴンザレス。

戦績に接点のある2人を知るからこそ、柳岡はより一層、千堂に勝利をもたらす想いを強く抱いていた。

後日、有志たちにより手にした数本のビデオを大はしやぎで観る千堂。

同じく、暇な時間を全てゴンザレスの研究に注ぎ込む柳岡の姿があった。



試合当日。

メインイベントー控え室にて。

セミファイナル第1ラウンド、残り1分を切ったとき。

ピクリと目蓋が動き、千堂が立ち上がる。

「もう終わる。そろそろ準備や、柳岡はん」

「今日はまた、えらい気が早いやないか。」

今井の相手、ハンマーナオのことは知つとるやろ。そう簡単に終わるとは思えへんのやが」

1ラウンドK.Oを連発する王者。

柳岡は、少なくとも2ラウンド決着を見積もっていた。

ボクシングの試合がいつ終わるかなど、大抵の人物には予想をつけることしかできない。あーだこーだと、過去の実績から予想をしようとも、そもそも勝敗自体がひっくり返ることも起こる世界だ。

「…………どつちが勝つかは分からん。けどな、こつちが出遅れたらどつちもメインに来そうなくらい昂つとる。」

ゴンザレスを打ちのめす勢いやで」

千堂の杞憂はただ1点。

自身の獲物を横取りする勢いの後続に、振りかぶる拳の宛てを横取りされたくないということ。

ゴンザレスとの試合まで、死ぬほどビデオを観察して、飽きるほど飽きのないシャドウ、練習をしてきた。いまなら幕之内よりもゴンザレスのことを知っている自負を持ち、コンディションは最高のものとなった。

だからこそ、セミファイナルに。

幕之内に向けた熱い拳に負ける訳にはいかないのだ。

「こつちが冷めて出ていったら熱奪われてまうわ。」

漢気、しっかり引き継いでやらんとな！」

千堂 武士は控え室で身体を温め、静かに刻を待ち続けた。

WBCフェザー級タイトルマッチ 記者会見

某月某日。

日本のボクシングファンが注目する世界戦の記者会見が開かれた。横並びに座る4名。

横断幕には『WBCフェザー級タイトルマッチ』と。

太く存在感を放ち、目下に座る両雄の緊張感を引き立てていた。

その片方、今回の挑戦者である千堂 武士に記者が質問を投げた。

「千堂選手、今回のタイトルマッチの意気込みを聞かせてください」
率直に、誰もが記事に起こす最初の質問。

慣れないスーツを着こなし、目を閉じて腕を組んでいた千堂がゆつくりと視界を広げてマイクを手にした。

「世界タイトルマッチ：そんな実感は薄いわ。」

ベルトがあろうと無かろうと、ワイにとつてこの試合の意味はたった1つや」

普段のハツラツさは影を潜め、淡々と言葉を並べる。

明日に控えた試合を前にして、軽量以外で相手と顔を合わせることなど無かった。ゆえに昂る気持ちを抑えるため、冷徹な声音で記者に言葉を放つ。

「幕之内と戦う場所を作るため。」

あいつに2度負けたワイはいつまでも挑戦者であり続ける。幕之内からもぎ取る1勝以上に価値のあるモンはない。例え、リカルドのベルトやとしても」

好敵手が敗れた。

なら、その間に差を埋めて、遙か向こうで2人だけの舞台を作ろうとしている。千堂がどれだけ進んでも越せない、己の中の最強と戦うために。

ゆえに、ハッキリと言葉にする。

「つまり、これは世界前哨戦や」

ここに意味を履き違える者はいない。

千堂 武士の宣言は本心のみを注ぐと知っている。煽る意図よりも、試合の瞬間を待ちわびていると。

横に座る王者へと、堂々と言い放つてみせた。

幕之内 一步と賭けるベルト以外、前座に等しいと。

「そのための武者修行中に、ごつつ強い男がワイの目標搔つ攫いおつた。悔しゅう思うたし、羨ましくもあつた。

なら、教えて貰おう思うたんや。

幕之内倒した、ワイの知らん拳をな」

虎の言葉は既に血肉に飢えている。

最強に成るための餌を求めている。

その一部を担えと、静かな熱を王者へ向けていた。

柳岡が肩を叩き、千堂が静かにマイクを置いて返答は終了する。

会場が千堂の威圧に怯むなか。

記者、藤井がゴンザレスに質問した。

「今回の防衛相手、千堂選手は幕之内選手に2度敗れています。その幕之内選手に勝利したというのに、なぜ今回の防衛戦を承諾したのでしょうか？」

会場の気温が急転直下するのを、記者だけでなく柳岡も敏感に感じとる。

(頼むで藤井はん、千堂を刺激せんでくれっ!!?)

(ククツ…確かに、そらワイも知りたいわ…!)

澄まし顔で心の中で柳岡に謝る藤井。

柳岡の横で思わず笑みが溢れる千堂。

記者のグレーな質問に汗をだす柳岡。

その横で、ゴンザレスもまた静かにマイクを手にした。

「俺がセンドーの挑戦を受けたのは、WBCフェザー級1位だからでも、リカルド・マルチネスとの挑戦権を得ていたからでもない」

千堂とは違い、日常会話をするように語るゴンザレス。

「彼が日本人だからだ」

前を見て、藤井の質問の答えを凝縮させる。

「マクノウチとの試合後、俺はハボンへの認識を改めた。彼の恐るべき執念を以前から知っていた。祖国に帰り1つの試合を思い出したよ」

視線を僅かに上方へ。

遠い昔の記憶を探るように、そして懐かしみを込めながら1人の男の名前を出した。

「リカルド・マルチネスが認めた男、エイジ・ダテ。

残念ながら彼は引退したが、リカルドとの試合を俺は何度も観ていた。当時の目的はリカルドの本気を研究するためだったが……」

伊達 英二。

元日本フェザー級王者。

リカルド・マルチネスと戦った男。

そして、幕之内 一步が初めて負けた男。

ゴンザレスにとっては、ボクシングを始めるきっかけになった試合に出ている選手として認知されている。

ボクシングを始めるきっかけはリカルドだった。そのときは伊達のことは片隅にしか見ておらず、本格的に眼中に入ったのはリカルドへのリベンジマッチの試合。

「あのとき、俺はエイジのことをもっと注目しておくべきだった。彼の不屈の精神は、間違いなくリカルドの本領に手が届いたのだから」
あんな試合がしたいと、再び2人の試合に感化されてガムシヤラに己を研鑽した。

昔を思い出し、ハッキリと路が見えるようになったのはここ最近。結果は確信に変わり、この試合の先に神話への扉があると深層の勘が告げている。

「明日、俺は日本人の真髄を再び垣間見ることになるだろう。全力全霊で戦い、最高の成果を以って俺は再び無敗神話に臨む」

深淵から、俯きぎみに零度の視線を開ける。

絶滅を成すと、言葉を越えて意思を伝える。

審判を下すのは死神だと瞳は堅く宣告する。

「上等やわ、買うでゴンザレス」

「墓標を作っておけ、センドー」

返答を終え、交わした言葉を握り込んで立ち上がる。

両者が向かい合い火花を散らし、司会すら動けないほどの圧力を瞳に宿したとき。

「馬鹿千堂!!?止めんか礼儀知らず!!?」

「落ち着けアルフ!!?いまは理性のみで動け!!?」

両者のセコンドが間に割って引き剥がす。

それ以上の記者会見は続くはずもなく。

記者たちが冷や汗を拭い終えたとき、両雄は既に扉の奥へと消えていた。

アルフレド・ゴンザレスVS千堂 武士

遠い空、灰黒色の風が地上を駆ける夜。

夜道を灯す夢が1つ、天井へ向けて飛空する。

「おし、気合い充分や。行くでー!」

もし冥界に夜空があるのなら、そこに見えるものはゴンザレスのよ
うな星だろう。千堂が追い続けている幕之内よりも輝き、より世界に
名を馳せる存在。

『その牙が冠^{のど}を狙い定める理由は、好敵手を退けた嫉妬心からか?そ
れとも、世界の頂きへの足掛かりからか?』

理詰めだけで己の知るボクシングの全てが封殺された。

左腕を越えられない好敵手にもどかしくなる反面、自分はアレをど
う掻い潜るか考えていた。

『試合前のインタビューで質問された虎はこう答えた。「世界タイト
ルマッチではなく、世界前哨戦」と。

その言葉に我々は期待が膨らむ一方だ!!』

答えは結局出ていない。

ただ、分かることがある。

世界のメキシカンを倒してきたが、彼らとは次元が違う。

桁1つズバ抜けた、本当のメキシカンが目の前にいる。

世界の頂きに君臨する、深淵の理性と星空の熱量を兼ねた死神。

『浪速の虎が歩む道は果たして絶滅か…生存か!?

千堂 武士、世界の頂きにいま踏み込んだ!!』

最強の一角を倒すため、過去のどれよりも強くリングを踏みしめ
る。

「うだうだ言わん、見とれ幕之内。

お前の敗けがワイを強くしたってところをな」

軽くリングを踏む。

己が立っている場所で戦った、両者の想いを確かめる。

2人は幕之内に憧れるボクサーだ。気持ちとしては自分の手で、憧
れを打ち崩した男に挑みたいはず。言わずとも、あの試合が気持ちを

語っていた。

なら、任されたと静かに背後を見る。

「迷わず向かってこいや」

容態に変わりなく。

燃え盛る観客に向け、勢いよく拳を振り上げて応える。

光が消え、闇が満ちる。

赤く、頬から血が滴る幻視すら錯覚する温度。

『風神を地獄へと誘った死神が、再びこの地に舞い降りた。前回との違いは、腰に巻かれる世界の覇者の印』

畏敬すら思わせるソンブレロを深く被り、ポンチヨを纏う姿に観客の雰囲気緊張に傾く。

『あれこそ王者に鎌を振り下ろした決定的証拠！』

風神をも打ち下す破壊力はまさに絶命の審判者！』

歩きたびに揺れる外套の下から、栄光と世界の頂点を意味するベルトが見え隠れする。千堂の好敵手を倒したときには無い輝き。

あの刻よりも強くなつたことを意味する。つまり、幕之内に2度敗れた千堂にとって、いま最も難易度の高い挑戦ということ。

『その素顔に触れれば死^{敗北}あるのみ。』

アルフレド・ゴンザレス、世界の死神が再び降臨！』

ライトに照らされるリング上に立ちながら、ゴンザレスの存在感は酷く落ち着いたものだった。装飾を取り外すときも、ベルトを離しながらも。幕之内を倒した男という、千堂を知る者たちごと活気を断ち切る事実。

外からは汚いながら勇ましい罵声も飛び出すが、意味が通じていても毛ほどの反応も見せないだろう。

両者がリング中央に立ち、視線を交える。

「世界前哨戦、とはよく言ってくれたな」

前日の千堂のセリフ。更には自分のことだけではなく、リカルド・マルチネスとの試合さえ前哨戦と宣ったのだ。ゴンザレスの怒りは寧ろそこが大きく、理性は拳を打つように見下ろす。

砂利つく視線に千堂が応える。

「外も、内もえらく落ち着いとるな。

それも今だけや。直ぐに血液沸騰させたるわ」

ゴンザレスの怒りの元になる前日の挑発。

千堂の視線には、その怒りすらいまは影を潜めていると見抜く。

怒りこそすれど、それ以上に優先するべき項目がある。経験と勝

利、日本人から引き出せる世界有数の上質な拳こそ、王者の求める味。

「期待はしていない。だが、奢りもない」

「いらへん。いまからベルトふんだくるんや、せめてワイの拳を喰ら

わしたるわ！」

ゴンザレスの誘いに乗らず、獣の笑みを向けてコーナーに戻る。

刻を過ごす。

一寸先の夢を掴む、空想の刻を経て。

薄らと瞳を漂わせ、熱狂に震える会場から、刻限の合図のみを拾う。

WBCフェザー級チャンピオン

アルフレド・ゴンザレス

VS

WBC・WBAフェザー級1位

千堂 武士

『勝つのは好敵手へのリベンジに燃える千堂 武士か？』

それとも、知性と狂気のアルフレド・ゴンザレスか!？」

沈着の貌を着け、ゆつくりと視線を上げる。

『目の離せない夜が幕を開けたツ!!』

熱い日照りの宙空、凜と響く金属音が意識を奮わせた。

夜空に挑む

勢い良く振り向く両者。

相手を殺さんとする程の気迫がリング中央を交差する。

千堂の瞳は肉眼で確認できるものを映さず。

手始めに嚙り尽くすと決めていた上品なテーブルを確認し、野暮なほどの礼儀を示してみせた。

所謂、オーソドックスの構え。

慢心の無い、ボクサー主流の型。

(ヤツの資料を信じるなら、守りが拙いスラッガーのはず)

ゴンザレスもまた、オーソドックスで対峙する。

表面、内面ともに千堂の構えに対して戸惑いはない。

出来事には理由があるもの。世界を拠点にしてきた彼にとって、事前のデータとの差異など、見るだけで解析は終了している。

(……警戒を最大にしたか。真っ向から喜んで突っ込んで来ると思っていた)

冷たい視線に瞳を重ねる。

にじり寄る殺意が会場の野次を殺す。

観客たちの予想を下回る千堂の立ち上がり。

本来のスタイルなら、コーナーに立ったときから凄まじい圧力をかけて前進する。様子見から殴り合い上等を態度に表す、アウトファイターにはひとたまりもない選手だ。

(ま、どのみちプランに変更はない。封殺してくれる)

(視線で牽制しよってからに。そー焦らんと、じっくりワイに教えてくれたってや)

観客の大半が知る由もない。

柄にもなく千堂が様子を見るに徹する理由が、好敵手を倒した理由を体感するためとは思うまい。そして、理詰めを見ておかなければ負けるという確信があり、千堂の前傾姿勢は観察のためとなっていた。

(幕之内を沈めきつた、理詰めつちゅーのをな)

(待ちか。ふん——)

両者の距離が縮まり、射程圏が領域に重なり出す。ピタリと視線を重ね、より一層全ての動向に注意を払う。

この瞬間、先に動いた方が猛烈な後出しを覚悟する程、後の先を狙い澄ました。

それを承知のうえで、全身の力みが抜けきつたゴンザレスは先制を譲らなかつた。

(遠慮なく行かせてもらう)

動く余暇などない合間から、高速のなにかが千堂の顔面から光を散らす。

明らかな物量を伴う、命の灯火を拐う死の塊。

「い、いまのがジャブやと……!?!」

幕之内のときより数段キレが上がつとるやないか!」

重苦しい重圧を切り裂くゴンザレスの左ジャブ。

ガードの隙間を狙うように放たれる、貫通に特化した開幕。流れを手繰り寄せるための一手を、千堂は僅かに外側へ肩を回して腕で守つてみせた。

(これは防ぐか)

(……キレがこれまでのメキシカンとは別格や)

続けざまに放たれる最高峰のジャブを、千堂は黙々とブロッッキングで対処していく。

動作の起こりは千堂の目でも確認が不可能と、ものの数発のジャブを受けて判断をした。過去、メキシコのボクサーを4人K.Oしてきたが、ただジャブが伸びる。ただ起こりが見にくい程度の、慣れれば問題がないものでしかなかった。

慣れるまでの被弾こそあれ、ダメージの蓄積まではいかない。ゆえに、ゴンザレスの左を真正面で確認して頬が上がった。

(見た目だけならリカルドにも見劣りせえへんで)

幕之内との試合から半年を優に超える月日。

ゴンザレスの左拳は確実に成長している。

自分の心情に従い、目標を越えるために突き進んでいる。
世界を突き放す、高純度の気迫を垣間見た。

それらを知り、理詰めを相手にする期待値が膨れる。

(なら、どーにかして越えたらななあ……っ！)

グローブ越しに見るジャブは気づけば大きく、そして小さくを繰り返す。スピードに似合った可愛げの無い威力を確認し、前に進む。受けではなく、触れることを意識し、ジャブとジャブの合間を見て、手を出そうと肩を動かす。

すると、僅かな角度をつけ、風切り音とともにジャブがタイミングを変えて千堂の動きを封じにきた。

『チャンプの左が速い！そして着弾音が痛々しい！』

さしもの挑戦者もガードしてチャンスを伺うしかない！』

凄まじいジャブをガードしながら、両腕で目を隠してゴンザレスの左脚に視線を送る。

そこに、左ジャブが厄介極まる正体があった。

ジャブを打つ度に位置が変わり、数センチの射感を調整し続ける。ダンスを踊るように跳ねる小刻みのステップ。一方的に距離を測り、世界で培った経験で安全圏から右を打ち抜く。

幕之内が敗北した最初の切っ掛けを、拳を擲なげつことなく碎かなければならない。全てを晒したが最後、冷徹に処理されてしまうからだ。

(いざ手エ出すゆーても隙間があらへん。少なくとも、ワイの拳だけを当てるんは至難や。なら……！)

不確定なりズムで打ち込まれるジャブの1つに、ほぼ直感で左拳に力を込めて威力を相殺する。拳と拳が重なり、微動だにしないことで反撃の合図はもろに暴露ばれていた。

(あからさまだ、バカめ)

熱を込めた左拳を見逃すほうが難しい。

そう言わんばかりに放たれる左を眼前で見送り、右拳で曲線を描いた。

(ドイツ……！まぐれ拾って攻めても後が続かへん！)

弾かれる頬。歯を食いしばり、被弾しながらも視線はゴンザレスを

捉え続ける。

オーブニングヒットはゴンザレスの右フック。

姿勢を戻す直前、肌を駆け抜ける寒気が神経を急かし、咄嗟に右ガードを実行していた。

間髪入れず、2度の衝撃が右腕に拒まれ、3度目の襲来で左頬を削るようにジャブが突き抜ける。

ここで待ちは勢いに乗らせると、左ボディを前方に打ち込む。すると、拓けた左視界にゴンザレスが現れ、左ボディを引き戻すよりも先にジャブが2度、千堂の顔面を直撃した。

左腕を構え直しながら距離を測る。

目測、左腕2本分。それならば、ゴンザレスの次のステップに合わせ千堂のダツシユで左拳が届く距離。

目が光る。一筋のチャンスを前に、眼光が身体に行けと命じる。考えてばかりでは越えられない壁、世界の頂きに登るため。稼働を待ちわびていた右脚を踏み締め、一気に距離を殺す。

「千堂さんがギアを入れた!!?」

瞬く間のステップインに対し、ゴンザレスは冷静にステップを刻む。眼前で唸る猛獣に気を囚われない、屈強な精神が歪な虎に狙いを定めた。

千堂の直線上から外れるようにステップすれば、即座に追いつき過ぎるまでの踏み込みを左右に揺らす。突き放すように放たれるジャブをガードで対処し、ジャブだからと被弾を無視して強引に懐を射程圏へと捉えてみせた。

(疾いッ!!?!!?!!?)

(捕まえた!!?)

リング中央、2つの拳が意を決して敵陣を掻き乱しに行く。両者のステップが身体を動かすよりも先に、拳が肉を打つ。試合の流れを決める最初の局面と知り、誰もが瞬きを止めた。

千堂が選んだパンチは左右に急旋回の効く左スマツシユ。

勢いは過去最高と言える千堂に対し。ゴンザレスは前傾姿勢に構え、右の打ち下ろしでリングに叩き伏せんと身体を捻った。

「ぐ……………」

「又……………」

会場を縦に風圧が奔り抜ける。

顔面ど真ん中を狙い定めた2つの拳を、直撃は立て直し不可能と察した両者。首の力を土壇場で脱力させ、精神を削るのみに被害を留める。

互いの頬を切り裂き、必殺の一撃が空気を揺らしたばかりというのに。態勢が不安定なまま、コンマ数秒先に千堂の拳が乱雑に振り放たれる。

「又、ガア!!!」

上体を逸らし気味から、僅かに左足の位置を外に踏み替えた右スウイング。打つとき、目標先を見てすらいない。居ることを確信し、当たることを疑わない。考えるより打つが早く、致命的な差を産むと本能のままに一撃を放つ。

ステップすら間に合わせない自信。

堅固な地盤を打ち砕く瞬発力。

しかし、ゴンザレスの前では空振りに終わる。

(こいつ、ワイの反撃来る範囲知つとんのか!?)

…………いや、ワイのフットワークも想定して動いとるな)

空振りする瞬間、千堂の瞳はステップを刻むゴンザレスを捉えている。彼の視線はしっかりと奔放な拳を凝視し、あまつさえ踏み込もうとさえしていたのだ。

(ふくつ。息が詰まるぜ、この野郎。いまの俺のステップで突き放せない脚力か。想定の上限一杯じゃねえか)

内心で冷や汗を流し、ぴりつく肌の感触を確かめた。

肉体的ダメージは然程ない。

いま問題視するものは別にある。

千堂に対して、考えうる限り最大限のパフォーマンスを発揮することを前提としたステップワーク。不意の一撃を避けられたのは、ゴンザレス自身が常にあり得ないと思う軌道を千堂越しに見ているからだ。

千堂 武士のデータを見て、メキシカンとの試合を観て。そして、幕之内との試合を知って。日本人ならやりかねない可能性を切り捨てず、デッドラインギリギリを見極めていた。

想定一杯。それも、溢れんばかりの勢いで迫り来る。

強烈に、殴り合いが眼前にチラつく。

焦らず、先ずは理性から削ぎ落とす気の闘志を垣間見て。

ぐわり、口元が上がる。

(っ、まだソツチは正解じゃない。

じきに来る瞬間まで引つ込んでいろ)

敵のデータを事前に調べたせいで、理性が剥がれやすくなっている。幕之内との試合を経て、なによりもリカルドが認めた男が日本人だからこそ。千堂のデータを念入りに確認し、自分との噛み合い具合は最高だと分かり。

凶々しく闘志は燃える。

ベロリ、だらし無く捲れる自己を保つ。

『観ている我々の呼吸がままなりません…!』

息吐く暇もなく、挑戦者が中間距離に——』

理性を貼り付け終えた視線は、泥臭く笑う獣へ。

(幕之内が何度も懐入りよったから勘違いしたわ。

ゴンザレスの左と噛み合つとつたんや。何度も繰り返し、凝りもせずやったことが功を奏したつちゅーところか)

自身の距離で止まり、牙を剥き出しに覚悟を澄ます。

——なに縮こまっとなんねん。ガードは慣れるためやろ。

ガード越しで見切れんのやったら、次にやることは………こうや

ろが!)

曇りなき夜空を見上げて、獣の牙を暗く照らす。

夜空を喰らうのは太陽だけではないと、影の奥で見開いた意識が王者に歩み寄る。

『な!?せ、千堂が大胆にもガードを開く!ど真ん中を打ってこいと不敵に笑い誘っている!』

果たしてこれは作戦なのか!』

会場中が固唾を飲む。

ゴンザレスの左は鋭さを増し、千堂はガードでその一端を確かめただけに過ぎない。まだ2分間、慣れるには少々時間が足りない、千堂を見てきた大阪の応援団も緊張感が増していく。

「柳岡、千堂は大丈夫なんか?!」

「ガードで慣れるのが作戦やった。……恐らくまだ見切れちゃあらへんが、このままやとガードごと押し潰されると判断したんや」

コーナーで柳岡たちが千堂の判断に信頼を置くなか。

（慣れるまで……それも、学ばされる前に見切らな始まらん。その境界見誤ったが最後、幕之内みたく左で封殺される。ここが1番精神擦り減るで）

両者の体重が臨戦態勢から次の段階へ移る。

（それが奢りだということを即座に証明してみせよう）

静寂の舞台はゴンザレスの左によって一変した。

刃物を振るうかの如く、冥界の鎌が宙空を駆ける。

構えただけでは打ち砕けるガードも、無いよりはマシというもの。

それすらもなく、千堂は真正面からの突入のみを歓迎した。

瞬間、肉を斬らんとする炸裂音が宙伝いに鼓膜を震わす。

（なん、とかッ!!?）

千堂の右に残る残響。

前触れなく眼前を覆う赤い壁、ゴンザレスの左ジャブを見切り、反射的にパライしてみせた。だが、上手く捌くことは叶わず。

大砲と言っても差し支えない威力を込めた、捌かれることを前提に放った左。ならば、千堂は見切れたと錯覚させられたことに他ならず。

疾る曲線が、再び千堂の頬を打ち払う。

（ヂッ——）

右フックがガードごと顔面を外へ向ける。

重心を落とした威力重視の一撃。

後退させるつもりで打った拳。その感触は幕之内すらもたじろぐ自信があつたが、千堂はその場で踏み止まり。

(ふん、それくらいで睨むなよ)

そのうえで視線は変わらず、ゴンザレスの頭を喰らい千切らんと猛っていた。

(隙だらけなのはソツチなんだぜ)

鼻につく鋭利な視線へ目掛け、左アッパーを仕掛けると同時。

踏み堪えていた後ろ足を回し、千堂は右フックを強引に割り込ませてきた。

座っていないながらも揺らぎかねない拳圧が客席に届く。

ぞわり、背中に寒気を感じながら観客が見守る先では、千堂の顎にのみ拳が届いていた。

『挑戦者カウンター失敗！技術戦は王者が上手か!?!』

咄嗟の首捻^{スリッピング・アウェイ}りがカウンターをかわす。

千堂の拳が頬を横切る間際、耳が聞いた疾走音がデタラメな威力だと警鐘を鳴らしていた。

リング上の常ではあるが、この拳はより一層カウンターによる直撃を受けてはならないと警戒を強める。

視線を即座に戻す。

千堂の不安定な姿勢はまだ整え終えていない。コンマ数秒の差で、右の一撃を放り込めると頬に大砲を構えたとき。

何気なく持ち上がり、眼前で握り締められた虎の牙^{左拳}。

グローブに浮かび上がるシワが、拳により圧縮されたものと理解した直後。全力を左足先に集中させ、その射程圏から飛び退いた。

(逃がさへん!!)

飛び退く動作をゴンザレスが選んだとき、千堂の両脚は確かな安定を確保していた。一瞬後、遠ざかる獲物の喉を掻き切るため、一息のうちに発射台が火花を撒き散らす。

ヘッドハント^{頭部狙い}。

迫り来る猛獣の牙を見て、直感が顔面を穿つ瞬間を想像していた。この一撃は避けられない。受けるなら、最善の手を選ぶことに注力するしかない。

理性が引き摺り出した選択は、左腕を下に右腕を重ねる

クロスアームガード
十字ブロック。

雑踏を掻き鳴らし、拳の衝撃が右腕に沁み込む。

(ツ——ジイツ——!!?)

(いい勘しとるやないか!!?)

歪む目元、定まらない瞳。

後退する勢いは殺せず、たたたらを踏んでコーナーに背中から激突する。

マウスピースを噛み締め、痺れと痛みが脳に響く状況を押し込める。口内から歯軋りがセコンドに届くほど、意識を保つための堪えが必要だと周囲が知る。

(だよ、なア……そりゃア、ここに立つ日本人だ……)

即座に現状を確認する。

右腕、鈍く重い痛みは2ラウンドまでに回復する。

左腕、鉛を着けられた感覚が残るが機能に問題なし。

頭部、ブロック直後のダメージは直ぐに抜ける。

2ラウンド以降に支障は無しと結論。

残り時間は30秒を切った。

左腕と両脚を最大限に活用し凌がなければならぬ。

(勘だけじゃ越えられねエ……王者級の武器……!)

覚悟など決めるまでもなく。

王者として見せるべきは果敢な姿勢。

(右腕は……上がらないなら腹ボディを隠す。

そして、左しか使えないなら左の選択肢を増やすのみ)

(角に突っ立って、もう終わりなわけないやろ。

日本人の真髄とやらすら出した気イないで?)

怯え、逃げを思わせる素振りは一切なく。

左腕を構え、空腹を代弁する疾走を迎え撃つ。

『常識外れの一撃が王者をコーナーに追いやった!』

セミファイナルに続き、1ラウンドK.Oなるか千堂!』

ここで終わるタマではないと知りながら、このラウンドでトドメを刺すために脚力を解き放つ。

(それとも、理詰めはそんなもんか?)

なら、さつさと死神寄越さんかい!)

ゴンザレスの奥底に眠る死神を起こすため、千堂の右拳が構えを終える。中間距離、あと一息もせず振り抜かれる。そうなれば、死神の顔が耐えきれずに夜空を吐き出すだろう。

(まだ俺は出し足りねエ。

調子に乗らせて退がるなんざ御免だ)

衝動を抑え込む。

眼前の敵よりも先に己を制す。

王者には、左拳が残っているのだから。

(日本人、世界の壁は高い。そして驚くほど狡いんだぜ)

一点、瞬く間に3度の衝撃を穿つ。

前進する瞬間。

前足が浮いた刹那。

軸足が離れた合間。

(なッ……まさか!?)

全てが顔面に着弾。

避ける手筈の左拳の変化に、止む無く前進を中断した。

千堂の動体視力を欺く、真新しい左拳。

事前に警戒していたジャブとは違う種類に、千堂の反射は見事に虚無を突かれていた。

続けざま、隙間なく放たれる狡猾な左ジャブ。

頭部への直撃を避けるため、ガードを上げさせられる。

(このジャブ、メキシカンのソレやない。普通のリードジャブや。いや、その前は異常なキレを無視すりゃワイでも打てるジャブ)

手元、足先の距離を測りながら、ゴンザレスの変化に素早く状況把握を終える。

(マクノウチの突進を知っておきながら、こんな機会はもう無いと安堵したとでも?)

世界戦つてのはな、情報処理を滞りなく、2度と同じことで止まらずに進まなきゃならない)

ゴンザレスからは普段見ない左のなかに、メキシカンジャブも混じる。その意図を理解したとき、既にコーナーから獲物は脱出していった。

(引き出しの多さに驚くのは2流。あつて当たり前のことで驚くんなら荷物纏めて帰んな)

(アカンっ、慣れの早さを察して逆に利用されてもうた。してやられたわ、このラウンドは……!)

舌打ちと同時に響くゴング。

流れを決して離さないための切り替えを目の当たりにし、第1ラウンドは終了を迎えた。

「で、出鼻を完膚なきまでに挫きおつた……!」

手にした流れを利用され、柳岡は首に掛けるタオルを握り締めていた。

『王者、圧巻!!?』

右腕が使用不能となった窮地を物ともせず、左腕一本で挑戦者の突撃を捌ききつてみせた!!!

更なる成長を遂げた王者。

幕之内との試合を知る観客たちは、次のラウンドで千堂が巻き返すことを信じて見守っていた。



「出だしは良好。……と言い切れない顔だな」

ゴンザレスが椅子に座ると、セコンドのブラスが神妙に口を開く。「恐ろしい反射神経、そして適応力だ。」

早々に理解した、この試合で勝つには黙らせる以外に方法はない。マクノウチとセンドーは同じだよ」

一息吐くさまに、疲労は想像よりも溜まっていると分かった。リカルド戦以外で早々から冷や汗をかくことは少なかった。

千堂の様変わりするスタイルに、徐々に外堀を埋められる感覚をブラスは味わっていた。

「右腕の機能に支障は……次のラウンドでいけるか？」

「そのために左のバリエーションを増やした。ヤツの勘、少しばかり舐めていた。じきにこの左にもカウンターをかましてくるだろうな」

右腕から轟いた衝撃音に気が気ではなかったが、ゴンザレスの表情を見て安堵する。それも一瞬のことで、一手間違えれば次のラウンドでも同じ事態があり得るのだ。

そのことを強く諭すと、存外落ち着き払う様子にこれ以上は不要と判断した。

「メキシカンキラーという実績に目を奪われがちだが、センドーの本質はそこじゃ無いと確信した。

マクノウチと戦ったこと。それが彼の強さだ」

「……………そうだな。日本人は最後まで^{ハボン}油断ならん。

ミキストリには重々気をつけるんだぞ」

「油断無く、理性を以って倒す」

立ち上がり際に言い残し、第2ラウンドに向かった。

浪速が雪崩れ征く

第1ラウンドを終え、絶好とも言える機会を手にできず。

観客たちは不安で表情が曇り、一方で千堂の応援団は勇気づけようと虎の名を連呼する。それも、次のラウンドが近づくにつれて勢いも落ち着く。

彼らが声を潜めたのは、椅子に座ったから目を瞑り、一言二言話し終えて刻を待つばかりの千堂を見たからだ。

「なんや千堂、いつもと様子が違わへんか？」

「ごつつ集中しとる……至らんことせんがええな」

「見てるだけで緊張感伝わってくるわ。震えるで！」

黙して観客の不安を拭う。

当の本人が果たして、周囲の音に耳を傾けていたかは定かではない。

だが、第2ラウンド開始の合図とともに立ったとき。

「——しゃ、やるで」

瞳の燃焼は下がらず、闘志は口元の笑みで上がり続けていると知る。

なら、見守る者たちは背中に想いを届ければ良い。

歓声を聞き届け、コーナーで佇み、右肩を横に上げて1回転させる。

背中を押してくれる返礼を終え、意識は目前の最強を射抜く。

(日本の死神柴より性格悪いで、ホンマに)

王者の更なる飛躍を味わい、頬が緩む。

釣られるように瞳をより注意深く凝らし、次は突破口を抉じ開けることに神経を張り巡らせる。

(ワイと戦ったこれまでのボクサーなら、ワイの一撃を知ればヒットアンドアウェイに切り替えよる。遅くとも2ラウンドから……。やけど——)

真正面、刻まれるステップは第1ラウンドと変わりなく、利己的な

撃墜を目的とした攻めの姿勢。

至近距離の一撃を右腕に浴びながら、その損傷は次はないと行動で語る。勘に任せた千堂の単発を、むしろ駆り立てるようにゴンザレスはゆっくり近づく。

(その必要はないっちゅーことか)

誘いに乗るように、スタンダードからガードのど真ん中を開く。第1ラウンドの手前、観客たちからは不安の声漏れる。

千堂にとってそれが指す意味は、最短の路で身体に慣れさせるため。

元より、被弾を恐れる男ではない。

第1ラウンドは少しでも左ジャブを観察するためのガードだった。短時間で理詰めに嵌らないことを確認し、ガードを左右のみに変えて攻撃態勢に移ったのだ。

相手が一撃を放った瞬間、堪らず後悔してしまうような威圧を振り抜く。それが千堂 武士である。

(圧力のつもりか？笑わせるな)

千堂の構えの意味を凡そは理解している。

だが、猛る男を沈めろと経験則が警告するのだ。

そうすれば、否応なく己の知りたい先が見えてくると。

この機会を逃す手などあつてはならない、そう呟く。

(膨れるのは意識だけだと思いい知るがいい)

片や、本能に従い。

もう片や、目標に向かい。

リングを蹴り、リング中央で射程圏に入り込んだ。

『緊張の睨み合いを破り、両者同時に拳を握った！』

先に拳を放ったのはゴンザレス。

その左に先手を取るのには世界中を見渡しても片手ほどもない。至宝の域に達する、世界の頂点の瞬き。迷いなく、顔面中央を打ち抜くために放つソレを、千堂の眼は神経のみ確かに捉えた。

神経が脳、そして肉体に反映する間は無く。

「ぐっ……」

瞬間、右頬が弾け飛んだ。

消えた肉片を探すように視線は左方向を彷徨う。

(こいつ、咄嗟に避けようとしやがった)

被弾の瞬間、僅かに動いた首。

プロボクサーといえど、速さに傾倒したジャブを見切るのは至難の業。それを見えず実行しようとしていた本能に警戒しつつ、追撃を実行する。

止まる前進、右に揺れる身体を反対へ殴り倒すため、踏み込んで右フックを放つ。

(効いた……！けど退かん、もっとパンチ見せえや！)

右の一撃を左肩を寄せて受け、流れる身体を右足でリングを踏み締めて耐える。深く腰を落とした姿勢、それは虎の必殺が炸裂するモーションとなり。心が理解するよりも先に、身体が唸るままに右スマッシュを振り上げた。

対面、狩りに定められた男は野生児の行動を見ながら退がらない。必殺が炸裂する危険地帯に勇ましく飛び込み、左拳を握り、右腕で守りを固める。

「千堂のスマッシュに踏み込むやと!」

「お前の判断なら何も言わん! いけ!!」

理性は確かにある。

狂ってなどいない。

ただ、王者には獣の必殺を前にして、退がる理由が見つからなかっただけのこと。

そして、甲高く乾いた音が轟いた。

受け流そうと側面を叩いた右拳は上空に弾き飛ばされ、左の打ち下ろしは軌道が逸れ千堂の頬を打ち損じる。

(ツっ!? ワイのスマッシュに潜るんやなく、上からカウンターやと……! こつつ肝が座つとるやんけ、おのれ!!)

(スマッシュは避けたはずが軌道修正しやがったツ!!?)

あの勢いで振り抜いて、ふざけた芸当しやがって……)

互いの被害は軽傷。

平衡感覚を無くすこともなく、右腕に残る痺れは巧くかわした。休みも、距離を取る間も惜しみ。

全く同時にリングを踏み締め、前へ進むことを選んだ。先程と構え、踏み込む瞬間は変わらない。

しかし、ゴンザレスの左は数種類のジャブを使い熟す見切り困難の拳。ほんの一瞬、ガードのタイミングをずらされるだけで、顔面はたちまちに打ちのめされる。

この攻防は長く続けば続くほど深みに嵌り、いかに千堂といえど先に身体が立たなくなる。

その分岐点と心得た邂逅。

さらに上の速さを誇るメキシカンジャブが、千堂の元で衝撃を音に散らす。

（最初だけ全力で止めるだけなら、全部来るつもりで構えとくだけや！）

光弾にも迫る拳を落とす、人外の盾。

急造、ちぐはぐだらけの理由を手に、研ぎ澄まされる神経が見るより先に行動を肉体に反映させた。

だが、次の動作に繋げるための余裕はなかった。

（やりやがったな……パリイで手の甲を捉えやがった）

削岩機の如く荒いデイフェンス。

パリイを警戒していなかったら、拳を握れたかと思うほど手の甲に硬いものが触れていただろう。

（だが、その荒い捌きじゃ数はこなせない……！）

多少の痺れを加味し、それでも見劣りすることなく左ジャブを次々と放つ。フェイントを入れ、滾る深層を宥め、己の歩みを乱す男を刺す。

拳の調子に構う素振りなく、僅差で先に左を放つことで千堂の踏み込みは浅く留まった。

止むことなく左が血を求めて吹き抜ける。

過去の誰よりも冷徹でありながら、正しく在るボクシング。誰もが知る理想のスタイルゆえに、その手のボクサーを粉碎してきた千堂は

手が届かないところに追いやられてしまう。

(その左ステップが距離感分からなくさせる……見とつたんより10倍はやり辛いわおんどりゃっ!!)

パライを1度見ただけで予測、回避され頬を打たれる。

それでも、前に進むことだけは止めない。

(こいつ……退がらねエ。俺のジヤブを真正面から受けて、もっと寄せとにじり寄ってきやがる)

スリップし潜り込み、踏み込んで突き放され、必殺を握っては右で牽制される。相手を観ながら、互いに渾身の一撃を爆発させるタイミングを探す。

(なんだ、お前。……いや、お前ら日本人つてのは、どいつもコイツも仕切り直しつてのを知らないのか?)

黙々と、1℃たりとも下がらない信念を見て。

苛立つほど、呆れるほど、そして脅威と感じるほどに。

ゴンザレスは、己のなかで燻る種を知る。

無敗神話を知った、あの日のように。

(世界の顔色を伺わず、テメエのボクシングを貫く。

ハッ、大層な根性なのは認めてやる。だがなッ……)

左脚で距離感を狂わせ、左拳で中間距離の踏み抜く位置を確認する。次も選ぶのは左拳。混ぜる変化は縦。

「左の踏み込みが深いッ！」

一瞬のうちに整えた場に、慣らされた虎の反射神経は拳を見失う。

この試合初のアッパーカットが千堂の顎を捉えた。

(前だけ見りゃいいはずないだろ!)

(くそつたりゃ!)

直線、曲線、そして縦が加わり攻防は複雑を極めていく。

もう1つ要素を挙げるとすれば、慣れ。

被弾を厭わず、果敢に攻め入る千堂のスタイルに対して新しく常識を組み上げていく。日本人の舞台、執念と根性に自らを割り込ませ、土台ごと崩せ、と。

(下も混ぜてきおつたなら、合わせるまでや!)

再び、左ジャブに混ざり舞い上がるアッパー。

肉体が覚えたダメージが、飛び上がるように反撃の一手を実行する。

(ぐおっ!? ガラ空きの所にスマッシュか！)

さっきのカウンター見て、もう合わせられるのかよっ)

最も、それはゴンザレス本人が意識して馴染み始めたものである。この試合が始まってから、理性は無意識のうちに恐怖を越えていた。いまの両雄に驚きこそあれど、悩む余地はない。

縦横無尽に、己の集中力が消え去るときまで。

互いが必殺の手段を構え、先に当てる機を抉じ開けんと荒ぶなかを進み続ける。

冷静さに攻勢を注ぎ、数を以って止まらぬ男を打つ。

対面、光ごと障害を跳ね除け、目まぐるしく広がる夜空へ手を伸ばす。

(次、次、次……次は、ここか！)

人が可能とする可動域を把握、反撃を封殺するための重心崩し。カウンターのなる手筈の右フックは、複雑さを深める景色に開き直り、潜り込んだ影によって巻き込まれた。

(ぐあっ……テメツ!?)

(ヂッ!!あと少しやった!!!)

世界の頂きに足先が触れる千堂により、便宜上の無傷であったゴンザレスに傷を与えた。

『相打ちイー・千堂この試合初のクリーンヒットだ!』

溢れ出す予感。

照合し終える実像と想像。

千堂を抑え込める時間はそう長くはない。

このまま負けることはあり得る。

だが、自分の腕を信じずに勝つことも出来ない。

(先に膝を崩すまで……!)

相打ちの覚悟はしていた。

幕之内との試合で均衡が崩れるのも、この執念と己の未熟さゆえ。

だからいま、ゴンザレスは己を信じ回転力を1段階引き上げた。

1つ、左ボディが千堂に突き刺さる。

続けて、返す右フックに左フックが重なり相打ちとなる。

先に、吹き飛ばす身体を力任せに起こし、左アッパーを届かせる。

笑い、踏み込んで攻撃態勢に移る千堂へ、侵入を挫くための右スト

レートを開放する。それは実直が過ぎ、パリーの餌食となった。

ならば、と。

ボディ、アッパーにフェイントを多用する。

『リング中央、立ち止まらない！恐ろしく速いパンチのやり取りが2人を掴んで離さない!!』

肩の動きを見せ、反応速度を伺う。

距離を取りながら、頭部、ガード、顎、ボディを左右で混ぜていく。

神経を削り、飛び出す豪腕を紙一重でやり過ごす。

精神が磨耗しながら、被弾を推進力に変えて危険地帯を横断していく。

(パリーと相打ち狙いが判別つかねエ!!?)

少しでも下に行けば…こちらの顔が喰われる)

(ボディのフェイントがうざったいわ!!?)

理論立てた攻防ツ、厄介にも程があるやろっ!!?)

口元から滲み出る鮮血を舐めながら、千堂がさらに猛進。

ガードを固め、岩壁の如く迫る相手を、横にステップして周りこんだ。

去り際、打ち込むは渾身の右。

千堂が真横に現れる標的を視認し、方向転換のために軸足を回したとき。最短距離をゴンザレスの大砲が走り抜けた。

華麗なフットワークは、千堂のガードを乗り越えていく。振り抜いた右の感触は、過去のK・Oと同じ感触であった。そこに、ゴンザレスは油断なく左拳で追撃を狙い澄ます。

きつと、次があるから。

確信めいた限界点を見据え、打ち込む直前。

(——やはり!)

打つはずの左腕を、肩から内側に丸めこんだ。

瞬間に身体は後方へ弾かれ、衝突の余波がロープを伝う。

(この速さに追いつくかよっ!?)

(おんどれの考えそうなことくらい想像できるわ!!)

ガードの下から垂れる血液。

スマッシュの一撃を防ぎきれず、ゴンザレスの鼻から汗に混じりダメージが口を濡らす。

(警戒し過ぎて損をしない男だ……)

これは、長引けばこちらが根を上げざるをえん)

向かい合い、ほくそ笑む両者に割って入ったのは第2ラウンドを終えるゴング。

(次のラウンド、覚悟しておけ)

(最高や……存外飽きん男やないか)

コーナーに戻り際、交差する視線が魂を狙い定めていた。



よっこらせ、と悠長に呟きながら座る千堂。

普段通りの様子だが、流石の柳岡も先程の攻防は拳を握るくらい緊張していた。

「最後の1発は大丈夫かいな千堂!？」

ラスト10秒に至っては明らかに大ダメージ級の1発を貰ってしまった。強がりかどうか確かめるため、視線を合わせて覗き込む。

「問題ない。むしろ第1ラウンドより元気出てきたわ」

そんな心配を他所に、ハツラツと笑い答えてみせる。

第1ラウンドは物足りず、不満げだった。

柳岡は相手が技術戦の最高峰であることから、いつかは痺れを切らして豪放なスタイルで押しかけると心配していたが。その予想は大

きく外れ、相手は千堂の舞台上上がり込んできている。

「そら良いが、あの左ジャブのバリエーションは相変わらず厄介や。中距離から少しでも離されると滅多打ちにされる。アツパーに警戒してインフアイトに持ち込め！」

中距離のスマッシュに対する警戒心は高すぎる。

現状で当てることは難しく、しかしガードの上からでは直ぐに逆手に取られて武器を失ってしまう。

そのための近距離戦法だ。

「ワイの勘の良さ知るや、速攻で戦法組み変えてきおる。ゴンの頭ん中じゃ、ずっと先が見えとんねんやろな」

「……この狙いはバレバレやろな。けど、あれは下手すりやりカルドより厄介やで」

「こつちも無策やあらへん。何度も観たさかい」

柳岡の忠告を頭に入れ、1分間のインターバルが終わる。

椅子から立ち上がり、リングから降りる柳岡へ向けて。

「ほな、理詰め打ちのめしてくるわ。」

そのあとは、文字通りの祭りが始まるで」

沸き上がる感情を隠しもせずに伝えた。

モード・ミキストリ

ゴングとともに千堂は悠々とリング中央に歩いて行く。守る気配はなく。寧ろ、第3ラウンド開始間も無く、まだ飛び込んて来ないのか、と言わんばかりの姿勢。

どよめく会場を他所に、ゴンザレスは近距離戦の如く緊張感を持ちガードを構えていた。

(普段なら舐めていると看做すが、ヤツは普通じゃない。ノーモーションで距離を詰められる自信が見え見えだ。

なら、俺は目に囚われずに準備を整えるまで)

観察眼は正しく、千堂の準備は相手を射程距離に入れるのみとなっている。拳が届く距離に入れば構えは整い、向こうが踏み込むだけの余裕があれば拳が放たれている。

(いいよ、最後の遠距離を楽しもうや。

せつかくの空気、ワイも味わっておかな勿体ないわ)

あと2歩の距離、互いに景色を眺めるように前髪の揺れを意識する。木々の枝にすら見える髪の毛の奥、広大な景色を求めて歩む姿に笑みが浮かぶ。

会合する地点は世界最高峰の麓。

息を吐けば蒸気となる温度差を宿し、虎は身を沈ませた。

第3ラウンドの火蓋を切り落とす号砲は、上体を寝かせながら左右を切り替える超低空スマッシュ。先程よりもカウンターを合わせにくい、攻撃力特化にして、千堂の身体のバネだからこそ出来るパンチ。(なんだ、そりゃっ!?)

万全の態勢でいるゴンザレスの意表を突いた。

スイッチ、ダッシュ、リングスレスレを疾る拳に思わず目を見開く。沈みながら見せるモーションなら、上がる瞬間を叩けば良いと。即座に迎え打つべくカウンターを準備する。

だが、起き上がる速度はデタラメが過ぎた。

拳を握るよりも早く、スマッシュは頂点へと駆け上がる。

腕で触れてはならないと、シールドアブロックとともに思い切り後

ろへと自ら飛ぶ。

『た、たった1発！開幕スマッシュで王者をコーナーに吹き飛ばす!!
なんという破壊力……。』

いや、これが千堂だ!!』

退路を自ら断ち、1秒の余命を獲得する。

それでも、肩に残る衝撃は吸収しきれず。

そして、リング中央にいる男は待つはずもない。

起き上がりながらリングを蹴る猛獣。

身体の線が影を残し、必殺の牙が口を開く。

(一気に行くで!!)

(舐めるなよセンドー!!)

追い詰めた獲物へ、肉を弾くための右ストレートを勢いそのままに
振り抜く。先鋭の牙に潜り、その側面に死神の鎌が薙ぎ払われた。

「千堂のストレートを肘で逸らしおった!？」

「腕のガードより鋭く、そして細やかに実行できる！

良いぞアルフ、ビッグパンチに惑わされるな!!」

後方、コーナーポスト横へ空振りする右拳。

前方へ乗る体重は、反撃の意味を表裏に備えていた。

一撃重視のデメリットを狙い澄まし、ゴンザレスは左フックで顎を

捻り打つ。

(なんのっ!!)

踏み込んだ千堂の左足が強引に、一本で上半身の位置を歪ませる。

僅かに身体を起こし、急所への一撃を頬に触れさせるだけで事を済ま
せる。

(世界級なら叩き伏せられる一撃をッ!)

千堂の強靱な脚力が、前のめりとなっていた身体に無理やりブレー
キをかけていた。

(はっ！そこは右の餌食だ!)

考えるより先に、ガラ空きの顔面へ向けて右の構えを見せる。そし
て、言わずとも千堂も撃墜と追撃の姿勢に入る。

先に放ったのはゴンザレス。腰を回し、振り抜いた一撃に千堂の目

蓋が思わず閉じかける。ボディに刺さる右に、してやられたと攻撃が僅かに遅れる。

(効いたツ!!? やけどまだや!)

(退くわけないよな……!)

攻撃が繰り出される隙間に、ゴンザレスの左が前進を堰き止める。素早く2度、ジャブとフックに揺れる瞬間。

『あーっ! 挑戦者がダメージを堪えた隙に王者コーナーから脱出! せっかくのチャンスをものできず!!』

観客の溜息とともに立場が変わる。

打てばまだ手の届く範囲。

(こっちこんかい!)

引つ掻くような左スウィングを、バックステップで回避する。

一息吐くことなく、予測不能の動きに警戒を強めた。

千堂の体重が少しでも前に傾けば、ゴンザレスは軸足を固定してカウンターの体勢を整える。フットワークを使うのなら、即座に応えてみせる。

後手を選んだのは、詰め寄ればコーナーに逆戻りすることを考慮したからだ。獲物を2度も逃すほど、千堂の狩りは甘くない。そのための準備に滲みよる時間だと、ゴンザレスの肌が結論した。

千堂のようなインファイター、それも型破りによる変則に近い場合、最も恐ろしいのは急所に打ち込まれること。意識の外から急所を打たれた日には、リングを降りる以外に選択肢がない。

ならば、獣退治は中央のみ。

(どっしり構えていい根性しとる。

いま、ブチのめしたるさかい覚悟せえ!)

沈み、その身を弾き出す脚力に左を構える。

(ダッシュか、来てみる。

その脚力にカウンターを重ねて返してやる)

景色と不一致する影。

人の皮を剥がしながら、的を絞らせない歪な軌道で駆けた。

左ジャブなら、この試合じゃなくとも動体視力は追いつかない。な

らば対処は1つ。左ジャブの機軸から外れ、残忍なまでに牙を肉に突き立てる。

(は、速い！まるで的を絞れねえ！)

ガムシヤラに駆ける姿を、左拳が捉えた瞬間に首を倒し、真ん中に当たる直前で左右に躲す。

短期かつ追従困難。数秒間だけの攻防、世界最高峰の左を封じる脚力を存分に活かし、ゴンザレスの視線が追いつくよりも先に懐で足を捻り込んだ。

この瞬間、どこを打つても必殺となり。

千堂は全力を込めて、右ストリートを顔面に穿つ。

(だが、射程距離は決まってるんだよ！)

同じく、リングにシワを寄せる勢いで足を踏みきり、左腕を横から振り払う。

見えてはいないが、来ることは分かっていた。どの拳が来ようと、即座に反応する自信があり、それしかやるべきことはない。

互いの腕が相手へ迫る。左右の一撃は必然的にクロスカウンターとなり、当たれば威力は倍増。

その矛先に選ばれたのは、最後に直線を描いた千堂。

曲線が僅かに首捻りの猶予を作り、カウンターは一方的に虎の顔面を捉えた。

(沈黙しろ、^{タイグレ}虎！)

「ば、バカな!？」

噴き散る鮮血。

口か、鼻か。もしくは両方から撒かれるダメージの証。

千堂の身体とともに浮遊し、そして。

(こ、こ……や！)

血の痕が、千堂の意識を引き止める。

潜り込むまでに翻弄できればよし。

もしカウンターを食らおうとも、意識があれば問題はない。なににより、殴り合いは上等なのだから。

沈みかける身体。

リング上に訪れた沈黙を破り、衝撃の波が宙を伝う。

「ま、まだ意識があるのか!？」

「よしゃっ！ブチかませ千堂ー!」

轟音が実体を伴い、外界を置き去ってリングの底から姿を現す。

瞬発力は拳の力を押し返して再浮上する。しなやかな肉体、澄まされた直感が可能としたポジションニング。

ダウンしたかに思えた、一瞬の隙を突くステップイン。

(ああ、だろうな。お前らはそうなんだよ)

絶好のチャンスをも、ゴンザレスの右拳が高らかに待ち構えていた。

(流石、やなっ——!)

倒れ気味に打つ、千堂のスマツシユ。

悠然と握る、ゴンザレスの右の打ち下ろし。チョッピングライト

風を切り、光を振り解いて。

ゴンザレスの右拳だけが、空を打つ。

(こいつツ!!?)

スマツシユを必殺とする男は、自身の代名詞を囨にして左脚をさらに前へ踏み込んだ。起き上がる身体は前傾となり、ゴンザレスの一撃は耳を削いでいった。

獲物の懐で、ギアを一気に最大出力へと展開させる。

全ての動作に割り込ませ、針の穴を潜らせるが如く実行してみせた。

(俺に右の打ち下ろしを出させやがったのかツ!!?)

引き絞られた一閃の拳が、冥府の天井を打ち砕く。

不偏の夜に亀裂が走る。理を越え、情景が沈んだ。

仰向けに横たわる姿に会場中が興奮の声に包まれる。

『ダ、ダウン!!3ラウンド中盤で千堂の一撃が王者を地に落としました!』

右ストレートど真ん中!この被害は大きい!』

「千堂のやつ、ゴンザレスにスマツシユのタイミングを覚えさせたんや!」

あの瞬間、ダウンやないと気を引き締めさせたからこそ、スマツ

シユのフェイントを見えなくさせよつた！」

柳岡が興奮気味に笑う。

これは千堂が仕掛けた大勝負。

スマツシユを囷にすると決めたのは第2ラウンド。

左のカウンターを合わせてきたとき、次は右で打つてくると確信していた。しかし、スマツシユを囷にするなど相手も思いつくこと。なら、必殺のみを出すような状況下を選ばばいい。

(気付かれとつたらダウンしたんはワイや。

けど成功した。一先ず、これで半分はブチのめしたわ)

千堂の口元が不意に緩む。

視線の先で。

眩みもせず、直線に立ち上がる男には、先ほどのような冷静さが欠けていた。

闘争心に身を預ける者ができる、猛き笑み。

(こつからは楽しい楽しい喧嘩の始まりや！)

第3ラウンド残り1分30秒。

お祭り騒ぎの会場とは裏腹に、千堂の高揚は内側に秘められていた。これから死ぬほど騒ぐのだ、ならいまは会場に譲ろう、と。

再開とともに、冥府の門が開く。

「——つくぜ」

歪み、心が凶つ。

現れるのは人智を圧倒する厄災、無常の死神。

「喧しくて、イラつくぜ。今すぐに黙らせてやる！」

迎え打つ凶刃な牙。

待ち望んだ邂逅に、好敵手の背中を見る。

最早、この試合に早期決着以外を描くことは不可能。

良し悪しを決める基準などない、純粹な根性比べで勝負は決する。

「死神が来おつたぞ千堂！」

千堂のホームグラウンドである大阪府立体育館の空気を気圧す、夜の星。

会場にいる者たちは知っている。

千堂をインファイトで破った幕之内が敵わなかった、現存最凶の男。

「死神の鎌、よーやっど持ったか。手エ離さんよう気をつけーや」

コーナーから飛び出し、ミキストリを沈めに行く。

合図など無くとも、打つ瞬間を千堂は見逃さない。ミキストリの構えは理詰めのと看ときは変わり、大雑把と大胆を兼ねた、カウンターを寄越せと言わんばかりのもの。

そんな状態から、無警戒に右ストレートを放り出した。

戦意が滾り神経が張る千堂にとって、意図的にカウンターを狙うのは容易であった。

後出し。しかし一方的な一撃となるソレは、圧倒的な凶暴さだけで状況を覆された。

(ぶ、があ!?)

ミキストリの右が千堂の左頬を直撃。

肉の断末魔が喉の奥から漏れ、千堂はその場で一瞬、意識の断絶を余儀なくされる。

「千堂っ！起きろ、拳を握るんや！」

理不尽、ただそれだけの現実。

理性の底に残った顔は、長年かけて沈殿させてきた不純物に他ならず。沈んだ重みはしかし、簡潔だからこそ強い。

「なアに寝てんだよ、起きろッ!!」

怒り、人間が最も理不尽を孕む感情が唸る。

左拳が天井に向けて突き上がる。その最中に立ち尽くす千堂の顔など、浮遊する埃かと言わんばかりに容易く殴り飛ばした。

「ツアッ!」

2 撃。

観客たちが理解する暇なく、千堂が沈黙するのにかかった時間。唾然と呼吸を繰り返すなか、堪え無くあつさりとリングに転がっていた。

静寂が波を打つ、とはよく聞く雰囲気の言語化だ。

それを、静寂とは無縁とすら思える男が成してみせた。

死神の名を知らせるように、獣が宙空を彷徨う。
混濁する視界。

平衡感覚が安定しない時間はまだ続く。

(ワイが、あつさりど……)

それでも、止まることは拒む。

立つだけで千堂の体力は削がれていく。

「張り合いがねえ。もっと生きようと足掻けよ」

コーナーで悪態を吐きながら、既に臨戦態勢のミキストリ。早く立てと誘いながら、魂を刈る合図を待っていた。

高い回復力を誇る千堂でも、約10秒の時間は脚の機能が半減する。

いまダツシユ力を奪われるのは致命的な損傷だ。

(ホンマ、オモロい男やないかッ!!?)

立ち上がり、膝以上に表情が笑う。

絶命の際を噛みしめ、楽しんでこそ倒し甲斐があるというもの。回復の時間を攻撃から生み出す。その結論は間も無くだった。

そして、試合は再び両雄を引き合わせた。

「攻めるんや千堂・守り入っても勝ち目はないでー」

「油断するなよアルフ！反撃を受けずに倒せ！」

コーナーから飛び出すミキストリに、腰を落として迎え打つ。少しでも姿勢を崩されれば拳の威力は落ち、最悪の事態に陥る。

こと、現状でカウンターの心配をする必要はない。

細かい芸を物ともしない勢いがある。そのことを考えては間に合わない豪快さゆえ、一気に冥界に落とされてしまうだろうから。

(先ずは挨拶しとこうかっ！)

攻撃一辺倒の右ストレート。

牽制を捨てた千堂の大振りや左腕でガード、鈍い音を立てながら口角を上げて踏み込んでくる。

無論、痛くないわけがない。痛みはある。しかし、その強さだけ対象の活きの良さを確認できる。

ミキストリにとってガードとは底を知る手段であり、腕が上がる限

り殴り続けられる肉塊。

己の全てを受け止めきれず、地に伏せた刻。ミキストリの鎌は漸く、血に滴っていると実感するのだ。

(いい拳だが、脚がなってねえよカス！)

肩から捻じ込み、右拳を豪快に打ち返す。

大きく、最大の威力を脚から汲み上げる。

呑まれかけた生存本能で左腕を上げ、歪に満ちた一撃から頭部を守った。

(つぐ?!)

その上からお構いなく右が振り抜かれる。

身体に釘を打つような停滞が全身を駆け回り、攻めに転じられなかつた不甲斐なさを噛み締める。

もし千堂の腕でなければ、ヒビが入っていた。

本人にそう思わせるほど吸収困難な暴力。

これを避けるには卓越した技術が必要になる。それこそ眼前の死神か、無敗神話の域を要求される。千堂に不可能だと諦めさせるには良い判断材料だ。

拳の威力は拳で緩和する。

常に全快で放ち、やっと意識を保てる威力に落ち着く。

心で解っていないながら、どこかで身体が受け入れていなかった。自覚出来ていなかった迷いを断ち切り、捨て身とも思える狂宴は血飛沫とともに開かれた。

(これまでの人生、^{ゲンコツ}拳で語り合おうやないか！)

(お前は顔も喧しいな、ケダモノ風情!!)

致命傷と無傷の狭間、一手の狂いで谷底へ転げ落ちる殴り合い。

右を打てば左が戻され、横を殴れば下から抉り取る。目を見開き、己の魂を握り締め、超近距離で異常が荒れ狂う。

表面上に在る理性の擦れ擦れ、千堂の一撃を浴びながら。

(カツ、ハー)

嗤い、嘲る。

ゴンザレスなら打ち負けていただろう一撃を受け止め、ミキストリ

が即座に右を切り返す。

最凶を越すための間断なき拳が頬を打つ。

思考、自ら遮断。

その猶予があるのなら、次の一撃に回す。

「ハ——ハ——」
凶気、刻一刻と蓄積。

ものの数十秒、相打ちに似て非なる接近戦を経て、いつ身体が自壊するか分からないと知る。

打つことを糧とし、ダメージを潤いに変える。

誤認で良い、いまだけはそうでなければならぬ。

勝つための偽造。自らが望む目標に追いつくため、多少の死は覚悟して踏み込まなければ、2度と立ち上がれないのだから。

「が、ああ!!」

「ハ、ハッ!!」

右と右が交差、寸分の狂いなく同時に着弾する。

仰反りかけの意識を歯で噛み起こし、剥がれ落ちる笑みを憧れで焦がし貼り付ける。

相手を打ち、己の背を進め続ける。

スタミナが続く限りの全力ダツシユ。

再び見合う右拳。

脚から直結し、瞬きのうちに一撃放り込む。

風切り音を掻き立て、腕の皮一枚を抉り取られながら左拳を構える。痛覚を敢えて欠落させたいま、ヒリつく神経は脳に届かない。同じ傷を右腕に遺し、理不尽に息を吐き出す。

「シ、イ!!」

「ハ、ア!!」

拮抗する両者にも決定的な違いがある。

考えれば当然の、ほんの少しだけの差。

それは慣れ。

試合中のリズムの読み解きが早く、適応力に優れた千堂。彼がゴン

ザレスから早々にダウンを奪ったのは、データ収集にも時間と集中力を注いだからである。

数ヶ月の努力は身を結び、理詰めの壁に穴を空けてみせた。その過程、理詰めを穿つ心血を馴染ませる身体は、ゴンザレスのもう一つの顔に歯車を切り替えるまでに僅かな時間を要する。

アルフレド・ゴンザレスの側面、モード・ミキストリ様式・死神。

ストリート路上で生き抜いてきた凶暴さを解き放つ、ゴンザレス本来のスタイル。フェザー級屈指の破壊力と引き換えに防御力を捨て去る、攻防一体のボクシングに遠い存在。

ミキストリの登場が千堂の慣れに踏み込み、追いつく前に頭一つ飛び抜けていく。

『相打ちがついに崩れてしまった！挑戦者の内側から王者のアップーカットが舞い上がる！』

凶気は知ってか知らずか。

この先、2度と訪れない千載一遇のチャンスに集中砲火を見舞い、打ち崩しにいつていた。

『ズあッ!』

星の弾丸が虎の顔を穿つ。

流星のように疾く、力強い一撃。

一瞬だけ噛み合わなかった千堂の拳は宙に散り、重力に逆らうことなく身体が落ちていく。

(ハ……………落ちろ)

細かく脚を置き換え、中間距離で腰を据えた瞬間。

虎の牙は眼前に迫っていた。

(ツ~~~~っ！しつけえな、この死に損ないッ!!?)

(こんな殴り甲斐あること、簡単に止めてたまるかい…)

試合終了を拒絶し、ロープに手を掛けて息を吐き出す。スマッシュに押し飛ばされ、ゴンザレスが半歩退いたときゴングが鳴った。

『間一髪、挑戦者のスマッシュがトドメを拒絶！』

しかしコーナーに戻る表情は深刻です。不安に会場が包まれるなか、勝負は次のラウンドに持ち越されました』

苛立ちを込めて歩く王者。
肩で息をして戻る挑戦者。

どちらの身体にも赤い打撃痕が浮かび、たった1分半の壮絶な殴り合いを物語る。

理詰めによる集中力、一転豹変した暴力の嵐。

擦り切れていく精神を奮わせ、第3ラウンドは終了した。



終わりの鐘とともに緩めた拳を見て、自分が想像以上に緊張していることを幕之内は知った。

「いまの打ち合い、きつと1ラウンド分に匹敵する体力を消耗している。僕るときよりも何段階も上の拳で……！」

千堂だけでなく、ゴンザレスも。

一度でも流れを手にすれば二度と覆えさせない気迫。それを可能にする一撃失神級の威力。

「血の気がひきましたよ……。あの2人、嬉々として殴り合っています。あの1分間だけでK.Oパンチ連発じゃないですか！」

板垣が受ければ間違いなくダウンしている。

ボクサーとして、2人と対戦するときをイメージする。見えてくるのは距離を離そうと、速さで逃げようとも数秒で捕まる自分。

天才の脚が封じられる存在があそこにいる事実には、これを活かす手立てはないかと思考する。

「気になるのはゴンザレスさんだ。スタイルは一緒のはずなのに、なにか違う。いまの方がすごく恐ろしいよ」

「僕には先輩のときと同じに見えます。そのお陰か、千堂さんは五分以上に打ち合ってます！」

世界戦の熱に滾る板垣とは裏腹に、幕之内の取っ掛かりは解消することなく。喉が渴いていく空気のベタつきとともに、第4ラウンドの

鐘が鳴らされた。

表裏・死神

知らない世界が広がる。

止まることを知らず、両翼を広げて世界を広げていく。

自らの手で、欲望のままに駆ける時間を終わらせることは出来なくなった。命が尽きたとしても、障害が無ければ問題はない。心で突き進み、まだ知らぬ明日へと噛みつく。

(ブレーキ壊れてまうわ。進むこと以外考えられへん)

(肌がヒリつくぜ。血肉が殴れと命令しやがる……!)

止まる刻、真反対から自分と同じ存在が現れる瞬間。

リング上に現れる障害に他ならず。

自分を止められる存在は相手のみ。

ならば、止めてみる。止まったときの景色すら渴望し、何一つ取り零すことを選ばない男たちがリングを蹴った。

「とことん殴り合おうや!」

「限界まで付き合ってやるよ!」

この興奮を止めることは出来ない。

ブレーキは壊れてしまった。なら、不可能だと。停止は相手に委ねると笑い、死闘の3分間は幕を上げる。

「ただし、果てるのはお前だけだ!!?」

中距離からさらに踏み込み、ミキストリが右を大剣の如く振り下ろす。

「貰うてばかりは性に合わん!」

「な、あ!?!」

星空の美を欠くように、虎の爪痕が先制を咬ました。

勢いに押されてリングに摩擦熱を擦り付け、反撃を構え終える。揺れる焦点を即座に合わせ、標的を視認する前に下から殴り上げる。

交差する左右、軋む肉の音。

千堂のスマッシュとミキストリのロングアッパーが意識を浮遊さ

せる。

脳から身体の信号が遮断され、次の行動までに1秒の隙間が生まれる。両者共に起こる行動ゆえに、差はないように思えた。

「シィ——！」

「ハア——！」

幽闇ゆうやみを喰らわんと、牙が拳を放り込む。

生命を呑み込む夜が、魂を刈る拳を穿つ。

互いに相手の隙間を突く一撃。

狙い通りにその拳は頬を打ち、浅く殴りつけた。

致命、痛恨に届くことはなく。

しかし両者、その拳に気付くことがある。疑惑を確信にするべく、漸く踏み締めたリングを蹴飛ばし、近距離戦で殴襲を開始する。

『も、貫ったら打ち返す……いや！』

貫うなら必ず打ち返し、1つでも多くパンチを積み上げる！空振りしようとお構いなしに次を打つ！

その勢いが止まることを知らないのか!？」

さきのラウンド、あまりの荒さに身を硬らせる観客も少なくはなかった。幕之内、板垣も迫力の凄まじさに目を見開くほどだ。

彼らの評価は時間が経つごとに変わり始めていた。

（お前やつは普通じゃねえな！

殴っても殴っても飽きが来ねえ！死ぬんじゃねえぞ！）

右拳を浴びながら、思考を復帰させる。

余裕が出来たのではない。

限界を押し広げ、更なる高みへ登り始めたのだ。

（進んどののに押し返される……！

この感覚、幕之内以外に味わえるとは思いませんやった！

嬉しいで。嬉しくて止まる気せえへんわ！）

荒削りの一撃に震えながら、感情を灯す。

嬉々として拳を貪る。

行儀の悪さすら裂き、礼儀を尽くす。

豪快、凄惨さをそのままに。

突き進む拳の軌道が見える。

いや、目で追ってしまいうほどに澄んだ色へ変化していると言ったほうが正しい。

「凄い……こんなボクシングがあるのか」

空振り、打たれる間に反省する。

打ち、相手の拳が逸れるたびに正解を埋めていく。

「段々と空振りが増えてますね」

打てば当たる場所に最短最速の重心移動を行い、一撃でも多く拳を奮う。両者が急速で組み上げていく攻撃特化の姿勢は、結果として相手の拳が当たらない場所への回避を副産物として産み出す。

相手の血を求める結果、相互の思考が衝突して反対の結果を生む。意図せず、超近距離による大砲の空振りは着々と数を増やしていった。

「ヌ、ガアッ!!!」

拳が放たれる数よりも、打ち終わったあとに巻き起こる空振り音が会場に零度の風をもたらす。

当たれば死、打たれば即座の反撃、外れば次が待ち構えている。矛盾が見せる狂気の宴、インファイト。全方位に散りばめられたK.Oの文字。

(面白い、当たらないのに肉が悲鳴上げてるぜ!?)

20秒、計40回を記録する渾身の空振り。

全てが違う角度、1センチの距離移動を交え、相手の動きの先読みに注力する。

息を吸うことも重苦しい時間。

顔を上げて空気を吸い込むことを我慢し、歯を軋ませて機会に手を伸ばす。

「ツ~~~~~!」

僅かに全ての動作に重なる場所へ、千堂のボディブローが袋小路になりかけていた均衡を破る。

近距離の打ち合いが崩れ、被弾とともに一気に疲労が身体を襲う。打ち破った千堂すら消耗し、それでも次へ繋げるために喰らいつくよ

うに右を構えて。

「甘えよッ!!」

「ぐがっ?!」

全身から炙り出すように、ゴンザレスの一撃が激情のままに千堂の全身を止める。

ならば、と。空かさず千堂が右を返し、応答するようにゴンザレスが右を放つ。

破れた均衡が再び殴り合いに火を着けた。

次は意識を断つ、急所への攻撃に拳が狙いをつける。

(こいつ、意識を絶たれながら打ちやがった)

(ゴン、脳みそ揺らしても打ち返してきおる)

物言わずとも、相手を殴るたび手に取るように理解が進む。

思考を取り戻し始め、頂きへ駆け上がっていく。

『両雄、意地と意地が火花を散らす!』

どちらかが果てるまで、止まることは許されない。

果てるか、勝利しかない世界。

リングを蹴る音は地鳴りを轟かせ、驚異的なステップインから繰り出される数々の拳は触れるだけで意識を断割する。

血に塗れながら眼球が敵を捉えて離さない。

この会場に、彼らの死闘を邪魔できる者はいない。

怒りに塗れ、打つ。

ここに主導権などない。打つたびに状況は変わり、笑みとともにダメージは蓄積していく。その量に差はなく、体力の底も同じペースで行けば同時に無くなることは一目で分かる。

慟哭が理性を突き破るのではなく、理性が慟哭を手にして敵を伐つ。

「こりゃ、いつか以来の高揚感やでっ!」

「笑えるなんざ呆れる打たれ強さだな!」

不乱に足掻き、一心を握り締める。

再三の相打ちが頬を弾き、受け流しをすることも出来ず、両者が大きく後ろへ後退した。

このラウンド始まって以来初めての距離。

(世界で一人、幕之内にも劣らん拳と出逢うた。

なら……今度は殴り勝たなワイ自身に示しがつかん)
体力はまだある。

だが、腕の筋肉に疲労が溜まり、ぶらりとだらし無く垂らしてしま
う。

それでも、真の王者が此処にはいる。

だから越える。

越えて、その先の景色に手を伸ばしたい。

その一心で腕を上げて、勝利を手にするために前へ進んだ。

(いつ、この男のアイデンティティは尽きる。

あとどれだけ打てば殲滅できる？この俺が、嗤う以外のことを考え
るとはな……！)

理性を囓る凶^えみ。

凶気が思うことは高揚感。

これほど殴ったことは路上^{ストリート}でも数少ない。

自分にとっては一大事であり、世界が広がるさまに味わったこと
のない興奮が全身に駆け巡る。

ミキストリにとって史上の至福が此処にある。

「楽にしてやる、虎^{タイグレ}ツツ!!」

己の身体の限界を知り、勝利を収めるために飛び出した。

「降りてもらおうで、死神^{ミキストリ}ツ！」

両者の想いが拳に込められ、勝負の一撃が交差する。

「——カ」

漏れ出た声はどちらのものか。

聞き取れる人間は本人のみ。右と右の着弾音が凄まじく、観客の興
味は相打ちした両者が、次の瞬間に立っていられるのかにしかなく。

「……………ハ」

顔面への相打ちから硬直、ダメージが満遍なく染み渡る数秒の刻を
経て。先に揺れ動いた身体は、反撃のためではなく。

一度は理性を打ち破った、意志の固さが軍配を左右する。

赤い拳を擦りながら、ミキストリの顔が下に落ちる。

『あぁっ！王者の膝が崩れ落ちる!!』

虎の牙が死神を越えるのかーっ!?!』

興奮気味に立ち上がる観客たち。

その視線の先で、遂にミキストリの身体がうつ伏せにリングへ。

拳を上げて戻る千堂へ、惜しめない歓声が祝福を告げる。

「や、やった……千堂さんが勝つ!」

「死んでもおかしくなかったのに、打ち勝つなんて!」

レフェリーが臆げな意識を確認してカウントを開始する。

意識が沈む。

底に地はなく、下手をうてば永遠に遊泳し続けられる。昏倒、無意識の海とは人間が有する最も広く、神秘的なまでに深い可能性のことだ。

死神の意識はその果てなき海に放り出され、明瞭な思考で己を振り返っていた。

(打ち負けた…。俺が、打ち負けただと…?)

あまりにもくつきりと思いつける、敗北の瞬間。

あの刻、間違いなく疲労困憊で身体が崩れ落ちた。

千堂の拳は幕之内よりも的確に、荒れ狂うミキストリを捉えていた。

その原因に思い至れず歯ぎしりをしていると。

「俺たちがセンドーを研究したように、ヤツもまた俺たちを研究していたんだ。恐らくは、お前含めて動きを覚えるくらいにな」

背後から、同じ速度で沈むゴンザレスが結論を出した。

同じ自分であるため、無意識下で対面することは不思議ではなく。その結論に納得いかず声を荒げた。

「観ただけで俺を…死神を越えられるはずねエだろうが！適当ぬかしてんじや——」

「認めろ」

荒ぶる言葉に被せてきたのは現実。

逃避を許さず、理性は凶気に負け突きつけた。

「俺たちは誰だ。…俺はお前だ、アルフレド。」

お前は俺だ、ゴンザレス。だから、負けは認めろ」

「~~~~クソがツ!!!」

自分の言葉だからこそ、ミキストリは声を張り上げて、現実を知るしか方法はなかった。

男が歩く世界は腐敗に満ちていた。

人は当たり前のように死に、心は抗う暇もなく闇に染まる。

産まれた刻も、呼吸した回数も、修羅場を潜った経験すら一瞬で碎け散る。いつ殺されるか分からず、誰が敵になるかに怯え、幾人もの死を知った。

死は隣人。生きることを証明する、命の肯定者。

何もないポケットのなか。いつも、拳を握っていた。

負けてたまるかと、この拳で死を負かし続けてきた。

少年が死神ミキストリを生み出したのではない。

今際の路を渡りきった男が死神ミキストリとなったのだ。

故に、ハツキリとミキストリの存在がある。

死神に愛され、死神と成る者。

そして、無敗神話に憧れる男。

「……負けだ。もう、手は届かない」

だというのに、天ではなく、地を歩く者に負けた。

心と直接繋がるミキストリは、その屈辱に耐えきれなくなっていた。

深淵へと加速する意識。

もう浮上することなき入り口の手前で、理性が手を取る。

「戦やろうぜ、ボクシング」

「…どうやって？俺たちはどっちも殴り負けた。」

「どうやったって、先は見えてんだろうがよ」

まだ屈辱を味わえと言う男に、苛立ち気味に問う。

「二心一体の俺たちはまだベストを尽くせる。」

俺たち2人なら、センドーの野性を越えられる」

「……………」

その意図を理解するのに時間は必要なかった。

理性の提案は、凶気に最も理解し易い言葉なのだから。

理性はもう一つの人格にして、地獄を生き抜いたアルフレド・ゴンザ

レスの生き証人。

そして死神を否定し、死神を誰よりも受け入れる理性。

もう1つの貌が不敵に笑い、立ち上がる。

「フフ、ハハハハ……：そーいやお前、正気だったな」

無意識下での大海で見つけた、勝利への道筋。

敗北の路を歩き、身体の限界が許す限りを尽くしに空へ手を伸ばし

た。

浮上する意識の名は、アスール・ミキストリ表裏・死神。



起き上がる男の眼は、変わらず凶気が宿っている。

9のカウントを終え、試合は即座に再開と成る。

「まだ、立つんかいな……：凶太いな、ゴン」

言葉ではそう言いながらも、本人も自覚するくらいに喜びが口元から溢れ出ていた。観客たちを勢いに乗らせるには良いパフォーマンスだが、幕之内らボクサーは背筋が凍る感覚を味わう。

それを真正面で受け、堂々と視線を返す王者には敬意を表するほど。

「……………なにか、違和感が」

「先輩、どうしたんですか？」

板垣の問いに、言いようのない不安を抱きつつ。

見守ることしか出来ないため、ただ一刻も早い千堂の勝利を願っ

た。

「その粘り強さ、クセになるわ。まだまだど突き合いできて嬉しい限りやで！」

凶気よりも現状を楽しむ声。

カウント9の間に残り1分を戦えるほど体力を回復し、ハツラツとコーナーから脚力全快で跳ぶ。

ミキストリも踏み込んで撃墜の構えに入る。だが、勢いが虚しいほどに無く。千堂との温度差を見れば、誰もが直ぐに王座奪取出来ると確信していた。

ミキストリの様子を見て足が使えないと判断。勢いそのままに、千堂がトドメに選んだのは超低空スマッシュ。

避けるにはダメージを負いすぎている。カウンターをするには動きが遅すぎる。なにもかも間に合わず、辛うじて立ち上がったことはなにも報われない。誰もが事故の目撃者のごとく衝撃の瞬間に呼吸を忘れるなか、まだ触れられてもいないミキストリの身体が真横に放り出されていた。

「な、にイ!？」

まるで意識を無くした身体。

力果てたような滞空に、空振りしたスマッシュを他所にミキストリの姿を追う千堂。もう立ち上がる気力が無かったのか、そう思った矢先。

「ぶっ!？」

急遽起き上がるミキストリの拳が、スマッシュの打ち終わりのボディ目掛けて突き刺さっていた。

即座に立て直した姿勢から、続けざまに左ジャブが3度、千堂の頬を打ち抜く。受けた状態が無防備なことから、千堂の眼はどのパンチを貰ったのか判別できていないことが分かる。

「あれは……！」

それでも咄嗟の神経で左を掬い上げ、逃れた場所へ打つ。

しかし、またも空振り。ただの空振りならまだしも、空振りの終わりに小さく左右を纏められる。

「そんな大振り、いまの脚でも避けられるぜ。

……ま、ほぼ重力任せだがな？」

「こ、いつ……ッ！」

中距離で視線を交わし、千堂は確信した。

凶気の手綱を握る理性の姿を。

『な、なんということだ！疲労困憊の王者、紙一重で挑戦者の必殺を躲してカウンターを返す！』

その動きは先ほどと違い、落ち着きすぎている！』

決着間近と思われた空気が壊れていく。

2つの選択肢があつたとき。

当事者の多くが片方だけを選択する。

それが当たり前かのように、言われずとも勝利か敗北を受け入れる。1試合で起こる勝敗は1つしかない。ならば、1試合中に受け入れる勝敗の数も1つでなければならぬのか？

それは否。

1度相手をダウンさせたとき、その逆。

拳が当たらず、一方的に打たれたとき。

スタミナが無くなり、拳が打てなくなったとき。

ボクサーは試合のなかで、何度も優劣を感じ、勝敗にも劣らない判断を心のなかで着けている。それが心を折り、または心の支えに変えて試合が終わるその刻、少しでも自分の勝利に傾けようと努力するのだ。

ならば、敗北を受け入れ、なおも勝利に邁進する王者には何が起きようとしているのか。

「ふ、雰囲気が変わった!？」

「あれはミキストリじゃない。

理詰めで相手をコントロールするゴンザレスさんだ!」

「そんな!?!ミキストリから試合中に戻るなんてこと、今まで無かったはずでしょう!」

幕之内と板垣が王者の変貌に反応する。

あれはアルフレド・ゴンザレスの理詰め。

元の姿で千堂と対峙している。

「僕がフィニッシュブローをもらったとき、ゴンザレスさんの顔は冷静沈着だった。土壇場で、ミキストリは解いてたんだ」

「なら、千堂さんの慣れなら直ぐに追いつけますー!」

王者の変化に答えを出しながら、リングの上に注目する。

千堂も同じく答えを出し、ならばと即座に意識を対理詰めへと切り替える。

(ここにきて小賢しい真似しておって…直ぐに追いついたる!)

注意すべきは世界の頂きを担う左拳。

目論み通り、左ステップを小刻みに交え、距離を測らせない左ジャブが意識と神経の隙間を縫うように放たれた。

千堂はノーガード。

目視不可に等しい左を首だけで躲し、後出しのボディブローで動きを止めるため被弾擦れ擦れのダツシユを行う。

「なんだあ、その鈍いステップは!!」

「なんや、とオ!?!」

踏み込んだ瞬間、襲来したのはフォームもハツタクレもない強引な右アツパー。肩から捻じ込み、千堂の身体ごと後方へ弾き飛ばしていた。

その姿は間違いなく凶気。

ミキストリが千堂を殴っていた。

「バカな!?!理詰めに戻ったんやないんか!?!」

「あの動き、ミキストリのほうやないか!」

あの男はいつたい、どないなっとなねん!?!」

騒いでも変化に終わりはない。

解決するのは千堂であり、その手立てが見つからなければ敗れるのみ。

千堂が直前まで見たものは左ジャブ。

実際に被弾したのは右アツパー。つまり、理詰めによるフェイントと結論したいが、眼前で猛る眼光はミキストリのそれ。

(考える暇あらへん。様式・死神が少し変わったつちゅーことやろ、

打ち合いで直ぐに慣れれば問題ない！)

概要を把握し、整理を終えながら突進する。

残り少ない体力を更に削る覚悟を決め、異変の真っ只中で凶気と対面した。

同時に振りかぶる右拳。

最短で突き進む右は、1分前の空振りを思わせる軌道で外れていた。戻す右を遠心力に変え、今度は先に千堂の左フックが炸裂。寸前で右ガードが間に合うも、威力を受け止めきれずによろめいた。

回復した体力を使い、右ストレートを抉るように打ち出し、再びガードで大きく後ろに退がっていく。

その踏ん張りが頼りなく、相手の限界が近いことは目に見えて分かった。

(どうあろうと体力は簡単に回復せん。)

こっちは小手先に付き合う暇はないで！)

(んだよ、その眼。なにかすれ違いがあるな!?)

凶気と交差する視線。

今度は千堂から右拳を構え、判断の隙を与えずに必殺級の威力を打つ。反射的に、凶気の瞳が同じく右を返す。そして互いの頬を掠る空振り。当たれば終わりだが、両者に当てるにはあと少し足りない。

一撃を見舞うため、歯を食いしばって左拳を返そうとしたとき。ミキストリの左が大振りになるモーションを見逃さなかった。

(大振り……いや!!)

疲労から、パンチが大振りになることはよくある光景だ。試合後半ともなれば、一発逆転を狙う拙いパンチは目立ち、その数だけ巧く利用されてリングに沈んできた。

ゴンザレスの大振りに、上から容赦なく一撃を合わせて振り抜いた。

次の瞬間、曲線は直線に様変わりし、更に内側から千堂の頬を理不尽な一撃が打ち抜いていた。

「ぐ、あ?!」

見ているとも反応出来ず。

パンチの鋭利な速度も見ていたが、それよりも驚くべき表情をしていたのだ。

破顔していた。凶々しく笑っていた。

知性の裏に狂気が宿り、理性の裏が最凶となったことを、崩れ落ちる男だけに向けて発信していたのだ。

「どうだ、俺たちの一撃は。効くだろう？」

ここに来て、最悪に近い形で成長を遂げた王者。

挑戦者との差を語るように、視線は背中越しに千堂を見下ろしていた。

『だ、ダウン……！挑戦者、ここにきて痛感のカウンターを貰ってしまった！誰も知らなかった王者の底力がここで爆発するっ!!!』

場内啞然、沈黙が悲鳴にすら聞こえます!!』

レフェリーのカウントを他所に、幕之内はゴンザレスの変化の内容を理解した。

「理性と凶気が瞬時に入れ替わったんだ……。」

あんなフェイント、そう簡単に見抜けないよ!？」

「……しかもラグが無いみたいです。千堂さん同様、直感を混ぜて予測を無意味にしている!」

板垣もそれに重ねて、脅威的な変化に汗を流した。

「新しく、厄介極まる男が誕生してしもうた。」

おそらく、あれがゴンザレスの最終到達地点や」

柳岡も同様に、コーナーから遠くなる決着に顔を歪める。

予想だにしなかったゴンザレスの覚醒。

超近距離戦の最中ですら即座に様式変更する、万事に対応可能なスタイル。

それが表裏・死神。

「あ、ああ……なんで、そんな凄いんや……。」

理性と凶気の融合を知り、千堂は呟く。

「けどな……。ワイも、退けへんねん。」

戦いたい男と、リングで再会するまで……。」

酸素を求めて呼吸をしながら、合間で笑いが込み上げる。

思い出すだけで熱くなる試合をした。

そして2度、敗北も喫した男をチラリと見る。

「ワイは、幕之内に勝つことを絶対に諦められへん！」

あの男を倒したお前には、尚のこと負けるもんか!!」

震える膝を立たせ、眼力で言うことを聞かない身体を摘み起こす。

対面の男に向けて拳を伸ばしたところで、第4ラウンドの終了が会場に鳴り響いた。



「センドー……すごい、男だ……」

自陣に戻るや椅子にドカリと座る。

どんな辛いときにも見せなかつた相手のこともお構いなしの姿に、ブラスは疲労が限界に達していることを知る。

「凄いいのはお前だ、アルフ。試合中に良くぞミキストリと共闘してくれた。このままならセンドーを倒せる。あと少しの辛抱だ」

「ブラス、俺も長くはない。次で、最後だ」

短い言葉のなかに、共闘の意味を含める。

ブラスはそれを全て汲み取り、やはりと納得する。それでも、選手を励ますことに変わりはない。

「なら倒してこい。お前の誇る全てで、目の前にいる障害物を打ち砕くんだ！」

短い1分が終わり、ゆらりと立ち上がる。

「2度、同じ人間に負けた男だ。そりや、強いよなあ。」

同じく2度、負けた身として……ここは譲れん」

あらん限りを尽くすため、王者はゆつくりと歩き始めた。



「ゴンのやつ……殴っても尽きん。」

あれが、ホンマのチャンピオンや……」

自陣の椅子で上を向き、忙しく呼吸と眩きを繰り返す。

喋るなど言っても聞かないので、柳岡は千堂の意思を留めるために言葉を届ける。

「せや、まだゴンザレスのほうがベルト持つとる。けどな千堂、お前は今からヤツのベルトふんだくって、幕之内との再戦の場所作るんやろ!？」

柳岡の言葉に、喉の奥から笑いを漏らす。

幕之内、それがどれだけ千堂のなかで渴望する望みなのか。その反応だけで理解に難くはない。

「せや……。幕之内と……。ああ、けど今は、ゴンに集中したいわ……。そして、千堂の戦意は正しく前を見ている。」

勝つこと。勝利を成した先に、再戦の場所がある。

「ホンマの王者倒して、頂^{てっぺん}き、見に行ってくるわ」

「ああ、待つとるからな！」

英気を補填し、しっかりとリングを踏み締めて決着へ歩み始めた。

限界の先へ

第5ラウンド早々、逆鱗が迸る。

「直ぐ楽にしてやるよッ!!?」

「どっちもぶちのめしたる!!?」

一直線に駆け、底が見え始めた体力を惜しみなく身体に巡らせる。進むたびに地鳴りを錯覚させ、雰囲気だけで空気を震わす男たち。会場の誰もがこのラウンドでの決着を確信するなか、2つの拳が終幕を上げた。

中距離で右のフルスウィングを放る千堂。対して右ストレートで顔を狙うミキストリ。互いの顔がカクンと下がり、スリップ気味に初撃を躲す。

空振り後の切り返しを準備していた千堂。スウィングの勢いをミキストリの頭上で殺し、即座に右足軸を回して左拳を打ち上げた。

「ッ~~~~ッ!!?」

ミキストリの顔面を捉え、次の拳を勢いに乗せる。

右の拳を伸ばした瞬間、理の一撃が顔を上空へ吹き飛ばしていた。細かく美しい、手本のような左アッパー。油断していたのではなく、ガードに回す余力が存外無くなっているのだ。

（それは向こうも同じや。ミキストリがスリップなんざするかい！部分的にゴンのほう出てきよんのや！）

ここに來るであろう、と。

理性の行動を予測して、ガラ空きかに思われる身体から再びのスウィングが放たれる。

（こいつ、見てもいなくせに!?!）

鉄球がコンクリートを破壊するような、表情を削る一撃がゴンザレスの前進を打ち止める。

視線が逸れようと、止まることだけは拒絶する。

射程外となり、身体が地に着いた。

千堂が脚で距離を殺そうとしたとき。

「トロいんだよカスが!!？」

視界を覆うのは、赤く大きな拳だった。

「なん、のツ!!？」

意識を拐う威力だと知り、迷わずガードを上げる。

打ち付けられる拳はガード越しに顔を殴り、勢いを返せずに押し戻される。全快時と変わらないキレ。

受けたダメージが口の中に溜まり、血肉に溶けながら対峙する男を見る。

重なっている筈が、左右対照の笑みを浮かべていた。

(クソくっつ、コロコロ入れ替わりおって……)

いま、目の前には理性と最凶がいる。

死神と夜。

人の恐怖を抽出した、生存本能が導き出した共闘。

千堂のモーションごとに適したスタイルに変え、本人すら気づかないうちに人格が入れ替わる。

長年付き添ったことで複雑怪奇な機動を実現する、真新しいミキストリの姿。

「ヂイイツ!!？」

極限の精神消費を必要とする超接近戦^{インファイト}。

止まるなどあり得ない、潤滑な情報処理を要する舞台。

本来と言わず例外なく、1対1である筈のリング上、千堂 武士は相反するタイプのボクサーを相手に挑まなければならない。

「そこ、捕まえた！」

手が届く距離、片一方に拳が減り込む。

そう確信した直前、もう片一方が弱点を補うように前に踏み込んでくる。

「よそ見とは余裕だな」

「おん、どれは……！」

打ち抜いたものは影。

背後から入れ替わるように、正反対のボクサーが荒く、理りを以て

千堂の魂を削っていく。

変わる代^がわる。

ゴンザレスとミキストリが行き来するリング。判断が遅ければ最後、冥府の底から這い出ることとは不可能となる。

「ハ、ハ、アツ——！」

延々と当てられるわけではない。

突拍子に、恐らくは確信なく振り込まれる不意の拳。

野性の勘と言う他にない無意識の反撃を、紙一重で避け、或いはガードをしながら深く踏み込めずにパンチを積んでいた。

「もうちょい、人間らしく振る舞えよ、お前!!？」

拳のやり取りは切れ間なく、加減を外して行き来する。

千堂を振り回すゴンザレスの様子に、ブラスは眉を挟めて「やはり」と深刻を表すように呟いた。

「入れ替わりもタダじゃないということか……。アルフとミキストリの交代で体力が尋常じゃないほどに削れているんだ。先に倒さなければ状況は覆されてしまう」

本能^{サガ}が性の天蓋を取り外した代償。

異なるスタイル移行による、肉体への急激な負荷運動。練習などしてない、考えれば当たり前の消耗。

「セコンドとして急かすべきだ……。しかし、いまのアルフの思うままに試合をさせてやりたい。あんなにも、自分自身を信用して試合をする姿を見たことがない」

それでも、アルフレド・ゴンザレスは選んだ。

ミキストリとの凶演でなければ、千堂を沈めることは出来ないと覚悟を決めているのだ。

「そのまま、出せる全力を尽くせ、アルフ！」

激励を送る以外、ブラスに出来ることは無事に帰ってくることを祈るのみ。

それは反対側、柳岡も同じ気持ちだった。

「柳岡、千堂のパンチが当たらんぞ！」

拳に振り回して、カウンター狙われるんやないか!？」

「千堂の眼、よく見てください。

なにも諦めちゃおらん。打たれながら、ゴンザレスのことをずっと観察しちよる。リングの上で、なにかを見つけかけよるんや」

ダメージで腕を上げること辛い男が、誰よりも賢明に複雑な回廊で足掻いている。

彷徨っているのではない。確かに見える光を求めて走っているのだ。なら、柳岡は多くを言わない。

「いま振り回しよる拳は考えあつてのもんや。

何処かに隠れとる活路探して、入り口塞がれんように必死に足掻いとる！悔しいがこつちが言えること、なにもあらへん。

だから信じます、千堂がやろうとすること。必ず見つけると、これまでの千堂が言ってくれてますから！」

互いのセコンドから信頼を注がれ、男たちは勝利へと全力疾走する。

終わりを迎える瞬間まで。

貪欲に勝利を求め、敵を喰らうが如く歯を尖らせ、触れるもの全てを呑み込むほどの激情を纏う。

止まるなど、両者の思考からは抜け落ちている。

己は相手を仕留めるのみ。生きるために1つでも多くの拳を減り込ませ、屈強な精神を削ぎ落とし、魂の拳を掲げて命を貪る。

(どこや、なにすれば2人を捕まえられる?!)

(踏み込めない、下手すればひと噛みで終わる…)

欠けていく体力を補うように、正確無比の拳を打つ。

入れ替わりのない打撃に、空かさず千堂はパライイをして踏み込んで来る。

(いや、それ以上に体力が尽きてしまう。

ならよ、犠牲のうえで意識を断つまでだろ！)

潜り込んだ千堂へ、ミキストリが高々と拳を突き上げる。右腕でこれをガード、軸をずらして外へ散らした。受け流したまま腰を捻り、身体ごと右の渾身を押し返した。

(なんつう拳だツ!?ただ押しつけただけのくせに!!)

(この隙間すら替われるんかい！器用すぎるわっ！)

咄嗟の入れ替わりで直撃を避け、辛々振り抜いた右腕の後ろに踏み込んだ。

無防備な千堂の横腹へ、いまなら左拳をデタラメな速度で打つてこようとも先に当てられる。用心を重ねるため、まず力を込めて拳を当てられない死角へ移る。

再びミキストリへと替わる意識。

繰り出されるのは冥府へ誘う一撃。

死神から虎へ、絶滅を言い渡す宣告。

視界の外、視認すら間に合わない場所。

そこを、千堂は。

「そこや——！」

咄嗟に手繰り寄せた当て勘によって、死角に入り込むステップインに手を伸ばす。

「ぐ、う……！！」

相反した理想に、牙が水を差す。

触れた場所は腹。ゴリ、と音を立てて衝撃音が鈍く響く。

技を凌駕する業。

理詰めの対極、人間の筋力を限界まで引き出す野性。

この瞬間、ミキストリの足が奪われた。

「捕まえたのは…俺の、ほうだ…！」

だが、死神は嗤っていた。

千堂の拳を受け、内側が破壊されながら。軋む背筋を伸ばし、縮む筋肉を奮い伸ばして、右拳を打ち下ろした。

(が、グギギッ……！)

顔面に直撃し、血と汗を撒き散らしながら意識が霧散していく。手応えを感じ、倒れゆく姿を目で追う途中。唸り声を吐きながら、千堂は意識を繋ぎ止めた。

左脚を広げて立ち直り、震える喉を隠すことなく身体を起こす。

(耐えやがるか……!?)

もう、強がんのも、弾切れだ……!)

いまの一撃を耐えたことの衝撃、そして打った衝撃で筋肉が悲鳴を上げる。

千堂も、ゴンザレスも、終わりはそこまで来ていた。
ミキストリの抱えるダメージの要因はそれだけではない。

千堂が放った一撃は、理性と凶気が替わる瞬間。僅かな筋肉の緩み、疲労による呼吸の深さ、そして針の穴もない無防備の最中に拳を減り込ませたのだ。

（杭は打った……！あとは、殴り、倒す……！）
鈍る様子を見て、細かい動きを封じたことを知る。

インファイトの継続が困難となり。

千堂も、ゴンザレスも確信する。

残るは一撃。後のことを考える思考回路が無い。

（行くぞ、俺……！センドーを倒すぞッ!!?）
（魂と肉体が繋がってける、最後の拳や!!?）
ゲンコツ

傍から見れば腕一本動かしていることが異常と言える。肌を染めるのは赤く、そして蒼く歪む衝撃の痕。

精神は肉体から発する危険信号を半ば無視し、前に進むことで勝ち得る生存を選択する。

色彩を置き去りにして、固く拳を握る。

情報の取捨は全て、勝利へ向けて。

対峙する世界一を越えるため。

登り詰める猛獣を刈り落とすため。

相手の、最も注視すべき要素のみに彩りを与え、平面展開している他の動作確認能力を打つことに専念させる。

手も足も犠牲にするものではない。欠けるものなどあってはならない。引き伸ばすよりも、己の魂を凝縮させてただ一点を狙い穿つこと。

「ゴンザレス!!!」
「センドオツ!!!」

雄叫びを一声、ここにいと相手に伝えて。最強、最凶の右拳が同時に振り抜かれた。

一方だけが行き着く、活動限界の果て。空振りの勢いは全て、その身に返る。

く、そ

後方へ吹き飛び、力なくゴンザレスの腕が宙を舞う。顔に浴びた直撃、腹に残る衝撃が鉛となり。振り抜く拳に僅かな差が生まれてしまった。理性と野性の勝負、ここに決着。

(な、あ……)

世界を仰ぎながら、背中に触れるロープに沈み込む。ゴンザレスが思い出すのは、幕之内との試合の最後。

あの時もこうして、ロープに身を打ち付けながら、空の先を見ていた。

(俺が、見るべきは……アンタじゃ、ない)

思い浮かべた無敗神話に感化され、魂を漲らせることが出来た。だが、いま見つめるものは真逆の存在。

無敗神話を追いかけて、泥臭く生き汚さを宿す男。

(行け、最後を決めるのは、お前だ……！)

己自身を信じて、凶気とともに在ることを選んだ。理性に背中を押されて。

暖かい手を感じて笑い、死神の顔が浮上する。

一瞬、視界が暗転する。

ロープから背を起こし、男たちは向き合った。

その眼は凶気であり、理性を連れる。

想いの丈を増したことを、千堂は即座に知った。

再びの邂逅に挨拶は要らない。

「間違いなく、お前が最凶や」

「お前に逢えて、良かったぜ」

友に気さくに声を掛けるように2人は笑う。
そして。

悔いのない、正真正銘の終わりへ拳を打ち出した。

拳を当てる側より、貰う側のほうがこの決着に納得していた。

純粹に強い。古今東西、これほどまでに潔い理由は無い。なにせ男は、その強さに憧れてボクシングの世界に踏み込んだのだから。

「チツ、ムカつくほど……楽しかった……」

まるで勝者のように微笑み、凶気が沈黙する。

リングに転がり、目を閉じる。

ただ、不思議とリカルド・マルチネスへの道のりは霞むことはなく。

先に往く背中に手を伸ばしたいと、心の底から強く願った。

「……………先に、行くで」

誰に宛てた言葉か、その真意を問うものは居らず。

勝利の宣告とともに、激闘の夜は明朝を迎えた。

千堂 武士

WBCフェザー級タイトル獲得!!?!!?

贈るもの

千堂 武士との試合を即断した理由。

それは、2敗の意義を知りたかった。

同じ相手に負けることから、なにを学び、なにを思い、なぜ2度目を挑み、そして3度目の試合に臨みたいのかを。

リカルドに手を伸ばし、2度の機会を棒に振った俺が3度目の挑戦を剥奪されたとき。確かな武器を手に入れると息巻いて、WBCタイトル挑戦を行った。だが、マツカラムのビデオを観ているときから学ぶことは何も無く。リングで相対したものの、得られるものは世界王者に就いた経験のみ。

だから、千堂 武士の戦績を見て確信したのだ。

幕之内 一步に2度負けながら、まだ引退していない意味。世界で戦うことを決めた男の旅路は100の試合よりも価値があると。

3度目を渴望し、舞台を探し求める男に会わずにはいられなかった。

「う……………」

白ずんだ視界は明光を映し出し、高らかと拳を上げる男を確認する。

胸の奥に込み上げる、悔しさと満足の感情。

ボクシングを始めて、悔しさに類似するものを感じたことは数え切れない。だが、逆に満足したことは1度たりともなかった。

当然だ、俺が倒したい男はリカルド・マルチネス。

1人だけだった。2度負けて、全てを出し切れることなくリングを去った。心の底から、身体が動かなくなるまで戦えたと納得する試合は今日が初めてだ。

「起きたか、アルフ。」

ゆっくりで良い、まだ平衡感覚に支障があるだろう？」

「ブラス……………終わったんだっただな……………」

セコンドの声に、試合を惜しむ声を呟く。

「なあ、気を悪くするかもしれないが……」

俺はいま、最高の気分なんだ。負けて清々しいなんざ、我ながら呆れる感情だぜ」

天井を見上げながら、呆れ笑いを口元から零す。

味わったことのない感情に行き当たりを見つけれずにいると、ブラスは考えるように目を瞑り、ゆつくりと頷いた。

「何を言うかと思えば、そうか。リカルド以外の負けを知らないんだ、そう申し訳なさそうにするのも私の育成不足のせいか」

ゴンザレスの穏やかな表情に応えて。ブラスは最初の試合に勝利した選手を迎えるように、この試合が価値のあるものだと真つ直ぐな瞳で伝える。

「30の勝利よりも価値のある試合だった。2度の敗北に勝る5ラウンドを過ごした。

本来、負けとは嫌うのではなく糧とするものだ。刻には1勝よりも価値があり、人生を大きく変える起点になり得る。

その1敗が今日、彼によってもたらされたのだ」

ゆつくりと上半身を起こし、戴冠する男を見ながらブラスの言葉を噛み砕く。なにも間違つてはいない。新しい境地に至り、それでも足りないということを教えてくれたボクサー。

間違いなく、千堂 武士と出会っていないければ、3度目も同じ過ちを繰り返してリングを去っていたに違いない。

「なら、感謝しなければ、元王者の名折れだ」

1人で立ち上がると、身体の調子が歩行に支障のない程度に回復していることを確認する。だが、まだミキストリは心の奥底で眠っている。本当なら彼から言葉を贈ってほしかったのだが、そこは最後の一撃を貰ったのだから仕方がない。

確かな足取りで王者となった男に歩み寄る。

千堂は少し前から待っており、立ち止まるゴンザレスと同時に手を差し伸べる。

「……おめでとう。そして、ありがとう」

「……………また、戦^やろうや」

試合のなかで語り尽くした両者。

握手を交わしながら、短くお互いを讃え合う。

千堂はゴンザレスの未だに燃える闘志を見て、犬歯を見せながら次の試合を心待ちにしていると伝えた。

呆れるほどにタフな千堂を見て笑うと、ゴンザレスは流暢に言葉を放つ。

「孤高。それがリカルドの強さだった。

世界一の孤高に挑むなら、この言葉を留めておけ」

「……………孤高、やとっ？」

不意の言葉に反復する。

それが激励の意味だと気付いたときには、握手は終わりゴンザレスは背を向けていた。

「健闘を祈る。また会おう」

再戦を誓い、後ろ手を振って。

アルフレド・ゴンザレスの挑戦は再び始まった。

最凶の人物を見送り、明朝を迎える新王者。

日の出とともに、次に見上げる空に手を掲げ、次の挑戦へ向けて雄叫びを上げた。

Next Champion編

WBC・WBAフェザー級王座統一戦

リカルド・マルチネスVS千堂 武士

2021・WINTER!!

板垣 学の慢心は消え去った

1ラウンド55秒。

それは板垣 学が今井 京介から敗北を喫した、プロ2度目の試合時間。

1ラウンド2分55秒。

これはハンマーナオが今井 京介を倒すまでに要した激闘の時間だ。

2つの試合、この2分間の差は果たしてなんだろうか。

「敬いか、負けん気か……」

少なくとも、慢心はあつたかなあ」

鴨川ジムの地下に設置されたリングで、板垣 学はサークリングを終えてステップを刻み続ける。

思慮と行動に結合はない。練習の終わりに身体をクールダウンさせるために始めた運動で、勝手に身体を動かしているとさえも纏るからだ。

「なによりも、アウトボクサー対策を取ってくるのは間違いない。ナオさんのフックを打つ脚の動き、相当に滑らかだった。先輩ほどじゃないにせよ、ダツシユの連続で追い込もうとすれば……」

脳裏に過るのはかつて幕之内 一步が対戦したアウトボクサー

、唐沢 拓三がK・Oされるまでの試合運び。

幕之内対策である腹筋作りはA級ボクサーでも飛び抜けたもの。ボディ打ちに耐え、その上でデンプシー・ロールを破りK・O勝利する。実行せんとする意味を知っている、アウトボクサーの思考とは思えない気の強さ。

ちよつとやそつと…否、世界の舞台上が上がっても霞まないであろう精神力を、幕之内は愚直なダツシユだけで唐沢の戦術を土台ごと壊したのだ。

「唐沢さんの二の舞だ。走り込んだことは先輩との試合のとき、鷹村

さんが見抜いていた。きつと、僕もそれで捕まる」
徐々に乱れる輪。

気づけばコーナーに追い詰められ、そして渾身のボディブローによつて沈む。

アウトボクサーが戦慄する光景を間近で観た。

あの動きをハンマーナオが可能としたら？

そう考えて、自分の足なら追いつかれないと思ひ。根拠が自信だけという、敗因の1つであることを知る。

「そうでなくとも、ナオさんには“噛ませ犬”としての姿もある。あの技術、牧野さんの比じゃない。集中力を乱されることだってあり得る」

総合して、やはり自分はハンマーナオに及ばない。

実力差でいえば寧ろ板垣のほうが上だ。問題はそこではなく、中身の話になる。

目下、やるべきことは決めていた。

「集中力、保たせなくちゃなあ…」

それは当たり前に必要な要素。ボクサーに関係なく大事に求められるものが、こと板垣にとつては非常に難しい問題となっていた。

京介に負けて以降の2試合、板垣は泥試合の末に判定勝利という納得のいけない結果を残している。板垣のパワーなら仕方なし、という話では終わらない。篠田や幕之内に言われるまでもなく、板垣自身がK.O出来たと思うほどに実力差はあった。

だが、分かっているも身が入らない。

京介にリベンジを誓ったものの、どうすれば勝てるのか想像できず。結果、ズルズルと試合にまで影響を及ぼしていたのが復帰戦。

「このままじゃ泥試合もできずにやられる。せめてナオさん対策も色々と考えたいところだけど、先輩はまだ療養中だし」

復帰戦の勝利を祝ってはくれたけど、自分のなかで喜びは欠片も感じなかった。ジムの練習風景に幕之内が居ないことを挙げるつもりはないが……。

「それにしても、いつの間にか殺風景なジムになっちゃって。練習生

どころか青木さん達もいないし」

「鷹村はロードワーク中だ。木村と青木はこの前試合で泥試合だったからな」

板垣のボヤキに応答したのはコーチの篠田。

青木と木村も受け持つ彼としては、少し前に泥試合で辛くも勝利が続くことに思うところがある。己の実力不足を嘆く様子に、板垣は少しの申し訳なさを感じていた。

「あの落ち着かない雰囲気、好きだったのになあ」

4人と鴨川がいるだけで賑やかではない時が無かった。

程よい緊張感集中力を高めるなよりの材料だ。あのなかでこそ、板垣のモチベーションは研ぎ澄まされていたと言っても過言ではない。

(「こんな、僕とコーチだけだなんて……」)

懐かしい風景といまを見比べて、ジムを見渡す。

そのときだった。

「……あ、分かったかも」

唐突に、天啓の如く眩く、その方法は浮かび上がった。

止まった足を見た篠田に、板垣は思いついたことを話し始めた。

後日。

地下のリング周辺に準備された数々の機材。

一息ついた篠田が降りてきた板垣に気づき、汗を拭きながら声をかけた。

「頼まれた通り、気を散らすために色んなものを用意した。ざっとこんなもんだが、お気に召したか？」

そこには複数のビデオテープとカセット。

試しに流すと、頭が痛くなるような爆音が流れた。地下でなければ

即行で警察が来るような、中々に危険なものばかり。

工事現場だったり、人の叫び声であつたりと。とにかく気を散らすための騒音が録音されたもの。

「うっわ、予想以上です！」

鼓膜破けないように注意すれば、丁度いい環境になりそうです」

「本来、集中力は自分に合った最適な環境し下で最大限発揮できるもの。指導者とのコミュニケーションや練習場所も大いに関わってくる。

スポーツマンだけでなく、過程のストレス排除がいかにか大切に言うまでもないだろう」

例えるのなら季節。

春風が吹くなかと、蒸し暑い夏空の下。どちらが快適で、より練習に集中できるのか？と聞かれて、後者を選ぶ者は少ない。そういった環境のストレスはパフォーマンス向上の妨げになり、トレーニングの意味が薄らいでしまう。

しかし、夏というものも鍛える部分によっては最適にもなる。

「それを敢えて壊すんだ。効果が見込めないようなら直ぐにやめるぞ」

「ええ、分かっています。

ミットも指示も普通の声でお願いします」

それこそが集中力、そして根性。

荒れた環境は心を刺激する。夏の暑さは身体の機能に制限をかけ、そのなかで従来通りの練習をすれば効果が上がる。無論、脳による問題があるため難しい話ではあるのだが。

板垣が思いついた練習はシンプル。

雑音によって脳が取り込む情報を増やし、情報処理能力を上げる。

(これはクラブのほうがマシンだな……)

普段なら絶対に有り得ない練習風景。

工事現場のど真ん中にあるような錯覚のなから篠田は口を動かしてミット打ちを開始した。

板垣の見据える先になにがあるのか、という何年後かに分かるであ

ろうビジョンを想像しながら。密かな楽しみをうちに秘めて、時間は
一気に過ぎていった。



「ん〜！」

板垣家の玄関先。

大きく背伸びをして、晴れ渡る空を見上げて手を伸ばす。

「よし、気合い充分。やれることはやった」

ぐっと握り、確かな成果を手に支度を済ませる。

「鴨川ジムの後輩として、貴方のボクシングを越えさせていただきま
す」

板垣 学、そのコンディションに驕りはない。

練習の成果を全て発揮し、念願の日本王者となるために後楽園ホー
ルへ歩き出した。

星を追う残骸

日本フェザー級タイトルマッチが行われる当日。

幕之内 一步は後輩同士のマッチングに複雑な心境を抱えたまま、イベント開始から後楽園ホールを訪れていた。少しでも心を落ち着けようと、座席に腰を下ろして新人たちの試合を観戦していたとき。

「…………え、なんで」

幕之内の声音は驚愕を漏らし、思わず立ち上がった。

『さあ、7連敗をここで食い止めることが出来るか!』

対戦相手はデビューから9戦9勝の勢いあるホープだ!』

現れたのはかつて幕之内が新人王で対戦したボクサー。

アマチュア時代無敗のインフアイター殺し。

シヨットガンという無数の連打を得意とするボクサー。

「速水さん…………」

ポツリと溢した苗字。

速水 龍一。

東日本新人王決定戦準決勝で対戦し、幕之内を相手にインフアイトで応じてみせた。自己主張の強さ、負けん気は並大抵のボクサーが越えられる壁ではない。

幕之内との試合後、ジュニア・フェザー級に転向していた。そこでタイトルマッチにも挑んだことがある。決して倒すことは容易ではないはずなのに、7連敗という衝撃の戦績に理解が追いつかない。

事実、第1ラウンドは対戦相手から1発も貰うことなく、一方的にパンチを打ち込んでいる。幕之内は、なぜ速水が散々な結果を出しているのかより困惑するばかりだ。

それも、連敗の理由は間もなく知ることになる。

第2ラウンド、たった1発の軽いジャブを顔面に受け、リングに転がる姿を目撃してしまったからだ。

「ば、ばかな……………あんなパンチで倒れる人じゃない!」
簡単すぎる。

脆すぎるにも限度を越している。

呆気ないダウンに様々な否定を浮かべる。少なくとも、幕之内が知る速水 龍一とは別人の如く崩れていく。倒れるたびに現実を受け入れざるを得ず、そして試合終了の合図がレフェリーから言い渡されたとき。

「終わった……あの速水さんが……」

8連敗目を背負いリングを去る男を、幕之内はなんと声を掛けるベキか思いつかないまま試合はセミファイナルまで進んでいった。



控え室、男は藍色のセミロングをグローブで搔いて立ち上がる。視線の先に映し出されるモニターには、速水が敗北した姿が刻まれていた。

「…ダメでしたか、速水さん」

俯く視線には、本心で速水の敗北を悔しがることが知れる。吐息のように漏れる言葉から、今は見る影のない栄光を懐かしむ。

169cmとやや小柄ながら、人懐っこい顔立ちが陰るさまは余程、速水のことを気に入っていた節が伺える。

「いつか、貴方と戦えると思っていた。」

……けど、壊れてしまうくらいなら、芸能界に身を移してほしい。時折、そういう話が舞い込んでいるはずなのに……。そんな願いは俺の勝手だろうか」

一緒に仕事がしたい、そう零して灰色の瞳を閉じる。

そして、直ぐに心のなかの思考を振り払う。

男にとって、今日の試合はベルトを賭けたもの。

憧れる男の敗北を引き摺るわけにもいかなかった。

セミファイナル、ジュニア・フェザー級タイトルマッチ。

挑戦者、みずち 蛟 剣哉けんやは刻限まで一切の雑踏を脳から除外する。見据

える先に一点の曇りがないと確信したとき、王座への路は開かれた。

そして第2ラウンド、黄色い歓声が会場を乱舞する。

彼の身体に痣は1つとしてない。対してダウンし、ぴくりとも動かない王者の身体には無数の打撃痕。

息ひとつ乱れない挑戦者は、コーナーで静かに天井を仰ぐ。

俳優兼ボクサー、蛟みずち 剣哉けんや。

王者をK・Oし、ジュニア・フェザー級王者となった。

最後の日本フェザー級タイトル挑戦

日本フェザー級タイトルマッチから4ヶ月。

日の本のボクシング界では、複数の階級に王者クラスの新人が現れていた。若しくは新しく王座に就き、返上以外で王者交代はないと評されるチャンピオンが誕生。千堂の世界戦から勢いが上がり、彼らに対する世界挑戦への期待が膨らむなか。

夕焼けを呑み込んだ夜空に対抗して、後楽園ホールの周辺は今宵の戦いを燦々と激励する。

『日本最速の挑戦者、再びタイトル奪取に臨む!!?』

迎える門を潜り、挑戦者はゆつくりと歩いて入場する。

彼もまた、王者クラスの実力を持つボクサー。

日本に留まらず、世界に手が届く日も遠くはないという声は多い。しかし、今井 京介という最高のライバルによって日本タイトル獲得は失敗。その後、不調が続いていたなか、ライバルの敗北によって実力を十二分に発揮するまでに至った。

『見える景色が常人の1つ上を行く、空間把握に長けた日本の天才児。相手が強者であるほど、その実力は試合のなかで急激に成長する』

対戦相手を侮れば勝てる試合を取りこぼし、格上であつても巧みな技を磨いて勝利を掴む。唯一の欠点と言えるモチベーションは、この場において最大の武器となった。

『日本フェザー級3位、板垣 学。』

最高のモチベーションとともにリングイン!』

(勝っても負けても、これで最後です。)

先輩の保有していたベルトを巻くことに誰よりも拘って、この試合で僕は次の場所に行く)

リングの踏み心地を足裏に馴染ませる。

日本タイトル挑戦者として立つことは最後。そう決めて、全霊を注いでコンディションを整えてきた板垣。その先は分からないが、いまはそれが良い。視界を広げすぎでは勝てないボクサーを相手にするのだ。

未来の展望を考えず、1勝にひたすら拘って来た4ヶ月間。その努力に報いるため、ゆっくりと深呼吸をして試合開始の刻を待った。

「リングに上がるまでも、これまでと違う。」

ハンマーナオのことを強者だと認めてるからだ…」

会場、立ち見している幕之内は生唾を飲んだあと呟く。

これからタイトル挑戦を行う後輩よりも緊張しており、ただならぬ形相に近づく者は少ない。

今日は後輩のタイトルマッチだが、幕之内の周りにボクサーは誰一人いない。木村、青木、鷹村は全員が来ていない。声を掛けてもはぐらかされたのが昨日のこと。幕之内としては寂しさがあがりながらも、応援に集中しようと思いを整えたとき。

「学のやつ、信じられないほど落ち着いていますね。」

下手をすれば、俺との試合よりも気合いが入ってる」

「今井くん、やっぱり来てたんだね！」

背後から掛けられた声の主を知って、一気に表情が明るくなった。

「こんばんは、幕之内さん。それは勿論：俺のライバルと、俺を倒したボクサーの対決です。この目で決着を見届けないと、2人に失礼ってものだ」

和やかに挨拶を終えるや、京介はリングに身体を向けた。

手摺りに右手を乗せて、ただ勝敗の行く末を見守りたいと静かな目で語る。

「うん。どっちも強い。ボクサーとしてしつかりと自分の型を嵌め込んでいる。だからこそ、どっちが勝つか分からない」

「俺と戦ったときの学じゃハンマーナオには勝てない。それは本人が良く分かっているはず。耐久性だけなら俺よりも上のハンマーナオに、学が攻略方法を用意しているのか…。しつかりと見させてもらいます」

いまから証明されるのは成長の物語。

ボクサーの1つの目的地、王座挑戦。

王座を獲得した者たちが、1人の旅の無事を祈るなか。

『今夜、最後の試合を飾るのはフェザー級新王者！』

最後の防衛戦に臨む、1人の男の物語に目を向ける。

『第1ラウンド連続K.O記録を更新する王者を、鮮やかに完成されたボクシングで撃破。』

引退を撤回し、元鴨川ジム所属の先輩として、日本の天才を迎え討ちに再びリングへ！』

ガウンなど羽織らない。

憧れのボクサーがそうであるように、王者としてリングに上がる姿に見当たる装飾は勝ち気のみ。

『日本フェザー級チャンピオン、ハンマーナオ。』

挑戦者、板垣に最初で最後の防衛戦へ臨みます！』

ロープを潜り、現役最後の舞台に踏み入る。

(ここに來るたび、リングに上がるたびに周りの景色がこれまでのことを思い返させてくれる。泥沼のなかを走るボクサー、ハンマーナオの姿を)

下を、上を。そして左右を見回して、最後に八戸会長を見る。どこを見ても心の底から思い出が溢れ出てくる。

その刻に見ていた光景を思い出し、自分の努力が実る過程に微笑ましきを感じた。

(先輩が教えてくれたボクサーの生き方で、僕はここまで來ることができました。次は、この道を僕が教える番だ)

方々に最後の挨拶を済ませて。

視線を落ち着かせた先は挑戦者。

(新しい武器はない。僕が練習してきた集大成を手に、板垣くんを捉えてみせる。だから、絶対に限度は越えない)

リング中央で散る光。

音のない声で語る熱意。

(勝機は多くない。結局、僕には今井さん以上の板垣くん攻略方法を思いつかなかった。)

最初の勝負は開幕、コーナーを狙う)

2人だけの荒野、物語の1ページ目が開かれた。

いま、試合開始のゴングが鳴る。

日本フェザー級タイトルマッチ。

第1ラウンド、その重さをここで噛み締める。

今井 京介の1ラウンドK.Oから始まり、ハンマーナオがタイトル奪取するまで4試合連続1ラウンド決着。そのなかには板垣が下された1敗がある。

(逸るな……落ち着け……)

だからと、板垣が第1ラウンドでハンマーナオをK.Oすることは不可能。全弾カウンターを狙い、顎にキメることを視野に入れば話は違ってくるが。

試合前、板垣はその可能性を驕りだと断じた。

第1ラウンドK.O、それを狙わないのはモチベーションの最高潮にいるからこそ。それよりも価値のあるものを手に入れるべきだと……。ボクサーとしての勝利を渴望していた。

(まずは、第1ラウンドを制する！)

過去の敗北をこの手で乗り越えること。

一か八かの可能性は極限の状況で選ぶもの。

即ち、記録の上塗り。

己を貫く、板垣 学の誇示こそ勝利への第1歩。

(さあ、僕の脚を味わってください)

大激闘を予感する観客の視線を横切る影。

人間の動体視力が人間の脚力に反応が遅れる。純粹な速さだけで緊張に目を見張る観客を追い抜き、板垣の拳は僅か2秒でリングサイドに立つハンマーナオの眼前に浮上した。

(もう、目の……!?)

その光景は板垣と今井の日本タイトル決定戦、第1ラウンドとは逆の立場。開幕、コーナーに進撃して試合を終わらせた撃墜の始まり。あの怒涛の決着を知るからこそ、ナオは即座にガードを上げて守りに入る。

左脚を軽快に使う左ジャブをモーションの入りから予測し、軌道上にガードを構えた。

先手必勝と放たれる板垣の初撃。

左拳が突き出される瞬間、ナオの視界には4つを超える拳が左右から現れていた。ほぼ同時、すべてを実弾と認識した矢先。前に身体を出すことで軌道を逸らして半分を躲し、残りをガードした。

(相打ちで勝てる威力だ、これなら！)

ナオはガード越しに、次の動作を確認する。

すると、飛び出すことは予測済みだったと、即座にアツパーを混えた反撃が左右の数を増やして迎えてきた。

手始めに左拳を握り、右腕はガードへ。

一撃で仕留めるため、相打ち覚悟で左ボディを打ち放つ。

「ズッ!？」

そんな鈍い被弾を溢し、ナオの拳は空ぶっていた。

誰もが状況に追いついたとき、3度の打撃音が鳴り終える。

つう、と口元から垂れる極少量の血。

『お…王者の口から流血。挑戦者、細かい足捌きでボディを躲してチャンピオンにカウンターを合わせていた!』

会場にも分かるほどに響いた3つの打撃音とは別に、左右を打つたびに1、2度のフェイントが挟まっていた。当てるつもりパンチがフェイントに切り替わり、相打ち狙いは見事逆手に取られる。

(避けるのも上手い。ビデオを観て、当てる自信がつくまで練習したことを軽く越えてきた…)

ビデオによる研究も限度一杯まで確認し、最も調子の良いパンチも把握している。

京介を倒すきっかけとなった左フックのフェイント。ナオがインファイトの末に錯覚させたソレを、板垣はセンスだけで惑わさせたのだ。

「今の板垣のフェイントさ、間近で見ちよったワシにも半分しか分からなかった。分かるか、ナオ。相手が最初にソレを見せた意味を」

八戸は冷や汗とともに、投げつけられたパンチの意味を理解した。

(ええ、分かりますよ会長。彼は僕の十八番、フックでも負けないと宣言してきた。全部を越えて、ベルトを取るつもりなんだ)

フックのフェイントを見て、ナオ自身が真つ先に気付いた。ナオの技を上回り、京介ごと一気に突き放さんとする攻防。力と技の誇示、それも慢心ではなく尊敬を以って繰り出されるもの。

K. O宣言を確かに受け取ったのだ。

ならば、王者は跳ね除けるのみ。

(重圧増した…京介を破ったときと同じだ。

来る、日本の頂点が押し寄せるぞ、気を張れ！)

(前に出るしか勝つ手段はない。

打たれる、身体でタイミングを掴むんだ！)

次に動き出したのはナオ。リングを蹴る音は軽く、先ず追いつくことに注視している。

反して、板垣はフットワークを忘れたように対峙の意思を示す。

(さあ、集中!!)

左腕をL字にして腹を覆い、万が一の保険を備えたうえでハンマーナオとの近距離戦に臨んだ。

「まさかナオと打ち合うつもりか!？」

ナオが距離を詰め、両拳の準備を整えても板垣は退く様子を見せない。誘いがどうかを判断する間もなく、相手の思惑を振り払うべくジャブを打ち放った。

(…いや、違う)

空振りするジャブを見届けて、ナオは挑戦者の目的に目星をつける。

上半身を左に倒し、一瞬の足場修正を行う板垣。驚くほど鮮やかに姿勢を正した。彼の腕をもつてすれば2発は打ち込める隙がある。だが、ナオが軸足を踏み直してフックを返すまでの間、その眼はただ見ているだけだった。

「…見てるんだ」

幕之内が行動の真意を理解したとき。

突き抜けるフックをダッキングし、頭髪を擦る距離で潜り込む。そして再び構え直すと、静かにステップを刻むだけで反撃の隙間を見逃す。

「ええ。腕の長さ、肩の入れ込み、足の動き……。恐らくはもつと多くの部位節々を見て、自分がどう動けば良いのかを考えている」

近距離で飛び去るナオの拳を見て、京介の瞳がその光景を焼き付けようと視野を狭める。

右から左へ、ダツキングに間髪入れずアツパーを返す。普通なら躲すことも困難と思える王者のコンビネーションを、板垣はフィジカルを使いかすり傷無く観察を続ける。

(僕の射程距離を測っているんだっ!!?)

(先手必勝は決めた。なら次は情報収集。)

いま王者に出来ること全部見透かしてあげますよ)

小さく、モーシヨンを意識して抑えながら拳を打つ。試合前から練習してきたことの1つだが、板垣の目には見分けることは容易く。宙に放られた左に続けざま、死角となった右拳をロングフックで当てにいく。身体の奥から飛び出す曲線を、見てからダツキングで対処。

細かく足を動かし、身体に任せて拳の数を増やす。荒く無作法な左右の連打は、それを上回る洗練されたステップによって宙を過ぎる。無数の可能性を打ち続け、悉く空振る。

果たしてあと数百、数千の拳を打ったとして命中するのか。逡巡ののち、考えるまでもないと結論する。

(このままじゃダメだ)

打てば打つほど命中率は下がっていくと知り、王者がバックステップでロープ際に下がる。

「ハンマーナオが追うのを辞めた…?」

「いや、違うよ。まだ板垣君を追ってる最中だ」

「成る程。つまり——」

見る者の舌を痺れさせる接近戦から一転。

荒れる大海を無理やり鎮めたように、王者の次の行動に目を見張る観客たち。

(諦めるには早すぎる。さて、次はなにを——)

板垣が注視した直後、彼を含めた会場中の目が見開いた。

驚くことに、ナオは構えを解いてゆつくりと板垣の方に歩いて行く

のだ。

(なっ……えっ!?)

試合中、相手の動きがスローに見えてしまうほどの集中力。それが板垣最大の武器にして、多大なスタミナ消費という大きな欠点を抱える課題。

いま、その状況と似た現象に思わずステップが落ちる。正確には、ナオがゆっくりと歩き出すという試合中とは思えない行動に意表を突かれた。無論、セコンドの篠田含めてである。

「ハンマーナオは攻め方を変えてきた」

そして、ナオは握手を求めようように左手を上げる。

スツと伸ばされる拳があまりにも自然に過ぎて、時間をひととき忘れてしまう。左拳が眼前に迫り、漸く意識が現実世界の時間と結び付いたとき。

(これ、は……)

視界は赤一色。

血色ではない。出血よりももっと危険な、拳という凶器の先端。相手を沈めるための刃を、血を出すことすら目的としないままに差し出された。ほんの一瞬、呆気に囚われて、そして相手の行動を理解したとき。

(っ、しまっ!?)

咄嗟に右側へと飛び退いた瞬間。

左腕に向けて強烈な一撃が追いつき、板垣の身体を吹き飛ばしていった。

『王者不意の一撃！挑戦者のガードの上からお構いなしに打ち込んでいく！これは効いたか!?!』

予め固めておいたガードを殴られた。

だからと、安堵感は欠片ほども思わない。

「グ、つぶねえ……」

勢いを殺せないままロープにめり込む。

漢方をそのまま口に含んだが如く、序盤で貰いたくない認識を叩き込まれたことに歯噛みする。

(サイドステップしてなきや足が殺されてた。この威力、京介のように何度も耐えられない。なにより……)

ゆらり、変わる景色。

一気に現実を引き戻された感覚。

京介による、集中状態下での猛攻とは真逆。膝を崩されるような浮遊感にナオの仕事の早さを実感する。

「並のことじゃ動じない集中力を、たった一手で乱した。握った主導権を落とされたか」

「それに、ボディ攻撃は多少貫通している。板垣さんの左腕をガード一辺倒にさせるには十分だ。少しでも縮こまったなら、攻撃力は半減する」

傍から観ている2人も、ナオの判断力に舌を巻く。

たった一撃でコンディションを崩した。2人が同じ考えに至るのは、板垣のステップが乱れたこと。

「俺と戦ったハンマーナオはボクサーとして誇れるインファイターでした。けど、彼のこれまでの試合は多くがそうじゃなかった」

「うん。……いわゆる“噛ませ犬”として戦ってきた山田くんは、生き汚いボクサーダーティ・ファイターだった。

卓越した技術を持っているのは板垣くんも知っている。集中力を切らせたことがもう凄い。だからこそ、これが最後のチャンスになる」

集中状態のとき、板垣はラフファイターの反則を全て躲し、相手に遅れを取れば即座に上塗りしてきた。

今回はそれも無い。

(先輩のときのような反則はしない)

ナオは反則を選択肢から外す。

これは試合前、板垣からのタイトル挑戦を受け取るときに決めたこと。

最後の試合で定めた、噛ませ犬ハンマーナオの真骨頂の封印。京介戦では元より通じないと諦めていたものを、板垣戦では敢えて封じた。ラフプレー無しに勝てる相手ではない。

それでも、勝利への執着を上回る、勝ち方への拘り。幕之内との試合とは意味が違う。今宵、汚い手を使った勝利は敗北以下の価値しかなく。

胸に秘めた想いに手が届くには、純然たる勝利でしか不可能。泥臭くなるうと、この場に規定外の行為があつてはならない。

(あくまでもボクサーとしてリングを降りる！)

この場にいる誰よりも。

板垣以上の信念を持つて、ナオは勝利へ向けてリングを蹴る。

集中力を断つて間髪入れず。踏み込みの瞬間速度だけなら板垣に追隨する速さで、体勢を立て直しきれない挑戦者の前に侵入する。

深く入り込み、右ストレートを構える。

ここから上体を逸らそうと、或いは左右に逃げようとも。即座にフックへと切り替えてリングに沈める準備が整った。

クイツと右拳を動かし、不格好ながら反撃の意思を示したのを確認。カウンターを狙い、ナオも合わせるように右拳を振り抜いた。

直後、ナオが目にしたものは無数の拳。

「グ、ウ…!?!」

自分の拳は頬を掠め取るのみ。

カウンターを狙ったはずの右が、逆に左右のカウンターを打ち込まれていた。フック、そしてアッパーがナオの顔を打ち、足をも止める。

『今度は挑戦者が目にも止まらない連打！』

なんとというハンドスピード。思わず王者後退！』

4度、深くはないダメージを受ける。

しかし、浅いはずがない。集中力を断つた瞬間を狙う一撃：数少ないチャンス逆に使われたのだ。少なくとも、戸惑いはある。

ナオが視線を戻したとき。

挑戦者たるボクサーの瞳を見て、受けてしまった反撃に納得してしまふ。

「集———中」

リングという不自由な空間で、圧倒的な自由を実現する。

板垣の本領が第1ラウンドから解き放たれた。

3分間の壁

4度の被弾。

実行に移した手順は、ナオの右ストレートが打ち終わる直前から始まった。

左アッパーを打ち出される右腕の下から放ち、あたかも死角から打たれたように見せる。続けざま、右ストレートを首スリッピング・アウェイ捻りで躲しつつ、左右のフックを右腕の下から返す。最後に離れ際、ナオの後退を追うように右ボディを打ち込んだ。

上体を大きく逸らさなため力は逃げず、腰を回すため次の機動を即座に実行できる。僅か数センチの体重移動で成し遂げた反撃。

(くそ…盲点を突かれたとしか思えない。

なにをされたのか半分も分からなかった)

突き立てられた刃の種類は判別できず。

容赦なく仕留めにいった。それでも板垣を沈めるには足りず、集中力を深める手伝いをしていた。

好機から突き放され、敗北に心を掴まれる。僅か1秒程度の間裏返してきた天才の開花に、しっかりと正面から瞳を交わして確認する。

(……安心した。板垣くんの全力、開始1分で引き出せたぞ。不完全燃焼なままリングを降りても、負けきれないだろうから)

板垣の瞳が輝いて見えるのは、ナオがいま、限りなく勝利から遠ざかった証拠。

だが、この逆境を不思議と心地良くすら感じていた。

何故なら、これこそがナオが踏み親しんだ舞台だからに他ならない。

(いまのキミを倒して僕の置き土産にする)

滾り始めた無冠の天才へ、恐れることなく踏み込んでいく。

対して構え、迎え撃つようにステップで距離を測る挑戦者の脚が、

王者の意思に呼応するように駆け出した。

中央に差し掛かる手前、ナオの脚が足を踏む直前で。狙いを定める存在が左拳を放ったことに気づく。だが、反応を許されることなく、左の揺さぶりからフックがガードをすり抜けて頬を打つ。

脚が着いた瞬間、回してフックを返すが時すでに遅く。打ち終わりには反対側に現れ、さらに左右の連打を顔に受けていた。

(どう避けたのか見えなかった。

いや、こうなるのは分かっていたこと——)

目標を視界に入れるべく見開いたとき、ナオが目にしたものは虚無となったリングのなか。

「え……」

いま、確かに視線を交差していた挑戦者を見失い、目元から気色が引いていく。瞳を動かすより、聴覚に頼るべきだと本能が感じとる。

両腕を頭部のガードに回し、リング上の音に集中させた矢先。

(聞こえない…はずが、ないのにつ)

無音の世界で、さらに大きく目を見開く。

盛り上がる歓声を隠れ蓑とし、技で王者を出し抜く際に湧く驚嘆に足音を重ねる。常人の域を越え、集中力は周り全てを巻き込んで試合の骨子となっていた。こんな芸当、攻略法などを考えるほうがバカバカしくて仕方ない。気づくきっかけすら無いのだから。

ナオの直感がただならぬ技を感じとる。驚愕が多くを占める心情のなか、完全に相手を見失った王者。足音すら消えたリングで混乱に戸惑う次の瞬間、視線が強引に右へと誘導された。

「がつ!？」

続けて身体に奔る衝撃の数々。

ガードをどこに置いても、必ずどこかに生まれる隙間に拳が打ち込まれていく。視線を向ければそこに影はなく。気配を感じ、その身を捉えようと顔を動かした瞬間、今度は顎を真上へ反らされる。

対峙する、ボクシングだけでなくともスポーツなら至極当然の前提を、ナオは許されずにいた。

踏み込んでリズムを崩そうとした。板垣は容易く躲し、視線の外か

ら視界を揺らす。フルスウィングで身体を巻き込もうとして、手応えのないままに下から一撃をもらう。

なにがどうなっているのか、速いか接近戦を挑まれているのかの判別がつかない。

相手を見ることが出来ないナオには、正確にパンチを打つことが叶わず。姿勢を正す瞬間に芯を揺らされる連打に、力強くパンチを打つことが出来ない。

「恐ろしいことを実行するな。腹隠して攻撃力を下げるくらいなら、相手が攻撃できないようにすれば良い、か」

「カウンターというよりはパリイに近い。ハンマーナオのシフトウエイトを見て、即座にポジショニングしてパンチを当てにいつてる。

あれじゃ反撃しても勢いを止められない」

熱気を起こす観客を他所に、京介と幕之内はインファイターが成す術を奪われるさまに生唾を飲んだ。

ウィービングを駆使し、きめ細かく拳を集める。理論を組んだとして、可能にできる技術が人間にあるのか怪しい仕事を目撃する気持ち
が一般人に分かるはずもない。

とくに京介は、いつの日か三度相対する筈の相手だ。いまはナオの無事よりも、驚異的な技術を目に焼き付ける作業に意識が移っている。いつの日か、超越した天才を倒すための試金石とするために。

(油断すればひと噛みで終わる、集中ッ)

誰もが圧巻の試合運びに興奮するなか、板垣は極限の集中力の片隅でそう思考を働かせた。

第1ラウンド、決着間際と言わんばかりの気迫で王者を攻めている。勝利への最善を最短でぶつけ、最強の座を手にするために。

(確実にそこにいる……なのにつ！)

秒を刻むごとに蓄積するダメージ。

打つてもその影を捉えることは難しく。

しかし、守りに転じれば沼の底に沈むばかりの自分を感じる。

(手数が増えていく。打てばカウンター、守ればガードの隙間を狙われる。ダメだ、まともにボクシングができないから返しようがないっ

…)

序盤の様子見を切り上げたのは板垣にとって大正解だった。

あのまま、突拍子のない行動に2度と騙されるものか。などと意気込んで情報分析を続行していれば、多くとも第1ラウンドで確実に敗北を喫していた。ハンマーナオのボクシングを封じるいま、最も敗北から遠く、勝利に限りなく近い状況となった。

だからと、いまのまままで倒されない保障は1つとてない。

(ッ、——!?)

ガラ空きの腹を掠める渾身の一撃。

体勢を崩されながら、大振り気味に放り投げた拳。ナオの必死の抵抗はボクサー生命を繋ぎ止め、板垣の手数を減らしていた。

『圧倒！聞いてください、この大歓声！』

王者を一方的に攻め立てる挑戦者に期待が集まる！』

傍から観れば疾風怒濤と言わんばかりのワンマン試合。

一気に攻める板垣にとっては集中力を惜しみなく注ぐ、精神の消耗との戦い。

(もう倒れるかもしれない。)

まだ始まったばかりかもしれない。

だからこそ、常に全力勝負だ！)

日本ランカーにすることが不思議なほどの強さ。

たまに現れるのだ、日本ランカーにして東洋、若しくは世界ランカーに匹敵する強さのボクサーが。

(元日本チャンプ、期待の新人：色んなタイプの格上と戦ってきたけど、このタイプはどれにも当てはまらない。)

こんなに柔軟な動き、どうすれば捕まえられる…?)

板垣の反撃で身体がボールのように飛び、その先で踏ん張ろうとしたところを更に追撃されながら。

いつか見た、ウォーリーと幕之内の試合に似た異次元な攻め方に我武者羅に対応しようと足掻く。

そのとき、空振りに付随するカウンターのモーションを確認した。(ぐ、オオオッ)

踵をぐつと回して、回避を取ろうと足掻いて間もなく。

カウンターが一閃、ナオの顔を捉えていた。

空へ打ち上げるように、ナオの身体がリングのうえで対空時間を与えられる。放り出された身体をどうこうすることが出来ない。それほどまでにバランス感覚は天地を返されていた。

1秒後、バタリと音を立てて王者が地に転がる。

『ダウンンンンッ!!踏み留まったところに無情のカウンター!これは効いた、狙い澄ました一撃!!』

「またも1ラウンドK.Oとなるのか!?!」

連続K.Oを見たいと詰めかけた観客たちが喉を鳴らす。

王者が仰向けのまま深呼吸する姿を見ながら、幕之内は納得の表情をしていた。

「確かに、効いたうえでのダウンだけど勢いが先行しすぎているよ」

「ダメージを溜めたというよりは、揺さぶりすぎて転けたほうが正しいです。このラウンドギリギリまでダメージを溜めたうえでなら、まだ決着もいけたでしょう。しかし、決め手じゃなかった」

2人の意見は正しい。

板垣のデータラメなインファイター封じは、ダウンしてしまえば解除できる。ナオは状況に飲み込まれず、残り時間を分かったうえでダウンを選んだ。

ハンマーナオが相手でなければ、或いは第1ラウンドK.Oを狙えた。

(勝ち筋が薄いのは……いつものことだ)

カウント9、立ち上がったナオは冷静に構える。

再開が言い渡され、板垣は浮かれる様子もなくナオを観察する。

(分かっちゃいたけど、本当に効くパンチだけは守られてた。ガードの技術が京介と戦ったときよりも上がってる)

手に残る感触のなかに手応えのあるものは少ない。本当に倒したのなら、もっと心の底から湧き上がるものがある。それが無い時点で、巧く抜け出されたと板垣は見ていた。

ここで第1ラウンド終了のゴングが鳴る。

『挑戦者、日本タイトル第1ラウンドを圧倒！』

しかし惜しかった、あと少しで第1ラウンド連続K.O記録更新成らず！だが第1ラウンドを越えたことは王座獲得への大きな前進となるでしょう！』

ダウンを奪い、奪われながら両者は第1ラウンドと変わらない心境で自陣に戻っていく。

(ま、先ずはこんなもんですか)

(けど、勝つ方法はゼロじゃない)

以前、勝利路線を突き進む2人。

観客たちの賑わいを他所に、リングのなかは想像以上に肌が焼けつくような雰囲気を漂わせていた。



コーナーに戻ってきたナオが座り、八戸は激励の言葉をかける。

「あそこでダウンしたのは正解やった。あと10秒打たれてたらレフェリーストップされても可笑しくはなかった」

あまりにも一方的とレフェリーが判断すれば、試合を終了される。それをダウンによって回避したことで、レフェリーが飛び込むことを止めていた。

「ほぼ勘でしたけどね。流石に、あそこまでされると対応が追いつきませんでした」

「ああ、フィジカルにスタイルが合致しちよる。けんど、あんなにフリーなボクサー、もう心当たりはついとるんやなかか？」

「ウォーリーくんに似ています。スタイルも、成長途中というところも。だからこそ、僕は諦めるわけにはいきません」

呼吸を整えて、泥臭い幕之内の試合を思い出す。

あの試合と違うところは、まだ板垣の本領が未完成に過ぎること。いまのままでも驚異だが、遙か高みにいけてはいないと感じていた。

この日のために自分を磨いた。

板垣の試合を何度も観た。彼が負けた最初の試合も、強くなった牧

野を倒すために“誰”を参考にしたのかも分かっていた。その糧を胸に抱き立ち上がる。

「僕に出来ることを全て出し切ります」

ウォーリーに諦めず喰らいついた憧れのボクサーのように、ナオもまた決死の覚悟を持ってコーナーから立ち上がって行った。

過去と現在、そして自分自身

第1ラウンド終了のゴングから、インターバルの1分間。板垣の意識はしっかりと篠田の言葉を聞き入っていた。

表情は引き締まっている。しかし…。

「なあ、板垣のやつ集中してんのか？」

「さっきは凄かったけどよ、いまはあんましだな」

「1ラウンドK。O記録破って気が抜けたか？」

観客たちからは先程の集中力が途切れたのだと思うほど、集中している状態には見えない。集中状態とは一点に注がれるもの。そういったイメージは決して間違っていない。

「よーし」

呑気、しかし板垣らしい眩き。

びよん、なんて音を立てて再始動する姿に疑惑は強まる。

それが、板垣にとっては有り難くもあった。

観客の声すらも聞き届けられるほど、自分の脳は処理能力があるということの証明だ。あらゆる雑音が板垣の集中力を高める鍵となる。

(次は逃がさない)

漂白する面。

全てを取り込む聴覚。

いま、板垣 学の思考は景色と重なる。

自らを、他者を、そして王者を置き去りにして、なによりも情報収集を最優先に脳が働く。

そして、無意識下で脳に働きかける。

“放せ”と。

その正体は――。

『またも開幕飛び出した！先程よりも速いッ!!?』

第1ラウンド開幕と同じく、先手を奪いに脚が風を鳴らす。現実味を噛み殺し、王座の襲名に手を伸ばすのに1秒しかかからず。

深い視線を押し潰すように、王者は右腕で顔を隠し、姿勢を低くして強襲に備えていた。

『しかし王者、これを当然警戒していた！』

「さあ、どうする挑戦者!？」

振り向きながら、その影を見ることもなくナオは左ボディを隠すように放っていた。不意を突く唯一の機会だと狙ったそれは、やはり空振りに終わる。左の外から鞭のように放たれるジャブによって失敗を言い渡された。

第2ラウンド、開幕とともに行われる攻防を手にしたのは板垣。そして、追撃は再び幕を開ける。

—
—
—

「ハア、ハア……く、ッ！」

疾走する拳、弾かれる頭。

空振る音と打撃音が重なり、リング上でぐしゃりと軋む足音がダメージの蓄積を轟かせる。

第3ラウンド終盤、ナオは板垣に触れること出来ず。

(当たらない……！)

時間の見え方が明らかに1段階違っている！)

レフェリーストップが入るギリギリのところまで踏ん張り、ボディ打ちをする。全てが躲され、カウンターを浴びる羽目となるがある程度は割り切っていた。

その考えも2ラウンド半ばまでのこと。再びインファイター殺しに移ったとき、即座にダウンへと逃げたはいいものの、そこから先はより板垣の集中力を高めることとなったのだ。

「3ラウンド序盤のダウンは流石に終わったと思いましたが、なんとか持ち堪えていますね」

「ハンマーナオの起こす行動全部、見たうえで封じ込めてる。本当に、板垣くんはすごいよ……」

2度のダウンを奪われながら、首の皮一枚を繋ぐ攻防に2人は胸の

うちが熱くなる。どちらにも勝ってほしい。だが、それを口に出すことは絶対にしてない。この行く末を見守ることだけが、彼らと戦った者のできる礼儀なのだ。

「板垣、強えぞー！」

「チャンピオン触れも出来てねえー！」

「どつちが挑戦者かかんねえぞー!?!」

観客たちも口々に言う。

反論も出来ないほど、2人の差は歴然。

(まずい…本当に、これ以上は耐えられないっ)

ガードを固め、数発のパンチから身を守ったところでゴングが鳴る。漸く、呼吸を忘れるほど長い第3ラウンドは終わりを告げた。

もうこれ以上の試合継続は困難。誰が言わずとも、次のラウンドで勝負が決まることは明白な総意だった。



ハンマーナオ。

またの名を、山田 直道。

(僕が彼のことを知ったのは、先輩とハンマーナオの試合のとき。先輩から聞いた容姿と、実際に見た姿が違いすぎて驚いた)

板垣が鴨川ボクシングジムへ入門するより前。

山田 直道は練習生として、幕之内たちの練習メニューを共に熟した数少ない人間だ。残念ながら軽々とはなく、あだ名の“ゲロ道”の通り、ゲロを吐きながらではあるが。

(反則を使うけど、巧すぎて戦慄したのを覚えてる。僕が実行できるのか自信がないくらい、ハンマーナオのボクシングは荒くて、完成されたものだった)

そんな話を聞いていた手前、幕之内が負けるとは毛ほども思っていなかった。だからこそ、反則をしてでも勝とうとする姿に怒りと、そして別の感情をボクサーとして持っていた。

あの貪欲さを、当時の板垣は本当に理解していなかったのだ。

(あの試合のあと、僕はデビュー戦で負けた。牧野さんにバツティン
グとエルボーでダウンを取られて、プロの厳しさを痛感した。あのと
き、既に僕はハンマーナオのことを侮蔑とは違う目で見ていたんだと
思う)

理解したとき、板垣は地面に這いつくばっていた。

泥を飲まされる錯覚を思い出したのは、雑音のなかでミット打ちを
しているとき。バカみたいに騒がしい世界が、牧野に反則勝ちをされ
て抗議した直後の観客と重なったのだ。あの時ばかりは口のなかに
砂利を放り込まれたような、苛立ちに似たものを感じたが…。

それ以上に、ハンマーナオと似た世界だなど思った。噛ませ犬など
と呼ばれて試合に臨む彼の心境は、きつとこの悔しさの数十倍なんだ
と。

「京介に勝てるやつは日本ランカーにいない。そう思つて、負けてか
らも時間があると思つていた自分がいます」

「板垣……………」

コーナーで、篠田にそう言う。

ボクシングの厳しさを漸く知るのは、プロの世界に飛び込んでから
だ。場所が違うだけで、ハンマーナオも想像を絶する道を辿つて夢を
掴み取つた。

(そんなボクサーは、完成された泥まみれのスタイルを捨てて京介に
勝つたんだ。僕がやり遂げたいK・O勝ちを奪つてみせた。

悔しくて、羨ましくて…最後に尊敬が残つた)

幕之内 一步の後輩。そんな生温い共通点だけではない。

2人にとつて、プロの世界に踏み入れてからの苦痛は凶らずとも似
たものとなつていた。そこから、夢を掴み取るまでもが…。

「間違つていた……。もう、1試合たりとも無駄な時間は過ごせませ
ん。ジムの先達者に腑抜けた顔は見せられない。胸を張つて、僕のボ
クシングで倒します！」

「ああ、しっかりと見せてこい。

悔いも不安も残さないような、新しい板垣 学を全部出しきるんだ
！」

力強く背中を押されて、応えるように勢いよく立ち上がる。

想いと現実を行き来して、最後のインターバルが終わりを告げた。

(この試合で引退する貴方に、僕の全霊の感謝とお礼を伝えなさい
けない)

板垣 学が尊敬する、もう1人の先輩へ報告する。

共にボクシングをしてくれることで、自分の新しい路を見つけられたことを。

新しい扉

決着の刻、目前に。

起死回生を狙い澄ます王者とは反対に、全ての追隨を摘み取る挑戦者。ただの一撃も許さないボクシングは、一撃で勝利が傾くが故のもの。最初から、1秒たりとも優位に立っていられた時間はないと板垣は自覚し、意識を全てに向けた。

ゴングとともに足を踏み出す瞬間から、世界を見回す時間が速度を落とす。そこには自身の身体も例外ではない。情報処理能力向上による、1秒の捉え方が世間一般のものとは隔絶していた。

(けど、より身体が馴染んでいる)

雑念を振り払うものとして考えていたが、この数ヶ月で最終的にしつくりときたこと。それは雑念を含めた全てを己に組み込む、全スケジュールの把握。早い話、集中状態のなかに飛び込むために片っ端から情報を仕入れ、無駄なものを敢えて自ら省こうというのだ。

一見無駄に見える方法は、板垣の散漫になりがちな集中力を高めるのに最適だった。現に、第3ラウンドまでで途切れたことは1度しかない。

(さあ、勝負！)

そうして板垣の思考は全てを隔てなく吸収していく。

リングを踏むステップは9分間を動き続けたとは思えないほど洗練され、近づく疾風を前にしてナオの勝機は消し飛ばされそうになる。

(勢いに負けるな…必ず手が届くところにいるんだ！)

歯を噛みしめ、軋むマウスピースの音を聞きながら迎撃に移る。

ステップイン、という表現が正しいのか。最早分らないほどにポジショニングは不確かだ。板垣の懐に飛び込んだはずが、瞬きもすれば反対側からカウンターを浴びる。ジャブ、ストレート、ボディ、そして十八番のフックまでもが悲しい結末に近づくことを示唆するば

かり。

ここまで、なにもしてこなかった訳ではない。

噛ませ犬として、ボクサーとしてのハンマーナオが悉く打ちのめされてきた。コンビネーションのパターンを変える程度、何十と試したのだ。

『届かない、余りにも差が広がりすぎている！』

無傷の挑戦者、王者との実力差を見た目以上のものとしている！あと少し、タイトル奪取は目の前か!？」

ここまで、追って下がって踏み込んで打って回りながら。どこかに埋れている板垣の意識……弱点を探して血肉を削り続けてきた。

その結論を出すのなら、スタミナ切れを待つほかに道が見当たらない、だった。

(僕の咄嗟の行動には反応が遅れた。

けど、あれ以降はどんな行動にも遅れない)

ギアをいきなり最大まで入れても、まるで雲を追うように手が届かない。

(…あれが最後のチャンスだったのか?)

何度も、何度も、追いつかず手が届かないなか。

何度も、何度も、空振って反撃されながら。

何度も、何度も、何度も。

そう、何度も揺らぐ心が語りかける。

もうチャンスは訪れないのでは、と。

誰かは既にハンマーナオの勝利を諦めた。

じきに勝利の女神なるものも立ち去る。

確実に手に出来たはずのチャンス。

ダメージが蓄積するにつれて、あの一撃を掴めなかったことを悔いていく。板垣の全力を引き出せた喜びも越え、限度のない力量差に精神が弱っていく。

戦意の高揚すら与えない板垣の攻め。ナオの体力を削ぎながら、精神の芯を折る独走。

「ぐああ……っ！」

外から放たれたカウンター。

再三の追走を振り解かれ、苦悶に喉が鳴る。天井を見渡せるほど仰け反った姿勢、立て直しを図る余裕もない。

脳の奥でなにかが割れる。選手生命が長くはないと告げている。あと何秒で消えてしまう。苦痛に耐えられなければ、ここで。

(それは、嫌だっ！)

ここで、終わってどうする。

そう、自分に言い聞かせて踏みとどまる。

そこが奈落への入り口だとしても。

「ダウンを拒むのか!？」

身体を起こそうとすれば、それこそ狙われるのに!」

京介だけでなく、幕之内もダウンすると思っていた。ナオの選択はダウンによる仕切り直しを捨て、圧倒的不利に身を潰すに等しい。

ナオの目下、起き上がりを狙う板垣が既に拳を構えていた。当然の行動、向こうから打たれに来たのならカウンターを叩き込む絶好のチャンス。

ガードも間に合わない、だから板垣は体重を乗せて身体ごと打ちに行く。それを、ナオもまた狙い澄ましていた。

ぐわり、起き上がる勢いは姿勢を戻すものとは思えない。頭を遠慮なく前へも倒す行為に篠田はハッと気づく。

「まさか、バッティングか!？」

状況が状況だ。

例え、対戦相手の位置を把握していたとしても反則と見られにくい。

「上手くいけば拳を痛められる……」

意図せずとも、頭蓋骨に拳を当てられたのなら拳の骨にヒビが入る。骨折した拳が使い物になるはずもなく。

なによりも、ハンマーナオには反則の実績がある。

板垣には苦い経験がある。

ナオの技術なら、この場でも成功してしまう。いまの板垣に通じる、起死回生の一手が。

「板が――」

遅くとも声を出さずにはいられない篠田が、次の瞬間に目にした光景。

『な、なんと！板垣ここでカウンターのフェイントだ!?絶好のチャンスを取りこぼした!』

サイドステップによる、カウンターのキャンセル。

バッティングの軌道から外れ、敢えて王者の姿勢を起こさせる。逆に、その勢いを利用してリングに叩き伏せるために。

刹那、全てを理解した者たちが板垣の判断力……恐るべき集中力に身震いする。相手に万が一の可能性すら握らせず、緊張張り詰めるリング上で見分けたのだから。

来たる頭部へ向けて、再びカウンターの準備を整えた。

(カウンターが来なかったのは、運が良かった)

ピタリ、と。

リングのもう一つの影が確かな動きで止まった。

勝利を目前にした板垣の横で、ナオは右拳を構え終えていたのだ。彼の行動にまで理解が及んだのは幕之内。

「バッティングに見せかけて、狙いはボディだ!」

「そういうことですか……!」

幕之内がそう言えたのは、ナオの瞳に誠実な熱意を見たから。共に練習し、語り合った仲だからこそ。だが、板垣の瞳にどう映るかまでは解らない。勝敗を分かることになろうとも、幕之内は板垣が見たものにいま口出しすることはない。

板垣の2つ先を行く行動。

腰を回し、顎を引き締めて右拳を腹に打ち放つ。

(足を止めるつもりで!)

試合を終わらせるために!

これがキミのためになると信じて!)

汗を振り払う右拳。

風圧を纏い、己の限界を切り裂くが如く。

この一撃を放つために唸り、肉を潰すつもりで我武者羅に振り抜い

た。そして、輝かしく衝撃が会場中に響き渡る。

「――よし、よくやった！」

歓喜の声は篠田。

衝撃の出どころはナオの顔面から。

「カ、カウンターを合わせた。……完璧だ」

京介が感嘆するほど、鮮やかにカウンターは決まった。板垣は全てを見抜いたうえで、ナオの土俵に堂々と上がり込んだ。ナオがフェイントに活路を見出すように、板垣もまた接近戦に勝機を見たから。

(ずっと、気を張り詰めていました)

貴方のプレッシャーで僕の集中力は千切れそうになっていました) 弾き飛ぶ姿を見送りながら、思考の隅で言葉を並べる。ここまでそんな余裕は無かった。ひとたび対峙すれば、皮の一枚擦れ擦れの試合をしてきた。

肉体と精神、どちらが先に千切れるか。観客には分からない我慢比べに身を投じるこの試合。

深呼吸を1つ。

気を緩めるな、と自分に警鐘を鳴らす。

集中状態で感じるのは雑音を含めた全て。言わずとも、相手コーナーの様子も見逃さない。

「自分にしがみつけ、ナオ！」

逆転に手を伸ばす予断が来るからだ。



八戸がリングに拳を叩きつけながら叫ぶ。

コーナーからの声は誰の声援よりも聞こえる。鴨川の喝がそうであるように、ナオにとつての支えが八戸と知っている。

(なに、が……………あ……………つ)

いよいよ底が見え始めた肉体。

脳が休息を求めて意識を切り離す途中、■■■の声がナオの深層に届く。なら、応えなければならぬと思ひ、声の指示に従った。

(僕、は……………?)

自分とは、なんなのか。

ふと、自分自身を思い返す。

そうして疑問に浮かぶこと。

いま、なぜボクシングをしているのか。

断片的に、自分が何者かで、なにをしているのかは把握できた。これは強い衝撃でも忘れられないほど、自分のなかに印象を与えたものだから。

「せん、ぱい…」

また、リングを踏みしめる。

憧れの人が死ぬ気で耐えた今際の淵だ。あの姿を真似していたように、格好良いところはいつだって重ねていたい。

(つ……………会長……………!)

ここまで育ててくれた恩師がいる。

忘れてなるものか。プロとしてリングに上げてくれた彼無くして今はあり得ない。描けてくれる言葉に応えなければ、恩知らずも良いところだ。

「ワシは信じとる。最後まで立派に戦い抜いて、堂々とリングを降りる覚悟さある。それ忘れる訳がない。見失ったなら、何度でも場所を教えるのがワシの最後の務めじゃ!」

意識が再起動する。

八戸の言葉が、落ちるナオの身体を持ち上げる。

(僕も、板垣くんも。幕之内 一步の諦めない心に惹かれてここに立っている。なら、僕が彼よりも先に諦めてどうするんだ)

複雑なことは何もない。

大切な人たちがいて、自分を支えてくれる。

だから、1度でも背中を押してくれる手に報いるような自分であるために。

『ベルトよりも守らなければならぬものがあります。最後の試合、僕は後輩の未来のために戦います』

控え室、ハンマーナオは山田 直道として八戸に伝えていた。この

言葉に強く頷いてくれたことを無駄にしないために。

(僕が先輩から教わったボクシングはこんなものじゃない。それを、僕なりに伝える。会長や、ジムの皆んな…そしてオズマさんのためにも、限界まで戦えっ！)

だからこそ、結果ではなく過程を誰よりも重視するようになった。本当の後輩ではないけれど、胸を張れるような試合を見せなければならぬ。偽りの先輩の、ささやかな誇りのため。

(行くぞ!!!)

負けるときも潔くなければならない。



『王者、踏みとどまった!!?』

倒れるどころか闘志に火が着いている!!?』

ロープに寄りかかり、まだ戦えると重心を上げる。意識がある限り不屈を貫く固い意思。

板垣のカウンターは確実にナオの意識を落とした。

(心の底から尊敬します、王者)

それでもまだ立っている。つまりは勝つときも、負けるときも絶対の拘りを持っていることの証明。譲れないもののために魂を剥き出しにリングに戻ってきた。

(貴方が倒れるまでシンキングタイムはあげません)

驚きはない。

まだ立っているのは当たり前と、集中状態を身体中に満たす。力チリと意識が切り替わり、時間の流れを我が物とする。

次こそは、などと言わない。

次で確実に勝負を決める。

これだけの決意で拳を握らなければ、喰われるのは自分だと第六感が板垣に告げていた。

張り付くプレッシャーを前にした板垣のセンスは、ここで更なる武器を取り出した。

『こ、これはガキ・シャツフル！』

手負いの王者を油断無く攻め立てる！』

拳、腕、肩が脱力と筋肉の緩急で無作為に跳ねる。

脚が左右別々の動きで変速的に踊る。

視線は彼方、何処を打ち込んで来るのか予測困難。

全身各部位が意識を持つように動く、板垣の神経が可能とする最強のフェイント。

「勝負所を見定めたか」

「ハンマーナオの瞳が生き返った。だから板垣くんは警戒を強めたんだ」

気力を断つための選択を前にして、ナオはガードを上げる。

（見えない？違う、場所が悪いんだ。

そうだ、引き返す道はどこにもない）

直後、思いきり横に飛び込んでいた。

（選ぶのは、コーナーッ）

肩がぶつかる程に勢いよく移動した先はリングの四隅、コーナーで天才を迎え討つことを最後の判断とした。

「なるほど、それが王者の選択ですか」

「板垣くんの脚も、これなら円は描けない。

けど、次に上半身が崩されたら間違いない…」

「ええ、確実にダメージを溜めてT・K・Oです」

確実に板垣を見失わないための場所。

この選択が正解かどうかは、あと数秒もすればリング上に答えが出る。

（さあ——！）

（勝負——！）

一瞬、視線が交差する。

それを合図に踏み込んだのは板垣。

1センチの動作だけで色を置いていく錯覚を与え、残像が左右から連打を放つ。極小のシフトウエイトが産み出す奇跡を、ガードではなくフックで残像ごと掻き消す。

「ぐっ…!?!」

この光景を何度見たか。

散々のフェイントに気づくことが出来ず、きめ細かいパンチで隙間を縫われる。

(いい加減、打たれ慣れてくるよッ！)

身体を捉えきれずとも、両腕を少し開けるだけの場所にしか相手は居ない。ダメージを逃すことが困難な諸刃の剣だ。己のステップと引き換えにしたものなら、最終局面において余裕でお釣りがくる。

90度に絞れた的を、あとは拳一つ分の枠に捉えるのみとなった。

可動角度90度というコーナーの利点がナオのボクサー生命を繋ぎ止める。だというのに、板垣の脚はナオの拳を突き放し、その動体視力が追いつかない左外からジャブを打ち込む。それで終わらず、ガキ・シャツフルによつて変則ブローが次々と風前の灯を突風で消しかかるのだ。

「コーナーでなんちゅうフットワークなんじゃ…!?!」

生命を長引かせているはずが、瞬く間に礫台に早変わりする。開き直つて反撃を試みるナオの姿がどんどん小さくなっていく。

外から、内から。

絶対の勝利を手にするため、絶対という言葉のない世界で進み続ける。

(これでも…届かないか…!?!)

共に戦ってくれたことに感謝を伝えるため、決着の地まで止まることは出来ない。

(それでも、僕は諦めないッ!!?)

(この目を、僕は知っている)

気力を宿し、想いを灯し、過程を振り返る。

この刻、どんなダメージも無視する論理度外視の目。

勝敗の行く末に立つ分岐点にいま、王者は辿り着いた。

(勝負を諦めない、その目を。先輩も、勝負をひっくり返す瞬間にはいつも同じ目をしていた)

脳裏に過ぎるのは、ゴンザレスと幕之内が勝負を決したクロスカウ

ンター。あの一撃で、幕之内の魂すらも切り離れたカウンターは憎らしく。だが、この目を断つために最も必要なものだった。その点だけは認めなければならぬ。

このとき、幕之内の意識を絶った瞬間をナオもまた思い出していた。この先の結末がどうなるかは分からない。

ただ必ず忘れるまい、と。会長たちと過ごしたあの日々を、決着の刻まで心に抱いておくことだけなら負けはしないから。

(全力の右で——!!?)

(叩き返せつ——!!?)

最後の交差。

最後の一撃。

ナオは右フック。

板垣は右ストレートを選んだ。

斜めに切り落とすナオに対し、板垣は前に1つ踏み込んでいく。前のめりに、全体重を乗せる最大威力を發揮する、いわゆるジヨルト・カウンター。

最も得意な一手で食らいつく。

最も強力な一手で決めに行く。

悔いのない一手で終わらせる。

意地を賭けた血流が奔り、この試合で最も重い衝撃が観客たちの肌を駆け抜けていった。

一直線に、追いつがる拳を突き放して顔面を打ち抜く。

『クロスカウンターが王者を打ち崩す!!?』

挑戦者、最後の最後まで反撃を許さない!!?』

打つこと自体にスタミナは消費する。

それが当たればさらに消費し、その数が膨大なほど腕に疲れが溜まる。この試合、どんな攻撃にも突っ込んできて、拳を止める暇を与えられなかった。板垣が渾身のカウンターを振り抜けるのはこれが最後だった。

王者の身体が脱力し、前のめりに倒れていく。

交差した瞳は暖かく、そして見えなくなった。

カウンターの炸裂で会場中が息を飲んだ。決まったことを喜ぶ初期動作のなか、肩で息をしながら最後まで戦った後輩の顔を見る。

(本当は……もつと、戦いたい……)

前に倒れ際、思わず頬が緩む。

こんなにも身体中が痛いのに、心だけは淀みがない。いや、痛いからこそ憧れの人と共に在れるということなのか。

心地良い雰囲気の中、ゆくりと目を瞑り、身体を重力に預ける。そして、近づく終わりを待った。

「……、に……来たかった……」

勝利のムードのなかを通る静かなステップ。

「……………」

振り向いた板垣は、交差した視線を前にして本能的に息を呑んでしまった。

(その目、先輩の——)

対峙するはずのない瞳が映り込む。自分の横を通り過ぎるように倒れた身体が、起き上がっていた。

「この先の……ためにッ」

捻り出すように呟いた王者。

焼き切れていく意識を拳に乗せて、右側頭部に一撃を叩き込んだ。

「ガ、ア——!?!」

突き抜ける衝撃。

側頭部に打撃、背中に壁。

寸断された視界が回復したとき、板垣の身体はコーナーに寄りかかっていた。

「う、ああああああああ!!!」

反撃の狼煙を見逃した。

ハンマーナオはずっと勝ち方に拘り続けてきた。

それは、板垣 学だけに対する勝ち方。

板垣の集中力はアダとなった。会場の誰もが決着だと思った、そんな雰囲気を感じて緊張の糸が緩んだ。

集中力を切らされる、という未完成への警告。もし完成していたのなら、戦う理由が無くなったナオがリングに沈んでいた。

「逃げる板垣!!?」

未だ辿り着くべき場所があると信じる。

この場での勝利は停滞に等しいと伝える。

ならば噛ませ、その拳。

「行け!!?・ハンマーナオ!!?」

集中力を掻き消した瞳。

恐怖も、戸惑いも、後悔も思う暇を許さない。

一撃殴殺、ソーラーブレイクサス・プロ鳩尾打ちが直撃する。

「

腹の底から呻き出る空白。

右拳とコーナーに圧迫される身体。

体内に取り込んだ酸素全てが体外に吐き出される。

虚ろな意識のなか、折れ曲がる身体を振り上を見る。

そこは今井 京介がいた場所。4度も届かなかった場所、K・O勝

利が見える景色。

(見……………た、い……………)

何度も跳ね除けられてきた景色で、そのたびに成長してこれた要因。

最後に交差した瞳が、その可能性を物語っていた。

こうして、板垣 学の日本の頂点への挑戦は幕を閉じる。

3ラウンド2分20秒

ハンマーナオ

日本フェザー級タイトル防衛成功!!?

去る者の伝言

ずっと信じて進み続けた。

板垣 学のボクシングが未完成である、と。

最大まで高めた集中力にいつか見放される、と。

板垣の性格を鑑みて。ハンマーナオは未完成では通じないことを教えるために、試合中に集中力を切らせるためだけに足掻き、そして目的を果たしてみせた。板垣の集中力を捻じ伏せる、渾身の敗北を贈ることが出来た。

『いま、数秒置いて歓声が轟く！試合に幕を閉じようとしたリングを掻き分けて、王者の一撃が挑戦者を王座から突き放す！』

ここに、ハンマーナオの勝利が決定しました！』
日本フェザー級タイトル挑戦が終わりを告げる。

それはハンマーナオとしての現役に幕を閉じるということ。憧れの人がいる世界とのお別れを意味する。

(もうリングに悔いはない。僕は全てをやりきった)

視線を向けた先は幕之内 一步。

瞳の隅に涙を溜めて拍手を送る姿に、ナオもつられて涙が頬に滲む。

歓声にお辞儀で応えながら、まだ闘志が冷めることはない。なぜなら、最後の大勝負がまだ残っている。

(だから、先輩にも後悔はしてほしくない)

堅い決意を胸にリングを降りる。

憧れの人から暖かいものを貰い続けてきた。

今日、ハンマーナオは原点を守りにいく。

山田 直道として始まり、ハンマーナオのいまに至れた、愛する世界を守るために。



王者、ハンマーナオの勝利と引退を祝福で包む会場の隅。手摺りにダラリと身を預け、3人分の場所を取るマナーのない男がいた。

「あーあー、なっさけないな、板垣のやつ。最後の最後に油断するなんざ三流！タイトルホルダーなんざ夢のまた夢だぜ」

無礼な男、鷹村 守は敗れた板垣にため息を掛けて、もう興味を持たないと眠たそうに欠伸をする。

「おい、あれ鷹村だろ」

「後輩が負けたつてのに酷いな…」

「人のこと言えた口じゃねえだろ…」

周囲の観客たちはボクシング好きだ。鷹村のことを知らないはずもなく、後輩とはいえ失礼極まりない態度に呆れ果てていた。とくに、最近では鷹村の強さについて“最強”から離れつつある話題も知っている。膨れ上がる横暴な態度に冷ややかな視線が増えるのだが。

「あん、どういう意味だ！」

「やべっ、逃げろ！」

「けっ、雑魚どもはコソコソするのが好きだねえ」

本人はソレに未だ気づいていないらしく、捻れた感情を振りかざし続けていた。

有象無象を吐き捨てると会場をあとにする。

後輩の試合が終わり帰宅…とは今夜はいかない。

今度は違う後輩に呼び出され、しかも引退に合わせて会いたいと言われれば鷹村の重い足も動くというもの。

鷹村が出向いた先は河川敷。

見慣れたランニングコースをゆったり歩いてみると、目的の人物が河辺に佇んでいた。

会場で待ち合わせなかった理由は察しがつく。

今夜くらいはワガママを聞いてやろう、という珍しく寛大な心でいたのは奇跡に等しい。

「それと比べて、お前は良く這い上がってきたと思うぜ。

板垣相手に良くK・Oしたじゃねえか、ゲロ道」

「ありがとうございます、鷹村さん。」

そして、お久しぶりです。いつも試合観てますよ」

山田 直道：ハンマーナオが人当たりの良い表情で挨拶をする。

彼にとつてこの河川敷は幕之内たちと走った思い出の場所だ。ここからボクサー人生が始まったなら、ここに来て最後を迎えるのは心地の良いものだろう。

鷹村は周りに目を向けることなく、夜空を見上げて返事をする。

「ふん、ミドルでやるのは飽きた。そろそろ上がりたいつてのに、上のやつも逃げてるらしくて嫌になる。」

んで、試合後に俺サマを呼び出すとはどういう要件だ」

「ボクサーを引退するとき、鷹村さんに質問しようと思っていたことがあるんです」

「引退すんのにまだ習い足りないか？」

せっかく板垣相手に防衛成功したんだ、あいつの弔いも兼ねてなんでも教えてやるぜ！」

けらけらと笑う姿に、ナオはかつて鷹村たちと過ごした練習風景を

「アナタ、誰ですか」

「——あ？」

いまの鷹村に重ねることは出来なかった。

ゲロを吐きながら、それでもボクシングをしたいと思える日々。憧れである幕之内が共に駆ける姿はどこにもない。

だから遠慮なく、思ったことを相手にぶつける。

「おい、聞き違いかゲロ道。」

いま、俺サマを馬鹿にしたのか」

雰囲気のが吹雪に変わる。

鷹の瞳が獲物を見る目で返事を問う。

「こ、こちらのセリフです」

それでも足はすくむし声はしぼむ。世界王者だから怯むのではない。ここで言葉一つ間違えた瞬間、修復困難な亀裂に最後の一押しをすることになるのだ。

(いまさら弱気になるなっ！)

怖いなんて、百も承知だ！)

鷹村を前に気圧される心を奮わせ、それでも立ち向かおうと声を上げた。

「せ——」

捻り出した声を、閃光も散らす物量がナオの顔面スレスレを横切る。

「いま訂正すれば、引退に免じて忘れてやる」

「っ、う」

ジャブを振り抜いた鷹村は、もう次はないと目で圧す。

隠しもしない爪。

次の瞬間には獲物を八つ裂きにしてしまう。鷹村の拳は、そんな誤った用途に舵を切っていた。

確かに言い方は誤解を生むものだった。怒りを買っても仕方がない。粘度の高い感情をぶつけられる覚悟はある。

けれど、心は上手くいかない。

すくんでしまう気持ちに、思わず目を閉じてしまい。目蓋の裏側で、かつての鷹村のジャブを思い出した。

(……………そうだ、これは間違っている)

勢い良く目を開く。

確かに目の前の鷹村は、ジムで共に練習していたときよりも迫力がある。だが、どんなときでも暖かいものを持っていた。いまの冷酷さだけの人間じゃなかった。

幕之内がゴンザレスに敗北したとき。鷹村の言ったセリフをナオはいまも覚えている。

“限界が来てるんだよ、一步の身体は。”

——だからもう、諦めろ”

あれは不器用な慰めじゃない。鴨川ジムの結束を砕く、許されざる非道だ。思い出した以上、もう一步も退くことは出来ない。

「世界前哨戦、幕之内先輩が負けたとき、アナタはなんて声をかけましたか」

ピクリ、鷹村の眉が動く。

「……さあな。お前には関係ないだろうが」

「あいつは打たれ過ぎた。ガードの下手くそさは天下一だろうな。次、世界で戦えばガラクタになる。

限界が来てるんだよ、一步の身体は。

——だからもう、諦めろ」です」

あの日、暗くなった控え室の前で鷹村が言い放った言葉。

「…だったらどうする。ヤツの限界が見えた試合だ、あれで復帰してみろ。あのままりカルドに挑んで死ぬだけだ」

「だからって、追い討ちをかける必要はどこにもない。先輩を貶したことに意味があったんですか。

僕が知る鷹村さんは、負けたボクサーを……それも、自分の後輩を本心から蔑むような発言はしなかった」

鷹村のプレッシャーを前にしながら、手探りで“鷹村 守の声”を拾うために危険地帯の中心へ駆けていく。

幕之内に憧れる人間がいるように。幕之内が鷹村を尊敬していることは良く分かる。鷹村もまた、一步のことを可愛がっていたのをナオは…直道はよく知っている。

「…」

だからだろう、鷹村は誘われたことを後悔するように舌打ちをする。

「どうして、自分のことを虐めているんですか？」

「……………」

「このままだと皆んな、ジムから出ていきます。誰でもない鷹村さんを嫌いになってです！

これが貴方が観てきた景色だって言うんですか？

世界王者になったあの瞬間は嘘だったんですか!?!」

放たれる言葉を聞く鷹村。

放つごとに表情は消え、目を暗くしながら直道を見据える。

微動だにしくなつた相手に、手応えを掴めず静かに手が震える直道。

彼の不安をよそに、鷹村の脳裏には、ひとときの思い出が流れていた。

“この世のモノとは思えない美味さなんだよ”

鴨川ジムの窓に座る世界王者。口にした握り飯を思い浮かべて、後輩たちへと自分の想いを表した感謝の言葉。

また、あの頃の自分を思い出して。

「ちっ」

気づけば舌打ちを零し、握り拳を作っていた。

あの頃は綺麗なものが沢山あった。だから気づくこともなく平穩だった。

あのままずっと、とある可能性に思い至らなければ違つた未来があつたのに。

そんな、苦い口元を隠しもしない鷹村を見て、直道は確信を得る。

「いまの貴方は脆い。負けたら、もう立てない」

次の瞬間、自分は死んでいるだろう、と。

そして、鷹村が最も嫌煙する核心を突く。

「——死ね」

敗北の2文字を否定するために、鷹村は咄嗟に…理性が堰き止める間も無く右拳^{怒り}を放つた。

暴力を振るう限度くらいは弁えているつもりだった。直道の声が、遠慮ない瞳が鷹村の誇りを刺激し、現実に向き合わせた瞬間。本能がいまを拒絶するように、直道の顔面へと右拳を打っていたのだ。

「……………テメエ」

右拳が減り込んだ場所を見て、鷹村は怒りを飲み込むしかなかった。

直道の左腕がガードを果たし、それでも突き抜ける衝撃で口から血が垂れる。左腕の骨が笑い、視界は呑気に踊る。

「この手は、強い。」

先輩たちが惹かれるのも、すぐく分かる」

歯軋りは意識を繋ぎ止めるため。

下唇を噛んだのは一生後悔しないため。

「なら、もつとワガママを言う相手がいるでしょう！」

「……………」

鷹村が突き出した右拳を、ナオの右手が包むように握る。

「むやみやたらに噛みついて、本心を偽ったままじゃ前に進めません！

よく見て…誰も鷹村さんを見失っていない！」

そのまま、覚束ない右手を離す。

「鷹村さんが…鷹村 守だけが独りなんだ！」

一步踏み出して、ゆつくりと拳を作り、鷹村の胸に打った。

鷹村は反応できなかった。

止められるはずの、繰り出された右拳が胸に刻まれる。

「…」

鷹村が共に練習した山田 直道なら当たるはずの無い拳。

だがこれは、打つためではなく、伝えるための拳。

世界を獲るよりもずっと前の記憶を、ただ願うだけの拳が呼び起こし…。

「皮肉なもんだ。同じいじめられっ子でも、背中を見る視点は違ったか」

その言葉に答えは返せない。

だが、逆に証明することもできない。

鷹村が変われる可能性を誰にも否定させない。

踵を返した鷹村。

離れていく後ろ姿を直道は見送る。

自分が鷹村に出来ることは全て尽くしたから。

「やっぱり、僕だけじゃダメでした…」

手応えはある。

あの鷹村 守に言葉が届いた確信がある。

「だけど、〃明日〃なら…鷹村さんの目が見えるようになるかもしれない」

言葉よりも饒舌な拳に押されて、ナオも踵を返して歩き出す。

ここから先にある はじめの一步の分岐点 この物語の分岐点を綴り、原点から飛び出して
いこう。

はじまりの挨拶

ハンマーナオ、現役最後の試合の翌日。

幕之内は両手両足に重りをはめて、河川敷のランニングコースをゆっくりと走っていた。

ゴンザレスに負けてから、幕之内は鴨川に休養を言い渡された。期限は設けられず、とある疑惑が消えるまでは復帰もないと告げられている。

普通、休養なら身体を休めるものだ。リフレッシュとしてのスポーツは効果的ですからある。だが間違っても、筋肉を刺激して負荷をかける運動を指しはしない。

「これも違う……」

走りながら、時折デンプシーをゆっくり描いては頭を横に振る。幕之内は試合復帰に向けて、デンプシーを改良するためにあれこれとイメージする。

「縦………うくん、なんか違う」

横に、更には縦に身体を動かして。

普段のトレーニングを知らない者が見れば、思わず顔をしかめそうな重々しい動き。

「先輩は相変わらずですね」

そんな憧れの姿を見て、直道は微笑を浮かべて幕之内に声をかけた。

「え、あつー！山田くん!？」

どうしてここに？帰ったんじゃないの!?」

「お久しぶりです、先輩。お会いできて嬉しいです。」

その、ご報告をしないと帰るに帰れなくて……」

幕之内は驚愕に顔を染めるも、すぐさま満面の笑みで直道のもとに駆けていく。予想以上の歓迎に照れながら、挨拶を交わすのだった。

「ほんとに嬉しいよ！日本王者おめでとう！防衛戦も凄かったよ！山

田くんの成長が嬉しくて、僕何度も試合を見直してたんだ！」

「ありがとうございます……！」

先輩の言う通り、僕、あれから強くなりました。今井くん、板垣くんを倒せるくらいに成長出来ました。先輩がいた日本タイトルも手にしました。やりました、先輩！」

直道の報告に目元が潤う。

自分に憧れたボクサーの報告だ。

我がことのように喜んで極まりまくっていた。

「今井くんと戦う前、オズマさんが特訓に付き合ってくれたんです。オズマさんが居なかつたら勝てなかつた……。彼、先輩のことを本当に尊敬していました。」

沢山な人に支えられて、僕は……。全てを出し切ることができました。僕が始まったここでハンマーナオを終わらせよう……。そう、以前から決めていました」

「そんな、僕の言葉を覚えててくれただけでも嬉しいのに……。ううっ、ごめん嬉しすぎて涙がっ」

涙目の先輩と後輩。

最後の宣言はすっかりしたいと、後輩が目元を拭い姿勢を正す。

「ハンマーナオは今日をもってボクサーを引退します！」

「うん、うんっ……。本当にお疲れさまでした……！」

直道の礼儀正しさも幕之内を見て学んだ。

リングに上がれば観客にお辞儀をする彼の想いを、直道が忘れずに引き継いだ。その真面目さこそ、彼の本当の武器なのだから幕之内も誇らしくて涙が止まらなくなる。

成長と終わりを見届けた男が顔を上げる。

最後にどう言葉を贈ろうか悩みながら目を見て。

「だけど、1つだけ……。1つだけ悔いが残りました」
「……！」

力強い眼光に息を呑んだ。

引退宣言に等しい意味があると直ぐに分かった。

「鷹村さんです」

「そ、それは…」

「気付いていますよ。なにかおかしいって」

だが予想しなかった。直道の口から、鷹村の様子が変わったことを。近く見ていないはずなのに、彼の口調は異変の確信を知っていると言わんばかりの自信だった。

「うん…。けど、鷹村さんは僕たちになにも話してくれないんだ。原因を考えても分からなくて…」

「異変に気付いたから、鷹村さんと会ってきました。そこでなんとなく気付いたんです。」

鷹村さんはいま、「前を向いているフリ」をしているんじゃないかって」

「前を向いているフリ？」

「鷹村さん、いまの先輩たち……もしかすると、鴨川会長にも心を閉ざしているかもしれません。」

僕は先輩との試合まで、負けが許されない橋を渡ってきました。励みにしたのは、ジムの皆さんとの時間です。

……そんな、遠い場所を振り返るうちに鷹村さんは迷ってしまったのかも」

幕之内は直道の戦績……その内容まで詳しく把握している。デビュー戦から相手は強敵で、次々と組んだ試合は格上だ。心が折れても肯ける逆境を跳ね除け、憧れの背中に追いつくまでどれ程の苦労があったのか。顔の変わりようだけでは想像もできない精神的苦痛があったはずだ。

そんな直道だからこそ、鷹村の異変に親近感が湧いた。

ここ一年弱、鷹村さんの様子が変わっている理由。

あと少しのところまで来れた気がする。

そんな表情を見て直道は大丈夫と思ったのだろう。

「僕は信じています。先輩の夢は叶うって」

右拳を胸に当てながら。

「僕は知っています。」

先輩が正直な人だって。だから、だから…」

真つ直ぐに瞳を見て激励を口にした。

「がんばってください！」

本当に、ありがとうございます!!」

最後まで礼儀正しくお辞儀をして。

ハンマーナオ、ここに引退を宣言する。

頬に伝う一筋の熱を拭い、幕之内もありったけの感謝を込めてお辞儀を返した。



直道が帰ったあと。

幕之内はジムに様子見に行くか迷った末、今日が休みだということ
を思い出す。後日、療養を言い渡された身なので練習の邪魔にならない
夕方方に顔を出すことにした。

そして。

「鷹村さんいるかな」

幕之内はジムの窓から中の様子を覗く。

飛び込んできた光景には。

「えっ」

誰もいない……正確には、項垂れる鴨川以外の誰もいないジムを見
て、幕之内は驚きに声を漏らした。

明らかに様子がおかしい。慌ててジムに入ると。

「小僧……」。ワシは鷹村を止めることが出来なかった。本当に、不
甲斐ない」

鷹村 守の亀裂はすでに、手の施しようがない場所に到達している
と知ることになる。

埃塗れの翼

直道の引退を見届けたあと、鷹村は湧き上がる怒りを抱えて帰宅した。シャワーで汗を流して、乱暴に布団に潜る。あとは寝るだけというところで、天井に目を向けると。

“ どうして、自分のことを虐めているんですか？ ”

影法師が右拳を打ち出してきた。

それを左手であしらう。

「ちっ、うるせえよ」

乱暴に振り払うだけ。

もつともらしい理由は言えるものの、それでは直道に見破られてしまっただろう。だから腹立たしい。

…何故、ジムから離れたヤツの方が分かったのか。

「オレが虐めてんのは…」

無意識に思ったことから目を背け、ゆっくりと目蓋を閉じる。

ここ数年、目覚めは気分の良いものではなくなった。

理由は、なんだろうか。

ボクシングを始めた頃の頃、鴨川に無理やりにも連れて行かれた早朝ランニング。眠くて怠くて、しかし嫌いにはなれない時間。毎朝天候問わず、前日に疲弊していようと走り続けた道。

ジジイが煩いだの、家の前で待たれて迷惑だと思いつつながら練習着で玄関を飛び出していった。そこには少しだけ…最初は米粒以下の楽しさが混ざっていて。日を追うごとに量は増えて、いつしか握り飯が出来るくらいにやり甲斐は形を成していった。

添え物にはバカ共のバカ騒ぎ。握り飯を味わうために大切な後輩

が1人、2人と増えていった。後輩たちも同じ握り飯を食べて、志し同じく前へ突き進んでいく。そこには微塵も不満はなかった。

そのはず、なのに。

いつしか握り飯は皿の上から消え、暖かみで包まれていた場所には分かち合えるモノが消えていた。

そう、いつの日か気づいたのだ。

「オレの恩返しは、もう終わっていた…」

鷹村 守が与えられる恩返しは頭打ちになった。

鷹村が望んだ恩返しを出来るボクサーは、世界山の麓で撃墜されたのだ。

だから、期待させてしまった責任として、鷹村は幕之内に限界を示したのだ。自らが招いたボクサーを、これ以上苦しめないよう。パンチドランカーという疑いを確定させないまま、好きなものから去ってもらうため。

幕之内を共に連れてきた鴨川が見せるあの心配顔……膨れ上がる期待が少しでも小さなうちに。これが優しさと言えれば良かった。純粋な気持ちで提案出来たなら、もっと晴れ晴れとした気分だった。

だが、幕之内に吐き出すセリフが鷹村を苦しめる。幕之内がゴンザレスに敗れ、それでも期待を寄せる鴨川を見たとき。漸く鷹村は、この感情が誰に負けたものかを理解し、同時に嫉妬心を拡大させていく。

嫉妬心を向ける相手は、鏡の向こうにいますというのに。

(そうか、目蓋を閉じたらオレがいるからか)

ここ数年、目覚めは気分の良いものではなくなった。

これが、理由か…。



「ああ、無性に腹が立つ…」

寝起きの鷹村が呟く。

どうして今更、現在を見つめ直しているのか。

「くだらねえ。忘れる、あんなヤツ」

不満を吐き捨て、それでも残る苛立ちとともに立ち上がる。

早朝ランニングをするためだ。もう楽しさは感じない。見失ったのか、いまは品切れなだけかは分からない。ただ勝つため、嫉妬心に呑まれないように玄関を出た。

“ はじまりの分岐点 ” があるとは知らずに。

その日、日課を終えた頃にはあちこちの店が営業を開始していた。少しだけ長かったランニングを終えて、帰宅途中の鷹村の目に留まったもの。

「けっ、大スターは勝手に記事にされて困るねえ」

書店に並ぶ1冊のスポーツ雑誌。

その表紙には自分の名前があり、あからさまな煽り文句を謳っていた。雑誌を手にとって出版社を確認すると、ガセネタで有名などころだ。構っているほど暇じゃないと雑誌を置こうとする。

「…」

脳裏に、直道の表情がチラついた。

あんなもので心を乱されては堪らない。少しだけ、この雑誌を読んで文句の一つでも言って憂さ晴らししよう。

くだらないことを求めていたのかもしれない。

そうして鷹村は気まぐれに雑誌を広げて。

『リチャード・バイソン、不名誉な敗北？』

鷹村 守は嘘っぱちの統一王者?!』

ミドル級王座統一戦の記事に貼られた写真には、鴨川のタオルが投げ込まれる瞬間が写っている。

『本当は負けていた！壊れる王者を戦わせる後輩たち！投げ込んだタオルのキャンセルは有り？無し？』

次に貼られているのは、宙に放られた敗北の証を、協力して叩き落とす青木と木村の姿。

「んな、はずが…！」

確かに記憶の片隅に、鴨川がタオルを投げようとしたことは覚えて
いる。だが、投げられるよりも先に勝負を決したと思っていた。まさ
か、タオルが投入され、回収されたなどは思いもしなかったのだ。
「ば、馬鹿な!？」

『鷹村は最強なんかじゃなかった!・WBC・WBA両団体、回答を先送
り!日本最強の鷹に黒星は付くのか!？』

「この写真……マジ、なのか?」

感情の正体を掴めないまま、手にしていたスポーツ雑誌はビリビリ
に引き裂かれていた。自分の手で破ったことを自覚するよりも先に、
もう1冊同じものを手に、会計を済ませて走り出した。



手元には『鷹村VSバイソン』と書かれたビデオケース。藤井記者
が務める会社に突撃して借りたビデオはいま、鷹村の部屋にあるテレ
ビで記録を再生していた。

そこには、保ってきたプライドを壊す映像が流れている。

「負けた……………」

ジジイは、タオルを投げなかったんじゃないか」

意識が飛びかける鷹村を確認した鴨川が、躊躇ったあとにタオルを
リングへと放り投げる。その時点で鷹村は敗北した。誰がなんと
おうと、鴨川が負けを認めたのだ。

たとえば、青木と木村が必死にタオルを回収して、試合を続行させよ
うとも。

「投げたタオルが、青木と木村に回収されただけって言うのかっ!？」

なんなんだそれはああああああああ!!!

あのクソジジイ、んなことしてやがったのかっ!」

はつきりと記録された敗者の証。

「お、俺が……負けたと思われていた。

あの牛野郎に、俺が……………!？」

テレビがバイソンをK.Oしたところで、鷹村の怒りは頂点に達し

た。

「んだよ、勝っても嬉しかねえよ。

要らねえ…こんなベルト、なんの意味もねえ！」

「WBAのベルトを壁に叩きつける。

無礼だのそんなもの考える頭はない。

敗者を讃える玩具など見たくない。

世界のベルトは床に落ち、それでも消えるはずがなく。横たわるソ

レが鷹村の敗北を指摘する。

「ツツ~~~~~くそがア!!?!!?!!?」

訳が分からなくなり、身体が動くままに部屋を飛び出す。

負けの烙印を認めない。

全力疾走で振り落とす。

落ちない、負けは消えない。

勝ち続けてきたように、負けがこの頭から消えてくれない。

霞む、走るたびに過去が埋れていく。

勝つために走ってきた河川敷が見ている。これまでの自傷を、当た

り散らしてきた嫉妬が景色に染み込んでいる。走れば走るほど思い

出す、この身体に染み込んでいく。

汗を流したはずなのに一滴も出ない。

嫌なものが頭のなかから離れない。

「あ、あ…」

気づけば1時間走っていた。

全力疾走が出来ないほどに体力をふり絞った。

どこを走っていたのか覚えていない。

嫌なことを忘れようと飛び出したのに、逆に逃げる手段が無くなっ

ていた。次に訪れるものは現実。

寒気が身体を覆う。

気候は関係あるだろうが、これはもつと精神的なもの。ついに理性

が敗北を見ようとしているのだ。

「誰が、負けるかよ……この俺サマが……！」

認めない。直視してはいけない。

精神に拒絶させるため、傍に聳え立つ木に右拳を叩きつける。揺れる木は枯れ葉を落とす。その光景のなにもかもが見たことがあり、記憶が直ぐに思い当たる。

“これが出来たら、ボクシングを教えてやるよ”

“これを、僕が…!?”

幕之内がボクサーとして始まった場所。

“鷹村さん、強いつてなんなんですか”

強いつて、どんな気持ちなんですか”

幕之内の問いに、答えの入り口を教えた場所。

「負ければ、次がいつ来るか分からねえ。

強いつてのはな、孤高なんだよ……一歩」

はじまりの木を見上げて、虚空に言い放つ。

帰路に着く前に振り返る。少しだけ視線を下げて、はじまりの木か

ら川に向けて一直線に引いた線を見た。

幕之内に越えるな、と言った”人外の境界線”。

「…ふん。越えなくていいんだよ、休め」

僅かに沸いた感情を押し殺して空を仰いだ。

ゴミが散乱する自宅の隅に一人。

深夜3時を過ぎようという時間だというのに、眠気はまるでなかった。

窓から差す月のあかりに照らされる瞳には、人としての精気や覇気がない。現実を見ていなかった。繰り返す脳内で流れる、リチャード・バイソンの試合。リングの中と外。自分視点とカメラ視点を照らし合わせながら、屈辱の瞬間は20回目を迎えた。

何度、試合を思い出したか。

そして何度、イメージを覆そうと足掻いただろう。

最後の最後、自分は足首の故障が原因でタオルが投げられてしま
う。そんなイメージがこびり付いてしまった。

「……………ッ!!」

歯ぎしりの音が響く。形にできない悔しさが胸の奥で暴れまわる。

「認めねえ…」

負けを。勝ちながら負けたことを。

会長の期待に応えられなかった時間があったことを。

結果も、れんしゅう過程も、無意味に変えていたのは自分だったことを。

世界を獲った自分が守れるものは無敗だ。

これを失えばどうなる？

鴨川は励ますだろう。

だが、もう無敗の鷹村へ向けた期待は薄れる。

ただでさえ少ないソレは全て幕之内へ行ってしまう。

「…………ちくしょう」

現実から逃げるように、苛立ちをぶつけるために。

イメージトレーニングと称したバイソンの試合を再び始めた。

ジシヨウ最強

「もう日本タイトルには挑みません」

「板垣…なぜだ」

鴨川ボクシングジムの事務所。

今後の方針を話すために呼び出した板垣の開口一番だった。

「タイトル挑戦に回数制限なんてないんだよ!?!」

「もうタイトルマッチは簡単に組めないと思います」

口惜しそうに、大人の事情を見ながら言う。

「言いたいことは分かる。あの試合、少なくとも東^O太^P平^B洋^Fタイトルマッチに匹敵する激闘じゃった。

いまの日本フェザー級ランカーに貴様ほどの実力者はおらん。敬遠され、タイトル挑戦を先延ばしにされるのがオチじゃろう」

「……くっ」

篠田も分かっていた。

次、板垣がフェザー級でタイトルマッチを組めば必ず勝つ。王座は直ぐそこにあるのだ。少なくとも、2度も失敗していなければ。

板垣には東洋ランクがあり、国内に留まるなら戦場を変えろという圧力は増していく。目の前にあるのに手に出来ないタイトル。篠田自身悔しい気持ちはあるが、それ以上に悔しさを呑み込んだのは板垣だ。ならば納得するしかないだろう。

「ならばこれからどうする。」

なにか、展望は考えてきたのじゃろ」

「京介は最短であと半年後にはOPBFタイトルに挑戦出来ると言っています」

ピシリ、空気に亀裂が走るのを篠田は察知した。

今井 京介の次の狙い…相手は宮田 一郎。

(やめてくれ板垣ッ!!?…ここでのその話題はまずい…)

宮田 一郎。

かつて鴨川ジムに所属し、幕之内との試合を望み鴨川ジムを出て

行った。そして、東洋で拳を交えるはずだった舞台を、彼自身の都合で断り、鴨川に二度と試合を組まないと怒りを買った。

誰でもない幕之内の期待を裏切った彼の話題は、鴨川にとって禁忌に等しい。

「格上と戦いたい。これが、僕が強くなる方法です」

板垣は日本タイトルを諦める覚悟として示した目標だ。遠回しに、日本タイトルを取っても強くなれないと言う。驕っているように見えて、真っ直ぐに鴨川を見据える板垣。

滝のような汗を流す篠田。

鴨川も意味に気づいている。

雷が落ちる、そう思った直後。

「……………そうか」

板垣の理由を受け取った鴨川は深く、ゆっくりと頷く。

「ワシはなにも言わん。決めるのは篠田くんじゃ」

「は、はい……………」

厳かに告げる鴨川へ、背筋を伸ばして返事をするのがやっとだった。



板垣たちが事務所にいるとき、青木と木村はジムのベンチに腰掛けしていた。

彼らの顔は優れない。

青木は気力が削がれている。ここ最近、試合でK・Oを出せず、泥試合の末に勝利しているせいだ。

一方で木村は心身ともに消耗していた。

試合結果が奮わない。減量苦を抱えながらの試合は直近、引き分けで終わっている。相手が特別に強かったわけではない。間柴や沢村、ましてや青木の実力にも届かない。本来なら余裕で勝てる試合で勝利を逃した。

その事実から立ち直れず、試合後の体調が戻ることなく過ごしてい

る。

「まさか、ゲロ道が板垣をK.O.するとはな」

乾いた木村の喉が掠れた声を出す。

昨日に行われた元後輩の試合を2人も観戦していた。

「本当に驚いたぜ。あのゲロ道がなあ…」

俯く木村の声に応える。

疲れが抜けない彼を気遣い、短く相槌を打った。

「そりゃ、引退もするよ。あいつの顔、すつげえやり切ったって言うてる」

「ああ、先輩として嬉しい限りだ」

遠い場所を見ながら、引退するボクサーの表情を思い出す。思い残しのない、清々しい横顔が鮮明に過ぎる。

あの表情を見て、我がままにも羨ましいと思う。次に祝福して、最後に出てきたのは自分のことだ。はたして、あと1度でもタイトルマッチに挑戦出来るのか、と。

何度も思ったことを肯定する材料を探して、ついに見つけたものを取り出した。

「……………なあ、これ」

木村が出したのは発売したばかりのボクシング雑誌。付箋が貼られたページを青木はめくると、デカデカと一面を飾る1人のボクサーがいた。

「知ってるか、いまのジュニア・ライトに現れた新星」

“ 圧巻の全日本新人王獲得!!? その左に神を見た!?!? ”

選手の名は柳洞りゅうどう 疾景とかげ。

セコンドの名前を知ると、青木は生唾を飲んでしまう。

「こ、こいつー! 沢村 竜平!? この沢村って、あの? 」

「ああ、そうだ。いつの間にかトレーナーになってやがった。…疾景ってのがよ、あの時の間柴よりも強いんだ」

記事に目を通し終えると青木の表情が曇る。

“ 国内ランカーで最も美しいワンツ”、 “ 既に世界が広がっている!”。 疾景を褒める文があちらこちらに並ぶ。なかでも気になっ

たもの、それは。

“ 神話の左、竜の右 ” だった。

「……また厄介なモンを持ってやがるな。

けどよ、まだランカー10位に入っただけだ。木村が先にタイトル取っちまえばいいんだよ！

それにもし戦うとしても、間柴の左だつて攻略してみせたんだ。今度だつてお前ならなんとかできるつて！」

「……今回は間柴とは訳が違う。潜れば右が待っている。もう、どうすりやいいか分かんねえんだ」

ベルトに手を伸ばしたい一心で木村が見つけたもの。

それはジュニア・ライト級の日本ランカーが絶望するような記事。木村が見る限り、疾景に勝てるボクサーは国内にいない。駆け上がるようにベルトを巻くだろう。

「分かっている、さっさとベルト巻いて引退すりやいい。そうすりや、今の俺じゃ勝てやしねえヤツと戦うこともない」

それが出来ない。

もう、今の自分に駆け上がる気力がない。

試合をするたびに泥を被り、遠ざかるベルト。3センチメートルの差で済まなくなったのだ。

「……こんなこと言うやつに、チャンスなんざ来るわけないのによ」
肩を落とす木村の横顔に覇気はない。

それは青木も似たようなもので、木村の心象が痛いほど理解できる。だからこそ現状を変えたいと思うのだが、思っただけで出来るほど簡単にはいかない。

いま欲しいもの。

青木が伊賀 忍への再戦を望む手前、言葉にはしない。

しないが、木村は探していたのだ。

いまから逃げる理由……引退の口実を。

「おい」

密かに求める引退の理由は直後に現れた。

「鷹村さん、おつかれっす」

「どーしたんすか、元氣ないですね」

2人の前に立っていた鷹村。

挨拶をするが、彼の機嫌が最悪なことに気づくのに遅れた。

「舐めてんのか、テメエ」

「ぐあっ!?!」

一瞬のうちに木村は胸ぐらを掴まれて、身体を持ち上げられていた。

「弱音吐く暇があったら練習しろ。」

そんな覚悟でここに来てんじゃねえ、邪魔だ」

亀裂が入る。

堅い信頼で出来上がった繋がりにも、ずっと潜んでいた亀裂が表面に浮かび上がった。

「ま、待ってくださいよ鷹村さん！」

木村はちよつとナイーブになってるだけです！そんなことしたら余計…」

「だからどうした。独りで片付けるならまだ良い。だが、テメエだけの感情で周りの気分が滅入ったらどう責任取るつもりだ」

木村を乱雑に放り投げながらジム内の温度を下げる鷹村。

彼の圧力は直ぐにでも手を出すと言わんばかりだが、そんなものを気にできるほど青木は冷静じゃない。

「それでも、言葉くらいは選べよ！」

自分の言葉の重さくらい分かるでしょう!?!」

ジムに来てまで見せる姿ではないことを青木も分かっているが、蹴落とすよりも一発背中を蹴ったほうが早いし、それが鷹村だ。

ここまで尊敬し、背中を追い続けた男の言葉なら。向けた意味に応じて色は濃ゆく、木村を呑み込んでいく。いまの鷹村は木村を蹴り起こすのではなく、蹴り落とす態度でいる。

それは分かっていたから、早く連れ出せば良かった。

「真心込めて慰めりゃあ、次の試合は絶対に勝てるのか」

「うっ…」

「ここまでで夢の1つも出来ただろ。追いかけれなきゃここで捨て

ろ。夢が叶わない奴の未路だ」

言い返す言葉に詰まる。

青木は、伊賀への再戦も、日本タイトルの獲得も諦めたわけではない。望んでいるが、ここまでの戦績に信憑性がまるでなかった。木村も同じことで項垂れたまま声を出さない。

「どいつもこいつも……俺サマの邪魔はつかしやがって。

ちんたら歩いて、先に行くヤツの重荷になってんじゃねえよ。勝てないんなら退け、さっさとここから降りろ！」

言い返そうとした。

喉の奥から出てくるものは情けなさ。

悔しいが鷹村の言葉は正しくもある。

(正しいけどよ、これでいいのか……木村)

沈黙し続ける木村に視線を向けたとき。

ジムの扉が開き、鴨川たちがやってくる。

「騒がしいぞ貴様ら！騒いどる暇があるなら練習を……」

鴨川の怒声を聞いて、木村は勢いよく立ち上がるとジムを出て行った。

「あ、おい木村！待ってっ！」

困惑する篠田を他所に、青木は鷹村にひと睨みする。

「なにしてんだよ、アンタ。」

そんなに俺たちを追い出したいのか？」

青木が問いかける。

答えるまでもないと態度で示す鷹村を背にして、青木は篠田の制止を聞かずに木村の後を追った。

「ど、どういうことなんだ!？」

「ほっとけ。これがあいつらの選択だ」

すっかり寂れた拳を握り、鷹村は独りリングに上がった。



その日の夜。

「俺…引退します」

木村 タツヤは事務所で鴨川、篠田、八木にそう告げて、篠田の説得を聞く暇もなく立ち去っていった。

カウンターのないリング

「そんなことが……」

「様子を見ていた後藤の証言じゃ。練習生はそのまま帰り、板垣は鷹村のあとを追っていきおった。」

青木たちを振り解いた鷹村の表情は暗かった。そんな顔で、『俺は負けねえ、ジジイ。だからアイツはもう見るな』と呟いたんじゃよ」
ボクシングの熱意に欠けたジムを見渡して、力なく鴨川はことのあるましを説明し終える。

間に合わなかった…？

いや、自分がいたとして、なにが出来ただろうか。こうして考えている時点で鷹村さんを止めることは叶わない。ジムに来たのは、鷹村さんが何処を見ているのかを見極めるため。彼を引き戻す言葉は手にしていない。

悔しきでぐつと拳を握る。

励ましの言葉も見つけられないまま、鴨川が話題を持ち出した。

「知っておるか、タオル投入疑惑を」

「え、ええ。数日前に出た記事なので目は通しました。ですが、バイソン選手側から抗議の声は出ていません。完全な言いがかりですよ」

「数年前から様子のおかしかった鷹村じゃが、あやつの言葉を聞くにあの記事が最後の一押しと見るべきじゃ。」

………これなら、説明もつく」

首を傾げた幕之内に説明を続ける。

「あのとき、鷹村の負けと判断した。全てを覚悟のうえでタオルを投げた…つもりでいたんじゃ。鷹村が勝ったことで、その覚悟を有耶無耶にしてしまった。」

責任を先延ばしにして、ワシは鷹村を虐めていたに過ぎん……」

「そ、それは——」

考えすぎ、と言おうとして口を閉じる。

励ましたいからと簡単に否定するものじゃない。会長が感じたま

まを口にしたのなら、遠からず当たっているものだ。鷹村さんと会長のこれまでの絆を見てきたからこそ断言する。

会長がタオル投入に想いを注いだように、鷹村さんも沢山思い悩んでいるはずだ。望んで苦しむなんて、鷹村さんは絶対にしない。

「のう小僧……こんなワシの言葉が、あやつに届くと思うか。ワシの手の届かぬところにいる、鷹村に」

「そんなの、当たり前じゃないですか。」

会長にしか届けられないものがあります！」

嘆く鴨川に、間髪入れず返事をする。

だって鷹村さんは、会長のひと声で動いてきたんだ。

そうだ、いつも鷹村さんは会長のために走ってきた。

鷹村さんが忘れてしまったのなら、思い出させるしかない。

「会長、ちょっとだけ待っていてください。」

鷹村さんは僕が必ず連れて来ます。

僕も、伝えたいことが沢山ありますから」

おぼろげな手掛かりを探すことを、幕之内は力強く宣言した。

この日の夜、木村 タツヤが引退した。



『前を向いているフリをしている』

直道の言伝を思い返した幕之内は、鷹村がいま何処を見ているのかを探すことにした。本人に直接聞くわけにもいかないため、鷹村の試合を過去へ辿っていく。

辿って、辿って……………。

丸一日、鷹村のデビュー戦まで穴が空くほどに観た。

「ちよつと、目の下に隈が出来てるじゃない。」

やりすぎよ……………」

「け、けど成果がなにもなくて」

「ワガママ言わないの、布団は準備したから寝なさい」

画面に一日中張り付く我が子を叱る。なんとか話を逸らそうとす

幕之内だったが、母親が心配する顔を見てあえなく折れた。
軽く食事を済ませ布団に入る。すると目蓋が重くなり、驚くほど直ぐに眠りへとついた。

—
—
—

ずっと鷹村さんの試合を観ていたからだろう。
夢を見ていると自覚したとき。

“これが出来たら、ボクシングを教えてやるよ”

早朝の河川敷で立つ自分と鷹村を認識した。

『…葉っぱ、10枚…』

ボクシングを始めるため、プロになりたいと鷹村に伝えた日。鷹村が素人には不可能な壁を用意した瞬間から、幕之内の可能性は拓いたのだ。

『も、もしですよ…？いま、出来ちゃったりしたら…？』

『どあほ。いじめられっ子のお前に出来るもんか！』

けど、そうだな。もし出来たら… 会長も喜ぶだろうぜ』

こんな会話はあり得ない。

当時の幕之内が言えるセリフではない。

現に鷹村のセリフは後半聞き取れなかった。

だが、幕之内は喜んだ。鴨川の名前を出す鷹村が曇りのない笑みを浮かべていたから。…だから、この夢に身を委ねてみようと思っ

た。
木を揺らして、落ちてきた世界を——。

『で、出来た、出来ました鷹村さん！』

嬉しくて顔を上げる。

幕之内の両手に溢れるほど掴まれた葉っぱを見て、鷹村はゆっくりと目を瞑り。

』

感嘆の言葉を呟いて、感慨深く幕之内の手のひらを見つめる。鷹村からの信じられない称賛を言われた気がしたが、いまの鷹村と乖離しているのかなにも聞こえない。なにを言ったか聞こうとぐつと近づいたとき、鷹村の視線に少しの妬みを感じた。

『え、あ——』

夢が終わる。

早すぎる幕引きに逆らうことは出来なかった。

幕之内は夢にも思うまい。

かつての鷹村が言ったことは幕之内へ向けたものではない。

鴨川が自分を拾ったとき、喜びがあったのならコレなのだろう、と。

恩師にしか分からない喜びの共有。

そして、いまの鷹村が向ける嫉妬心への理解だった。

そうして、IFは夢ごと霧散した。



夢を見た。

確信したのに内容はうろ覚えだ。

ボヤけた内容を忘れないために必死に感想を探して。

「…いまの鷹村さん、寂しそう」

ぼそり、出てきた言葉。

心があれば、日を経れば変わるものもある。思想、夢、目標、そして人間関係。鷹村の人間関係は出会った頃と比べ、ずっと広く深いものになっている。そのはずなのに、いまの鷹村を見て、ふと“寂しそう”と思った。

「どこかに行つちやうんですか」

あり得ない話じゃない。

事実、鷹村との心の距離はぐんと離れている。

「そうだ、木村さんは大丈夫かな」

とにかく動こうと思ったとき、木村の様子が気になっていた。

凄く嫌な胸騒ぎがして、昼食を急いで掻き込んで家を飛び出した。

ダダッと走って数十分。

木村の家に着くと、顔に湿布を貼った青木が出てきた。

「青木さんも木村さんの様子が……って、その顔どうしたんですか!?!」
「おお幕之内か。鷹村に文句言いにジム行って、殴りかかったらこのザマよ。まったく情けねえなあ」

頬を搔きながら言うが、内容はとんでもないことだ。

青木はそれよりも、と言って続ける。

「あの人、なにか隠し事してるよ。それを言わず、木村に当たり散らしたんだ。ひとりで抱え込みやがって、くそ……腹が立つ」

「そ、そのことなんですけど……」

青木は鷹村の異変に気づいていた。

内容は分からず、話もしてくれないまま爆発した鷹村に。そして、止めることも出来なかった自分自身に怒りを抱いていた。

解決の糸口になればと思いい、直道から聞いた話を青木に伝えた。

「ゲロ道のやつ最後まで格好良いじゃねえか。そうか、本当にあのゲロ道は成長したんだな」

聞き終えると、嬉しそうに笑う。

「山田くん、ジムのことを心配してくれました」

「ああ、手に取るように思い浮かぶよ。ここまですてもらっちゃ、ずっと鷹村さんを見てた俺らがうかうかしてられねえ」

ぱつと暗い顔を吹き飛ばし、青木は木村の家から出てきた経緯を語った。

「結局、昨日は木村のやつ顔を見せなくてよ。今日も来てみりゃ、どこかに出かけたってさ。俺は木村を探す。幕之内は休養の片手間、鷹村さんの異変を探ってくれ」

そうしてこの場は解散し、幕之内は家に帰った。

夕方、青木から電話がきた。

今日、疾景が両国国技館で試合するとのこと、もしかしたら木村が行くかもしれないとのことだった。疾景のことは知らない幕之内

だったが、急いで合流して手分けして探すことになった。

試合はジュニア・フェザー級8回戦まで進んでいた。

木村さんの目当ての試合はもう終わってしまっている。だけど会場の何処かでまだ観ている可能性もあるから、急がなくちゃ…。

「やあ、幕之内くん。久しぶりだね」

「速水さん!?!」

声を掛けられて振り向くと、そこには速水さんが立っていた。顔には湿布を貼っているのに、表情は穏やかで…：…なんだか懐かしい気分になる。

「ここら、試合中は静かにね。ん、今日は君と当たりそうな選手は居なかったけど、誰か知り合いがいるの?」

「すみません…：えっと、僕というよりは木村さん…：先輩を探してて」

「木村さんか、俺は観てないね」

首を横に振りながら答える。

木村さんを探したい気持ちもあるけれど、速水さんのことも…。

思い出したのは、8連敗中という現実。これか気になって、話を切ることは出来なかった。

「ところで、速水さんはどうしてここに?」

「ああ、ジュニア・フェザー級の試合を観に来たのさ。」

「いずれ、俺が戦う相手になるからね」

「そ、そうだったんですね…：…ええっと」

聞きたかった。

どうして負けが続いているのか。けど、自分から聞くのは失礼だと言葉に出来ずにいると。

「君の後輩、板垣くんの試合を観に来てたなら知っているだろう? 日

本ジユニア・フェザー級王者、みずち 蛟 剣哉けんやを」

試合を眺めながら、速水さんが聞いてきた。

勿論知っている。フェザー級タイトルのセミファイナルだったから観た。あのとき、剣哉選手のファイトスタイルが強く印象に残っている。

「俳優と兼業の彼はね、とあるボクサーに憧れてボクシング界に飛び込んだのさ」

「もしかして、その人って…」

「速水 龍一。俺に憧れてボクシングを始めた、だって。俺のボクシングが王者を生み出したんだぜ、嬉しい話じゃないか」

そう言う横顔は寂しそうで…。

促されるまま、速水さんから背くようにリングに視線を移す。

「やっぱり、あれはショットガンだったんですね」

「ああ、すごい精度だったろ。」

……本当に、すごいんだ。流石は俳優だ」

そう、印象に残った理由は簡単だ。

自分が知る速水 龍一のスタイルと重なったから。ショットガンという必殺技さえもが。

速水さんはもしかして、彼が王者になって満足しているのだろうか。剣哉さんを褒める横顔が辛そうで…。

「……ふ、ふふっ。幕之内くん、気を落とすすぎだって！言ったじゃないか、俺は嬉しいって。それは本心だよ」

「あ、あれ？その、剣哉さんも凄いし、速水さんてつきり落ち込んでるのかなって……」

「剣哉さん」もか、俺も褒めてくれるあたり優しいな。本当に、リングで対峙した男とは別人に見えるな」

「えっ…」

「気迫とかの話じゃない。あの日のきみからは、なにがなんでも勝つという意志を感じた。だから今の逃げ腰を見て、なにか悩みがあるって思ってたね」

軽快に笑って見せた速水さん。

気遣いを返されていることに気づかず、悩みがあることを見抜かれて驚いてしまう。

「その、ですね…」

隠す必要は無かった。

僕たちの問題だけれど、僕たちのなかで解決できなかつたからここまで悪化した。なら、山田くんのような視点を持つてくれる人の意見は有り難い。

そう考えてから鷹村さんのことを話し終えたとき。

「無敗という誇りがある日、刃となつて自分に突き刺さる。この怖さを味わつたことがないか？」

俯いた速水さんが両手を見ながら問いかけた。

直ぐに反応出来ずにいると。

「例えばその刃が形を変えて、敗北以上の斬れ味になったら。幕之内くんは笑つて過ごせるかい？」

「……いいえ、凄く辛いです」

敗北の傷は自分自身タイムリーな話である。

ゴンザレスさんに負けたが、それ以上に印象深いのは伊達さんに負けたあとのことだ。

久美さんが気晴らしにと遊園地に誘つてくれた。とても嬉しかったのに、負けた事実を忘れることは出来なかつた。肉体へのダメージを凌ぐ、精神の栄養失調。

鷹村さんのタオル投入疑惑が脳裏に過ぎる。

負けたことがないからと、青木さんたちが負けた気持ちを小馬鹿にしていた。

会長が負けを認めたから鷹村さんは荒れている…？なんか違う。

「俺もだよ。だって、敗北は自分だけじゃなく、誰かの期待に応えられないってことなんだ。誇り高いほど自分に返ってくる」

「……あっ」

そうだ、見落としていた。

負けたことに対してばかり目を向けていた。

“喜んでほしかった”、“勝ちたかった”。

自分ですらこう思ったのだ。鷹村さんにだって、もつと強く、もつと多くの想いがあってもおかしくない。

きつと、負けたこと以上に悔しいことがあったんだ。

それこそ、ジムから木村さんたちを追い出してまで果たしたいこと。

会長への――。

「さて、負け続けても諦めない男の話は終わりだ」

「っ…」

この人は、本当にすごい。

僕が気づいたことを理解したんだ。そして。

(自分のことを話さないっていう強い決意が見える。)

…信じよう、きつと僕の力は必要ないんだと)

引き止めることを望まない瞳が、暖かく見つめていた。

「頑張れ、幕之内 一步。この速水 龍一を倒した男として、世界に駆け上がる日を待ち望んでいるよ」

「あ、ありがとうございます!」

結局、速水さんの連敗に触れることは出来なかった。

踵を返した速水は、最後に。

「ほら、さつきから興味深そうに聞いている東洋チャンプさん。俺はもう帰りますから、あとはご自由に」

「み、宮田くん!」

「…」

宮田にとっては余計なお世話を。

自分にとっては盗み聞きされたお返しをして会場を去っていった。

○のボクシング

幕之内が木村を探しに来たとき、宮田 一郎は柳桐 疾景の試合を目的に両国国技館を訪れていた。

「全日本新人王を獲って2ヶ月。なかなか早いが、さて」

超大型新人に挑戦状を叩きつけたジュニア・ライト級5位の選手。最強の新人王に勝てば箔が付くと思っただろう。疲労が抜け、練習もままならないうちに潰そうとする魂胆が見え見えだった。そこを疾景は試合を快諾したという。結果、5位のボクサーは2ラウンドの間、一方的に殴られて敗北した。

1つ上の階級、いま時点で日本のベルトを楽々取れる逸材だ。自身が階級を上げたときの参考として観に来た……そう言える資格は、少なくとも自身にはないと思っっている。

ゆえに、帰路につく直前で幕之内を見つけたとき。

「宮田くんも来てたんだ！誰の試合を観に来たの？」

「気まぐれだ。今日はジムも休みだからな」

その問いには嘘の答えを用意するしかなかった。

怖いのだ、怖くて仕方がない。

自分勝手な理由で試合を破談し、挙げ句の果てに階級を上げない。未練がましくフェザー級に居座る自分に、理由を聞かれるのが。

「悩んでるのは、鷹村さんのことか」

「うん、そうなんだ。タオル投入疑惑の記事が出てから、鷹村さんの様子がおかしくなったんだ」

だから宮田は話題を逸らす。

自分ではなく幕之内に。

己の小心ぶりに嫌気を感じながら、せめて力になればと。欺瞞にしかならない罪滅ぼしを吐き出す。

「あの記事だけなら、鷹村さんは鴨川会長と大喧嘩して終わっていたよ。人一倍……百倍は負けず嫌いな人だが、負けを認めないほど器は小さくない。」

「なにより、実際には負けていない」

「うん、負けても鷹村さんは鷹村さんだよ。きつと、別のところで躓いちゃったんだ。おおよそ検討はついたけど、鷹村さんにどう言えればいいか……」

先ほどの会話で解決の糸口は見つけたようだった。しかし手段までは分からないと頭を抱える。

ボクシングでは勇敢なのに、日常では弱気なところが多く。今回も悪いところが出てしまっていた。宮田は呆れた口調で助言した。

「真正面から言ってやればいい。僕はついていく、と」

「き、聞いてくれるかな……相手は鷹村さんだよ？」

「聞かないなら胸ぐらでも掴め。」

あの人に言い聞かせたいなら、その覚悟はしとけ」

自分を殴るように言った。

宮田の後押しは幕之内に勇気を与える。

鷹村のジム入会当初から知る人物の分析。それも敬愛と言っても差し支えない宮田からの言葉だからこそ、心強いと思えた。

「うん、ありがとう！」

間を置いて、幕之内が元気に返事をした。

(あとは、どうにかしてくれるだろう)

幕之内は感謝しているが、宮田は自己満足でしかないと嗤う。こんなことを言っても罪滅ぼしにもならない。自分が行く道が分からない。

羽はあるはずなのに、ちつとも動かないまま。宮田は立ち止まった理由を聞いて帰ろうとする。

「次は……再起の予定は決まったか？」

「ううん、まだ。半年経ったけど、会長からはまだ休めって言われてるんだ。それだけ激しい試合だったし、それに……僕のデンプシー・ロールじゃこの先で通じるか分からないから」

「……なんだと」

離れる足を地面に落としていた。

あははと笑いながら、自嘲気味に自分の評価をこぼす。これが大きい

な間違いだと分からない本人へ、ふつりと沸く感情。宮田はその感情の温度をコントロールしようとして深呼吸して、しかし無理だと悟ったときには口が開いていた。

「デンプシー・ロールを破るのは課題だ。けど、目的はそこじゃない」「えっと、宮田くん…？」

「それだけで良いなら、お前は沢村戦で負けている。だが、沢村は試合には勝てなかった」

脳内を、自分の想いを言語化するなど罪悪感が滅多刺しにしていく。

「それはな、ボクシングが好きなお前が強いからだ」

「うん………反則を使われたら誰だって怒るよ」

ここまでならまだ許せる。

今際の際まで侵入を許したのは、まだ自分を許せると思ったから。

少しでも感情に譲歩したこの時点で、既に破談の罪に耐えきれないとも気づかずに。

誰だって、と言い放ったボクサーは理解していない。宮田が内側をズタズタにしながら伝えた言葉に、

「俺が倒したいのは幕之内 一歩だ」

これ以上の想いが無いことを乗せて伝えた。

告白のように甘い緊張感があれば良かった。

競争心を剥き出しに伝えられたら奮った。

言葉を伝えた瞬間、宮田は猛るものを押し潰す罪悪感で視線を落としていた。無意識だった、我ながら馬鹿なことを言っている自覚があったから。

（俺が…だと。それこそ、どの口が言う。自分で試合を断っておきながら、俺が言えることじゃないだろ…）

吐き気がする。

これ以上の迷惑を掛けられない。

吐き気が戻る。

もう土下座なんて通じない。

吐き気が……。

鷹村以上の我がままっぷりに唾うしかない。

「本当、だね。僕、やっぱりボクシングが下手だ」

幕之内の言葉を聞く前に立ち去ろうと歩きだして。

「だから、また1から始めようと思う。」

宮田くん、僕どうすれば良いか決めたよ！」

自分とはあまりにも対照的な感情で名前を呼ばれ、つい振り返ってしまった。

「待っててね」

」

笑顔で手を振る幕之内。

喜びとか、楽しさが生み出す表情ではなく。

これから先の人生に臨む決意に満ちていて。

あまりにも壮大な返答が、宮田にとっては希望の兆しに見えていた。



宮田と別れて、青木と合流した幕之内。

いまからやる事を話すと、青木は強く頷いた。

直ぐに準備すると言って走り去ると、幕之内は近くの公衆電話の受

話器を手取る。

相手は2人。

1人目へは直ぐ繋がり、そして要件を伝えた。

問題は2人目。

大丈夫、と何度も自分に言い聞かせる。

直道に後押しされた。

速水に励まされた。

そして。

『俺が倒したいのは幕之内 一歩だ』

宮田が宣言してくれた。

誰でもない、幕之内のボクシングを倒したいと。

デンプシー・ロールなんか目じゃないと言われて、不思議と嬉しくなったのだ。負けたくない……戦うだけじゃ物足りない、既に試合が決まったことのように心が熱くなった。

だから、はじまりの場所に行つて、1からやり直そうと思った。

ここまでできて、失敗は許されない。

大丈夫、いまならやれると気合いを入れ直す。

「よし、やるしかない」

右手には受話器。

電話をかけた先で、相手が不機嫌を隠さずに返事をした。名前を告げ、挨拶を終えると。

「鷹村さん、決闘を申し込めます」

なりふり構ってられない決意表明を告げた。

逸脱していく影法師

幕之内が決闘を申し込んだ日の明朝。

鷹村は独り、イメージトレーニングに入り浸っていた。

暗がりのなかで響く、右頬が強打される音。

朧げに見えるリチャード・バイソンが左フルスイングを放ち、勝利を目前にして俺は無様に被弾した。

「違う…」

否定は叶わない。事実だ、この目で第三者として観た。

口で言うことは願望に他ならない。

だからイメージのなかで矯正しようというのに、どうしても最後の最後に被弾する。もつと早くに仕留めようとして、結局破れかぶれの一撃で後退、形勢逆転されてしまう。

「待て……投げるんじゃ……」

そして、タオルがジジイの手から放たれた。

今度は誰も取らない、俺のイメージがキャンセルを許さない。

何度目だろう、これを繰り返したのは。そして、どうしてもタオル投入が止められない。もう負けのイメージが脳裏にこびり付いてしまった。バイソンとの試合はここで終わり。

「ぐ、あ……い…」

気づけば右拳を振り抜いていた。

荒れた呼吸を聞いて、顎から垂れるほどに汗を流していたことに気づく。部屋に明かりは無く、時計の針は0時を回っていた。

イメージに侵略される。

シャドウを止めればタオル投入の現実がのしかかる。

勝てば終わるはずの苦痛が手を掴む。終わりはないとタオルを投げ続ける。……馬鹿か俺は、勝つただろうが。この手で串刺しにしたじゃねえか。…違う、そんな話じゃない。タオルを投げられる前に勝てば良い。イメージなら出来るはずのことが出来ない。

「くそが」

汗を流すために立ち上がる。

どうせ深い眠りには潜れない。ここ数日、寝るたびにタオル投入の夢を見て目を覚ます。

汗を流して再び横になる。次こそは馬鹿げた事実を終わらせるために。：敗北という苦痛から解放されるために。

目を閉じて、バイソンと試合をして、やがて眠り、タオル投入を見て起きる。最悪の目覚めと眠りを繰り返して朝を迎えた。

今日もランニングが始まる／終わりはまだ見えない。



鷹村が汗を流しながらジムの扉を開けた。

ジムには鴨川が立っており、早々に現れた教え子を見て渋い表情をする。

「お主、酷い顔色じゃぞ。寝ておらんのか」

「いいや、寝たさ。むしろ快眠だった」

ひと目で嘘だと分かるセリフ。

練習を休めと言っても聞く耳を持たない。

適当なセリフを吐きながらバンテージを巻く鷹村に、木村が引退したことを告げる。腕が止まったのも一瞬で、直ぐにグローブを手に取った。

「ワケを話さんと解決せんぞ」

「ンなものはない。結論なら木村が出したはずだ。

だからよ、そろそろ休ませてやれ」

吐き捨てる。優しいフリをして吐き捨てた。

「鷹村・それがここまで付いてきたヤツに言うセリフか!? 貴様が突き落としたら終わるじゃろうが!」

せめてもの情けを最大限に与えた。

もう必要ないからと、鷹村は鴨川の説教を聞くだけに留まる。

鴨川は何度も会話を試みるが、鷹村が反応を示すのは練習メニューだけだった。

ぐちぐち、ねちねち、がやがや。

「うるさい」

「そんな寂しそうにふぎけたこと抜かしてんじゃねーぞ」

「あ……？」

青木の静かな怒声によつて、鷹村の集中力は切れていた。

通りの日差しが強い。かれこれ2時間は練習していたことになる。

「自分から逃げたやつに言うことはねえ」

「あいつの顔、なんにも晴れてなかった。ここまで来て、好きなもん捨てようとしてる。諦めさせるんなら、後悔だけ抱かせて行かせるんじゃないねえ！」

浅いと言うには底が見えない。

深いと言うには足が着いている。

浅瀬にしては足取りは重く。

深淵にしては時の流れが早い。

ともに歩んだ人生は充実していたはずだが。

「それだけか」

吐き捨てる瞬間、歯止めとして作用しなかった。

青木の怒りが振りきれられるには十分なセリフだ。

「その腐った顔に一発入れてやる！」

怒りそのままに殴りかかる青木。

「邪魔だ、失せやがれ」

単調な拳は鷹村に難なくカウンターを合わせられる。

サンドバッグが揺れるほどの音が響き、どかっとならに吹き飛ばす青木。殴った右拳を見てなにも思わないように努める。もう必要ないからと、サンドバッグに向き直ったとき。

「木村が戻るまで、絶対に許さねえぞ鷹村」

よろめきながら立ち上がる青木。

明らかに効いているが休むことなく、歯を食いしばりながらジムを去っていく。

「もう来なくていいよ、お前も」

独り、サンドバッグをへし折りながら呟いた。

ふと、視線を横に向けたとき。

閑散としたジムを見て、哀しげに目を瞑る鴨川を見た。

(誰もここに居ない。足を引っ張るやつらは追い出した。おかげで広々とジムを使える。だから…)

考えてたまるか。

間違っていたなんて。

色んなバカがいるから、ここまで来れたなど。

まるで、俺があと少しで終わるかのような。

(そんな顔、すんなよ)

手遅れなことから目を逸らし、無能な自分を捻じ伏せるためにサンドバッグを殴り飛ばす。



ジムから帰宅し、そのまま買ってきた飯を食べる。

試合も迫ってきて減量を始めたばかりだ、あれしきの練習では足りない。物足りなくなってしまう。勝ちたい、それだけが鷹村をイメージトレーニングへと誘う。

タオルを投げる鴨川を納得させるような試合を。

誰にも文句を言わせない完璧な試合を。

ダメージも残らず、故障のない身体で。

それだけを求めて、今日も可能性を突き詰めていく。

「くそ、くそ……俺は……」

負けないはずなのに。

負けていないのに、どうしても勝てない。

イメージが裏切る。自分の身体のくせして、負けてしまえと鷹村を

嘲笑う。

敗北が下克上を仕掛けている。最強の鷹村に向けて、谷底へ落ちろと舌を出している。そこに落ちれば…認めてしまえば戻れない。これ以上、天上から遠退けば間に合わないかもしれない。1度付いたケチは一生落ちない汚れになる。

自分自身すら思い通りにいかなくて、怒りをぶつける先を探していたとき、それが来た。

『鷹村さん、決闘を申し込みます』

幕之内が言った。

決闘を申し込む、と。

「…テメエ」

『場所は河川敷。今から、人外の境界線のところで待ってます』

その意味が分からない相手じゃない。

鷹村 守に喧嘩を売ったのだ。

誰でもない、鷹村がいま1番会いたくない相手が、怒りの捌け口になる口実を持ってきた。

「今日で終わりだ、一步」

断る理由はどこにもない。

幕之内の身体を気遣う必要がいまから無くなるのだから。

—
—
—

前へ進むことを考えて生きた。

前へ進む途中、沢山のモノを手にしていた。

どれも勝手に付いてきた。別に頼んだわけじゃない。なのに、いつしか大切なモノになっていた。

その筈だった。

『どいつもどいつも…俺サマの邪魔ばっかしやがって。』

ちんたら歩いて、先に行くヤツの重荷になってんじゃねえよ。勝て

ないんなら退け、さっさとここから降りろ!』

自分の手で1度は握り締めたモノたちを、鷹村は罪悪感のカケラも浮かばずにそう吐き捨てていた。

自分の負けだけは特別だから。恩を与え続けるために、己の精神を孤高であれとした。

だが、孤高と呼ぶにはこの世界は雑味が多すぎる。

鷹村 守は孤高には成れない。

己の強さに固執し、輪を疎かにしていく男はいつしか絆に埃を被せる。

小さな島国、絶大な信頼を置き去りにした鷹は遙か上空で鳴く。誰にも届かない声、己も騙せない怒りはまさに、孤立を意味していた。

「舐めたこと吐かすから来てみれば。

青木に板垣までいるとは、3対1で殴りかかるつもりか、一步」

幕之内の人生の岐路、はじまりの木。

そこから河に向けて一直線に引かれた線、人外の境界線を挟むように置かれた机。

人の側には幕之内が立つ。

間には青木と板垣が、まるで立会人のごとく静かに2人を見守っていた。

3人の視線が伝える。人外の側に鷹村を呼んでいた。

「鷹村さん、腕相撲をしましょう」

「……………正気か」

机に肘を置いて、1度握り込む。

訣別の手段を幕之内が提示した。

2つの右拳

「鷹村さん、腕相撲をしましょう」

「……………正気か」

河が凪ぎもしない晴夜^{せいや}。

虫すら息を潜める不穏な舞台で、魔王も凌駕する殺意が土を踏みしめた。

「ええ、先輩は正気も正気。」

鷹村さんを本気で腕相撲で倒すつもりですよ」

「鷹村が本格的に減量する前じゃなきや意味がないとき。まさか、ここまで来て逃げるつもりじゃないだろ」

この場における鷹村の本気度は、はつきり言って異常である。果たし状を突きつけられたことを加味しても、後輩に向ける感情としては人間失格。

青木と板垣は、鷹村の向けてはならない視線に冷や汗を流していた。それでも平静を取り繕い、この場から立ち去らないのは幕之内と同じ想いがあるからだ。

「……………あの時とは逆だな。今回は3人じゃなくていいのか」

鷹村が思い出したのは、久美への告白を賭けた腕相撲3人抜き。幕之内が日本タイトル初防衛戦の前に起きた騒動だ。

「僕が申し込んだ決闘です。タイマンじゃなきや意味がありませんから」

「舐められたもんだ。負けてもいい、とか思ってるのか？

あの時は告白を賭けたな、今回もなにか——」

当然のように、確かに過ごしてきた過去を壊すような条件を提示しようとして。

「僕が勝った」ときは…あの日、流してしまった久美さんとの話にケリを着けます」

「——どういうつもりだ」

鷹村だけではない。青木や板垣さえも驚きに目を見開いて幕之内

を見る。2人も聞いていなかった賭けは、決して鷹村の迷いや手加減を誘発するものではない。

「ここ最近うじうじしてて、いまの鷹村さんには腹が立ちます。そんなに負けるのが怖いですか。そんなので、会長が見限るなんて思ってるんですか？」

幕之内が返事としたものは、理由ではなく鷹村の心情を揺するもの。自分は本気で勝ちに行くと言った。

遠回しに、さっさとかかってこいと挑発したのだ。

「……黙れ」

鷹村の殺意を高めるには必要以上であり、事実、鷹村が机に肘を置いた音で板垣が震撼するほど。

「2人とも、力を抜け。手を離したら開始だ」

青木が2人の右拳に手を置く。

込められる熱量に思わず生唾を飲んだ。

2人に声が届く手段は無くなった。集中の終わりはただ一点、相手の全力全霊を解き伏せたときのみ。

鷹村が向ける、人間失格にまで落ちた心を。

「アナタを連れ戻しますー」

幕之内が向ける、分かったようなツラを。

「……腕、へし折ってやる」

2人の勇気／殺意が交差した。

青木の手が、離れた瞬間。

両者の右拳が力比べで意識ごと絶ちに行った。

「……ッ」

幕之内の両足が地面を抉りながら踏み止まる。

「……グ」

鷹村が歯を剥き出しにして殺意を右腕に込める。

鈍い音を散らして、幕之内と鷹村の渾身が凌ぎを削る。

(づ、ウ……………強い！)

重低音は幕之内の内部から漏れ出ていた。

まだ痛みはない。だが、この音は鳴ってはいけないものだ。1分と

保たずに右腕が折れる。

(それが、どうした。)

腕が折れても僕は負けられない……！)

上下の歯を擦り合わせる。

知らずに口の内側から血が垂れる。無意識に口内の肉を噛み、居場所を失う恐怖に立ち向かう。

流れる血はあつてはならない、故に流した血だけでことを諫めるのだ。

神経の緊張が限度に到達した、なら千切れても構わない。力を緩めるよりマシだ、その痛みで一瞬先に飛び出してしまえばいい。

(だって……)

負けたら、鷹村を止める口実が底を突く。

負けたら、鴨川ジムに笑顔を取り戻せない。

…違う。

それは理由の1つにはなる。

本当はもつと単純な想いでここに居る。

(だって、前を向いてほしいんだ)

悩んでいることは分かる。

今の僕たちを見ていないことは態度で知っている。

じゃあどうする。なにが出来る。

悩んで、思い至った言葉。

(鷹村さん、僕たちを見てください！)

鷹村 守の意識をここに立たせる。

心がどこかで迷ってしまっているなら、彼の人生最大級の衝撃で居場所を教えるんだ。

決めた言葉を届けて、決着のときを目逃さないため。

幕之内は最後の力を振り絞り、鷹村の瞳に向かって腹の底から声を上げた。



最初の1秒で勝負を決する。

さつさと帰って飯を食って、こんな不快な気分を忘れてしまおう。真っ向からの反抗に対する苛立ちとほんの少しの慢心。

あと、カケラ程度のザワつきが胸のうちに出来ていた。

(ヂツ……見込みが甘かった……)

鷹村の多くの腐った感情は、最初の1秒で全て蹴散らされていた。以前、腕相撲をしたことがあるのを忘れていたわけではない。ギリギリの勝負だった。

あのときは世界王者にもなっていない。だがいまは？地獄の減量も、世界最強だった男との対峙も乗り越えた。2階級制覇も成し遂げた。

そう、違うのだ。経験も実力も桁違いに積んだ。

(俺サマが、力比べで負けるはずが……)

目の前の男とはなにもかも違う。

こいつは国内ランカーに苦戦し、世界前哨戦で負けて、あまつさえパンチドランカー疑惑を掛けられている。

そんな奴に拮抗している？世界最強の俺が？

まるで俺すら壊れかけと同じようじゃないか。

「んなわけ、ないだろうがッ!!？」

否定を言葉にすると腹の底が震える。

交差した視線に釘付けになる。

「

おんぼろの男は眼差しだけで声を上げる。

言葉のない拳で鷹村の頬を殴った。

そう錯覚させるほど、幕之内の心は愚直に歩んでくる。

来るな、折って蹴散らしてくれると右拳を睨んだ一瞬、幕之内の右拳に手が重なるのが見えた。

引退した男の不器用な右拳。擦り傷だらけの身体に想いを託し、鷹村の右腕を外側へ傾けていく。

「っ、~~~~て、め！」

心が凍てつく。

世界王者を目指して精進する、ジジイたちとの記憶。

あの頃が1番輝いていた。空を見上げれば何もかもが遠く、高く、下を見下ろせば絶景が広がっていて。落ち込むときだって諦めなんか微塵もなかったバカ共を見て、また前に進もうと。俺が引っ張っていこうと固く心に決めていた。

やがて心は冷めていき、この想いが身体に溶けることがなくなっていくた。

過去の栄光に目が眩んだ。

あまりにも眩しすぎて、見えなくなっていた。

あのとき、後ろを振り返ると直ぐそこに仲間がいた。

あの強い過去に、まだ浸っていたいと。

「あ、あ……」

無敗で、最強の男が正面から敗れた。

一気に醒める。半ば遠くを見ていた意識が、酷く雑な衝撃で引き起こされる。

ジジイが欲しがってるもの持つてるヤツに負けた………これで、俺も終わり……。

「負けたくらいで終わるものなんですか」

「………なんだと」

それすらも許さないと、幕之内は意識を引き留める。

「会長は1度躓いたくらいで見捨てません」

「お前になにが分かる。この調子で試合すりや、6階級制覇する頃にジジイが健康な保証はどこにもない」

「あります！鷹村さんが立ち上がるから、どこまでも背中を押ししてくれます。だって、鷹村さんは最強の教え子じゃないですか」

鷹村の言う保証を提示することは出来ない。

誰にも示せないものを幕之内は言つてのける。鷹村の行動こそが証明になれると。捻れたら巻き添えを喰らうのは誰でもない、恩師である鴨川だ。

「僕たち、鷹村さんの背中を追いかけていたいんです。だから前を見続けてください」

「なに悩んでるか知らんが、いつもみたいに恩着せがましくやってくれよ。……俺たちも、ちよつと遠いけどアンタのことは見失っちゃいない。必ず追いついてみせるぜ」

板垣、青木も鷹村が後ろを向いたまままで勝てると思っていない。しかし、彼の間違いに気づいても声を届けられなかった。誰であろう自分の不甲斐なさを最後にしたいと、この場で見届けに来た。

自分の才能に驕り、そして敗れたことを。

日々を浪費し、ベテランの名に縋ったことを。

結果は、弟弟子が全て果たしてくれた。

「これを観てください。」

皆んな、鷹村さんが走り出すのを待ってます」

机から取り出した1つのビデオ。

内容を聞くことも忘れて、懐かしい視線に浸ってしまう。

「……」

立ち去る3人の背中を見送る。

青木は感極まって幕之内の頭を撫でくり回し、板垣は興奮冷めぬと拳を所構わず振り回す。

そこに足りない2つの影を幻視して。

「……………たく」

ぐでんと地面に寝転がり、四肢を投げ出した。

「子弟の強さはオレが一番知ってるはずじゃねえか。」

そりゃ、負けもするか」

下手くそな励ました。

不器用な言葉ばかりだ。

あんなに力強く言われては認めるしかない。

鷹村 守は負けても最強であり続けられると。

「一步、直道。てめーらの勝ちだ」

大声で、誰にも聞こえないように。

勝者を讃え、敗北を胸に刻み込んだ。

吹っ切れた表情は語る。今夜は良く眠れそうだ。

鴨川軍団、再始動

鴨川ボクシングジムの屋上でひとり、鴨川は晴れ渡る空を見上げながら深呼吸をした。吐いた息には緊張感が混ざり、その原因である幕之内たちとの昨晚の会話を思い出していた。

『こんな夜遅くになにをしとる!?!』

『す、すみません!えっと、机を貸してほしくって』

青木、板垣と来た幕之内の話を聞いてみれば、鷹村との会話に必要なものと言うではないか。鴨川は、ただの話し合いじゃないとすぐに分かった。どうするべきか逡巡したのち、幕之内の瞳を見て信じることにした。

『無茶はするなよ。五体満足ならそれで良いんじゃない』

『はい!しっかりと伝えてきます!』

そうして、荷車に机を乗せていった。

あれから連絡はない。どう転んだのか知れない時間がもどかしく、こうして誰か来ないかと屋上で待っていたのだ。今朝からジムに来て、ずっとウロウロしているが一向に現れない。待ち遠しいが、これ以上は仕方ないと立ち止まる。

「上手くやれたじゃろうか…」

「なに黄昏てんだ、そんな歳じゃねえだろ」

ため息混じりに呟いた瞬間、鷹村が呆れ声で話しかけてきた。口から心臓が飛び出た鴨川は、動揺を飲み込んで振り向く。

「ワシをショック死させる気か!?!」

「テメエの心臓がンなことでは止まるかよ!」

「き、貴様いつ来おった?空から飛んできたわけじゃあるまいな」

「昨日からだよ。ちよいと用事が済んで、そんなまシャワー浴びてビデオ観てたら身体動かしたくなってな。地下で軽くシャドウして、リングの上で寝た」

「あ、呆れたやつじゃ…体調管理もクソもない!」

照れ隠しから本気で怒り始めた鴨川をなだめ、鷹村は要件を伝える。

「……ま、ここじゃなんだ。締まりがねえからよ、事務所に行こうぜ」
背中で伝える雰囲気、騒動の終幕を語っていた。

小さく頷いて、珍しく神妙な鷹村の後ろをついていく。

事務所に入り、鴨川が椅子に腰掛けてから鷹村が口にしたこと。

「会長、WBAのベルトを返上してくれ」

ニカツと笑いながら言われて、思わず安堵しそうになる意識を引き締めて。

「理由を聞こう」

この日、人知れず。

「認める、あんたのボクサーでも負けるときがある。

オレだって完璧な人間じゃなかった。以上！」

鴨川は1つの敗北を胸に刻んだ。

誰であろう鷹村の宣言である。彼が認めたのなら鴨川に異論はない。

憑物が剥がれた顔に言えることといえは。

「まだ遅くはない。防衛戦と突き放した後輩の面倒、同時進行じゃ」

「おう、朝飯前だ！」

鷹村の背を押すこと。

そしてこの時、鴨川もまた、考えを改める刻が来たのだと思った。

「そうそう、ミドル級じゃがな。次で最後の防衛戦となる。階級を上

げて直ぐにタイトルマッチが待つておるから、気を引き締めていけ」

「おっ、やっと来たか。これでまた減量が楽になるな」

「そのめでたい日のセミファイナルじゃが——」

めでたい日の前座として選ぶと決めた名前を聞いて、鷹村は再びニカツと笑うのだった。



これは、鷹村との腕相撲を終えた翌朝の出来事。

宮田 一郎が普段通りのロードワークをこなしているとき、前方で道を塞ぐ人物に出会う。

「おはよう宮田くん！」

「…………昨日の今日だな、幕之内。どうやら、鷹村さんのほうは上手くいったらしいが」

憎みようのない、しかし腹立たしい笑みで手を振る幕之内。

昨日、幕之内が言ったセリフが脳裏を過った。身勝手な自分に宛てられた挑戦状のことを…。あれから淡い期待が心のなかを漂っていて、自然と足を止めていた。

「えっとね、まだ分からないのが正直なところなんだ。だけど、しっかりと目を見て話して、ここから変わるって思ったよ。」

そのお礼をしたくて来たんだ」

「そうか……。良い報告が聞けてよかった」

ひと段落ついた鴨川ジムの騒動を聞いて、宮田自身も安心していた。精神の不安定さは試合に大きく響く。不安要素が解消され、3階級制覇も遠くないと期待した。

幕之内が持ってきた話題は期待したものとは違った。自分から言うことは過ちだと知っているため、つい口を滑らせないうちに立ち去ろうとして。

「あ、待って！もう一つね、話があるんだ……」

「なんだ、さっさとやってくれ」

まだ引き留めようとする幕之内。

ざわり、心の奥底で巻き上がる感情が、ぶっきらぼうに聞き返す。

宮田は直感で悟ったのだ、幕之内が言い出す内容を。それでも、立ち去れと言う反応に従えないのは、やはり身勝手な自分がいるからだ。

「宮田くん、鷹村さんと同じで減量、大変なんだよね」

「——なぜ」

ジムの関係者しか知らないその情報を、綺麗に射抜かれて心臓が跳ねる。顔を見ると、申し訳なさそうに幕之内が見てくる。

驚けばいいのか、謝ればいいのか自分でも分からなくなる。混乱を通り越して、膝が笑いそうになるのを堪えるので精一杯だった。

「最近の試合を観て思ったんだ。ちよつとだけ、苦しそうだなんて。鷹村さんのビデオを観てて同じものを感じたんだ」

「——気のせいだ」

「…違うよ。最近、体重が落ちにくくなったんだよね」

「——っ」

「…待つててくれるん、だよ。僕が、そこに行くのを。勘違いでもいい、だから言うね」

手を伸ばして止めようとしたときには、もう遅かった。

「宮田くん、フェザー級で試合はもうやっちゃダメだ」

言い放たれた意味を直ぐに理解した。

けど、受け入れるわけにはいかない。

「もう一度、いまの言葉を心して言ってみろよ。」

ロードワークの邪魔をしに来た、その訳を…！」

荒げた声。それは、殺意や敵意といった類いのものではない。本人ですら意識せずに出していた、纯粹無垢な疑問でしかなかった。

“待つててね”

そう言ったのに、フェザー級を離れろと言う。なら、やはり試合は出来ないじゃないか。声にならない叫びを眼差しで伝える。

「意味も、言い方も変えない。だから謝りも、撤回もしない。」

宮田くん、もう僕を待たないでください」

「呆れたぜ。怒りを通り越して落胆するばかりだ、幕之内。お前に言われなくてもいずれライト級^えに行く」

暗に減量苦を抱えていることを告白するも、本人は気づくどころかボロボロと仮面が剥がれていた。

「今はその準備をしている。分かったらさっさと帰れ」

「これからのために必要なこと、なんだ…」

「俺にお前の驕りっぷりを見せることが？」

どの口が言うのか。

だがそうでもしなければ、僅かな可能性に賭けてフェザー級に留まってきた理由に押し潰される。

未練がましい姿を見られても実現したいもの。それを、本人に否定されては、もう…。

「驕り…。うん、本当にそうだと思う」

「なにが言いたい」

返事をしながら、見ている場所は遙か昔。

鴨川ボクシングジムの地下、リングで繰り広げたスパarring。自分には手も足も出なかった素人に、宮田は確かに負けた。技術力もへつたくれもない、執念だけで放った一撃。

あれが無ければ、ここまで成長しなかったと確信する出会い。プロの場で会うと約束して、手繰り寄せた縁を断ち切った両手。

(……あの日、俺はただ1度の機会を捨てた。自分で言ったことじゃないか、これは当然の結末なんだ……)

なぜ、練習を続けるのか。

なぜ、ボクシングを続けるのか。

聞くことも辛くなった。

精神の磨耗が限界に達する。

まともに視線を合わせられなくなる。

それでも幕之内の声を聞くのは義務だ。

責任を果たそうと顔を上げて。

「僕は、必ず宮田くんを……。宮田 一郎からK。O勝利する。それが僕の目標で、ボクシングが大好きな理由なんだ。

だから絶対に逃げない、どんな壁も乗り越えてみせる！」

幕之内が宣言したのは、最初の頃と変わらない夢。

「これまでの全部に、もう裏切らない！」

だから宮田くん、後から追いかけるよ！」

幕之内の張る声に、宮田は大きく息を吸い込んで空を見上げる。

「なんだ、やっぱお前……バカ、だな」

宮田 一郎はかつて、この河川敷で土下座をした。

幕之内との試合を流した謝罪をして、この場を立ち去ったというのに。この男は関係ないと踏み込んできた。土下座とは正反対の行動力に、ただ感謝するしかない。

「羽は、もう無くなった……」

踵を翻した。

次は違えない。

命に代えてでも、幕之内とのリングに上がる。

過ちを繰り返さないと誓い、右拳を挙げる。人差し指を天へと向けて、言葉に出来ない感謝を込める。世界へと駆け上がり、舞台を整えるために。

3ヶ月後、宮田 一郎の最後の東洋太平洋フェザー級タイトル防衛戦が決定した。



「達也、青木くんが来てるぞ…」

「いまは、話したくない。帰ってもらってくれ」

木村は自室で父にそう伝えた。

ジムに引退宣言してから数日。毎日訪ねてくる青木には申し訳なさを感じながらも、いま顔を見るわけにはいかない。見てしまえば戻りたくなる。ボクシングに関われば、皆んなの足を引っ張って、また鷹村に追い出されるから。

「……………ああ、だつてのに」

どこか安心すらしていた。

青木から見れば鷹村の行動に怒り心頭になるだろう。

鷹村からすれば木村は邪魔で仕方ないだろう。

けど、この安心がどうしてかは直ぐに思い至った。

間柴とのタイトルマッチ以降、本気で試合が出来なかった。負けたことなんて1度や2度じゃない。違うことはハッキリしていた、負けた相手の強さだ。贅沢にも、心のどこかで幕之内や鷹村のような死闘を望んでいたんだと気づいた。

木村 達也から木村 タツヤとして復帰したとき。

死闘だけを望む都合の良いボクサーが出来上がった。

……なら、柳洞 疾景がいるじゃないか。

自分で自分に問いかける。なんて答えるかと自分で考えて、「減量したくない」などと吐かした。

もう木村 タツヤには死闘すら望まない。

その自覚だけで引退するには十分だった。

ボクサーとして失格と気付いて、ただ無気力に日々を過ごした。
ある日を境に、今度は鷹村が家に訪ねてきた。

全て無視。部屋の前に来ようものなら窓から逃げ出した。帰ると
鍵が壊されていた。修理するのは勿論自分だ。

そんな日を3ヶ月は過ごした頃。

家に帰ると1本のDVDが机の上に置いてあった。

「んだよ、これ。気色悪いな…」

鷹村の行動に首を傾げながらも、不思議と手がDVDをセットして
いた。そして、身構えながら再生ボタンを押して――。

「ッ!？」

流れた映像は途中からだった。

顔面が腫れながら、ひたすらボディ攻撃に徹する自分。接近を嫌
い、ガードを下げて狼狽る間柴。汗が飛び散り、血が口元を流れなが
ら果敢に攻め続ける背中。

勝利への執着、ベルトへの貪欲な姿勢。自分から暫く見ない、強敵
への畏怖と吹っ切れ具合。

「誰だ、お前…」

馬鹿なセリフを呟く。

解説が言っているじゃないか、木村 達也と。

…自分だと再認識して、吸い込まれるように映像にかじりつく。

気づけば、2時間。同じ試合、同じシーンを何度も。自分が間柴に
ボロボロにされる姿を見続けていた。このあと、負けた木村 達也は
引退した。河川敷の土手で、夕日を眺めながら…。

「お前、そんな顔してたんだな…」

無意識のうちに拳を握っていた。

達也からタツヤに改名して、達也を裏切って…。

俺は、達也に恥を塗りたくるために復帰したっていいのか？

「…違う！」

窓の外は朱くなっており、何時間も映像を観ていたんだと知る。なら、急がないと。自分の過ちをこれ以上見逃してしまえば、もう涙さえ流せなくなる。

木村 タツヤは決意を胸に部屋を飛び出した。

さらば、ミドル!

WBCミドル級タイトル防衛戦。

最後のミドル級と銘打った注目の試合。

そのセミファイナルに選ばれたのは宮田 一郎。

東洋太平洋フェザー級タイトル、最後の防衛戦を見守る観客たちが上空を見上げた第2ラウンド。宮田の拳から落雷のような一撃が決まった直後、相手の口から飛び出したマウスピースに観客たちは自然と視線が引き寄せられていた。

『雷神が魅せる! 挑戦者のアッパーにカウンターを決め、意識を断ち切ってみせた!』

膝から崩れ落ちるメキシカン。

リングの上では宮田が高々と右腕を掲げ、勝利宣告を聞き届けていた。観客席で燃えたぎる幕之内をよそに、勝利インタビュへと移る。

「最後のフェザー級防衛ということですが、次はジュニア・ライト級へ転向するんですか?」

「どこまで行くかは相談中です」

「幕之内選手とのマッチングはもう無いのでしょうか? そのお、残念だったりしませんか?」

「別に……。その心配はしてないよ」

インタビュアーの質問に、思わず素っ気なく答えてしまった。内心を悟られまいと普段よりも感情が暴れているせいだ。

今日、宮田 一郎はフェザー級から上の階級に転向する。それは幕之内 一步との試合の可能性が絶たれたことを意味するのだ。

(そもそも、鷹村さんの前座を飾れた意味を考えると…)

思わず笑みが溢れた。

一見、観客たちからは幕之内とのマッチングが無くなったと思われるだろう。いまはそれで良い。まだ世界タイトルを獲っていないのに語る必要はないのだから。

「もう決めたことだからね」

こうして、宮田 一郎はフェザー級の舞台から姿を消した。

宮田 一郎、東洋太平洋フェザー級タイトル返上。

後日、ライト級への転向を宣言した。



宮田 一郎を送り出した観客。

ついに待ち侘びたメインイベント、鷹村最後のミドル級タイトルマッチ。

この試合さえ終わればスーパー・ミドル級タイトルが確約されている。つまり、日本人未踏の重量級3階級制覇という偉業。

『さあ始まりましたミドル級、最後の防衛戦！』

ここで勝利を収めればスーパー・ミドルが待っている！』

観客たちは熱狂に身を任せる。

会場の誰もが対戦相手であるゴートを強敵だと感じるから、トラブル続きの鷹村に強く願う。何事もなく無事に勝利を、と。

前の試合、バイソンの声明により鷹村の敗北疑惑は払拭された。WBC、WBA両団体がバイソンの声を受け入れて世界的に負けを突き刺す者は居なくなった。

しかし、1度出てしまった疑惑が完全に晴れたわけではない。声を出さずとも、心のなかでは鷹村の勝利に首を傾げる者がいる。

会場の空気を吸って鷹村は思う。この反応も仕方がない。むしろ、試合開始前に物が飛んでこないことに期待を感じている。

(いまからその疑惑、払拭してやる)

欲しいものを零してきた、これまでのバカな自分と訣別する意思を掲げて。

鷹村は再起へ向かってリングを蹴った。

コーナーを飛び出す風速に、青空を舞う鷹を観客たちは見た。

『押し寄せる観客の期待に応え、まずは鷹村が流れを掴みに行く！』

勢いに押されまいと、反対側でゴートがステップを刻む。

(コンディションを見るに、イーグル戦のときと遜色ない。ゴールデン・イーグルを失墜させた脅威が惜しみなく私を仕留めにきた。

なんと恐ろしく、素晴らしい景色だ)

ゴートは笑みを胸のうちに押し込める。

減量苦が大した枷にならないことは理解している。鷹村なら、開幕の一撃で試合を終わらせることも可能だ。

(随分とのんびりじゃねえか)

(そう急かすなよ、東洋の鷹)

鷹村の感情が既に昂り過ぎていることをゴートは見抜いていた。

脳内でイメージは済んでいる。初撃、拳が打ち出された直後。パンチの勢いを後ろに流し、そのまま顔面にカウンターを合わせる。

鷹村を相手に実行可能な実力を備えているのだ、この男は。

(食らいやがれっ!!??!!??)

(先ずはガードだっ!!??)

声にならない気迫を纏い、飛び出す鷹村の右拳の腹を左ガードで叩き払った瞬間。左腕の感覚が付け根ごと行方をくらました。

「は、え……あ?!」

爆音を聞いたあと気づけば、ノーガードで突っ込んできた鷹村に対処するための左腕が無い。肝に氷水を掛けられたが如く震える頭で、もう使い物にならない左腕がダラリと垂れていることを確認した。

「う、うそだ…」

咄嗟に右腕を動かし、強引に捻じ伏せようとしたとき。既に大砲にも勝るジャブがゴートの顔面をコーナーに押し込んでいた。

「やらば、ミドル!!」

最後に。日本語が分からなくとも、それが勝利宣言であることを理解したゴート。繰り出される右拳から逃れる暇も与えられず、意識は深々とコーナーポストに減り込んでいた。

『しゅ……瞬殺?!え、これ現実でしようか?!』

誰も予想だにしなかった瞬殺劇場。

これほど気持ちの良い試合もそうそうない。無傷で防衛戦を突破し、スーパー・ミドル級タイトルへの挑戦が目の前にきたのだから。

『ゴート選手、起き上がれません！顔面一撃!!？』

鷹村、ジャブでガードを壊し、ストレートで挑戦者の意識をリングの底へ叩き落とした!!』

「もう間違えねえ！オレ様についてこい野郎ども！」

鷹村の勝利宣言で湧き上がる観客たち。

全盛期へ走る漢へと称賛が降り注いだ。

—
—
—

「す、すごい…すごいです！」

「マジかよ…世界タイトルの防衛戦だぞ？」

「鷹村さん、試合前から涼しい顔してましたもんね」

観客席で沸く鴨川ジムの面々。

そこに足りないのは木村だけだったのだが…。

「やっぱりすげえな、鷹村さんは」

「木村！」

息を切らしながら、木村が合流する。

陰りのあつた表情はなく、鷹村と同じでずっと先を見つめていた。

捻れ、歪んだ心が少しずつ真っ直ぐに戻っていく。

いつか過ごした日々を辿るように。然し同じ道ではなく、確かな未来へと道は続く。

誰かを穢した時点で自分は報われない。あくまでも人間たるもの品性を、そして思いやりを忘れてはいけない。

相手が立てない道に人は続かず。

知らぬ間に得がたい絆が離れていく。

なら、守りたいものが耐えられる道理を捨てた。

自分の首を絞めるのは自分の品性だ。

「お前、大丈夫なのか？」

「ああ、ちよいと昔を思い出すのに時間がかかった。…あと3センチ

が届くか、ここじやなきや答えが分かんねえ。この目で確かめなきや死にきれるかってんだ」

右拳同士を交わし、志しが再び進み始める。

光を取り戻した鷹に、まだ見えぬツメが研がれていくと信じて。

最後の調整

朝日が地上を照らす晴れ模様。

鷹村を中心とした鴨川ジム崩落危機からひと月が経った。

鴨川軍団はあれから以前の雰囲気を取り戻し、各自の目標に向けて走り出していた。鷹村はスーパー・ミドル級挑戦に向けて。木村は復帰のため、青木は伊賀との再戦を目指して。板垣は東洋ランカーとして。

そして幕之内と言えば。

「母さん、行ってくるねー!」

「気をつけるのよ?」

明朝から家業を手伝い、1日の始まりを朝焼けとともに実感する。

朝の香りに肺に取り込みながら、復帰に向けた練習に心躍らせて家を飛び出していた。



鷹村のミドル級防衛戦から数日後。

鴨川ジム事務所にて、幕之内と鴨川は今後の方針について話していた。

「僕はボクシングを続けます」

「そう言うと思っと思ったわ。だが復帰はまだ先じゃ、貴様は暫くのあいだ休養しておくこと」

「えっ!?でも僕、かれこれ半年以上は試合していませんよ?」

「世界ランクのことなら安心せい。千堂が暴れておるお陰だろう、相対的に小僧の評価も大して落ちとらん。話題があるボクサーは必然的にランク入りする、もう暫くは回復に努めるんじゃ」

世界ランクは強さそのものではない。

人気がある、単純に強い、噛ませ犬として祭り上げられる、はたまた

た王者の調整相手として。その時々によって変動するものだ。

現在、千堂が世界王者として君臨、リカルドとの試合が決定している。彼が敗北した唯一のボクサー、幕之内は本人の知らないところで株が上がり、試合をしていなくとも世界ランカーとして席を置けていた。

「じゃがワシから一つ、復帰の条件を与える。選手どころか私生活も過ごせんのでは、親不孝にもほどがあるう」

「復帰の条件、といたしますと…？」

窓の外、快晴の遙か向こうを見ながらの宣告に喉を鳴らす幕之内。

「デンプシー・ロールを使い熟せ。沢村戦のような筋肉を傷める回避ではなく、真にカウンターを破ってみせろ」

思い出すのは沢村戦で完遂されたデンプシー破り。

デンプシー・ロールという強力な連続フックには、相手の視野の死角から死角に移動する特徴があった。沢村はそれに対して、バックステップすることで死角を無くし、無傷でカウンターを決めたのだ。

「それは……。ええ、僕もそう思っていました。きつと、ただ止まるだけじゃ、いつか止まった時にカウンターを合わされます」

恐ろしいことに、幕之内は沢村のデンプシー破りに対して対処した。一定のリズムを刻むデンプシー・ロールを強引に止める。それだけで靱帯にダメージを負いながら、辛くもデンプシー破りを攻略してみせた。

「ワシらは間違った道を進んでしまった。本当なら、もっと早くに立ち止まるべきじゃったよ」

幕之内の必殺は既に攻略法を見つけられた。対策される必殺はただの自害である。長期戦、失敗すれば再起不能の技に恐れる者はいないだろう。

「では、その条件はデンプシー・ロールのカウンター対策になるんですね」

「……半分正解じゃ」

「えっ」

ならば、鴨川が伝えることは一つ。

「カウンター破りのデンプシー・ロールは縦に非^あらず」

本当の意味での無傷によるカウンター対策。

「無限の可能性を切り拓いてみせろ、小僧」

デンプシー単体という自傷行為の封印をいま、最大限の助言を以つて幕之内に課した。

—

—

—

以前から考えてはいた。宮田と会話したときから、幕之内は自分のボクシングを見つめ直し、ようやく考えが纏まってきたところ。

(僕の持ち味を活かすなら、それは——)

その男はふらりと現れた。

「おう幕之内、おはよーさん」

にへら、と笑う千堂 武士が呑気に腕を伸ばして挨拶してきた。

「せ、千堂さん!?!どうしてここに!?!」

あまりの衝撃に大声で返事をする。

幕之内は東京住みであるが、千堂は大阪生まれ大阪育ち、現在も大阪をホームにする生粋の大阪人だ。

加えて、WBCフェザー級チャンピオン。二週間後に迫るリカルド・マルチネスとの王座統一戦を控え、最終調整中の身であり、東京をふらついている人間ではない。

あんぐりと口を開けて驚く幕之内に呆れながら。

「どうしてもなにも、幕之内訪ねた理由なんか大体予想つくやろ。リカルドとやる前にスパー頼もう思うてな?」

彼はヴォルグが世界戦をするときも幕之内と観戦するため、トレーナーである柳岡に言わずに来たことがある。あの時でも怒っていたのに、今回は統一戦前ときた。

「え、ええ!?言ってくれたら僕がそっちに行ったのに……っというか、柳岡さんとかは知ってるんですか?」

幕之内の不安に大丈夫と繰り返すのみ。

絶対に言っていないと思っっていると。

「どうせ現地で落ち合うんや、大して変わらへん」

「え、現地っていうと？」

「まーまー、せっかく迎えに来たつちゅーのに話進まへんわ。ほら、さっさと行くで鴨川ジムに！」

ジムとは反対方向に駆けて行く千堂を追いかけながら、幕之内は混乱する現状を纏めるのだった。



リカルド・マルチネス

現WBAフェザー級チャンピオンにして、70戦を超える試合全てに勝利してきたボクサー。王座戴冠後のK.O率100%、ダウン未経験という恐ろしい王者だ。

無敗神話、軍神と世界から恐れられる。

息切れを見たことがなく、地元ではコアトル不の神体と謳死われている。

「だそうだぞ」

「ほーん、肩書きはいつちよまえやな。」

まあワイが伝説終わらせてまうんやけどな！」

「一歩がどんくせえから特等席取られちまうぞ!？」

そう言つてゲラゲラ笑い合う鷹村と千堂。

(本人にプレッシャー掛かること言う鷹村さんもだけど、いまの戦績を聞いて嬉しそうにする千堂さんって……似た者同士だなあ)

呆れよりは尊敬が勝る。生きる伝説との試合を控えての落ち着きようを見れば、誰が言わずとも期待感が高まるというもの。

「んで？実際のところ勝てるのかよ。伊達のおっさんが完敗した相手だ、ゴンザレスとは訳が違うぞ」

「鷹村さん、心配しすぎでっせ。相手がアホ強いんは承知の上や。けどな——」

「えっ…？」

スパアの準備をする男に千堂は視線を向ける。

悔しさと敬意を込めて、獣が獲物を狙うように。

「幕之内より強い男はおらへんで」

牙が嬉しそうに鳴る。

気負うなんて似合わない笑顔に幕之内は身震いする。自分の喉元に牙を添えられている感覚に、自分自身の闘志も誘発されて試合のように意識が変わっていた。

「確かにそうだった。ほれ、さっさとリング上がれ。オレ様がレフェリーしてやるよ」

用事で出かけている鴨川に代わり、鷹村がリングに上がる。

2人も続き、グローブのみを着けてリングの上で向かい合った。

（千堂さんが僕なんかを頼ってくれたんだ。リカルドさんのときみたいに、全力で行くぞ）

（スパアはヴォルグの世界戦のとき以来か。その目…あんとときは別人や、お互い覚悟決めとるみたいやな）

いまから始まるものは漢^{つわもの}同士の激励会。

先に往く者へ。勝ちたい強者に。最強のボクサーとして成長することを誓い合う、決戦前夜の握手をここで交わす。

「行きますー！」

「来いやー！」

鷹のゴングがここに鳴らされた。

「そこまでー！」

2人の間に割って入る鷹村。

突き飛ばす形になりながら、相手をK.Oする勢いを止める。3ラウンド、正確には残り1秒を残したところで調整に終わりを言い渡

す。

「あ……クっ……」

「ふくっ……あんがとさん、幕之内」

尻からリングに落ちる幕之内。

両腕に染み渡る気迫が抜けきるには1分では足りない。あと1秒あれば仕留められていたかもしれない。

（ブランクがあるとはいえ、一步をここまで押し返すか。

こりやあ、おっさん越えもあり得るぜ）

決して幕之内が不調というわけではない。ここまで休養に充ててきた時間が、王者にまで至った男との違いを浮き彫りにしていた。

（強い……悔しい……だけどー）

幕之内は無意識のうちに拳を握る。

彼はリングの上のリカルドを知っている、そして伊達とも死闘を繰り広げた身だ。千堂との本気のスパ、嫌でも比較してしまう。

「千堂さん」

だから、早く伝えようと思ったのだ。

「必ず、追いつきますから……!」

激励は送った。

なら、あと言うことはこれで十分だと分かった。

千堂も、伊達やリカルドと比較されていることは百も承知だ。勝算なんてものが目に見えるとすれば、幕之内の言葉に全て詰まっている。

「……ああ！漢と漢の約束や」

2人はグローブを突き合わせて再会を誓う。

彼らが次に対峙する場所、それは世界。ベルトを獲り合う場所であるとお互いに信じている。

こうして、千堂はライバルに宣戦布告して日本を旅立っていった。



時は進み、場所はメキシコ・シテイ空港。

千堂は顔に貼った湿布のことを忘れて大きなあくびをする。18時間を超えるフライト中、ひたすら眠り続けたせい、眠くもないのにあくびが出てしまう。単純に寝ることに飽きた意味だろう。

「少しは敵地に乗り込む気持ちがあったか？」

「んあ？」

どでかいあくびに共感してしまったことに頭痛を感じながら、1人の男が千堂に声をかけた。

「おー、待ったったで！半年ぶりやな、ゴン？」

「日本人は体調管理も出来ないのか？」

俺のベルトがドでかい湿布に変わっちまったのかと思ったぜ、セン
ドー」

「なんや、外人はんには分からへんか。」

これはライバルの激励：漢の勲章やで！」

ニカツと笑う姿に、日本から持ってきた勲章が誰のものか聞くまでもなかった。

傷をつけてリングに上がろうとする千堂に呆れながら、アルフレド・ゴンザレスはメキシコの新しい風を歓迎する。数日前、千堂は国際電話で事務所に繋げてくるや、スパ―相手を頼んできた。

“おうゴンか、スパ―に付き合ってくれへん？”

“はっ、人に頼むならせめてスペイン語で話せよ。ま、通じるから良いけどな？”

喜んで返事したことを、受話器を置いたあとで自分自身に驚いたものだ。

詳しい打ち合わせはトレーナー同士に任せて、今日から千堂とゴンザレスの決戦に向けた調整が始まる。

「来い、まずは時差に慣れるところからだ。」

今日は身体を休めて、明日からスパ―するぞ」

「もう慣れたわ、そんなことより身体動かそうや」

「……はあ。じゃあジムに行くか。お前みたいなヤツはどうせ言っても聞かんし」

「わはは！そんな褒めたかて手加減はせえへんで！」

普通を無視して行く後ろ姿に再び呆れながら、その牙に新しい可能性が宿ると確信して歩き始めた。

2人の王者

リカルド・マルチネスが王座統一戦をする。

ボクシング関係者はその発表だけで大いに沸き上がった。かつて大勢の大物王者がWBC、IBFに在籍したが彼らのオファーが届くことはなく。伝説の王者をその気にさせた千堂 武士に桁違いの注目が集まることになる。

メキシコ某ホテル、午後から会見は始まった。

「先ずはリカルド選手。これまで一切の王座統一戦を行わなかった貴方がなぜ、センドー選手の挑戦を受けたのでしょうか」

初手、世界中のボクシング関係者が疑問に思ったことが投げかけられた。

「彼はWBA1位を取っていた。それだけで資格は満たしている」

ゴンザレスへ挑戦するとき、WBC・WBAのランキング1位を獲得していたのだ。

質問した記者はリカルドの返答にペンを握りしめた。

「それなら過去にもいましたよ！彼らとの統一戦は断ったと聞いています。今回の挑戦はなにか特別なものがあつたのではないですか？」
千堂に資格があることなど既に知っている。誰もが知ったうえで、過去との違いを示せと言うのだ。

記者は全員、答えに辿り着くことが出来なかった。長年、統一戦を拒否し、複数階級制覇にも乗り出さず、ひたすらフェザー級に留まる理由を。その1つが1人の絶滅危惧種によって成される、追い越されたことに悔しさが溢れて仕方ない。苛立ちを込めた言葉に、リカルドは優しく言い放った。

「感謝の証だ」

「……えっ?」

「この試合は素晴らしい結果を残すこととなる。きっと、私の想像を越えてくるだろう。」

明日、タケシは私の言葉を理解する。

「独り、満天の星を見ながらね」

果たして、リカルドの言葉を理解した者がこの場に何人いただろうか。質問した記者を含め、声を上げる者はいない。無敗神話がお世辞にでも相手を持ち上げる、並ならぬプレッシャーに喉は閉口してしまった。

「なありカルド、最後にリングを降りたのはいつや？」

黙々とした雰囲気を取り裂く虎の威嚇。空腹の音だけが、記者会見の沈黙を食い破った。

「キミはなにを言ってるんだ？」

リカルドの最後の試合は半年も前だろ」

「王者の精神を揺さぶるためか？」

「リカルドに挑発なんて効きやしねーぞ？」

掴めない意図に困惑する記者たちを差し置いて、リカルドは薄く目を見開いて千堂を見つめた。千堂は目を閉じて回答を待つばかりだが、この時2人の視線が交差したように見えた。

「私は生涯、リングの上で戦い続けるさ」

「暇つぶしのつもりなら明日降りてもらおう」

地を踏んで、千堂が立ち上がる。臨戦態勢であり、空腹に耐える獣の気晴らしでもある。涎を垂らすように腕をテーブルに突きながら。「ワイの後ろにライバルがぎよーさん並んどる。そこに陣取って、しっかり借りを返させてもらおうわ」

「それは……残念だな」

K. O宣言を終えると、真つ先に会場をあとにする。

リカルドも記者たちの質疑に全て答えることなく、軽やかな呼吸とともに明日へと歩いていった。



メキシコの屋内競技場、アレナ・メヒコではリカルド初の統一戦を見ようと大勢の住民が席を埋めていた。

お祭り騒ぎの試合当日、賑やかな人々の頭上で。右腕で壁を登り、

剥き出しのダクトを渡り、左腕に大きな荷物を抱えて、1人の青年が景観を愉しみながら目的地に進んでいた。

「ふんふん、楽しみだなあ。センドーかあ。いいなあ、マクノウチと2回も戦えて」

鮮やかに踊るようなリズムで、青年はウキウキと降下していく。彼が降り立ったのは1本の通路の前。

「確かここだった」

警備も気付かないうちに頭上から侵入し、颯爽と選手控え室に続く通路を進んでいく。目的は1つ、今日のメインイベントでリカルドを倒さんとする絶滅危種に会うために。

青年は過去に来たことがある記憶を辿り、千堂のもとへ駆ける。その理由は簡単なものだ。リカルドに負けてほしくない。そして、リカルドに負けたとき、壊れてしまったら話す機会が訪れないから。彼の師が手にした男が壊れたように。

「よう、ボウズ。ここから先は猛獣の檻しかねえぜ？」

良い子はおうちでママの手料理でも食べてろよ」

控え室の前に飛び出したとき、壁に寄りかかる1人の男に呼び止められる。

青年は威圧する男を見て、両手を広げると。

「やあゴンザレス、初めまして！僕はウォーリー！」

「うおっ!？」

「WBAジュニア・フェザー級の王者なんだよ!!」

にぱつと笑い、ゴンザレスに飛びついてハグをする。

（んなこたあ知ってるっつーの！センドーかよお前つ、挙動が分かりにくいわっ！）

「は、離せ！お前、ここになにしに来た!？」

「あ、苦しかった？ごめんね、はいこれ。バナナ食べて元気出してよ」
剥がれたウォーリーは房からバナナを1本もぎ取り、ゴンザレスに渡す。

「要らねえよ、そもそもなんだこれは？」

「これはセンドーに！バナナは栄養たっぷりだから、これ食べて頑

張ってもらおうと思って！」

満面の笑みを見て、ゴンザレスは新種の人間に頭痛を感じる。ここまで光に満ちた表情はなかなか見ることがなかった。ここにも新しい可能性を見ながらも、いま千堂と合わせると確実にリズムが崩れることを察知した。

「アホか。前日ならともかく、いまから試合だぞ。センドーの集中を途切らせるつもりか？」

「そっか、じゃあ仕方ないね。はい、これあげる」

ひよいと掲げられたバナナ一房をつい受け取る。反射的な行動に後悔したときには、ウォーリーは満面の笑みを向けていた。バナナを受け取らなかったことに対抗された。

バナナのこととは諦めることにして、まだ帰ろうとしないウォーリーをどうしようかと首を傾げたとき。再び距離を詰めるウォーリーにまたも面をくらっていた。

「僕ね、キミのこと凄く尊敬してるんだ！」

「は？」

「マクノウチに勝ったんだよ？本当にすごいよ！」

ゴンザレス、いつか僕とも遊ぼうね」

言葉の意味を聞く前に、ウォーリーは足早に廊下を立ち去っていた。

「ほんと、^{フェザー}ここは退屈しねえな」

容赦なく、刹那的に訪れる敵意を受け止めながら。

ゴンザレスは来たる統一戦を見守るために会場へと進むのだった。



幕之内 一步は千堂からチケットを渡され(買わされ)、現地応援に来ていた。席については選ばせてもらえず、兎に角ここしかないと言われ、無理やり座席が決定した。

「どうも失礼しまくす……って、日本語分かりませんよね、あはは……」
「なんだ、ジャパニーズか。わざわざセンドーの試合を観に来たファ

ンか？」

メイメイイベントが始まる直前、幕之内が席に座る。すると日本語が返ってきたことに驚きつつメキシコ人の顔を見ると、視線が合ったかと思えば。

「ゴンザレスさん!?!」

「お前はマクノウチー!」

かつて死闘を繰り広げた男、ゴンザレスが座っていることに仰天する。ゴンザレスもまさか好敵手の好敵手が来るとは予想だにせず、お互い指を差し合った。

「オメーどうやってセンドーに勝ちやがった!?!直感の擬人化みたいな化け物相手に2度も!!」

「ぐえっ!どうやってって、必死に練習しただけです!」

「納得いかねえ!それにお前、その顔…」

幕之内の顔を見れば、治りかけの腫れが数箇所に見られた。

“これはライバルの激励…漢の勲章やで!”

2週間前、空港で言い放っていた千堂の言葉を思い出す。

「ゴンザレスさんも、すごい顔ですね…」

遠慮がちに、しかし誰に付けられたものかを確認する言い方。

「お前と同じだよ、これは期待の証だ」

同じボクサーを応援する者として。

そして、再会を待つ者として笑いながら2人とも席に座るのだった。

WBC・WBAフェザー級王座統一戦

世界に満ちる光が消えていく。天体観測をするように人々は天上を見上げて、人では届かなくなった舞台に思いを馳せる。

ただ1人を待ちわびるように。そして、1人の生贄を祭壇に奉るために。

『神への挑戦。』

半年に1度の祭り、タイトルマッチへと辿り着いた漢に許される神話崩落の権利。これはただの奉りじゃない。

無敗神話史上初の大作、王座統一戦である』

火が道標となり、祭壇へ続く星空を照らす。

扉の向こうから現れた1人の絶滅危惧種。纏う外套は煌めき、異国の地を狩場に定めて牙を研ぐ。

『実現に漕ぎ着けたボクサーは、死神ゴンザレスをも下した日本最強のメキシカンキラー。類稀なる本能を武器に、最凶の牙を以って名を挙げた！』

メキシコの住民にとって、新しいスターとなったボクサーを打ち破った仇敵である。栄光を手にして、成長を遂げた男が3度目の夢に挑むことを阻んだ。ゆえに会場に訪れた住民たちは僅かな可能性を見る。

無敗神話に傷が付く、あり得ざる幻想を。

『成績名実とも最高に仕上げ、いま日の本の虎がリングテイグルに放たれる！』

最凶の世界を噛み千切った。

格別の挑戦権を手にも、伝説の幕を潜った。

WBCフェザー級チャンピオン

千堂 武士

(しけとる、異常な場所や。

……これが最強の王者を待つ雰囲気とでも言うんかいな)

吸い込んだ空気を味わい、時差では片付かない雰囲気を知る。世界

の1番上だというのに、風通し抜群の場所は外界よりも不味い。入れ替わらないことを受け入れきった住民。絶対に揺るがない王者が棲む国。

(こんな湿気ったところでやって楽しいんか、リカルド)

そこに、新しい芽が落ちてきた。

「千堂ー！リカルドなんかギタギタにしたれ！」

「お前ならやれるって信じとるでー!!」

「お前が世界ーや!!」

メキシコにまで追ってきてくれた千堂の応援団。

あそこの集団は100人にも成らないが、会場のどこよりも騒がしく、そして暖かい場所だ。

場違いにも思える声援に思わず笑いながら。

(ワイは嫌や、だから勝手に塗り替えさせてもらうで)

1人、心の中で牙を剥き出した。

もう表情に武器を見せることはしない。本気で神話を墮とすために、感情すら表に出すことが命取りになる。会場の雰囲気を見せてくれた情報に感謝しながら、その時まで静かに待った。

『伝説が歴史を刻むため、アレナ・メヒコに降臨する』

神話の表紙が現れる。

鉄筋のように無機質で、太陽の如く眩しい存在。

『過去10年間、PFP1位を奪い合う無敗神話。歴戦の猛者、その半数以上が左腕ジャブのみに敗走。世界中のボクサーに敗北を刻む、そんな男がここにいる！』

地元の住民にとっては見慣れた光景。

だが、応援団には凄まじい威圧感が伝わっていた。生きる伝説、誰も手の届かない存在に思わず生唾を呑む。

『79戦79勝75K.O.』

凶悪な戦績を積み上げるメキシコ史上最強の男』

階段を登り、ロープを潜る。その所作に誰もが見惚れていた。当日のボクサーの強さを測るとすれば、この2つに集約されている。何気ない動作で観客を惹き寄せ、心を奪い去っていく。

だからこそ、彼に不調はあり得ないと知る。

WBAフェザー級チャンピオン
リカルド・マルチネス

「今日はいつも以上に賑やかだな。アウェイかと思ったよ」

セコンド、ビルが会場を見渡しながら呟く。驚きはない、アウェイではこれ以上の歓声と罵声が飛び交っている。しかし、ホームではあまり見なくなつたせいだろう、思ったことをそのまま口にしていた。

「懐かしい雰囲気だ。この勢い、よほど慕われている王者なんだろう」
リカルドは淡々と言う。試合直前、いつもと違うホームでも自身の心は一切揺るがない。

「センドー、この火を絶やさなければ君の勝利だよ」

こうなることは予想できた。

期待通りと言つてもいい。

ゆえに、千堂に勝機がある。ここで少しでも会場の波に乗つてしまえば、もしもが発生する。無敗神話を成す者として、失礼な試合は決して許されない。

神と獣。

世界初の邂逅、ここに。

『搔つ捌くか、それとも飢え死にか!』

生きる伝説と、活ける絶滅危惧種を繋ぐ枷がいま消滅!』

フェザー級頂上決戦、開始!!

狩場の技術

メキシコの夜を異質な風が撫でる。

勝利に飢えた獣と、星屑を待つ神が立つ舞台。

地元の観客は多くが雰囲気の差異に気づかない。この試合を動かす欲望、執着する腐心を嗅ぎ分ける者は少ない。

「80戦に迫る試合で、リカルドに手が届いた者は両手で足りる。ましてや、真面まともに打ち合えたボクサーはエイジ・ダテただ1人」

最もリカルドを知るボクサー、ゴンザレスが絶望的な歴史を謳う。見たことのない雰囲気を知る者の1人だ。

「千堂さんも承知のうえで挑戦状を叩きつけています。応援団の期待に応えてくれますよ!」

千堂の今生のライバル、幕之内はゴンザレスに力強く言い放つ。濃縮される緊迫に心臓が動かされながらも、千堂と一緒に戦うつもりで見守っている。

言いたいことは分かっている。だがゴンザレスは領かない。WB Aフェザー級ランカーの質は他団体と比べて異様に高い。リカルドを倒すためだけに集まったボクサーたちだ。戦場を移せば世界王者になれる器ばかり。それを逃げだと言い、現役をリカルドに捧げるボクサーを一蹴するのが彼なのだから。

「どう出る、虎お前は」

かつて自分もその1人であった。

固着したプライドを捨て、WBC世界王者に君臨し、そして泥水を啜った。ゆえにこそ、リカルドに拘らない千堂に熱い期待を込めて呟く。

ゴングが鳴り、運命の岐路に立った。

リカルドは1度も奇襲を仕掛けたことがない。逆に、奇襲を許した例もない。誰にも揺るがない凍てついた目で観察し、一息のうちに試合を自陣へ傾ける。理想のセオリーで、ゆえに難しい基礎を遂行してきた男へ。

「おっしや行くで!!」

一気呵成の掛け声とともに、コーナーを飛び出した。

『なんと異国のティグレが突っ込んでいく!!』

解説の昂る声とは裏腹に、リカルドを知る観客はため息を吐いた。またか、と。

80戦無敗の男を倒すため、少くないボクサーが先手必勝を狙った。長期戦は圧倒的不利、ましてや打ち合いで勝ることが不可能と知っているからこそその襲撃。苦肉の先制を狙った者が1ラウンドを過ぎた記録はない。ゆえに、すぐさま終わる試合だと地元民は決めつけた。

警戒心全開のリカルド。

気負うことを知らない男に勢いが通じるはずもなく。リング中央に到達した千堂にカウンターを装填し、ゆっくりと前に出て行ったとき。

『……………は??』

踏み出した右足をリング中央に押し込み、ため息を吐く会場を黙らせる。解説も、地元民も、あまつさえ千堂の応援団すらもが目を見開いた。奇襲狙いと思われたボクサーがリング中央で停止したのだから。

「なんや千堂、どういうつもりや!？」

「お、怖気付いたわけやあらへんやろな?」

「そんなわけあるかい! 作戦や、きつと…!」

戸惑う観客。奇襲ではなく、気をてらうつもりなら落胆するばかりだと地元民は思った。だが、決してパフォーマンスではない。観客たちの理解を求めるなど千堂は思っていない。

「どないした? まさか、おんどれもゴンみたく理詰め倒さな本性見せへんつもりかいな。」

別にいいよ? ワイの拳食ろうて待ったは聞かへんけど」
ただ知りたいのだ。

幕之内を敗った男、伊達 英二が届かなかった暴力^{バイオレンス}を。

譲ろうと言ったのだ、無敗神話の後攻と引き換えに先制攻撃^{パーフェクトゲーム}を。

「く、はは。とことん血気盛んだな」

「相手はリカルド選手ですよ!?!」

初めての出来事に笑うゴンザレス。

あまりの無謀さに顔面蒼白の幕之内。

「あれは初めてのパターンだ。リカルドを煽るやつはいたが、いざ試合になれば先制を取らざるを得なかった。

開始5秒で予想が出来なくなったぞ」

失望や期待、選手に向ける凡ゆる感情が混乱を巻き起こすなか、リカルドが静かに動いたことで2度目の静寂が訪れた。

もう定石は吹き飛んだ。なにが起こるか分からない戦場を見守るなか。

眼光を溶かした背景から、神域の左拳が虎を射抜いていた。

『せ、先制はリカルド——なっ!?!』

左拳に感触はない。なぜなら、千堂は左下にダッキングに躲しながら右フックを振りかざしていたのだ。だがリカルドのスウェーにより右は空ぶっていた。

初手、リカルドの左にカウンターを合わせに行った。紛うことなき神業であると興奮する幕之内に。

「違う、先制は千堂だ」

「ど、どういうことですか」

僅差の事実を伝えるゴンザレス。

「千堂ヤロー、リカルドが本性見せるつもりないから殴りに行った。いまのカウンターは偶々たまたまそう見えただけ。

リカルドは先制にカウンタージャブを打ち込んだ」

「っ……………」

リカルドがカウンターを狙った衝撃に震えてリングに視線を向ける。右フックは大振りだ。

超一流のスウェーはガラ空きの横腹を生み出す。火花のように疾く踏み込み、呆れるほどの隙に左拳を差し込む。

「ぬ、おお……!」

右腕に突き立つ左拳。

左脚を外へ捻り、空ぶった右腕を内側に畳むことで直撃を回避した。剛腕で守ったにも関わらず貫通する威力に目を見開いたとき、顔面へのカバーが遅れたことを理解する。

反対側から駆ける拳が下から千堂の顎を打ち上げていた。

「ガヴツ!？」

『ああつ、やっぱり先制は我らが軍神!』

(——いや、浅い)

手応えに納得のいかないリカルドは、前に崩れるように見えた姿勢からスウエーをしていたと分析する。続けて、打ち込んだ腕を身体に引き寄せて来たる反撃に備えた。

右頬があつた場所に食らいつく牙。ガードした腕越しに、挑戦者のバックフックに称賛を送る。

(拳の力だけでも骨に届くとは)

『は、反撃イ!?なんてやつだ、奇抜な姿勢で軍神を押しとどめやがったぞ!』

骨に染みる振動はリカルドといえど無視できない。大砲を惜しめば喉元を千切られると視線を戻し、2メートル先の獣の追撃に備えたのは右拳。

遠ざかるはずの身体が急停止した瞬間、全方位へと意識を割く。被弾を反撃に繋げるため、頬の痛みごと千堂はリングを蹴り出す。

駆ける、というよりは仕留める勢い。技術を捻じ伏せる拳を握り、視線が交差したことで命運が分かれた。瞬間速度だけで分析すれば、幕之内のデンプシーを止める時よりも格段に上をいく脚で低空スマッシュを放った。

肉体の一寸先を横切る拳骨。

側頭部を狙う神判はしかし、咄嗟に首を寝かしたことで直撃せず。

(ゴンザレス、君は生涯の友を見つけたようだ)

(つぶな!不意突いた筈やのにカウンターしてきおった!)

冷や汗を流したことを軍神は見逃さない。

(しもうたっ…)

即座に身体を起こすが、一挙手遅かった。眼前まで踏み込んだ神体

は、最大限の威力でボディブローを打ち込んだ。

「ツツ~~~~!!？」

左脇腹から湧き上がる衝撃。

ぬかるみに片足を突っ込んだ不快感で脳が痺れる。

泥中の思考で迫り来る左フックに対処出来ない。

『無慈悲ー！ー！から王者の連打が始まるぞ！』

食いしばって耐えても次が来る。

反撃できないよう意図的に姿勢を崩された。次に備えるため重心を起こそうとして、視界は上に向くどころか客席に飛び出していく。

「先制を失敗すれば負ける。攻めんでも負ける」

柳岡はリカルドに臨む千堂の背を押した。

ロープに押し込まれ、早くも作戦が崩れかかるボクサーの背中に問
いただきます。

「奴さん^{やっこ}がやる気出す前に噛み殺す。

散々練習した、最凶の男も倒した。あとは勝っだけや」

師弟共に適当な一撃では満足しない。

討つ者は世界最強。古今東西に知れ渡る神話を砕く準備を整えた。
力を以って、拳を野性で握り、全力で捻じ伏せるのみ。

勝つとはなにか。暴力の押し付けだけではない。獲物を喰む^{そしゃく}笑顔
があつてこそ。

踏み込む王者にオーソドックスで対峙する。

ジャブで迎え打つが呆気なくかわされた。きめ細かい回転で左右、
フックを打ち込むと見事な直撃を見舞われる。

ジャブが戻る頃には外側に回ったりリカルドの追撃が続く。常に動
きながら連打するところに反撃は難しい。なにせジャブ一つで背筋
がぞわりと凍る。やむなくガードを固めた。

(力には力で……ええ拳や。けど、)

顔と左半身を守る形となり、ガードに連打が叩き込まれる。時折、
ジャブで態勢を崩しにいくがカウンターを合わせられる始末。

盛り上がる地元民、悲鳴を上げる応援団。

7度目、身体がロープに食い込んだとき。右脚を踏み締め、牙で噛

み締めんとガードを解いた。

僅かな挙動だが、空いた右脇腹を見つけるのに時間は要らない。なぜなら、このときを待っていたのだから。

「ね、狙われたー！」

幕之内も息が詰まる。

千堂の右ストレートを躲し、ボディブローを突き刺す瞬間に拳を握り込んでいた。

(化けの皮はまだ脱いどらんなあ?)

ダツキングで懐に入るリカルドを見てから、千堂は右腕をさらに引き絞った。

「っー！」

あまりにも甘美な腹帯にリカルドは待ったをかける。

頭上を通り過ぎるはずの突風が起こらない。

セオリーを掻き消す野生の類だと直感した。

(右の打ち下ろし——！)

直感と理解が繋がった瞬間。

身体を叩き起こしながら右腕をガードに回して。

(潰したらあー！)
ゲンコツ
拳骨落とし。

桁外れた握力から打ち落とされる右拳は繰り出された。

『……………す、げえ』

リングに煙で描かれる二本の直線。

描き終えた痕に漂う熱気が会場の温度を上げる。

ゴンザレスを倒した男は自分たちの想像を遥かに越えた存在だと、リカルドを飛ばした場面を見て理解したのだ。

オーブニングヒットは軍神が獲った。

だが、無敗神話を相手にして炸裂した一撃が語る。主導権を握っているのは両者。どちらも流れを手放していない。

(いまのも当たらんか。ちゃんと隠した隙見つけても疑問持ちよる。せせこましいが、これが世界……！)

ガードの隙間から荘厳と覗く瞳。

右ストレートを学ばせるために構え、それを先読みすると見越して拳骨落として切り替えた。一連の動作を見抜く観察眼、思考に直結する運動能力。

規格外の存在に、千堂は云々と語るよりも真つ先にロープから飛び出した。

「王者が立て直すより先に仕掛けるつもりだ！」

「リカルドは反撃しない。脚を使ってアウトボクシングに移る。間に合うかギリギリだな」

息を呑む会場を追い越して、間に合わせてみせると脚が伝える。

千堂の武器。それは野生の勘であり、勝負どころで無茶振りに応えられる強靱な肉体にある。ゆえに間に合う。間に合わせる理不尽な強さがあるのだ。

「ウラァ——！」

立て直すか、押し通すか。

際どい勝負を制したのは千堂の右拳。

「……」

リカルドの眉が微動する。

左腕でガードした。ガードは間に合った。だがこの試合で初めて、受け流すことなく直撃した虎のひと噛みに、自分の破壊力と遜色ないことを痛感させられたのだ。

体勢を立て直すとき、次の選択を確信してガードを固める。逃す意志はなかった、このまま懐で次なる機会を待つのだと知る。

ボディブローを受け止め、タイミングを測って身体を入れ替える。振り向きざまに大砲を見舞う。何度も繰り返し、何人もリングに沈んだ手順だった。

2 度目、肉を千切りたいと牙が猛る。

3 度目、いつ噛み殺すかを待っている。

4 度目、ティグレ虎の視線が飢えに釣られて肉に捕われる。

5 度目、口を開いた瞬間に視界から抜け出して。

「ぬ……！」

5 度目、抜け出したりカルドを急旋回して捉えた。

誰の目にもビシリと駆け抜ける音が見えたとき。リカルドの身体はロープを張りつめ、そしてリングに戻る前に虎が駆けた。再び懐で肉を千切らんとするが、ガードで防いだ。

そしてリカルドは気付いた。千堂の思惑がボデイ狙いではないことに。

(ガードさせて腕を削り落としたるわ)

自分の破壊力と同等だからこそ、まさかガードを戻し伏せにくくとは思わなかった。強力なボデイブローで下下と攻め、ガードを下げてから上を狙う。フェイントを含めた下積みだと早合点したことを恥じた。

違う、逆でもない。ガードは粉碎し、打ち合えと催促する。これは狩る者の矜持、これが虎の最強証明論。

千堂の仕掛けを技術だと思っ観客は殆どいない。

数名が気づく。リカルドの予測を一瞬でも欺いたこと、それが千堂武士の技術戦。軍神を陥す切り札である。

(これが狩場の技術か)

理解が全ての点を繋げた。

あと10秒も叩かれればこじ開けられるガード。千堂はチャンスを棒に振るつもりはない。このままガードを破壊して決着しようと、リカルドの無敗が招いた驕りではないのだから。

(おんどれの様子見に付き合うほど暇やないで！)

6度目、ボデイブローに合わせてロープに身を沈める。

観客たちがざわつき始めた。大地をひっくり返すような地響きが6度も続けば、軍神の威力に匹敵するものと理解してしまう。

リカルドに油断や慢心はない。

誰よりも本人がそれを許さない。

(だが――)

4度目まで様子を見ていたこと。

5度目で見事に捕まったこと。

(潜在能力を見抜けなかったのは事実)

目蓋を閉じて脳内で逡巡する。

アウエイに招いておきながらの非礼、いますぐに謝罪を。

『ま、まずいんじゃないか!』

テイグレの牙がリカルドの守りを壊そうとしている!』

千堂の牙が肉を喰らわんと駆け出す。

あと一打がりカルドのガードを捉えたなら。

無敗神話を揺るがすことがあり得るかもしれない。観客たちは、い

つか想像したIFの未来さきを千堂の拳に見た。

隙間なく左拳が装填されたとき。

千堂の視界に広がるリカルドは遠退き、一瞬後、リカルドの全体像を惚けたように眺めていた。

「う、ウソだろ…!」

ボディブローは空の皿を凝視し、テイグレの空腹に食糧が着地することはなかった。

空腹から視界に切り替える。目の前には右拳を戻し終え、けたたましく原動機を鳴らす漢がいた。

(なんや、ワイは踏み込んだはず………!?)

む、足にキとる?カウンターもらったんか!?)

身体の異常に数秒遅れて気づく。

『強引な右ストレートでテイグレを突き放す!』

つていうより、これは…まさか!』

そして、襲来する理不尽への対応が遅れた。

先ほどの千堂をなぞるように、怯んだ隙にリカルドは荒々しく熱気を撒き散らして右ストレートを放った。咄嗟に左へダツキングした千堂を追う薙ぎ払い。崩れ、姿勢を立て直すのに一秒。千堂が戦線復帰するまでにリカルドの強引なワン・ツーが炸裂する。ロープに叩きつけられながら、脳みそが危険信号を全身に発信する。

体勢を立て直す暇はないが反撃しなければ敗北寸前で相手はリカルド・マルチネスだ生半可な威力は自らを破滅させるだけでリズムを逆手に動かなければリングに戻ることにすら叶わない下手を打てば約束をなにかも破ることに――

身体が崩れ落ちる。息を潜める。いや、呼吸は忘れる。読まれては面倒だから、己の勘にまかせてコンマ数秒以内に来たる反撃に身を委ねた。

——リカルドが踏み込む。

——トドメを刺すために。

——足が着地する直前、前のめりに右拳を放った。

前触れもなく打った右拳、リズムを取れないほどめちやくちやなタイミングで。軍神の身体は野生の狩りを上回り、外から無慈悲の左拳を打ち込んだ。

会場中から光が消える。

観客席から音が止んだ。

リングから微かな呼吸。

「せ、千堂っ——————!!」

起きろ、お前メキシコにホラ吹きに来たんか!?

真空を切り裂く柳岡の発声。

リングを叩きつける衝撃に、ゆっくりと千堂は反応して起き上がる。

「は——っ、あ————!!」

10カウント経つ前にポーリングを決めながら状況を飲み込む。

眼前で鎮座する軍神の本性。

最凶が待ち焦がれる世界がすぐそこにある。

「ほんま………偉そうなツラ、似合うやんけ」

バイオレンス
暴力が降り立つ。

絶滅危惧種の最期の望みに応える。

「君たちには敬意を表さずにはいられない」

無敗神話史上初の出来事は統一戦のみに留まらず。

第1ラウンド残り1分、観戦する者全てが息を呑んだ。

歴史上最強の統一戦が決着へと加速していく。

歴史に届く

打ちのめされた身体を起こし、ダメージの具合を悟られないように平然と立ち上がる。

(ま、モロバレやろな)

拳を振り回すには問題ない。だがダッシュするには踏ん張りがやや足りないだろう。

殴り合いを許してくれるほど甘い相手ではない。いまの拳、ミキストリを越える威力があった。成る程と納得する、あの拳が直撃すれば耐久性に優れたボクサーでも軽々とリングに沈む。

(やけど、ゴンとは別種の重みがあるで)

構える直前、思い返したのはバイオレンスが現れた瞬間のことだった。

油断などしていない。いきなり本性に切り替わるのはゴンザレスで体験済みだ。試合中、ずっとミキストリと重ね合わせながらその時を待っていたのだ。そして、いざ本性が現れたとき、ミキストリの影は呆気なく霧散していった。

(伊達はんとの試合観ても気付かへんかった。ゴンと受け比べてよーやと分かる違いや)

バイオレンスと恐れられる顔にはリカルドのみが知る本質がある。

ふと、ゴンザレスが試合後に放った言葉を思い出す。

“ 孤高。それがリカルドの強さだった ”

未だに答えは分からない。本人に聞くことはしなかった。

(いまからゴンのメッセージ読み解いたる)

答えが返ってきたとして。きつと先入観に囚われて動きが鈍ってしまうだろうから。最も難しい謎解きに挑むため、ゆつくりと深呼吸をした。



荒れ狂う大空。

快晴か曇天か、もしくは異常気象と言うべき現象。

「そ、そんな…」

「なんでもう来たんだ!」

「1ラウンドからダウンやと?!?!」

最強のボクサーによって圧倒的火力を見せつけられた。開幕、盛り上がる応援団たちを黙らせ、初めての事態に地元民すらも驚かせる。ミキストリ以上とされる存在に、会場の雰囲気は一気にリカルドへと様変わりする。

千堂のダウンに動揺するのは応援団だけではない。

「柳岡、どうしてリカルドはいきなりファイトスタイル変えたんや!」「分からへん。そもそも、リカルドのあの姿なんて伊達はんのときだけや。」

せやから眠れる獅子を起こす前にケリ着ける……そう思うとりました」

コーナーで見守る柳岡たちもまた、想像を裏切るリカルドの戦法に翻弄されていた。

「1ラウンドから来る可能性も考えてはおった。けど、結論は出とる。もう殴り合うしかないって」

それでも、ある程度のダメージを負わせることを前提としたもの。まさか1度のクリーンヒットすら与えずにバイオレンスが現れるなどとは思っていない。

足腰、脳に少しでも枷を取り付けてようやく拮抗する。それがコーチ陣の見解である。当の本人はいつでも殴り合えると言っていたが。(そのために幕之内とスパーする言うさかい東京に行かした。こつちじゃゴンザレスに依頼してスパー相手になってもろうた。

現状じゃキツく見積もっても選手生命が危ない。情けない話、ワイが出来ることは声を掛けること。そして……)

タオルを見て、千堂が全力を出し切ったあとのことに備える。この選択肢がどれだけ歯痒いものか、きつと千堂自身が知っている。

柳岡を含め、会場中がリカルドの暴力に震え上がる。たった1人の本気が雰囲気塗り替え、間もなく一色に染まり上がるとき。

「つゝつゝふう」

小さく、それでいて応援団たちが聞き慣れた男の吐息が待ったをかけた。

「千堂………」

柳岡の心が熱くなるほど千堂は落ち着いていた。

前例のない事態をもとせず、次に訪れる敗北と勝機を見定める態勢でいる。

たったの一息で会場の雰囲気を引き戻した。

再開の合図を聞き届け、心地良さそうにリングを踏み荒らして軍神が暖機運転を開始する。本調子にはまだ遠く、しかし実力は既に世界一。まだ上へと昇る天井知らずの威光を喰らうため、絶滅危惧種は静かに己の牙を構えた。

（踏ん張り…ダメ。インファイトは論外や。気に食わんが、ゴンの言う通り……）

拳を交えるには千堂の出力が足りない。

ガードするなら反撃の機会は早々に訪れない。

千堂が僅か1秒で導き出した答え、それは2人が衝突する瞬間から始まった。

リカルドから繰り出される右は大雑把で、普通ならカウンターを合わせてもお釣りがくるはずのもの。然し、彼を知るものはその拳がすぐさま変化することを知っている。だから千堂は両腕を構えた。

『なっ!?!』

カウンターを狙うことなく、射程外まで一気に飛び退く。

千堂らしからぬ敵前逃亡に会場が騒めいた。

「せ、千堂さんが退いた!?!」

「最善だ。センドーは逃げなすすぎる。殴り合いに拘つてた証拠だろうが、俺たちはボクシングやってるんだ」

射程ギリギリを保ち、相手の挙動に即座に対応できるよう軽いステップを取る。消極的、或いは戦意喪失に見える行動をゴンザレスは讚える。

「腹空かせた獣がより狡猾になった。勝利するため、最も近い遠回り

を受け入れたんだ。狩る側としての自覚は学んだらしい」

右利きの選手は基本的に左足を前に出す。

「ええぞ、常に左の外に回るんや。」

「そうすれば向き合うためにワンテンポ遅れる」

リカルドもそれに当て嵌まり、バイオレンスの数少ない避難場所を生むことになる。

リカルドの追従と千堂の回避行動は紙一重の攻防となった。3度、頬を、横腹を横切る暴威。僅か4秒程度の時間を生き抜いて、ざわりと肌を掴まれる感覚に襲われる。

相手はただの無敗ではない。

ボクシングを知り尽くす男。相手を追い、己の行動を分析し、勝利へ邁進するための取捨選択速度が世界一ということ。

次の回避行動、そして反撃を狙う千堂へと急旋回する。リカルドはアツ^直プライト^立へと変更し、フットワークに重点を置く。ここで重要なことは、フットワークに寄せても暴威は薄れない点にある。

(そこ——！)

ポジションを切り替える瞬間、ボディど真ん中に超低空スマッシュが炸裂した。

『あぁーっ！外から挟むようなスマッシュ！』

急上昇する拳に思わずガードさせられた!!』

世界一の判断力を相手にするなら、直感に正確に応えることで差を埋める。ダウンしたときのダメージ回復が間に合った。次はガードを崩すこと。最短かつ凶悪な手段を実行するため両拳を握る。

(っし、足の踏ん張りも利くようなっ——)

前傾になったとき、眼前で赤い光が現実を弾き飛ばしていた。

「ぐッッ——！！！」

『強引さでもリカルドが魅せる！』

複雑怪奇な化学式に挑戦者押し飛ばされた!』

左拳で意識が消えてしまいそうになる。

だからこそ、千堂の闘志はここで噛み締める。世界一を名乗る男といまから殴り合いが出来るのだから。

蹂躪劇と終末論に火がついた。あとは全て灰となる。

「――は！」

息が弾む。

足を止め、リングに存在を知られたが最後、虎の生命は行方を眩ませる。そうなる前に、ここでヤツを噛み殺せと本能が叫ぶ。

ヨダレを垂らす野生児を前にして。リカルドもまた生存本能が全神経を叩き起こしていた。

一息で近距離クロスレンジを踏み荒らし、野生を捻じ伏せる理不尽が羽ばたく。左拳を受け止めたと同時にカウンターを狙う。しかし、千堂の動きを予期したというべきタイミングで拳が先回りした。筋肉の隆起に反応して、視線の移ろいに釘を刺す。

当たっては潜り、潜っては阻止される。思考回数は1秒毎に加速し、千堂の動体視力を上回る暴力装置が次のラウンドの入り口を塗り潰していく。

2人の身長は大して変わらない。だが体格で言えば千堂のほうが大きく、減量後もすぐに体重が戻る千堂がパワー負けするとは思えない。

(身を切っても、骨を砕かれても。キミたちは魂を落とさない限り蘇る)

思えないと、前評判で上げていたものが嘘のような光景。両者の影が交差し、拳が振るわれるたびに千堂の前進が止まる。踏み込もうとすればダメージの蓄積が増す。

幕之内が苦勞し、やつとの思いで後退させた千堂がジリジリと潰されていく。伊達のときのように、幕之内が千堂の威圧に負けてしまったように。

打つ、打つ、打つ、打つ、……。

隙間があれば強引に拳を捻じ込んでいく。

隙間がないなら踏み込んで場所を抉じ開ける。

(その熱意は私の魂まで燃え上がらせる。

攻めているのに、奇跡を積み上げていくキミたちが実に眩しい)

千里を駆けんとする脚力の目前に飛び込んでいく。千堂の拳が繰

り出される軌道上を真っ先に通り抜けた。普通の反射神経なら空振るもの。然し、自慢の脚力で拳の軌道をねじ曲げる。

「ふ———！」

無論、と言った表情で。千堂の拳は肩で逸らされ、振り向きざまに右の一撃を叩き込まれる。

「千堂ッ!!」

宙空から振り下ろされた鉄槌。衝撃音が物語るK・Oの鐘。

柳岡は千堂の意識に叫んだ。いまのは貰ってはいけない拳だった、無理に拳の軌道を変えたから身体が固くなっていた。つまり衝撃が逃させないということ。意識のないところに追撃されれば、最悪なら再起不能。

判断ミスは許されない。

選手を守るため、首に掛けるタオルを掴み取ったとき。

「はっ、温ぬくいで」

「っ」

木漏れ日を浴びて起き上がるように、疲労なくリカルドを見上げる。一瞬、柳岡と交差した視線がその選択肢は早いことを伝えていた。

「千堂……！」

確かにいまの一撃は効いた。ダウンしたときよりも芯を捉えられた。決してバカに出来ないダメージが身体に溜まっていく。蓄積する毒を抜く時間はない、なら意識を保つ方法を見つければいい。

(柳岡はん、そのままタオル握つといてくれ)

柳岡とてトレーナー。選手を無事にリングから降ろすことも仕事のうちだ。相手がリカルドともなれば、幕之内以上に神経質になるのも仕方なく。ならば、己の運命を掴んでいてくれれば意識が否応にも負けを拒絶してくれる。

(ワイの意識を手放すんやないで!!)

改めて覚悟を決めて。退くことをコーナーに置き、脚力に任せて前進した。

『センドー迷わず進む！』

バイオルンス
リカルド相手になんて無謀な男だ!』

口角を上げて、無音の咆哮を放つ。

心臓が活動を加速させる。

(分かつとるわ——)

まだ止まるなど叫んでいる証拠だ。だつて空腹が癒えていない。早く血液を寄越せと心臓が訴えかける。獲物を寄越せ、餌を頬張れ、拳を握れ。そして、一撃をぶちかませ。

(けど、止まる理由にはならん!)

両者同時に踏み込んで、右拳を構えた。だというのに、千堂の右が出し遅れる。着弾するまでにリカルドは打ち終え、ガードする余裕があるだろう。

(ふう…)

力んでいた肩筋が緩む。首の筋肉繊維が緩和する。大きめにヘツドスリップし、常識よりも大きい軌道の右ストレートにサヨナラを告げた。

「か、躲した!」

幕之内が驚愕の声を漏らす。

それほど速く、そして巧い回避だった。満点と言える行動はそれでも、千堂の右頬を掠めていった。回避する直前、リカルドが軌道修正をした証拠。もし紙一重を狙っていたのなら、呆気なく千堂はリングに沈んでいただろう。

頬が切れ、血が笑みの向こうに消える。

手応えのない右拳の下で虎右拳が大口を開けた。

「センドーに当てるために右に修正を入れた。

ワンテンポ遅れたこれなら…!」

ゴンザレスが興奮で両拳を握りしめたとき。

千堂の牙が狙いを定める。ここに思考は挟まない、挟んでは逃げられてしまう。既に、打つ場所は決めていた。

当たり前のようにガードする腕の感触は、まるで機械のように硬い外殻。

ガードされた。

絶好の機会を取り逃がした。

(なあ、それ無限ちやうやろ)

(恐ろしい直感を持っている)

大半の観客がそう思った直後、2人の立っている場所を見て気づく。

『こ、コーナーだっ!!』

あのリカルドがコーナーを背負わされている!!!』

第1ラウンド、最後の10秒を切った。

誰が予想しただろう。追い詰められたリカルドの姿を。

「重要なのはそこじゃねえっ!」

「あっ……千堂さんの左が肩で隠れてる!」

スイッチという自覚はない。事実、これはスイッチではない。野生の勘が辿り着いた、神話を落とすための必殺。

身体に染み込んだ愛用の拳を見切るのは困難。たった今、コーナーに背中を預けたことにリカルドは驚異を感じている。何十年と忘れていた生命の危機に、ゆつくりと眼光を広げるほどに。

——左っ)

(遅い——!)

それでも、軍神の見切りが虎の直感を捉える。

この瞬間、技術が入る隙間は千堂が潰した。いかに速く、最大火力を以って相手を捻じ伏せるか。鍛錬の積み重ねと勝利への執念が差を作り出す。

いま、死角から逃げ場のない必殺が放たれた。

(間に合わない、か……!)

必殺の牙が血肉で空腹を潤していく。

神話の玉座に響き渡る新星到来の音。

伊達ですら届かなかった場所にいま、骨が軋む音を合図に会場中の観客が立ち上がる。

「直撃だ!やりやがった!!」

「スマッシュ!あの威力ならチャンピオンでも問答無用で足が止まりますよ!」

リングに同化させんとする勢いで左を打ち込んでいる。身を持って体験している幕之内、ゴンザレスもまた歴史の針が進んだことを実感した。

(畳み掛けるで！)

針が1つ進む。静止する玉座へ向けて右拳を構えた瞬間、特大の空が落ちてきた。

「か、え……………?」

滑空する飛来物は地上の生命を轢き、止まることなく遙か後方へと昇っていく。

「なっ…!?!」

「あれが効かないのか!?!」

リカルドの赤いグローブは威光が衰えることもなく、試合開始前と変わらずに相手を見据えていた。

(重い……………。この牙が急所に入れば、私でも顔を歪めていた)

3分前の彼と違うところは1つ。バイオレンスに身を委ね、蹂躪と手を繋いでいること。

(だが、急所を外す術を知っている。急所以外の直撃では、同階級で私を倒すことは出来ない)

(ツつ~~~~、くそっ!)

千堂の右が空振り、内側で最強のインファイトが溜息を吐く。1つ、2つ、3つと、獐猛な獣を宥めながら血を浴びて。

(ありがとうグラシアス、そして————)

後退していく獣と視線が合う。まだ拳を、牙を見せる勇敢な漢へ激励を飛ばしながら右を放った。

(叶うことなら、また戦いたいと強く思う。

何度も私に挑戦する、マチャモスゴンザレスのように)

どてん、まるで中身のあるドラム缶を倒したように鈍い音を上げて転がる物体。

1ラウンド残り1秒。

駆けつけるレフェリーを他所に、リカルドは自陣へと足を進めた。

「そんな……………バカな……………!起きて、千堂さん!!」

「——センドー……ダメなのか」

会場中が沈黙する。

千堂のスマッシュをまるで意に返さず、悠然と暴威を奮った。幕之内も、ゴンザレスだって、あのスマッシュに苦しまされるほどの逸品。伊達ですら与えられなかった直撃が灼かれた。漂う絶望感はこれからリカルドに挑む男たちに向けたもの。幕之内、ゴンザレスにとつてあまりにも高く、手の届かない存在だと思わせるのに十分な結末。思わず俯いたとき。

大きく、リングを踏み締める音が耳に届いた。

「なんや、葬式みたく黙りおって。」

そんな顔見たくて、立つとるワケやないで……」

肩で息をしながら、千堂が立っていた。

誰の目にも結果は分かりきっている。柳岡でさえ悔しく涙を流していた。もう、勝ち筋が見えない。この先、無敗神話は塗り変えられないと決めつけて。

千堂 武士というボクサーがそんなもの、易々と受け入れるはずがないということ忘れて。

「——立てるのか」

勝機があるかは些細な問題。

リングの上には勝ちと負けが存在する。リカルドは無敵に近い存在だということは認めている。だからと負けない保証は誰にも出来ない。

「次、そのツラをギタギタにしたる。待つとれ……!」

そんなものがあるとしたら。

それこそ獣の餌と成り果てるだろう。

世界最高峰

1ラウンド後のインターバルとは思えない姿にセコンド陣は言葉を失っていた。目の前で足掻こうと息をする生命に、これ以上の狩りなどさせられるわけがなかった。

「千堂、よー頑張った。まだ1ラウンドとは思わへん、よくリカルドの猛攻に耐えてきた。それだけでも大金星や」

柳岡はトレーナーとして助言した。励まして、しっかりと宥めて、心の底から己のボクサーが強いと言う。リカルド・マルチネスに一泡吹かせたのだ、あんな芸当は100年に1人しかなし得ない偉業と言ってもいい。

「ゆっくりと……っ!？」

グローブの手のひらで言葉を止めて、まだ言うなど千堂が訴える。「今しか出来へんことがある。一生後悔しないよう戦うんや」

息も絶えかけているのに、はつきりと言葉を繋ぐ。

リングに立ちたいと想いを告げる目頭に、この場から離れたくないという感情が詰め込まれている。

「柳岡はん、最後の最後まで待ってくれ」

限界すら餌でしかなかった。

相手がバイオレンスであること。難しいことを考えず、本能のままに動ける場所だからこそその懇願だ。

「ああもう分かった! 思いつきりぶちかましてこい! 限界ギリギリまで見守つとるからな!」

止めるすべはなかった。

最後の幕引きを手にしながら、死力を振り絞る我がボクサーの背中を押していた。



2ラウンド開始のゴングを前にして、地元のファンたちは珍しく騒めいていた。リカルドの試合とは思えないペース、芸術に等しいボク

シングから遠い展開。これまで観てきたのは美しく、そして絶対に主導権を握らせない徹底した試合運び。過去を振り返れば確かに似たようなことはあった。しかし、ゴンザレスを相手に力で振じ伏せたあときは、全弾カウンターを合わせる余裕は見えていたのだ。

「いつもは鑑賞している観客たちが驚いている。今日の君のボクシングは確かに物珍しいからね。」

どうした、随分とやる気じゃないか？」

セコンドのビルもまた、冷静な姿とは似つかわしくないリカルドに疑問を投げかけた。もしも、偶々気分が高揚し過ぎているのなら制御しなければならぬから。

「彼を見ていると色々懐かしいものを思い出す。少なからず浮かれていたんだろう」

最も、ビルがリカルドの気を宥めたことは随分と昔の話になる。

「安心したまえ。」

いつも通り、このラウンドで仕留めよう」

もう必要がないと分かり、頷いてリカルドを見送った。



瞬きの摩擦音すら空に届くような静寂が漂う。インターバルの1分間、千堂を見守る応援団だけでなく、地元民すらもが試合継続はしないと思っていた。もう決着は分かっている、このまま若い芽を摘む必要がどこにあるというのか。

普通ならそう思うものの、異様な静寂が否定するのだ。史上初の統一戦はまだ続くと。続けてしまうボクサーがそこにいると分かってしまう。幕之内に敗れた男、ゴンザレスを越えた男だから。

どうか、逆転を。どうか、無事に。

相反する想いを叶えるように、千堂が立ち上がる。

肩で息をして、既にフルラウンドを戦った姿と変わらない。もう投げ出しても彼を責める者は多くないだろう。それどころか、渾身の一撃が通じなかった事実を浮き彫りにしただけで戦果は十分なはず。

「千堂がやるんや……ワイらが黙ってどうすんねん！」

「声出せ！応援や、千堂を励ませ！」

「千堂！大阪の底力見せたってや！」

応援団はそれでも背を押す。千堂を止めることを忘れて、人類未踏の地に踏み入れることに期待を込めた。

期待の熱が再び会場に溢れていくなか、2ラウンド開始のゴングが鳴る。

（―――つ）

瞬間、リングの隅から肌を割るほどの冷気が侵攻を開始した。握り拳を両手に駆け出そうとした千堂を押し止めるほど、温度は目に見える形で白い息を吐く。

（……………まさか、止めたんか？）

千堂の対角線上で神が暖気を吸い込んでいく。会場を暖めておきながら、一気に熱を奪い去るステップ。宴の後始末をする使用人の如く、摩擦を最小限にして黙々と仕事に戻る姿に誰もが戦慄した。

「お、おのれ……あの男、流れを断ちよった……」

柳岡はリカルドの意図に瞬時に気づく。

しかし、千堂に届けるよりも前に試合が動いた。

「おい、勝ち逃げすんなや！」

「待て！落ち着くんや千堂！」

リカルドはバイオレンスを空の向こうに納める。手負いの獣が知性を捨てて、喉元を喰らうことだけを考えて疾るのだ。

（あと何発打てば終わるのか、君たち^{ハボン}に対しては私にも分からなくなつた。だから、せめて……）

携える武器は百戦錬磨の右拳。

（誇れるような敗北を贈ろう）

神体に向けて剥き出した牙。

絶滅危惧種に贈る称賛。

偶然にも呼吸が重なった一撃が両雄から繰り出される。

会場中の呼吸が止まる。間違いなく試合の決着はついた。もう語るまでもない結末に一瞬、軍神が笑みを見せたのは気のせいか。

「いま、勝機を逃したで？」

「ふ」

決着をつける、そのための一撃だけは読み切ることが可能だ。ゆえに千堂は頭をずらして、頬の肉を犠牲にして生命を繋ぎ止めた。

リカルドの口元が上がったが、千堂は気に留めることをやめた。そんな余裕はここから先に持っていけない。一撃の被弾で体力をこれでもかと抉る男を相手に、隙を見せてはならない。

2ラウンド開始10秒、すでに試合は太陽に近づく蛮勇と化した。いつ、獣の肉体が灰となってもおかしくはないのだから。



長く、無敗神話の刻は歴史を積み重ねてきた。

永く、そう、何人ものボクサーを倒してきた。

「バイオレンスも駒だった。敢えてやる気を出させ、インターバルを挟んだ瞬間に出鼻を挫くためにな」

ゴンザレスが唇を噛みしめながら言い放つ。

「どうして……？これまでリカルドさんは、そんなことしてこなかったじゃないですか！」

「必要無かったんだよ。精密機械に徹するだけで相手は倒れた。だがセンドーはリカルドに脅威だと判断されたんだ。全力で、最初のうちに倒さなければならぬとな」

ペースを崩される前に千堂の猛りを潰す。

合理的で、最も理性的な手段。

なにも、精密機械が本気ではないとは言っていない。精密機械でさえ強すぎるだけであり、バイオレンスでは相手を殺しかねなかったという話だ。

リカルドはいつも本気で相手を倒してきた。常人を相手に手加減はない。更に彼らを越える者に対して、更なる対抗手段を解放しているだけのこと。

「だがこんなのは初めてだ。」

一気にバイオレンスで片をつけてきたはず……！」

ゴンザレスの困惑も、幕之内の悔しさもいまは蚊帳の外。

「ぐ、ツッ……」

リングの上で2人の男が前進とサイドステップを複雑に繰り返す。
いや——。

「千堂さんの動きが読まれてる!？」

勝機を探す千堂を、片っ端からリカルドが押し潰している。

ゆっくりと前進してくる。関係ない、左を打ち抜いた。

外を回る。読んでいる、既に左を放って次に備える。

ならば内。冷徹に左で払い落とす。

『左を3つ——ツッ！打撃音はストレートの域だぞ！』

鼻血を出しながら、生存本能がけたたましい警告を響かせる。

踏み込んだ瞬間、積み上げた経験全てを落としかけた。

生存本能が叩き出した最適解に千堂が打つ拳は空振り、リカルドの

拳だけが急所を突く。

「め、滅多打ち……」

「こっからペース取り戻すのは至難の技だ」

獣を躡ける鞭は世界最高峰の左。

生命を消し飛ばすほど速く、ゴンザレスとの試合の経験がなければ

既に打ち破られていた。

「逆に、ひっくり返せたら勝ちに近づく!どの道こうなるんは想定済

みや、このためにゴンを倒したんやからな」

1秒ごとに上がる心の温度を。

無敗神話の拳が1秒ごとに冷ましていく。

「王者のインファイトに付いていけてる!」

「スレスレだな。急がなきゃ見切られるぞ」

天井はない、底もない。

打ち上げるか、叩き落とすか。

栄光と絶望が交差する世界で、千堂の激情が白い牙を剥いて、常に

リカルドの喉元を狙い定める。

「」

横に逃がさないと大きく踏み込んで右アッパー。…を途中でテンプルのガードに切り替えた。

「ぐっ…い」

最短距離を真つ先に駆けたのはリカルドの左フック。

これは失敗した。相手のカウンターを見ようとするとするあまり、先に打ち終わることに集中していなかった。だが、1つ教訓を得た。リカルドの観察眼は千堂を…いや、リングに立つ者の全てを見通せる。

大袈裟じゃない。でなければ数秒後、きつと自分はマットに伏せている。

前足が地面を抉る。

まだ意識がある、これじゃダメだと警告した。身体が心と混ざれていない、意識を繋げるものは経験のみ。

リカルドに近づくための攻防、受けてはならない攻撃を何度浴びただろう。

(まだ、立ってられる)

単調な突撃となり数度、意識が点滅し始めた。

肉も、骨も、削げ落ちて構わない。

(まだ、諦めへん…)

だから、心だけは渡さない。

幾千戦い、幾万倒れようと。

幾億、勝利へ手を伸ばせ。

(エイジ、キミが見せた執念をいま目の当たりにしている)

冷酷に打ち抜きリカルドは、攻め続ける千堂の瞳にかつての死闘を重ねていた。あの日、初めて敗北の文字が脳裏を過った。普段では考えられないミスをして、肉体では説明のつかない耐久力に苦戦したのだ。

故に学んだ、日本人に感情移入は禁忌である。最早、ここにミスは一切介入出来ない。リカルドが徹底して排除に乗り出しているからだ。

(闘志を煽られる。闘争本能に身を委ねなくなる熱気だ)

それでも、自らの勝利が盤石のものとならない。何度打とうと迫り

来る漢が、リカルドの勝利を認めることなく吠える。

(折れへん、この拳を振り上げるまでは止まらん！)

突撃を繰り返し、息が潰えようとする直前で。リカルドの左拳が真横に弾き飛ばされていた。

「センドーのパリイが成功した！」

「予備動作がありません、完全に不意を突いた！」

これは勝敗を賭けた試合ではない。

互いが望んだ試合は1つ先にある。

2つの最強が同じ舞台に立つことはちよつとした過ち。

獣食いの途中経過、或いは神の気紛れとも言える。

己の目的を果たすために敵を仕留める、獣と神の生存競争せんさいに他ならない。

(降りてこいや、リカルド)

ここで行われていることは神話創造の積み木ではない。

全戦全勝を築いた汚れなき土台を噛み砕く、神の精密機械を狂わせる事件なのだ。

凍てつくリング、冬眠を強制する舞台で。

最後の熱を込めて、神話の織りなす絶望に抗い右拳を放つ。揺れる世界、ぐらつく視界を見つめながら、肉体に起きた異常の一切を知覚できずに拳を緩めていた。

獣は愚かにも反撃を試みて、飛んでいく。

マウスピースも、渾身の右も、王者を見ていた意識すらも。

「…」

右と右が交差し、リカルドのみが神話を綴り続けていく。

グローブ越しに血が塗れているのを確認して、瞳が虚を眺めていると知り。あとは前のめりに倒れる獣に、ありつただけの称賛を心のなかで送る。

「くそっ…！」

柳岡は決着を見届けてタオルを握った。リカルドが更に一撃を入れようとしている、あれは命に関わるものだ。打たせてはならないと、タオルを投入しようとして。

「リカ、ルド……」

人間に備わるリミッターに音が備わっているのなら。いま、獣が呻いた声がソレであると柳岡は直感した。

その鳴き声にタオルを投げ入れる手が止まる。否、止められてしまった。本能に訴えかけるなにかがあつたのだ。

リカルドは、それを見逃していなかった。

(生き残ってみせろ、絶滅危惧種)

大地を凍えさせる戦略に順応し、太陽に焦されながら剥き出しの野生が疾る。負傷を背負つてなお1ラウンドのスピードを上回る拳に、リカルドは軽々と左を返してみせた。

「ぐっ——」

寸分変わらず、顎を打ち上げる右拳がリカルドの下から打ち上がる。

「相打ち!!」

「ロープ際、千載一遇の勝機だ!」

強引にも右を引き戻し、警戒して上げていたガードをかわして直撃させていた。リカルドにも読めなかつた刹那の挙動は、今宵最後の機会を手繰り寄せた。

(限界を越えたか)

意識は混濁したまま、身体を狩りのために洗練させる。一瞬の攻防で一気にロープを背負わせ、思考が定まらないうちに首を噛む。

(あ、あ——!)

浪速の虎が玉座に近づく。

無敗神話の壇上に立つ代償は計り知れなかつた。たった1分の暴威によって筋肉繊維は切れ、肺には氣道から焼けただれたように激痛が走っている。長くは保たない。

軍神を相手に一発逆転は愚者の妄想。しかし、あらゆる幻を噛み切るだけの牙を千堂は有している。

あまりにも熱い黒煙を切り裂いて、神体の影を踏みしめた。

「な、んやと……」

晴れた視界、空振る拳。

聳り立つコーナーを見て、瞬きのうちに身体を入れ替えられていた

と気づく。

軍神は後ろで、悠然と拳を携えた。

リカルドの右が顔面に着弾する。

しかし目標地点が迫り、打ったりリカルドの腕ごと押し返されていた。抗うどころか更に踏み込み、節々に力を伝達する。カウンターなどではない、ただ力任せに後出しするための溜め。

左右で握り込まれる牙が閉じるよりも早く、この事態を予測していた左拳が顎を砕き上げる。手応えがある、だがリカルドは足りないかと断定し、踏み込んで陽を払うが如きボディブローを打ち抜いた。

（いま、意識を絶った――）

瞳が落ちていく。天を見上げながら、太陽に別れを告げる。墓標のように迫り上がる、虎の牙を見落として。

「なっ――」

目視不可能にまで研ぎ澄まされた野生。勝利に執着する獣が辿り着いた、神破りの境地。

「

リカルドの右頬に減り込んだ拳骨。

驚愕に視界を見開く。ガードも忘れて、この反撃を受け入れることを受け入れてしまった。リカルドの身に駆け抜ける人生初の予感、ダウンのイメージに身体が囚われていたのだ。

1歩、2歩と後退する。

目を見開いて、右頬にグローブを当てて、肉が付いていることを確認する。

己の肉体の無事を確認して、遅れて相手を見た。

勝利に手を伸ばす、絶滅危惧種を。

「な……………ん……………」

コーナーに寄りかかりながら、軋む心が訴える。

まだやれる、と。

「ど……………でも……………」

同じ身体でたりながら生存本能は訴える。

機能を停止しろ、と。

決意、継ぐ

覚醒する意識が浮遊状態からゆっくりと地に降り立つ。白く覆われる世界を眺めながらも、身体に籠もる熱気がここは雪国ではないことを伝えていた。

「……………あ、？」

「起きたか千堂。まだはつきりと意識あらへんな、急に起き上がるんはアカンで？」

慣れ親しんだ声が届く。

不思議なことに身体の筋肉が焼けたように痛い。言われた通り、横になって寝ようと目蓋を閉じたとき。

「柳岡はん、なんでワイは寝とるんや」

何気ない疑問が口を突いて出た。

「試合は……リカルドと殴りあつとつたはず……」

自分の口で、もう目の前にある答えを遠ざける。

分からないと言葉にしながら、もう答えは分かっていた。

「千堂、お前が初めてなんやで。リカルドに、誰もが領けるK・Oパンチを当てたんや。胸を張って帰ろう」

柳岡の言葉を聞いて、千堂はようやく現実を追いつく。

思い返せばハッキリと自分がK・Oされる瞬間を覚えている。リカルドに叩き伏せられ、コーナーに背を預けながら情けなく意識が落ちていく。頬にべつたりとこびり付いた敗北の印鑑。

「また、皆んなの期待に答えられへんかった」

「観客の皆さん、お前のことゴツツ褒めとつたで。大阪の誇りや言うとつた。また復帰してほしい、ともな」

だが、届く言葉は思いに溢れている。

暖かい熱意に応えたいと感じたのは、まだ戦える証拠だ。

「幕之内とゴンザレスもおつたんやが、今日のところは帰ってもらおうたわ。幕之内はお大事に、と。ゴンザレスのほうは、任せろ言うとつたわ」

2人とも心配していたことがよく分かる。ただ、今回の試合は過去最も打ちのめされた。心からの戦友に、そんな男の寝起きを見てほしくないと理解する柳岡には感謝しかない。

そして、リカルドが会見のときに言っていた感謝の証を、ゴンザレスの伝言でようやく認識する。

「……そんなことかい」

世界前哨戦、などと。

この試合に込める熱意は、リカルドと千堂であまりにも似ていたのだ。

「ゴン。思いっきりぶっ飛ばしたってや。

………負けてもうた、ワイの分まで」

沈んだ拳を見つめながら、独り呟いた。



時間は1時間前に遡る。

2ラウンド2分12秒。

リカルド・マルチネスと千堂 武士、フェザー級の頂上決戦が終わりを告げるアレナ・メヒコ。

「馬鹿な………千堂さんが、2ラウンドで……」

自分でも驚くほど掠れた声で、幕之内はリングの上で横たわる好敵手の姿に困惑してた。2度の試合、激闘の末に勝利したとはいえ、フェザー級でもトップレベルの耐久力を誇るボクサーだ。

それをこうもあっさり倒した男に身震いする。日本で対峙したときよりも強い男の拳は、無敗神話を揺るがすには遠く及ばなかったのだから。

「……呆れるぜ」

隣で舌打ちしたのはゴンザレス。

柳岡たちに介抱される千堂を見ながら、まだ試合の感覚に浸っている。名残り惜しいと感じているのはどちらか。リカルドが浮かべる表情を見て、ゴンザレスは初めて見る姿に怒りを孕ませて呟く。

「どつちが勝ったか分かりやしねえ」

神の壇上、無敗神話史上初の統一戦を終えて祝福を受けるリカルドは物足りなさを隠しきれずにいる。インタビュウに移り、即座に潜ませた感情は大きいようだ。

タンカに乗って去っていく千堂を見ている瞳から、そう捉えた観客ばかりだろう。この会場で、片手で足りる人間を除けば。

(シな顔、センドーに失礼だろう)

苛立ちに引きつりながら、1人の友の勇姿を掬いに立ち上がる。

「ゴンザレスさん…?」

階段を降りていく姿に声をかけるが、重なるように前方の席から軽快な声が響く。

「は〜い！次、僕やりたい！」

「……あれは！」

幕之内が聞いたことのある声。

陽気で悠々としたテンポとは裏腹に、彼の試合ほど自由なものはない。

「なんだ、ガキは引っ込んで…」

礼儀のない主張に苛立ちを見せる観客たち。そのうちボクサーに詳しい観客が人差し指を向けながら叫んだ。

「こ、こいつウォーリーだ!?!」

「ジュニア・フェザーの世界王者か!」

さまざまな反応を見せるなか、ぴよんと跳ねたウォーリーはリングの上のリカルドに笑顔を向ける。

「次はまた半年後？」

僕は明日でもいいよ!だからリカルド、戦おう!」

彼が何故ここにいるのか。

疑問を抱けるほどの余裕はなく、

「——私は」

「とんだ来客がいたもんだ。

センドーの試合、俺以上に気に入ったか?」

コツン、と。リカルドのセリフを遮る小さく高い足音。死神の身体

が陽の前に顕れる。

「ゴンザレスだ…！やっぱり来てたか！」

「あんな試合観たあとなのに元気だぞ？」

「そりや3度目のリベンジする気なんだからな」

観客だけでなく、リカルドの視線もゴンザレスに向けられた。

「あ、ゴンザレス！うん、やっぱり強かった。マクノウチと戦ったボクサーって、僕をワクワクさせてくれるんだもん！」

「マイクを握ってるのは主役だぜ、誰だろうと礼儀のないやつに発言権握る資格はねえよ」

「ごめんね、つい舞い上がっちゃった。こういうのは順番があるもんね。ゴンザレス、次は僕と試合しない？」

慌てて仲裁に入ろうとした幕之内の足が止まる。にこやかに微笑むウォーリーと、無表情でほくそ笑むゴンザレス。一帯の時が止まったと感じたのは何秒のことか、幕之内は割り込む方法を見つけられず。

「はっ、そのときはWBA王者としてだ。」

美味いもんは2つ一気に食べられないからな」

「僕なら続けて食べちゃえるな。ゴンザレスは上品だね、ここにコーズ料理みたいなマナーはないよ」

合図などはなく、ウォーリーの横を通り過ぎていく。交わした言葉のなかに、次の試合の行方があるのかは分からない。少なくとも、リングの前で立ち止まるゴンザレスの目に映るものはただ1人。

「準備は出来たか？」

「こつちのセリフだ」

天上からの宣戦に冥府が応答する。

無表情にまで抑えていた感情が滲み出て、表情にヒビが入る。見上げる死神のローブになにを見たのか、リカルドは静かに頷く。

こうして、史上初の統一戦は終わりを迎える。

アレナ・メヒコから立ち去る勇士たちは各々の決意を実現するため、大空を見上げて笑う。

「ここから、俺の人生で最も濃密な時間になる。」

ただか2回負けたくらいでなんだ。タケシはあそこまで果敢に挑んだぞ」

アルフレド・ゴンザレスは己を奮い立たせた。

戦友たちが駆け上がり、そして停滞した時の真ん中を往くのは誰のためか。ここで絶やしてはいけない想いが数多く積み重なっている。それこそ、夢にまで見るほどの光はすぐそこに。

「センドーが届かなかった拳、俺たちが繋いでみせる」

掲げた右腕に2つの影が重なる。

誰よりも諦めずに進んできた男たちが、最後の舞台へ向けて進み始めた。

Gonzalez's Determination
2023・SUMMER!!

限界の先で待つ者

「よオ一步、こんな時間にどうした」

月が地上に現れて一刻。

鷹村の家のインターホンを鳴らし、俯いた顔を上げきれずに幕之内がメキシコ土産を手渡した。返事はせずとも土産を渡すところを見て、大体のことを察すると鷹村は気楽に家に招いた。

「飯は食べたか？」

「はい。ここに来る前、青木さんのところで」

「そうか。外国から帰って食うラーメンはどうだった？」

「……………美味しい、はずでした」

鷹村の部屋に上がりながら久しぶりの雑談を交わす。

覇気のない一步を見て、こりや重症だな、と内心で呟く。

幕之内の好敵手、千堂がリカルドに負けた。

接戦ならまだ気分が違つただらう。だが、敵地で目撃した散りざまは無惨なものと言わざるをえない。

鷹村の目から見ても、勝機は1、2割だった。ただ勝機はあり、リカルドが勝機を徹底的に潰してきた。

「千堂の試合、観たぜ。」

千堂のやつ、かなり良いところまで…」

「僕、少しだけ失礼なことを考えていたんです」

それを指摘するのは後回し。

今夜だけは慰めてやろうと気を回した直後、幕之内は要らないとばかりに言葉を割り込ませる。

「リカルド選手はボクサーとしては最古参。年齢は30代半ばです。肉体的にも全盛期は越えていてもおかしくはありません」

「外人は日本人より肉体のピークは遅いが限度もある。リカルドの全盛期は過ぎてるのが普通だ」

レフェリーストップも少なく、選手生命は10年程度もあれば長いほうだ。それをリカルドは15年を過ぎようとしている。

一重に、現役でダウン経験無し、被弾率ワースト2位という数字が

選手生命を伸ばしていると言えた。

「減量の管理も完璧だからこそ、現役をあそこまでやれるんだろうよ」
「伊達さんとの試合と変わっていない…いや、強くなっていた。あの人は自分の限界を上げ続けているうよに見えたんです」

自分の目で見えてきた幕之内の身体は震えていた。両拳は握りしめて、正座する膝の上でいつそう力を強めている。

「一步、リカルドを倒す道筋は見えるか？」

それを見た鷹村は問いかける。

「お前が引退してもうすぐ2年だ。千堂がリカルドを倒すとも考えたが…。まだ間に合うかもしれないねえな」

「…まだ、届くでしょうか」

「リカルドは負ければ強制引退の歳になる。いまんところ、フェザー級でヤツと張り合えるのは1人くらいだ。本人が引退しない保証もねえ。

一回限りの宝箱、最初に開けるのは誰だろうか？」

幕之内の震える両拳を見ながら、鷹村は笑ってみせた。

俯く顔は気落ちしているからではない。

「やることが多くてワクワクすんだろ」

「——はい」

伊達 英二との約束。

千堂 武士の敗北。

板挟みの現実に苦悩していた顔は、鷹村の言葉を聞いて晴れていた。

活気が戻ったところで、鷹村はゴロンと寝そべる。

もう気を遣わなくていいと判断したからだ。

「あーあ、せっかくオレ様の3階級制覇が決まったのによお。驚かせようと思っただけでそういう雰囲気じゃないな」

「えっ!?!」

わざとらしい抑揚で特大ニュースを言い放った。

「ついにですか！相手は誰ですか!?!」

「本当ですか鷹村さん!?!」

「相手は!?どこの団体すか!？」

すると、ガチャリと家のドアが開いて青木、木村が飛び込んできた。

「テメーら外で聞いてやがったな!!」

いつだ、いつから居やがったア!？」

「ぎゃー!」

2人を蹴り飛ばす鷹村。

幕之内が宥めて数分、落ち着いたところで対戦相手を告げる。

「ストリクス・ワール。WBCの王者だ」

「あつちで人気の王者じゃないですか!」

「イーグルといい、良く日本に呼べましたね」

「どのくらい強いんですか!？」

「オレ様より弱いに決まってるだろ!」

賑やかな夜はこうして終わりに向かっていく。

過ぎた試合、新しい未来を聞いて、3人は帰宅した。

—
—
—

「気晴らしに丁度良かったぜ」

3人が帰ったあと、鷹村はビデオを手にした。

「ワールも強い。だが…こいつに勝ったヤツが上にいる」

“ ティム・フェザント vs ストリクス・ワール ”

それはワールがライトヘビー級にいた最後の試合。

ワールが手も足も出せないまま敗北したビデオを再生する。

「もう、ダメーシ抱えてる余裕はねえんだ。

次のベルトは無傷でふんだくるのは最低条件」

鷹村はワールとの試合の勝利を確信していた。

油断も驕りもない。イメージトレーニングで結果は出せている。

ただ、そこには完璧だけが描けずいた。

「手始めはミスマツチレベルに仕上げる」

鷹村の夜はいまから始まる。

肉体の疲弊が来るまで、最強を突き詰めるために。

ゆっくりと目を閉じて、目蓋の裏に現れる最強の男と対峙を開始した。



時は流れ、WBCスーパー・ミドル級タイトルマッチ記者会見後。

鷹村たちは帰路に着いていた。

「ふあゝ」

「随分とリラックスしておったな。これまでの記者会見とは正反対で逆に心配じゃよ」

気が抜けたように欠伸をする鷹村に鴨川はため息を吐く。

「本当に大人しかったですね。」

受け答えも紳士みたいでした」

「お相手さんも挑発するような人じゃないからな。記者たちの鷹村さんを見る目、キミ悪がってたぜ」

「鷹村さん、本当にどうしたんすか？体調が悪いつてわけでもないでしょう」

気にかける言葉を軽く流すと。

「答えは明日出る。」

会場に来るもの全員が愕然とする試合を見せてやろう」

そう静かに答えた。

研がれた集中力に全員が生唾を飲んだ。

3階級制覇の夜はすぐそこに迫る。

ストリクス・ワール

輝かしい成績を修めたオリンピックアンボクサーがいた。

その時代、彼は2人の同期とともに金メダルを獲得し、当たり前のようにプロへと転向。各々がライトヘビー級の各団体へと進出後、瞬く間にK・Oの山を築き王者へと至った。同世代が1つの階級で火花を散らし、彼らの人気は加速するばかり。

3人のプロモーター同士が入念なスケジュール調整を行なっている間際、亀裂は走る。

『なんてハプニングだ！予想を覆すキリング発生！』

ライトヘビー級、決戦前夜の王座陥落劇が起きた！』

三つ巴の輪を断つ者が現れた。試合間隔を開けないために、あからさまな格下：かつてオリンピックピックで圧勝したボクサーと組んだ。それが間違いだっただの。

B級ボクサーの名はストリクス・ワール。

オリンピックで惨敗。銅すら手に出来なかったワールは、プロで12ラウンドを戦い3―0の判定勝ちでWBAのタイトルを奪取。

8勝4敗2K・O、華やかとは言えない戦績から大番狂わせを起こし、一躍注目の的に。

『ま、まさかだ?!WBC王者も撃沈！』

ワールのパンチが無慈悲に全て当たったア！』

ワールは特段強い部分があるわけではない。

ただ、純然たる誇りを持っていた。

『この男やりやがった！ついに3団体のオリンピックを撃破！レジエンド・エイジ全員を1人で壊滅させるビッグスターの誕生だ!!』

1試合ごとに着実に成長して勝利を掴む。

敗北から学んで強くなる。どん底に立つ恐怖に屈せず、注がれる光全てを飲み込んだ。

3団体統一時点で12勝4敗4K・O。

王者君臨以降、ワールの成長は止まるところを知らない。

やがて刻は経ち、群雄割拠のスーパー・ミドル級。

3 団体中最強の男として君臨したとき、日本の鷹がついに現れた。

ジムの片隅、お気に入りへの定位置で資料を片手にドリンクを飲むワール。毎朝、陽が昇る前から活動を開始する彼のルーティンの1つである。

朝6時には身体の調子が整い、朝食で野菜、穀物、そして肉類を戴く。普通の人間ならばワールの食卓を見て頬を引きつらせるだろう食事量。ワールは陽が暮れてから食事を取ると体調が悪化する、不思議な体質持ちだ。そのため、朝に夕飯、夜は軽食で済ませている。

「よう、ワール。今日は誰のデータを見てるんだ」

ワールの背後から声をかけてスポドリを差し出す男。

「おはよう、ザック。いま最もアメリカの興味を惹く男、タカムラの試合内容さ。このためにジャパンの知り合いに記事を送ってもらったよ」

「…へえ。あの異常者が次の対戦相手か」

ザックと呼ばれた男は大きな欠伸を1つ放つ。

さした興味がなさそうにワールの傍らに置かれた資料を手にとった。

「30キロ近い減量たあ、いま見ても呆れた男だ。どうやってホークを倒すか考えてた頃が懐かしいなあ」

「彼はブライアンを倒し、あのイーグルさえ根負けした男。凶気の減量を繰り返す精神……こちらが王者だと忘れるほど緊張している」

「ははあ、そんな相手の挑戦をよく受けたな。そろそろ消化期間が来たからか?」

「うん、勝算を見つけた。

彼に勝てばタイムを倒せる。そう思えたんだ」

資料を置いたザック。

ワールが階級を落とした頃、鷹村の破天荒すぎる戴冠を見届けた。あの興奮の渦に飛び込むため、周到な準備を整えてきたワールが自信げに言うのだ。ザツクの期待値が上がるのは仕方のないことだった。「へえ、あの化け物も射程に捉えたか。あいつに勝てりや近隣に敵無しになっちまうな」

「いいよね、そうだったら。けど、ザツクには負けっぱなし。2人を倒したら、次は君なんだよ?」

「ん〜?ま、考えるのはまだ早え。」

おめーさんはマモルに専念することだ。なにするにも時間が掛かるサガなんだ、早くしねえと勝てなくなる。ほれ、急いだ急いだ」

背中を叩いて、ザツクは寝ぼけた意識にゆっくりと闘志を流し込んでいく。

「世界中の頂点たちから生まれたアヒルの王様。」

おめーさんなら日本最強のボクサーを倒せるよ」

「バカにされたのか、褒められたのか分からないんだけど?」

「コヨーテの言葉を鵜呑みにすんな」

鷹の翼を腕もいでみたい。

即ち後輩の負けを少しでも願ったことを詫びるように、体調万全のボクサーの練習相手に名乗り出ていった。

前座に立つ者たち

スーパー・ミドル級タイトルマッチ当日。

招かれた選手層はフェザー級が半分を占めていた。

日本タイトルに挑む星 洋行。

東洋タイトルに挑む今井 京介。

そして――。

『打つ、駆ける、そして打つ!!』

3度目の復帰戦を迎えた板垣、8ラウンド目もヒットアンドアウェイを完璧にこなしています!!』

東洋ランカーに挑む板垣 学。

早い者順で板垣が先陣を切ることとなった。

鷹村に良い結果を繋げるため、会場中が声を上げて応援していたのも5ラウンドまで。

対戦相手は中国のインファイター。ハンマーナオ本来のスタイルを思い出させるような荒々しいボクサー。反則技を織り込んで板垣に接近を試みるが、全てを逆手に取られていた。

「文字通り、手も足も出ない状態だ。」

反則すら通用しないせいで頭に血が上っている」

「情けない男や。板垣のこと舐めたんが運の尽きやで」

第10ラウンドを迎える試合をモニターで観ながら。

控え室でそう語るのは京介と洋行。

「アマの試合観とる気分やったわ。次元が違うが」

「ポイントを取られたのは2ラウンド目だけ。好戦的な板垣らしくはないが、むしろハマっている」

度重なる不調、そしてハンマーナオとの試合で敗北。

あそこからどう立ち直るのか予測不能だったのはファンだけでなく、京介たちも同じだった。観客たちはまだ見定めているようだが、京介と洋行は同じ結論を出す。

「また成長した」

重なる言葉に視線を合わせた。

2人とも板垣と試合をしている。なら、この結論は間違っではない。

「板垣にリベンジしてへんのはワイだけか。」

次は勝つ。そんでアンさん倒すさかい首洗って待ったとき」

「……………早くしないと、直ぐに突き放されるな」

それぞれの舞台が迫るなか、控え室の空気は肌を暖めるほど空気は震えていた。

『勝者、板垣！』

セコンド達が静かに2人を見守るのを他所に、判定3―0、板垣の復帰戦は判定勝利で幕を閉じる。



かつて千堂が獲った日本タイトルを背負うため、星は少しだけ早めに待機室を出ていた。

目的はリベンジ相手である、板垣と会話をするため。

「星、話かけるんはええが、集中は切らすなよ」

「大丈夫です。むしろ、少しでも熱気に当たったほうが気合い乗りますんで」

（千堂がああ調子やさかい、気負いすぎとらんか心配や。板垣との会話、どうする？止めるべきか…？）

リカルドに敗北後、あつけらかんとし過ぎている千堂。明らかにな調と知りながら、ここまで洋行を含めた関係者は立ち直らせることが出来ずにいた。解決しないまま洋行の王者決定戦を迎え、積もる不安に柳岡は頭を抱える。

結論を出せずにいると、鴨川一行が現れた。

「お疲れさまです。復帰戦おめでとさん」

「ああ、星くんに柳岡さん。ありがとうございます。これから頑張ってくださいね」

「板垣、てつきりワイと王座獲り合うん思うとったわ。あの気迫、いまなら…」

洋行の目的、板垣の瞳は遙か遠くを眺めている。

試合中と変わらない、かつて自分が対峙したときよりも深い視線。

「こら板垣！ 挨拶は返さないか！」

篠田の拳骨は呆気なくかわされる。

それでも板垣は戻ってこない。

（こいつ、まだ集中しとるんか？）

なんちゅー奴や…こつちが身震いする目エしおって）

「気にせんといってください。元氣、貰いましたから」

一行が通り過ぎる。謝る篠田には苦労が滲み出ている。恐らく、まだコントロール出来ていないからだ。

「その集中力を切らせるんはナオはんだけやないで」

異質な成長途中のライバルを見て、両拳を軽く突き合わせた。誰も道半ばで折れてはいない。まだ長い先、いつ終わるか分からない路を駆け抜けるため、両頬を叩いて歩き始めた。

（よしや、上手く作用してくれおった。

今回は感謝するで、板垣）

柳岡は静かにガッツポーズした。

星 洋行。

日本フェザー級1位の選手を2ラウンドK.Oし、見事日本フェザー級王者へと輝いた。



『やはり地元の期待に応えてくれました！』

今井 京介、空位のOPBFフェザー級王座に堂々就任!!?』

洋行に続いて、京介もフェザー級の王座へと上り詰めた。

口元の切り傷を拭いながら控え室へと戻る道中、静かに壁に寄りかかる人物が1人。

「良い試合だった。おめでとう」

宮田 一郎は万全の状態で祝福を贈る。

「ありがとうございます。」

韓国人なだけあって我慢強かったです」

「4ラウンド、あれだけ打ったのに前に出られると厄介だろう。……どこかの誰かに似てな」

「さて、俺はまだ戦ったことがないので。こうして、影を追い求めることしかできませんよ」

誰のことを言いたいのか。

言わずもがな、と納得したところで疑問の視線を送る。これからセミファイナル、世界前哨戦を控えたボクサーがなにをしているのか、と。

「お礼を言っておきたかったんだ。あれ以来、会う機会がなかったからな」

宮田の答えに逡巡する京介。

“ 宮田さん、貴方は感じるものがないんですか？ ”

思い至ったのはハンマーナオとの試合前。

フェザー級で苦しむ宮田に掛けた言葉のこと。

「仕方ありませんよ。」

誰も彼も、遙か先で走っていますから」

「いまライト級で試合をしているのは、あの問いかけがあったからだ。

俺は幕之内 一步に勝つ。それを言いたかったのさ」

「おれなんてとんでもない」

感謝を告げて立ち去ろうとする宮田の背中に、京介は新しい挑戦状を投げつける。

「俺が先を越させてもらいますので。失礼します」

「……………はっ、楽しみだ」

受け止めたものの重さを理解して、自然と宮田は地面に落ちた羽根を拾い上げた。

セミファイナル。

宮田 一郎はWBCライト級3位のボクサーを3ラウンドK.Oでバトンを繋げた。

ストリクス・ワールVS鷹村 守

空はすっかり暗くなり、街灯と建物の照明が目立つ時刻を迎える。こうして人々の喧騒は訪れ、酒に女に酔い耽るお祭りの合図となるのだが。

今夜は格別の狂宴によって、後楽園ホール周辺は熱狂の渦に包まれていた。

『黄金の鷲を墜とし、同階級の統一王者となり、日本最強の男は更なる頂上へ飛び上がる!』

日本史上初のスーパー・ミドル級挑戦。

日本最強の限界が1人の漢によって切り拓かれる、その瞬間を望む者たちの狂喜が轟いている。

『数々の激闘、幾つもの感動を生み、日本人未到の空を豪翼で突き進む。』

我々は見たい、彼がどこまで飛ばたけるのかを!!』

日本の期待に後押しされて、4度目になる世界最強の舞台へと足を踏み入れた。

「見せてやるよ、最強のボクサーってのを」

観客の声援に手を振り上げて応えたのは1度のみ。

普段よりも大人しい入場、落ち着いた態度に観客たちが首を傾げる。

「なあ、今日の鷹村はやけに静かだぞ」

「記者会見のときからそうだよな」

「もしかして体調悪いのか?」

減量による影響が軽くなったとはいえ、命の危険を伴って戦っているのは事実。つい最近、千堂が敗れたことも不安の後押しをしていた。

(鷹村、なにを考えておる…)

試合に向けた進路について、鴨川が鷹村から聞いたことは少なかった。

ストリクス・ワールを糧にする、ただそれだけ。

“ライトヘビーのタイム、知ってるだろ。オレ様が勝つことは確定事項なんだが、ちよいと勝ち方に困っててな。だから今回は色々試させてもらおうって寸法よ”

2ヶ月前に鷹村からこう聞かされたとき、怒鳴りはしたが鷹村は方針を変えなかった。目の前の相手に集中したうえで、遙か高みを見据えているのだ。故に、ひたすら練習を重ねてきた。

会場中が異変に固唾を飲むなか、照明は最強のボクサーを迎え入れる。

『今宵、山頂から日本の鷹を迎え討つのは米国の夜嵐』

日本に訪れる4人目の重量級世界王者。

ライトブラウンに混濁する淡い朱色。後ろまで刈ったツーブロツクヘア。瞳に近づくと濃くなるダークレッドの眼。王者の朗らかな容姿、そして白を基調とした英文が記入されたパンツとシューズに魅入る者は多い。

『19戦14勝5敗10K.O。彼の戦績に格下は誰一人いません。全員が天才、超新星、最強と名高いボクサーたち』

鷹村と向かい合うと顎を引いて、目の鼻の距離くらいに視線を上げた。

『アマ世界王者、プロ世界王者にも臆せず挑戦し、負けても食らいついていく。そのファイトスピリットにボクシングファンは魅了されてきました』

王者であることを忘れるほど大人しく、鷹村よりやや低めの身長がその雰囲気を助長する。

『時代の先達者に挑む姿に敬意を表して、敗者の星と名付けて親しまれる王者。』

リベンジ成功率80%の漢、ここに登壇!!?』

ついにアメリカ屈指のリベンジャーと対峙する。

「彼がリベンジしていないのは現WBCライトヘビー級王者、タイム・フェザント。PFP3位を誇る怪物だ」

幕之内たちと偶然居合わせた藤井が解説を入れる。

「その人、確かライトヘビーで鷹村さんが試合する気満々だったボクサーですよ」

「アメリカのボクシングファンの間じゃ鷹村君を倒す最有力候補に挙がっている。」

逆に言えば、ここで苦戦していると次の階級で勝てる見込みが薄くなる。この試合はそういう意味でも大事なんだ」

3人とも生唾を呑む。

鷹村が世界タイトル挑戦で苦戦しなかったことがない。どの試合も傷だらけ、不調のオンパレードだ。

それを世界王者相手に苦戦するな、とは無茶が過ぎる。勝敗数では上だが、試合の質では王者に軍配が上がる。この試合、勝利だけでなく、勝ち方に余裕を持たせることの難題っぷりに全員がようやく気づいた。

WBCスーパー・ミドル級チャンピオン

ストリクス・ワール

VS

WBCスーパー・ミドル級1位

鷹村 守

いま、勝負を賭したゴングは鳴らされた。

『鷹村は初めてのスーパー・ミドル級で3階級制覇へ挑戦します。注目やはり減量の影響がどこまであるのか』

「ワール選手はイン・アウトを世界レベルで熟す。1度は敗れた相手にリベンジした際、もう勝てる気がしないとまで言わせるほどの研究家で有名だとか」

「ここ2年間で負けはありませんでした。最初の5戦で4敗しているのが目立ちますが、ライトヘビー級、そしてスーパー・ミドル級の2階級制覇者です」

「鷹村さんにとっては初めての2階級制覇者が相手か…」

幕之内たちが観客席で見守るなか。

両者、ゆつくりと中央に歩き出す。

鷹村の瞳にはワールの後方に聳える壁が見えていた。

9ラウンド目にして衝突する分厚く、そして鷹の両翼でも越えられない。

ストリクス・ワール。

5敗した試合は6ラウンド以内のK.O.によるもの。

フェザントの2つのK.O.のうち1つがワールだ。30戦以上の試合を判定勝利で綴じたボクサーが、なぜワールにK.O.勝利を選んだのか。

珍しい結末に鷹村は1つの答えを出していた。ワールの本領が発揮されるのは後半、9ラウンドから。

(8ラウンドまでに倒せなかつたらヤベエ)

9ラウンド以降のダウン経験無し。全てのK.O.勝利もこのラウンド以降という、あまりにもピーキーなボクサー。

鷹村が引退に追い込まれるかもしれないボクサー、タイムが警戒する脅威をワールは持っている。

(ま、それも昔の話だがな)

9ラウンド。

鷹村は悠長にリングの上で待っているつもりは毛頭ない。

4ラウンド。

無傷での勝利を自分に課す。

それ以上の時間をワール相手に過ごせば、下手な情報は全て抜き取られてしまうと判断した。

『ステップを刻む両者、手が届く距離に入ります』

鷹村の視距離が左を当てられることを認識する。

ウイングスパンは鷹村が4センチ長い。僅差の優位、先制を狙う機会を手にとらず、ワールの舞台に躍り寄る。

これで左はいつでも当たる。だが、ワールは両目を開いて左のフェイントを入れるのみに留まった。

(やはり……………)

初手、ワールのフェイントで納得した鷹村。

この路線も予想していたため、直ぐに次の手を打つ。
2度目のフェイントに対して、静寂の下を這いずる左拳を敢えて合
わせた。

『は、速ツツ……挑戦者、強烈な先制ジャブ!』

「いや、相手も打っておる!」

鷹村のジャブを右腕でガードしたワール。

ワールのジャブを右腕でいなす鷹村。

(ジャブのカウンター狙いはお互い様か)

(想像の2倍は重いね。)

そして、私の知る中でも1番に匹敵する速さだ)

鷹村の左ジャブは世界屈指の仕上がりだ。

誰もがお手本と讃える拳。ワールは仮想フェザントとして見てい
た。

(んなこったろうと思ってたぜ)

(タカムラ、仮想タイムとして糧にするよ)

ストッピングという最強のディフェンスを打ち破るため。全米を
震撼させるボクサーが相手だとしても、それはワールにとって非常に
好都合だと言えた。

(だがな、オレ様を疎かにしたら4ラウンド待たずに潰してやるぜ?)

右拳が加速して、ワールのボディ目掛けて放たれる。

2発目が間に合わず、左腕を寄せてブロッキング。

(いゝってえ!?)

こんなの適当に振り回すだけで必殺だよ!?)

抑え込めずに身体が少し下がる。鷹村の怪力とはいえ、万全なら押
しとどめることが可能だと思っていたのだ。

早くも崩れた前提は加速して、左右がワールのガードに突き刺さ
る。

(これは効く…なら、流すまでだよ)

3度目の左ジャブを引きつけて、左半身ごと内側に押し込む。鷹村
の左ジャブは空振った。その外側から畳まれるワールの左半身に
よって、左腕ごと真横に重心をずらした。

体勢を崩した瞬間、自身の右拳を放つ。

(小賢しい真似すんじゃない、ねえ！)

前に倒れる流れに沿って、膝を軽く折って利き足でリングを蹴る鷹村。弧を描き、ワールの右側面から起き上がりざま、ガラ空きの顔面へと左ストレートを放り込んだ。

(ほぼガニ股でサイドステップ!? 奇抜すぎるぞ！)

空振った右拳を外側に放り投げて、自ら姿勢を崩すことで回避する。眼前を横切った拳の風圧に押されまいと、すぐに右拳を返した。ただ迫力があるだけのパンチと見切られたのは言うまでもなく。軽々とウィービングで躲し、左ボディを狙った。

(ぬっ！)

先に突き刺さったのはワールの左ストレート。潜った鷹村に間髪入れず叩き込まれるそれは、ずっと前から予測していた動きだった。

(…………ちよいちよいつ、嘘だろ?)

ワールの左ストレートは空振っていた。

ウィービングで右拳を躲し、そして再びのウィービングで左ストレートを見送る。初見でありながら、鷹村は死角からの一撃を難なく見切ってみせた。

2度潜った深さから左拳が飛び出す。ワールにそのパンチをガードする余裕はない。然し、偶然戻ってきた右腕によってクリーンヒットは防がれた。

(あ、危なかった…いや、まだかつ！)

浮上する鷹の眼。

足を使おうとしたワールを引き留めるほど、ここに余白がないと分かったせいだ。

(フェザント対策は思いつけばラッキー程度で良い)

左右、ステップ、全てが基本に忠実なボクシングに移行する。開幕、ワールの行動に予想以上の誤差があったせいで、うっかりやり易いように動いていた。

(それだけじゃあ越えられねえんだ)

ここまでは世界戦のちよつとした暖気運転。

鷹村の本当の目的地へ向けて、ようやく滑空が始まる。

(なにかヤバイね?!)

ワールが咄嗟にガードを上げた時、3発のコンビネーションを受け止めていた。ガード越しに鷹村が右側に飛び出したのを確認して、即座に左ストレートで追撃する。次にワールがとった行動、それは左腕を引っ込めることだった。

(まだ着いてこれるか)

右側にいるはずの鷹村はウィービングで一気に反対側へ。真下から打ち上げる拳をスウェーで避け、ワールは右拳で応戦する。

交差する左右、自分だけが当たらない拳。ガードで防げるのは身体を縦にして被弾面積を縮小させているから。

迫る翼がワールを外へと離さない。ワールの路が次々と塞がれていく。

『強烈なパンチが次々と王者に降り注ぐ！』

予想外の攻勢に会場中の期待が高まります！』

左、リングが揺れる。

右、視界が踊り出す。

(これ、ガードさせられている!...何のため?)

左右、どちらの拳を受けても致命傷。ガード越しに、アメリカでも簡単には味わうことのない威力だと唇を噛む。

(フェイントを嫌って?ポイント狙い?)

浴びる暴風に踵が浮き上がる。

過去のどれにも当て嵌まらない型。

(フェイントすら避ける男だ、違う。)

タカムラがポイント狙いはあり得ない)

徐々に、ワールのなかで誤差が埋まっていく。

まだ被弾をしていない。なら大した変化はないはずだと、強引に前進を開始した。

『猛威を奮う鷹村!激風のなかを進む王者!』

リング中央で主導権の奪い合いが止まりません!』

寄せず離さず。ワールが踏み込めば押し返し、ステップを刻めば行

く先を封じる。

リング中央で存在感を際立たせる両翼。羽根を観察するように、1つ1つ拳を対処する。うち1つに合わせて右拳を握り締めた。

(うおっ!?)

ジャブを受け流し、引き戻しに合わせて右ストレートを重ね合わせる。肌一枚を掠めていき、先に動いたのはワール。

空いた反対側に飛び込んで左フックを見舞う。外に回られて反撃出来る体勢を取れず、大振りの左を右肩で受け止めた。

続けざま、ワン・ツーで強引に鷹村をロープに押し込めようと力に訴える。

(させんっ！)

強引さで鷹村の右には出られない。

ステップで横に回り込んだ瞬間、鷹村のフックが捉える。咄嗟のガードで防いで、やはりガードが痺れるほど血流が寸断された。

(ちよつと不味い…いやつの攻撃力はハリケーンか!?)

私の筋肉がズタズタに荒らされていくぞ…！)

右腕を肩ごと入れ込んで、持っていかれそうになる流れを断ちに行く。間に合うと踏んでいた追撃を妨害されたとき、1ラウンド終了のゴングが鳴らされた。

『呼吸を忘れるほどの攻防です！クリーンヒットがないまま最初のラウンドが終了。この勝負、全く先が見えませんか！』

(あー、くそ。思った以上に噛み合わせ。

シャドウの質はまだ下の下つてことだな)

(被弾無しは運が良い…。だけど、私も当てられなかったのは予想外だ。タカムラ、強すぎやしないか)

手応えはなし。

得られた戦果に不満を抱きながら、両者は自陣へと歩いていく。

「おいおい、どっちも被弾無しかよ」

「雑誌にはイーグルと比肩されるボクサーって書いてあった。本当に強いんだよ、ワールって」

「そんなに!? またアクシデントが起きるのかねえ」

身を削いだ鷹村による、精神を削ぐ駆け引き。
王者たちと戦ってきたワールの攻防力の高さ。
どちらから崩れるか分からない均衡に、観客たちは次のラウンドま
で存分に語り合うのだった。

始発の1つ前から、未来へのいつぱ

「ふんっ——」

「ぐツツ——」

休みなく、絶え間なく打ち続ける両者。

必殺技級の一手を躲し、守り、返す。

会場に響き渡る足音が絶えることはなく、1秒ごとに音の密度が上がっている。

この恐ろしさに気づけるのはほんの一握り。多くの観客は固唾を飲んで見守っている。

第2ラウンド終盤、両者被弾無し。

主導権はどちらにも渡らずにいた。

『あ、当たらない！なんという打撃戦、いや平行線！』

この迷路の突破口を手にするため、どちらも中央から離れずに打ち続けています！』

「……………鷹村さんが押してますね」

「ああ。汗の量が違う」

「鷹村さん、涼しい顔でチャンプと戦ってるぜ」

幕之内たちの意見を実現していくが如く、徐々にリング中央の占有率を鷹村が上げていく。

「すげえ……」

誰かが呟いた。

鷹村の技術戦とワールの対応力。針の穴を倒すカウンターを躲し、死角から放った一撃にカウンターを合わせる。

当たらないことをため息に変える暇がない。側で見ている鴨川ですら、リング上で交わされる技巧侵略に理解が追いついていないのだ。

『第2ラウンド終了のゴング！ここまで互角だと誰が思ったでしょうか。会場の緊張が歓声が変わるときを、次のラウンドに期待したいところですよ』

打数だけで言えば鷹村は2ラウンドまでのホーク戦を優に超えて

いる。減量苦が減ったとはいえ、このペースを続ければ第5ラウンドで沈むだろう。

そこまで急ぐ理由があるのか、鴨川が問わねばならないとリングに入ったとき。鷹村が肩をぐるりと回して。

「強えな」

ニツと笑っていた。

「……………ったく。どこから余裕が出てくるんじや」

「いっつもだつてーの」

そんな言葉を掛け合いながら、会場の雰囲気から浮いた1分間が始まっていた。



技術のみならば試合は平行線を辿る。

リズムを握られたら容易に引き戻せなくなる。

ゆえに第3ラウンド開幕、鷹村が選択したのは腕かひなによるゴリ押し。左ジャブ、都度五連射。

1つ——ただのジャブだと受け止める。

2つ——左腕に走る亀裂を見て。

3つ——即座に右腕で払い退けたとき。

4つ——右腕が前進の妨げとなっていた。

「しまっ——」

ガードを打ち壊し、開いた中央に五連射目が空かさず振じ込まれる。

『ついに届いたアっ!!待望のオープニングヒットは鷹村!第3ラウンド、ついに流れが挑戦者の手に渡る!』

この試合後、ワールはインタビューに対して試合の感想を問われたとき。

“ 高層ビル屋上から百メートル先の屋上へ、命綱無しの綱渡りをするような緊張感のあるファイト ”

こう答えている。

これは、第3ラウンドまで均衡が崩れなかったからではない。被弾など瑣末なものだ。この言葉の真意は別にある。

今から、鷹村の手によって引き起こされる、たった1つの挙動。

(なあ、お前はなにを見た。どうやって倒そうとした)

流れを取り戻そうと左拳を握った瞬間、ワールの勢いは根本から押しとどめられていた。

死んだ左拳。空砲のような感触に戸惑うなか、左拳の不調の原因に気づく。鷹村の左手によって止められる左拳。そう、本当にワールが震撼した瞬間とは、鷹村のストツピングによるものだった。

この試合、両者は瞳に映る敵を“糧”として見ていた。目的のみが一致している。

(……………成る程、ドラゴン^{W B A}ではなく私に挑んだ理由が分かった。タイムと試合しているからだ)

それでも、ワールは気づけなかった。鷹村による、タイム・フェザントの絶技の真似事でペースを狂わされたことに。

(彼を模倣するなんて、出来るはずが無いだろう！)

死んだ左拳に肩から捻りを加える。

たった1ミリに満たない隙間から抽出する力を溜めて、都度二連射の絶技崩し。

(封じられた!?)

(つと、危ねえ。ビテオ観られて対策されたら元も子もねえんだ。方法だけ確認させてもらう)

再び、鷹村の腕^{かいな}による力技でワールの技は不発に終わる。

(安心しろ。貴様が向き合ってきた時間諸共、オレ様の糧にしてやるぜ)

ここから、鷹村が雑なストツピングを織り交ぜてはワールから攻略の糸口を引き出す、再確認の時間が始まった。

既に感触が違っていると知りながら、嫌な予感がワールの視界を過ぎる。

何もかもが遅かったのではないかと。

静かに加速する戦場。

引き留めようと動いた矢先から潰される。ただ1度の深呼吸を許さない、最凶最悪のプレッシャーが玉座を襲う。

(もう、届かないのか……！)

最強の魔王の行進曲。

あろうことか玉座が怯えている。

第4ラウンド、観客たちは蹂躞劇を目撃していた。

ワールの身体は既に死に体。反撃する気力、体力、そして手段は殆ど鷹村によつて潰されている。

2ラウンドまでの大接戦が嘘のように、鷹村が王者を圧倒している。

(悪いな、こればかりは年季が違う)

枷はある。減量苦で従来の実力は未だに出せていない。そのうえで、ワールのことをリング中央で一方的に打ち続けていた。

(チクシヨ……。全部、タカムラのシナリオか……)

終末が始まる。

王座を掴んで離さなかった翼が羽ばたき、獲物をリングの最奥へと吹き飛ばす。

(上手く打ち合つて、私のペースに巻き込むはずだった。

同じ目的でも、ここまで差があるとはね……)

ジャブが重く身体にのし掛かる。

2ラウンドで慣れている目が憎らしい。あの猛攻は慣れさせるため。ワールの慣れの遅さを逆手に取った、開幕6分間の攻防からズラしているリズム。3ラウンド以降、鷹村の攻撃はより小さく、細かく分散してワールを襲った。

左右のコンビネーションが突き刺さる。

コーナーに背を預けたワールの腰が折れていく。それを勝利への

執念で起こしたとき、鷹村が仕留めにかかった。

(まだ………来い、来い………)

ワールが最後に狙う場所。

バイソン戦で誰もが見た弱点、左のフルスウィング。

当たれば一発逆転の大穴は然し、積み重ねがあつてこそその賭け。ここまでワールが賭してきたものは全て闇の向こうへと消えた。

ならば、想定外の事態を想定内に収めるため、策をここで練り直せば済む話。

(………)

鷹村の右ストレートに合わせてスリップし、身体を入れ替える。肩でコーナーに押し込んで、ガード出来ない顔面に一撃を打ち込む。崖っぷちから山頂へ、起死回生の道は間も無く塞がれた。

(バックステップ、だと……?!?)

(フェザントを倒す武器、確かに見させてもらった)

右ストレートをフェイントにして、鷹村はワールの最後の手段を炙り出したのだ。もう王者に打つ手は残されていない。

「感謝する、さらばだ」

ワールに出来ることは、負けを認めて次に走り出すことのみ。

冷徹に突き刺さる右ボディブローを受け止めながら、最強に成れない世界の高さを知るのだった。

鷹村 守

WBCスーパー・ミドル級タイトル獲得

こうして、この物語は冒頭へと辿り着いた。

鷹村 守はライトヘビー級へと駆け上がり、ティム・フェザントを打ち下す。

そのための前日譚はここで一先ず終了となる。だが、クルーザーには至れない。

次に行くための物語がまだ残されているからだ。

幕之内 一步の約束

ゆっくりと息を吸い込んだ。

肺に溜まる空気は冷たくて、ロードワーク直後のように暖かい身体の体温を下げていく。だが、それで良いと思った。もつと心を落ち着けて、言葉に過ちがないように注意しなければ、僕は一生後悔することになるのだから。

見上げた空は星々が輝いている。

僕がボクシングに出会った場所。はじまりの木の下の下で佇んで、ずっと星空を見て待っている。綺麗で大きくてひたすら長い、ずっと輝いてくれる流れ星を待っている。

“僕が勝ったときは…あの日、流してしまった久美さんとの話にケリを着けます”

鷹村さんに腕相撲を挑むとき、僕はこう言った。

あのあとも色々酷いことを言ったけど、結果として鷹村さんはよく笑うようになった。そして、昨日ついに3階級制覇を成し遂げた。僕の起こした行動なんてちっぽけな影響だ。

(だから――)

思い上がってはいない。

あの人のことだ、どんな状況でもきつと勝っていたに違いない。だけど、悪い意味でお節介なのが鷹村さんなんだ。

(鷹村さん達が騒ぎ出す前にケリをつけよう)

幕之内 一步はこの日まで、鷹村に宣言した約束を果たしてこなかった。3階級制覇までスムーズに決定し、自分の復帰に向けた練習、家の手伝いも重なって久美への告白のタイミングがなかったからだ。

今日、漸く夜に時間が空いた。お互いの空き時間を見つけて、少し寒いことを申し訳なく思いながらも久美を呼び出した幕之内。

(離し立てられて僕が行ったら、皆んな付いてきてしまう。あの人たちに見られながら久美さんにプロポーズなんて、男としてダメだ)

復帰に必要なだと思っただから。

そして多少の危険回避も含めて。

久美と友人関係から脱却するため、幕之内は決意を固めた。

(そんな理由を抜きにしても……。なにも持つていない今が、1番僕を見てもらえるとと思うから)

もし、いま見上げた夜空に流れ星が流れて。

3回お願い事を強く想ったら、願いは叶うだろうか。

もし、いま流れ星が流れなくても。

僕の言葉は受け止めてもらえるだろうか。

「こんばんは、幕之内さん」

その声で自分の名前を呼ばれたら、緊張で握られた拳が自然と解ける。

「こ、こんばんは、久美さん！」

いや、そうでもなかった。

想像しているような馴染んだ声は出ず。カチコチのロープみたいに張り詰めた返事をしてしまう。

「…………ふふ」

久美さんは口元を手のひらで押さえて笑ってくれる。

そして、緊張の意味を知っているかのように、白い顔に赤みが帯びていくのだった。

「珍しいですね、夜に会うことって。

夜に幕之内さんを見る時って、リングの上が殆どだから」

「ええ、不甲斐ないところばかりですよね。

だから、決めたことがあるんです。それを久美さんに伝えようと思
いまして」

…………とうとう、流れ星は来なかった。

いや、それでよかったかもしれない。

考えを纏めて久美さんと向き合えたから。

「僕、身体検査に問題はありませんでした。

これでリングに戻ることが出来ます」

「………………やっぱり、ですか」

全部を言っつて、あとは成るように任せよう。

▼
「僕、身体検査に問題はありませんでした。」

これでリングに戻る事が出来ます」

想い人に呼ばれて、宣告されたことは期待とは真逆のセリフだった。

幕之内 一歩が試合から遠ざかってもうすぐ2年。間柴 久美は幕之内が現役を引退するのでは、と淡い期待を抱いていた。

私はボクシングを好きになれない。

現在ライト級で活躍する兄、

職場の先輩の彼氏、

そして目の前の想い人。

身近に3人もボクサーがいて、ボロボロになるまで苦勞している。

殴られて、鮮血が散る。

(……………やめて)

殴って、だけどすぐ殴り返される。

(……………こわい)

だけど、彼らは止まらない。

意識が無くなるまで、勝ちが決まるまで。

そんなに好きなものも否定する意味くらい分かっている。

「……………やっぱり、ですか」

自分で最低な返事だと思っていた。

けど、声音の調整が効かない。感情の調節キーは最低から変えられなかった。

(また、そっちに言っちゃうんですね)

身勝手に悲しんで、収集のつかない路を拓いたかもしれない。もし、想い人じゃなく、恋人だったら、私を理由にしてくれたのかな。なんて痛々しい妄想を笑って誤魔化す。

一瞬の静寂。流石の彼も怒ったのだろうか。恐る恐る視線を上げて、表情を伺う。こちらを見ている瞳は、申し訳なさそうで、そして少し

だけ赤い熱を帯びたもの。

「けど、このままだと復帰できないんです」

「え、えっと。どうして…」

恐れたことは実現しなかった。

だけど、もつと酷い路の前に立っている気がする。

誰かが俯いて、誰かが笑わない世界へ続く路。

「母さんを、試合に呼びたくて。母さん、痛いのは見たくないと言って、日本タイトルマッチのときも来てくれませんでした」

自分の子供が殴られて喜ぶ親はいない。

当たり前のことを備えた母親に、自分の成長を見てほしいと願う息子。

いま、私が恐れているなにかが避けられるとしたら…。

「だから、早いうちに観てほしい。僕が打たれないほど強くなるまで、復帰は見送ります」

「……………あ」

なんて他愛無い話題だろう。

こんな時間が続けばいいのにつて思っていた。

私はバカだ、いま寂しいって感じて漸く分かった。

貴方はきつと自分に厳しすぎる路を選ぶ。

否定しよう、避けなきやいけない。幕之内さんの本音が見え隠れした瞬間を取り逃がしたら、皆んな後悔する。

「私も、幕之内さんが打たれる姿、見たくありません」

「つ……………、その……………」

私なんかの我儘に狼狽えてくれる。

優しい…優しすぎるんです、アナタは。

じゃあ、その優しさを変えてしまおうか。

嫌だ、今から言うことはきつと彼を不幸にする。

嘘だ、そんな未来は誰にも分からない。

もう、中途半端は辞めにしましょう。

「幕之内さん、私を……………。私を理由にしてください」

「……………え」

「私、幕之内さんが打たれない姿を見たいです。

勝つことより、無事にリングを降りてくれることの方が大切なんです…」

ああ、言ってしまった。

本当は引退してほしいのに。

ああ、困っている。

試合でダメージを負うな、なんて理解がない人間と思われたかな。きつと、失望されただろう。

勝ちたいから試合をするのに、こんな言葉しか出てこなかった自分が恨めしい。

「——参ったな。尻すぼみしてたら、久美さんに先を越されるなんて。こんなんだから、試合でも被弾するんだろうなあ」

それでも笑ってくれていた。

安堵したような、緊張が解けた表情を浮かべて笑っている。

「なら、もっと自分に優しくしてください。私や幕之内さんのお母さんにばかり優しくして、自分を疎かにするから打たれちゃうんです」

「き、肝に銘じます」

ちよつと強く主張し過ぎたかもしれない。

けど、これくらいで良いんだ。期待した話にはならなかったけど、路を間違えることは避けられたはずだから。



「き、肝に銘じます」

久美さんに念を押されて頷いた。

ここまで言われたら、母さんと呼べるくらいに防御テクニックを磨くまでだ。復帰まで時間は残されていない。久美さんの後押しがあれば、限りある時間でより全力を尽くせる。

「悔いは残したくないんです。リングの中でも、外でも」

沢山の勇気を貰った。

自分に嘘をついて、気持ちを放置しておくのはもう辞めだ。

……………よし。

「次に負けたら引退します。

そのあと、ぼ、僕とお付き合いですてくださいつ！」

「……………お断りします」

ツ。

お、おことわり…:されてしまった。

ちようしに、のりすぎた？

なんで、だめなんだ。

わからない…

おわった…

「幕之内さんが負ける姿なんて見たくありません。だから、今からじゃダメ、ですか」

えっ!?

(久美さんの白い顔がボクシンググローブのように真っ赤になっている。これって、いまの言葉っ、夢じゃないのか!?)

爆発した脳みそを掻き集めて、幕之内は生き返った声帯で滑舌良く返事をする。

「えっ、あっあ…:ほあ…:はい、勿論です！」

「よ、宜しく願います」

挙動不審なボクサーと、少しだけ強く踏み出せたボクサーの妹。高校生から牛歩だった2人の恋愛は、冷たくて長い握手とともに進展した。

まだ慣れない新しい関係に戸惑いながら、2人は帰路に着いていた。いままで離れていた間には一本の架け橋。

「き、緊張しすぎですよ。」

た、ただ手を繋いだだけなのに」

「そ、そうですね、アハハッ」

どういう感情で笑ったのか。幕之内本人にも分からないほどごちゃ混ぜになった感情で応える。

誰にも見られていないだろう、そう言い聞かせて手を繋いで歩いているのは奇跡かもしれない。加えて、緊張の要因は別にあった。

「間柴さんにも報告しなければ……。そう思うと、さらに緊張してきちゃって」

間柴 了。

久美の兄であり、幕之内とは試合をしたこともある最凶の要注目人物。このまま行けば漏れなく親戚となるボクサー。

「あー…いま、兄には近寄らないほうがいいですよ。」

近々、世界前哨戦をしようと云ってピリピリしているので

そう云って苦笑いする久美。

予想外の情報に、幕之内は。

「え、えええええーっ!?!」

夜道で間柴と会ったかの如く叫ばずにはいられなかった。



刻は進んで、幕之内 一步の復帰戦。

リングからは程よく遠い観客席にて。

「会長ーぼく、まだまだボクシングできますー!」

母、幕之内 寛子は息子が堂々の勝利を収めた瞬間をしつかりと見

届けていた。

「やった! やりましたね、お義母さん!」

「そうね…喜んでくれてありがとう、久美ちゃん」

隣で大はしやぎする久美。

行動の節々に釣り船に乗る姿を連想しながら、僅か27秒の親孝行は幕を閉じる。

「一步、強くなったよ。お父さん」

息子の再スタートを喜び、ゆつくりと拍手を送った。

世界を彩るもの

見慣れた風景のなかで拳を打つ。

バンテージに守られた右拳は空を押した。

脚は軽くステップを刻んで地面を蹴る。

前に、ひたすら前に。ガードを上げて、前へ。

「し——」

相手は最凶のボクサー、間柴 了。

2度とリベンジ出来ないと理解していながら、それでも目指さずにはいられない。自分で生み出す偶像へ踏み込んで、持ち味のステップワークで翻弄する。だが、あの鎌は相変わらずこの頭を切り裂いていく。

右目、2ラウンドで失った。体力、燃料タンクのカワゴと破られる。

そして、最後は——。

「木村、もう3分経ったぞ」

「っ……そうか、さんきゅーな青木」

意識は遠い景色から鴨川ジムへ。

ようやく届いたブザー音。

青木の呼びかけによって、1ラウンドが終了していたことを知る。

リングから離れて早半年、鷹村の3階級制覇から1ヶ月が過ぎた午前10時。木村は練習に練習を重ね、復帰戦に向けた準備を整えていた。

「試合も決まってねーのに減量レベルの汗じゃねーか。オーバーワークで怪我して引退しても知らねえぞ」

「ちよつと鷹村さん！心配するにしても言い方が……」

幕之内が慌てて止めに入る。それに手をふらふらさせて心配無用と伝えた。

ひと息つくためベンチに座る。

無茶な練習はしていない。ただ、復帰を目指すなら最終目標は当

然、日本タイトル奪取。日本ランキング最下位まで落ちた今、年齢を
考えても練習量を増やさなければ体力向上は見込めない。

(あの時は3センチの差だった。それが今じゃ……)

伊賀を瞬殺して世界に行った間柴。

日本ランカーとしてやり直す自分。

(あの日、届かなかった3センチをどうしたいんだ)

自分の右拳に視線を落とし、まだ覚束ないイメージに悪態を吐く。
煮えている活力と現実的なマッチングは必ずしも追従しない。ラ
ンクは膨大な時間と努力を注いで手に入れるもの。木村のように、ベ
テランで勝てる見込みが少ないボクサーは不良物件として嫌煙され
がちだ。ランクを明け渡す行為に誰がおいそれと手を出すというの
か。

(篠田さんにも苦労をかけるな……)

引退を撤回して誰よりも喜んだのは篠田だった。

いま、彼は木村の対戦相手を探して各所に頼み込んでいる。結果を
得ることは出来ず、気持ちの前めりになつてしまうのも無理はな
い。

「なんじゃ、板垣はまたおらんのか。…まあよい。貴様らに伝えてお
くことがある」

そこへ、鴨川が事務所から降りてきた。

いつものメンツが集まるなか、鴨川と最初に視線が合ったことに珍
しいと思った木村。いつもは幕之内か鷹村の姿を探す鴨川が、自分に
視線を向けたこと。その違和感が焦燥感を煽ったとき、理由が鴨川の
口から判明する。

「木村、復帰戦の相手が決まった」

「……………ま、まじすか！ ついに……………!!」

「相手は誰なんすか？」

「日本ジュニア・ライト級9位、桐切きりぎり 敦士あつし。元暴走族組長、なんでも
関西最強だったという噂話じゃ」

「ま、まあ強い方が倒し甲斐ありますからね。どんとこいです」
「これが顔写真じゃ」

そう言つて差し出してきた写真。

全員が覗き込むと、渋い顔をするくらいには一般人離れした風貌の顔が写っていた。

「もく、やだなあ会長。どっかの指名手配犯の写真と間違えてますよ」

「あ、これ交番に張つてあるのと似たような見ましたよ俺」

「……………木村さん、載つてます」

「だろいな。こんな凶悪犯、新聞の一面にドカンと載つてても可笑しくは「違いますよ」……………えっ」

「ボクシング雑誌のここ。いま最も注目される問題児として紹介されています」

木村は顔を真っ青にしながら、幕之内が手に持っている雑誌の片側1ページを読む。

不良仲間の罵声。セコンドへのゴミの投擲。観客席を汚しては観客と揉める。中にはお金を盗られたという人間までいる始末。

数々の暴虐を記した現実に関を聞くしかなかった。

「試合に駆けつけた暴走族仲間がヤジ飛ばすせいで試合は滅茶苦茶。萎縮したところを滅多打ちがお決まりらしい」

「なんでそんなやつのプロ資格剥奪しないんだ!」

「バカヤロウ!こんなザコさつきとボコつてランク奪い返してきやがれ!」

「試合が決まったボクサーに暴力するでないわ!」

鷹村が木村の背中を蹴つ飛ばす。

そして鴨川が鷹村を引つ叩く。

「そりや勿論っすよ!」

負けても引き分けても引退つて決めたんですから」

鷹村の激励に応えて、木村の復帰戦はここに決定した。

試合の行方を見定めた鷹村は、欠伸をしながら。

「んで、メインは誰なんだよ。」

まさか木村の復帰がメインじゃあるまいな?」

木村を添える主催者の名前を問いかけた。

「俺だ!俺の日本タイトル戦っすよね」

「寝言は寝て言わんか。」

貴様はあと2試合の調整を入れるつもりじやろうが」

肩を落とす青木を放り投げて、鴨川は一拍置いて答えた。

「メインは宮田 一郎の世界タイトルマッチじゃ」

「宮田くんが………！本っ当ですか!?!」

「ええい、近い！引っ付くな！」

息を乱す幕之内が汗涙を垂らして鴨川に問い詰める。

「マジか、あいつライト級でまだ1試合しかしてないんだろ。大丈夫なのかよオイ!?!」

「それは心配ないかと！初めてのライト級で6ラウンドまでかかってますけど、手応えを確かめながらの試合でした。キレの増したフットワーク、安定感抜群のシフトウエイト、なにより息切れが見えないスタミナ！前回のままでも世界は狙えたと思います！」

「あ、うん、そうね………」

ほんのり紅く染まる頬、普段よりも…それこそロードワーク時よりも湿気を浴びた吐息に青木はゆっくりと身を引く。

木村、鷹村も鴨川から距離を置いていた。

「会長、宮田くんが挑戦するのはどの団体ですか!?!」

「WBCライト級王者、コンコート・グルー。キューバ出身、ライト級史上最速のボクサーとして名を馳せている」

「カ、カウンターパンチャー同士の実合！これはすごい見応えがありますよ！グルー選手はカウンターパンチャー相手に負けたことがないんです！きつと宮田くんもそれを分かったうえで挑戦状を送ったんだ！」

「落ち着かんか…貴様なに鼻血を出しとる！」

「興奮しすぎて宮田の晴れ舞台見る前に死ぬんじやねえか」

「宮田の戴冠後に死ぬのが本望って顔だぞ…」

「鷹村さん、宥めてください。会長もタジタジですよ」

「宮田のことになるとオレ様にも手が負えん。諦めろ」

両鼻の穴にティッシュを詰め込む男を、3人はそう評した。

「それだけじゃないだろ。」

た。木村 達也のボディ打ちを彷彿とさせるバロンの指示に、間柴は容赦なく右拳を解放。伊賀に仕込んだ対間柴戦略は呆気なく崩れ去り、一方的な試合展開のまま伊賀はリングを降りた。

今日、そんな試合ぶりを見せつけた間柴に一通の招待状が届く。

「間柴、お前に世界前哨戦の話が舞い込んできた」

「……………そうか。ついに」

東邦ジムのサンドバッグを叩く間柴に、東邦会長はかつて流れ去ったものを持ってきた。

木村との試合から、かれこれ3年は経過する。

かつてWBC5位の選手から声はかかったものの、木村との試合後に自ら破棄した。実力を付けた今、受け取る手は誰にも邪魔されない。

「相手はWBA2位。名はリボルブ・ゲイル。オリンピック2連覇の強敵だ。いまはスペインの名工、エミリオ・ラバルのもとで師事を受けている。

打ってきたパンチに同時にカウンターを決めるのが勝ちパターン。触れれば相手選手が吹き飛ぶもんだから、ついた渾名は『人間導火線』だとき」

「クク…。導火線なんざ俺の左で切り落としてやる」

サンドバッグに左拳を打ち込む。

美しく吊るされた砂丘に波が立つ。つい溢れた感激を明日に預けて、東邦が持ってきた資料に目を通す。目についたのはアマチュアの戦績、299戦298勝241K.O、そして1敗。

「アマ戦績、この1敗はなんだ」

「それは最後の試合だな。オリンピック3連覇目をかけた決勝戦で負けている。相手はロシアの……………ブラン選手だそうだ。

聞いたことねえな。世界ランクにもいないみたいだ」

「…ふん、まあどうでもいい」

ブランという名前に心当たりがなく、興味も無いためすぐに間柴の記憶から消えた。

そもそも、間柴は伊賀のことでさえ記憶の片隅に断片が散らばって

いる程度の印象しか抱いてはいない。

「こんにちはー！」

「遅い」

着々と増す目標への殺意に水を差す、陽気な挨拶の主に鋭い視線を向ける。東邦ジムに現れたのは板垣 学。間柴のスパarringパートナーだ。

「いやいや、約束の15分前ですよ？」

世界前哨戦が決まって気持ちが昂るのは仕方ないけど。あつ、リボルフ選手のDVDお返ししますね。

とても参考になりました！」

「あ、ああどういたしまして」

板垣がリュックから取り出したDVDには、『リボルブ・ゲイル』とマッキーペンで書かれていた。

東邦は肝が冷えたのを感じ取る。間柴よりも先に、ジム外のボクサーに教えていることを死神がどう判決するのかなど目に見えていたから。

「……おい、どうして板垣が先に知ってたんだ」

「で、出来るだけ相手の特徴を真似てもらおうと思って！悪い！あんなまぴりぴりし過ぎても身体に毒だろう？」

「いま血圧が上がってるよ」

「えくっ、それを言うなら『決闘値』じゃないですか」

間柴の背中をふざけたテンションで叩く板垣に、ジム内の緊張感がピークに達した。

(やめてくれエ！間柴を煽るなっ！)

他の練習生が青ざめるなか、間柴の右腕が振り上がり…。

「その調子ならリングに上がれるな。」

インファイトをしてこい。リボルブとやらの動きより鈍いなら、ここから叩き出す」

「はーいー」

花を撫でるように板垣の肩を叩いて、間柴はリングへと向かっていく。

「怒らない…?」

「どうなってたんだ、あれ…」

「板垣が正解だったということしか分からん…」

困惑する会長たちに近寄る板垣。

鼻歌交じりに笑いながら、間柴からは想像も出来ない答えを提示する。

「違いますよ。」

間柴さんもジョークを分かってきたんです」

「あれってそういう…?」

「信じられん…」

流石に首を傾げるが、言われれば納得も出来る反応だ。

ジムに入った最初の頃と比べても、確かに丸くはなっている。東邦だって分かつてはいるものの、板垣の目はより深いところが見えていた。

「伊賀をボコボコにしたのだって、木村さんの真似をしたからですしね」

「えっ、それはどういう…」

なんとなくしに呟いた板垣に、言葉の意味を問おうとして。

「なにしてんだ。」

ぼーっとしてんなら、俺だけで終わらせるぞ」

「すぐ行きまーすー!」

まるでワザと会話を遮るかのように、間柴がリングの上からグローブを板垣に投げる。片手で受け取ると、板垣は荷物をそそくさと置いてリングに登った。

東邦もそれに続く形でリングの上に視線を向ける。朗らか、とまではいかずとも。そこには確かに、人を見ている一人のボクサーがいて。

「あ、ああ。悪い悪い。間柴の言った通り、板垣君にはリボルブ対策として——」

感慨深い想いを胸のうちに仕舞い、次の試合に向けた準備を開始するためリングに上がる。

試合まで残り3ヶ月。
間柴の変化が良い結果をもたらす事を信じて。

リボルブ・ゲイル

1度、透明な音が鳴り響いて意識が醒める。

薄暗がりの倉庫の主人である男は独り、隅に設置した業務机から上半身を起こした。音のした方向に視線を移す。

透明な音の正体は扉に設置した鐘だ。5年前、この倉庫をジムとして開いたとき、最初のプロボクサーから贈られたのがこの鐘になる。もう慣れた音のせいで、倉庫の主人は開いたことに疑問を持つのに時間を要した。

「…………ちっ。鍵を閉め忘れた」

机の上に散乱する酒瓶を見ながら舌打ちを1度。

野太く汚い独り言を吐いて、まだ酒が抜けない身体で立ち上がる。目的は1つ、侵入者を捕まえて憂き晴らしに殴る。その後は裏路地にも捨てて、また酒で溺れる日に戻るだけの無味な計画を立て終えた。

「…………4時?んな時間にコソコソと」

太く見つともなく堕ちた右腕に巻かれた白の腕時計。正確だけは保証できる針を見て、自分が舐められていることを改めて知る。苛立ちで拳を作り、見通しの悪い倉庫をゆっくりと壁伝いに歩いて侵入者を探す。

いや、直ぐに見つかった。ソレは無警戒にバーベルトレーニング用の椅子に座り、鼻歌を交えて近くの物を手にして遊んでいた。

「おい、金目のものは見つかったか」

一気に接近して、その後頭部目掛けて容赦無く拳を振り抜いた。後先のことなど考えていない。

いいや、ここで相手を殺めてもいいとさえ男は納得して、本気で殺しにいった。

「いま見つけました」

「なっ——」

拳が人を殺める事実はずぐに潰える。

朝食に並べたトーストのように暖かい男の手のひらで、シンクの生ごみのように冷たい主人の拳を止めたのだ。

「お、お前は……」

「初めまして、ラバル。私はリボルブ。」

キューバでオリンピックをしている凄いい人なんです」

身長160cmのラバルに対して、リボルブを名乗る侵入者は170cm近くある。立ち上がった侵入者を見上げながら、ゆっくりと後ろに下がった。視界も悪い朝のなかでさえ、リボルブの陽だまりを纏う瞳に目眩を感じて。

「もつと凄くなりたくて、”ルイ”さんを育てた貴方を尋ねてきた次第なのですが……。お酒が好きなんですわね」

その言葉で一気に目が覚める。

床に転がる自堕落な証拠。かつては高級オフィスの事務所よりも輝いて見えた景色はなく――。

再び思い出した過去を振り払うように、吐き捨てる。

「帰れ。その金象に泥浴びせてやろうか」

『『殺人拳』が尾を引いているんです?』

そして、地面に落としたフリをする言葉を容赦なく拾って返した。

ラバルは言葉を詰まらせる。喉の奥の空洞が心臓の鼓動を反射して、静かに記憶の蓋から光が溢れ始めた。

ルイ・ラファエル。

ラバルのもとでボクシングの研鑽を積み、3階級制覇を成したスペイン最強のインファイター。彼は陽射しのような心を持ち、彼の拳は誰よりも強かった。真剣に試合に臨むルイは、試合を穢す行為を最も嫌った。

3階級制覇を達成した2度目の防衛戦。勝ち目が無いと悟った対

戦相手は、ラフファイトの限りを出し尽くし、ルイの怒りを買ったのだ。

「落ち着けルイ!!」

そのまま突っ込めばヤツの思う壺だろう!!」

ラバルの静止に反応したのは一瞬。

仲間を侮辱され、師を罵られ、試合を穢した男をボクサーとして見ていない人間には仕方のないことであった。

第10ラウンド、血で血を染めるリング。対戦相手はリングに沈み、そのまま目を覚ますことはなかった。

生き恥を清算した尸を無言で見送るルイの心情を、ラバルは最後まで解き明かすことは出来ず。投げかける言葉が見つからないまま、最悪の試合は幕を閉じた。

リング禍。

その恐怖はルイに憧れる少年たちに刻み込まれ、ルイの背中は泥に塗れてしまった。

この試合を最後に、ルイがリングに戻ることはなかった。

「地元では『戦うお兄さん』と呼ばれるほど心優しい人物でしたね」

「……なにが言いたい?」

「私は彼の拳を広めたいんです!」

あの素晴らしい必殺を——」

熱く語るリボルブは、誰かたちが何千回と唱えた褒め文句だ。

聞き飽きている。過食だ、もう喉を通らない。だから吐き捨てるために、拳を握り込んだ。

「ッ!」

「同族で穢しちやなんねえものが2つある」

当然、リボルブには止められる拳だ。

物理的なダメージは最初から求めていない。拳に乗せる怒りさえ伝われば良かったから。

「1つ、敗北。負けは戦いの資金石だ。負けを嗤うやつは負けに怯える。そんなやつは芯じゃ人は見向きもしない」

リボルブの言葉はラバルの怒りを買うには十分すぎた。

リング禍を生んだ拳は誰よりもボクシングを愛している拳だ。その拳を握らないと決意したボクサーのことを、再び世界に広めようなど信じられるものではない。ルイのことを弄んでいるとしか言いようがなかった。

「1つ、決意。男が口にした言葉は堅い。それも……1ヶ月、1つのことで悩み続けた男の言葉なら尚更よ。」

ルイは引退した。ルイの影を追うなんざ、ふざけた真似をオイラの前で吐かすんじゃないやねえ」

話は終わった。

元々、会話が成立するとは思っていない。ラバルにはリボルブを指導する気はなく、その意味も見いだせないのだ。

呆気なく後ろを向いて、無言で帰れと伝える男に、リボルブは立ち上がる。

「私は、ルイ選手が試合をする最中の横顔が好きです。」

彼の後ろに、沢山の想いが重なって見えました。そこに貴方の存在は大きかったはずですよ。なのに……。貴方はここに残り、ルイ・ラファエルを独りで見送ったんですか」

「……………」
惨劇から変わらないジムに居座る男へ、現実への入り口を指し示した。

「誰にも追ってほしくないなら、ここを畳めばよかったでしょ？それをしないのは、きっとルイさんを待っているからです！」

「なら、どうした。どうやって亡命したか知らねえヤツを、わざわざ匿う理由になりやしねえんだ」

「違いますよ！」

貴方はルイ・ラファエルの復帰を待つ。

私はルイ・ラファエルと試合がしたい。

その繋ぎとして私と世界を獲りましょう！」

メチャクチャな本音を笑顔でぶち撒けた。

「それが、ただだけ高い壁か分かってんのか」

「違う。壁は1つにあらず！」

世間が築いた壁なんて、私の活気で吹き飛ばします！

楽しんだ人間の壁ほど高いものはありません！」

「……………」

リボルブは笑顔で、破綻も完成も備えた理想を唄う。

この時、ラバルは底知れない深淵を見た。リボルブを形成するポジティブ思考、その背景に付き纏うものを。

詳しい事情は知らない。ラバルにだって言うつもりのないことの1つや2つはある。

「……………とんだバカがいたもんだ」

ただ、目の前にいるボクサーは誰のことも噛わず、物事の行く末を愛おしむ心を持っている。それだけで、地獄の門を開ける覚悟は決まってしまったのだ。

「この世に天国は限りあれど、地獄に枚挙はない。

「ここが冥土直通だったとしても、後悔はさせねえぜ」

「ええ、勿論です！」

朝陽の出発とともに、2人の手は固い握手を交わす。

全てを失った漢たちの再起をここに綴る。

「黄金の国を築きに行く。着いてこい」

「ここから3年、9戦を経て世界の頂点まであと1勝のとき。

無限に続く地獄の沙汰へと踏み込んだ。

木村 タツヤの再起戦

宮田 一郎の世界戦が開催される両国国技館。

多くのボクシングファンが待望の瞬間を目撃するために、針山の穴も埋める勢いで会場に押し寄せていた。

「すげえ人数だな…。嫉妬しちまうぜ」

「オレ様程じゃねえが…。黄色い声が多くて嫌になる」

鴨川軍団が両国国技館に到着したとき、入口は既に女性たちの声援で溢れかえっていた。幕之内は宮田の影響力に感銘を受けていたが、これから入場することを想像する鷹村たちは気が滅入ってしようがなかったという。

かくして30分の我慢を経て、最前列の関係者席に辿り着いた一行。ひと息ついたのも束の間、第一試合が始まる直前、幕之内が席を立った。

今日の目的は第三試合の木村復帰戦からであるため、失礼だとは思いつつも、とある人物を探しに会場内を散策しに行ったのだ。そして。

「千堂のヤツ、来てねえのか」

戻ってきた一步にそう声をかける鷹村。

一步の表情を見れば肯首しているのと同じだ。散策の目的、それはリカルド戦に敗北以降、姿を現さなくなった千堂の搜索だった。浪速拳闘会の柳岡から「探しとるねんけど、そっちにお邪魔しとりませんか?」という連絡から事情を知った。武者修行の旅に出るということらしく、今日の試合は観に来る可能性が高いと踏んだものの、結果は空振りに終わる。

「心配です。あの試合、千堂さんはかなり一方的に倒されましたから…。」

「観ていた僕でもショックが大きかったので…」
「もう日本に居なかつたりしてな!」

「縁起でもないことは言わないでください。千堂さんの行方が気になつて、心配で仕方ないのに……」

「気にしても仕方ねえよ。」

「アイツが挫けるところなんざ想像出来るか？」

「それはそうですね……」

鷹村の言葉に幕之内は納得するしかない。

もう出来ることはなくなつてしまったのだ。

仕方なく席に座つたとき、第三試合：木村の復帰戦の準備が整う。

木村が大歓声に見守られながら入場を終えた。

最後の再起、運命の一戦が始まろうとする時、両国国技館はひと味違う緊張感に包まれた。

「さつさとくたばれゴミボクサー……」

「ぶつ転がされてえのかあ!!?」

「敦士さんに挨拶せんかい!!」

無法地帯を連想する罵声がリングに飛び、中央に舞う熱が霧散していく。

あまりの場違いな声に驚いて振り向く幕之内。

約30人近くの不良たちが集団を成し、世界戦前前座の空に雨雲を作っていた。

「なんか静かになつたと思つたら、これか」

「ひ、酷い……」

人の再起戦をなんだと思つてるんだ！」

「係員の注意も蚊帳の外ですね。」

「暴力で追い払つてる……最悪な連中だ」

3人が同時に立ち上がったとき。

「お前ら、前を見る。木村の眼で判断しろ」

両腕を組んで、リングの上を見据える鷹村の静止が耳に届いた。青筋を立てている青木も、ボクシングを侮辱されて怒る2人も、同じ場所を向ける。

「木村さん……」

すでに両者出揃っていた。

金に染めた穴ぼこだらけの敦士を前にして、木村　タツヤはリング中央で堂々を貫いている。敦士は悪性の笑みで木村を見下し、ヤジを声援と勘違いした男を半目で置き去りにしていた。

無反応っぷりに退屈した敦士は、右拳を上げて。

「うおっ!？」

「はっ!こんなパンチにビビって試合出来んすか」

木村の眼前まで突き出して嗤った。

鴨川の視線が引き締まり、握り拳とともに前に出ようとしたところで篠田が先に動く。

「木村、気にするな」

肩を叩いて木村を宥める。

木村の眉間に青筋が立っているのは篠田がよく分かっていた。篠田とて、外野の不良に声を張り上げたいのは山々だ。然し、自分が冷静に努めて木村を導くことを優先しなければ、全てが台無しになる。

「…挨拶は大事っすよね」

「お、おい木村!？」

それでも木村は前に出た。

殴るためでも、注意するためでもない。

「確かに中途半端は恥ずかしいよ。」

「ここに来て、パンチ当てられない中途半端者はな」

「……………ここで終わらせてやるよ」

こう言い返したほうが、敦士の闘争心を煽れる。

ただそれだけのために。

眉間に青筋を立てる敦士を他所に、レフェリーが2人をコーナーに送る。篠田の心配は徒労に終わると本人が確信した瞬間だ。

「間柴の懐に飛び込み続けた男が、あんなので集中乱れると思うか?」

「————— 思いません!」

「そりやそうだな。黙って見守りますか」

「ですね。すぐ終わりそうだし」

試合前の睨み合いを呆気なく制した木村。

それを見た鴨川軍団は怒りを抑える。

後方から罵声が飛び続けるが、それも直ぐに収まるからと納得して、客席の漢たちは静寂のなかに潜むのだった。

第1ラウンドの幕は品性を欠いたまま上がる。

「いくぞゴラア!!?」

敦士がコーナーに喝を飛ばし、周辺の不良たち約30人が応える。試合の妨害に等しい行為で最も影響を受けるであろう木村は、黙々と圧迫された観客たちを見て、コーナーを背にした。

(間柴戦後とは大違いだな)

夢の舞台で敗れ、リングに戻ったときは期待の嵐が木村をリングへと誘った。誰かが、自分の再起を喜んでリングに連れて行ってくれたときの高揚感を今でも覚えている。

だが、自分の足では上がれなかった。想像を越える期待に木村　タツヤは吞まれてしまったのだ。そのせいもあるが、皮肉にもいまはこの静寂が身体に馴染む。ブランク開けの身体はすでにほぐれていた。黙して行く末を見届けてくれる、最前列の眼差しに手をかざして。

(いっちょやりますか)

木村　タツヤ最後の再起戦が始まった。

対角線から動き出す、何も知らない為政者。

驕った雰囲気似合い、観客たちの熱意を弄るようにゆつくりと歩き始めた。両拳を何度も突き合わせ、不躰な威嚇を継続する。

(そりや喧嘩スタイルか。俺も知ってるよ。それで本当に強いヤツが、リングでどれだけ生き残れるかも…な)

ただ避ければいいだけの罵声など、木村の肩の力を抜くマッサージにしかないというのに。

『あーっと、敦士選手、いつものように威嚇しながら歩いて接近だ。この圧力にランカー達は屈してきました。』

復帰戦の木村選手、ブランク明けで……えっ』

真っ直ぐと為政者の騒音を聞き届ける木村。

待ち合わせ1時間前に着いたが如く、気の長い時間を過ごす心持ちで相手を眺めていた。

『う、動かない!木村まさか上がりすぎたか!』

コーナーを背負って微動だにしない!!』

鴨川や篠田でさえも困惑する。

木村の待ちは事前に決めていた行動ではない。かといって具体的な方針は木村に任せていたのだが…。

「雰囲気に吞まれてはおらんが…」

「相手の土俵にむぎむぎ付き合うヤツじゃありません。」

大丈夫、試合の流れは見えています」

困惑もほんの数秒のこと。

篠田は木村の足元を見て確信する。リングの底に潜るほどの迫力があるからだ。

(強いやつ条件を身をもって知っている。

敗北に煽られない、ネジがトんだヤツだ)

栄光の舞台に続く一本道に立ちただかるボクサーは笑う。

(ダメなやつ条件も、勿論知っている。

才能がねえのに心だけ熱いやつだ。夢を追って老いさらばえる、てめえらスポーツマンみてえにな)

木村の返答に両腕を広げながら威圧を強める。体重は木村と同じだが、敦士の筋肉は日本ランカーの中で最も打たれ強い。喧嘩で築いた身体だと馬鹿にはできない。ポテンシャルだけならば東洋に通じると、ボクシング雑誌記者たちも盛り上げるほどのものなのだ。

国内ランク上位に加え、内外で騒々しいボクサーがいま、木村の眼前に迫り着く。

「よお国内の古株。トップ取らねえでランカー彷徨いやがって。そろそろ加齢臭が酷えからよ、もう失せろ」

肩を押し付け、押し潰す準備を整える。

惨めにもリングにしがみ付く、頂上への道を幻視するボクサーを終わらせるために。

「8年……は過ぎたか。もう退がれねえんだ」

「あ?」

荒くれの拳が持ち上がるよりも速く、古株の拳が隙だらけの顎を横切っていた。

「臭いに鼻をしかめてたらランカー降ろされるぜ」

「かあ……っ!？」

衝撃に驚きつつ視線は下を向く。

木村は脚を使い、次の動作に移っていた。利き足を内側に入れて力を捻り出す拳は…。

(…アッパーだな！)

次の一手を察して、思い切り顔面を振り上げた。

あからさまにバツティングを狙う行動は、次の瞬間。

『身体を起こしたところに右フック！』

復帰間もない木村選手、敦士選手を巧みに操り試合を形成していく！』

(なにイ!?)

頭部に襲いかかった木村の右拳により、足元がふらついた間に左右を打ち込まれてロープ際に後退させられた。

「んなっ、1発で効くわけねえだろっ！」

バカが、と吐き捨てたセリフを木村の右ストレートが口内に押し戻す。ロープが張力を発揮して、敦士の身体を衝撃が駆け抜けていく。

「ぶあ……っ!？」

左右、ボディの3連撃が容赦なく襲いかかり、敦士の顔面が大きく弾んだ。活きがいいのは果たしてどちらか。答えるまでも無い答案に、為政者は己の身体を起こして反抗する。

(パンチを貰いにきた…?)

木村の右拳が察知するのは、敦士が両脚を地につけた感覚だった。1分未満の時間で、敦士の闘争本能が危険地帯にすることを理解した。

「ふんっ、喧嘩慣れはしておるようじゃ。

木村の闘志を逆手に取って、打たせたところを捕まえる算段じやろうて」

ロープ際で歯を食いしばる敦士を、鴨川は冷静に見とる。相打ちを覚悟して拳を振り抜くさまは肝が冷えるほど迫力があつた。

「肉体的ダメージだけなら耐えられるでしょう。」

ですが、脳を守れなければ…木村の敵じゃない！」
篠田がはつきりと宣言する。

ここまで他のプロボクサーが敦士に負けてきたのは、敦士の一撃がジュニア・ライト級でも指折りの破壊力であったこと。加えて、外野のヤジがシャレにならないレベルで選手たちの集中力を乱したことにある。

過去の試合が記録されてきたことで、木村たちは覚悟を決めることが出来た。篠田の情報収集のお陰であり、そもそも鴨川と篠田のしごき以上に怖いものなど、そう巡り会えるものでもない。

『すごいぞ、圧倒している！』

敦士選手が自分のボクシングを出来ない！木村がさせない！このまま決めにいけるのか!?!』

右の一撃が敦士の顔面を打ち抜いた。

相打ちを狙い放った拳は宙を切る。

ならばと次に選んだガードは間に合わず。間に合おうとも隙間からパンチを当てられる。たった2分で敦士の顔面…いや、思考は混乱を極めていた。

（なんでだ、俺の拳だけどうして空振る?）

目の前にいるじゃねえか、俺はまだまだ体力あんのに、どうして足だけ動かねえんだよ、まてよ俺はいつ…ロープ背負ったんだ!?!）

右、外れる。

左、当てられる。だが見えた。

（ジャブ…!ジャブなら打ち返せるはずだ。思い切りカウンターして、リングに道連れにしてやる。こい、こい…こい…こいや…!）

混乱する身体と脳で、静かに動いた木村の左拳を敦士は見逃さない。足を大きく広げて、遠くにある顔面へと右を一直線に放った――

木村の左ジャブが顔面で止まり、敦士の視界から木村の中心が消え去るまでの話だが。

（ストレートが外れた!?!）

バカな…何百人も倒した俺の拳が見誤るはずねえ!）

くらりと遊ぶ右拳。木村の身体から10センチ以上も離れた場所を通り、自信が音を立てて崩れていく。

「頭を真横に押しして重心を逸らしたな」

「はい。少しスリッピングするだけでストレートを外せます。相手は訳も分からないでしょうね…」

「顎を引かないとこうなります」

木村が魅せた早業を鷹村たちは見切っていた。

プロボクサーなら注意して然るべき事態だが、喧嘩だけで上がってきたボクサーには避けようがない。

(こんな、情熱だけでボクサーしてる老いぼれなんぞに…)

(どれだけ天辺をとろうとな、欲に胡座かいたら男はお終いよ)

「このヤロウ!!?!!?」

木村の右頬を擦る右拳。

一瞬にして木村に肉薄した敦士は笑う。ステップなど踏んだことがない、ただの喧嘩師が迷い込んだリングなのだ。うっかり腕で抱え込み、ロープ際に寄せる事態が起きても不思議ではあるまい。

「関西最強だか知らねえけどよ」

「…!?!」

ならば、逃げ場を奪ったと勘違いした敦士が気づかないうちにステップを挟み。

「あ、あ!?!」

ロープ際、敦士の顎にバックフックを振じ込んだ一撃を見抜けないのも当然と言えた。

脳を揺さぶられ、それでも肉体は健在。ゆえにダメージはないと勘違いして、足がすくんでいることを理解できなかった。

まだ倒れまいとクリンチに移行して、敦士は自ら敗北へと突き進んだ。

「関西最強そこに座ってちや、当たるもん当たりやしねえさ」

かつて、間柴もクリンチで必死の抵抗を見せた。

男らしく無い?ボクサーの恥?なんと言われようとも、木村はあのクリンチでチャンスを逃し、そして敗北した。

これは勝利を諦めない男たちの執念だ。クリンチを許したほうが貪欲さに欠けているのだ。何度も、同じことで躓くわけにはいかない。

「く、ぞオ——」

縦に一閃、敦士の視界は白く裂ける。

それで終わった。

膝から上が力なくロープに沈む。それと同時に両者の間に割って入ったレフエリーによって、試合終了の合図が鳴らされた。

『試合終了です！強敵敦士を圧巻の試合で倒し、木村 タツヤ再び日本ランカーに返り咲き!!？』

この強さ、すでに日本タイトルに手が届くのではないのでしょうか。今後の展開に観客の期待も膨らんでいきます！』

「すごい！すごいですよ木村さん!!」

「かぁーっ！終わってみりや圧勝じゃねえか!」

「やったあ！次はタイトルマッチ行けますっつて!」

客席で大喜びする鴨川軍団。

「篠田さん、会長、やりましたよ」

「ああ、見ていたぞ。文句なしだ、木村」

「良くやった。実力も十分。タイトルも狙えよう」

「その前に1人、ケリ着きたい相手があります。」

エレキのヤツとの試合、期待してますからね」

「そうだったな。出来るだけ早く取りつけてくる」

こうして、木村の再起戦は華麗なK.O勝利で幕を下ろした。

エレキ・バッテリーとの再戦を最後の課題として、日本タイトルに向かい躍進する。青木も巻き込まれる形でパイヤとの再戦が決定するのは、仕方のない話だろう。

ここで終われば、めでたしと言えたのだが。

「おいレフエリー！カウントせずには止めるな!」

「どこに目え付けたんだゴラア!!!」

「おどれ転がしたるかア!?!」

木村の勝利にケチを付ける不良が約30名。

立ち上がり、今にもリングに雪崩れ込もうとしている。

木村の勝利は完璧なものだった。それにケチを付けるとなると、黙ってはいない男たちがいた。

「やれやれ。ちよいと相手してやるか」

「鷹村さん、暴力は無しですよ?」

「わーってるよ。多分」

鷹村が耳の穴を右人差し指で弄りながら、最前列の席から立ち上がる。

「まあ道具を使われたら、つい取り上げて使ってしまうかもしれないが」

「板垣君、僕たちは鷹村さんを止めよう…」

「ええっ…」

少しばかりの“会話”をしてあげようという、大魔王様の優しい心配りだ。周りの観客たちは、不良に近づいていく鷹村を見て青ざめていく。

リングの上から鷹村の行動に気づいた鴨川が、慌てて声を張り上げようとしたとき。

「やめろ」

「あ、敦土さん?」

不良集団の前に敦土は立ちはだかっていた。

まだふらつく膝を抱えて一喝。それで不良集団は立ち止まる。

「俺は……まだ半人前だった。」

それが分かっただけ、今夜は価値がある試合だ」

「なっ!?!アンタが負けたなんざ納得いかねえ!

疾景にリベンジするんじゃないのかよ!?!」

「疾景のヤロウを倒すのはヤツだろう。」

俺のボクサー生命を賭ける。だから退がれ」

「……………ウス」

息を切らしながら頭を下げる敦土を見て数秒。

渋々といった表情で不良集団は敦土を抱えて、両国国技館から立ち去っていった。

「けっ。今更格好付けてもおせえつつの」

「な、何はともあれ良かった…」

「まだ試合はあるのに、もう疲れました…」

尻餅をつく2人。

これで本当の意味で木村の再起戦は無事に終了した。

残すは2試合。

間柴の世界前哨戦。

そして宮田の世界戦だ。

リボルブ・ゲイルVS間柴 了

木村 タツヤが完全復活したことを観客たちは確信する。世界を前にしたボクサーたちに熱い応援は届いた。

観客の歓声、期待、全てが異国の者にとつての重圧へと変化する。「き、緊張しますね……。この日のために練習したとはいえ、リヨウのフリツカーは長いです。毎ラウンドあれを掻い潜れるか……」「ウジウジすんな。最短で試合終わらせるって話だろうが。長引けばどの道やられんだよ」

セコンドのラバルがリングに続く茨の道を歩くのを他所に、チーフセコンドのミロが緊張で喉を震わせる。

「努力を惜しまないでくれた2人に感謝を。」

「今度は世界行きの特等席、確保してきます」

会場の熱気に染まらない暖かい三白眼で、リボルブは前を向いて感謝を告げた。まだ前哨戦だとラバルが返して、気が早いことを着に笑う。

『ここからは世界に臨む漢たちが登壇』

敵地への招集で凝った肩はほぐれた。

勢いある日本のボクシング界に挑むには十分なコンディションだ。

『9戦9勝9K・0。』

オリンピック2連覇、アマチュア世界最強の名を冠したボクサー。

アマチュア時代のK・0率は脅威の80%！』

剣のように鋭い三白眼、青空のように透明感のある瞳、髪は耳まで伸びる紅色の中分けストレートパーマ。前髪の中から一本、後ろに流れる黄色の髪が黄金の像を連想させる。

間柴より一回り小さい代わりに硬骨を秘めた褐色の肌で、しっかりとリングを踏み締めた。

『剛打の持ち主がスペインより来日！』

異国かつ史上の世界で激る高揚感を、羽織る黒いガウンとともに放り上げた。世界行きの切符を手にする準備を終え、ゆっくりと深淵を

見据える。

「アマ時代のK・O8割って強いのかあ？」

「いや、でもプロのK・O率100%だぞ」

「まだ一桁しか試合してねえんだ。」

K・O率100%なんて国内にも沢山いるだろ」

観客たちが騒ぐなか、鴨川軍団の1人、板垣が幕之内たちに解説を入れる。

「アマの決着は判定が大多数です。プロに比べてグローブのオンスが2つも上だ。加えて、3ラウンドという短さがK・O勝利への道を阻んできます」

「ヘッドギアも着けてやるんだ。ありや視界が狭まってやり難いつたらありやしねえ」

「安全重視つつても、重いもんは重いからなあ」

「お前らはあつても無くても然程変わらんだろ」

鷹村の事実陳列に秒速K・Oされる青木村。

「大きなグローブでも抑えられない威力。まるで今井くんだね」

「……僕も同じことを考えていました。東邦ジムで彼の試合映像を観ているながら、脳裏に京介の顔が横切りつたくらいですから」

「そんなに凄い相手なんだ…」

「映像で観た感じだと間柴は勝てそうだったか？」

「……恐らくは2割が良いところです」

「あの間柴が2割だと!？」

「相手、無茶苦茶強いじゃねえか!」

「リボルブの強さは懐に飛び込めるステップワークにあります。左を掻い潜って、先輩並みの破壊力でズドン」

「ははあん。一歩みてえな相手か。」

新人王のときの憂さ晴らしとでも思ってたんじゃないやねえの」

「や、やめてくださいよ…」

「確かに先輩に通ずるものがありました。」

耐久力が心許ない間柴さんにとって、強敵ですよ」

世界前哨戦に相応しい……最早、タイトルマッチ級の試合だと理解

して、幕之内は不安を潰すように拳を握った。

自分は前哨戦で、ゴンザレスに倒されたから。

前座を飾る男は幕之内の心配など知りもせず、前前座で勝利した遅咲きの生命に反吐を吐いていた。

「日本で収まったら承知しねえぞ」

日本の死神にとって、木村との試合は汚点のまま記録されている。本来の実力を出せず、国内留まりの木村。僅か3センチの実力差、いつそ木村が世界王者に成れば黄金に輝く宝石だというのに。

『世界2連覇を迎え討つ死神の降臨だ!!?』

腹立たしい過去を見送り、暖まる会場を零度にせんと間柴が動き始めた。

『半年前、東洋太平洋タイトル防衛戦を1ラウンドで果たし、圧巻のベルト返上劇を披露。』

WBAランカーとして実力は十二分、世界挑戦の資格があることを今日証明してくれ!!?』

全容を喰らう曇天の布地。

等身に影を落とし、清く美しい景觀に滲みよる。

『世界へと、ついに日本の死神が降臨!』

宮田の世界戦の前座として、最も添えてはならない地獄の門は開かれた。

「間柴ア!初の世界ランク戦がなんだ!

俺たち『地獄会』がついてる!・なにも心配はいらんぞ!」

「そうだー!お前なら大丈夫だ!!」

「まっしっぱっ!!」

会場の中程から湧き上がる一際暖かい歓声。

間柴が勤める運送会社『』の社長が発足した、間柴 了のファンクラブである。クラブ会員は社員で占められており、間柴の人徳が厚いものだと物語ってくれている。

「社長たちも応援してくれている。間柴、お前の努力が成したものだ。胸を張って世界に行こう」

「……うるさいくらいだ。」

見せつけられる方の身になってほしいもんだぜ」
地獄会に背を向けて間柴は呟いた。

「リョウは信頼されていますね。」

「人気者とは違う、暖かい声が聞こえます」

「……………」

散歩中のように笑いながら、リボルブは挨拶を差し出した。しかし、ハナから見向きするつもりもない間柴は口を閉じて応える。

「日本のボクサーは好きです。貴方たちは諦めないことを教えてくださいさります。」

才能を磨いた拳、努力で築いた土台。私もいつか戦いたいと思い、今日その願いは叶いました。

同郷の世界戦を祝う者同士、悔いの残らない試合にしましょうね？」

「…甘い。苦痛で泣き喚くそのツラを晒し上げて、メインを観る余裕無くしてやるよ」

敵と心を通わせることはあり得ない。

心から差し出してきた手を引っ込めて、リボルブの感情は喜びに昂っていた。パフォーマンスでも、観客がそう望むからでもない。間柴が生み出す本心からの煩い^{わずら}を見込み通りだと知れたからだ。

WBAライト級2位

リボルブ・ゲイル

VS

WBAライト級5位

間柴 了

『無敗への有罪判決か。はたまた死神への罷免^{ひめん}か。』

1枚の切符を賭けた裁判がいま、開廷です!!』

各陣コーナーに構えて、世界前哨戦の火蓋は切り落とされた。

「貪欲のラバル。選手のスタイルに合わせて、古今東西の知恵を授け王座に導く男。選手に必要なならボクシングではなくチェスを指導する、異端なセコンドだ」

「そんな人がいるのに、よかったですか？」

最初から左で流れを掴めつて……。普通なら慣れるために様子見だと思っただけです」

東邦の作戦指示にチーフセコンドは疑問を投げる。

あの間柴とはいえ、初の世界だ。しかも、相手は世界2連覇の超絶格上で、世界を主戦場としてきたボクサー。つい弱気になるのも仕方なかった。

「俺もギリギリまで迷ったさ。けどよ、間柴が”行かせてもらうぜ” って俺に断りをいれてきたんだ。

意志を示してまで行くと言ったあいつを信じてくれ」

「わ、分かりました」

今朝方のことを伝えて、間柴の背中を見守る。こちらの安い言葉で勢いを削いで、なにが得られるというのか。躓いてもいい、思いきり腕を広げてこいと東邦は心のなかで叫んだ。

リボルブのセコンド、ラバルもまた東邦たちの考えを読んでいた。

「先ずは押してくる。開幕、鼻っぱしを折ってこい」

「おっけい、いっぱい任せてくださいー！」

ぐっと拳を突き上げて、白光のように笑うメダリスト。

棍棒のように太い腕をマットに振り下ろし、リボルブの背中に喝を送った。

「骨は拾ってやんよ、しっかり暖めてもらえ」

コーナーから両者離れて、会場の熱気はスイッチを切り替えたかの如く暗礁へと乗り上がる。

（—————いっ）

これまで観てきたボクサーとは一風変わっている。

ゴングが冥界の扉を開いても穏やかな表情。

握手後にカフェへ誘うような瞳、街中で肩を並べて歩く様と重なるステップ。

(俺を前にして眠そうだな。

煽っている自覚がねえのに腹が立つ)

平穩に満ちた挙動1つ1つが間柴を逆撫でする。

遊士の瞳を裂き、友人気取りの呑気さを潰すため。30分以内の余命を告げる鎌が持ち上がる。

(やる気が無えなら、今すぐ殺す——)

頭に昇る感情に委ねて構える。

次の瞬間、眼前に迫る挨拶が本物の鎌を幻視するほどに冷えた左腕へと乗り出していった。

(ぐ——！)

間柴の視界を塞ぐリボルブの左拳。

右手に減り込んだ奇襲は力強く、前傾姿勢に移行した間柴の顔に容赦なく貫通する。

「後ろ足を先に詰めてきた！」

「あの重心移動はメキシカンだな」

「1ラウンドから超接近戦!？」

間柴さんを相手に軽々とやってのけるなんて……強い！」

リボルブの初撃をガードした間柴は舌打ちする。

フリツカーの挙動を研究して開幕を止める。実物を前にして、大舞台の最中で間柴相手に成功させる。出来ると思わせた時点で間柴は負けていたのだ。

(さあ日本人、踊りましょう。

アウトボクシング
謙遜合戦は交友に向きません)

射線上から散った火花が次の導火線に落ちる。

瞬間、拳に火が付いた。リボルブの右拳が歪曲して間柴の顎を刺し狙う。奔る火花を視界の隅に捉え、半歩分のスウエーでやり過ぎす。

再び、拳に火が付いた。間柴がスウエー中に右拳を躲すとき、奥の方で散る光を目撃する。リボルブが拳を握る動作をそう幻視しながら、左頬を殴られる景色に流された。

『ああっ！最初に被弾したのは間柴！

いきなり相手の壇上に引きずりこまれた！』

幻と現実で交差した意識から間柴が戻る。

(いまのは……フェイントか?)

リボルブの左拳が戻っていく。ビデオでもよく観た挙動ゆえに見切る自信があった。然し、対峙して初めて気づく。リボルブの拳は質が違う、と。

意味までは読み取れない。だが、確かに見ていた右拳はいま、目下で握り締められている。

(…テメエの拳は嫌いだ)

間柴の懐に軸足を落とし、急所である顎に狙いを定めていた。退避を許さない思い切った行動に対して。

(だが、潜り込んでくるバカで助かるぜ)

ほぼ直立となった姿勢から利き足を真横に置き、右で歓迎する姿勢を整えた。

(インファイターは必ず殺すと決めてるからな)

(退きませんか……素晴らしい姿勢ですね)

両者、腰を据える。

開幕20秒、利き腕同士の打ち比べを目前に観客たちは目を見張った。あまりにも生き急ぐ行動は勝利を疑わない強者同士がゆえに。

21秒を刻んだ瞬間、真下と真横へ身体が繰り出した。

——ッ

(驚きました)

真下に飛び出したのは間柴の右腕。相打ちを覚悟し終える右拳の圧がマット表面に波紋を描く。

(本当に振り抜くとは、驚きましたよ。

もう少し慎重に行くものと思うのですが)

そして真横に躲したりボルブ。相打ち上等に乗り出した意志を晒させて打つ振りをやり抜き、間柴の右側面に降り立った。

「腕を振り上げる瞬間を狙ったんだ!」

「右を構えてる……リボルバー」が来ます!避けて!」

リボルブの左拳が空気を最小限に取り込んで、零秒。

彼の瞳が狙う場所は肝臓。その左拳が最大6回で相手をK.Oし

てきた実績から付いた必殺名、リボルバー。

絶好の機会、最高の立ち位置から最短距離を奔る。

空を切った鎌を見ながら、右耳で引き金が鳴るのを間柴は聞いていた。死角から向けられた銃口。たった6発の弾丸に鎌が反応する。

「バカヤロウめ」

弾丸の横つ腹から引き裂く死神の右肘。

間髪入れず、硝煙を縦に割る左拳。

『か、返した！相手の必殺をいきなり見破ったア！』

反り返るのは読み誤ったリボルブの上半身。

リボルバーは不発に終わり、死神の反撃が意識を真上に散らす。高く飛んだ頭部が頂点に届いたとき、観客が興奮に沸き上がる。

「懐から離しましたよ！」

「得意技で間柴が勝ちやがった！」

「この距離は間柴さんの独壇場です！」

ついに間柴の左が持ち上がる。

東洋最凶の鎌をアマ世界王者へ構えて、ゆつくりと呼吸を整えた。直ぐに追撃しないのは死神の直感だ。

（6発でK.Oしてきたパンチにしちゃ軽すぎる。本腰入れてなかったのか？）

沸いた場内とは裏腹に、間柴の体感温度は下がっている。拳の質が違うと判断したが、まだ真実までは見えない。

（……まあいい、これから廻り殺すんだ）

見え隠れする銃口。撃鉄に繋がれた無数の導火線。更には自分の手で構える弾き金。

研究してきたから見える景色。明らかに優位な場面に立ちながら、自分の寿命だけが一刻だけ延命したような錯覚。当然だった、左で制するには限界がある。インファイトに長けたボクサーが懐に飛び込むまでの時間と比べて、自分が首を落とす時間はあまりにも長い。

（大舞台を目前にして早とちりしました）

リボルブの両脚が地に着く。まだリズムを測る。リボルブの瞳を見た瞬間、死神の鎌を振りかざすために。

「こっちの必殺も研究されてるに決まってるだろ。

暖まるよか、頭冷やしてもらえ、バカタレめ」

必殺は崩した。だがセコンドもボクサーも諦める雰囲気ではない。間柴の視線はリボルブの肩へ。オーソドックスな構えを取る直前、ウォームダウンするかのように脱力してみせたのだ。

必殺を破られた戸惑いは一切ないと知る。そして今から、世界2連覇の圧力は本領に踏み込んでいくと確信した。

死刑に争う罪人へ断頭の鎌を放つ。

迫る裁判を閉廷へ落とすために――。

(いッ!!!!)

握った拳を構えるより早く、死神の鎌が鼻を真横に引き裂いていた。

世界を知るボクサーでさえ異彩に満ちると思わせる拳。ダツシユ力には自信のあったリボルブだが、そもそも踏み込む足が押し戻されて武器を落とされている。

(ただ速くて回転力の高い左ではなくなっていますね)

踏み込みを上から潰しに来る左。

的確に、慎重に全てを深淵に攫っていくさまは、リボルブとラバルの想定にはない技術を備えていた。

『追撃の左が炸裂！間柴の距離で試合が動きます！』

このチャンスをもものに出来れば勝利に近づく！』

目前から飛び出す鎌を潜り、ガラ空きの懐へと脚を踏み入る。リボルブの瞳は朱色を渴望する鎌を写していた。

(フェイントも巧いんですか…！)

後ろを駆け抜ける鎌は消えて、その首を刈るために新しく用意されている。罪人を断つまで、容易に止める手段はない。

朽ちかけた外套の奥から繰り出すように左腕は振られて、動体視力を欺くフェイント混じりにリボルブを襲う。赤いグローブをかわすために状態を逸らす瞬間、鎌の切っ先が加速した。

『フリツカーの雨嵐がアマチュア2冠の前身を止めている！間柴の左がアスリートの頂点を圧しています!!』

大樹の細枝のようなしなやかさで長い距離を走る左拳。防ぐのが困難だというリボルブ陣営の判断は正しかった。ゆえに開幕、早々に懐に潜り込んで打ち崩す瞬殺案を練ってきたが、束の間の喜びを手にして終わってしまった。

「ど、どうしますか。リボルブに指示は!?!」

「慌てるな、目だけは守れと言っている。そもそも、世界レベルの左は見切れるレベルじゃねえんだ」

ラバルは冷静に返答する。

「ま、1ラウンドがボロボロなのはいつものこつた」

「そうですね……」

全ては順調だと言うように、リボルブが唇を噛む様子を2人は感情を抑えて見守っていく。

「にしても、ちよいと当たりすぎる。リヨウのヤツ、突進型に慣れてねえか……?」

頭を振った先に待ち構える鎌。

ラバルは一部の日本タイトル戦、そしてOPBFタイトル戦の資料を思い返しても、該当の選手が引つかからずに疑問を抱く。全ての資料は手に入れられなかった。なら、リボルブと同じ突進型との試合はもつと前にあつたのだろうかと考える。

それも、とことん手酷い形で倒されたのだ。

(幕之内と同じタイプは対策済みだ)

開幕の襲撃を許しはしたものの、間柴はアウトボクシングにおいて絶対に引けを取らない自信があつた。幕之内に負けた時から、サンドバッグを叩くと嫌でもあの格好を思い出す。冬の風のようにしつこい前進を黙らせるため、過去現在の幕之内を想定して何度打ったか。(野郎以下の迫力にビビるかよ)

敗北した禍根のようにしつこい突撃を寄せ付けないのは、果たして誰とのリマツチを想定したものか。

屈辱を募らせる男はいま、観客席で間柴の攻勢に大きく喜んでいて。まさか自分に標準が当てられているなんて思いもせず。

「ちつ、ついてねえな」

また、リボルブ・ゲイルが最悪級の飛び火を受けていると察したのは、リボルブとラバルくらいなものだった。

弾かれる頭、進まない氣勢を受け入れると、ポイントを落とした合図がリボルブの耳に届く。

『第一ラウンド終了です！開幕は間柴が圧倒!!？』

オリンピアンが近づけない、近づけさせない!!？』

絶対の射程距離に沈みゆく黄金の国。

死神の鎌が1つ、輝く大地に死の楔を打ち込んだ。



「インファイターとの試合に慣れてますね」

コーナーに戻って一声、リボルブは浮き上がる笑みを隠しながら言う。

「お前さんのリズムは一定じゃなかった。

そうするように師事していたが……リヨウには効きにくいらしい。変調なボクサーとバカみたいに粘り強いインファイターを抱えてんのかね」

舌打ちしながらも作業をこなして数十秒、ラバルは次の方針を定めた。

「どれだけ慣れようと、リヨウの左に苦悩する。

だからリズムを短調にはするな。ポイント取られても負けじゃねえ、気持ちだけは切り替えていけよ」

「おや、このままでいいんですね？」

「ああ」

可笑しな言葉選びをする。

ミロの頭は疑問符だらけだが、リボルブの聞き返しは冗談のようなものだ。

「いまは普通の変調に慣れさせとけ」

「分かりました」

フリツカーに痛ぶられた身体の機能に問題はない。

相手の動きを目に焼き付けんと、リング中央へと向けて立ち上がった。

執るか、潜るか

世界の標準を見定める第1ラウンド。間柴が試合の流れを完全に掌握する、大きな期待感に満ちる時間となった。

(この流れを断つために開幕から攻めます)

リボルブが付け入る隙があるとすれば、ゴングと同時の超接近。流れが自陣にまで届くより早く、出来る限り圧を掛けること。

ガンマンがコンマ数秒の勝負に命を賭すように、リボルブの身体は第2ラウンド開始と全く同時に飛び出していた。

対角線上8m先にいる死神でなくとも、そんな目論みを通すほど甘くはないと知っていたいながら。このボクサーは外で戦うには少しだけ小さく、短いがゆえに見え透いた舞台上で踊り続けるしかないのだ。

(そういうところが似ている。幕之内：それと)

迫る黄金の影に間柴は2人のボクサーを重ねる。

片や敗北した相手、幕之内 一步。残りは勝利したにも関わらず、未だに自分の評価を落とすボクサー、木村 達也の死に体だ。

2人の影はいまも間柴を苛立たせる。特に、インファイターが相手であれば。

(なにつ……！)

リング中央へ向けて移動するリボルブは、遠くから薙ぎ払われる低空飛翔の鎌に攫われた。

第2ラウンド、間柴の初手は右のロングボディ。

そのウイングスパンから、足を広げて打ち出したときの飛距離はボディ打ちとは思えない。

前進に対するボディブローの直撃は避けられたが……。間柴から接近してきたというのに、インファイトの機会をいきなり絶たれてしまった。

(ロープを背負ってしまいました。先ずはフリッカーと思っただけの仇となりましたね)

だが、残された道は幾つかあった。

前方、死神直通の墓地。

左右、四肢切断の大鎌。

ここは裁判官、検事、弁護士に至るまでが間柴に属する死刑推進論の極地。

威勢良く踏み込んできた咎人を処する場となった。

(ですが……フリツカーを打たせれば良いだけですよ)

咎人は全てを承知している。

自らの罪を認識して、尚も止まらない。

フリツカーが放たれる距離に顔面を置き、両脚をスタンディングポジションにして踵をリングに着ける。こうすれば重心が後ろになり、待ちの姿勢となる。

足ではなく、全身でフリツカーを見極めるために。

(俺の左に警戒し過ぎだ。そのまま地団駄踏んでな)

間柴の左拳が放たれる。

身体を切るのではなく、生命を刈るために。

目蓋を落とされ、視界が狭まる恐怖。

ガード越しに伝わる感触が、直撃した先の未来をリボルブに想像させる。事前に観ていた左からは想像もできない圧力。300戦に迫る戦績をひっくり返す歪なフリツカー。アマチュア、プロでも見なかった質だから容易に慣れることは出来ない。

『圧倒！間柴の左がこのラウンドも猛威を奮う!!?』

我々はこの姿を国内でも見てきました。この左に数々のボクサーが沈んだ、攻略困難の図式です!!?』

第2ラウンド開始1分経過。

リボルブが重心移動をする度に間柴のフリツカーが軌道を変えて、先々に逃れる道を塞ぐ。

着弾は1割に満たない。リボルブはロープを背負いながら、顔面を前に置いて着弾場所を誘導しているからだ。

「リボルブは上手いこと目を守ってるな」

リボルブのディフェンス能力に感心する鷹村。

「左右に動くときもガードは顔面に貼り付けてやがる」

「むしろ、あの動きに既に付いていけてる間柴のほうを褒めるべきだ

ぜ。インフアイターを熟知してる。

弱点を徹底的に潰して、世界戦に準備してんだ」

「あの伊賀さんを圧倒したのも納得ですね」

伊賀 忍を1ラウンドで瞬殺したことが記憶に新しい。

「誰かさんがライト級に上がったからな。釣られて来るボクサーとのリベンジでも想定してんじゃねえの」

「成る程。惚れた男を餌にして横から搔っ払う算段か」

「……あいつらが日本のランカーじゃなくて良かった」

「あは、あはははは……」

幕之内の背筋が冷やりとした視線を感じ取る。過去から観察されてきたかの如く、こちらを見てもない死神の殺意に怯えた。

「む、そろそろ気色が変わってきた。動くぞ」

「ま、まさか……」

幕之内が視線を戻した先で、死神の鎌が黄金の拳に防がれるのを確認する。

『は、弾いた!?』

僅か2ラウンド目にして間柴の左に慣れたのか!?』

先ず注目したのはリボルブのステップ。

ずっと定着しない居心地の悪さを感じてはいたが、ここにきて急に規律正しいものへと変わった。

あの動きを幕之内は知っている。いや、ボクシングを観戦してきた人間なら知らない者はいない。

「アマ特有のカウンター狙いに変えてきた。

景気付けの1発を欲しがってんだ」

「流れを奪いにきた……!」

肉を切らせてでも近づく熱意に、幕之内は己に似た譲れない信念を感じ取った。

それは間柴も同様……いや、幕之内以上に忌々しいものを見たとき、屈辱に心を煮えたぎらせる。宮田に反則をもって泥を被せたことの怒りから対峙した幕之内とは違う。間柴に興味を持ち、間柴の技に一喜一憂し、なによりも自らを追い詰める腕前に笑っているのだから。

(こいつならパリイ出来る。このまま接近しましょう！)

そのまま軸足で身体を押し込んで、右拳を構える。

残る左手は次の一手に対処するため、前に突き立てた。

フリツカーへのカウンターを狙い――。

「……なんと?」

パリイ出来ると思った左拳が勢いを失う。失速し、脱力しきった左拳は蚊の如くリボルブの頬に止まる。

「アマちゃんが」

苛立ちに急かされていた拳を畳み込む。

好奇心を隠しもせずに迫るボクサーなど世にも珍しい。

だが、見ないわけではない。間柴の周りで言えば、板垣がその標本と言える。幕之内との関係者ならば、ウォーリーが最たる者だ。

彼らがその表情を見せるとき、得てして短期で爆発的な成長を遂げるとき。

つまるところ、これは僅かながらの感情の抑制が効いたということ。

「発想が…ぶっ飛んでますよ!」

圏外から飛んでいた右の拳。

邁進する断罪衝動を防ぐことが叶わず、リボルブの顔面がロープを追い抜いて四方の隅から顔を晒していた。

『大砲一直線ンンン!!』

絞首台の紐を張るが如く、リボルブの身体がロープを大きく引き延ばす!いきなり死刑判決の可決か!?

それはフリツカーをフェイントにした右拳の一撃。

リボルブが左を潜ることに意識を注いだ瞬間、反対側から角度をつけたストレートを放ったに過ぎない。

過程に、わざとパリイさせたことも追加すればオリンピックにも通じるワン・ツールの完成だ。

(効きますね…これは持つ者の拳…!)

死神が執る裁判で、リボルブは想像を絶する実力に天地がひっくり返る思いだった。

インファイターに強いのは良い。それも異様にとなれば、弱点の裏返しとも受け取れる。だが間柴からは異様を越して、異常なほど過敏な強さを見せつけられてリボルブは理解してしまったのだ。

自身を凌ぐインファイターを間柴が知っていることに。

そして、家族を知る強さが秘められていると。

「なら、私が負ける道理はありません」

直撃を受けて堪えた足腰を前に押し出して、リボルブはほんの一瞬だけ、この試合で初めて微笑みを崩した。

それはハツタリかと問われれば、肯首する。

間柴の大砲は必殺と言えるほどの威力でリボルブに直撃した。いま畳み掛ければ、試合が一気に終わることも可能だろう。これを誤魔化すため、そして本心からの喜びを隠そうとしたリボルブの咄嗟の行動だった。

『た、耐える！耐久力も世界トップレベルで高い！』

冷めた表情もすぐに元通り、挑発とも取れる微笑みで満たされる。しかし、間柴の肌は形容の出来ない気迫に曝された。

過去、3度味わった執念に似たものをリボルブの眼差しから感じ取ったせいだ。

(なにを迷う。勝機を逃すんじゃない)

(そりゃ、すぐにバレますよね……！)

然し、迷いもすぐに振り払って再びフリッカーを起動する。

鞭打のようになる左拳が着弾ギリギリまで軌道を読ませない。

2本の腕に対して頭部の急所3箇所を狙い打つ。

それがリボルブが第1ラウンドの攻防から読み取れた軌道。突撃型の攻略を前提にした、正しくリボルブを仕留めるに適した性能。

(スピード、パワーに翻弄されない……)

リヨウにアマチュアの戦いは通じにくいようです)

そして、リボルブが時折見せる本性を露わにするために積み重ねを続ける。

左を握り右をほぐして、決して止まることなく、暗雲が近づく世界に鎌を振る。序盤だからと出し惜しみをする気は間柴にはない。そ

んなことをしたから木村に追い付かれた。リング外で乱闘して怪我を負い格下に手こずった。

同じ轍を踏むわけにはいかない。

リボルブというボクサーには、それが命取りになると直感で分かっ
てしまったのだ。

リング中央を進むリボルブへ断頭の鎌が止む目処なく迫る。

肌を擦るたびに飛び散る火花。ガードするたびに導火線を断ち切る鎌。

断頭台が待ち構えていようと、彼の輝きが顔から落ちることはない。

何度、鎌を振りかざそうと耐える。不屈に振る舞い、断頭への期待を白昼夢に帰し、そして。

(ボクサーの私が勝てないのは歯痒いです)

死の象徴を黄金の国で塗り潰そう。

奥歯で噛み込んだ決意、固く。

(次からは…師の訓えを解きます)

(逃げられた…!)

響く警鐘。

第2ラウンド、追い詰められた男は最後の一線を踏ませることなく
凌いでみせた。



「いい調子だぞ間柴。このままなら一方的に試合を進められるんじゃないか？」

「おかしい」

「えっ!？」

想定以上に優勢な状況を称えた東邦に、間柴は6分間の感想を呟く。

会場の誰もが間柴の優位を疑わない。その視点を考慮しても、間柴本人は現状を五分五分と判断していた。

「ヤツの笑みは喜びから出るものじゃない。

まだまだ隠し球がある……それも、場をひっくり返すくらいのものだ」

縁起でもないセリフに東邦は顔を蒼くする。

冗談を言うには場違いな場所で……。そもそも間柴の冗談なんてろくに聞かない。だから血の気が引く思いだった。

「なにをして来るか分からないか……。けど、リズムは完全にお前が掴んでいる。攻撃パターンが変わったと思ったら、左で距離を取るんだ」

（そのリズム合わせるのも一苦労だ。

まあいい、やらなきや分からねえくらいの誤差か）

心の中で返す。

どうなろうと、間柴が出している答えは1つなのだ。

「なにをしようが、叩きのめすだけだがな」

その答えを示さように立ち上がった。

黄金の舞台

気分は最悪を突き続けている。

世界ランカーとの初試合、世界前哨戦という舞台で出会った男が眩く輝いている。それだけならよかった。間柴がリボルブのことを嫌悪するのは、その輝きが過去対戦したボクサーと似ても似つかないせいだ。

アレは人を知りながら、自身に類似する感情を灯している。外聞は好青年、戦績は英雄のように眩しい。然しそれが酷く、そして醜く見えて仕方がない。

「時間が経つにつれて活き活きとしやがって」

第3ラウンドの幕が上がる。

四方の法廷から動いた咎人が横へ彷徨い、悲哀の数々を振り払うように歩を刻み出した。

「病のように……弾きましよう」

鼓動が汗をかく。

疾る咎人のリズムが違うと宿主に伝えるために。

宿主は心臓を夜に馴染ませて、咎人の顔を映すように笑う。

「何度やっても同じだ」

咎人の寝台を教えんと、自らの冷めた激情を放った。

死の鎌を一闪。これだけで泡沫の夢の如く、接近戦はリボルブの手元から遥か遠くに行ってしまった。これで諦めれば、なんと軽くて青い夢だったことか。

(感動しています)

眩い魂胆が間柴の左拳を受け止める。

間柴がその本性を恐れていることに感づきつつ、リボルブはなおも喜びを止めることはない。

この2ラウンドで培った経験を活かして――。

「消えろ」

反撃する機会を間柴が挫く。

いま、なにかを始めようとしたリボルブの動きを真上から叩き潰した。右で体勢を崩されてよろめいたところに、無慈悲なフリツカーが放たれる。

(資料は過去に過ぎませんでした)

右で動きを止め、左アッパーでガードを真ん中に寄せて、そして勢いよくオーバーハンドライトを叩きつけた。

散々、真正面を叩いたことで外からの攻撃を意識させにくくした。

(昨日の自分を越えて、私に臨むアナタをやつと見つけました)

まず、間柴のオーバーハンドライトは空振りした。

間柴は当てた確信を持っていたのだが、現実の手応えのなさにやつと的外れな攻撃をしたと理解が追いつく。

「……!?!」

視線が彷徨う。

敵は：咎人がどこにいるのかと目を見開いて。瞳に反射する、下から突き上げる勢いの熱意がグローブを握りしめていた。

打ち上がる右拳。咄嗟に身を引くも、側頭部に小指分の感触が死神の骨に残る。

「ぐ、う!?!」

痛みよりも苛立ちが勝る痛み。

明らかにボクシング以外の技術が練り込まれていた。間柴はまんと乗せられて、再び接近戦へと持ち込まれた。

『間柴の左を躲して反撃の右アッパー!』

第3ラウンド開始直後、急に間柴の調子が崩れてきた。どうした間柴、早くも疲れが出てきたか!?!』

(なんだ、おかしい。こいつの動きを右で止めに行った時から、既に手応えが妙だった。

こいつ、なにをしやがった…?)

自身は疲れていない。体調は全快に近く、むしろ闘争心だけで試合終了まで拳を握っていられるほどだ。

その自信に満ちる男が、着弾を確信して空振り。

現状を把握しきれず、懐で導火線に火がつくボクサーを見つめる。

押し込んでくるフックに対してアッパーを選択して。そして誤った選択肢だったと理解した。

直上に空振りする右拳を通り過ぎて、リボルブの左拳が一直線に顔面を打ち抜く。

「——っ」

頬から骨、脳髓へと貫通する一撃。

左拳の直撃でヒビが走るほどのダメージを抱えた。左のストレートだけで意識が点滅するのだ。

右拳ともなれば——

(マズい、右がくる……!)

ここで選択肢が発生する。

上と下、どちらを狙うのか。射程距離外に出るには踏み込まれすぎている。必然的に受け止めるか、見切って躲すしかない。躲すのが最善だが…姿勢を崩されてしまえば一気に敗北へ落ちていく。ゆえに、身体を可能な限り縦にして、有効打撃面積を減らすことで腕の一本ずつでガードが足りるようにした。

(隙間だらけのドアは盗人の抛り所ですよ?)

腕一本で支持する盾など、リボルブの破壊力を受け止めるには足りなさすぎた。お構いなしの右ストレートが間柴のガードを叩く瞬間。間柴はガードに充てた右拳を引き、身体を後ろに逸らしていた。

この一撃を防げたとしても、この試合を捨てることになるかと直感したからだ。

『ああっ！右ストレートがガードを破碎!!?』

予想出来なかったのか、思いきりよろけてしまう!!』

視界が反転する感覚を掴まされる。

後ろに飛んでもなお威力は落ちない。直撃した頬の痛みから、幕之内の拳を重ねてしまう程に破壊力は最高だ。

リボルブのリズムは一気に絶好調へと舞い上がる。同時に寒気がリングから伝わってくる。冷気が黄金の漢に味方するというのは、間柴のポリシーを嘲笑われるのと同義である。ここで流れを明け渡すわけにはいかない。

(このヤロウツ、調子こいてんじやねえぞ!!?)

目下で喜び弾ける薄紅を狙い定める。懐に潜り込んだリボルブよりも低く、ボディの守りに徹していた左拳に力を込めた。

リボルブが右拳を急所に狙い定めた次の瞬間、顎を切り裂くように左拳を掻き上げる。顎を半分に裂きながら、あつさりと通り過ぎる左拳を見て再び疑問が脳内に溢れた。

見当違いも甚だしいパンチを繰り出したと気づいたのは、反対側からリボルブの左フックを被弾してからだった。

「また外した!?!」

「ボクシングのリズムじゃないですよ!」

観客席で驚く幕之内。

隣に座る青木、木村も同意見だった。

「間柴にアッパー出させたように見えたぜ」

「さっきまで躲しても当てれたじゃねえか!」

「恐らくだが、間柴にしか見えないリボルブがいる。

剣道で言うところの…先の先つてところか」

「間柴さんにしか見えない…? いったい、間柴さんはリングの上でなにを見てるんだ」

不可解な現実一幕之内たちが身震いする。

観客たちが知りたい景色の中心で、間柴はリングに散らばった数多の導火線を幻視していた。

進退する挙動に、視線を誘導する意識。動けば擦れる身体が火花を散らし、リボルブの導火線に火が付く。

(人間導火線ってのはこのことか!?)

打てば空振り。

そして隙だらけとなった懐に飛び込まれて、好きなように左右を打ち込まれる。

第1ラウンドからずっと滲み出ている幻。グローブの向こうに重なる、冷たく霞んだものを振り払うように、リボルブは導火線を身体に繋げていた。

(ラバル直伝のステップ、ヴァニタス。

黄金の国が築く基盤をご覧あれ——」

正体不明の拳の末端が輝きを増して浮上する。

ここまで切り落としてきた導火線の数々が色褪せていく。その全てが一級品の武器だと間柴本人も認識していたが、眼前の漢はあっさりと一級品を越える逸品をリングに出した。

(…なんだ、こいつのステップは。

板垣の小賢しいのとは別種のものだ)

切り落とすだけでは導火線の火は消えない。

切り口を作れば拳がたなびく。

拳がたなびけば火が着いてしまう。

その導火線は熱気に触れただけで点火する。

黄金の国、リボルブのステップは相手の急所を確認するためであり、相手のパンチを導火線に誘導するためのもの。足腰の動作にさえフェイントを取り込むことで、次の挙動を相手に錯覚させる。

カウンターパンチャーの理想を詰め込んだ、人智の外にあるような業なのだ。

(ぐあつ——!!?)

(ボディは守りますか。では顎から落とします)

瞬くに3歩、突く2発の拳。

ガードの上からボディブローが内側に届き、間柴の苦悶の声が上が

ると笑み、昇る1発の拳。

懐で好き放題に拳を放つ。

第1、2ラウンドとは真逆の立場から、間柴のガードを打って反撃を誘う。

『一気に流れが入れ替わる！』

独特のリズムで翻弄するリボルブ！

これがオリンピアンの本領なのか!?!』

ここまで拳を打ち込んで、間柴の警戒心を食うことは叶わない。

(顎も堅い…ですね。攻めても手応えが薄いです)

孤独感に浸る男と、自らの音色を混ぜ合わせようとするだけなの

に。誰とも合わないリズムだけど、死と間近にいる誰かであれば共鳴するかもしれない。

熱くて重たい心を轟かせるように、リボルブの知覚は翼を持つようにして、白い世界から飛び出していく。

(ならば攻撃あるのみでしょう！)

疾るのは2つの漢の影。

片方は導火線で、残りは本体。踏み込む足も、拳を握る動作も現実味があり、どちらを殴ろうとカウンターが待っている。

「ちっ……い」

体感で理解している。

拳を振り抜けば、カウンターで絶命すると。

そこまでバカではないし、試合を相手に明け渡してやるほど勝利を諦めていない。

『間柴ここに来てガードを固めた！』

相手の猛攻を鎌の向こうから観察するのでしょうか』

「丸まってるうちは生きながらえるかもな。」

ヴァニタスはアウトボクサー用に調整したもんだ。ガードを砕くためのもんじゃやない。……ただ、ガードを砕く破壊力を持つてるのもリボルブだがな？」

ラバルはリボルブの繰り出すステップに満足する。

元々教えてきたステップが、この試合を目前にして完成したのだ。通じるかは賭けに近かったが……この大舞台で、それもアウトボクサーをここまで押している。これを成功と言わずしてなんだというのか。

リング中央から徐々に壁際に追い込む最中、ラバルは不思議な光景を目にして首を傾げた。

インフアイトをガードで凌ぐ間柴が身体を縦にする。左半身を前にして、左腕一本で腹を守り、顎を肩で隠す。当たり面積を減らしたものの、リボルブの連打はガードを抜けて当たり始めたとき。

「むっ……なんだ、リョウウのやつ。」

あんなに手を伸ばして、なに打つつもりだ」

間柴の後ろに準備された右拳が、リングから45度の角度をつけて

停止。いや、停止直後、それは動いた。

リボルブが執拗に追いかけて、右拳をボディに打ち込もうとした瞬間。咎人の挙動を見極めた審判を下す。

(鬱陶しい！)

(ぐあっ!?)

右拳の内側を裂いて、間柴のアップパーがリボルブの死角から打ち上がる。警戒が薄れた顎に一撃が当たり、これには堪らずとリボルブは後退した。

「インファイト中に使わないのを逆手に取りやがるかよ。上から観察してたのは足か……!」

「そんなら!?あの攻防中に見切ったってことですか?」

「いや。物は試しと手を出したんだろ。」

リボルブの破壊力に少しも物怖じしねえとは……

頭のネジが外れている。そう賞賛を吐こうとして、リング上の攻守逆転にすぐにラバルたちは言葉を忘れていた。

鉄が組み交わす天井を見て、即座に自分の全身が後ろに反っていると理解するリボルブ。不意を突く隙を与えないために攻めたはずが、死角を作って反撃してきた冷静さに背筋がほぐれる思いだ。

無理に踏ん張れば直ぐに反撃が待ち構えている。そのため、大きくバックステップをして少しでも体勢を整えなければならぬ。

(逃すかよ)

後方に退がったものの、間柴との距離は変わらず中間距離にあった。リボルブのバックステップを読んで、間柴も同時に踏み込んだのだ。

しかし、足は使える。ステップを刻めるまでのたった一手をガードで凌げば、この危機は機会に早変わりだ。

「バカヤロウ!」

ラバルの罵声で漸く思考が覚醒する。

フリッカーを前提にしてガードを上げたりボルブ。

間柴の左腕を見てみれば、目の前から大きく外に飛び出している。肝心の拳が視界から外れるほどに。

(フルスインググッ!!)

(一気に仕留める…!)

間柴の左のフルスイングが遠心を込めて放たれる。間一髪で狙いに気づき、側頭部へのガードは間に合わせた。だが、ガードの衝撃に身体がさらに後退を余儀なくされて、どんと強く背中を叩く壁に辿り着く。

『一瞬の隙から怒濤の反撃!』

ついに、オリンピアンをコーナーに追い詰めた!』

死神に近づき過ぎた者が立つ場所。

幕之内と木村の執念を知る者に、ちよつとやさつとの物怖じを強いことは不可能に近い。その愚かな企みの代償を、ここで支払う羽目になるのだ。

(砕けた腰で何が打てる? そのまま死にやがれ)

咎人は自身の罪を受け入れる。

だから、と。

(相打ちは許してくださいね)

誰に詫びる言葉なのか。

右拳を握りながら、腰をゆっくりと落とした。

足の回復が間に合わないリボルブと、地に足をつけて拳を握る間柴。

「行け間柴!!!」

「リボルブ…!!」

どちらが高威力の拳を作れるかなど、セコンドたちの目にも明らかだった。

ほんの一瞬、リボルブの左拳が先に出る。

踏み込むか否、その行程を踏めないボクサーが幸運にも先に右拳を打ち出せた。間柴のリバーに触れるそれは、しかし威力とスピードに輝きはなかった。

後発、右の打ち下ろしが吹き荒ぶ。

リボルブの顔面を横断した後に、リボルブの身体を大きく真左へと薙ぎ倒した。天井を仰ぐ咎人、その判決にレフェリーがダウンを宣告

する。

『た………倒した!!』

先程までのピンチが嘘のようです!!

あまりの興奮に会場中が歓声に沸いているッ!』

「やった!!見たか久美ちゃん!!!」

間柴のやつ豪快に決めやがった!!!」

「ほ、本当ですか?」

わ、私、怖くて目閉じちゃった…」

「あー良いよ良いよ!俺がしつかり見届けるから!」

地獄会が真っ先に立ち上がり、久美を除いて大いに盛り上がりを見せる。

「攻められてたの間柴だったじゃねえか!!」

あいつとんどけ強いんだよ!!」

「そりやそうですよ!?僕が練習に付き合ったあともずっと練習してたんです。あんなリズムに惑わされるはずないですって!」

「アマチュア世界2連覇を赤子みたいに扱ってる。流石は間柴さん!」

鴨川軍団も鷹村を除いて歓喜に震えている。

鷹村が険しい表情で見つめる先は、間柴の横顔。

(……………)

コーナーに戻る間柴は、俯いて表情を悟らせまいとしていた。右腕で腹部を抑えて、コーナーに背中を預ける。それは観客たちにとって勝利を確信した姿に見えただろう。しかし、すでに起きあがろうとしているリボルブを見てしまえば……鷹村は間柴の様子を異常と断定するしかなかった。

——8カウント。

ふらりと立ち上がるリボルブ。

確実にダメージを負った状態で、残り時間7秒で試合が再開する。いま攻めれば、勝利を手にできるのに。

『ど、どうした間柴?残り時間10秒を攻めずに第3ラウンドを終えました。よほどリボルブ選手のパワーを警戒しているようですね』

観客席からは一斉にため息が漏れる。
次のラウンドに期待する意味もあるそれを、暗雲だと思っ者は極少数だった。



「間柴の様子、変じやなかったか？」

「ええ。最後、攻めませんでしたね。間柴さんらしくありません」

青木の疑問に幕之内が応える。

例え残り1秒でも、コーナーから飛び出して殺気だけで相手を倒しに行くボクサーだ。それが構えるだけで終える…それも、警戒しているだなんて考えにくかった。

「ミスブローみてえなボディ打ちが効いてやがるな」

「はあ!?あれが!?!」

「そうとしか思えねえ。」

おい板垣、あれがりボルバーってやつなのか？」

「い、いえ…。リボルバーはただのボディブローですよ。ただ威力が桁違いに高くて、一撃でも悶絶するレベルってだけで。」

アマチュア時代から有名だったようですけど、リボルバーと呼ばれ出したのはプロ入りしてからです」

板垣の返答に納得のいかない鼻を鳴らす。

「あのセコンド、なにを教えやがった」

「わ、分かりません…。」

だけど、もう試合は長く続かない。あの間柴さんの目、相手を仕留めると決めたときのものです」

鷹村の出した答えは合っている。

ただ、この会場にはラバルが仕込んだ最悪級の業を見破れる者がいない。ゆつくりと土台がりボルブに傾いていることを察しながらも、

鷹村は静かに行く末を待った。

撃鉄は落ちた

間柴の勝利への期待感に満ちる第4ラウンド。

観客たちの熱気とは裏腹に、2人の足は薄氷の上を歩くが如く慎重を重ねていた。

ここから先、交差する時間は決着へと直行する。

リボルブのステップ、ヴァニタスを躲す手段があると間柴は示した。

間柴の洞察力を見抜くことでヴァニタスが完成するとリボルブは知った。

“ 次の開幕、足を見る。ベタ足になってんなら回復しきってねえ証拠だ。

だから――”

インターバル中、ラバルの助言を受けたりリボルブは視線を隠しながら間柴の足元に向ける。

利き足の踵を地面に着けて、ゆっくりと前に出てくるソレを確認して、ラバルの指示通りに揺れ始めた。

(ステップを踏みませんか?)

リボルブが心配していたことが1つある。

前のラウンド、ダウン直前に放った空気を掴むような左のボディブロー。これも“リボルバー”だ。

“ヴァニタス”と同じく、世界の舞台では初出しとなる、ラバルによって備えられたもの。

人体の各急所に存在するとされる致命点を、適切な威力で叩けば耐えられない。とはラバル談のものだが、ラバルの異名に“殺人拳”が与えられている所以でもあった。

これまで9戦、リボルブはこの技を試してこなかった。

本気で打ったほうが確実に相手を倒せるためだ。それに、練習中の

成功率も1割程度と、自分の精度に信頼がなかった。

(けどリヨウは立っています。致命点を掠ったんでしよう)

あの時、打てる拳が限られたから選んだ偶然の産物に過ぎない。だが、間柴には相当の警戒心を抱かせたのは事実。

(ボディの次は顎、と行きたいですが。まずは…)

リボルブはステップを刻んで間柴の射程圏に入る。

ラバルは休めと言った。死角からのパンチも、注視すればガード出来る。フリツカーはヴァニタスで躲せる。ゆえに第4ラウンドは、ダウンで欠けたバランス感覚を取り戻せ、と。

(チツ…:動けるか?それとも、ブラフか?)

間柴は逡巡を経て、そして逡巡を棄てる。

(——惑うな)

射程圏に踏み込んだ漢へ、フリツカーを放った。

東邦のアドバイスを無視する訳ではない。寧ろ、判断材料として十分に加味した結果だ。前に出ながら、あの不可思議なステップを刻みながら、

「せ、攻めてこない…?」

回避に専念する姿が休んでいると物語っている。

フリツカーを10秒も避け続ければ、確認は終わる。

(クク、もつと休みたかったなあ?)

地面から離れようとしなかった足を、いとも簡単に掬い上げてリボルブを左拳の射程圏に捉えた。

「間柴さんが踏み込んだ!!」

「足元がおぎなりのインファイターなんざ怖くない。勝負を決めるならここだ」

幕之内が身を乗り出して見守る。

立場が同じなら、鷹村自身も全く同じ選択をすると頷いて、リングの上でクライマックスは幕を上げた。

予想を打ち砕く攻勢は左のフェイントから始まった。

踏み込んで右拳、ボディストレートをリボルブのガードの上からお構いなしに打ち込む。最小限のステップで時間を稼ごうとする漢が、

急に足を使うはずもなく。

「……っ!？」

両腕でのガードを余儀なくされる。

そこに、間柴にとっては珍しい左ストレートがリボルブの顔面へ放たれた。

『ああっ！意表を突いた左ストレートが外れる！』

間一髪、頬を掠めてパンチを避ける。

「いつまで保つだろうな」

拳の戻り際、間柴の見開かれた眼差しを受けて、リボルブは声音で意味を理解する。間柴の顔からは、反撃を嫌う様子は消え去っていた。いや、既に相打ちの覚悟を決めているのだ。

最小限の力で渾身の一撃を凌ぐ“リボルバー”。

これを次に打ったとき、この裁判は終わりを告げる。咎人が血に塗れた証拠であり、断罪する証明書を自ら発行するのだと言わんばかりに。

「……………」

いくら覚悟を決めたとはいえ、成功率1割程度の必殺を受けたあと、こうも攻められることがリボルブには信じられなかった。

自分ならあの痛みを知ってしまえば尻込みする。

それを、意識の殆どを攻撃に振る？

人とは思えない胆力だ。

(なにか、理由があるんですか)

知りたい。

そこまで心を激らせる理由が、自分にも欲しい。

リボルブの拳動に揺らぎが生まれる。

これまでよりも大きくヴァニタスを描き、白骨化した己を這い起す。がらんと笑う顔、脱力と隆起に弾む身体。

いつときの錯覚、3つの影を生む。熱を取り戻してきた体幹が、ようやく本調子に戻ったことを意味する。統率の取れた不協和音とともに、前へと踏み出した。

「しっ——!」

瞬間、右の薙ぎ払いで3つのフェイントごとリボルブを掻き消した。

『間柴が魅せる!!!』

調子を取り戻そうとしたところに豪快な一撃イ!

堪らず後方へと吹き飛んだオリンピアン!』

ヴァニタスを準備してきたことが予想外なのだ。

フリツカーだけで凌げるほど生温い戦いではない。

間柴にとって重要なことは勝利すること。

相打ちの覚悟の所在を理解するには、少しばかり難しいかもしれない。なにせ、かつて凶氣的に勝利のみを追いかけてきたボクサーだ。

「いけ間柴!!その調子だ!!」

「すげえ!世界レベルを押ししてるぞ!」

『地獄会』!声出して盛り上げる!」

よもや、孤独の男を応援し続けて、暖かく熱い声援だけで間柴が心の片隅に受け入れると誰が予想したのか。……そう信じてきたからこそ、地獄会があり、反則から手を引いた間柴 了がここにいるのだ。

間柴にとつて重要なことは勝利すること。

だが、いまと昔でその意味は変わっていた。

人外から人のもとへ連れ戻した幾つもの手のひらに、自分の手のひらを返せるような試合を。実行せずともいいから、気持ちだけは同じ方向を向こうと努力しているのだ。

『強烈な右アッパー!柳のように揺れてリング中央から後退するオリンピアン!最高の勢いに会場が湧き上がっています!』

吹き飛んだ先で体勢を整える直前、アッパーがりボルブの顔を打ち上げる。遠くから大きな弧を描くあまり、着弾予測にズレが生じたせいだ。

不甲斐ない被弾に天井を仰ぐ最中、地獄会の暖かい声援にリボルブは気づく。

(ああ――)

暖かい声援のすぐ横で、ひたすら祈りを捧げる女性がリボルブの目についた。

(彼女が妹さんですか)

間柴に妹がいる。

試合前に知った情報は、リボルブの興味を大いに惹いた。

もし会場に来ていたら、どんな姿で試合を観ているかを見たかった。その願いは叶い、

「手を合わせて、キミの無事を願っているなんて……」

家族の仲がどんなものかを理解して、

「……羨ましい」

リボルブは眩しい景色に目蓋を細めた。

もう亡き自分の妹から逃げるように……。

急転直下する身体を、両脚のバネを余すことなく使い、体勢を無理やり起こした。

楽しんできた時間を、苦渋に漬けてしまう前に終わらせる。長引けば間柴のことを悲しむ肉親がいると、理解したから。己の最強の弾丸を装填し、撃鉄に指をかけた。

「――Tempus erit」

リボルブが次に込める弾は、己の体幹を余さずに攻撃力に振り、敵の内側を殴り潰す。アマチュア時代から愛用し、己の代名詞にまで昇華した“リボルバー”だ。

その気配を察知し、そして間柴は旋律した。

放ったフリッカーが外れる。懐に入るのではなく、リボルブは大きくロープ際に後退していたのだ。リングを思いきり蹴って、それこそリング中央から滑るようにして。

(なんだ……。なにかヤバイ)

会場中がリボルブの行動に理解が追いつかない。

いま離れば、間柴を倒すことは困難になる。ヴァニタスという技があるのだから、内側で攻めるしかないはず。

「リボルブのリバーブローに倒されたボクサー曰く。

世界レベル同階級の10発に値する、だとさ」

会場中の反応を見て、ラバルは笑いを押し殺す。

或いは、アマチュア時代の1敗を軽く見ていた敵陣営への嘲笑か。

その意図に気づかないまま、リング中央で警戒心を剥き出しにする死神は右拳を構える。

静寂も浸透しないまま、リボルブはここに来て愚直なステップインを選択した。千堂のダツシユ力にも勝らんとする、暴風を伴う奔り。

(速い。だが——ここにだ)

緩急をつける弾丸を、間柴の瞳は追いかけていた。

猛ダツシユならば板垣で対策済み。瞬間最大風速だけなら板垣が辛うじて上だ。故に、重心を前に傾けて右拳を振り下ろし——爆発音が巻き上がった。

——(こいつ)

最大まで間柴の右腕が伸びきる。

右拳の向こうには変わらずにリボルブの姿。

ステップインは囿でもなく、本当のものだった。

「なんつう根性してんだ」

そう驚愕するのは鷹村。

鷹村以外の観客たち、そして間柴に至るまで。誰も理解が追いつかなかった。

リボルブの鼻先0.1mmに滞空する死神の鎌。

決して着弾していない。紙一重でリボルブが止まったのだ。左足でリングの皺を踏み潰し、力任せに直撃を回避してみた。

(どうか、死なないでね)

右拳の奥で灯る氣勢と、右拳が死期を語る現実。

次になにが来るかを理解して、間柴は躊躇なく右拳を引き戻した。

間柴の右拳が引っ込むのと同時に、リボルブは一直線に踏み込んだ。眼前で吹き飛んでいく汗水を横目にして、その身体が間柴の懐に落ち着く。

「間柴守れ!!!」

東邦が叫ぶ。

すでに左腕のガードを建てて、更に右腕で下から補強する。間柴に出来ることはもう無くなってしまうた。

「行け、リボルバー！」

アウトボクサー用に開発したヴァニタス。

その目的は“リボルバー”を最大限に活かすため。

フエイントはあくまでも派生に過ぎず、このダツシユカこそがアウトボクサーへの最大の脅威となるのだ。

最大速度の詰めから、渾身の一撃：リボルバーが放たれた。

(「ーっ!!ぐっくっ!!」)

間柴は確実にガードした。リバーに突撃する渾身を、外にいなそうと意識までして：可能なら離脱も試みた交差は、思考の段階で瓦解した。

左腕を吹き飛ばし、残った右腕ごと打ち抜く。右腕のガードなど些事ではないほどに、間柴の顔は掻き混ざる臓物に思考を乱される。

落ちるガード、しかし意識は懸命にダウンを拒否する。折れ曲がる身体に鎌を突き立てて、自傷の痛みで視界を回復させたとき。

「そこだ。引け、ひきがね拳爪を」

間柴の眼下に、この場にはあり得ない存在を見てしまった。

木村 達也。取り柄のないボクサーが、自分を倒すために準備してきた必殺ブロー。天高く舞い上がる、ドラゴンの姿を。

そして、撃鉄は落ちた。

「がア——ッ!?!」

開け放たれる顎に、硝煙の具が死神に塗りたくられる。

青く、黒い鉛玉の具は枯れ枝のように細く、硝子の亀裂よりもだし無く腹部から広がり続ける。

3度目の弾丸を放ち、反対の拳で本命の撃鉄が落ちる。

瞬間、死神の意識が身体から剥がれた。

『ダ………ダウン!!なんと言う一撃！』

とんでもない勢いで、とてつもない威力のストレートが間柴の意識を打ち落とした!!』

はららかに笑みを滲ませて、ラバルは拳を握った。

「左のリボルバーは理想に近づいた。なら当然、右もいるだろう？黄金の国を輝かせる象徴が^{げきてつ}。

シンプルに名付けて……「グラランデ」としとくか」

リボルブの必殺技、リボルバー。

その一撃を利用して「グラランデ」は最大限に活かされる。

「い、いまのは!?!」

「うそ、だろ………」

鴨川陣営は言葉を失っていた。

かつて木村が悪戦苦闘し、7ラウンド懸けてボディ打ちに専念し、やっとの思いで打ち抜いた顎。それを、たったの一撃で成した。

「バカな……俺の準備を、たったそれだけで……」

「木村……」

両拳を膝に叩きつける親友に、青木はかけてやる言葉が見つからない。いきなり現れて、自分の必勝パターンの上位互換を出されて、かつて追い迫ったボクサーをダウンさせた。

言葉に言い表せない悔しさに胸を痛めるしかできない。

「ドラゴンフィッシュブローに似てる」

「孤を描く木村さんの右ブローに対して、リボルブ選手の右は直線。この差は間柴さんにとってデカイです」

「結果は……覧の有り様か……」

幕之内たちも啞然とするなか、リングの上で死神が蠢き始めた。

（……………ヂク……ジヨウ………）

硝煙が舞う。血潮が薙ぐ。

芳しい世界が広がり始めた。

カウントが進むごとに、世界の麓を侵食する。

（世界つてのは、こんなバケモン揃いかよ……）

冥府の幽邃ゆうすいに消えていく身体。

かの者が発砲した残滓は夜風のように優しい。

「……………おいおい、死ぬ気か?」

だが、世界の常識でまだ見ているリボルブたちには分かるまい。

（こいつ倒しても、あと一人……）

これ以上のヤツが王座に君臨してやがるのか

混濁する意識の中、間柴は上を見ていた。

勝利に執着して、この絶望に抗っている。

何故そこまで出来るのか。

息を吐いたあと、外界の景色が酸素ごと間柴の感覚に割り込んできた。

『地獄会』！声を出し忘れるな！間柴だけに戦わせるんじゃないぞっ！」「間柴！お前に勝ってほしいんだ!!」「そうよっ！相手も疲れてるわ!」「あと一息だぞ!」「頑張れ！お前ならやれる!」「ましば!」「間柴!」「ましばっ!!」「間柴ツ!」「間柴っ!!?」

リボルブたちの耳が拾う。

間柴はリングの上で、ずっと孤独を貫いていると勘違いしていたことにやっと気づく。

「お兄ちゃん…!!」

間柴は。リボルブが対峙する男は。何のために足掻いて、泥水啜って声援を悲鳴に変えてでも心臓を動かしてきたのか。

「壊せねえもんがある」

両親を失い、唯一の妹のために拳を握るだけではない。

妹のことを一番に思い：そこに地獄会、過去に勝敗を競ったライバルたち、全員をしつかりと背負えている。

「騙されてもいい。それが期待に応えるってことだ」

立ち上がり、凶々しくも男はボクサーとして輝いていた。

彼を誰もがボクサーと認めて、会場中が間柴の勝利を願う。

決着の刻、間近。

死神、ここに健在。

そうであれと痛みを吞んで。

デタラメな破壊力を持つ黄金の漢を墜とすため、死神の槌は銀く微笑んだ。

死神の帰結

「は」

試合が再開するや、間柴の頬が鎌の先端を写すように笑っていた。顎から全身に駆け回る、聞かん坊な危険信号。

身体のためを想って排出される、失意の報せ。

その全てを上回る闘志と、凶々しい誇り。

身体に氣遣われながら、地獄の民たちは熱い声援で死神を奮い立たせる。無茶振りは先刻承知、骨に亀裂があろうとも、勝利を信じて疑わない妹のため、間柴は行動を開始する。

『間柴飛び出したっ!!ダウンのダメージが抜けないのは明らかですが、それでも果敢に立ち向かう!!?』

(やはり来ますか…)

リボルブは右グローブで口元を隠して、ふくらはぎから発する、光のような一瞬の痛みに歯を食いしばった。

急停止と急発進を瞬時に行い、確実に相手の戦意ごと腹を削り落とすヴァニタス。筋肉繊維への負荷は瞬間的に耐久値の上限を叩く。次に使えば精度が落ちるが故の必殺だ。

あれを受けて立っていられる人間が、果たして世界に片手の数いるのかどうか…。

いまのリボルブの気持ちは、例外に等しいボクサーを最初に引き当てた嬉しき半分。

妹を悲しませる選択に憤りが半分だ。

(早く降りてくださいい?妹を悲しませるな…。)

さあ、ここからは手荒に行きますからね!

軋んだ身体の音を無視して、漢は前に踏み出した。

先の先…ヴァニタスを極める漢に対して、いまから分析を開始しようとも全容を把握するのは不可能だ。

例え、第3ラウンドから第10ラウンドまで時間を費やそうとも、

動きを見切るにはリボルブへの理解が足りなさすぎる。多彩な武芸を取り入れて、ボクシングを弾とした漢だ。接近戦のみに絞れるものの、遠距離戦を降す術は僅か6分で作り上げてしまえる。

重厚な装甲、柔軟な破壊力、そして忌々しい影を凌駕する自信。

いまの間柴が出来ることは、誰が見ても尽きていた。然し、追いつけないと分かっている道を進む必要などどこにもない。

ここで大切なことはたった1つ。

どうやって咎人の首を落とすのか。

(強い……お前は確かに強えよ)

たった1つ、リボルブの先の先に対抗できる、間柴にも可能な手がある。

自分が被弾するとき、フェイントは一瞬だけ解かれる。そこを狙うカウンター。言うなれば後の後、後の先にも対応してくるヴァニタスへの、身を削る作戦だ。

(カウンター狙いですか。…出来ますかね?)

リボルブは間柴の狙いに気付きながら、自分の一撃を見舞うことだけに集中する。身体はふらついて、いまにも折れそうなのだ。物理的に打ち勝つ自負があった。

油断なくヴァニタスで距離を詰めて、頭上を通りすぎたフリツカーが戻るよりも先にリボルブは左拳を打ち込む。煩わしいガードを崩すため……と考えていた場所に、腹を守る右腕はない。

危険を察知しても、リボルバーは止まらない。

間柴はガードを挟まず、カウンターではなく相打ちでリボルブを仕留めにいったのだ。

「エッ——ッ——!？」

「グッ————オオ！」

リボルブの視界が左眼から色を無くす。

右眼は凡ゆる色彩を一斉に溶け合わせて、整合性の取れない現実にと誘われた。

『大振りも大振り！』

死に際の大鎌発が地上へ到達！身を削る一撃がリボルブを直撃す

る！間柴の常軌を逸した相打ちに堪らない様子のオリンピック！』

解説の興奮しきった声もリボルブには届かない。

懶ものういた意識を齧り、口内に広がる鉄の味で自己を自律させる。

（どうした？詰めが甘いんじゃないやねえか？

あいつはもつと粘った。そんな攻めじや国内以下だぜ、金メダリスト

さんよ）

死神が自ら知性を剥がした。

黄金の国の頂点に登り詰める、漢の恐怖心を利用して。

「いるんだよ、たまに。死に体からK・Oパンチを放つ化け物が」

間柴の常軌を逸脱した戦いにラバルは戦慄する。

死に物狂いでリボルバーを耐えられた。カウンターの反動でリボ

ルブ自身にダメージが返ってきたのだ。苛立ちの1つもするだろう。

強風に煽られる旗のようにはためいて、両者の身体が後方に吹き飛

ぶ。

だが、倒れはしない。

声援に支えられて。

強く在りたくて。

自分の身体が命尽きるまで、己の信念が負けることを許さない。

（見えますよ、死神の骨に染み渡る傷）

（聞こえてるよ、テメエらの声は……）

こうして、長い第4ラウンド終了のゴングが鳴り響いた。

両陣営のセコンドが飛び出して、ボロボロの気高い選手を支えなが

ら最後のインターバルに突入する。



「間柴、良い反撃だった！まだまだ拳は生きてたよ！」

「周りがうるさくて……眠れねえよ。」

バカみてえに纏めて、1人のボクサーを信じるなんざ……徒労だと

は思わないのかね」

「皆んな好きなのさ、お前が戦う姿をさ。」

皆んな知ってるんだ、久美ちゃんを守る背中を」

「——ハ、静かにすんのは苦勞しそうだ」

「……………また、掻き消すのか」

「——いいや。」

騒ぎ疲れて、喉を枯らしてやる。

そっちの方が…アイツも安心しそうだ」

「……………ああ、ああそうだ!!」

皆んなに見せてこい、戦う兄の姿を！」



ボクシングが憎かった。

私の家族がボクサーに殺されたからです。

妹も殺された。下らない動機で、幼少期の私は家族という暖かい場所を失ったんです。

ボクシングに復讐するため、ボクシングの世界に飛び込みました。八つ当たりです。私はボクシングを好きな人たちを相手に、最低な行為だと理解しながらボクシングで八つ当たりを続けました。

身体を壊すために、リボルバーは生まれました。

そんな時、彼は現れたんです。

「おいクソガキ！今からボクシングを教えてやるぜ！」

「なんですか、あなた…」

「俺？通りすがりの、優しいお兄さんだ。ちよっぴりボクシング好きのな！」

ルイ・ラファエル。

私をコテンパンにするのかと思ったら、彼は私の拳を全て受けきつてみせたんです。

「プロに來い！スペインで、黄金の国を作りたがってるバカがいるんだ。お前の拳、ラバルなら正せるから！」

そうして、笑顔で彼は去っていきました。

オリンピック2連覇して、世界中のボクサーの夢を砕いてきた私は、たった1人のプロボクサーによって暖かい場所に連れ戻されました。

—
—
—

「どうした。意識がここに在らずだぜ」

「少し、昔のことを…。アマチュア時代のことを思い出していました」

「そうか…。少しは変わったか」

「ずっと、あの頃の私を額縁に飾っています。

ちよつとだけ色褪せてました。いまを生きてる証拠ですね」

「そりや良かった。お前が巻きに行くベルトなら、褪せることはねえからな」

「……………ああ、そうでした。」

「これ、タイトルマッチじゃなかったんだ」

「気が早えよ。…オラ、決めてこい」

「ふう。はい、行つてきます」

▼

第5ラウンド、決着の3分間が始まる。

コーナーから出てくる両者の目がそう語る。

『誰の目に見ても決着の刻は近い。』

さあこのラウンド、どちらが先に……………』

間柴は顎の骨に亀裂が入り、リボルブはバランス感覚が戻りきらない。

かつてのライバルたちの影が重なる相手から、リボルバーに恐れず立ち向かう死神から、

勝利を手にするために、待ち構える選択肢は除外した。

『な、なんと両者同時に飛び出した！』

リング中央を囲い、間柴のフリツカーがリボルブの射程外から放たれる。

(拳を打つごとに顎が軋む…。激痛で脳がイカれそうだ)

闇い拳が疾る。

心を宿した拳が疾る。

過去よ、早く更けると拒絶の一撃を――。

(ステップに身を揺さぶられます…)

1つ間違えたら身体が自分に飲み込まれそうです)

黄金の国を造り上げる漢の身体が、死神の園へと急降下を開始する。制御が効くかは不明、ただ墜ちているようにも、意識を持っているようにも見える姿で。

目蓋にかかる前髪が揺れて、フリツカーが前髪を掻き上げる。顎から幾つもの汗が滴を成して、右拳に居場所を教えるように光を反射させていた。

近づく、徐々に。

打つ、勝利を手にするために。

間柴のフリツカーも、リボルブのヴァニタスも刻一刻とキレが落ちていく。目に見えない距離で、汗一滴も見逃せない攻防に身を投じる。

何度打つても、間柴のフリツカーは頬を掠めるところまでしかいけない。

片や、フリツカーの一撃を受けるだけで瓦解するかもしれない身体。あと1歩先、直ぐに身体を入れないのは間柴の容態を確認しているからだ。ここにきて冷静に観察をするさまに会場の緊張感が高まっていく。

間柴もまた、右拳を打つ機会を窺っている。
カウンターを狙い、姿勢が崩れる時を待つ。

ヴァニタスを見抜くもよし、偶然の当たりを引くもよし、あの脅威的な踏み込みが来るなら迎え討ち、そして相手が自滅するなら容赦しない。

右の一撃に両者が覚悟を研ぎ澄ます。

数十秒の時を経て、零が刻まれる。

「…………ふふ、ふふ」

先に射程圏内に進んだのは、リボルブだった。

右拳で狙うのは身体。明らかに警戒している顎を狙えば、カウンターで沈む危険が高いからだ。

「付き合ってやるよ」

然し、既に準備していた右拳がリボルブの前進を寸断する。

咄嗟にウイービングで躲す。

両者不発のまま、しかし退くことはあり得ない。

ここからは、意地を張る死神と黄金の国を背負う漢の力の示し合い。

相手の土俵で／凶気を越えて、勝利を掴むのだ。

「2人とも足を落とした!」

「ここで決めるつもりだ!」

「どっちも限界だ…本命を当てた方が勝つ」

汗が身体に溢れて、気化した蒸気が光を乱反射する。

荒んだ呼吸音と麗しい唇。視界があちこちに神経を尖らせるなか、2つの拳は同時に相手を崩しにかかった。

『相打ちイ!?同時に相手の顔面を狙い打つ!』

間柴はど真ん中、リボルブは左頬。

右と右が交差し、散らばる光を追って反対の拳に力を込める。

機動力で上を行くりボルブが、5発目のリボルバーを打つ。然し、引き戻す右腕で第1ラウンドの如く弾道を外へと逸らしてみせた。そのまま、間柴の左アッパーは、即座に引き摺り出したフェイントヴァニタスに惑わされる。

継ぎ接ぎの記憶が拳の形を成して、同じ轍を踏むまいと次から次に拳を打ち出していく。

お互いが絶対に受けてはならない場所を避けて、傷は少しずつ蓄積される。

『怒涛の打ち合い!!急所は守り、それ以外はカウンターを狙いに前へ、前へと突き進む!!』

いつ終わるのか、どちらが勝つのかは最早誰にも分からない!』

「すごい、間柴さんが耐えてる!」

「リボルブがダメーヅ背負ってる証拠ですね」

「くそっ、あんだだけ打ってなんで倒れないんだ」

地獄会も、鴨川軍団も、そして目を背けていた久美も。

自然と拳を握り、震える喉を鳴らして見守る。

(—————ここにです)

先に勝負の天秤を大きく傾けたのは、ヴァニタスで被弾数を抑えているリボルブだった。

間柴が放つフリツカーを躲して、狙いすましてグランデを放り込んだ。

(痛ッー!)

同時に、左脚から疾る鈍痛。疲労に押された場所がリボルブの体幹をズラす。

それでも、幸運がりボルブを掬い上げた。

『リボルブの反撃がテンプルに突き刺さる!』

ああっ…間柴の身体が崩れ始めた!?!』

上に逸れた右拳が間柴の急所に直撃する。

(ギ……キツイ……。足りない…のか。もっと、穿つような地獄が……全てを墮とす、凶気が…)

ついに点滅し始める意識。

勝利に手を伸ばしても、力強い一発で遠くに離されてしまう。会場中が悲鳴に染まっていく。

「お兄ちゃん……負けないで!!」

久美の願いが、間柴にも幸運を掬い取らせた。

（当たり前だ!!?）

この瞬間、木村戦の危機的状况と景色が重なって、思わず頬が緩む。あの巫山戯た男に比べれば、恐怖を感じないリボルブが遥かにマシだった。

「ブ……っ!?!」

「リボルブ!?!」

左を横に薙ぎ払い、リボルブの側頭部に返礼をする。やっとの思いで、再び死角から絶好の一撃を当てた。

「帰る場所がある人間に——」

流れる身体を左脚で押し留める。

もう脳に駆け巡る痛みは無視できた。

暖かい場所があるボクサーに負ければ、自分を見失いそうで怖いから。ルイに注目されるために、王座に就く必要があるのだ。

前、左右から切り滑る鎌をリボルブは両腕で受け止める。

「私は…負けるわけには…いかない」

迫る左拳を選んで、一撃を与える代わりに1発を見舞う。威力が違う、耐久力が違う、ならば崩れるのは相手が早い。

決死の覚悟で6発目の豪打リボルブを打ち出した。

「——ハ」

「……」

狙い通り、左と左が交差して、必殺の一撃は間柴のボディに突き刺さる。

ただ一点、リボルブの定める理想を、間柴が血の1滴ほど越えたことを除いて。

『間柴耐えた！リボルブの膝が笑っている！』

左脚に力が込められなかった。

先に見抜いたのは間柴だ。ゆえに相打ちを受け入れて。

「リボルブ……!!」

「行け間柴……!!」

リボルブを見下ろして、右拳に最後の力を込めた。

ここに来て、やっとな右脚にしか力が入らないと理解するリボルブ。

(俺が、勝つ……………！)

(私が、勝つんだ……！)

間柴 了とりボルブ・ゲイル。

それぞれが想いを乗せた、最後の一撃が轟いた。

チ グ ヨ ラ ツ ン ピ デ ン グ は ラ 未 完 成
ト イ 成 完 未 是 実 德 ン ヲ ラ グ

間柴の右拳がリボルブの側頭部を駆け抜けて。

「ま……………間柴アアアアアア！」

「いやっ、お兄ちゃん……！」

リボルブの右拳が間柴の顔面を攫う。

勝利から程遠い大地で独り、天上の門が閉じていくのを見ることができない。

「な、なんで!？」

どうして間柴さんの右が外れたんですか!？」

「右脚だ……。リボルブは右脚で先の先をしゃがったんだ。だから間柴の右が外にずれていた……」

「あ、あ……………」

勝敗を決したのは、たったの一手。

リボルブのヴァニタスが、足を踏み込んでもフェイントを仕掛けられるように成長したこと。

(おれ、は——)

死に果てた大地のうえで葬送な音を連れて。

(ひとりで、……勝ち、いみ——)

死神から流れる瘴気を吸い込んだ長針は止まる。

“もし、あの拳が伸びきっていたら。

俺は今頃——

あの日、木村 達也が届かなかった拳。

もし届いていたら、と。たった1度だけ想像したIFを、姿も形も違う漢が押し付けていく。

(キミの勇姿を戴きます)

リボルブが拳を掲げる。

絶対に忘れまいと、倒したボクサーの姿を心に焼き付ける。リボルブの青写真には、ほうほうと進む死神の灯りが1つ。再び会うために意思を持ったかの如く、輝かしい記録は残されるのだった。

『立っているのは……ただ1人……』

湯船の上を揺蕩うように惚けた目蓋、いまにも惰眠を貪る手前の口元。

臃げな意識を繋ぎ止めて、勝利の声を聞き届けたのは。

『試合終了——』

世界挑戦の切符を手にしたのは、リボルブ・ゲイル!!?』

死神の鎌は今日、崩壊した。

「リヨウに……暖かい讃歌あれ」

間柴 了、栄冠前夜に3敗目を刻まれる。

5ラウンド1分50秒、敗北。

病室で3人、先のこと

『壮絶な打ち合いの果てに、日本の死神ここに敗北。』

誰もが唾然、誰もが予想外。リングで栄光に近づいたのは、スペインからの使者、リボルブ・ゲイルだった!』

会場中から悲壮漂うなか、その雰囲気忘れまいと振り返り、瞳にしつかりと間柴がいた景色を焼き付ける。

「あとは王座を戴き、私たちの国を始めましょう」

「WBAライト級王者、ファン・ガルシアに挑む前に」

威勢に乗ったりリボルブは興奮気味に言い放つ。

適当に相槌を打つラバルの表情は固かった。

花道を抜けて、控え室に入るやラバルはリボルブの右手を持ち上げる。苦悶に顔を歪めたことに溜め息を吐いた。

「その手、治さねえとな」

「……あはは、流石にバレましたか」

『ただいまより、メイスイイベント——』

テレビから流れる歓声を遮り、ラバルは荷物を纏めた。

「観たいだろうか諦めな」

「ええ……まあ我慢します。今後のために、グルー君の防衛を観ておきたかったんですけどね」

「残念だな。お前の戴冠先延ばしも、流れに乗れないグルーもな」

「まさか……グルー君の脚が捕まると言うんですか?」

「会場の熱気に呑まれない人間ってのはごく少数いるもんだ。グルーのやつは災難と割り切るこった」

ラバルは当たり前のように憐れんでいる。

リボルブはグルーが勝つと信じていただけに、ラバルの宣言は辛いものがあつた。それだけラバルの発言には信頼を置いているからで、彼の拳を尊敬している。

兎も角、リボルブがグルーの試合を観ることは叶わない。どうせな

らラバルの予想外れる、と祈りつつ。

「世界は広い。治療したら直ぐに準備すつぞ」

「ふふ。はい、宜しく願いますね」

リボルブ・ゲイルは少しの物足りなさを飲み込んで、両国国技館をあとにした。



間柴 了が次に目を覚ましたのは、死地から隔離された白い世界。即ち病院のベッドの上だった。

外が暗くとも、この場所は決まって白い世界を演出している。この場所に来るときは、大抵が敗北したときで――。

「なんや、もつと荒れとんのかと思っただけど、想像より大人しいんやな」

「……………」

最悪の寝覚めに堪らず殴ろうとする。

しかし、身体はびくとも起きなかつた。

「まあまあ、世界で負けたモン同士やないか。

顎砕かれてもそこそこ話せるやんけ。こりや復帰に影響はないな、良かった良かった…うおわ!?アホ、動くやつがあるか!」

「ちっ、外したか」

無理やり身体に喝を入れて、右拳を投げ出した。

顔を合わせれば殴り合う仲だ。これくらいは挨拶の範疇だと舌打ちで伝える。

「久美ちゃんと会長はんらは帰ったで。今日は色々と気持ちを整理せい言うてな。それに、死神のアホ面見えるんは今日くらいや。特等席譲ってもらたわ」

「勝手にしろ」

恨めしい目で用件を促す。

「相手のこと小耳に挟んだから教えたる思うてな」

「……………」

「右拳、折れたんやと。多分、最後の1発やな。」

硬い顎に全力で振り切ったんや、そういうこともあるわ。

あの強さや、リボルブなら世界獲れるんちゃうか？

そんなボクサーに紙一重で負けたんや、すごいで自分」

そう、自分を褒め称える男を。

「…千堂」

いよいよ鬱陶しいと名前で糾弾した。

気遣いには腹が立つ。そんな余裕もない表情をしている千堂を見て、間柴は「笑ってやる」と話を促す。

一拍置いて、肩を落とした千堂。

病室から見える月を遠い国の男と重ねながら、

「ワイな、階級変えよう思うとんねん」

静かに、吐き出した。

「幕之内やゴンに、リカルド倒すって約束しときながら、蓋を開けたら惨敗や。……負けて初めて、悔しさよりも絶望感で心が満たされよった」

それは、今晚だけの告白。

千堂が見せた、敗北者としての悔いだった。

「やけんか知らんが、活気溢れてこん。やから旅に出るゆうて、各地の試合を観て回った」

その成果は……………言わなかった。

無言が、つまりは成果だということだ。間柴の試合を観ても、それは変わらないということ。

「……………で？」

「幕之内に聞きたいんや。リカルド、倒せるかって。」

今日は宮田の世界戦やから来るのは分かっちゃった。せやけど、後ろ姿見たら急に足が止まった。しっかり前を向いとる姿で確信したわ。

ああ、こいつの背中なら、倒してくれる……………ってな」

徐々に傾いていく身体。

俯く姿は、敗北という恐怖に潰されていくようで。

「……は！」

だから間柴は笑ってやった。

「傲慢だ。下で足掻いてるやつ、より……」

お前を、追うヤツに聞きにいけ……」

そう言つて、力のない左腕を上げる。

弱々しい人差し指が示した先で、

「ま、幕之内!？」

驚きに飛び上がる千堂。

一瞬で千堂の背筋を伸ばしたボクサーは、静かに、謙虚に病室に入つて2人の前に立つ。

そして、人が変わったように真つ直ぐな瞳で宣言した。

「僕は、リカルド・マルチネスを倒します。」

その為に復帰の準備をしますから」

「……………ああ、信じとるで。心配なんざせえへんわ。せやから、ワイの想いも託してええか」

ここまでの話を病室の外で聞いていたのだ。

すんなりと納得がいった。この男ならやれると。自分が背負いきれなかつた想いを右手に乗せて、前に差し出す。

「お断りします」

「——え」

それを、幕之内は呆気なく断つてみせた。

「そんな弱気な千堂さんから……。悔しい目のまま渡されても、僕はどうすればいいのか分かりません」

「……………あ」

「僕も倒したい。だけど、僕だけが倒したいわけじゃない。千堂さんも、早くしないと先を越されちゃいますよ」

「……………せやつたな。」

この手、引つ込めるにはまだ早いわ」

夜空に浮かぶ月を見上げながら。

きつと、同じボクサーを思つただろう。

千堂 武士の葛藤にケリが着いた。

両頬をパンと叩いて、

「幕之内、感謝するで。間柴もな！」

「うるせえ…早く消えやがれ」

「ほんま素直やないなあ」

千堂は手提げを抱えてあつという間に病室から出て行ってしまった。かと思えば戻ってきて、

「ああ、それと幕之内。近いうちにまた連絡するわ。せやから、たーんと貯金しとくんやで！どっちに行つてもええようにな！」

嵐の如く、今度こそ去っていった。

「それどういう意味………って、もういない」

千堂さんらしい、と呟く。

病室の外で千堂の独白を聞いていた幕之内。

出ていくか迷っていたが、千堂が自ら道を譲ろうとする姿を見て、勝手に身体が止めに行っていた。行くなら自分で。そんな男が道を譲った場所で、幕之内は戦いたいとは思えなかったのだ。

「律儀なやつめ」

「あつ、その間柴さん、今日はお疲れさまでした。結果は残念でしたけど、オリンピック2連覇相手にあそこまで戦うなんてすごいですよ！」

「……媚び売っても久美はやらん」

「っ——」

一気に冷える病室。

青ざめる顔。

カチカチと踊り震える歯。

息切れと震えが止まらない膝。

「な、なんのことで、しようか」

「テメエ、その反応、やっぱりか！」

「ひえ——！」

死神がカマをかけたことに気づいたがもう遅い。

死に体だったとは思えない身体で、幕之内に襲いかかり。

「2人ともうるさい!!」

「ぶっ!」

巡回中の看護婦、もといトミ子のゲンコツが2人の頭に直撃。夜も遅いのだ、迷惑極まりない行為に嚴重注意を受けてしまった。

「とにかく…。負け犬には任せられん」

「———はい、勿論です」

寝そべり、薄目で睨む男の言葉をしっかりと受け止める。

間柴が認めるには勝つしかない。

まだ見えない強者に勝つて、無敗神話を破つて、そして宮田 一郎を越える。どこまでも広がる青空に向かうが如く、力強い返事は放たれていた。

「負けても、負けても、挫けない人が近くにいるんです。

だから僕も、負けてもらえません。

今日は失礼します。お大事に」

ペこりと一礼をして、幕之内は病室をあとにする。

「……………それは、俺もだな」

静かになり、やっと敗北の夜を噛み締めながら。

間柴は独り、宙空の闇に囁いた。

速水 龍一の骸

その試合は、1人の選手によつてペース良く、観客に飽きさせることなく進んでいた。

「いいぞ速水！いけるいける！」

手数ของ多さ、ズバ抜けた回転力は観る者を驚かせる。

彼と対峙する選手の表情は1秒経つごとに曇つていく。

観客が声援を送る選手の名は、速水 龍一。

かつて、フェザー級4回戦で幕之内 一步と対戦。激闘の末、打ち負けはしたものの、将来の期待感が陰ることはなかった。

それが、いまでは――。

「ああ、馬鹿野郎！お前は どうしてインファイトしようとするんだよ！」

「打ち負けるんだから近づかせんなああ！」

苦し紛れの相手の1発が、運良く速水の顔面を捉えた。

続けざま、返しのフックが迫る。勢い良く放つそれは、誰がみても当たるはずのないスウィング。カウンタータイプのご馳走だが、これが鈍い音を鳴らした。

「あああー！つたくまたかよお前！」

「どうしてインファイトに拘るんだ！」

「自分のボクシング分かつてんのか!?!」

速水は、たった2発でリングに転がって失神した。

試合終了の鐘が響く。

「ダメだなあいつ。もうリングに戻つてくるなよ」

「いっつも負けるからなあ。プロなりたての頃に勝つだけじゃ、誰でもできるだろ」

「おかしいと思わないのかね、自分のこと。」

周りから言われてるはずだぜ？脆すぎるってよ」

アマチュア戦績無敗、プロでの勝利の殆どを前半にもつ。15戦7

勝8敗、そして今晚で9敗目。8連敗となった。

ジュニア・フェザー級タイトルマッチ以降、勝ちなし。

栄えある経歴から一転。致命的なエラーを抱え込み、将来の生活を心配されるほどの転落人生を歩んでいた。



「今日は帰ります。」

帰って、反省会をやるので。ええ、それでは」

控え室のドアをしつかりと握りしめて、音羽の心配に笑顔で返しなからドアをゆつくりと閉じる。

視線はドアノブから出口へと続く廊下の角に移った。ホールの関係者やプロボクサーが行き交い、互いに声を掛け合っている。記者もチラホラと散見できるが、速水 龍一に目を向ける者は誰一人としていなかった。

「……………」

彼らの視線を避けるようにして、足音を立てずに早々と出口を目指す。

声が掛かることはない。労いすら見つからないんだ。8連敗して残るボクサーなんて稀少だろう。少なくとも、速水の記憶に該当する日本人ボクサーはいない。

多くのボクサーは戴冠の夢を破り、次の道を求めて彷徨うのだから。

「ちえっ、今晚もダメだったか」

場面を転換したかのように移動して、いまは後楽園ホールの階段登った花壇の横に立っていた。

いつもの事に呆れながら、夜空の星に向かって呟く。

今日ほど自分を嗤いたくなかった日はないだろう。胸に手を当てずとも声音で分かる。これほど凄惨なから笑い、敗北のあとに聞いたこ

とがない。

「はあ…」

死相に見舞われたかのように気落ちした声がもう一つ。

隣を重々しく向いてみれば、遠くの世界を眺めて不幸に浸る男がいた。

「おや、君はたしか、幕之内くんのところの」

「……………あ。……………どうも」

板垣 学。今宵、速水と同じ印を刻んだ者の名だ。

彼は自分で精一杯なのか、速水の声に短く返事をするのみ。次第に視線は遥か彼方へと浮上し始めたのを見て、迷いなく声を掛けた。

「良い試合だったね。板垣君のフットワークは東洋でも通じると思っ
たよ」

「……………でも、最後の最後に捕まりました」

忌憚のない賞賛に結末を返して、板垣は遠くの世界から漸く此方へと視線を戻す。

「最後の最後に集中力、切れちゃったんです。勝ったと思って、ナオさんの死んだフリを見抜けなかった。

プロとして観客の声に応えるはずが、利用された。観客を味方につけていたのは、初めから彼一人だった。

次は、必ず獲ります。復帰戦で、タイトルを組んでもらおうと思っ
ているので」

「次、誰が組んでくれるかな」

「……………どういう意味ですか」

「君は強い。ハンマーナオの勝利は予想外だった。それほどに板垣学の実力は日本圏から逸脱してる。

王者なら戦うしかない。だけど勝ち目なしのランカーとなんて、組むだけ損だろ？」

板垣の視線は事実を述べる速水を鋭く見つめた。刃物で突き刺す気持ちで向けた瞳には、怒り心頭に発するものがあつた。だが、先ほどまで自分の敗北を俯瞰的に見ていた板垣は、次第に速水の言葉を嚙

み砕いて、意地悪から発した言葉ではないことを理解する。

「八つ当たりやめてください」

「はは……。今の君を見てると懐かしくなつてね」

板垣の愚痴に釣られて、速水も彼の非難に謝意を差し出した。その僅かばかりの笑みが、

「速水さん、なんで負けたんですか」

板垣の……いや、これまで何度となく聞かれた疑問を引き出すこととなつてしまう。

「たった1発……それもジャブをもらつて倒れるなんて普通じゃない。あんなパンチ、僕でも耐えられる。」

弱みを握られているとしか思えません」

板垣の一言々々が針となつて速水の全身に深く入り込んでいく。これも何度も聞かれた疑問だった。そのたびに適当にはぐらかしてきた。時には調子が悪い、ブランクだと言つて周りと自分を騙してきた。

「——八百長じゃないんだ。ボディも、ガード越しの痛みも耐えられる。だけど、顔面だけは倒れてしまう。」

まるで電灯のスイッチを切られたみたいに、足が言うことを聞かなくなるんだ」

もう、逃げたところで変わらない。

ロクでもない身体だと自ら認めている。ただ、口にすることは本当に負けた気がして、これまで避けてきただけ。

内に溜めて進まないのなら、吐き捨ててしまおう。遅すぎる解を吐き出して、初対面の相手に無遠慮に投げつけてしまおう。開き直った心は、少しだけ軽くなつていた。

「ここで引退すれば、ボクシングの辛いところばかり語り継がれる。」

ボクシングが好きだ。過去形にしたくないし、これからもっと皆んなに知ってほしい。

だから俺は、何度負けても……泥塗れの手だとしても、ベルトが欲しい。王者になりたいんだ」

泥塗れで汗濁、小路を這う虫のように惨めな姿は、内側に観戦者を

集める才能を残した特殊な虫だ。未だに対戦相手が見つかったのは、速水に踏み台の価値があるからだ。本人も自覚しているからこそ、機会はプロの土塊に埋もれゆく敗北者よりも恵まれている。

「速水さん、僕には…貴方の距離感がまるで分からない」

「きよ、距離感…？」

だから板垣は速水にそう言い放った。

踏み台など勘違いも甚だしい。ミドルレンジが日本圏トップ層だとしても、いまの速水はインファイトに拘る。飛んで火に入る夏の虫を体現した、自らの持ち味を捨てる姿は、蹂躪を好むボクサーたちの食い扶持でしかない。

「僕は自分のボクシングをして負けた。けど、速水さんの試合は…：別のボクサーと対峙してみたいでした」

曝け出した本心。吐き出した苦悩は、プロボクサーの手によってデコボコにされていたと分かった。

自分の意思は相手の養分。その証明は7連敗が語る。

「自分の、ボクシング…」

守ってきた自分の殻を吐き出したら、外との意見の食い違いにあってという間に気づいてしまう。聡明だと思っていた自分の能力が恨めしい。

理想は崩れていく。

そこに居るはずの理想の自分に、現実の自分が泥を塗る。

「——家、か」

寝転がる自分に気づいたとき、慣れたとばかりに平静を装った声で自分に言い聞かせる。

「……………寝よう」

今日も、気づけば家に帰宅していた。

最近はいつもだ。今日はなにがダメだったのか、俯瞰的に自分を見ているうちに家に着いている。

赤信号で止まったのか、それとも無視して歩いて呑気に歩いたかも知らない。

勿論だが、板垣とのやり取りも最後はうる覚えだ。

「——また、震えが止まらない」

眠れぬまま深夜になった。

目を跨いだ。プロなら既に寝ている時間だ。昔の速水 龍一なら絶対に起きていない時間だった。

横になれない。横になると立ち上がれなくなる。

天井を見ても、布団に顔を押し付けても、耳鳴りが始まる。

1、2、3………始まるんだ。

俺を負けに追い詰める、レフェリーのカウントが。

酷いときは直ぐに試合終了のゴングが鳴る。

鳴ったら、終わるんだ。俺のボクサー生命。

鳴る時は決まって試合の直前の夜だ。これを聞いて勝てた試しがない。

「——まだだ、俺は終われない」

理想像の足元を見てみれば、散らかりすぎた俺の残骸たちが俺を嗤っている。

毎日、昨日の俺が死んでいた。

1日24時間という概念が無ければ、たったいま俺は死ぬ。過去を犠牲にすることで、辛うじて俺はボクシングに縋り付いていられる。

「……また、朝になってる」

千の夜風が速水 龍一を笑う音を聞き終えて、明日へ生き永らえたことを知る。

悪夢にうなされることのない、さりとて女神に看取られることもない。前のめりに倒れ続けた愚者は、鏡を見ることもせず今日を始め。泥水を啜ることしか出来なくなった男は、こうして明日も救われない1日を勘違いで終える。

一週間後、ジムに顔を出した速水を待ち受けていたのは、

「速水、引退勧告だ。もうここには来るな」

プロボクサー生命の終わりの通達。

永い夜を終えろと云う救い。

負けを負けで終えた、

敗北にしがみ付いた、

敗北が染み込んだ男の、呆気ない末日だった。

悲運な天命

その日は夕暮れのような空だった。

或いは朝日のように活力の満ちる時間だった。

凡そ2週間の休養を経て、精密検査で健康のサインを貰い、清々しくプロの道へと再出発する日だった。

頭の中から湧き上がる爽快感を連れて、音羽ジムの門を今日も開いて練習の準備をしている最中のこと。

「速水さん」

「ああ、今井くん。お疲れさま」

今井 京介は普段通りに速水に声をかける。

敗北を重ねて、少しずつ落ちていく速水に、変わらずに敬意を表する数少ない速水の後輩だ。

だが、京介の表情は今日は違った。速水の記憶するところによると、彼が真顔よりも影を濃ゆくしているとき、重大ななにかを言葉にする時だった。

「どうした。息苦しい表情していると勝ち気が逃げるぜ」

ならば軽口から初めて、話しやすい雰囲気を作ることが大切だ。本人の悩みならば力になりたい。他のことなら：聞き届けてあげたいから。

秘密基地を作り終えた子供のように笑い、京介の言葉を聞き出してみれば難しいものは何もなかった。

「速水さん、練習時間は終わりました。もう夜ですよ」

「——そうだった、ね」

もう、今日は終わりを迎えていた。

事実を教えてくれた。

大した、ことじゃない。

外を見る。本当だ、小さな電飾が目立つくらいには空は次の日を受け入れる準備に入っている。

ようやく分かった。今日の練習は終わったんだ。

「今から帰るつもりだったんだ。今日はこれで…」

「ずっと椅子に座って寝ていたでしょう」

「ん、そう、だったね…。少し疲れが溜まって」

「ここに来て、その言葉は無理があります」

速水 龍一の逃げ道を塞ぐ。

これ以上、彼の後ろ姿を放置出来なかったから。

京介は午後6時から音羽ジムに来た。

その時、速水は既にベンチでバンテージを巻いている途中で眠っているのを目撃した。練習生に聞くと2時間は経っているらしい。音羽会長も声をかけたが起きないからと、そっとしておくように言ったそうだ。

「精密検査の結果は聞きました。異常無し、だって。

そんな訳ないだろ。記憶のないのが証拠じゃないか!!？」

速水に対するジム内の俗悪な空気に、京介は怒り心頭となった想いを爆発させた。

「今井くん……………」

「会長は速水さんの夢を叶えたがっています。

だから貴方が打たれ弱くなったことを、誰も触れようとしなない」

3時間越しの言葉を京介は吐き出していく。

この3時間、京介は練習をしていた。

対して速水は、疲労で気絶していた。

巧妙な推理小説のドラマを堪能するような3時間と、その推理小説の冊子を下水に落とし込むような3時間。目の前で大好きな推理小説を無碍に扱われれば、怒って己の道徳心と問答して道徳心を説得するのが人間心というもの。

「だめだ。皆んな、ダメになる。だから俺が言う」

それをしない彼らに怒り、ボクサーをバカにする張本人に怒り、堪能できなかった自分に怒っている。何年も、景色のように流してきたことに怒りしか湧かない。

わざわざジムに来て、ボクシングをバカにするボクサーじゃないことを京介含めた人間は知っている。だから夕チが悪い。なにかの魔

術を掛けられたかのように、真実を指摘してこなかったのは、そんな背景があるせいだ。

「最近はいフェンスの練習しかしてませんよね。」

頭部への打撃が即敗北に繋がると、会長は分かっているからです。顎でも、側頭部でも、頬でも、当たればすぐにダウンする」

少しだけ、言葉が詰まる。

吐かない選択肢はない。ただ、速水が聞き届けてしまえば、それだけで引退への決定打になる。速水 龍一がボクシングを認めているからこそ、事実を受け入れてしまう。

だから、第三者の指摘が1回でもあれば、彼のプロボクサー生命はもう終わり。

逡巡、速水の瞳を見る。

意識はある。この時ばかりは逃避行もしていない。

同じ敗北を味わった者として、覚悟を決める。

「まるで、パンチドラ「言わないでくれ」……っ」

速水はほんの一瞬、輝かしい瞳を取り戻して京介の言葉を遮った。

「俺がボクシングを辞めても、ただ痕が残るだけだ」

それも、本当に一瞬だった。なぜ押し黙ったのかと京介が疑問に思うほど、続く速水の言葉は怯えている。

「速水 龍一という男のボクサー転落街道中、見せ場のない三流の書き物がね」

龍を彷彿とさせる気迫が消え去ったことを、京介は悲しんだ。汚点を取り戻そうとして、焦って価値のない負けを重ねていると知ったから。

「負けを積み重ねて、俺は強くなれました。

だけど速水さん、貴方の負けは意味が違う!!

負けても前を向く姿を強いと思った。だけど違った、貴方は現実を受け入れられないだけだ」

事実を、怒りを、そして後悔を吐き出す京介の喉は負の感情の炎に焼かれて、喉を震わせる肺が焦げるような痛みに襲われる。

「無理やりボクシングを続けて壊れた男がいた。どうですか、たった

一行の文で、ボクシングのイメージを落とす。

これ以上続けられれば、貴方がボクシングを裏切ることになるんです」
速水は突きつけられた想いに目を見開いて水分を飛ばし、全身を病に蝕まれたような寒気で佇むしかなかった。

「そんな、つもり……は………」

いくら記憶が飛んでいようと、京介の言葉を聞いて知らぬとは言えない。心当たりがある、思い返せば思い返すほど、劣化したコンクリートの壁ようにボロボロの記憶が引き出される。

言い訳、見つからない。

このまま逃げ出せば、まだリングには立てる。

いま、人生の岐路に立っていると自覚したが、あと3敗分は遅かった。

「そこまで……してやってほしい」

3人目の声は関係者用通路のドアを開けて入ってきた。

「——会長」

普段は掛けているサングラスを外して、音羽は京介に力強く視線を送る。それは盗み聞きをしていたことの告白であり、罪を償うことの決意表明でもあった。

「お前の夢を叶えようとして、俺はいつからか怖くなってしまった。

速水 龍一の顔に、失望を浮かべることを」

京介は踵を返してロッカールームへと歩いていく。

音羽会長の意を汲んで、速水 龍一の結末を見届けないために。

「職場なら幾つか心当たりがある」

「な、なにを言っているんですか。俺はまだ……」

「お前なら必ず昇進出来る。新しい道を用意する」

「わ、分からない。言っている意味が分からない！」

過去に遡って、遡って……遡りすぎて、速水の嘆きは子供の癩癩と同じになっていた。嫌だと言って現実を見ない……いや、見てくれない聞かん坊にしたと自覚する音羽は、タオルに頭を擦り付けて。

「俺だと、速水 龍一にベルトを巻いてやれない……」

延ばしに延ばした罪を告白した。

つまりは、償いを提示している。

逃げに逃げてきた恐怖を、速水は知っていた。

もう、自分に昇るだけの力は残されていない。どれだけ前を向いても、進んだことにはならないのだから。

「速水、引退勧告だ。もうここには来るな」

逃げを許してきてくれた音羽の宣告に、速水は畏怖の視線で応えられなかった。



インターハイ3連覇。

——トロフィーを捨てた。

インファイトー殺し。

——雑誌を捨てた。

ショットガン。

——ビデオデッキを捨てた。

何百通ものファンレター。

——全部捨てた。

マウスピース、捨てた。

バンテージ、捨てた。

…グローブ、捨ててない。

シューズ、捨てた。

バッグ、捨てた。

タオル、捨てた。

ロープ、捨てた。

……グローブ、捨てられない。

指南書、捨てた。

健康診断書、捨てた。

練習着、捨てた。

……グローブ、捨てろ。

ダンベル、捨てた。

自分のタイトルマッチのチケット、捨てた。

……………グローブ、捨てちまえ。

何してる、あとは手を離すだけだ。

これが一番捨てなきゃいけないものだ。

昔の俺は死んだ、捨てて楽になれ。

楽にしてやれよ、速水 龍一。

もうリングに、お前の輝ける場所はないんだ。

ボクシング、捨てよう。

ボクシング、嫌いになつたんだ。

ボクシング、好きだった。

ボクシング、俺は嫌いだ。

負けたボクサー、勝ったボクサー、引き分けたボクサー、戦えなかったボクサー、望む試合を出来たボクサー、不本意な試合をさせられたボクサー、金のために戦ったボクサー、どんな理由でも俺は全員を肯定していた。

変わったよ、自分の才能を磨り潰して。

今の俺は誰も肯定できない。余裕がないんだ。

負けたボクサー、勝ったボクサー、引き分けたボクサー、戦えなかったボクサー、望む試合を出来たボクサー、不本意な試合をさせられたボクサー、金のために戦ったボクサー、どんな理由でも俺は全員を否定することしか出来なくなりそうだ。

「そうなる前に」

グローブ、捨てろ。

リングから堕ちた数多のボクサーのように。

グローブ、捨てろ。

ここからボクシングを観て楽しめばいいんだ。

グローブ、捨てる。
捨てるよ、早く。
早く、心が入れ替わってしまいう前に。

最後に、グローブを――

「捨てずに……なに持ってんだよ」

時刻、不明。夜とだけ。

眠気は来ない。そもそもタイトルマッチ以降、満足に寝ていない。眠気が来ない。

吐き出した低音に相応しい静けさに包まれて、速水は人気の無い公園のベンチに腰掛けていた。いつからこうしているのか、それは本人も覚えていない。どうにか家に帰り着き、無我夢中で自分のコレクションを持ち出して、きつと家とゴミ箱を何往復もしていた。

朧げな意識のなか、そんな自分の奇行を振り返る。

昨日、速水 龍一はただの一般人になった。試合を出禁になったわけでも、長めの休養を取っているのでもなく、本当にプロボクサーから降りたのだ。

ゴミ箱に捨てた我が物だったソレらを横にして、8連敗の理由を考えていた。

俺のせいか、会長のせいか。

くだらない。くだらないね。

人の感情は感化されるものだ。速水 龍一は自分に自覚があるほど、誰かの人生に影響を与えられると信じている。だから音羽はジムに招いた。正しい判断を狂わせるほど、速水 龍一の背中を見ていて心地が良かったのだ。

「俺は、なんだ……」

だから疑問を口に出す。

指導者を惹きつけて、ボクシングを知らない一般人を見向かせた自分は何処に行った。

「俺は、何がしたかったんだ……？」

いま、この場に残った速水 龍一の骸に住む男は、なんのために速水 龍一を名乗るのか。

これは哲学じゃない。

壊れたというのなら、それは速水 龍一の罪だ。

速水 龍一の夢叶わぬことを罪と言うのなら、引退を手渡せた音羽の流した涙こそ無実の証明だった。

「全部我が者に出来なくて、なにが夢を叶えるってんだよ……速水 龍一！」

何処とも知れない公園で独り、吠えた。

理性があるとは思えなかった。通りを横切る人間は、誰もが速水のことを気が狂った人間だと嫌煙するだろう。若しくは、最近の若者だと揶揄して好き勝手に言うかもしれない。

それでも速水の激情を繋ぎ止めるには至らなかった。

ベンチの横に捨てた速水 龍一の遺品の数々。あれほど丁重に保管してきたものを、こんなにも乱雑に棄てたのだ。理性を問うことが無意味だと叫ぶしかない。

これが神の気まぐれというのなら、是非とも今後について語り合いたい気分だった。

何年も期待を持たせて、自分を好きでいられたのに、道を閉ざされてしまえば呆気ない終わりだ。見下ろしている神はさぞ愉快だったことだろう。

ならば、もう、捨てることに迷うんじゃない。

「はは、捨てよう。俺の全部」

腐り果てていくだけの人間に、止めることは出来ない。ボロボロのグローブの紐を右手で摘み、運命の流れるままにゴミ箱へと放り投げた。

曲線を描いて、グローブがゴミ箱に飛んでいく。この時だけ、時間の流れがゆっくりと流れているのを速水は自覚した。

これは走馬灯だ。プロボクサー、速水 龍一の死が見せる、最後の悔いを断つための悪戯でしかないんだ。流れる時の間、過去の自分を

見ようとせず、必死にグローブがゴミ箱へ落ちるのを待つ。でなければ、戻りたくなる。過去の栄光なんて、毒でしかなかったのだ――

「なんだ、捨てるのか？」

誰が差し向けた刺客か。

突然現れた物好きな男が、速水の視界の外から伸ばした左腕でグローブを拾ってしまった。

「アマチュア優勝なんて滅多に成せるもんじゃねえんだ。過去の自分くらい残しとけよ」

「……………それを見ると震えるんだ」

「震える？どこが」

「全身だよ。お陰でここ数年、ろくに眠れなかった」

ため息を吐いて明後日の方角を見る。

速水は男のことに興味が湧かなかった。だが、どうせ絡んできた男だ。退屈凌ぎプラス愚痴の吐き捨て場となってもらうことにした。

「プロボクサーだった」

「辞めたのか？」

「まさか。自分から辞めるもんか。」

「8連敗して、身体の心配されて、引退勧告さ」

「随分と負けたな。眠れないのと関係があるのか？」

「さあね。医者は身体は健康だと言う。」

心の問題らしいが……………精神科なんて誰が行くもんか

「恥ずかしがって行ってないのかよ」

「彼らのことを否定なんてしないさ。ただ、俺は昔の俺を蔑ろにするつもりはないっただけ」

「トロフィーは捨てたくせにか？」

風船のように膨らんでいく速水の見栄を、男は針のように鋭く突き刺してしばめる。

「2度と手元に戻らねえ。とつとけよ」

「……………うるさい」

ここまで自分を騙し、周りを欺こうと必死に取り繕ってきた行動が

虚言癖でも発症したのか。それとも、気づいてほしいから拙い推理小説の真似事でも始めたか。

一貫しない我が言葉に呆れて、男の再三の引き留めにぶつきら棒に返事をする。

「ならさつさと立ち去ればいい。葬式じゃねえんだ、ゴミを回収されるまで待つ必要はないだろ」

「……………葬式なんだよ」

「誰の？お前さんのか？」

「そーさ。プロボクサー、速水 龍一の命日だ。」

今夜は通夜だ、男がしみつたれるのを許される日だ」

敗北を重ねるだけのいま、この葬儀に並ぶ者はいない。ファンはおろか、親族すらも立ち入りを禁じた。速水 龍一による速水 龍一を弔う場だ。

いや、そのはずだった。

「違うね」

「…………？」

一般人の参列を禁じていたわけじゃない。ただ、並ぶほどの暇で物好きな変人のことを想定していなかった。

「お前みたいなのを知ってる。リングの上で負けて、私生活で大事なものを失った男がいる」

しかも、理解すらしようとしてくる始末だ。

男の言葉は自信を持ってすらいた。己の半身のように理解して、体験談をあたかも他人の速水に当てはまると言ってるのける。

あまりにも横暴かつ拒めないなにかを感じて、沈むばかりの視線を、最後の焼香を行う時のように上げていく。

「拳で挫折したヤツは、拳で立ち直るしかねえ。」

拳を開いて合唱するお前は、2度と自分を取り戻せない」
心の奥底で解っていた答えを、男は墓の前に立てた。

「……………まだ、やれる」

自分に降り積もる供花を押し退けて、鼓動を呟く。

「……………まだ、やりたいんだ」

合致した答えを手繰り寄せて、速水はやつと。

「取り敢えず、ウチに来いよ」

やつと、視線を上へと向けられた。

次第に、物好きな男の輪郭を捉えてきた。

よく見ると体格が良く、スポーツをしている身体だと理解した。

ただの影でしかなかった人間に目と耳、髪型と口、最後に衣服が露わとなり、一方的に知っている人物と知る。

「——アナタ………は」

「俺か？」

速水は元々、フェザー級ボクサーだ。順当に勝ち上がれば、いつか試合をすると4回戦の時に思っていた王者。

「伊達 英二。元プロボクサーだ」

日本ボクサー界を牽引してきた男が、笑っていた。

後ろ姿はだれの影法師

地上を歩く身体には浮遊感が付き纏っている。

常に階段を降りているような感覚を味わいながら、速水は1時間の旅を終えて滑空するように伊達ジムの床に腰を下ろした。

「っ、つかれた…」

表通りから2度曲がり、直進して間もなくの右側。見た目は倉庫にも見える正面の建物が伊達ジムだ。

秘密基地を思わせる風貌とマッチした室内が、速水の胸の鼓動を疲労以外のもので高鳴らせていた。

とはいえ、いまは丑三つ時を過ぎたころ。

「想像以上に体力ねえな。走り込みしてんのか？」

「ですから……眠れてなくて、ふらふらなんです…」

プロから退いた伊達は悠々とジムの明かりを付けているのに、速水はヘトヘトといった様子だ。

帰宅しなかったのは家族の心配を見たくないから。まだ速水の問題はなにも解決していない。成果も上げず、引退の決心も出来ずに空っぽの部屋に戻りたくないのだ。

「そのまま寝てもいいぜ。マイジムで寝るのは格別なんだ、我が家の布団の次くらいにな」

伊達の提案は魅力的だった。重油の貯蔵が尽きた発電機のように、まぶたが脳の活動停止に合わせて降りてくる。

まだ眠るわけにはいかなかった。移籍について伊達との話をするのが、ここに来た目的なのだから。

「気絶するように寝たな。」

「……………そんな姿勢でいつも寝てんのか」

「しまっ!?…俺、寝ちゃいました?」

時間にして4時間ほど。

行にすれば3行程度の意識の消灯が、朝日を過ぎて速水の身体を再

起動させた。

(平衡感覚に問題なし。同じ会話を繰り返すんでもない。単なる睡眠不足が慢性化したように見える)

伊達はこの4時間、速水の様子を観察した。わざと遠回りして疲労させた目的は、速水の現状を確認するため。

(いびきかいて寝てないのは朗報だ。連敗のストレスで心理的視野狭窄みたくなってやがる。

本当なら通院を勧めるのが真っ当な道だが…)

伊達は速水が公園に着いてから、物を捨ててベンチに座り込む様を見ていた。見つけたのは偶々だが、グローブを捨てるまでの1時間余りの葛藤は声を掛けなかった。わざとだ。パンチドランカーならば正しい選択だ。

捨てる直前、速水が見せた泥塗れの澄んだ瞳を見て、グローブを拾うことを決めた。ただ逃げるだけだった。ボクシングに心を留めていた。このまま逃げても、速水の症状は回復しないと思ったから。

こうして正体不明の症状に怯える、墜ちた龍を元いた場所に連れて行くために手を差し出した。

一方、速水は墓場まで持つていこうとしていた秘密を簡単に見られて、取り繕う言葉を音羽ジムの経験から引き出そうとする。

(……………やつてしまったが)

もう隠す必要はない、と諦めた。

本当は知られなくなかったが、隠せばきつと拾われることなく終わるから。

「ここ数年は、疲れが身体から溢れるまで眠れません。平気なときは1日寝ない時もありました。最近じゃ昼間でも気づいたら寝る始末…」

「それで良くプロをやってこれたな。

音羽会長は知っててリングに送ったのか？」

「いいえ。不調になる前に練習を切り上げたりして、これまでは誤魔化してきました。それが却って、会長たちの負担になっただけとも知らずに…」

引退勧告をする音羽の姿を思い返すと、ここに来ていることを恐ろしく思えてきてしまう。

「振り返りすぎだ」

「えっ…」

伊達の声は速水の視線を非難する。

「前を向けないんなら横でも見とけ。」

それが無理なら…同じ目線に立ってみるかだ」

言っていることが噛み砕けず、速水は頭の中にクエスチョンを並べた。どこを見ていけばいいのか、誰と目線を合わせるのか。まるで分からない答えに首を傾げていると、

「俺のジムの手伝いに来いよ」

伊達は研ぎ澄ました刀のように整った右手を差し出して、答えを自分で探し出せと提案してきた。

「……」

少しだけ、プロの道を期待していた。

まだ、やっても良いのかもしれない、と。

「ぜひ、やらせてください…!」

それでも返事は決まっていた。

断る理由はあるけど、心はまだ正直でいられる。

だから、少しでも近くに立って、伊達 英二の問いに答えられたら、この先のことを決めようと思う。

(振り向くななんて説教しときながら、連れてきた場所はボクシングジムか。俺もバカだな…)

伊達の自責を知る由もない速水は、笑って左手を差し出した。



それからというもの。

速水 龍一は次の仕事が決まるまでの間、伊達ジムを手伝って日々

を過ごすこととなった。

「おお、来たか。もう窓は開け終えたから、次は掃除だ。床は乾拭き、ボクシング用具はアルコール消毒。」

アルコールは軽く吹きかけるだけでいい」

「手入れなら慣れてます。任せてください」

昼間から夕方まで、練習生が来る前までの簡単な雑務を教わるところから始まった。

これ自体は音羽ジムと容量が似ていたので、赤子がお代わりを覚えるような早さで雑務をこなしていった。

「あと1時間もすれば練習生やプロたちが来る。」

挨拶は済ませといてくれ。俺は次の試合の交渉してくる」

「このジム、設立して3年ないですけど、もうプロを育成されてるんですね」

「ああ、東日本新人王が1人と6回戦ボーイが2人だ。」

良い奴らだぜ、心配しなくても馴染めるさ。速水が来たなんて分かったら、奴らの方が萎縮するかもな！」

渋い笑顔の宣言通り、初めて練習生たちに挨拶をしたときは大いに盛り上がった。

買い出しや洗濯、練習生たちの世話をするのは大変だけど遣り甲斐がある。1ヶ月が過ぎても眠気のままに寝ることは出来ないが、少しずつ外の景色を見る時間が増えていった。

「伊達さん、出かけるにはラフな格好ですね」

ある日、ジャージ姿で外に出ていく伊達を見かけた速水。

普段はスーツ姿、ないし伊達ジムの服を着て出かけるものだから、珍しくて声を掛けたところ、予想外の返事をもたらった。

「これか？今からロードワークすんだよ」

「……………えっ？」

「毎日の朝と晩、酒を飲もうがコレだけはやってる。」

なんつうか、呼吸するみてえに身体が走り出すんでな」

引退後、早々にロードワークの習慣が抜けないことは速水も知っている。自宅から伊達ジムまで、ロードワークするのに適した距離だか

ら毎日走って通っている身だ。

「来るか？」

「……………行きますよ！」

元世界1位のお誘いを断る理由はない。

——1時間後。

「やり過ぎちまった」

「セカイ…オレハキタンダ」

想像以上にスタミナがついている速水に張り合い、速度を加速し続けた結果、帰ってきたら速水は気絶した。体力が切れたらしい。

このあと、手伝いに来た伊達 英二の妻、愛子はベンチに横たわる速水を見て死んでいると勘違いしたという。

当然、伊達はバチボコ怒られた。

また、別の日。

「最初はどうかと思ったけどさ、これが意外と…」

「だよな。やってみるもんだと驚いたぜ」

帰ろうとした直前、練習生たちの言葉の端っこが耳に届いた。なんのことも興味が湧いて声を掛ける。

「やあ、2人とも。どうしたんですか」

「あつ、速水さん。伊達コーチのミット打ちですよ」

「普通、練習してる俺らがミットを持つことって無いじゃないすか。けどコーチ、自分も練習するから俺らにミット持たせるんす」

それは初耳だ。

…それもそうか。暇を満喫しろと言われて、夕方以降の練習風景を見ることはなかった。

今日もロードワークがてら、近所の家電屋でカメラでも見ていこうとしていたくらいに休みを謳歌している。

「伊達さんのパンチ、マジで見えないんす。気づいたらミットが音鳴らしてて、寒気を覚えるっすよ！」

「打つモーションも、足の動きも真正面からだとより参考になるってどうか。やれば解りますよ！」

ということ、伊達さんにミット持ちを申し出た。

「ん、まだ早いな」

「なんですと…!?!」

「練習生もいるし」

それはご尤も…!!

忙しい日々を送って1ヶ月が過ぎた。

眠る時間は相変わらず不定期で、寝室で独り拳を握る日が続いた。それでも、伊達さんのアドバイス通りに秒針が深夜12時を回る前に布団へ潜るようにしている。

健康は堅強、睡眠欠けば勝利無し。そう格好付けて言った伊達さんは、経験から助言してくれたと分かる。だから俺は、これ以上は負けちやいけないんだ。

8連敗した時の体調と変わらないようできて、布団に潜る抵抗感は減っていた。

更にある日、太陽が夕日に着替えた空模様するとき。

「おや、彼は…?」

伊達ジムのプロたちに負けない、ハツラツとした挨拶が聞こえてきたから見に行くと、そこには推定小学校高学年らしき子がいた。

「あいつは雄二、俺の息子だ」

「息子さんですか。とても優しい目をしてますね」

「そうだろうか？加えて頭も良い！これは嫁に似た。

なによりも、ボクシングセンスが高い。頭の回転の速さを活かして、将来は世界チャンプ間違いなしだ！」

伊達さんの豪語は親バカ由来のもののように感じる。顔にそう書いてあるが、確かに雄二くんの出立ちは既に風格が出来つつあった。

「こんばんは、雄二くん。俺は速水 龍一。

いまは伊達さんの手伝いをしてるんだ」

150センチほどの身長雄二くんに合わせて背中を丸め、出来るだけ柔らかな挨拶を心がける。

すると、背筋を伸ばして。

「初めまして、速水さん。お話は父さんから聞いています。伊達ジムの手伝いをしていただけて光栄です！」

へビー級の笑顔で応えて、更には右手で握手まで求めてくる。顎に髭が生えていない！本当に伊達さん子供か？

「な………伊達さんの息子さんというのは本当みたいだ」

「いま、間があつたよな？」

つい疑問に思ってしまったが、伊達さんに対する敬意は息子のそれだ。それに目元と瞳がそっくりだ。

「身体はかなり作ってるね。やつぱり、プロ志望？」

「はい！目標は………勿論、父さんを越えることです」

「ほお！やつぱり伊達さんに憧れたかあ！」

「よせやい速水、本人が照れるだろ」

「本人じゃないですか……」

「父さんを越えて、リカルド・マルチネスを倒します」

「——その瞳」

一瞬のうちに入れ替わった雄二の瞳の中身は、生半可な覚悟では灯せない積年の想いが詰め込まれていた。

「とても無謀なのに………勇気付けられる」

「……そんなこと初めて言われました」

学校のみんなは無理だつて笑います。父さんは「ありがとうございます」つて言うだけだし……

「雄二、人を試すような真似は止めなさい」

伊達さんには申し訳ないけど、雄二くんの垣間見せた棘には心当たりがあるから非難は出来ない。きつと……いや、間違いなく自分の好きなものも笑われてきたんだ。そんな周りを納得させられない自分への不甲斐なさは、伊達さんには共感は難しいだろう。

「伊達さんはね、誇りに思ってるんだよ」

「誇り、ですか」

「自分のボクシングが終わりじゃないって、雄二くんを見て分かるから感謝したんだ。笑っている訳じゃないと俺は思うぜ」

失礼な話、雄二くんの瞳に共感をしてしまった自分がいる。子供な

がらに孤独を抱えてしまった境遇が、8連敗の道中の自分が苦しんだものと一緒だ。

「同級生には無言の笑顔でも向けられればいいさ。」

プロってのは、話さなくても通じるものがある」

「……………難しいです。だけど、信じられそう」

口下手になった自分の言葉で、少しは励ませただろうか。少しだけ不安だが、もう話せることもないと別れの言葉を済ませて伊達ジムをあとにする。

後日、普段よりも早く伊達ジムを訪れた雄二くんにもミット打ちをねだられた。

「速水さん、ミットをお願いします」

「俺かい？……………でも、俺は」

大事に抱えるミットを差し出してくれたが、前に伊達さんのミット打ちを断られている。この身体を想ってのことだろうから、軽々と受けられるものでもない。困って視線を伊達さんに向ける。

「俺なら兎も角、雄二なら大丈夫だろう。任せるぜ」

「伊達さん……………ありがとうございます」

感謝を述べるが、伊達さんの笑顔を素直に受け取れない。なにか、嫌な予感がするのは俺の人間不信が発症でもしたのだろうか？

伊達さんの不敵な笑みの理由はすぐに分かった。

「あっ…」

「ミット、また飛んじやいましたね」

ミット持ちを舐めていたのかもしれない。

初めてとはいえ、あれだけ見たミットを持ってなかった。

なるほど、伊達さんが俺にミット打ちの相手をさせなかった理由がこれか…！

「打つのにコツがいるなら、打たせるのにもコツがいる。ミット持ちは相手任せの構えじゃダメだ」

「ぐっ……………善処します…」

こうして、新しい立場からプロの背中を見つめて、知らなかった世界を経験しながら時間が経過していく。

音羽ジムと伊達ジム、規模の違いはあるにも関わらず、根本的なところは同じだ。練習生たちが持つボクシングへの熱意、周りの人間たちとの競争意識は火花散る綺麗なものだった。

「……………そうか。俺、練習しかしてなかったんだ」

「速水さん？」

ある日、ふと気づく。

「声かけも忘れて、独りで練習していた……………」

ポツリと声に出た。

音羽ジムと伊達ジム、2つの景色を見比べて、自分だけが黙々とトレーニングに励む様子は痛々しい。

自分を追い込むためと言っておきながら、ただ現実逃避の口実にボクシングを選んでいたんだ。

「そりゃ、弱くなるわけだ」

ミットで包んだ両手を見ながら、やっと我が身を振り返るまでに心は落ち着いてきた。

(ん、順調順調)

伊達はその様子を見て、静かに微笑んだ。

その横顔が、かつての自分と張り合えるほどに馬鹿で、抑制したものだど懐かしんで、次の段階が来たことを知る。

雄二くんのミット持ちにも慣れて来た頃の帰り道。

「ええ……………」

速水さん、伊達ジムに移籍したんですか！」

「移籍じゃないよ。バイトだね」

帰宅がてらのロードワークを少し遠回りしていたとき、板垣くんと遭遇した。どうやら河川敷周辺が鴨川ジムのロードワーク場所らしい。

「……………速水さんは、もう納得したんですか」

「……………。これは俺だけの問題じゃない。

音羽会長の引退勧告は無視できないんだ。このまま続けても、俺はボクシングに壊されてしまう」

「辞めて正解って言われたら、速水さんは怒りそうですけど。8連敗って、勝ちたかった数でしよう？」

痛い：本当に痛いところを突かれた。

板垣くんは人を見る目がある。幕之内の元へ行ったことも、俺の内情を見抜いた観察力も、ボクシングには欠かせない才能だ。

だけど、俺は……音羽会長の優しさを目の当たりにした。8連敗という数は俺の我儘だ、ベルトが巻きたいからと焦った俺の罪の数だ。伊達さんに拾われたからと、安易とプロへの復帰を願っていいものじゃない。

このまま復帰すれば、音羽会長の厚意を無碍にする。本当に俺が壊れてしまえば、伊達さんを裏切る。

「だからって、俺の欲は晒せない。」

この葛藤があるだけで、俺は墓場まで行ける」
心に余裕が持てるようになってきた。

伊達さんに返せる恩はあっても、投げつける仇は一片もない。自分を優先するなんて、考えるだけ厚かましい。

「先輩は復帰するために基礎からやり直し中です。」

十分に休んで、回復したと言っていました。言いたいことはそれだけです」

「それは朗報だな。このまま引退するんじゃないかと冷や冷やしてたからね」

敢えて、回復したことに触れない。

それでも考えてしまうのは、幕之内くんの休養期間だ。

アルフレドに敗北してから、もうすぐ2年になる。そうか、彼ほどの激しい接近戦をすると、治るまでにこれ程も時間が必要なわけか。

顎がバカになった俺は、果たして2年で足りただろうか？

「近々遊びに行きますね。伊達さんのジムに興味あるし」

「ああ、楽しみにしてる」

板垣くんは別れを告げて元気に走り去っていく。

迷いが無い走りだ、楽しそうに走っている。

数ヶ月前、ハンマーナオに負けた彼に厳しい現実をそのまま伝え

た。俺は遠回しに、日本タイトル挑戦を諦めるように言ったんだ。憧れの先輩のあとを追うな、なんて普通は聞く耳を持たない。

「君の次の試合が楽しみだ」

見送った背中に言葉を送る。

板垣くんの次も楽しみの1つになった。

最近、少しずつだけ楽しみが増えてきた。

こうして帰路の景色も覚えているし、初めて通った場所の気になる喫茶店も立ち寄る余裕がある。

家に帰って食卓を囲んだとき、家族との会話も思い出せる。気づいたら夜が終わるなんて奇怪な現象も、いまじゃ昔の話になってきた。布団に寝転がって天井を見てみると、ダウンで倒れたことを思い出して眠れなかったのに。今では明日の伊達ジムの手伝いが楽しみで、逆に眠れなくなる気がしているほどだ。

雄二くんの才能は本物だ、ポテンシャルやスタイルは俺に似ているし、努力も欠かさない。何よりも、俺以上の勝負勘を備えている。ミット持ちの実力不足のせいで伸び悩まないか心配なくらいさ。

そうこう考えているうちに、意識は夢と同化していく。

伊達ジムの手伝いを始めてから半年が過ぎて。

この晩、速水の意識は日を跨ぐ前に眠りへと就いた。



伊達ジムで練習生たちに指導をすること1年間。

不規則な生活から脱却して、伊達さんのミット持ちを務められるようになり始めた頃。夕方、サンドバッグを叩く8回戦ボーイの2人を眺めていた俺に、伊達さんが声をかけてきた。

「速水」

「はい、どうしましたか」

ほんの少しだけ緊張感が増す。

ボクシングを始めなくなるからと、意図的にサンドバッグは見えないようにしてきた。彼らの背中を見て、自分の拳が反応しそうになつていたら注意でも受けてしまうかと背筋を伸ばす。

「サンドバッグ叩いてみないか？」

「——えっ」

振り向いてみれば、目の前に飛んできた2つの物体を咄嗟に手掴みした。感觸の時点で分かったけど、これはボクシンググローブだ。

「この1年間、勧めてもサンドバッグ叩かなかつたらろ。」

押し付けるもんでもないから黙っちゃいたが……お前さんのパンチが見たいて、フアンが家で呟くもんでな」

「父さん、一言余計だよ……！」

雄二くんが伊達さんの脇腹を突いているが、伊達さんは笑うだけで、ものともしていない。着けていいのか、迷うまでもない。いい筈がない。

だけど、雄二くんは期待の眼差しを向けてくれる。久しく見れなかった、俺の背中を追いかける瞳だ。

「速水さん、打つ背中を俺らにも見せてください」

「どんな背中からでも学べるって分かつてますから」

生意気な激励に背中を押されて、1年振りに打つための拳を握り締めめた。

ジャブを打っただけで、身体のコンディションが手に取るように見えてくる。

右を握った時、これまでは恐怖に耐えるための行為だったというのに、今は俺を見てくれる人たちの視線に応えたいと言っている。

サンドバッグを突き抜けて、サンドバッグから帰ってくる音に、速水 龍一の心は8連敗の努力を思い出すくらいの疲労に襲われる。

「久々のサンドバッグはどうだ」

「——やはり、良いですね。」

「すごいストレス発散になりますよ」

「違うだろ。ここまできて嘘を吐くな」

同時に、胸の外と内を掻き回すモノがあることに気づいた。これの

正体を俺は知っている。いや、取り零していると分かっている探しに戻らなかった。

「なにか言いたいこと、あるだろ」

それは…速水 龍一が勝つこと。

速水 龍一が握った拳で、速水 龍一の愛するモノ全ての期待を背負い、そして速水 龍一のために勝つ。

単純だけど出来なかったのは、速水 龍一を信じきれず、速水 龍一だけでは勝てないからと諦めて、この器だけを磨き続けることに専念したからだ。

「速水さん…！大丈夫だから！」

雄二くん、急に迫らないでほしい。

君が俺になにを言ってるほしいのか、分かっている。

だけど、ダメだろう…。今更、この身体で望んで手に入るものは、君の父親の不名誉と破壊者のレッテルだ。

「伊達さん」

………例え、自分の調子が戻ってきてると思っても。

結局のところ、それは俺の感覚の話でしかないはずだ。

「俺を——」

でも…これは、しょうがない。

速水 龍一はどうしようもない男だった。音羽会長の厚意を無碍にして、バカなことを口走る愚かな人間だった。

「日本チャンピオンにしてください」

だから、この勘違いを終わらせてくれるのなら、伊達さんには文句などあるはずもない。自分のボクシング人生の証を捨てて、最後に残ってしまったグローブ分の未練を、ここで吐き出しただけのこと。

「いいぜ」

それなのに、伊達 英二は再び、ボロボロのグローブを拾い上げた。どうしようもなく壊れかけの、絹が飛び出している年季ものを1年間、丁寧に治して。

「ただし、俺のテストを合格出来たらな。

速水、今から俺とスパーをやれるか？」

元プロボクサーらしい方法で、速水 龍一の未練を断ちにきた。

速水 龍一の弔い

失うことが怖いと感じた。

プロを自ら退くのではなく、恩を裏切るまいとした引退は八つ当たりの感情で申し訳ないが、持ち物を強奪された怒りに支配されていた。

無力な自分を見たくないあまりに、最後の抵抗として手持ちの物を捨て去って忘れようとした。

それを阻んだ伊達 英二。

接点のなかった男が速水の葬式に顔を出した理由を、これまで1度も聞けなかった。

自分はまだプロを続けたいと告白するようなものだ。気を遣ってくれたなら、それでいい。チーフセコンドは新しい道だ、ジム経営者ならタイトル奪取の夢を託すこともできる。

将来、自分で見定めたボクサーが王座に君臨してくれれば、きっと満足できるはずだ。

だから、この1年間で俺は救われている。

(伊達さんは、そこまで甘くなかったんだ)

グローブを着け終えて、コーナーの頂点から視線を後ろに向ける。悠々とした足取りでステップの調子を確認する伊達は、速水の視線に気づくと右拳のように固い瞳で瞬き返した。

手を抜く気はないと、速水を地に伏せる気概だ。

「準備出来たか？」

今日はプロ志望の見学者も来てるが、いつものことだ。気にしないでくれ」

リングの外には練習生の他に、顔すら見えないほど帽子を深く被った人間が1人、壁にもたれかかっている。雰囲気は味があるように感じるが、気にするのは礼儀に欠ける。

「準備オーケー、いつでも大丈夫ですよ」

速水 龍一の葬儀を伊達 英二は見守っている。

あの日、捨てたグローブを拾ったのは、未練が残る終わり方を許さないからだ。速水 龍一の葬式は1年間の時間を掛けて、今日終わる。

「内容は1ラウンド3分だけの軽い試験だ。」

初心に返ったつもりで来いよ。俺もそうする」

俺は聞く必要がある。

どうして速水 龍一の弔いをしなかったのか、と。

「ヘッドギアは着けないのか？」

「貴重な3分間を噛み締めたいので」

俺は自問し、自答する。

16戦7勝9敗を誇れるか、ってね。

「セコンドは僕が務めさせていただきます。」

それでは、第1ラウンドを始めます！」

予定から消えかけていた未来が、ゴングの音で暗がりの奥から浮かび上がってくる。

(1ラウンドしかない、俺に有利な条件は一つもない)

1年間のブランク、あるものはミット持ちの経験と日々のロードワーク。それらが元世界ランカーとの付き合いによるもの、というお墨付きだけ。

(伊達さんの手の内はミットで見てきた。

それに比べて俺は、さっきのサンドバッグが1年振りときた。さて、どっちが不利かなんて言うまでもないな)

呼吸を1つ、ゆつくりと。

1年間で積み上げた経験は、休養という大切な時間もある。

それを思い出して、無駄な時間はなかったと思ひ出す。

なら、ブランクはきつと気のせいに来るさ。

(だからって、頂点を諦めてたまるかよ！)

リングを蹴る鼓動は瞳に宿した力強さと比例して、伊達が待ち構えるコーナーへの突風を吹かせる。

傍から見れば力み過ぎだと思っだろう。前のめりに過ぎたと息を飲んだはず。然し、レフェリーを務める雄二の瞳には、かつてリング

の上でプロボクサーとして戦ってきた父の勇姿と重なって見えていた。

(見せてもらおうか。プロへの執着心を)

コーナーから1歩半の距離、仁王の如く拳を握り締めた伊達へ向けて、速水の左ジャブが最長の線を描く。アマチュアから体得した滑らかな味を抑え、プロへの熱意を大盤振る舞いした一手を、伊達の右拳がミットを持つように受け止めた。

「いい挨拶だ、がッ——」

気迫、下積み十分の拳に、伊達はそれでも物足りないと言返す。速水の顔面へと放り込んだ。

(ぐおっ!?)

鼻先を擦り取っていくのは様子見の一発だった。

躊躇なく顔面を打ちにきた迷いの無さには心当たりがある。いや、速水は半年間、目の前でこの拳を見てきたから咄嗟に拳の軌道を読めた。

今の今まで、当たり前のように受け止めてきた拳を避ける。プロボクサーへ舞い戻ろうとする身体のクセに、自分の手のひらに残らない感覚を寂しいと思った。

同時に熱が灯る。

自分でも驚いたことに、タイミングを掴んでいる身体が勝手に拳を打ち込んでいた。伊達のミット持ちをする最中、徐々に観察する余裕を作り出せばプロボクサー伊達 英二に打ち込む隙を探して、タイミングを計ったものだ。

「へえ、持っただけじゃなかったって訳か」

イメージを描いていたことを、現実に落とし込んでいく。これは1年間のブランクのある速水が持てる、唯一の先手。苦し紛れだろうと、プロボクサー時代のひりついた緊張感を取り戻しつつある速水には、丁度良い試練となる。

「速水さん、すげー!？」

「伊達さんと打ち合えてねえか？」

「やべえ…A級ボクサー同士のガチスパーやべえ」

速水の心に着いた火種は、着実にプロへと続く導火線を登っている。雨風を躲し、砂塵を伴う風に吹かれて、火種はやがて3分の1の地点を通り過ぎる。気づいたのは、火種が伊達の足元を照らした時だった。

（足を使つてこない？）

ハンデのつもりですか。なら俺も…）

伊達はここまでリズムこそ刻めど、ミドルより内側でしか拳を使っていない。ブランクのある速水に対するハンデだとするのなら、速水は相手の土俵…それこそインファイトで上回らなければプロの世界で生き残れないと考える。

“距離感が分からない”

（そうだ、間違えるな）

板垣の言葉が脳裏に過ぎる。

この逡巡を愚かな時間だと即座にミドルレンジをキープした。

（自分のボクシングを忘れちゃ、前に戻るだけ。）

そんなことでベルト巻けるはずがない…だろ！）

自分の距離で戦える余裕もないクセに、相手の土俵に上ろうなどとは思いついてもいいところ。

これは、ボクシングは…自分の特技の押し付け合いなのだ。伊達と打ち合うミドルレンジはつまるところ、速水の十八番、最大の武器を活かす距離だ。

（自分の距離で行くよ——）

伊達の打ち終わりに合わせて、左拳を押し進める。

導火線に着いた火花のように舞う赤い拳。真っ直ぐに、中心へと所狭し我先にと溢れ出す再起への渴望が飛び出していった。

（これがショットガンか！）

咄嗟にガードを構えた伊達。身動きを取ろうものなら、逃げた先で左右のフックが追撃に来ることは想像に容易い未来だ。腰を落としてやり過ぎそうにも、これは人間の技。速水の匙加減でいままも乱打数を調整して、動きを封じに来ているから不利な状況に持ち込まれるのは必然だ。

(こりゃ下手に距離詰めれば何発か貰うな)

左右のショットガンを使い熟す姿を見て、伊達は確かに速水の成長を確認した。8連敗してきた速水のビデオを全て観て、インファイトへの執着心があることを知っている。

伊達がいま足を止めてインファイトの構えを取っているのは、ハンデのためではなく自分のボクシングを守るかを見るため。速水の得意な距離であるミドル以上で試合を進め、ダメージを意識しているかを知るためだ。

何も言わず、指摘せずとも速水は自己分析が出来ている。

本当ならここでスパークを終えて、合格と言い放ちたいのは山々だ。然し、確認しなければいけないことはまだある。例えば、プライドを折る行為だと分かっている。

(そら、ここだ)

導火線が3分の2を過ぎたとき、伊達の左拳が散弾の間を駆け抜けていく。左拳が伸び切ったとき、速水の顔面ど真ん中を満点の音で打ち抜いた。

「は、速水さん……!」

近寄り難いとは言え、近づけないほどの壁ではない。伊達であれば尚のこと、乱打の中に隙間を見つけて、左を打ち込むことは造作もなかった。

(この程度で倒れるようじゃ、リングには上げられない。タオルを入れることも出来ないからな。さて)

無傷でショットガンを破り、かつて顔面に1発受けるだけでダウンしてきた。精神的、肉体的なダメージはこれで深刻なものとなる。速水の心身が回復して、成長していなければ。

自我を保ったまま、跳ね上がった顔が戻ってくる。

伊達と観戦者全員が固唾を飲んで見守る最中。

「ぐおっ!」

真つ直ぐな芯を内側に宿したまま、速水は伊達の右頬にお返しのお返しの左フックを放ったではないか。

「う、打ち返した!!」

「確実に回復している!」

「速水……!」

(バランス良し、視線良し、やる気十分。)

相手の拳にビビる様子なし。こりゃ……)

速水の瞳には、ショットガンを破られた以前よりも更に質の高い闘志が満ちている。プロに無くてはならない向上心を携えて、速水はリングに舞い戻っているのだ。

(1年間で俺くらい我慢してたなあ、このヤロウ!)

喜びに頬が吊り上がる。

その隙を突かれてショットガンを数発受けていた。

(ショットガンが破られても、戦う意志は萎えない。)

勝ち負けが一瞬だけでも良くなるくらいに)

伊達の闘志にいよいよ火が回り始める。相手を試すためではなく、倒すための機関が暖気運転を終えて、消音器を貫通する程にけたたましい始動を鳴らした。

「格好つきたいんですよ、自分にね!」

「んな簡単に出来たら苦労しねえよ!」

両者、みなぎるボクサー魂を拳にしたとき、導火線の火花が目的地に到達した。

「そこまで。1ラウンド終了です!!」

飛び込んだ雄二によって伊達の拳は宙を舞い、速水は勢いあまってリングに転がる。

「つい熱くなっちゃった」

「お、終わった……」

起き上がると、練習生やプロたちはリングに上がっていた。

「速水さん、凄い、すごいですよ!」

どう見ても父さんから1ラウンド取りました!」

「ばっ、なに言ってるやがる!俺は足を止めてたんだ、まだ全然余裕だったね!」

「父さん、男らしくないよ」

「ぐっ……………」

俺のパンチよりもダメージを受けている姿を見て、つい笑いが込み上げた。

伊達はそんな速水を見て同じく笑うと、

「ああ、俺は文句なしで合格だと思っぜ」

「俺、は…？」

「試験官は俺だが、審査員はあの人。」

当然だろ、速水をリングに上げるかどうかを決めるのは、俺じゃない」

速水がよく分からないといった顔を覗て、次にリングの外で立っている見学者を指差した。

プロ志望の見学者と言っていた人物は、顔を隠すほど深く被った帽子を取り、そして懐から取り出したサングラスを着ける。

「音羽会長……………」

「音羽でいい。お前を追い出したのは俺なんだからな」

見学者だなんて大嘘。

速水自身、雰囲気で察していた人物である音羽がリングに上がってきた。目的は言うまでもなく、再起についてだ。

「見せてもらったよ。俺がとやかく言うことはない。」

ただ教えてほしい。…速水、手の震えは止まったか」

言葉の思惑を悟らせない抑揚で問いかける。

サングラスで瞳を隠そうと、抑揚を殺しても、音羽の後悔の念が隠せていないことに速水すら気づいていた。だが、誰も気づかないフリをする。男の涙に揶揄いは不要、その背中には父子のような見えないものがあつた。

「いいえ」

「そ、そんな…！」

「あの時よりも震えています。」

皆さんの感謝の気持ちで、震えが止まりません」

「速水……………！そうか、そうか……………！」

答えに頷いた瞬間、音羽の安堵と希望が溢れ出す。

もう言うことはない。ボクサー生命は続いていくことを見届けて、音羽は左右の手を出して速水に激励を送る。

短い握手を終えると、最後に伊達へと左右の手を差し出して。

「速水を、お願いします……！」

「必ず、無事にリングから帰してみせます」

速水 龍一はようやく、プロへの再起を認められた。

来ることすら迷っていたことも後悔するほどに、音羽の懸念は青空のように晴れて、目に見えない風邪となった。

—
—
—

「伊達さん……俺に、なにしたんですか」

「なにつて、カミをほぐしたただけだ。」

よく寝て笑って練習する。それが出来りや一人前よ」

音羽が帰ったあと、伊達ジムの前で。速水は回復した自分のことを半信半疑とばかりに聞いた。伊達の一撃を貰ってダウンしなかったことが、未だに腑に落ちていないのだ。

「俺……パンチドランカーじゃなかったんですか」

「あん？それこそ今更だな。記憶が飛び飛びなのは睡眠不足によるもの、打たれ弱いのは睡眠不足に加えて単なるトラウマだろうな」

半分以上を睡眠不足で片付けた男に半目で抗議する。自分の症状、思ったよりも軽いじゃないか、と。

だが、心当たりがありすぎる。この4年間でまともに寝たのは、ここ半年間くらいなものだ。きつと、これでもまだ全快ではない。

あとトラウマ……。

心当たりがあり過ぎて困る。

「何もかも拭ってプロ出来るなんざ思ってねえよ。」

プロに舞い戻ってから考えろ。つか、お前はまずデイフェンスの強化からだ。いいな」

「——はい、勿論です」

伊達は速水の背中を叩く。

存外に強く叩かれて前によろけてしまう。

だけど、快く返事をするくらいに気合いの入るものだ。

自分の吊いと思っていた期間が、じつは速水龍一再生プログラムだとは思っていなかった。

振り向くと、伊達が右手を差し出していた。

「ようこそ、伊達ジムへ。」

速水 龍一を正式なプロボクサーとして歓迎するぜ」

8度の敗北を経て、古巣を出て、新天地で1年間の休養をして、再び旅立つことが出来る。

なんとも長い再起だと笑いながら、伊達の差し出した右手に全力で応えるのだった。

半年後、速水 龍一の9度目の再起戦が始まる。

9 度目の再起戦

後樂園ホールに訪れるボクシングファン、およそ半数が久しぶりの名前に目を瞬きさせ、厳しい感情を湧かせて席に着いていた。

第2試合ジュニア・フェザー級10回戦。

9位と記された対戦相手に対して、速水は所属ジムののみ。

当然だった。速水にランクを与えてしまえば、まだ試合をさせるのかとファンたちは怒りに狂って関係各社に無差別電凸をする者が現れるからだ。

「伊達ジム……まさか、あの伊達 英二の？」

「ま、まさか……。音羽ジムを追放されるくらいガタがきてたんだ。元プロがスカウトなんてするかよ」

「そうだけ。だって噂じゃ、パンチドランカーって話だ」

速水の引退後、音羽はジムの取材に「引退勧告した」と答えた。全ての責任が自身にあることを述べて以降、記者たちは様々な憶測を立てては記事にした。

事実と憶測は次第に噂となり、オヒレをつけて広まる。

人の耳から口へ、目から耳、身体から言葉を巡り、無意味な旅の終着駅は本人が受け持つものと人の世は決まっている。

「噂話には慣れています。俺は揺れません」

「みたいだな。強がりじゃないのは有り難い」

控え室、乗降者のいない駅で速水は伊達の問いに答える。

無人駅ではない。各駅にはこれまでも、そしてここからも1人だけは運転手を見守る駅長がいた。今日から新しくなった駅長は、金メッキを金に勝ると豪語する変人である。

「相手は今日10回戦に上げている。」

ランク外のお前を選んだのは、タイトル前に慣れとこうってところだろう」

「相手が元タイトル挑戦者なら文句なし……と。」

腹を立てるべきですが、いまは安心していきます。3年以上も届かなかったランクが、直ぐそこだ」

右拳を左手のひらに打ちつける。

念願、今度こそ果たすべく気合いを入れた。

気合い過ぎは不味いと伊達は顔を覗き込むが、余計な心配だと直ぐに確信する。

「行きましょう、9度目で速水 龍一は完全復活する」

「ビックマウスは相変わらずだな」

伊達の軽口に笑い返して、控え室を背に歩き出した。



今夜、後楽園ホールに幕之内 一步の姿はない。

彼は今頃、復帰に向けて準備を進めている。板垣に確認してきたから、想像よりも身体は思うように動いてくれた。

「どうせなら、俺が戴冠する瞬間を見せたいもんな」

非歓迎ムードのホールは、速水にとって嵐の前の静けさと同じだ。観客の終点が試合になるのかと気に囚われているうちに、ブランドを埋めて試合を終わらせて見せよう。

対戦相手である火鳥乃ひとり 陸の調子を確認する。

いわゆる角刈りが特徴のボクサーで、吊り目と小顔、身長171cmにロングスパンを活かしたアウトボクシングが強みだ。

この半年間で再三確認してきたプロフィールを脳裏に浮かべ終えて、試合前の挨拶に赴いた。

「挑戦を受けてくれてありがとう、陸くん」

「周りは、貴方を評価していませんが……」

リング中央で色のない顔で佇む陸は、速水の感謝に歯を見せて半歩前に出る。

「新人王決勝戦よりも、俺は緊張してますよ……」

「それは光栄だ。期待に添えるよう頑張るよ」
餌を見る目でも、獲物を狩る態度でもない。

8連敗している速水を同格、或いは格上と対峙するように畏敬を以って歓迎した。

「おいバカヤロウ！迂闊に喋るんじやねえ！」

「……………はい」

挨拶もそこそこに、レフェリーの決まり文句を聞き終えるや自らの選手に呆れた言葉を投げるセコンド。

「セコンドのやり口が汚いことで有名だ。」

あのボクサーも、格上と認めた相手にはラフファイトを仕掛けてくる。インファイトの時には注意しろ」

「ええ、分かりました」

あのセコンドの背中では、逸材を殺す姿だ。

伊達も同意見だろう瞳で彼を睨むが、セコンドの言葉を聞き流す選手を見て大人しくリングを降りていった。

本調子の自覚はあるものの、リングの上で試合が始まらないことには真実は分からない。1年と半年間、伊達ジムで過ごした記憶が後押しする。

なにも心配は要らない、と。同感だ、ここで怖気付く理由が速龍一の辞書にはない。

組み上げ直してきたバックボーンに押されて、最後の昏鐘鳴^{こじみ}を聞き届けた。

『さあ始まりました、ジュニア・フェザー級10回戦。』

ここまで無敗、K.O率50%の陸と相対するのは、まさかの9度目の再起戦に臨むボクサー、速水 龍一です！』

挨拶の左拳をリング中央で交わし終えると、リングに舞い戻れた奇跡を確かめるため、速水の左が一直線に相手の顔面へと放たれる。

『先に仕掛けたのは速水だ！これはパリイ！』

クリーンヒットではない。然し、ブランクのあるボクサーという念頭は陸の頭から既に消えていた。

宙空に残る先制の左拳が余韻を残している。滞空する間が見えな

かった左拳を見て、悲しい現実には眉をひそめた。

(……………これが8連敗か。考えにくいね)

続けて飛び加速する左右は観察の隙を誘い、前に進めば確実に手痛い目を負うと分かる。日本においては嫌われそうな実力の持ち主だが、陸は……………いや、この場にいる観客たちさえもが知っている。

速水 龍一がプロのリングに立つには、身体が脆過ぎる。8連敗とは刺し違い、苦し紛れ、信念のない拳でも倒れてしまう速水の脆弱さが招いたもの。

(手数で上回る。無理なら足、相打ち……………)

だから誰もが速水を餌としてきた。速水の嫌になるような実力差を肌で味わい、選手に気を引き締めてもらうための8試合。勝算はまぐれの一発だが、無謀と言うには結果が物語っている。

それでも陸が格上と見ているのは、速水の技術力に純粋な評価をしているからだ。

(経験差は身体で埋めていく……………)

1ラウンドはミドルで勝負をする。

勝利に必要な鍵、速水の必殺であるショットガンを攻略するため。身体を差し出して、最小限のダメージでカウンターを取ってみせようと意気込んで、速水の距離でステップを刻む。

『陸が攻める！今度は速水がガードで手一杯か!?!』

ショットガンから見て分かる手数の多さは、陸のジャブの連打を悉く弾き落としていく。手首を回して、一回転する過程でカウンターのジャブを速水が放つと、首を倒して回避する。

左右のコンビネーションにはステップで軌道から外れて、外から一方的にジャブを打ち込まれた。宙に浮いているような重心移動は、小さな弧を描いては左右の拳を活かした舞いを見せてくる。

(貴方の躲し方を見て、学ばせてもらう……………)

手数には手数、速さには先読み。

陸の理解が及ぶ限り、速水との間にある攻撃力の壁は徐々に崩れていく。人1人分の穴が空いたとき、速水の紙装甲に手が届いて、この試合は歓声に湧き上がることになるはずだ。

誰もがそう思っていた。

『1年半ぶりのカムバック、注目は速水の被弾時だと言われているが……ここ、ここまで被弾なし。それどころか第5ラウンド、なんと陸からダウンを奪ったあ!!』

誰もが驚くようなパンチはない。ずっとカウンターを重ねて、ダメージの蓄積したところにテンプルを叩いた。徹底的にパンチを防御して、一方的な試合を5ラウンド続けただけ。

(俺のパンチだけ、届かない……!)

相打ちどころか、ボディにすら当たらん……)

攻撃力で負けても、紙装甲だから大丈夫だと誰もが言った。

だが、弱点を補う技術力を身につけてしまえば?

誰もが思っ、試合を重ねるごとに無理だ不可能と結論が積み上がり、総論は出た……はずだった。

「バカヤロウ! 8カウントまで立つんじゃねえ!」

「……………」

「立つたら前に出ろ。外じゃお前に勝ち目がない!」

机上の空論のように虚しいと流してきた理想に、速水が到達していることを陸は理解した。

(頭を狙えば肩で、腹を狙えばカウンターで距離を置かれる。会長は役に立たない……)

試合再開とともに陸は突撃を仕掛ける。

このまま行けば負ける。会長の指示は的外れもいいところ。だが、陸は汚い手段を選べるボクサーだから、的外れの指示を捻じ曲げて拳を当てにいくと速水は知っていた。

「大方、一撃当たれば勝てると思込んでの指示だろうが……魅せ方でもう負けてるぜ、アンタ」

伊達がコーナーで眩くなか、陸の大振りを躲して後退していく速水。3度の大振りですぐ退いた先は、リングの瀬戸際だ。

『速水ロープを背負った！今度は速水がピンチだ！』

ロープに追い込んだ、と解説は言う。

その実、速水がバックステップで陸をロープ際まで誘い出した、と言うのが正しい。大手を振られては身体ごとぶつかられて、被弾以上の事故に遭いかねない。

追い込んだと見せて直進させた方が、速水としては技術的にも安パイが取れるのだ。

かくして、陸は疲労の身体を押し右ストレートを放り投げる。勢いの死んだ拳を避けて、速水が外から回ろうとしたとき。陸は右腕を外に伸ばして、速水の身体にしがみ付いた。

(ロープの外からなら……！)

(へえ、そんなことするのか)

足がもつれて、陸の左腕が放り出される。ように見えて、狙いは死角から背後への卑劣な一撃。

「あの野郎、狙いはキド^背ニーブ^面ロー^打か」

背面打ち、即ち反則打であるソレは、レフェリーからは見えにくい位置から、偶然を装って腕を引き戻し際に当てにいった。

(覚えておくといい)

前の陸、後ろのロープに挟まれて、右腕で横への脱出を封じられたなかで、速水の優位な心持ちは揺るがない。

陸の左拳が悪意を持って見抜いた速水は、陸の左肩から自分の右拳をなぞらせて、目も向けずに左拳の位置を把握した。そして背面へと迫る瞬間、左拳を真上へと弾き上げる。

陸の左拳は盛大に空振り、更にはロープに腕を巻き付けることにならなかった。

(背中を押されるなら、野次よりも激励がいい)

陸のラフファイトすら、いまの速水には届かない。

「腕をロープに引つ掛けただと!？」

「上手い!これで陸をロープに縫い止めたも同然だ」

身体が入れ替わる。

ロープを背負わされた陸は、速水の圧巻の観察力に魅せられて、ロープから抜け出す気力を無くしていた。

(静かに見守ってくれる心強さを分かる日が来る)

(打つ前から俺の拳を読んだのか……!?)

不敵に微笑み、龍に相応しい威風堂々たる出立ちはまさしく速水

龍一。速水を知る者の期待に応える拳を握り、速水を知らない者の心に焼きつける拳を放つ。

速水 龍一の代名詞、ショットガンがファイナーレを飾る。

「そんな……バカな……!？」

「棒立ちかよ。ここはタオル投入だぜ、おっさん」

駆け抜ける発砲音の如く観客の胸に留まる。

一瞬の早業、龍の駆け抜けたあとに立っている者はいなかった。

崩れ落ちた陸の姿を見て、次にリングの上で生き残った自分の両拳を確認する。

「やった…………!？」

かれこれ5年以上、手にすることのなかった白星を掴み取って、レフェリーの宣言を聞き届けた瞬間。

「勝った……!？」

外間もへったくれもない、心からの歓喜に打ち震えた。

『ご、5ラウンド決着!勝者はなんと速水!』

圧巻の試合でK.O!アマチュア三冠の天才ここに復活!!?』

「おいおい!?速水あんなに強かったか!？」

「インフアイト無しで勝ちやがった!」

「すげえ!完全復活だあ!」

前前座の試合にも関わらず観客たちは拍手を惜しみなく注ぎ、栄光を掴みに再出発した天才に激励を送り続けた。

観客席へと礼を返す速水へと、伊達も拍手をしながら歩み寄る。試合前から信じていた結果だが、それでも安堵の表情を浮かべずにはい

られない。

「完璧すぎて逆に心配だった。俺だって復帰戦は本調子じゃなかったのに、反則打をモノともしないのは凄すぎねえ?」

「伊達さんがラフファイト仕掛ける相手だと教えてくれたからですよ。初見じゃ無理でしたね」

伊達の満面の笑みにそう返すと、伊達は更に喜んでオヤジ臭い笑い声を上げた。

「くそっ…勝てる試合を落とすやがって…」

だが、背後で我が選手に悪態を吐くセコンドを見て、直ぐに同業者の顔を連れ戻す。速水も言いたいことはあるが、ここでの出番はないと分かっていた。

「お前のボクサーはそうは思ってたなかつたぜ。」

お前は選手の足元すら見えていない。選手の欲しいものことばを知っていたら、結果は違ったさ」

「はあ?なんであんたが…もごっ!?!」

「頭に響く…喋らないで……」

なにせ、伊達の指摘に頷いたのは他でもない、その選手自身なのだから。

意識を取り戻して起き上がった陸は、真っ先にセコンドの口をグローブで塞いだ。両者の仲は言うまでもないだろう。速水に一礼して、リングを降りようとする背中に伊達が言葉を投げる。

「文句の1つくらい言ったらどうだ。このままじゃ、お前さんの為にならねえぞ?」

「いえ…もう移籍するので……」

「はは、そーかい。頑張れよ」

ダメージを引きずる身体で歩み寄り、耳元で囁いたのは離反の言葉。

移籍した速水を知るからこそ、新しい世界に行く決断を陸は選べた。

手を振って立ち去っていく背中を見送ってから、勝利者インタビューを終えた速水たちは控え室に戻っていった。

控え室への道すがら、陸の決断を速水に伝える。

「移籍……。上手くいくものでしょうか」

「移籍は悪いことじゃない。あんなふうに潔い……っか、見切るヤツもいる。反対に、選手のためにと移籍を持ちかけるパターンもな」
「海外じゃ珍しくない話しとは聞きますが、自分が当事者になったら領くしかありませんね」

「言い方は悪いが、逃げも1つの選択肢だ。選手然り、俺たち指導者も逃がし方を知ってなきや、行き着く先は故障になる。追い込むだけのヤツは壊すことしか出来ない。」

ま、結局は本人次第よ。

居場所は自力で見つけるしかない」

これらもプロの世界の鉄則だ。

引き際を見極めて新しい道を探すこともまた、プロに求められる才能だ。

火鳥乃 陸は速水 龍一が移籍した結果を見て、自分も移籍することを決意出来た。速水との試合には負けたが、陸にとっては人生の大きな転換期となることだろう。

「やっ和日本ランカーまで来れた。」

こっからは尚のこと早いぜ。取り残されんなよ」

「その意気込み、俺が選手だつてことを忘れそうです」

そうして2人、肩を組みながら伊達ジムでの初勝利を大いに喜び合った。

笑い合う2人の背中を見た関係者は、しつくり来るものがあると語る。

速水 龍一、9度目の再起戦。

5ラウンド1分22秒、K・O勝利。

プロ戦績17戦8勝9敗。

日本ジュニア・フェザー級9位獲得！

蛟 剣哉

或る日の夕暮れ刻、岸边に設置した撮影機材を撤去する光景を横目に、蛟 剣哉は着ていた白い布切れをスタッフに静かに手渡した。それでも重々しく水々しい音を鳴らし、吸い込んでいた水分を吐き出していく。

「すみません、まだ絞れていませんでした…」

「ああ気にしないでよ。橋から河川に落ちて、追いかけてきた刑事とタイムマンまで一発撮りしたんだ。」

監督も驚いてたよ？よく目が回らないもんだって」

今日の撮影を興奮気味に振り返りながら、スタッフは白い布切れを受け取った。

衣装…だった白い布切れは、撮影途中で意図的に切り破り、激闘を演出するために使い潰されたもの。それをゴミ袋に捨てるのではなく、再利用せんとばかりにスタッフは収納袋に白い布切れを仕舞った。

新しい着替えを受け取るときに感謝を述べて、帰宅用の着替えを済ませたところで監督が声をかける。

「剣哉くん、お疲れさま。今日も迫真の演技だった」

「ありがとうございますー！」

「顔は同じなのに演じ分けが巧いね。2年以上も前から悪者の顔が多彩すぎて、本物と間違えそうになる」

業界の中でも温厚な人物として有名で、剣哉を俳優として名を馳せるに至らせた育ての親のような存在だ。

ひと月の間、刑事ドラマの撮影に携わったのが1年ぶりのこと。撮影が無事終了してから剣哉のもとに真っ先に訪れたのは、心から溢れる労いの言葉を贈るためだった。

「嬉しい限りです。悪役…敗者から転じる悪の役作りには自信がありますから」

「そこだよ。剣哉くんを抜擢するのは、作品を演じる悪に生まれる悲

しみがあるからさ。

悪辣の裏側を見せつける姿はヒーローを塗り潰せる」

剣哉の演じる悪者は原作を越える。

監督が嘗て受けたインタビューで、剣哉を抜擢した理由について問われたときの回答だ。

悪役の魅力に吞まれるヒーローならば、試合脚本でに勝って勝負人に負けておけばいい。お淑やかな笑みとともに語ったことに、関係者たちは声のない指導を受けたようだと言われ、背筋を伸ばしたという。

「だが……そろそろ主演、どうだい？」

ファンからはヒーロー蛟 剣哉を望む声も多いよ」

「そうですね。実は、そろそろ主演のオフアアを受けようと思っ
まして」

「おお、本当か!?!それ、なんの作品だよ?是非とも俺に監督を任せ
れ」

思わず口調が崩れる監督に苦笑いしながら、舞い戻ってきた龍の姿を思いつつ宣言する。悪役に好かれる男だと自分で評してはいるものの、だから主演になれないとは思っていない。

正義とのアンマッチは懸念されるが、監督は自らの手で剣哉を主演に抜擢したいと願っていた。それが叶うのだ、今から素足でゴリラ山を踏破しろと言われれば挑戦するほどに、心身を賭ける想いで作品の名を聞く。

「魔王です」

剣哉が演じるであろう役目の名前が返ってくる。

魔王とはファンタジーでいうところのボス、勇者に倒される世界の敵の名前だ。サスペンスや映画でも、魔王の名を語る敵役はいるからこれのことだろうか。

思考を順繰りとして、監督は首を傾げる。

剣哉の表情がこれまでの悪役とは一線を画した、物語の主人公のように輝いて見えるのだ。

首を傾げる監督を見て、自分だけ前を走り過ぎたと剣哉は緩やかにブレーキをかけた。

「勇者に憧れて旅に出た男が魔王となって、勇者と運命の出会いを果たすんです」

「剣哉くん、その顔が魔王なのかい？」

「それは、これからの楽しみ……ですよ」

監督はこのままでは答えが分からないと分かった。

合点がいくには、剣哉の誘いに乗るしかない。これまで剣哉のボクシングに興味を示さなかったが、この一分間で心をすっかり掴まれてしまった。

「監督には今度、台本をお送りします。私の勇姿を、ぜひ見守っていただきたいですから」

なぜ自分を誘ったのか。

俳優の仕向けた迷惑を想像しながら、来たる日に備えてスケジュールの調整を始めるのだった。



剣哉が監督に伝えた魔王の物語。

誰が脚本したかと問われれば、剣哉は自分だと堂々と宣言する。

何故ならば、幾多もの苦難を啜り、一度の機会を待ち続けることを生き甲斐としてきた。

速水 龍一とベルトを賭して戦う、そのために。

「こんなボクサーに勝っても箔は付かないぞ」

———そのために、発言者への感情を消した。

白スーツと蝶ネクタイ、どちらもブランド物ということを言うように目に留まる派手さを捨てて、ここ地原プロダクションジムの事務所で、会長である地原は言い放った。

剣哉の才能を見抜いて、オークションに訪れた剣哉に合格を出したのが地原である。地原は数々のスターを排出する地原プロダクションの二代目社長だ。父親譲りの商才で芸能界に人材を送り、映像の名

の付く世界で多大な影響力を示してきた。

剣哉がボクシングを始めたい、と申し出た時、没落したボクシングジムを買い取り、諸々の手続きを済ませた行動力に剣哉も当時は舌を巻いた。

「剣哉君が負けないことに絶対の安心感はある。だが、8連敗もしていたボクサーを倒してもファンは喜ばん。

君の俳優人生に泥を塗ることになるねえ」

ただ、性格に難あり。

情より金で動くため、オークション合格直後の剣哉が心に仮面を付けるくらいに嫌煙する人物だ。

地原はボクシングに詳しくない。大金でコーチ陣を雇っているため、度が過ぎた練習でもない限り口を挟まない。地原の許可なくして剣哉の対戦相手を決めることは不可能だ。

不思議なことに、地原は対戦相手の戦績とK・O数、あとは顔写真を見れば大方の試合予想がつけられた。故に負けそうな相手を極力避けて、然しミスマッチになるような試合を組まない。

そこに甘んじて、剣哉は淡々と試合を受け入れてきた。今回、剣哉が対戦相手を提示したことが初めてのことで、地原は物珍しいと速水のプロフィールまで細部に目を通して、そして出した結論が冒頭の言葉だ。

「彼は…僕の俳優人生を左右する逸材なんだ」

口を突いて投げつけた言葉は、怒り以外の感情で占められていた。甘い香りに目が微睡むように地原を見る感情の名は、歓喜だ。

地原ほどの目利きが、速水の実力を見誤った。もしも警戒されてしまえば説得は困難を極めたが、俳優の経歴にのみ目を向けるだけなら説得は容易い。

「君が意見するのは珍しい……。良いだろう、許可する。こちらが安全牌を選ぶ手間が省けた」

多くの要望を出さない剣哉の望みだ、可能な限り応えてくれる。ご機嫌取りも地原最大の仕事だ。

「今回は4ラウンドK・Oでいく。途中、インファイトを2回は挟ん

でほしい。倒さず、スレスレの攻防でファンと監督にサービスしてくれ」

そして、自らの仕事を忘れないのも地原のポリシー。

地原の放った言葉はメディアに向けた……というよりは、メディアからの要望である。

真剣な剣哉を貶す、プロボクシングに対する侮辱行為。平気でこのような指示を飛ばせるのは、地原がボクシングをドラマのワンシーンだと思っっているせいだ。

ボクシングジムを買い取ったのも、俳優の命である身体を壊すかもしれないスポーツを許可していることも、全ては次の仕事に繋がるから。そして、地原が要望を出すだけの実力を剣哉が備えていることも大きかった。

「彼はそこまで甘いボクサーではありませんよ……」

「君の要望に応えた。なら、こちらの声も聞け。」

生涯監督!!? で有名なあの監督が君の試合に興味を示したそうだ。次の試合、最前列を充てがう手筈でね」

「……それで、噛ませ犬が必要だったと」

剣哉の解答に満足げに頷く。

地原の指示を守らなければ、コンプライアンス違反を犯したかのように責めるのだ。ボクシングをおぎなりにするスケジュールを組んでくるから、剣哉は大人しくせざるを得ない。

「このジムは芸能界の関係者が在籍している。新人なら兎も角、君ほどのスターの負けは会社の売上げに響く。それを心に置いて、思う存分仕事に励むように」

地原はそのまま事務所を出ていった。

今日はもう戻ってはこない。

何故分かるのか。無駄に嗜好を凝らした机の上に、愛用の万年筆がないからだ。

漸く詰まりかけた息を吐き出して、すぐ横のソファに思いきり体重を投げ出して腰掛ける。

「戴いたチケットの借りは返しました」

独り言を自分の記憶の中に溶かしていく。

親に勧められるまま俳優の道を歩いて、目標もないのに役目を貰えるくらいには才能があった。主役級に抜擢されずとも満足感があるため、このままなんとなく生きていくのも悪くないと思っていた。

そんな、充実感に浸れる日頃のことだった。

『暇なら観にくるといい。そうで無くても来てくれ』

自分のことを主役だと勘違いした、大馬鹿野郎に出会ったのは。

『なんですか、これ。チケット…？』

『退屈な顔してたからな。日本タイトルマッチのチケットだ、それ伝説になるから捨てるなよ？』

そう言った速水は、ベンチに座っていた剣哉の返事を待たずにロードワークに戻っていった。

あの日、剣哉が貰ったのは速水の日本タイトル初挑戦のチケットだ。当時、剣哉は思った。走る夜道を照らすような活力溢れる人間が、日本の頂点に立つのに相応しいのだろう、と。

数ヶ月後、予定を空けて観に行つたタイトルマッチで剣哉は衝撃を受けた。あの輝ける人生主人公のような男が、平凡でやられ役のような相手に打ち負けたのだから。

『』

剣哉の俳優人生を大きく左右する結果だった。

自分の中の当たり前が平凡な存在に打ち砕かれ、その熱狂たるや女性の声援だけでは到底及ばない域である。不思議なことに、勝者への興味は湧かなかつた。速水の散りゆく、地に墜ちた姿こそを演じたいと強く願ひ、主役に席を譲り続けてきた自分に譲れない席が出来た。悪の王という、打ち倒され勝者を引き立てる、作品に唯一無二の役目だ。

「僕の悪には、速水 龍一が必要なんだ。脚本家は要らないし、現場に入る人間は正しくないよね」

剣哉は速水の底知れぬ根性を信じている。

芸能界が俳優の売り出し要素の1つとしか見ないなら、速水の拳は舐めきつた予定調和を真っ向から否定する。

試合に色を付けようとするなら、雇い主であれ牙を剥く覚悟だ。俳優人生のためと言っておきながら、あの日の挑戦者、速水 龍一の姿をもう一度見たいだけかもしれない。

「この題名タイトルは…失墜伝説。龍の財宝を僕だけが戴く」

この手で、飛ぶ龍に下す結末は失墜と呼ぶに相応しい。

「魔王待つ者らしい理由だろ…！」

あの感動を、もう一度。

曇り空に雷鳴のような輝きを。

夢の舞台に悲劇あれ。

蛟 剣哉VS速水 龍一

速水の9度目の再起戦から1ヶ月が過ぎた。

最初の1週間はマスコミからのインタビューが毎日舞い込んできたものだが、その内容の多くは伊達ジム移籍によるところが大きい。音羽からの移籍は全ボクシングファンの予想外であり、そもそも速水の復活劇が夢物語と言わんばかりに回復の秘訣やらを掘り下げようとしてきた。

深く知ったからと正しく記事にするかは別問題だ。歪曲されることを嫌った伊達は企業秘密の一点張り……終いには妻の愛妻弁当を広げて食レポを始めるもんだから、彼らも呆れて帰っていった。

「流石にもう来なくなっただな」

「最初は懐かしかったんですけどね。いまは他方に迷惑が掛かるので下手なメディア露出は避けなければ……」

奥さんのお弁当を見せて追いつ返すのは面白かったですよ」

「愛子の弁当だぞ。これを見れば暖かいジムだと思って門下生が増えること間違いなしだ」

「本気だったんですか……」

伊達の本気の目を見て苦笑いを返し、事務所の机に広げられた弁当の具を箸で掴む。

選手たちの試合が決まっていなかったり、計量後の選手によく振る舞われるもので、この手料理のおかげで選手たちのモチベーションは常に最高潮を維持しているほど。母親の料理よりも美味しいと、速水の中でも大好評だ。

手料理が振る舞われる決まったタイミングがもう1つある。それは、選手の試合が決まったときである。

速水はこのことを自覚しているから、会話の切れ目に合わせて箸を置く。いつもなら対戦相手の話をしながら食事をするものだが、今回は雑談から始まった。空気が、違う。

その理由を視線で問うと、伊達は呆気なく答えた。

「タイトルマッチの話が舞い込んできた」

「俺に……もうですか!？」

驚きで声を荒げて一瞬、速水の拳は既に臨戦体制へと仕上がっていた。

「返事は……聞くまでもないか」

念願の試合に犬歯を剥き出しにするような笑みで応える速水を見て、断るといふ選択肢は最初から消える。

「日本ジュニア・フェザー級王者、蛟 剣哉。」

戦績は11戦11勝6K・0、A級以降は全K・0の超強敵だ」

御宅を並べることは止めて、対戦相手の戦績を確認する。

眉ひとつ動かさないとところを見るに、既に相手のことを把握していると分かった。ならば当然、剣哉との試合がどういうものかも知っているだろう。

ファンの黄色い声援、対戦者の窮屈感、射撃場に佇む的になる気分だと言われるくらい、剣哉の試合は例え地元でもアウェイと化するのだ。剣哉との対戦を避けたがるボクサーは多い。

「それは元々、俺が居た場所ですよ」

「成る程ね。相手の気持ちになれるってか」

暗雲に目を細める伊達を見て、速水は杞憂だと言つてのけた。

「ま、それ抜きで強い。ミドルからインフアイトが奴さんの戦場だ。アウトボクシングだといつか捕まる」

「接近戦なら伊達さんのスパアで鍛えています。」

顎に貫えば不味いのは変わりませんが、接近戦で生き抜く技術だけは日本一だと自負しますよ!」

「確かに鍛えたの俺だけどな……言い方!」

熱に充てられて接近戦に応じるのは目に見えてるぞ」

「……まあ、チャンスとあらば手を出しますよ。そのために首捻りを覚えておきたいんです。これなら顎に受けても流せますよね」

「首捻りはダメだ」

「なっ……どうしてですか!」

俺の忍耐力なら首捻りを習得する自信があります!」

「首捻りは緊急回避として騙し騙しやる技術だ。先ずは他のディフェンスを日本一使い熟せなきや、頭に抱えたダメージが簡単に爆発するぜ」

首捻りの習得には相応のセンスと時間が必要だ。

何人ものボクサーとスパーを重ねても、習得出来ずに終わることもザラだ。

判定勝負となった場合、首捻りは不利に働く。パンチをかわせても、見た目では被弾しているように見えるせいだ。パワーのない選手にとつては百害あつて一利なし、と言つても過言ではない。

そもそも、速水は一発のパンチが命取りになる。

首捻りに賭ける時間に対して、対価が得られる見込みはなかった。

「接近戦は捨てるつてことですか」

「相手のK・O率は50%だ、判定になりや首捻りが不利になるのよ。そこで、シオルダーブロックを覚えてもらおう」

相手のパンチを肩で受け流す、シオルダーロールと呼ばれる技術。L字ブロックとの併用で相手のパンチを顔に届かせない、いまの速水には理想のディフェンス技と言える。

「待つてください。俺はフリツカーを使わないし、今からスタイル変更は厳しいです」

「上体を逸らすとかまでは考えなくていい。ショットガンを使われちゃ、どうせ腹をぶっ叩かれて終いだ。

大切なのは、ショットガンを顔で受けないこと。

だからシオルダー“ブロック”つて言つたんだよ」

「肩で顎を守りつつ、懐に飛び込むために……!」

「シオルダーブロックで距離感をもつにする。そうすりや次の段階にいける」

「もしかして、ハートブレイクショットを!?!」

「あれは今からじゃ無理だ」

「あつ、そうですか……」

「ショットガン破りだ」

シオルダーブロックとショットガン破り。

組み合わせるための設計図を見ても、完成型にたどり着くことは難しいと知った。

「へえ」

「よし、合点がいったな？」

それでも伊達の発想に感嘆し、そして伊達が見せたショットガン破りの左拳を思い返せば、内容は難しいものではない。

ただ、速水にとっては1ミスで引退に繋がる程度の最善策という話である。

「んで、ショットガン破りの助っ人を呼んでおいた」

「伊達さんじゃないんですか？」

「あの手数は無理、訳分からん。こっちは後日だ。まずはシヨルダーブロックから仕上げていくぞ」

俺の必殺技をなんだと思ってるんですかね…。

—
—
—

1週間後、伊達ジムの門を開いたのはハツラツな声で挨拶を放つ、速水の顔見知りだった。

「こんにちはー！」

「板垣くんだったのか」

「速水さん復帰おめでとうございますー！」

満面の笑みで伊達ジム全員への挨拶を終え、早々にグローブを取り出す板垣に速水は驚いた声で迎え入れた。

今日ここに板垣が来た理由は言うまでもない。

「彼がショットガン破りの助っ人だ」

「成る程、ハリネズミですか」

「そゆこと」

「いや、嬉しいですよ！なにか力になれたらと思っていいたら、伊達さんから声がかかるなんて」

和やかな香りとともに笑うこの男、手数だけならば速水のショットガンに迫るものを持っている。つい最近、ふと思いついたように板垣の試合を観てから知ったが、このボクサーは速水にとつて最も参考になる1人だろうと。

東洋ランカーを相手に練習出来るなら心強い。

「剣哉の試合は観たか？」

「届いたDVDはバッチリ。何となくですけど、ショットガンには寄せてきました。」

先輩に確認済みなので、かなり精度は高いはずですよ」

「へえ、幕之内くんが」

驚くことに、剣哉のショットガンのみを観て仕上げるだけでなく、ショットガンの体験者である幕之内に見てもらったと言う。速水の拳は熱気が上がる一方だった。

「どんなもんか、サンドバッグで見せてくれよ」

「勿論ですとも」

その熱気は、サンドバッグを叩き終えた板垣から意識を戻すと、泥水を被ったような寒気に包まれていた。

(この手数、いや速さも俺の上をいってやがる)

「驚いた……こいつは想像以上だ」

「そりや気合いも入りますよ。速水さんのタイトル挑戦、絶対に勝つてほしいですから。」

それに伊達さん、約束忘れてないですよね？」

「当然だろ。全部終わったらな」

速水には分からないやり取りを終える。

なにか密約があるのだろう。それは速水に関係ないのなら、気にする必要もない。

「速水さん、大丈夫ですか？」

「……………ああ、上等だぜ」

速水は、目の前の壁に集中するのみなのだ。

「貰うだけじゃ非常識だ。早々に破って、板垣くんの成長にも貢献してあげなきゃと意気込んでたのさ」

「……へえー！」

2人の火花散る挨拶は終わり、こうして速水 龍一はタイトル戦へと向けた最後の3ヶ月間を過ごすこととなる。

ここから先は、8連敗の時間よりも長い体感時間を過ごし、8連敗よりも熱い熱量の集中力を注ぎ込んだ。

挨拶を忘れることはなかった。

ジムの練習生との言葉は何度も交わした。

8回戦のプロたちからの応援に感謝を述べた。

板垣 学の技量を追いかけて、時には越えるときもあった。

伊達 雄二の期待を受け取り、伊達 英二の指導を全力全霊の感謝と汗で応えた。

速水 龍一が8連敗の時間を無駄にしたくないと、速水 龍一に妥協を許しはしない3ヶ月を過ごした。

そうして、全ての努力を終えて、伊達ジムのリングに速水 龍一はぐったりと寝転がった。

「お、お疲れさまでした…」

「少し休んだら身体をほぐす。寝るんじゃねえぞ」

リングを降りる伊達と入れ替わりで、雄二が速水のもとにタオルを届けにきた。有り難うと言いながら受け取り、先ほどまで行っていた最後のスパーを思い出して呟く。

「俺とのスパーを3ラウンドしても余裕か…」

「でも速水さん、昨日は板垣さんとスパーしてました。疲労が溜まってるんですよ！」

「それにしてもさ。元世界ランカー位なだけはあるけど、見た感じ衰えていなさそうだと思ってるさ」

「すごい、見抜いたんですか！僕は分からなかったけど、父さんが自分で言っていました。全盛期を維持してるって」

「な、なんだって。あの人、そろそろ40歳だろ…」

だけど納得がいく。ロードワークの時から、まだ体力が有り余って

いることは容易に見て分かった。

だが、プロでもないのに何故。

「ずっと、待っているんです。自分の背中を追い越して、手渡したバトンと一緒にゴールするボクサーを」

「ずっと、待っている…?」

誰をだろう。

………知らなくても、誰かは分かってしまった。

「幕之内くんか…」

「先輩がどうかしました?」

ひよこりと視界の外から板垣が顔を出す。

「ん、彼はどうしてるのになって話さ」

「あく。速水さんの邪魔になるかもと思って黙ってましたが、逆にやる気出そうだし言っちゃお。

先輩、4ヶ月後に復帰戦しますよ」

「ええー!?」

そして、突然のカミングアウトに雄二と2人して絶叫する。

気を遣って聞かなかつたのに、軽々と重大ニュースをこのタイミングで放り込んできやがった!!!

「板垣くんチケット!今すぐ最前列を確保してくれ!」

「父さん、僕も観に行きたい!お願い、買って!」

「あーっ板垣この馬鹿野郎!」

うちは金欠だから黙ってるって言ったのにい!」

「速水さんの集中を切らしたくないって話は!?」

「そりゃ嘘だ。雄二のやつ、幕之内の試合は最前列で見たがるからな。これくらいしか我儘言わないから叶えてやりたいが、お金がね!」

「知りたくなかった他人の家計事情だ…」

雄二は目の色を変えて伊達にチケットをせがんでいる。ファンの鑑だと思いながら、朗報を胸に留めて身体をほぐしていく。

ショットガン破り、シヨルダーブロック。

この2つはタイトルマッチで十分に通用するものとなった。世界と東洋経験者のお墨付きだ。この陰に幕之内の後押しもあるとなれ

ば、もう残す悔いはないに決まっている。

「そろそろ帰るよ。休まなくちや」

あとは試合に向けて体力を回復するのみとなった。

「板垣くん、今日までありがとう。試合観に来てくれよ」

「僕も勉強になりました。絶対に勝つてくださいね」

握手を交わす手は、何度も俺にダウンを与えたもの。そして、最後の最後、この手でダウンを奪ったんだ。

「伊達さん、軽量の日にお会いしましょう」

「暇なら顔を出してもいいぞ。お前が休めると思っただ方法で余暇を過ごしてくれ」

笑ってみせた声に、何度も俺は救われてきた。

きつと、最後には報いてみせる。

伊達さんのもとにベルトを持って帰るんだ。

「雄二も早く寝てくようにな。」

3日後は俺の戴冠式だ。風邪引いたら伝説見れないぜ」

「はい！速水さんのベストバウトになると信じてます！」

雄二の期待が俺を奮い立たせてくれた。

ここまでボロボロの龍を格好良いと言ってくれた。そんな古龍のベストバウトなら、相応しい題名があるべきだ。

「^{タイトル}題名は…昇龍伝説！速水 龍一の最後の試合だ」

ここに居る全員に勝利を誓って、速水の最後の猛特訓は終わりを告げた。



準備は、足りなかった。

幾ら練習を積んでも積み足りない。練習をすることに不安は薄れて、猫背になりそうな背筋を伸ばしてくれる。それでも不安がずっと付き纏うことに変わりはなく、祈るように汗を流しても自分の実力

満足することはない。

ある種の飢餓だ。肉体の疲労さえなければ身体を痛めて、世界に届くほどの身体を作り上げたいと願う。

8度の敗北が戻ってこいと手を伸ばす。あの手は速水のものではないのに、速水の姿形をしたものが呼びかけてくる。不安は常に自分の姿をしていて、逃げてしまえと助言を与えてくる。

（――久しぶりに、眠れなかった）

バンテージを巻き終えた手を見下ろす。

今朝から拳の震えが止まらない。

復帰戦を勝利して、直ぐにタイトルマッチだ。あれ程に渴望した試合が目前に迫っているというのに、身体のほうは不満が積もって仕方がない。

タイトルマッチ当日。

速水 龍一は控え室で膝に拳を押し付けた。

この4ヶ月間、ひた隠しにしてきた恐怖がいい加減なほど暴れたがっているのを、胸の内に抑えつけるために。

「まだ震えるか？」

「……………はい」

グローブの装着を伊達は躊躇した。

もし、この震えが身体障害の前触れだとするなら、速水をリングに向かわせることは殺人と同じこと。

言葉にすればボクサーの覚悟を穢すことになる。だが、大丈夫だと思っただけだと割り切るのは早計か。

瞳の奥で揺れる心境に乱される伊達を見て、この土壇場で選手を救うことを視野に入れられる判断力に速水は感謝した。この人が控えていてくれれば、自分が本当に壊れることはないと思えるのだ。

「今日、速水 龍一のプロボクサー人生は終わる」

自分で口にして、悔しいと思う。

どれほどの期間、休養で身体を癒そうとも速水は既に超人ではない。天才が8度の敗北で凡人の体力に落ちて、ひと時の高揚で全盛期を押し上げただけ。

次はない。次がない。もう、愛するリングに上がる回数はこれつきりになる。勝ち負け以前に、この事実が怖くて仕方がない。

だから、なればこそ、速水は宣言する。

「最後の試合、どん底から這い上がって2戦目での戴冠式。怖くないわけがない……！」

「——このやろう、言いやがるぜ」

身体は不満が積もっている。あと1試合で、確実に速水 龍一のボクサー生命は幕を閉じる。

だからこそ、言葉で自分を強がらせる。

この震えの真実は速水 龍一だけのものだ。

「あの日、お前のボクサー生命を引き伸ばした。

後悔はしてねえよ。よく立ち直らせたと褒めてやりたい」

「それは……。知っているからですか」

答えはない。返してはいけなかった。

“拳で挫折したヤツは、拳で立ち直るしかねえ”

速水と出会ったとき、伊達はこう言った。

かつての自分のことを吐き出して、見事に速水の心を掴んだ。然し、求めているのは伊達の答えじゃない。自分の拳で戦い、答えを探し出して漸く速水 龍一は自分を取り戻せる。

「僕は、前の父さんを知りません！」

「ゆ、雄二!？」

控え室の扉を開け放ったのは、外で待機していたであろう雄二だった。ほんの少しだけ返事に躊躇した伊達の様子を察して、賢い雄二は負けた父親の背中に堂々たる勇姿を速水に伝える。

「だけど、リカルドに負けても父さんは終わらなかつた。幕之内さんにバトンを渡せたんです！」

「——なんだ、なら答えは決まってる」

震える手を宙に出して、握ったのは誰の手でもない場所。自分を擡い上げた伊達に伝えるようにして、速水は立ち上がる。

「世界の頂点を見てみたい。俺も幕之内にバトンを渡さなくっちゃな。日本一のバトンを」

伊達の想いには程遠い、だが確たる証を持って龍は舞い戻ったと謳いたい。幕之内の背中を押した手で日本の頂点を獲り、あの日、悩んでいた君から自分は励まされたんだと感謝を伝えたい。想いを成就したい、この確認で全ての準備は整った。



『かつてアマチュア3連覇を成した天才がいました。』

プロ転向後、輝かしい世界を望まれたボクサーは6連敗というドン底へ。努力は努力に敗れ、才能は執念に敵わず』

暗がりを歩くそのボクサーの道のりは、8連敗した重々しい姿を引きずるかのように見えていた。

事実、この場に来て良いと思えるファンは少なくない。まぐれの一勝と考えるのが普通だ、これは咬ませ犬に違いないと。

『その時代でなければ…何度も嘆かれ、悲運のボクサーと呼ばれる始末。然し、彼に手を差し伸べたのもまた、悲運に付き纏われた漢です。彼の名は伊達 英二。』

絶対王者に最も近づいた、世界指折りのボクサーだ』

観客たちは同時に期待感に包まれる。

伊達 英二の指導は確かなものだ。彼の指導が天才速水 龍一に備わり、新しい一面を携えて登壇したとあれば、この場違いな雰囲気を持ち壊せるかもしれない。

『新しい環境、更なる技術を身に付けて。』

堕ちた龍、最後の挑戦権を握り締めました！』

不安と期待、混ざり合う複雑な現実に幕之内 一步の緊張感が高まるばかりだった。

「先輩、緊張しすぎですよ。そんな顔じゃ速水さんまで緊張しますって」

「あはは、そうだよ。けど最後の試合だって聞いたから、絶対に勝つ

てほし気持ちと、もつと速水さんの試合を観たかつたって惜しむ気持ち
がせめぎ合っちゃって…」

「気が早いなあ」

背筋が直線になる幕之内の背中へと、1人の男性が声を掛けた。

「やあ、幕之内くん。久しぶりだね」

幕之内よりもやや高い身長 of 男性は、親しみやすい笑顔を浮かべながら幕之内の隣に腰掛ける。

「小橋さんー」

小橋 健太、元日本ジュニア・フェザー級王者。

幕之内、速水と試合をしたことのある戦友と呼べるボクサーだ。懐かしい再開に握手を交わして、幕之内の隣に座る板垣へと視線が向いた。

「それに、板垣くんだね。速水くんを手助けしてくれたんだって？」

「あ、初めまして。僕のことも知ってるんですね」

「噂には聞いてるんだ。彼をここまで連れてきてくれたんだ、感謝しかないよ」

「いやあ、それほどでも！小橋さんも招待されたんですか？」

「観に来てくれて、チケットを融通してくれてね。まさか君たちの隣とは驚いたけど。」

「……………さあ、王者のご登場だ」

小橋の視線が少しだけ冷ややかなものとなったのを、2人は怪訝そうに見ていた。その時、王者の到来を知らせる暗闇が会場を包み込んだ。

『悲運のボクサーを迎えるのは、人気絶頂のボクサー』

そうして、2人は小橋の視線の意味を知ることになる。

「剣哉くんー！ー！ー！勝ってねー！ー！ー！」

暗闇のなかに遠慮なく放り込まれる声援。

『この歓声が力となり、数々の強敵を倒してきました。彼の武器は驚くことに、挑戦者と全く同じもの!!?』

龍に憧れ、実力で手にした“ショットガン”は何方が強いのか、今宵証明されます!!?』

日本ジュニア・フェザー級王者

蛟 劍哉

V S

日本ジュニア・フェザー級9位

速水 龍一

『龍が天に昇るか、それとも龍殺しの劍が仕留めるか。』

ボクシング界の新旧スター対決、これより開幕です!!?』

残された応援は劍哉のファンに負けない声援を送ること。外の世界で絶対に負けてたまるかと幕之内たちは気合いを入れ直して、速水の試合に全神経を注ぎ始めた。

俳優のしがらみ

タイトルマッチのリングを踏みしめて、居心地の良さに浸りながら速水は対象に立つ剣哉を見た。

思ったことを表すなら、不快感。周囲の期待にぐしゃぐしゃにされて、自分のやりたい事を妥協して成そうとしている瞳をしている。

「始まるぞ、大丈夫か」

「——ええ。もしかしたら、1ラウンドで終わってしまうかもと思っってしまったって」

「なんだって…!?!」

伊達にそう伝え終わると、試合開始の合図が迫ってきた。

なにに足元を掬われているのかは知らない。それを利用するのは酷だろうか、と自分の倫理観に問う。返事は当然、ぶっ飛ばせだ。

——静寂、一瞬。

世界の命運を賭けたとでも言うように、2人のボクサーはゴングが鳴り響いた直後からリング中央を軸にして重い脚を上げる。突風にも揺るがないほどに緊張した雰囲気投げつけ合い、距離を2メートル開けながら相手の調子を確認した。

剣哉は念願の対面を心で噛み締めて、これから自らを縛る情景と恩義への嫌悪感を和らげる。一方で速水は、腫れ物が足裏で暴れているように苛立ちを押し込める王者を観察しながら、2度目のタイトルの圧力に身体を慣らす。

時間にして20秒、それぞれの覚悟が心を満たした。観客たちが見えない戦いに痺れをきらそうとする直前、

(挑戦者らしく、俺から出ないとね！)

心から溢れ出した覚悟を堰き止めるようにして、速水の脚力が前へと飛び込んでいった。

剣哉が先制を譲ることはこれまでもあった。

事前に上からの指示でもあったため、待ち構えることには慣れてすらいいた。だが、その剣哉が思わず踵を返そうかと思うほど、速水の勢

いは始動するエンジンの如く迫力に満ちていた。

(ぐわっ——！?)

剣哉の身体を洪水のなかに浸したように、ロープへと押し流す速水の初手。足元を流れる濁流とは正反対の、腹から頭まで身体の前面を覆うように打ち尽くす必殺のショットガンだ。

第1ラウンドだというのに、剣哉はたつたの30秒で血管の血流が止まったような錯覚に襲われる。

第4ラウンドでのK.O.、ここに至るまでに手に汗握る攻防を、そして蛟 剣哉が輝ける試合を！という指示を出したマスコミ、そして承諾した社長に剣哉は問いたい。

『挑戦者から挨拶のショットガン炸裂!!?』

ガードの上から王者をロープ際に押し込んだ!!?』

後手を選び、ショットガンにカウンターを合わせる準備をした上で、あつさりとロープ際に追いやられた現状を見て、指示を守らせるのか？

(——どうせ変えない)

大抵のこと：育った家庭環境にさえ滅多に文句を言わない剣哉が、悪態を胸の内に吐き出した。空想に霧散する吐息を裂くようにして、速水の一撃が心身に響く一撃を与えた。

『そして一気呵成の速水の先制イイ!!?』

剣哉ファンのブーイングをもともせず攻める！』

次の一撃も、さらに次も速水の左右が鮮やかに剣哉を攻め立てていく。

必死でガードに徹する剣哉を、リングサイドで伊達は哀れんだ。

「精神的な不調だな。速水のやつ、恐らくは原因まで見抜いたうえで荒っぽく責めてんだ。

こりやマジで1ラウンド決着いけるかもしれん」

試合開始直前の速水の言葉に合点がいく。相手のセコンド、地原は経営者でしかないのだ。あれは人を呼び込む人間であって、育てる才はない。

そんな地原に対して速水は怒り、剣哉がまだ本腰にならないうちに

試合を終わらせてようと攻めに意識を割いている。

「剣哉！誰が打たれると言った！もつとカメラを意識してパンチをかわしていけ！」

剣哉の被弾は、1秒ごとに積み重なっていくばかりで、作戦が完全に後手に回ってしまったと分かった。

（見て、分からないのか……！）

彼の實力と高揚感がいま、僕を上回ってるんだ）

初めから敵のように見ていた地原を、開幕の野次のせいはいよいよ敵と認識してしまった。仕事をこなそうとするあまり、力み過ぎてしまう。

（人生の幸運と不幸に板挟みされて、気分が最悪に傾くとか……なんのための人生だよ——！）

片手ハンマーを手にしてジャンク品を勢いのままに砕くように、剣哉は肩を入れ込んだあとに右拳を振り放つ。平手打ちでもしたのかと思うほどに鋭い風切りを鳴らして、速水の顎に目掛けた拳を、速水は咄嗟に……反射的に肩で受け止めた。

『苛立ちに任せるようなスウィング!!?』

速水これを肩でブロックする、そこから！』

肩に乗り切った剣哉の体重を少しだけ後方に逸らし、剣哉の身体を紐で引っ張るように引き寄せる。

（しまっ）

（貰ったー！）

速水はこの瞬間、剣哉の苛立ちに悲しみを覚えた。彼が招待してくれたタイトルマッチに、彼の周囲の人間の理解が足りないがために、心が荒れて實力の半分も出せていない。

だが、と。右拳に伝わる勝利への手応えに、悲しみは呆気なく霧散する。ここに来た以上、不調も實力。全てを戴き、ベルトを巻く夢に1秒でも早く辿り着けるなら文句などあるはずもなかった。

『だ、ダウン!?ダウンだ！顔面に大砲を貰った王者、呆気なくリングに倒れ伏したー!!!』

地原のシナリオが崩されていく。

速水の過ごした8連敗を足元に見た報いを、のっけから受けさせた。

「き、貴様ら撮るな！剣哉の醜態を撮ってどうする！」

会場中から響き渡る万雷の拍手喝采が、速水の鮮やかな快進撃に注がれるものと理解した会長は怒り狂う。

選手を心配するよりも俳優としての名を気にする姿に、コーナーへ行くように指示されて来た速水が嗤いかけた。

「アンタんとこの記者がカメラ構えないからバレバレよ。舐めた指示出しやがって」

「ぐっ——このっ」

吠える地原を意識の外に追い出して、速水は立ち上がる俳優を完全に見下した。

（こちとらなあ、人生最後の試合のつもりで来てんだぜ。なのに最初にやる事がクレームだと？最悪の王者だな！）

（社長、貴方の言う通り抑えた過程でこのザマ。

我ながら最悪の言い訳だけど、貴方の指示のせいだ。本気で負けそうで焦ってますよ……）

両者が持つ怒りは同じ人間に向けたものだが、清水と下水ほどの質の違いがある。この差がある限り、勝敗の行方は関係者なら簡単に知っていた。

（先制を譲った代償が、ここまで重いなんて……！）

カウンントを越えてリングに戻ってきた剣哉は、この試合が地原のシナリオ通りにならないことは理解していた。インファイトでは相応の傷を負うし、ショットガンの出し合いが勝負を左右するという気構えでいた。

（手を止めて考え事とは舐められたもんだぜ。

接近戦だつて出来るのを教えてやるよ！）

（や、ヤバいつ）

必殺技の応酬なんてレベルの話では済まない。ただ純粹に、ボクサーとしての練度で負けているのだ。

油断した隙を見抜かれて、得意の接近戦で打ち負ける剣哉。大波乱

の現実に剣哉のフアンは悲鳴と罵声を、剣哉のフアンに反感する観客たちは速水の攻勢に盛り上がっていく。

幕之内たちもまた、予想外の開幕に驚きを隠せなかった。

「速水さん、どんどん近距離を詰めていきますね」

「そりや今が攻め時ですから！速水さんなら直ぐに離脱出来るし、反撃来るまでは徹底的に追い込むでしょうね。」

これはレフェリーが止めるかも！」

板垣は興奮して期待に胸を膨らませるが、幕之内は嫌な予感を振り払えずにいた。

「剣哉さんの試合を幾つか観たけど、もつと動きにキレがあった。そこが気がかりなんだ」

「剣哉くんのように、大手スポンサーがつくボクサーは試合の段取りを指示されると聞いたことがある」

「それ、今は手を抜いているってことですか？」

「悪く言うけどね。でも、僕にはそうにしか見えない。剣哉くんは手数が多いボクサーだ。見応えのあるボクシングでフアンを虜にしていたよ」

「じゃあ今の速水さん、怒ってる…？」

「だから手を抜く間に倒そうってことですね。作戦は大成功だ！」

小橋が確信をもって頷くほど、いまの剣哉の態度には問題しかない。

「そりや、怒りますなあ」

「そーですよねー？」

板垣が頷き返したのは、隣に座る老人だった。親そうにするものだから幕之内と小橋も視線を向ける。そこには、清水寺の懸造かけつくりを見上げるような貫禄のある老体が、板垣に話を振っていた。

「皆さんは速水くんの応援を？」

「そーなんです！僕たち、皆んな速水さんと面識があつて、こちらのお二人なんて試合したことも！」

「ほお！それはそれは。私は剣哉くんの応援で来ております」

「へえ、珍しいですね！彼の応援は女性しかいないイメージでした

よ」

「あははは。実は私も彼とは面識がありましたね」

俳優と面識がある凄い人なんだな、と幕之内が関心していると、老人は両足の間に立てる杖を握りしめながらリングを見上げた。

「彼の持ち味は、なにも活かされておりません…」

「あ、そう、なんですね」

努力が実らない孫に掛けるような視線を向けて、次に道を踏み外した息子に向ける怒りの眼差しをセコンドへと突き刺した。

迫力に3人共が気圧されるなか、第1ラウンド終了のゴングが鳴り響く。

『ここで第1ラウンド終了です！圧倒的な力を見せてつけて、王者交代の予感が会場中に伝わりました！』

リング上、ロープ際で必死に耐え抜いた剣哉が宛名のない視線をマットに落としている。ファンらが絶句するほどの姿だ、こんなピンチは見たことがないのだろう。

速水はこの雰囲気を作る本人に背を向けながら、

「ここはリングだ。漢と漢の真剣勝負が約束された密室だ。それを破るのはボクサー自身さ」

「———っ」

プロボクサーの姿を後輩に伝えた。

お前はそのまま良いのか、と。相手を舐めて、ファンを意気消沈させて、このまま外聞のためだけと言い訳をする。そんなプロボクサーならば、いまの速水を前にして2ラウンドは保たない。

「次のラウンドでベルトは戴く」

当たり前前の現実を見せつけて、堂々と伊達の待つコーナーへと戻っていくのだった。



「どうですっ。」

「どうです、じゃない！」

どうして負け越してるボクサー相手に倒されてる。わざとダウンしたんじゃないだろうな？」

地原は初ダウンから帰ってきた剣哉に混乱の種を投げつける。他責の極みでしか無い悪手に剣哉は苛立ち、地原を諫めようとするチーフセコンドたちを両腕で制する。

「自分で出した指示のアテが外れたんです。次の指示をください」

「次だと…」

「4ラウンドK.Oのシナリオを変えようって話！このまま4ラウンドまで手を抜けど？負けますよ」

自分を苦しめる世間体という名の重りを指差して、異常な現実だと抗議に目を細めた。

「ぐっ——」。か、簡単に変えられん。もうマスコミとの打ち合わせもしてるんだぞ」

「それ、僕は参加してませんけどね」

「兎に角、あんなものは記事に出来ない。絵面は最悪だ。打ち合いが無理なら…」

「最初からピンチのようだけど、地原くん」

感情で剣哉の見上げる天蓋を埋めたくさんとする地原は、その呼びかけに大樹のミキにでも絡まれたような焦りに狼狽えた。

「か、監督——いや、これはな……」

「しゃーしいわ、このボンクラ」

年季の籠った叱責が飛び、ロープを越えて老人の杖が地原の頭上に振り下ろされる。その行動は剣哉にとって鼓舞のように思えた。

「っ、杖で殴った……!?!」

「元気なお爺さんだなあ」

「板垣くん呑気だね…」

慌てて静止に入る係員に抗いながら、老人は地原に不合格と言いつつ。

「速水くんとセコンドの熱量を見る。勝機を引き込む温度だ、役者が

原作を越える理解度だ。

それに比べて……こっちは寒くてしゃーないわ」

「——う……」

「ここは撮影現場じゃない。」

蛟 剣哉の顔を見せる相手は、ただひとり」

老人はそう言うのと、剣哉を指差して笑った。

「オーデイションはまだ終わってない。」

さあ、主演をもぎ取ってみせなさい！」

「——必ず、悪の勝利をお見せします」

係員に持ち上げられながら降りる老人を見送る剣哉は、目の前に立ち尽くす地原に一礼をする。そして、翌朝の陽の出を見たような気分で第2ラウンドに臨んでいった。

「禍根はその場で解決。これ長生きの鉄則ね」

「は、はい………ためになります」

「お、お爺さん、お名前はもしかして……」

「あははは。名を地原……と申す者です」

板垣の問いに答えた老人、地原に笑いながら、板垣だけが一連の行動に合点がいった。セコンドの名前も地原であり、地原プロダクションという大手芸能事務所の二代目社長だ。

「お、お父様でいらつしやいましたか」

「人を見て態度を変えるのは感心せんなあ！」

ニカニカッと笑う老人、地原プロダクション初代社長は板垣の背中を叩き、ようやく試合が始まったことに喜んだ。

ロード・オブ・スター

後楽園ホールの雰囲気は1ラウンド終了直後ですでに、速水のタイトル奪取への期待感で包まれていた。

「あまり褒めたやり方じゃねえが、選手が満足そうだし俺からは注意しねーぜ？」

「ありがとうございます」

それは、2つの意味の感謝だった。

1つ、速水が敵に送った塩を良しとしてくれたこと。

もう1つは、敵の本調子でさえ速水 龍一が負けることはない、と信じて笑ってくれたことだ。

「速水 龍一の越える最後の壁は、人生で最も高くなきゃね」

伊達のエールに見送られて、速水は第2ラウンドの幕を潜り抜けた。

いつものようにオーソドックスで構え、ステップを駆使してミドルレンジでの勝負を仕掛けようとした直後である。あるはずの情景が反転した、ように感じるほど速水への期待感を速水自身が見失っていた。

(不思議な体験をしている……！)

速水が踏み出した先はリング中央だ。

何度もDVDで観て、何度となく伊達や板垣を相手にシミュレーションを積んできた相手へ向かったはずだ。

第1ラウンド、想定よりも下回る蛟 剣哉はそれでも過去の範疇から見る影のある弱体化をしていた。だが、1分前の彼はもう何処にもいない。

(剣哉くん以外に意識できない——)

ここは深い渓谷の底ように暗く、朝日を見下ろすほど高い山頂のように見晴らしが良いながらも、1つの過ちで死に至る息苦しさを兼ねている。

まるで、いや…正しく密室の世界。

自分でリング上を密室と言っておきながら、いざ雰囲気を作られると熱い生睡で寒気を誤魔化すくらいに、剣哉が魅せる瞳に圧倒された。

速水の動きが停止したのは第2ラウンド2秒間のこと。伊達や幕之内たちが異変に気づいたとき、異変の正体を知っている剣哉はプロの拳を握り、そして開幕、大胆な右ストレートで速水の顔面を攫っていく。

(う——あ——っ！)

咄嗟に取ったボックスステップに救われた。顔面すれすれを過ぎていく突風を視認して、その正体に困惑した。

(いま、俺は何を突きつけられた!?)

ナイフか！矢か？それとも、まさか拳か：!?)

冗談ではなく、本当に鋭利なモノに見えたのだ。

剣哉の作る拳が、打つ以外の手段を錯覚させる。未体験の状況に距離を置いた速水が次に見たものは、新しい雰囲気に取り替わった剣哉の顔だった。

「これが憧れを追う拳です」

九日間も地上を襲う雨雲を切り裂くような、晴れた眼差しを向けながら笑っている。

(強さ自体は元に戻っただけ)

中身だ、気持ちを入れ替えやがった)

とんでもない、途轍もない、途方もない道に踏み込んでしまったと知る。

「あれ、剣哉くんよね……………」

「なんか、雰囲気が違うよね」

「ひっ…怖い…！けど素敵」

身を押し潰す圧迫感に付き纏われながらも、速水は迷いなく前進を選択する。雰囲気で気圧されたのなら、心意気で負けるわけにはいかないのだ。

ミドルレンジに入る直前、剣哉の両腕が壁を築いた。速水を圧したボクサーの行動とは思えないものの、罨であろうとも速水が迷うこと

はない。

(どんな壁を築いたってさ)

罫を洗い出し、全てを凌駕する必殺。

劍哉の誘いに応えて、速水の拳はミドルレンジで最強の連撃を打ち出した。

(俺のショットガンを防ぐのは不可能だ)

発射コンマ数秒、劍哉のガードを押し退けんと無数の拳が壁に届き、そして汗水のように地面に落ちていく。届かない拳があとを託し、無数の拳が劍哉を守る壁をすり抜けて着弾を果たした。

余るほどの手数はショットガンを知る劍哉ですら、全てを見切るのには不可能だと再認識させるほどだ。ゆえに劍哉が狙うのは、その打ち終わりである。

(ここ、だね——！)

ショットガンの切れ目、弾丸の補充する隙間。この技の弱点と言える僅かな隙間に目掛けて、劍哉の左ジャブが打ち込まれた。

(それなら知ってんだよ！)

全てを見切っていたのは速水だった。

左ジャブをダッキングで躲しながら、右フックで鮮やかな反撃をお見舞いする。

『あぁつと速水カウンターを読んでいた！』

華麗な切り返してチャンピオンにカウンターを返品!!? これには堪らず後ろに吹き飛んでいく!!?』

速水のショットガンに対して、どう対策を取ってくるのか。練習の間、伊達や板垣と思考を重ねた結果がショットガンの打ち終わりを狙うことだった。板垣ほどのセンスでもショットガンの打ち終わりを狙うのは苦勞した。これをショットガン使いなら、と考えたとき。劍哉なら可能だと速水は確信していた。

(さっきの演技? だかには驚いたが、それで俺の手を止めたつもりじゃないだろう)

それも見事なまでに打ち破った。

気色の悪いものを垣間見たいま、速水は少し強引にでも試合を終わ

らせにいく必要性を感じている。故に、危険を承知でミドルレンジから更なる追撃へと転じようとした。

(なら、これはどうですか)

ロープに背を預けながら強引に体勢を整えた剣哉が、迫る速水に向けて拳を構える。まるで速水 龍一を身体に宿すようにして、ショットガンの姿勢をそのままに前へと踏み込んだ。

「来たー！」

「王者のショットガン……！」

それはDVDで何度も確認した剣哉の癖。

速水のモーシオンを参考にした、剣哉流のショットガンの前触れだ。

観客席で見ていた板垣が直ぐに分かったのだ、速水はもつと早くに分かっている。

何度も立ち向かい、最後の最後にはカウンター成功率90%を越えたショットガン破りの左拳。このショットガンに左拳を合わせて、ど真ん中を突き破れば速水の勝利は目前だ。

(まただ……これは、なにかまずい！)

見慣れた、突破可能な壁を前にして。速水の左拳は突き出されることなく、逆に壁をもう1つの練習の成果であるシヨルダーブロックに切り替えてしまった。

『速水思わずガード!!?自分の必殺技には手出し出来ないか?それ程の完成度ということなのか!?』

身を滅ぼせと振じ込まれる無数の一撃。

勝負の世界で培われるものではなく、勧善懲悪を生業にする者の重みを速水は一瞬の間に味わうこととなった。

(ガードは正解だった。左で破ろうとしたら、怖気のせいで負けていた)

凌いだ瞬間にバックステップでミドルから脱出する。

身に覚えのない……受けようのない感情を浴びた身体は、少なくともダメージに筋肉繊維が千切れそうになった。

「身体を縦にして被弾面積を抑えて、しかもシヨルダーで顔へのダ

メージを更に減らす！速水さんだからこそ出来るガードだ」

「よっし！速水さんのショットガン対策、あれ手伝ったの僕なんですよ！………って、なんでガードを？」

板垣の疑問に、幕之内は嫌な予感をいよいよ確信するしかなくなってくる。

(その目、その高揚感……)

ガードする拳に違和感を覚える。彼の拳はここまで重いだろうか。いいや、あり得ない。火事場の馬鹿力だとしても、ここまで心に効くものではないはずなのだ。

然し、心当たりがある。記憶の奥底、近くて遠い場所にある、苦い伝説の始まりが。

「あれは……そうかよ！

あの俳優、とんでもない攻撃を仕掛けてきやがった。分かるか速水。カウンターを躊躇した、その悪辣な雰囲気を」

伊達が思わずリングを叩くほどのもの。伊達も知っている雰囲気、速水は少しだけ先に解を出していた。

——幕之内だ)

新人王準決勝、速水 龍一は幕之内 一步に敗れた。

その試合の最後に受けた顎へのアッパーが尾を引き、8連敗した。

“——また、震えが止まらない”

本人も幕之内を責める気なんてことさら無い。あの試合結果には満足しているし、人生で自分を強くしてくれたと感謝すらしている。

“……また、朝になってる”

それでも、不眠の夜が続き、敗北に怯える日々が幕之内の姿を脚色していく。泥沼と化した8連敗が過去の分岐点、幕之内との試合に悪魔の悪戯を仕掛けてしまった。

(新人王のときの幕之内に、見えちまつてる……！)

それが、速水が怖気で感じ取っていたものの正体。

どうやって身に付けたのか、この男。速水が毎晩眠れず、ダウンに怯えた日々を送る根幹に在る原因である、幕之内 一步の氣勢を纏っている。

顎に蘇る一撃、幻覚だ。

側頭部を揺さぶる一撃、あり得ない。

蛟 劍哉に幕之内ほどの馬力はない。ない筈なのに、速水の身体は否応にも記憶を蘇せて、再び過去に捉えようとしてくる。

無為に潰してしまった速水たちの手が、速水 龍一の足元に縋り付いてくる。そこから逃げようと、後ろに退がったとき。それは現実の速水がたじろいだ証拠でもあった。

(あ、あ——)

この隙を見逃すほど、劍哉の想いは薄情ではない。

「まだ、見てないんだよね」

「……………」

いま、夢を語ろう。

皆んなが愛して、俳優と讃える男の夢を。

「龍一さんの泣きっ面」

もし嫌だと言うのなら諦めてほしい。

ひと時の夢を追った日々は悪酔いしていただけ。

「ファンとして、見たいじゃないか」

そんな想いから、ミドルレンジに踏み込んだ積年の拳を込めて、左拳を握った。理由はただ一つ。

(は、離れるこの偽者が……!!!)

速水 龍一が相手を突き放すとき、幕之内にそうしたように、幕之内に通じたショットガンを繰り出す確信があったからだ。

「待て！無闇に手を出すな、速水——」

伊達の呼びかけに応じる余裕を速水は失っていた。

俳優が本気で演じる速水の恐怖。防衛本能を煽る殺意に、速水は咄嗟にショットガンを放り込んでいたのだ。

「ブツ!?アあ…!?!」

首を刀で斬ったら噴き出す血のように、速水の顔面を殴打する劍哉の左拳が汗涙を宙空へと舞い上げた。

「ショットガン破りの……左ジャブ!?!」

劍哉のグローブを慌てて凝視した伊達は、血痕など一滴もないこと

を知る。同時に分かったのは、速水の身体を打つパンチが速水の生命を押し潰さんとすること。

立て続けに、持ち堪えた速水の身体へと放たれる、王者渾身のショットガン。倒れ伏すまでの1秒間、宙空で捕まえたが如く好き放題に左右を叩き込んだ弾数を見て、幕之内らは声がないほどに顔を青ざめていた。

『や、破ったアアアアアア!!?』

俳優の左拳が元祖ショットガンを真つ向から打ち破る!!?場内騒然、そして剣哉ファン大興奮!

これには挑戦者たまらずダウンだアアア!!?』

見届ける憧れの存在を灰色の瞳に焼き付けて、剣哉は左拳を掲げながらコーナーに戻っていく。

(これが僕の魔王像。速水 龍一の財宝を戴く姿さ)

その拳には、確かに欲していた表情を掴んでいた。

自分の俳優人生で最も重要な、活きた敗北を。

「くそつ。速水 龍一に対しての理解度が高い…!!?」

速水の不調を誰よりも理解しているんだ、剣哉は

伊達はあまりの悔しさに口内の肉を噛んで、血の味で冷静さを取り繕う。フィジカルだけならば速水が上をいつていた。だが相手は幕之内のように一発逆転の手を練り、本番で一気に投入するほど速水に熱心だったのだ。

自分も経験がある。速水も同じだ。本当なら無理やり起き上がらせて、屈辱を拳で振り払ってほしい。だが倒れ方がまずい、直でリングにいった。意識はないに等しいだろう。

直ぐに助けなければ、速水に謝ることも出来なくなる。

伊達は自分の負けだと宣言するためにタオルを首から取る。迷いなくタオルを投げようとした腕を掴んだのは、

「ま、だ——だ——し。」

ま、だ——だ——

速水がいつの日か、今井に突き刺した眼差しであった。

「速水、お前……くそ、くそつ……!」

「そうだ、立ってこい！その目してるうちは戦える！だから戻ってこい！！」

タオルを握る拳ごとリングに叩きつけて、速水の眼差しから受け取る言葉を伊達は理解してしまった。

まだ戦える、まだやらせてくれ、お願いだから。自分が同じ立場ならそう言う、なんなら恨み辛みも吐き出す。速水はただ純粹に、ボクサーとしての悔いを残したく無いと訴えてきた。

音羽から託されたものを、無碍にしようとしている。

それでも伊達は、速水の眼差しから背くことはできなかつた。

『速水立ちました！あの倒れ方から奇跡の帰還、ここで第2ラウンド終了!!?』

同じ必殺技でも使い手でこうも差が開くのか!!?』

次のラウンド、挑戦者に逆転の目はあるのか!!?』

過去から逃げるように、未来を探し求めるように、速水の意識はコーナーから飛び出してきた伊達へと向かっていった。

速水に残された時間は、残り3分もない。

昇龍伝説／失墜伝説

2年前の話だ。

ジムを設立して漸く運営が軌道に乗ってきた頃、面倒な事務仕事を終えた深夜の帰り道で、あり得ないものを見つけた。メキシコから帰ってこれずにいる自分がいたんだ。

“——あいつ、速水か”

少し様子を見てみると、視線を上げたかと思えばゴミ箱を見やがる。何をするかは察しがついたから、近づいていったら案の定、手元のグローブを放り投げた。今にも泣き崩れそうな目で投げるもんだから、迷わず手に取ってやったよ。

「速水、すっかりしろ！よく戻ってきた！」

あの時、下を向くことしか出来なかったお前はいま、2年前よりも深刻なダメージに苦しみながらも上を向いている。

酸素を求めて、まだボクシングをしたいと懸命に自分を探している。

「まくのうちほどじゃなかった…」

「そうだ、相手は幕之内じゃない。幕之内を利用してお前を墮とそうとしている化け物だ。いいか、よく聞け？」

「だてさん」

そんなお前を、俺は止められない。

ここで止めたら、速水はあの日に戻っちまう。だから生きてリングを降りるための知恵を授けようとした俺の言葉を止めて、

「どうして、勝てたんですか」

速水は羨むように、恨むように、何よりも勝つために、幕之内になぜ勝ったのかと言う。

「幕之内に負けを教えてやりたかった。王者の拳を見せつけたかった。理由はそんなモンさ」

速水に負けず劣らずの闘争心を剥き出しにして、日本タイトルを背

負ったボクサー伊達 英二は答えた。

「俺と戦った幕之内と同じ、負け知らずのお坊ちやま。剣哉のシヨツトガン食らってなぜ立てたか分かるか、9敗分の積み重ねがあるからだ。負けは弱さじゃねえだろ？」

「……は。シンプルで良い、ですね」

速水は笑った。

目に輝きを取り戻して、立ち上がった。

伊達 英二は最後のインターバルを見事にやり遂げた。あと残された仕事は、速水を信じて、首元に巻かれた責任を自分で取ることのみだ。



「負けるよりは良いんだ。好きにするといい」

コーナーに戻ってきた剣哉に、地原は目を伏せながら最後の指示を出した。あと何ラウンド続こうと、剣哉の自主性に全てを委ねるということだ。

「——僕は良くないですね」

「……？」

腹が立ってしょうがない。

反省したようで何も分かっていないのだ。地原の方針は、きつとボクシングジムを折り畳む方向に曲がっていくだろう。それを防ぐには……地原にボクシングを好きになってもらうしかない。

「見ていてください、僕のボクシングを。」

僕の演技よりも凄いつて知ってください」

例えば、タオルを握る事を覚えてもらうことから。

地原は、その首にタオルも掛けずに入場する大馬鹿なのだ。

「初代社長の背中以外で釘付けにしてあげます」

「…………お前」

何度言ってもチーフセコンドに任せっきりの無能を立ち直らせるため、剣哉は己のボクシングを見せつけんと立ち上がった。



第3ラウンドの鐘を聞きながら、速水の意識はこれまでの道を振り返っていた。アルバムの中ほどを気まぐれに開くような、なんて事のない時間が訪れた。

インターハイ3連覇。

——大切な思い出だ。

インファイター殺し。

——大切な二つ名だ。

ショットガン。

——大切な俺の拳だ。

何百通ものファンレター。

——手元にはもうないけど、嬉しかった。

捨てて後悔したかって？

後悔しているに決まってる。どんな物も、俺の大切な生き甲斐だった。トロフィーも、雑誌も、ビデオデッキも、1通の手紙だろうと、あの日に戻れるのなら拾いたいと強く願ったよ。

けど、もう遅かった。自分に余裕が出来て、取り戻そうとしたときには跡形もなく片付けられていた。

作ってくれた人に謝りたい。

渡してくれた人に謝りたい。

買ってくれた親に謝りたい。

もう、相手の顔を見て謝ることは出来ない。

だから、俺はベルトを獲って感謝を伝える。

自分の為には勿論、俺を拾ってくれた伊達さんにベルトを届けて、皆んなにありがとうを伝えたい。

「速水 龍一の伝説は感謝を伝えるために綴るんだ」

一年半の休息を振り出しに戻す、剣哉のショットガンのダメージは速水の限界の直ぐそこまで減り込んでいる。

感謝しかない。たつぷりと休んだおかげで、相手の必殺技から生還できたのだから。

自分の生命を懸けた、人生大一番の勝負に感謝を。

「行け、速水ー!!!」

決意を思い出して、長い無意識からリングに戻ってきた。

『やはりチャンピオン駆けていく!!?』

動きの鈍い挑戦者に引導を渡すつもりだアアア!!?』

眼前から迫り来る、黄色い声援に包まれながら勝利に手を伸ばすボクサーを見て、その見事な気迫に思わず笑いが込み上げてきた。

『王者無情で油断のない右ストレートで挑戦者をコーナーに押し戻した!』

挑戦者いきなり絶体絶命!やはり動く余裕がないのか?さっきのはゴングに救われただけなのか!』

人望があつて相手の弱点を突く観察眼を持ちながらショットガンを有してショットガンを破る拳も手に入れた。

これだけ強い王者だというのに、負けに手が届く位置まで後退している。ここまで押し込んだのは、俺だけ。

なら、俺は無傷で還って安心させなくっちゃな。

『これは…ショットガンでドドメにいった!』

右ストレートから侵攻を開始した剣哉の選択はシンプルだ。速水龍一の代名詞であるショットガンで倒す。

それにどんな感情を込めているのか、速水には分からない。目の前で向けられる銃口を見つめながら、コーナーを背負った速水はこの

時、感謝の念を込めて左拳を握りしめた。

「薄い弾幕だぜ」

「なっ——」

歩くだけで内側のものが狂い出しそんな人間に、自ら身体を差し出してきた相手に感謝するのは当然のこと。

しかも、ショットガンという格好の餌をぶら下げて。

後戻りの出来ないいま、速水が多少であり致命傷である被弾を恐れることはない。故に、この拳は通じるのだ。

『チャンピオンのショットガンが破れたッ!?!?』

なんと速水もショットガン破りを実行!!?』

これで戦況は速水に……い、いやこれは』

打ち破った弾幕の向こうで、王者は顔を歪めながら立っている。

(僕は……ショットガンを破るためにショットガンを身に付けたんだ……。これしきのこと、想定内さ!)

剣哉の並ならぬ演技への探究心は、速水の地の底に這いつくばる苦痛から生まれたもの。

(とでも考えてそうなツラだ、気に食わねえ。

幕之内、俺はなあ、お前にリベンジするのが最終目標だったんだぜ?)

痛みで取りこぼしそうな意識を拳に宿して、呑気に寝始めた魂を無理やり叩き起こす。

両者の闘志が燃え尽きるまで、無限に需要と供給が回り続ける。

(お前が幕之内の代わりになるってんなら、ベルトも獲れて一石二鳥だ。最高じゃねえか……!)

コーナーで仕留めに来る剣哉へと、1つ前に出て右拳を握る。そして、ミドルレンジに入った瞬間、右と右が交差した。

両者の拳は頬を掠め取り、剣哉が空かさず肩で押し込んでいく。そして、腹への一撃を見舞う。

「ぐっ……!」

「はっ……!」

これも同時だった。

鈍い音を上げて着弾したボディ打ち。この試合では初めて狙ったにも関わらず、すでに全身へのダメージが蓄積している両者はパワーに欠けるボディ打ちすらも効いていた。

(緩いぜ、スター！)

それでも、速水の手数が僅かばかりに上をいく。幕之内との打撃力で比べれば、剣哉のものなど3階級下のパンチに等しい。

元より、インファイターは速水の得意とする相手。ミドルレンジより内側に入ることは、全盛期の速水の二つ名を意識しなければ負けることになる。

(なら、これだ――)

身体を密着させて、ボディ打ちを喰らいながら剣哉は速水の真下に拳を準備した。狙い澄ますは顎、当てれば落ちる速水のブレーカーへ目掛けて、早業の如く拳を放つ。

(簡単にやるかよ！)

コーナーからロープに身を寄せて、アッパーに対してフックのカウンターで応対した。

『挑戦者の見事なカウンター炸裂！王者の顔がロープに押しつけられる！顎は簡単に打たせない!!?』

(これでも見切るのか!?)

(狙いがバレバレだ)

攻撃が止んだところに踏み込んで、速水のショットガンが放たれる。モーシヨンを見ていた剣哉は即座に左拳を構え、そして放とうとした瞬間に身体を殴打する痛みで後退させられた。

『ショットガン破りが間に合わない！』

僅か30秒で完全に流れを取り戻した挑戦者！』

流れだ、勝利へと向かう勢いを速水が取り戻した。

速水は生命を氾濫させて戦っているのだ。このラウンド、死力を振り絞る速水を越えるのは並大抵の努力では不可能と剣哉は理解する。

『速水行く！速水攻める！速水容赦しない！』

1つ1つ連打を打ち込んでダメージを積み重ねる！』

頭を守れば腹に、腹を守れば側頭部を殴打。

劍哉とて上下の打ち分けに何度も対処し、カウンターを当てて戦況をひっくり返してきた。それでも手を出すのを躊躇するのは、同時に飛び込んで来る拳に耐えられるのか微かな不安があるからだ。

(ああ、情け無い。悪が守りに徹するなんて、負けてるも同然だ…そんなのは劍哉らしく、ないだろ！)

速水の右ストレートを顔面で受けながら、劍哉の恐怖心の天蓋も吹き飛んだ。相打ちで倒れる相手なら、痛みを恐れずに狙うべきだ。自称魔王を名乗るならば尚更のこと！

速水の返す左ショットガンに強引に突っ込む。被弾、一撃や二撃じゃない。これは最早、ショットガン破りなんて高貴な技じゃない。ただの特攻攻撃なのだから。

劍哉を押し飛ばさんとする弾丸の雨あられを受け止めて、ついに劍哉の左ジャブが雲を割くように打ち出された。

速水に避けるほどの余裕は、ない。

『ああー！速水の顔に左ジャブがヒット！』

相打ち覚悟を決めたパンチに倒れるか!?!』

顔面ど真ん中、劍哉の想いが水の密度のように込められた拳を受け止めて、速水の瞳はなおも健在だった。

(た、耐えた…!?!)

『た、耐えている！先ほどの脆さが嘘のようだ、ここで調子を取り戻したか!?!』

脆いという前提がある中で、カウンターを耐えた速水に劍哉は目を見開いた。一方で伊達は内心、心臓が破裂しそうなほどに緊張している。

「ぎりぎりだ…。幕之内への対抗心、そしてベルトへの執着心でダメージを誤魔化しているにすぎない。

顔、とくに顎へのクリーンヒットが命取りなのは最初から変わらねえ。さっき耐えられたのが奇跡なんだ」

本当はタオルを手に握り締めておきたい気持ちを抑えて、少しでも速水の不安を煽らないように努める。

決着は直ぐそこだ。だから、速水が先に当ててくれと願う。伊達の

祈りが通じるかは、この一瞬でわかる。

速水が構え、モーシヨンを見た剣哉も同じ体勢を整える。

「勝負どころだ、気迫で負けるなよ速水！」

込める弾丸の数、同じ。

ショットガンの威力、同じ。

射撃精度、速水が上をいく。

（トドメだ、ここで終わらせる……！）

（負けるかよ、俺の必殺技で……！）

この場でショットガン破りを選べば、きつと有利に働いてくれるだろう。それを分かったうえで、何方も知りたかったのだ。

どちらのショットガンが強いのかを。

『ショットガンの打ち比べ!!?』

勝つのは、果たしてどちらのショットガンだ!!?』

己の全てを懸けて、前へと飛び出していく。

速水の血で錆びた銃口から飛び出す弾丸。

刹那の攻防で、無数の弾丸が宙空で相殺し合う。そして、数える程度の弾丸が弾幕を抜けて、相手の身体に直撃した。

「――っ」

避けながら、打ち続ける。

右を当てて、速水は顎を避ける。

「――」

被弾しながら、打ち続ける。

左で狙い、剣哉は肉を切らせて骨を断ちにいく。

宙空、会場、リング。

どこを見渡しても、2人の打撃で消し飛んだ身体の一部が舞っている。

四肢じゃない、頭部でも胴でもない。

心だ。色は白、霧散していく夢の欠片。

一瞬の最中、伊達が目撃したものは、剣哉の左拳が速水の顎を確かに撃ち抜いた場面だった。

剣哉に多くのダメージを与えていながらも、たったの一発で終える

生命を抱えていては仕方がない。

崩れゆく膝が、速水 龍一が終えることを伝えていた。

『ああ、ああー！ー！ー！』

剣哉だ、王者のショットガンが龍を墮とす！』

「速水いいいいいい！！？！！？」

次はない、と。踏ん張れと聞こえた気がして、速水は霞む意識のなか手を伸ばした。そして、運良くロープを掴んで体重を乗せた。

『ロープにしがみ付いてはいるが、レフェリーが割って入ります！これは……スタンディングカウントだ！』

伊達は躊躇せずにタオルを投げるつもりだったのに、ここに来て再び速水の瞳に止められてしまう。ロープを背負い、ボロボロの身体で反対側にいる伊達を運良く見たことで、速水は最後のリングである事を確信した。

「笑ってやがる……。あれじゃレフェリーも止めないわけだ……。あんなの、痛がるのが出来ないだけなのに」

音羽に預かったボクサーを無事に帰すと宣っておきながら、いざ勝負の別れ目になればこの始末。ボクサーを優先する自分に苛立つほかない。

「——酷いセコンドだ。選手に死ねって言うんだ……俺は、まだ戦えると嘘を吐く最低のセコンドだ。けど……！」

速水、まだ負けてねえぞ。しっかりと最後のリングを踏みしめろ……！」

だが、漢と漢の戦いを遮るにはまだ理由が足りない。

自分の知るボクサー速水 龍一なら、ここから逆転の目を出せる。そうだろうか？と心の中で問いかけて、振り上げた手を下ろした。

「伊達さん、タオルを投げない!？」

「際どい……！僕が倒したときと同じ目で笑っている」

「速水さん危ないですよ！気持ちちは分かるけど、もう身体がボロボロだ！」

「——まだやれる、そう判断したんだ。だから俺は信じて見守る」
観客席で悲鳴を上げる幕之内たちの傍に立ったのは、伊達の判断を

『か、構えた!?速水はまだやる気なのか!』

喋れているのは、身体が速水 龍一を誰よりも尊敬しているからだ。本当は自分を装うことも難しい状況で、リングに復活するために咄嗟の行動を起こせた。

レフェリーの判断は――

「ボックス!!?」

『スタンディングカウントから試合再開!』

誰が予想したか!?なんと速水は、わずか8秒で身体の不調を取り払ったように笑っている!

残り時間は1分ジャスト!ここから巻き返せるか!』
残り時間死刑宣告1分を目にして、歯痒い吐息を漏らす。

簡単な話、このラウンドを凌ぐことも、次のラウンドに持ち越せる気力も一欠片として残ってはいない。なぜなら、速水 龍一はこれから、壊れるほどに愛するボクサー選手生命を、僅か1分で終えてしまうのだ。

(始めて自分の終わりを実感した。

あと60秒なんて明確な数字に出されたら:ね)

酷な話だ。

いまリングを去れば、壊れる手前で人生をやり直すことだってできる。

俳優として活動を開始して、負けても挫けなかったと謳うことでボクシングの素晴らしさを伝え広められるのだ。そうあれる自信があり、なによりも身体が間に合うと訴えている。

安寧な未来は悪くない。むしろ、壊れたまま一生を過ごすなんてどうかしている。

頭部を打たれた時点で取り返しがつかない。吐き気が込み上げ、平衡感覚が揺さぶられる。正常なボクサーではない、試合に臨んで良い体調とは程遠い。

速水は、それを知っていながら。

天井から糸で吊るしたかと思わせるように、ふわりと身体を起こして頬を緩めた。

(絶対に、取りこぼすわけにはいかない)

すっかりと目を覚ました。欠けることを前提とした特攻に価値はない。かつての自分は、相手の悉くを凌駕し、清々しいほどにスター気取りでリングに登っていたじゃないか。あそこに己の不調などない。あつてはならなかった。試合の前も、あとも。

(恐るな、俺は自分を取り戻せ。)

速水 龍一はボクサー界の未来を拓くんだ)

(凄いですよ、速水さん。その顔、初めて見る顔だ)

(俺の負けがそんなに見たいかよ。ああいいぜ、拝ませてやる。ただしなあ——)

コーナーに寄り掛かかる速水へと、剣哉は最後の打ち合いを仕掛けに行く。

(まだ僕の知らない顔を見せてくれますね?)

(お前の魂が耐えたららの話だ!!)

速水に前に出る足は残されていない。それは剣哉も同じで、一直線に寄ってくるだけでフェイントはなかった。

トドメを差しに来た剣哉へと、お礼代わりの右を振り抜いた。

「ぐっ、この!!」

荒々しいガード、苦悶の表情を浮かべる姿は俳優というよりも、ボクサーの姿が似合っている。そんな余分な思考を回しながら、帰ってくる左フックを全身全霊でガードした。

「——あ、あ——」

この攻防、拳に伝わる感覚で両者は理解する。

あと一発、決めた方が勝利を手にする、と。

(それなら——)

(やることは1つだ)

結論、即決。

それぞれが選ぶ最後の攻撃は——

(いくぞー!)

速水は腰を据えて、ミドルレンジの打ち合いに自らの魂を拳に込める。

(やはり！)

ほぼ同時に剣哉は左拳を構えて、ショットガン破りの態勢を取った。

『速水ここでショットガンを選ぶ！』

自分の必殺技と玉砕覚悟かぁー!??!?』

「速水——！」

「速水さん!!!」

お互いの最強の一撃を懸けて、この試合の勝利を掴みに行く。

全力を以って、カウントから立ち上がった速水は動きが鈍い。ショットガンを打つには遅く、当てるには力が足りない。それでもショットガンを見せたのは、ここまですなければ剣哉を呼び込めないと思ったからだ。

そうして、速水のショットガンが霧散する。

夢から覚めた現実のように、まるで過ごしてきた時間が妄想だったと言わんばかりの消失。振り抜いたショットガン破りの左拳が突き抜けて、剣哉は最強の一撃を振り抜いた。

(な、なんで——)

手応えがない。どこを見渡しても、ショットガンを消した痕跡が剣哉の左拳にないのだ。眼前、不可思議な光景に目を向けて気づく。

速水の身体の位置が、目標地点から右にズレている。

(ここ、だー！)

剣哉の懐から、速水的最強の一撃が打ち上がった。

ミドルからクロスレンジにまで踏み込んだ剣哉を迎え撃つ、インファイター殺しの左ショートアッパーが！

「ば、バカな!?」

見守っていた地原が思わず叫ぶほど、紙一重で最高に頭がイカれた攻防。被弾するまで剣哉の勝ちだと誰もが思っていた。

「フェイントでショットガン破りの左ジャブを誘発させやがった。向こうは相打ち覚悟のパンチだ、剣哉め体重を思いつきり乗せやがったな！」

そこにインファイター殺しのショートアッパー……！

振り抜いた拳が、宙空で止まったまま。

速水はゴングの鐘が鳴るのを聞き届けて、まだ現実を信じられずにいた。

「誰……だ。勝ったのは、」

『勝者は速水！速水 龍一!!?』

8連敗の雪辱をバネにして、ついにタイトル獲得!!?』

「や」

解説の興奮の声で、やっと現実を理解した。

やり遂げた、日本の頂点に君臨した嬉しさを噛み締めて。

「あああああああ！やった！獲った！

速水さんが日本一だあああああああ！」

「良かった！良かったよおおおおお！」

「凄いよ！あの王者に勝つなんて！おめでどう！」

「速水いいいい！うおおお！おおお！」

叫ぼうとしたら、観客席からの歓喜の怒号が巻き起こって、速水は思わず呆気に囚われてしまった。

その正体は幕之内たちであるため、速水も思わず笑ってしまった。

「つたく、戦ったお前より喜んでんじやねえか？」

「なにはともあれ、お前が勝者だ。実感なさそうだな」

「あ、あの。はい、ええ、良いと思いますよ」

リングに上がってきた伊達も同じ気持ちのようで、喜びに狂喜乱舞するのを肩代わりしてくれた感謝の目で見ている。

「伊達さん、どうでしたか。俺は……。」

チャンピオンに、なれたのでしょうか」

「速水——」

勝利して、まだ不安な顔を浮かべるのは、腰に足りないものがあるせいだ。それを察知して、伊達は届いたソレを手にすると速水の腰に巻いた。

「これが答えだ。そして」

伊達が指差した方向に振り向く。

すると、幕之内たちが涙を流して、観客たちが惜しみのない拍手を

送っていた。

「負けで終わらないヤツがいるって、証明だ」

「——ありがとうございます」

これが、最後の光景だと理解して、口をついて出たのは感謝の言葉。伊達に、関係者に、そして応援してくれた皆んなに。

「本当に、ありがとうございました！」

拍手喝采のなか、速水 龍一は深々と頭を下げ、長い、長い、本当に長かった愛するプロボクサー生命に終止符を打った。

拍手喝采のなか、剣哉は満足げにリングを降りていった。

そこに居るはずの地原が見当たらず、通路の少し先に目を向けると、監督に説教を受ける地原を見つけた。

だが、もう終わるようだ。

「タオルを投げなかったら、貴様を勘当していた。

……少しはマシな顔になったじゃないか」

「……父さん」

キリの良いところで声をかける。

「……戻りますよ、会長」

「け、剣哉……俺は……」

地原の横顔は、自分のしでかした事の重大さにやっと気づいたと言っていた。そして、もう手遅れなのだと言っている。そんな呆れた二代目にタオルを投げつける。

「次、変な条件付けたら辞めますから。悪役がマスコミの目を気にするなんて、あり得ないでしょう」

「——ああ、ああ！」

このタオルが地原の反省の証拠だ。剣哉はこれ以上に言うことはない。長かった漢たちの緊張の糸が解れていくのを、しっかりと感じ取れたのだから。

ここに速水 龍一の物語の幕は下ろされた。

日本ボクシング界、何度負けても日本タイトルを諦めず、遂には夢を叶えた漢として、永遠に名を残すだろう。

速水 龍一

3ラウンド2分58秒

K.O勝利

日本ジュニア・フェザー級タイトル獲得!!?

そして：

プロ戦績18戦9勝9敗

プロボクサー引退

死神の決断

場所はアメリカ・ネバダ州ラスベガス。

のどかな朝日を浴びながら警察がサイレンを鳴らし、欠伸をするサラリーマンの横を魔都建築に勤しむトラックが往来する。

騒々しさと温か味^み、そして根深い深淵を抱えた世界を拠点にするミゲル・ゼールは、久しぶりの祖^{マイホーム}国で休暇を楽しんでいた。

白いテラス席のテーブルに準備したハーブティーを味わい、取り寄せた幾つものボクシング雑誌を順番に手元で開いては目を通していく。

『星条旗、またしても墜とされる!!?』

日の本のホーク、3階級制覇を達成!!?』

『スーパードルで勢い加速。』

2連続防衛のタカムラ、倒せるのは誰だ!!?』

「タカムラを倒すのは困難だろうね。」

イーグルで無理だった。次に勝ち目があるのはチームか」

紙面の話題は日本の鷹で覆い尽くされている。

この中には名前の出ない自分の選手が埋もれている。なんと歯痒い未来だろう。

『英レイヴン、弟子の健闘讃える。』

『独裁政権はまだ続ける』と意気込み』

『タカムラの強さは異常!!?その規格は宇宙外生命体。』

なぜ強いのか?その秘訣は日本人にあり!!?』

「正確には、“カモガワ”だよ」

もう辿り着いた答えを呟いて、返ってこない質問の代わりに笑った。

ブライアン・ホークを破ったのはタカムラのポテンシャル、そしてカモガワのコーチあつてのもの。師弟揃って星条旗を打ち破ったのだ、これ以上の解などあるはずがない。

そしてミゲルは苦汁を2度ならず、3度飲んでいる。

インドネシアの天才ボクサー、ウォーリー。ブライアン・ホークに匹敵する才能を持ち、練習を積んだミゲルのラスト・サン。3試合で王者に君臨する若きホープを、マクノウチが決死の覚悟で打ち破った。

幕之内 一步に敗れてからというもの、ウォーリーはボクシングへの熱意が増す一方だ。多くのボクサーと出逢いたいという太陽の意向を汲み、ジュニア・フェザー級に戦場を移して10戦目のとき。早くもWBCの冠を戴いた時は感動で目元が潤んでしまった。

戴冠後も忙しなかった。

太陽にひよった同階級別団体の王者に勝手にスパーを申し込んだり、リカルドと試合がしたいとメキシコ行き飛行機を確保したりと。ミゲルですら苦勞している現代機器の取り扱いに慣れつつあるウォーリーは、世界各国の猛者のもとに軽々と飛んでいってしまう。3度目の国外紀行に連れ出されたとき、ファイトマネーの使い方をもう少し制限しようかと迷ったほどだ。

「困ったものだ、マイ・サンは…」
そう溢した声は笑っていた。

結局、旅費を制限せずにいるのはミゲル自身が楽しんでいるからだ。

「ミゲル……！」

「そんなにはしゃいでどうした、ウォーリー」

テラス席の古風な白さを纏ったテーブルに両手を着いて、ぴよんぴよん跳ね回る姿は見ていて寿命が伸びる思いしかない。

「こんな元気にはしゃぐ姿を、老体が間近で感じ取れるのだ。彼のわがままに歯止めをかけるほど、耄碌していない。」

「僕ね、そろそろリカルドを倒せるよ！」

「————— 本当かい？」

だから、休暇をパーテイに変える出来事を楽しめるのだ。

「うん、センドーとリカルドの試合を観て、ずっとイメトレしたの。スタミナがちよつと足りないのと、本当に強いメキシカンとの経験が1試合あれば勝てるよ！」

「本当に強いメキシカン、か」

ウォーリーが本当に強い、と付け足したのは、以前に1度だけメキシコの世界ランカーと試合をしたからだ。

だが、本人が言う通り満足はこれっぽっちもしていない。2ラウンドK.O、1発も被弾なし、試合後には「メキシカンジャブって大したことないね」と肩を落として言う始末だ。

ミゲルは考える。本人がいきなりリカルドへの挑戦を避ける辺り、本当の意味でリカルドが未だに夢幻のような存在だということ。

勝つ見込みが欲しい。まるで、宛でもあると言っているようだ。ここを詳しく聞こうとすると、

「だからね、挑戦状を書いて送ったよー!」

「へ、へえ……………誰にかな?」

老体を溶かすほどに眩しい笑みを浮かべて、その人物の名を口にした。

「ゴンザレス!!」

「は、ははは……………そうか」

最早その名前は答え合わせに等しいほど、ミゲル自身が思い浮かべた唯一の人物だった。

アルフレド・ゴンザレス。リカルドを知り、マクノウチを倒した元世界タイトル保持者。彼ほどの実力者であれば、ウォーリーの要望を満たすどころか、逆に敗走する可能性すらある。

実に危険なフェザー級ランカーだ。

「仕方ない。その時はベルトを返上しようか」

「うん!!」

2人の最終目標はマクノウチへのリベンジ。

だが、それまでに獲っておかなければならないタイトルがある。リカルド・マルチネスのベルトだ。

いや、正確にはマクノウチも狙っているリカルドのベルトを獲り、圧倒的な経験値を積む。次の神話としてマクノウチとカモガワヘリ

ベンジする、その日のために。

アルフレド・ゴンザレスの回答次第で時代は大きく変貌する。

運命の回答が届くまで、最後の休暇をウォーリーと楽しむことにした。



日本で間柴の世界前哨戦が終わりを迎えた頃、遠い異郷の神話創造の国メキシコ、その渦中を担う一人のボクサーのもとに郵便物が届いた。

これこそ紛れもない、国境を越えた神話崩壊の末端。差出人と受取人共に、時代を狂わせる運命の分岐路とは知らず、ブラスはゴンザレスを呼び出した。

「ゴンザレス、さつき挑戦状が届いた」

「なんだ、てつきりリカルドから試合の返事だと思ってたのに」

ゴンザレスは露骨に顔をしかめる。

ゴンザレスたちが渡した挑戦状の回答ではなかったのだから。

「それで、珍しいな。復帰戦は快勝、この前2位に勝って残すは本丸じゃねえのかよ。もう調整試合なんざ要らないって話したじゃねーか」

「……………ジュニア・フェザー級王者からだ」

その言葉を聞いて、ゴンザレスの断る気満々だった萎れ顔に力が籠もる。

「それは、ウォーリーか？」

「そうだ。あのミゲルから直々のオフアードだ。」

…ん？お前、なにか知っているのか!？」

「あく、まあ成り行きでおんぶした」

「おんぶ!?なにをしとんだ…?」

「俺が聞きてえよ?」

2人して首を傾げる。

質問に疑問で返すが、本当に事実なのだから仕方がなかった。

まあいい、と場を仕切り直すブラスは新しい封筒をゴンザレスに手渡す。

「そして、もう一通」

「——これは！」

差出人、リカルド・マルチネス。

名前を見て驚愕し、慌てて封を切る。中には紙が1枚。丁寧に直筆で書かれた言葉は、

“準備が整ったのなら、いつでも”

ここまで散々ゴンザレスの挑戦状を破り捨てた最終目標からの、盛大な歓迎文だった。

「正直、決めあぐねている。このままりカルドへ挑戦するのか、それともウォーリーという異端児を最終調整に選ぶか」

選ぶべき相手は決まっている。

だが、果たして。

俺に勝ち目があるのか。

2試合して、リカルド・マルチネスからポイント1つ取れていない。だからブラスも迷っている。リカルドはいつでも来いと意志を示した。それはゴンザレスが倒すに値する、と判断したからだ。

しかし、勝てるかどうかは別問題。

リカルドへの3度目の挑戦は、ゴンザレスの最後の挑戦だ。次はない、だからこそウォーリーという経験値を積み、更にリカルドに手が届く。

《left》勝敗ウ《/left》リ勝敗

《left》勝敗オ《/left》力勝敗

《left》勝敗1《/left》ル勝敗
《left》勝敗1《/left》ド勝敗
《left》勝敗1《/left》

——ここで決めろ、俺は信じている。

迷いあぐねるゴンザレスの脳裏で、ミキストリが笑った。

相棒の言葉を聞いて、迷いなく手を伸ばす。

「ウォーリーに伝えておいてくれ」

先勝敗
約勝敗
が勝敗
あ勝敗
る勝て

「とね」

「——そーいうこと」

屈託のない意志で答えた声は重なって聞こえた。

リカルドの招待状を手にとって、死神ゴンザレスの運命は残り半年未満で決着することを宣言した。

「良いんだな？」

「リカルドとの試合に負けるかもしれない。

だが、敗残兵を送り込む暇は俺たちに残されちやいねえ」

ここで勝利を果たして新しい運命を繋ぐために。

「それにな、他にも倒したいヤツが出来たんだ」

右拳を握りしめて、人生で最も充実した試合を思い浮かべながら。

「タケシ センドー」

3度目の敗北を喫した、日本のティグレの名前を口にした。

「アイツが俺たちの最終目標になった！」

Next Champion編

メインイベント

WBAフェザー級タイトルマッチ

リカルド・マルチネス

VS

アルフレド・ゴンザレス

2023.6.5(月) 神話創生

行くで幕之内!!?

速水 龍一のタイトルマッチ2ヶ月前、幕之内の自宅の電話が鳴り響いた。

時刻は夕方、母親が珍しく就寝していたため、幕之内は騒音を一刻も早く止めるために迅速に受話器を手に取る。

「はいっ幕之う…」

『メキシコや!!?!!?!!?』

「ちイイツ!」

すると、鼓膜に届く張り手のような声によつて、受話器から顔が弾かれるほどの衝撃に襲われた。耳鳴りを通り越して雷鳴でも通るような雑音に襲われながら、受話器の向こうで興奮する好敵手、千堂武士を宥めると大きく息を吸い込んで。

『ゴンの試合が決もたんや!!?』

スパ―相手にワイらが手伝うたならあかんやろ!!?』

興奮していて大切な事がゴツソリと抜けた内容だが、確実に幕之内が予想できる内容であるのが幸いした。

「あ、相手はまさか……」

試合の舞台はメキシコ。是が非でもゴンザレスのスパ―相手を務めなければならず、千堂がここまで助力に熱を入れたがる対戦相手なんて1人だけだ。

『せや。リカルド・マルチネス!!?』

よーやつとゴンとやる気になったんやと』

怒りと興奮を孕んだ答え合わせに、幕之内の胸の内側も熱くなつていく。

リカルドへの3度目の挑戦は前例がない。かつての伊達のようにリベンジマッチを組めたボクサー^{前例}は6試合あるが、ゴンザレスを除いたボクサーはその試合で引退している。リカルド・マルチネスの強さの異常さが良く分かる内容だ。

3度目の挑戦、その意味はリカルド史上でも異様なものとなっているのは想像に容易い。

『ゴンザレスさん、準備は出来たってことですか』

『それは聞いとらん。けど聞く必要ないで。』

無鉄砲な漢やなくなつたんはワイが知つとる』

つい口から出た不安を千堂は自信満々に弾き飛ばす。千堂とゴンザレスがどんな言葉を交わしてきたのかは知らない。幕之内に分かったことは、ゴンザレスにはリカルドを倒す準備が整つたという、3度目の挑戦者に相応しい……いや、無敗神話を破る厚かましいほどの確証だけだ。

『出発は3ヶ月後。2週間、ゴンと連日スパーや!!?』

ボッコボコに激励してやるで!』

『ゴンザレスさんを倒してどーするんですか…』

電話越しの千堂のやる気が向いては行けない方向に向き始めた。幕之内はストッパー役で連れて行かれることを遠巻きに理解した。

このボクサー、スパーにかこつけてゴンザレスと殴り合いたいだけではなかるうか。そんな疑惑が幕之内のなかに浮かび上がったところで会話は終わるかと思いきや、千堂は最後にこう付け加えた。

『あ、そうそう。役に立つボクサー』なら連れてきてもええらしい。ま、こっちはワイ1人やけどな』

『役に立つ…?』

大雑把な要望をすぐに理解できず口にするも、千堂は『あーんま深く考えんでええ』と水分を飲みながら言う。

『ゴンがな?スパーの足しになる程度のボクサーなら呼べっちゅーねん。ワイと幕之内だけじゃ物足りん吐かすさかい、ゴンに一泡吹かせられそうなヤツおつたら連れてきてええで!』

受話器越しに『旅費は向こう持ちやからな!』と嬉しそうな声でそう言い放ち、調子を取り戻した千堂の声は3ヶ月先に飛んでいった。



千堂の電話を聞き届けた幕之内は直ぐさま家を飛び出した。全力疾走で向かった先は鴨川ジム。

事務所で事務仕事をしていた鴨川を訪ねて、ことの顛末を簡潔に説明し終えたところ。

「しっかりと世界との差を確かめてこい」

「えっ、良いんですか!？」

という清々しいほどの返事を貰った。

話を聞けば、スパーリングパートナーとして幕之内には正式なオファーが届いているそうだ。

「なぜ呼ばれたか分かるか？」

「……それは」

現実を問う鴨川の眼差しに、自身の立ち位置を俯瞰する。

ゴンザレスが幕之内を求めた理由は1つしか思い浮かばない。リカルドの暴力バイオレンスに打ち勝つために、インファイトが世界に届く自分が選ばれた。

これ意外に理由はない。

だから違う、と幕之内は首を横に振った。

この1つだけが理由なら、既に世界の頂点に到達した千堂だけでいい。ゴンザレスに踊らされ、ミキストリだけに届くまくのうちインファイトは必要ない。

自分で出した答えに拳を強く握り、目に見える実力差を受け止めた。

幕之内は主な理由ではない。ここで最も大事なことは、ゴンザレスがリカルドに勝つために必要なことだ。

そして気づく。千堂と幕之内、2人を呼んだ意味を。

「僕はきつと、千堂さんを引き立てる脇役として呼ばれたんだと思います……」

「そうじゃ。ゴンザレスの成長に最も相乗効果が望める貴様と千堂、2人の破壊力を暴力対策とする筈じゃろう」

リカルドの理詰め接近した途端、敵を突き放すように遅い来る暴力の嵐。かつてリカルドの暴力に立ち向かった伊達は骨を砕かれ、凄惨な姿となってリングを降りている。

耐久力がフェザー級でトップクラスの千堂でさえ、僅か2ラウンドでマットに沈められた。

化学を越えた先の暴力をゴンザレスが警戒しているのは当然のこととて、暴力対策に2人が選ばれるのは納得の理由だ。

「悔しいか。ワシは悔しかった。我がボクサーは世界に認められておらん……そう言われとる気がした。」

「じゃが感謝もしておる。久方ぶりの世界戦の前に、世界の頂点とのスパークが味わえる。」

「なんと有り難い申し出じゃ！」

幕之内は副産物という形になる。それを分かっている鴨川表情は静かな怒り、それと強い向上心に満ちていた。

「ゲバラ戦の次……タイトルマッチのことを見据える段階にきておる」

「——えっ？リカルドは1位の選手以外と試合をしないんですね」

「今のWBAフェザー級のランカーはね、リカルドに挑戦したことがあるボクサーが大半なんだ。」

「彼らは強いけどWBA1位は獲れない。彼らより強いボクサーがランカーにいる限り、そっちが1位に上がる」

「リカルドが認めれば新参だろうと1位じゃ。ファンの人気や興行より、実力でWBAフェザー級の1位は決まる。」

その反面、ゴンザレスが勝てばWBAランカーの様相も変わる。やはりタイトル挑戦に近づくじやろう」

腕を組んで幕之内に伝えた言葉は、暗にその実力がリカルドの玉座に迫っていることを褒めている。ゲバラ戦の戦果次第では、タイトルマッチに名乗りを上げる資格があるのだ。

「行ってこい。貴様が倒すべき頂点を見届けろ」

鴨川からの激励を受けて、胸の内から込み上げる武者震いに任せた

返事をしようとした時。

「オレ様がホークに挑んだとき以上の差がある試合だ。」

ゴンザレスの野郎に勝機があるかは微妙だな」

事務所のドアを開けて入ってきた鷹村は、確実に盗み聞きをして得た情報から悪びれることなく結論を出した。

「会うまでは分かりませんよ」

「会って、分かっちゃったらどうする」

意地の悪い返し方だ。敢えて厳しい言葉を投げた鷹村を見つめ返して、幕之内は迷わずに返答する。

「僕に倒されるくらいなら、リングには上がれません。だから、試合中継がここで観られるなら、それが答えです」

揺るがない結論を打ち返す幕之内を見て、鷹村は数秒考え込むと鼻を鳴らした。余計な言葉は要らないと分かった途端、その視線の熱意は向きを変える。

「……つまり、ゴンザレスが勝つかも？」

「可能性は十分にあります」

「……リカルドが負けりゃあ、目標が1つ消えるもんなあ。そうすりゃあ上にだって行きやすいつてもんだよな。」

なっ、ジジイ！」

砕けた表情で爆弾を投下した。

リカルドが負けたあと、幕之内が見る場所は何処になるのか。鷹村の言葉の意図を理解した鴨川が青筋を立てる横で、幕之内はその未来を思い描く。

「……もしも」

もしも……リカルドが王座から転落したら。

そんなIFを語る人はどれだけ居ただろう。

きっと沢山いる。語らずとも、いまの僕のように思ったことはあるはずだ。

「………僕は」

リカルドは負けたら引退する。本人の意思に関係なく、年齢のせいでもリングから去るんだ。そうしたら、伊達さんとの約束を果たせなく

なったフェザー級に居る意味はあるのだろうか。

千堂さんにリマツチは申し渡されている。

それまで僕は待てるだろうか。

ライト級に行くことを待てる……のか？

もしも、本当に起こり得るのなら。

その時は――

「ふんっ」

幕之内の想像を止めたのは、鴨川が鷹村へと振り下ろした杖の打撃音だった。

「いでえ!? 何しやがる!」

「他人の試合を気にするとは偉い立場じゃ。減量が楽じゃからと無駄口を叩くでない! 貴様はあと10キロ落とさなきゃならんだぞ! 分かったら走れ! さっさと行け!」

「だあー!!? 世界チャンプを杖で殴るなあ!」

杖を振り払った鷹村は入り口まで走っていき、ドアを全開に開けて振り向いた。

「一步!」

「は、はい!」

「世界を見てこい。お前の拳が届くかどうかを!」

「――はい!」

世界へ早く来い、と待ち遠しくて浮かれた姿に見えてしまった。願望でしかないのだが、幕之内には確信めいたものを感じている。

幕之内は嬉しい感情をそのまま返事に込めて、メキシコ修行は決定した。

そして、幕之内が退出したのを見届けた鴨川は椅子に深く座り直し、座席を回して外を見つめる。

「もし、小僧が望むならば。老いた誇りよりも優先すべきことがあるなら……」

ここまで、少なくない出来事があった。思うこともあり、そのたびに遠くなる自分の過去を振り返る。

「…止めじゃ。そのとき、もう結論は決まっとる」

拳闘家たる自分に誇れるような最期を。

そのために、不慮による引退などあつてはならない。じきに、種は芽となる。幕之内の成長を、誰よりも確信するからこそ。

「悔いが残る試合など、させてたまるか」

鴨川の頬から小難しい皺しわは消え、純粋な子供のように空を見つめていた。



—3ヶ月後—

幕之内が降り立ったのはメキシコ・シテイ空港。

全ての手続きを終えて待ち合わせ場所に向かうと、聞き慣れた日本人の声が聞こえてきた。

異国でもよく通る大阪弁の声は、言わずもがな千堂だ。

「千堂さーん!!?」

「おっ、時間通りやな幕之内!」

相変わらず牙のような笑みを浮かべる千堂を見て、リカルド戦から立ち直ったことを確認して安堵する。

「時差ボケは無さそうやの。いつアウェイでやるか分からんき、慣れとく意味でも来て正解やで!」

「こればかりは回数重ねないと慣れませんから、とても貴重な体験

で有り難いです」

前回は千堂の試合前日にメキシコへ入国した幕之内。リカルドとの試合をライバルがするとうただけで興奮していたため、時差ボケの影響を押し伏せての観戦だった。無論、帰路は身体も心も疲れ果てていた。あれでは身体を現地時刻に合わせることもままならないのは分かる。身体を慣らすという意味でも、メキシコ滞在時間全てが練習時間となり気がぬけない。

千堂の歓迎を受けてから、幕之内は彼の後ろに立っているボクサーへと向かった。神妙な顔つきで幕之内を観察するボクサーに、両手を出して挨拶をする。

「お久しぶりですゴンザレスさん」

「よく来てくれた。歓迎するぜ」

リカルドへの挑戦権を賭して戦ったボクサーと3度対面して、感謝と歓迎のやり取りを行なった幕之内は気づく。

(な、なんて気迫だ……！僕と戦った……いや、千堂さんと試合したときとは別人だ。

試合に対する意気込みが拳から伝わってくる)

鴨川とのやり取りを否応にも思い出した。

「僕はきつと、千堂さんを引き立てる脇役として呼ばれたんだと思います……」

「ワシは悔しかった。我がボクサーは世界に認められておらん……そう言われとる気がした」

定かではなかった言葉のやり取りが確信に変わった。自分は引き立て役でしかなく、認められたのは相乗効果のみだ、と。

復帰までの3年間。

幕之内にとっては休養期間と課題に向き合う期間だ。2つとも目的は果たすことができた。

身体は現役の頃よりもダメージが抜けている。『デンプシー・ロール破り破り』は及第点を鴨川から貰った。

敗北した幕之内は既に越えている。気後れしてゴンザレスの糧になるために来た訳じゃない。なによりも、不完全な自分を倒しても時

間を無駄に消費するだけだ。

「僕の全力をぶつける準備は万端です。」

そして：リベンジの予約を取りにきました」

そうして捻り出した言葉は、3ヶ月前にライト級に行くことを望んでいた自分とは思えないほど挑発的なものだった。

ゴンザレスの頬が上がる。：いや、捻じ曲がった。

「——くく。良いぜ。」

リカルド倒して、センドーにリベンジしたあとならな」

いま、確実にミキストリが出た。

ゴンザレスが抑え込んだが、幕之内の言葉で闘志に火が付いていた。凶気とのコミュニケーションに自信のない幕之内は冷や汗をかいたが、難は過ぎ去ったようで安堵する。

「んで、そのボウズが『役に立つボクサー』か」

一息のうちにゴンザレスの興味が移った先は、幕之内の後ろに付いてきていたボクサーだ。

「あつどうも板垣です！宜しくお「不合格!!?」ね…」

「どう言うつもりだセンドー!!?」

「っ——」

間近で舞い上がる凶気が板垣の精魂を震え上がらせる。左拳の一撃で意識がリングに散らばるような虚脱感を、ゴンザレスの罵声で打ち込まれた。

(これミキストリの方だ!?)

(うわっここで豹変した!?)

2人がドン引きする横で抗議を受けた千堂は、耳を掻きながら受け流すように答える。

「んなもん一目で分かるかい。その坊はワインジムの新人王を圧倒した天才くんやぞ。実力はあるわい」

「その程度っ——」

青筋を立てて猛抗議を続けようとするミキストリが、立ち眩んだ足取りで後退する。俯いた死神を何事かと3人が様子を伺っていると、ため息を吐きながら顔を上げた。

「悪いな、リングの外で出てくることは少なくて油断した。どうか許してほしい」

顔を上げたらゴンザレスに戻っていた。

板垣は無言だった。事実には挟む言葉はない。

「ただ…期待していいのは事実だ。最初に忠告しておく。着いてこないなら放置する。センドーも、マクノウチも例外はない。

食い潰されねえように死ぬ覚悟しとけ」

ただ、板垣の瞳に宿る色は激情のソレだ。

自分の尊敬するボクサーを倒した漢が目の前にいる。ボクサーとして、拳を交えたくなるのは当然の欲だ。

「精一杯頑張ります」と薄目で挨拶をする板垣。2人の間に飛び散る火花を見て、幕之内は板垣の前に出て宥める。

「んなこと言って、顔腫らしてたら恥ずいで？」

「やってみろやア」

「睨めっこでリカルドに勝たせたらか？」

「……………勝てるのか」

千堂が引き締まる雰囲気と和ませつつ、進まない状況は飽きたとばかりにゴンザレスと共に外へ行く。

時差ボケ以上の心労を心配しながら、幕之内も2人のあとに続いた。

準備万端

メキシコ・シテイ空港からの移動手段は車だと千堂から聞いていた幕之内は、ロータリー前に着いた車とその持ち主を見て驚愕した。

「ゴンザレスさんが運転するんですか!？」

「お前も驚くのかよ……俺をなんだと思ってる」

幕之内の見開かれた目を見て、心外そうにため息を吐くゴンザレス。反応を見るに既に似た言葉を聞いているのだろう。誰の反応かは幕之内でも直ぐに見当がついた。

そんな2人を見てただ1人、快活に笑う男に目を向ける。

「せやろ、言うた通りやったな！」

運転中に死神に代わられてみい？

走る棺桶に乗ってんのと同じやで?」

「んぐぐ……。あとで覚悟しとけよマクノウチ……」

「とばっちりだ……」

幕之内としては綺麗な反論をしてほしかった。

本人に弁解してもらわないと、走る棺桶に心当たりがあることになる。

助けを求めて視線を板垣に向ける。しかし彼の興味は空港の人混みのなかにあるようで、何に惹かれたのか視線を向けても目標は分からなかった。

「どうしたの、板垣くん」

「あつ、いえ何でも……」

素気なく答える板垣。こちらを向いて「先輩は関係ないですよ」と軽口で割ってくれたので、幕之内は板垣の興味は旅先の見慣れない土地に向けるものだと思うことにした。

(今の人、見たことがある。ライト級の世界ランカーだ)

幕之内たちの会話に混ざりながら、人混みのなかに見つけた人物のことを切り出そうか迷う。

(試合かな?　なんか帰るっばいけど……ま、いつか)

だが、それも直ぐに霧散する。

いま重要なことは雑誌で見た人物ではない。戦力外を通告してきたゴンザレスの人物像を理解して、必ず自分の糧に変えてやることだ。

道中の運転は快適なものだった、とは幕之内談。

ゴンザレス曰く、ミキストリの方が運転技術は上だ言う。千堂が「見せてみたい」と言い出したときは全力で止めた。なんせ、安全運転をする保証は出来ないとゴンザレスが言ったからだ。

そうしてメキシコ・シテイ空港から約20分。

大通りから脇道に逸れて直ぐの場所に、二階建てのボクシングジムがある。ジムの正面には10台を止められる駐車場があり、周りは更地となっていてジムが目立つというもの。ジムの周辺で迷ったとしても、ここには多くのアマ・プロボクサーが出入りしているため、大通りの建物で隠れていても跡が見つけやすかった。

「ブラス、最後のヤツらを連れてきた」

「来たか、世界の卵たち」

ゴンザレスによる翻訳を通して、彼のトレーナー兼セコンドを務めるブラスの歓迎に幕之内たちは笑顔で応える。

「おーきにー！また世話んなるわー！」

「どうぞ宜しくお願ひします…！」

握手を交わし終えて、幕之内は青く明るい内装のジムを見渡した。

鴨川ジムのサンドバッグと違うのは、サンドバッグの高さだ。幕之内の身長と同じもの、それより5センチほど高いもの、それより更に5センチ高いもの…といったように、6種類の高さのサンドバッグが

並んでいる。

サンドバッグは並行に並べるものと思っていた幕之内が、物珍しいとばかりに見つめていると。

「相手の身長に合わせて打てるさかい、フォームの矯正にはもってこないなんや」

「あく、確かに！」

「まあここまでしてもワイには勝てんのやけどな！」

ガツハツハと笑い声を上げる千堂。日本語だから周りの人間に意味は通じていないものの、豪快を突き抜ける発言に顔面蒼白になる幕之内。

（千堂さんが気にするようには思えない。多分ゴンザレスさんに教えてもらったんだろうな）

板垣、正解である。

「カバコフは帰ったのか。挨拶する気だったろ」^{スパー}

「急用を作ると言って出ていった」

「……………気分屋だから仕方ねえか」

スペイン語で話す2人を見た千堂が板垣に問う。

「なんて言ってるんや？」

「スペイン語は分かりませんね」

「右に同じく…」

「分からのかい！通訳兼ねて連れてきたんやぞ？」

「そんな無茶な!？」

「理不尽な理由で逆ギレされて板垣が嘆いていると、ゴンザレスがグローブを持って戻ってきた。」

「時間は限られている。」

「意気込み通りの仕事はこなしてくれよ」

「リングを指差して3人を見る。」

「最初に上がるのは誰だ？ということだ。」

「僕から行かせてもらいます」

「肩の力を抜いたらリングに上がれ」

千堂よりも早く名乗りを上げた板垣は、直ぐにバンテージを取り出

して準備を始めた。

ロープとシャドウ、サンドバッグを叩いて身体の調子を確かめたあと、イタガキは「モーマンタイ！」と言ってリングに上がった。

開始から4分間、つまり第2ラウンド中盤に差し掛かる頃だ。ヘツドギアも着けずにリングを動く板垣を見ながら、自分の口角が上がっていくのを感じていた。

(へえ、速さと早さなら宝石もんだ)

このボクサーは理解している。経験値が偏っているせいで身体が付いてきていない、晩成型が故の実力不足だ。それがメキシコ滞在中に開花することはないが、キツカケさえあれば世界に届くだろう。

メキシカンのパンチを紙一重で避けてみせた集中力も併せて、2年後が楽しみなボクサーだ。

「避けた!」

「——アカン」

イタガキはコーナーに近づかない。特に嫌っている場所がそこだっあお陰で、逃げ道はロープ際に限定できた。放ったジャブをウィービングで避けた先で、右のロングボディを打ち込む。

ウィービングの途中で着弾したボディで身体を丸めて、イタガキはリングに転がった。

(…やっど方針が固まったところか)

俺をやすりにして精々利用してみろ)

言葉で教える必要はない。イタガキは相手と自分を見て、解説をつけて咀嚼する人間だから余計な口は挟まない。

「板垣君!」

リングの外ではマクノウチが叫んでいる。

…呑気なヤツかと思ったが、両拳にはしっかりとバンテージが巻かれていた。やる事はやっている、態度は甘い。

「次だ、上がれ」

「……はい!」

イタガキの様子を見に上がってきたマクノウチに言うや、威勢良く

答えてイタガキを担ぎ上げる。

ここからが本番だ。リカルドの暴力に届くとも思えるパワーを寄せ。俺が世界を回って見定めた2人で、暴力を打ち負かしてみせる。



幕之内たちがゴンザレスとのスパ―相手に取り組んでから5日間が経過した。

それぞれの成果を軽く記しておこう。

板垣はウォーミングアップとして扱われ、計10回のスパ―全部が2ラウンド以内でK.Oされた。接近戦を仕掛けることは極力避けて、中間距離でカウンターを狙うスタイルで臨んでもゴンザレスには届かない。

幕之内は殆どが2番目としてリングに上がった。ゴンザレスの要望通り、中間距離以上を封じてのスパ―は計10回、3ラウンド続けてダウン2度のみとなっている。ダウンが奪えていないのは、ゴンザレスの技術が全て1つ上にあるからだ。

千堂は1回を除いて3番目でリングに上がり、頭を突き合わせるようなインファイトでゴンザレスを沈めにいった。だがダウンは奪えず、されどダウンはなし。なによりも驚くべきは、千堂の被弾が少なくなっていることだ。ガードの技術力が向上していることから、リカルド戦の反省を相当繰り返したことが分かった。

8日目となって午前の練習が終わった日の休憩中、千堂が軽い談笑の雰囲気話題を持ち出した。

「んで、勝算はどのくらいあるんや」

その内容は幕之内と板垣の表情を強ばらせるには十分すぎる、タブーだと思っているものだった。

本気で言ったのか、と目をひん剥く2人を気にもせず。

「1割だ」

あつさりど、絶望的な数字を答えてみせた。

(1割って、勝ち目が無いのと同じじゃないですか。

ここまでの人でダメなら、同階級どころか上ですら勝てる人は本当にいないぞ…?)

2階級上であるライト級の世界王者とのスパ―で、一方的にあしらったという話を板垣が聞いたのは昨日のこと。その王者は既に引退しているが、当時はPFP10位に入るほどの実力だった。PFPだけで考えると、いまのライト級王者で勝機のある人物は1人のみだ。

勝算の低さに押し黙ってしまふ2人。

千堂はというと、右手で膝をポンと叩きながら笑った。

「なんや、結構あるやんけ。深刻そうな顔してるさかい、負け戦か思うたわアホ」

「……え」

「1割しかないんですよ!?!」

「不思議やあらへんで。10発中1発当てりやいい。その1発で勝ちをもぎ取るんや。ボクシングはそれが起こるさかいの」

千堂はリカルドとの試合、クリーンヒットは0発だった。

そもそも勝つ可能性を手に入れることすら叶わなかった。その拳は一撃で絶望を振り払えるもの。しかし、そもそも絶望に触れなければ意味がない。ゴンザレスの提示した1割とは希望的観測ではなく、足掻けば勝てる可能性が必ずある自信からくるもの。

リカルドがデビューしてからの歴史上、彼に1割の勝算を持ってリングに上がったボクサーは片手ですら余る。

「ま、そーゆうこった!」

リカルドから2度の敗北、そして千堂 武士から1度の敗走を喫したことのでついにここまで来た。10試合に1度は勝てるという、最凶の挑戦権を手にして。

「お前らには盛り上げてほしくってな。なあに、いつもみたいに叫んでくれりや良いんだ」

「任せとき任せとき。」

ダウンして寝てもワイの声で起こしたるわ！」

「そうならねえように練習してんだろう!？」

千堂のボケにゴンザレスが応える。

仲の良いやり取りは幕之内が来たときから出来上がっていた。前回ここに千堂が来たときに仕込んだのだろう。

案外とノリの良い人なんだ、と思ったことは黙っている。板垣も同じ目をしていた。

休憩を終えて立ち上がったとき、ゴンザレスがシューズに視線を数秒落として「またか」と呟いた。何事かと見守っていると、シューズを脱いで中に入れた。

「中敷きを入れ替えなきやな」

言いながら取り出した中敷きを見て3人は啞然とした。

右足親指の付け根部分の中敷きが爆ぜたように消えて…いや、擦り減っているせいだ。

「そんなに削れます!？」

「千堂とやってから20組みは替えた。」

両足ともここぼつか擦り減っちゃうからよ、直ぐ替えなきや皮膚が破れて練習にならん」

幕之内は生唾を呑んでいた。

(20組!：僕は今年に入って何組替えた…：多分2組くらいだ。1組替えるだけでも相当な踏み込みの練習が必要なのに。この2年でどれだけの練習をしたんだ)

ゴンザレスの言葉は疑いようがない。スパアの動きは既に別次元のものであり、ゴンザレスだけでも3人共に手一杯だ。

幕之内の期待感が間違いでなければ、1割という勝機はまだ上がる。このスパアは暴力対策だけではなく、その為のものじゃないか。

「おーし、今からは混ぜていくぞ」

「…?」

ゴンザレスの言葉に首を傾げる2人。

千堂だけは合点がいった顔をしている。

直後のスパ―で、板垣が瞬殺されたのを目撃して幕之内は中敷きを頻繁に替える訳を知ることになる。

勝機を伸ばす、ゴンザレスの最凶の姿を。



更に5日間が経った。

「死神コンビ、ワイン時と強さ違いすぎひん？」

リングの上で倒れ伏した千堂、渾身の褒め言葉を聞き届けるゴンザレスは座つてはいるものの余裕の表情だ。

5ラウンドで千堂1ダウン、ゴンザレスは何度かの直撃のみ。これでも千堂は健闘したほうで、幕之内と板垣はインファイトで競り負けている。

アズール・ミキストリ
表裏・死神。

3人を次々と打ち倒したゴンザレスの新様式。

千堂との試合で様式モッド・ミキストリ・死神から進化を果たした、理性と凶気のス
イツチは世界王者の底力に相応しいものだ。

「あの時は俺たちがボロボロ過ぎたんだ。

……つっても？打ち負けるなんざ思わなかったよ。あの時はお前が強過ぎたんだって」

「リカルドとやる前のスパ―じゃこんな差はなかったやんけ」

「お前が弱くなつたんじゃないやねえの」

眉をぴくりと動かした千堂が反対を向く。

リカルドに負けて以降、放浪していた千堂には心当たりがあるせいだろう。幕之内は知らないフリをした。

「イタガキは？」

「ロードワークに行きました」

「……そうか」

さつきから見かけない板垣の所在を聞いて、ゴンザレスは最近の板

垣が午後からはロードワークに行くようになったことを思い出す。

今回のように、すぐに体力を回復する程度には被弾が少なくなり、動きのキレが増している。ロードワークに行き始めてから、という発端に2人が気づいている様子はなさそうだ。その理由を話せばやこしくなるのでゴンザレスは黙っておいた。

「そーいや聞きたかったんや」

「あんだよ」

「リカルドのやつ、WBAから動かんのはなんでや」

幕之内は場の空気が冷えていくのを感じとった。

またもや思い出したように切り出した話題は、ゴンザレスの機嫌を損ねるものではなかった。場を冷やしたのは千堂の視線だ。

(い、いいのか…そんな質問しても)

内心ではそう思うものの、質問の意図は汲み取れる。

「……そんなに重要なことか?」

「ワイからWBCのベルトぶん獲って直ぐに返上しくさりおつて。そんなにワイのベルトが要らんつちゅーことかい」

ゆつくりと上半身を起こして、リカルドの問題の行動に答えを求めた。

千堂との統一戦に勝利後、リカルドは防衛戦をせずにWBCのベルトを返還した。試合に満足したから、と述べて返還したことにボクシングファンの多くは落胆している。

「階級を上げるのでもなく、千堂さんのベルトを返上したのは僕も納得がいきません」

幕之内も不満を隠しきれない。

2人の視線を受け止めたゴンザレスの瞳は、真実を知っているものだ。見つめて数秒、見つめられて粘り、

「……お前ら、アーティット・キングピッチというボクサーを知ってるか?」

ゴンザレスは口を開いて1人のボクサーの名前を告げた。幕之内と千堂が顔を見合わせ、心当たりがないことを確認する。

「リカルドのやつ、世界に行く前に前々代WBAフェザー級王者とス

パーをして、ボッコボコにしたんだ」

「……………それは。どちらが、どちらを」

「分かるだろ。リカルドが王者を、だよ」

言わずとも分かる。いや、想像に難くない。

リカルドは、国内の時点で世界王者レベルだったと。

「当時のWBAフェザー級王者だったタイのアーティットは、リカルドのバイオレンスを前に完封された。直後の防衛戦で呆気なく敗北、そのまま引退している」

これが当時の記事だ、と言って差し出した雑誌を受け取る2人。右上半分を占める写真には、若かりしリカルドが右拳を振り抜いた姿勢と、アーティットと思われるボクサーがうつ伏せに倒れる姿があった。

リカルドの強さがいかに異次元であるかは分かった。

ただ、アーティットの名前を持ち出したゴンザレスの意図が分からない。

「このチャンスをボコつて、自慢したさにWBAにおるとかやなかるうな」

「アーティットは3階級制覇者だ。王座防衛は合わせると17回、5年以上もの経験者で『闘神』と呼ばれていた」

「……………あ。公開スパーで倒して、しかも負けたから気にしてるってことですか?」

もしそうなら、階級を上げない理由にはなる。

「それがホンマなら器小さすぎるやろ」

「ちよつと千堂さん」

「ワイかてスパーで東洋王者をボコったことあるで」

スケールが違う…!

だけど、似たような話だ。世界王者とはいえ、リカルドが公開スパーのことを引きずる人物とは思えない。

それに、僕の時とは様子が違う気がした。

「彼を倒したりリカルドは国内王座を返還したあと、3年で20試合の世界前哨戦をした。アーティットをスパーで倒した、その噂を聞いた

王者がリカルドを遠ざけたせいだ」

「3年間で20試合?」

「あの強さで40戦しても世界のベルト巻けんかった理由はこれかい。金目当てのつまらん王者やったんやな」

「……ま、そこは問題じゃねえ。ていうかよ、本人が語った訳じゃないから憶測でしかないが。」

リカルドは公開スパーで相手のプライドはへし折らない。国内王者のときからそうだったんだ」

ゴンザレスの言葉を聞いた幕之内は、その慮りに心当たりがあった。

伊達のリベンジマッチ前のスパー相手として、幕之内がリカルドと対峙したとき。デンプシー・ロールを完封したあと、動けない幕之内にトドメを刺さずに、

「日本王者のプライドを叩き潰すつもりはない」

ビルを通してそう記者に伝え、グローブを解いている。

違和感はここだ。リカルドが相手を倒したことだった。

「加減をしなかった。これは事故だったんだ。」

リカルドはまだ、自分の力が世界を落とせるものと知らずに暴力を解き放った」

「…んで、闘神がこの有様か」

「完成された神の過ちを償うために、自らに重い罰を課した。ダウン、若しくは——敗北するまでの防衛を」

無敗神話の裏側から出てきたのはリカルドのたった1度の過ちと、審判者不在の終わらない禁錮だった。



少しだけ、昔の話をしよう。

センドーとマクノウチには言わない、俺の独白だ。
リカルドがWBAフェザー級から動かないことを、さっきは予想だ
と言つて奴らに聞かせた。だが俺は真相を知っている。

正確には、教えられた。タチの悪い貫い事故だ。

リカルドに2度目の敗北を喫したあとの話だ。不貞腐れて独り夜
道を歩いていたとき、俺はヤツに出会った。

「リカルドをあそこまで怒らせるバカだ」

「……………」

眼鏡のツルを左手で撫でながら話しかけてきた男。嫌な雰囲気を出す男だ。ひと目でボクサーだとは分かったが、気が立っている俺は無視して横を通り過ぎる。

「俺はアーティット。ピンとききたな、夢見る青年」

「…………元WBAチャンプか」

その名乗りで足が止まる。

だが分からない。急に現れて、したり顔で声をかけてくる不審者が元世界王者だと?どんな意図か聞く余裕はない。

「絡んでくるなよ。今日は機嫌が過去一最悪なんだ」

「2敗目だ。諦めないのか?」

…………このやろう、知ってんのか。尚のこと機嫌が悪い。

「リカルドが遠い。俺の生涯をボクシングに費やしても、このままじゃヤツに届かない。」

…………アンタを倒せば、足しにはなるかもな」

「あり得るな。今度やるか?」

アーティットの返しに俺の機嫌は最悪に落ちた。

人通りのない夜道で挑発行為をする意図なら、冷静さを欠いた俺でも読み解ける。

敗北した直後のボクサーは恐ろしくない。若しくは、プロが手を出す訳がないと傲慢な考えになっている。

「今なら良いぜ」

ブレーキは今夜だけ壊れていた。理性で話しているのに自制は効かなかった。目の前にリカルドを知るだけの雑魚がいるせいだ。

拳を握り締めて、腹に容赦なく1発を見舞って――

「……………は？」

視界が転がる。

小瓶を倒したような軽々しきで、地面に転がる自分に対して疑問の
声漏れて気づいた。

今日、2度目の瞬殺をされたと。

「リカルドが暴力に出たのはお情けだ。天上を見上げろってこった、
ピンときたか？」

リカルドと同レベルの実力を感じた。

これが引退したボクサーの…公開スパーで完敗した男だってんな
ら、俺は一生リカルドには――。

「お前に足りないものを教えてやろう。」

リカルドの過去と俺の負けの理由を！

「――え、あ？」

屈辱で凶気も萎えかけたとき、アーティットは笑いながら胸ぐらを
掴んで叫んだ。

…リカルドの過去ってなんだよ。

「まずは大事な結論。」

リカルドがフェザーに留まってるのは俺のせいだ！

「……………は？……………はあ!？」

理解不能の告白から数分後、俺たちは全てを知った。

――
――
――

俺は思った。くだらない理由だと。

アーティットは言った。バカ野郎だと。

「俺に言わせりゃ、どっちもバカだ」

ボクシングに寄り添い過ぎたせいで、罪を神話にしてしまったなんて。腹が立つ、苛立ちが治らない。ここまで来てもボクシングに愛想を尽かさない姿勢には頭が上がらない。

けどよ、下を見てもアンタがいる。

過去のリカルドは未だに健在だ。ふざけているだろ、アレでもまだ

…望んで成長していないのだから。

「…ふん、行くぞ。記者会見が始まる」

凶気を潜めて歩き始める。

何も起きない通過儀礼を終わらせるために。

俺たちが未来を切り拓くために。

決意、固く

「おい、あの噂は本当なのかよ」

WBAフェザー級タイトルマッチの記者会見が始まる前、会場に集まった記者のうち1人が隣に座る顔見知りの記者に声をかけた。

「あの噂：リカルドが公開スパーで世界王者を倒したとかいう？え、いやまあ噂じゃないけどさ。」

ならあつちか。リカルドのスパリングパートナー」

「そうそう!!？ あの『ウォーリー』が1週間も保ったって話が流れてきたんだけどよ、不思議なことに写真が1枚も出てこないんだ。お前、なんでか知らないか？」

「それがさ、公開スパーまで誰もマークしてなかったんだと。取材で行った記者はいるが、その時にウォーリーの姿は見かけなかったらしい。最近の俺らはリカルドの無敗記録に目をやってたからな」

「けえ、んだよお前も見てねえのか。じゃあ誰がウォーリーを見たんだ、噂の出所は？」

「さあ？忙しくて追いきれてねえよ」

話題にしたボクサーは現WBAジュニア・フェザー級王者であり、戴冠最年少記録を更新したウォーリーだった。

現時点で同階級に敵無しของボクサーが、わざわざメキシコに来日してリカルドのスパーク相手になっている。そんな噂が広まったのは、ウォーリーがスパーク契約日を終えた日。リカルドに聞けば『素晴らしい時間を過ごせた』とその存在を認めたものの、スパーク内容を見ていない記者たちはこうして記録を残した者を探している。

「…………噂が本当だってんなら、ゴンザレスに勝ち目はねえな。試合で来日した世界王者がリカルドと公開スパーするつてのはあつたけど、2週間前から世界王者と練習なんざ聞いたことねえ。」

ちと気合い入れすぎじゃないか？」

「ああ、やっぱりリカルドは様子を変だ。統一戦をしたり、ウォーリーを呼んだり……マジで引退すんのかも」

誰が言い出した訳ではない。無敗神話という未来永劫破られない成績と年齢を考えれば、最近のリカルドの試合内容の変化に誰もが納得する。

「3回目のリベンジを受けたのも、そのせいかもな」

今回の試合は、リカルドの情けからくるものだ。

そう結論するのも、メキシコのスポーツ記者ならば仕方のないものだろう。

大勢の記者が小声で話すなか、記者会見の時間になった。途端、乾いた足音が消える。定位置に全員が着いた。

号令はなかった、司会の一声は挨拶から始まった。私語を嗜める隙間もないほどに、2人のボクサーの入場は見逃せない芸術だった。

「……」

誰も予想していなかった。小声くらい聞こえるのが普通だった場所、リカルドの防衛が当たり前の世界で、

「……」

左右から入場する2人の動きが寸分も狂わずに同じだと、記者に伝わるほど綺麗な所作が常識を塗り替えたのだ。2人に倣うように記者たちはペンと手帳を握りしめて、会見の進行を樹木のように待った。

煩わしい形式を経て、白昼堂々とした舞台上で2人のボクサーは合間見える。

痛みのない、最後の握手を交わすために。

『ではゴンザレス選手。意気込みをお願いします』

意識は会見に置きながら、ゴンザレスの思考はリカルドへと向けられていた。

「招待状を貰ったことに感謝している。

2度負けて非常に厚かましいが、ベルトを巻く準備を整えてきた」

30を越える防衛戦、毎回こうして挑発を受けては返し、仕事を終える。顔色を変えたことはあつたか、変えないのは仕事だからか…それとも贖罪の身だからか。

「俺が新しい神話を築く」

なにを考えているのか、と思う。

聴覚を俺に傾けながら、どこを見ている。

『ではチャンピオン、お願いします』

俺を見ていないのなら、罪が許されないと落胆しているのだろうか。

俺を見ているのなら、処刑人…それこそ死神として見ているのだろうか。

「神話はこれからも続く。誰も止めることは出来ない」

燦々と動く口元を見ながら、俺は見慣れた景色だと気づく。3度目の記者会見だからだろうか。…違う、あの時は口元なんて見えなかった。リカルドを倒したい一心で、澄まし顔をどう殴るかを考えていた。

…だからここじゃない。

あの口元を見慣れるには、この場じゃだめだ。

「かつての神々のように、彼も神話に名が残る。最も神話に登場した、生涯のチャレンジジャーとして」

横から見たんじやないとするなら…やはり前だ。

前といっても、前には記者たちしかいない。

…カメラ、ああそうだ、カメラだ。

俺はテレビで何度も見たんだ。

30回以上も挑発を受けては返す、退屈な贖罪を。

…コイツ、この野郎、俺に脅威を感じてないんだ。

いつもと同じ、負ける要素がない試合だと確信してんだ。

『ありがとうございます！流石に初の3度目の挑戦というだけあつて、統一戦にも勝る緊張感です。』

両者、最後に記念写真を撮って終わりたいと』

…ここで黙ってちゃ、前となにも変わらない。

「テメーの挑発に乗ってやる」

『ご、ゴンザレス選手?』

どうしようもない聞かん坊に言うように、目は天井を見ながら場を切り裂いた。

いま見せた剥き出しの鎌を見て、ヤツが何を感じ取れるかは察しがつく。分かるよ、お前はまだ俺を見誤っている。

「ソレも俺たちの戦う原動力だ！」

吠え面搔かせついでに感謝させてやるからな!

次はお前が俺たちにリベンジする番だ」

……と、ミキストリが宣って会場の出口に向かう。

あくあ、言われちまった。

「ゴンザレス!握手がまだだぞ!おい!」

ブラスの制止する声に心の中で謝りながら、そのまま会場をあとにする。

「楽しみにしとけ」

何処かにいるリカルドに向けての宣言を足して。俺が倒したい漢を探しに行く。

リカルド・マルチネスの本気を引き出して、そのしみつたれた顔から本性を引き摺り出す。

それまで握手はしない。



—とあるメキシコスポーツ記者の記事—

近年、リカルド・マルチネスへの注目の視点が変わりつつある。長年拒んできたWBCとの統一戦の開催が発端だと言われており、確信に変わったのは統一したWBCのベルトを即座に返還したときだ。

リカルドへの注目とは、勝利の仕方やK・Oラウンドのことではない。誰が、どうすればリカルドをK・Oすることが可能なのか、とい

う期待^{IF}のことは承知のことだろう。

“無敗神話”としてファンの熱が最高潮に達したのは、ジャパンにいるサムライ“エイジ・ダテ”に勝利した頃だ。リカルドが10ラウンドまでに倒せなかったボクサーは僅か5人。うち4人は国内王座奪取よりも前のため、エイジのファイトがどれだけ素晴らしいかを物語っている。

顎と右拳の粉碎骨折、血を流して自らのパンツを赤く染めてでも耐え抜いた10ラウンド。積年の執念がリカルドの全力を引き出したことで、リカルドの暴力が世界の誰にも届かない位置にあることを我々は再認識した。

次に暴力を引き出した“タケシ・センドー”のとき、無敗神話に集う民衆の熱は冷えていた。言葉は悪く聞こえてしまうが、私にとつては最高の褒め言葉だ。死神ゴンザレスの理性と凶気を越えたボクサーが、たったの2ラウンドで敗北した呆気なさに民衆は畏れを抱いた。リカルドが負けることは未来永劫訪れないと、敗北^{もしも}の議論が愚かだと理解して、夢から目が醒めてしまった。

こうして世界はリカルドへの視点を改める機会を得た。

無敗神話が終わる瞬間から、無敗神話を築く理由とは何か…に。

リカルドには何度も飛んだ質問だ。その度に彼は決まって“私を倒した者に問われたら答えよう”と言う。

不可能だ、聞けるはずがない。フェザー級に留まる理由が知りたいのに、我々が諦めた敗北の話を出されては何も変わらない。どれだけ憶測を飛ばしてもリカルドには届かないし、どれも退屈な創作にしかなれないのに。世界の視点はどうかリカルドを暴いてやろうとしていて、最近のリカルドに関する記事は誰が書いてもつまらない。

我々までリカルドに飲み込まれてどうするのだ。

夢から醒めた今こそ、リカルドの変化を見るべきなのに。

暴力を1ラウンドから解いたことも、リカルドの心境に変化が生まれたことを物語っている。リカルドはなぜ化学から暴力に生まれ変わるのか、未だに真相を掴むことは出来てはいない。

どうだ、リカルドが変化していることは分かった筈だ。本人を突き

動かす情熱か、はたまた神話の終わり…引退が迫っているのかはまだ不明だ。しかし、しかしである。無敗神話を築く理由に我々が注目するのは早計だったと、そう思わせてくれるボクサーが1人いる。

彼ならば、無敗神話の全てを打ち砕き、全貌を明かせるのではないかという期待感が記者会見を終わらせた姿から見えたのだ。

WBAに留まる理由が本人から語られる日まで、世界が思うほど遠くはないのかもしれない。

——ここで雑誌は閉じられた、

「……………知らなくていいんだよ」

花を摘むように優しく雑誌を机に置く。

世界の禁忌に触れたことを悟らせないよう、慎重に。

記者会見から2日が経った。今日は試合前日の夜。

あれから帰って身体の調子確かめて、翌日もスパーで身体の闘争本能を付けておいた。今日も変わらない、絶好調を維持している。明日は万全の状態で試合に臨める。

「プロボクサー最後の試合って、いつだと思う？」

扉の隙間からゴンザレスを覗く、ジムにまだ残っている物好きにその声を掛けた。扉を開けて入ってきた幕之内は、少し俯き気味で恐る恐ると訊ねる。

「ゴンザレスさん、それは…」

「勘違いはよせ。自棄^やじゃねえ」

それだけで言わんとすることを理解した幕之内は、一瞬考えたあとに。

「倒したいボクサーがいます。感謝を…結果で伝えたい人たちがいます。この2つをやり遂げるには僕が五体満足でいる必要がある。

……僕は次に負けたら、引退します」

「俺と同じだな」と言ったゴンザレスに返ってくる言葉はない。ここ2週間の気迫と背中を見てきた幕之内は、言葉にしないゴンザレスの決意を見抜いている。

「俺はリカルドには勝てないと、心のどこかで思っていた。お前に

勝って、あのままりカルドと3戦目やってたら確実に負けてたしな」
右拳を包むように左手を添えて、約束を反故にされた試合の結末を描いた。嘘じゃないのだろう。今でこそ分かった実力差で、リカルドに見抜かれていたことを知ってしまったのだ。

(手が、震えている…)

命拾いした…というより、そうならない為の反故ではないかと、確信に近い予想をして過去を笑っていた。

「明日、人生の帰路に立つ。そう分かったらコレだ」

(そうか、だからこの人は…：僕を呼んだのか)

幕之内は自分が嘘の理由を伝えられていたことを察する。

千堂との相乗効果を狙って？

違う、嘔吐きじゃないか。

幕之内 一步というボクサーもまた、アルフレド・ゴンザレスの運命の分岐点になっていた。それも、自分の3度目の敗北をもたらず、最悪の勝利としてだ。

自分を2度と見失わないように、幕之内を見ながら自分の足元を見ていた。本当に今が正しいのか、暗闇のなかを踏み出す杖としての役目を知らずに担っていた。

暴力対策は千堂が。

精神面の対策で幕之内が選ばれている。

「リカルドとの初戦、再戦でも両手が震えることはなかった。あの時は緊張したが、怖くはなかったんだ。

センドーにリベンジ出来なくなんのは、明日死ぬくらい嫌なんだよ」

なら、足元を照らさなきゃ。

掛けるべき言葉は…：いや、経験が1つある。

「僕のジムの1番強くて皆んなの憧れの人が、一時期荒れてたんです」
恐怖に負けて、そして立ち直った漢の姿を知っている。

「無敗なのに、負けていたって記事にされて。

本人もそれを心の中で認めちゃって。1人で抱え込んだんです」

鷹村 守。

鬱屈に心を歪めて、最後には立ち直った強い漢。

彼を目覚めさせたのは強い衝撃……幕之内との腕相撲勝負だった。強い恐怖心はそれ以上の衝撃で吹き飛ばしてしまえ。

「だからですね、僕じゃなくて本人に言っちゃいましょう。ゴンザレスさんの欲しいものは、すぐそこです」

指を差した先は扉の向こう。

腕を組んで壁に右肩を着けていた千堂が、呆れ顔でこちらを見ていた。

「……センドー」

「1ラウンドだけや。辛気臭いモン吹き飛ばしたる」

そう言つてヘッドギアも着けずにリングに上がる。

グローブを着けて、ゴングを鳴らす。

漢たちの激励は呆気なく始まった。

多く語るような内容じゃない。

2人は試合前日だということを忘れて、子供の喧嘩のように「当たらない」だの「遅い」だのと騒ぎながら、笑いながらスパーをした。外から幕之内、そして合流し損ねていた板垣が声援を飛ばして、世界一大バカな決戦前夜を過ごした。

「ク、ククク……試合前のボクサーにスマツシユとか！お前やっぱバカだな！ばか！」

「外してもうたわ。気合い入れるために受けんかい！」

「死ぬわボケ！」

「闘魂注入ゆーてな？」

「本当ですよ千堂さん。ちよつとは加減してください！」

「スパー唆した先輩が言いますかそれ…!？」

おふぎけ程度のスパーを終えて、笑い転げながら息を吐き出したとき。ゴンザレスは憑き物が取れたように重圧が消えたことを知って、この2週間の価値が最高のものだ と確信した。

「お前ら呼んで良かった。ここまで笑っていられるなんざ夢にも思わなかったよ。」

……ふ。俺は、もう大丈夫だ」

終わりを意識し過ぎて、神経が不必要な情報まで考慮していた。過敏になった心は土壇場で安定し、現実と噛み合わなかった意識が芯を思い出す。

ここで埋めた心の差は、試合で有利に運んでくれる。

「メキシコの太陽、無敗神話を36分間で落とす」

決意を言葉に換える。

腹は括った。心は決まった。

あとは、この身体が果てる前に勝利を掴み取るだけだ。

「歴史を塗り替える36分間を見せてやるぜ！」

ゴンザレスの宣言に、3人は力強い期待で応えた。

散々待ち望んだ夜を迎えて、今更想うことは過去3回の敗北だった。

『メキシコが待ち焦がれた試合が今宵開かれる』

2敗を恥じるばかりで、反省しようにも直すところが分からずにいた。基礎体力、判断力のような差を感じはしても、埋めたところで心の余裕が違う。

だからリカルドの背中に追いつくには、心以外で上回るしかない。そう信じて凶気と駆けた日々が終わったのは、心の底から幸運だったと感謝している。

『無敗神話史上初。それは30戦を超える防衛戦で、ただの1度として執り行われることの無かった王座統一戦。あの統一戦が最初で最後の歴史的瞬間になると思っていた』

足りなかったものはそれだけじゃなかった。

心の器、基礎体力、それだけ？

以前の俺はそれだけしか観てなかった。視野も狭いし足元を見ていないし後ろも振り向かなかった。千堂に負けるまでの俺は息をしていたかさえ定かじやない。

『僅か1年足らずで2度目の無敗神話史上初を見るとは、この場に居る全ての民衆が思いもしなかったでしょう』

躍動する野生児を見て、俺はアーティットの言葉も読み解けるようになった。時間はかかったけど、ミキストリとは最高に打ち解けられたんだ。

『ゴンザレスは言った。これが最後のリベンジだ』

……だから、俺のように敗北を活かすなら許せる。

勝利を喜んでいたら俺は3度も上がれなかったよ。

『ミキストリは言った。リカルドの次の試合は俺たちへのリベンジマッチだ!!?…と』

千堂に負けて、初めて笑ったからこそ許さない。

一方的な贖罪を重ねて、自分の夢も限界も忘れようとしている、過去のままのリカルド・マルチネスを。

『3度目のリベンジャーという、メキシコが諦めていた最凶のボクサーの歴史的開拓に会場の熱気が高まります!!?』

歓声を受けながら、待ち望んだリングに上がる。

「……………会場の隅々まで見える」

広い、ここままでリングが広く感じるとは思わなかった。

「それが心の余裕だ。お前、今まで見たことないくらいにリラックス出来てるぞ」

「そうか。アイツらのおかげだな」

ブラスの声に頷きながら、余裕ある意識で会場中を見渡す。声援してくれるファンは多いが、大半は勝利を願ってはいない。

(言わずとも分かるよ、この空気。)

「つたく……負け試合と思いやがって」

声が張り裂けるような応援が欲しいわけじゃない。

予想通りすぎる反応を見て笑っていた。

観客席で会場を見渡していた3人は、観客の応援が引退試合だと決めつけた色に不満を抱いていた。

「会場の人たち……あんまり興味なさそうですね」

「ゴンの言った通りやな。入場んときの口上に飽き飽きしとるんやつて。どんな前評判も簡単に砕くんがりカルドっちゅー男やけ、どんな紹介も白けるだけやと」

「それにしても、ですよ。ゴンザレスさんは3度目、それも……ボクサー生命を賭けている。ファンとして思うところがないんでしょかね、みんな」

「選手生命を賭けたボクサーをリカルドは打ち砕いてきたんだ。玉砕覚悟だけが強みの人に期待なんて……しない」

無敗神話が根付いた国の特徴に、幕之内は伊達戦のときの記者会見

を思い出した。

“彼には期待しない方がいい”

リカルドが言い放った言葉を、この会場は観客たちが体現している。挑戦者に突きつけられる圧力は計り知れない。

ゴンザレスの勝負は序盤。民衆の評価を裏返すような、当たり前前の優勢を奪う必要がある。

「ゴンザレスさんなら大丈夫です。昨日の激励で玉砕覚悟なんて考え吹き飛んでますよ！」

「せや！こっからは応援あるのみ！声出せ！」

外野の火付け役も必要だろう。それを担うのは自分たちだと、3人は立ち上がってゴンザレスの応援団となった。

「ゴンザレスさあああああん!!?」

「ゴン!!? 負けたらシバくでエ!!?」

「勝ってくださいああああい!!?」

3人で百人分の熱意を放つところを見て、ゴンザレスは笑わずにはいられなかった。

(クク……センドーの応援団には苛ついたけどよ、成る程。味方になると凄え気分良くなるな!)

拳を振り上げて感謝を伝える。

3人も拳を挙げて応えたとき、会場が赤く染まった。

『現れるは神。無傷で80戦を生きた神。』

現代に生ける伝説、不死の身体を持つボクサー』

暗い空を捻じ曲げる絶対の色。

太陽が昇ることを示すメキシコの赤。

右拳を掲げながら、悠然と降り立つ姿は神そのもの。

『王座戴冠後のK。0率は驚愕の100%!!?』

挑戦者を選別し、至高の1人を求めて今宵も玉座から姿を顕した。冥界を焼き尽くし、メキシコの神は完成する』

闇をも燃やす太陽に民衆は集う。

無敗神話を樹立する姿は地上を照らす太陽だ。

故に民衆は疑わない。今宵、死神が冥界と心中して、太陽が天辺に

輝く未来を。

『PFP1位、即ち世界の頂点が堂々とリングイン!!?』

民衆の歓声が一気に溢れ出る。

神の降臨に場内が沸き上がる。

リカルドを迎えるこの瞬間が、最高潮と言わんばかりに。

「流石の人気だな」

「いつものことだ、興奮するなよ」

「別の意味で気合い入ってっから問題ねー」

リカルド・マルチネスがフェザー級に留まり続ける理由を、アルフレド・ゴンザレスは知っている。直球に失礼な言葉を投げつけることに躊躇はなかった。バカか、とゴンザレスは思った。

「だから負けねえよ。安心しろって」

「逆に心配するぞ、そのテンションは」

ブラスの肩を叩いてから、最後の挨拶をするためにリング中央に向かう。

朝方の空に浮かぶような月光を宿した瞳で、こうして相手を見たのは2度目だ。

「孤高。それがリカルドの強さだった」

千堂に負けたときも、朝焼けを待つときの感覚で伝えた。リカルドの強さの秘訣を見誤るなよ、というメッセージは千堂では半分しか受け取れなかった。

「他人任せの役目を俺たちが壊しに来てやったぜ」

自分で引きちぎれない鎖を、いましめゴンザレスはしっかりと見据えている。リカルド本人でさえ、引きずる贖罪を見失っているかもしれない。自分を縛ったモノを覚えているのか、ゴンザレスは分かりたくない。

「……………私には分からないな」

知らないふりをする神に、ゲンコツを落とす。

そして、一瞬の刻を進めてみせよう。

永遠の孤独を一瞬だけ取り払って、バカバカしい過ちを終わらせる。

無敗神話という、永遠のように長い道を踏破するために。

WBAフェザー級王者

リカルド・マルチネス

VS

WBAフェザー級1位

アルフレド・ゴンザレス

これはゴンザレスの最後の挑戦だ。

頂点に君臨するリカルドを倒し、次は王者としてリカルドを迎え撃つために、次の神話を築く覚悟を決めてきた。

「戴くぜ、無敗神話」

繰り返す、これはゴンザレスの最後の挑戦だ。

無敗神話を踏破し、アルフレド・ゴンザレスが世界を制覇するため
の決意である。

「Mythology of termination!!?」

ゴンザレスは笑い、ミキストリが猛る。

溢れ出る自信は神話を打ち崩せるから。

その予感に触れる者は片手しかない。

いいや、片手で数えるだけいてくれる。

会場中の緊張感を穿つ瞬間、神話崩壊は始まる。ゴンザレスの勝利を信じる千堂たちは背筋を伸ばして待つ。理性と凶気、磨き上げた肉体が歓喜する、勝利の咆哮を。

行く末を左右する第1ラウンド、ここに開始。

太陽に届け、表裏無き拳

死闘の幕開けを報せるゴングの音は、意外にもアレナ・メヒコに静寂を落とした。神の御前に立つような緊張感に包み込まれて、幕之内と板垣は天上世界に圧倒される。

「締まりのなかった会場が静まり返ってる…?」

「勝負所つちゅーことやろ」

「えっ、いきなり!?!」

千堂の見解に板垣が驚きの声を漏らす。

喉元で食道を細めなかつたら、会場中に響き渡りそうなほどに静かなのだ。それでも目立つ板垣に目もくれないのは、千堂の言葉が正しいということ。

「リカルドから先制を取れるか。地元民は皆んなそこだけで分かっつまう。逆に……」

解説を求める板垣の視線に応えつつ、千堂の拳は骨が浮き上がるほど締めつけられていた。36分間、どこかで起こさなければならぬ奇跡^{ダウン}へ辿り着くには、開幕を勝ち取るしかない。

「ゴンは先制をしくじった瞬間、観客から見放される。声援は1つたりとも期待できんくなる。」

絶つつつ対にぶん取るんやぞ、開幕」

開幕奪取。

無敗神話に通じるか否かを決める最初の分岐点は、既に目の前にある。

ゴンザレスは目前の分岐点を見上げながら、コーナーを背にして最後の挑戦を噛み締めていた。

「長かった」

3度目の負けで漸く渴きが潤った。

千堂との試合で初めて敗北を納得出来たのだ。

負けて強くなる、という言葉をゴンザレスは内心で酷く侮辱していた。リカルドに2度の敗北を喫しても、己の無様さが感情を振り回す

だけ。ましてやミキストリとの協力せいちようなど起こらなかった。

「納得」こそが鍵だと知った。

高め合えるボクサーの存在がゴンザレスには必要不可欠だったのだ。

断言する。千堂に勝ったあとにリカルドと試合をしても、リカルドに遠く及ばずにボクサー生命を終えていた。

「先ずは挨拶からしないと」

灰の積もる路を歩き続けて、3度目の邂逅は果たされる。

あいも変わらず油断のない足取りで距離を詰める神話に、理性の顔が喜色に彩られながら右拳を差し出した。

『ついに始まったWBAフェザー級タイトルマッチ、3度目の挑戦。両者、拳を突き合わせて挨拶を交わします』

左拳同士が相手の領域に触れる時間は、ジャブが頬を打つ瞬間を見ているようで、観客たちの緊張感はここがピークかに思えるほどだ。

ゴンザレスには、会場が作り出すこの雰囲気落ち着けなくて嫌だった。2度目の挑戦のときを思い出すせいだろう。

「よお…前の試合の続きからだ」

「……………」

気づけば身体の主導権は理性を突き放していた。リングの上で覗いていたのは理性ではなく、死神の顔。

見所を決めつける雰囲気を作った原因である。

(主 導 権 オープニングは絶対取る。)

神話破りの必須条項なんだぜエ?)

前回、最後にここでリカルドを見上げていた死神は、理性の肩を乗り越えるや1人で飛び出していった。

「ゴンザレスさんが行った!」

「ちやう!あれは死神や!」

「それ、前回と同じ展開ですよ!」

板垣の言う通り、前回の敗北をなぞる行為だ。

ゴンザレスがなにを考えているのか。もしも、ここにきてミキストリに乗っ取られたとしたら、既に勝敗は決したも同然。最悪の結末が

見えて幕之内の顔面が蒼白になり、千堂の瞳が震えた。

(同じ過ちを繰り返すのか、ミキストリ?)

無敗神話は暴走を起こしたミキストリを見下げ果てながら、カウンターの態勢を整える。

死神の左拳がただ打ち放たれる。開幕の流れを掴むには適するほどの威力と速さだ。相手が無敗神話だとしても、ガードで様子を見ざるを得ないはずだった。

ただし、普段の防衛戦であればの話だ。

(私の見込み違いだったか…)

これはゴンザレスとの3度目の試合。

世界レベルの実力ではリカルドは満足しない。

自分を倒す見込みがあるまで、誰であろうとリカルドは3度目の挑戦を引き受けない。この試合は世界の規格から飛び抜けた者に与えられる、リカルドが真に認めた相手という証拠だ。

その目利きが相手に否定された落胆が拳を握らせる。

開幕からリスクのある行動を取るのは、リカルド自らへの戒め。ミキストリの暴走で怒れる自分を高める、隙を殺す儀式であった。

(ならば、この試合はここで終わりだ)

無敗神話の右拳は一切の躊躇なく、暴走するミキストリの放つ左拳を越えて顔面へと打ち込まれた。

『ク……クリーンヒット?!』

ミキストリはそこで終わっていた。

リカルドに届かずに、前回と同じ末路を辿った。

(開幕を取る。流れを引き寄せるのは絶対)

然し、敗北を無理やり捻じ曲げる男がいた。

ゴンザレスが身体の主導権を受け取り、更に前に飛び出すことで未来が変わる。

ミキストリの暴走と敗北があったからこそ、この「殺気」^{フェイント}は成立する。

(なにをした——)

ミキストリの暴走は本物だった。ゴンザレスの制御^{フェイント}が通じるの

は、リカルドの想定を絶するほど深淵で入れ替わりを実行しているため。

リカルドのカウンターが空振りしたのは、理性と死神の凶行に振り回された結果なのだ。

(勝つためならミキストリを囷にもしてやるよ)

(勝つためならゴンザレスが使われてもいいぜ)

右の打ち終わり際、ゴンザレスのポジションはリカルドの右外側となる。リカルドのガラ空きの右頬を見ていることが、ゴンザレスには嘘のように思えた。

だから、血を吸い込んだ魂が拳に宿る。理性と凶気、両者が嘘でも幻でもないことを1秒でも早く証明したいから。

(まずい、ガードを……)

リカルドのパンチの引き戻しを狙うのは容易ではない。ただこの一撃だけは別だ。K・Oを狙ってしまった右ストレートは空振り、僅かに前に流れた重心が戻る直前なら、ゴンザレスでも狙える。

1発、ゴンザレスの右ストレートが放り込まれる。腕力のみでガードを間に合わせたリカルド。続けざまに放たれる死神の右拳は、崩れかけのガードを突き破っていく。

(———ただしなア)(リカルドを倒すのは俺だ!!?)

ミキストリは前回の屈辱を第1ラウンドで返礼し終えた。

『取った、なんとオープニングヒットを挑戦者ゴンザレスが搔っ攫う! しかも右で!!?』

初手大砲をリカルドに直撃させる。

無謀で絶対不可能と思われた偉業を1つ果たしたというのに、会場中の観客が啞然とするだけだった。

それも当然だ。無敗神話に浸りきった地元の間人は、リカルドの身体が揺れる姿など久しく見ていないのだから。

「や、やるやんけゴンのやつ!!?」

「ほ、本当に開幕獲った! しかも右!」

「ただの右じゃないよ! 千堂さんとの試合で見せた入れ替わりをしてた! スイッチなんてレベルじゃない……!」

ゴンザレスの劇的なオープニングヒットによって、会場の雰囲気から解き放たれた幕之内たち。

彼らだけが正しく状況を把握して、ゴンザレスの勢いを後押しする声援を上げた。

(っし、挨拶は済ませたぜ)(上々だ。こっからは…)

歓喜するバカ共の声を聞き届けながら、ゴンザレスは態勢を立て直したりリカルドに視線を向ける。

先程の右ストレートのあと、出来るならば追撃でダメージを蓄積しておきたかった。それを止めたのは、リカルドが追撃を狙って右拳を潜ませていたからに他ならない。

勢いに乗るのは結構だが、リカルドは乗った相手の行動を加味する判断力がある。追い風と思っていたものに裏切られたボクサーの末路を、その目で見てきたからこそ理性がここで強く働いた。

(両拳を額に当ててガード重視)

先制取られたのに取り返さない…つまりは様子見。成長した俺たちを再確認するつもりだ。

……考えるまでもない、攻めなきや勝てねえよ)

目先で待ち構える無敗神話に、堂々たるステップワークでゴンザレスが距離を詰めていく。

ガードで様子を伺うリカルドは、ゴンザレスによる開幕の被弾を重く受け止めていた。

(理性と凶気の入れ替わる瞬間が分からなかった。目隠しをされても、ステップ音で見破る自信があった)

開幕のゴンザレス、そしてミキストリの足音は確かに両者を分け隔てる基準に相応しいものだった。そもそも顔を見れば凶暴な様相で認識は出来たはずだ。

リカルドは2人を見分ける自信があった。いや、確信があった。それを第1ラウンドで易々と越えて、オープニングを搔つ攫っていかれたことを深刻なミスだと理解し終える。

修正に必要なのは情報のみ。迎え入れる他にない。

(……………来い。見極めて流れを取り戻す)

ゴンザレスが踏み込んで放った拳を両腕で受け止める。これはカウターを警戒するゴンザレスの左拳だ。続けざまの右拳、体勢を軸を中心にして打ち出すことから理性は続いていると見た。

然し、右拳に突如として凶気が宿っていた。

(なんだと――)

両腕に着弾する大砲、それも死神の一撃だ。

腰を落として受け止めざるを得なかったリカルドは、完全に開幕の流れを掴み損ねた。

(浴びるほどの星空で、無敗神話の盾を壊す)

ゴンザレスの揺れる前髪が直後、弧を描いて散る。

気を張り詰めたなかで漸く紙一重の生存。リカルドの反撃の左拳を見送りながら、瞬く間の隙へと左右のボディを叩き込んだ。

(そんでよ、テメエの化学を完封してやるぜ?)

僅かに意識が下へと向いた瞬間、フックとアップパー、理性と凶気の強打がリカルドを打ち抜いた。

『わ、私はなにを見ているのでしょうか……?』

幻覚ではありませんし夢でもございませぬ。現実です、最凶の拳が神の顔面を捉え続けています!!?』

無敗色に落ちる赤い雫。

凶気から溢れた人間が1人、神話の壁の前に到達する。

『証拠は血……リカルドの口元から流れた血……!』

僅かに滲んだ赤いソレが観客たちを震撼させる!』

観客たちは凶気の直撃がまぐれではないと確信した。

リカルドの徹底した試合運びを崩せる者が世界に何人いるだろう。まぐれを祈って手を出したボクサーは全て潰されてきた。考えるまでもなく、リカルドを相手にしてまぐれや奇跡などという言葉は適用されない。

直撃は実力、追従は神話。

ゴンザレスの脳がはつきりと理解した。

過去2度、リカルドと対決して負けた。当時は同じリングに立ちながらも、リカルドの存在を神のように思えてならなかった。

今は、はつきりと見える。解像度が上がったとか、輝きに慣れたなんて話じゃない。リカルドを同じボクサーとして、しっかりと地続きに捉えている。

(先出しで情報を明け渡そうが、流れ掴むにはここしかねえんだ。この道はしっかりと舗装させてもらおう！)

神の左ジャブをスウエーで躲し、理性が内側から左を返す。返すように弧を描く二撃のボディ打ちは、肘を引き戻してガードを間に合わせる。

ゴンザレスとミキストリの攻守切り替えが上手く嵌まり、リカルドを徐々にロープ際へと追い詰めていく。薄氷上の足場は少しずつ冥府色に染まり、ゴンザレスへと有利な雰囲気仕上げてくれる。

「っ……………が……………!?!」

降り積もる灰を心地良く踏み鳴らし、凶気が眼前で立ち上がった。太陽を掻き消す笑みを振り回して、空に灰を積もらせていく。

(いつ変わったのか、見抜けなかった…)

以前なら一方的な心身の消耗を強いられた。だが今は、リングの上の進行を握るのはゴンザレスとミキストリ。

押し寄せる冥府の灯火の最中、2人の姿を捉えることは、太陽神と謳われるボクサーでも困難であった。

残り10秒間。

(……………この場面^{ラウンド}を手放してはいけない)

拍子木が最序盤の猶予を告げた瞬間、リカルドの直感が無意識のうちに自分に言い聞かせていた。

ゴンザレスに注がれる期待感を押し退ける。

リカルドがこのラウンドで最低限の仕事をするには、ダウン、若しくは強力な一撃を浴びせなければならぬ。

(ならば—————)

なにを以って失態を補うのか。既に決めたリカルドは、冥府の門を足音で揺らすほどの気概を持って、表裏の世界に踏み込んでいった。

(センドー戦みてえに暴力ブツ放すか?) (上等だぜ!)

砂浜を走り抜けるように力強いステップを見て、ゴンザレスたちは

強引にでも流れを断ちに来たことを察した。その手段を暴力として爆発させて、仕留めるつもりでいるのだと、そう「錯覚する」ほどの気迫なのだ。

ミキストリの射程距離に侵入すると同時に左ジャブを放つ。だが、空振りした。既にゴンザレスに入れ替わり、回避されてしまう。拳、バックステップをしながら死神のフックを打ち込まれる始末だ。

(はっ、まだ暴力じゃないらしいな)(おかしい…)

直撃に喜ぶどころかゴンザレスは訝しんだ。

リカルドのガードが緩すぎることに違和感がある。

(お粗末すぎる。なに考えてんだ)

残り10秒間で猛攻撃を抑えきれずに、自分に吹く追い風を手放す気は毛頭無い。攻撃一辺倒のリカルドを抑えるため、そのガラ空きの顔面に右拳を打ち込もうとして。ようやく違和感の正体を知った。

「リカルドが右拳を握り込んだ!」

「1発で流れを取り戻すつもりですか!」

「……いや、ちやうな」

その意図を理解したのは、観客のなかでも千堂くらいのものである。リカルドを観てきた者は思い至らず、千堂のように暴力を吐き出せた者にしか導き出せない一手、それは。

(お前が相打ち狙いで来るのかよ!?)

ガラ空きにした顔を餌として、自らも一撃を見舞う。あの慎重なボクサーがリスクのある手段を取るのは異例だ。それほどの事態であると認めたとということだ。

まるで凶人のような選択肢を打ち込もうとするリカルドを目前にして、ゴンザレスは迷わずに後退していた。

当然だ、いくらミキストリが望もうとも無理なものは無理だ。第1ラウンドのリカルドの全力右ストレートなんて、フェザー級のボクサーが耐えられる訳がない。

(避ける最悪守れっ…!!!)

大振りで踏み込むリカルド。

隙が大きい、広すぎるせいでゴンザレスは錯覚を起こしかけるが、

カウンターを合わせようとするのは御法度だと知っている。この男、確実にゴンザレスを打ち抜く覚悟を決めているのだ。ミキストリの一撃を与えようとも、今のリカルドには通じない。

引き絞られるリカルドの右拳。

大きくバックステップをして射程距離圏から脱出した、そう思った矢先。リカルドは瞬く間に左ジャブのフェイントを利用して、重心を前に移した反動で更に距離を詰めた。

溶けた溶岩の上に立たされた。

距離の開かない現状をそう錯覚する。泣き言は終わりだ、取れる手段はガードのみ。

視線が合う。

考える暇は、ない。

太陽の表面から舞い上がる灼熱の拳が、ゴンザレスの身体を捉えた。

(防いだ——つ、あ)

リカルドは確実性のあるボディストレートを選んだ。当然だった、相打ち狙いを実行するのは流れを止める一発を打ち込むためだ。万全の表裏アスール・ミキストリ・死神のヘッドショットを狙えば、リカルドといえども外す可能性は大いにある。

ゴンザレスの読みは当たった。そして、一杯食わされたことに気づいた瞬間、ゴンザレスの顔面は灼熱に飲み込まれた。

「なっ!？」

頬を打ち抜かれて身体が衝撃について行けず、たたらを踏んで後退する。重心が定まらず、退がってよろめいて、コーナーに突っ立っている自分に気づいたとき。

脳みそを溶かす熱が放出されて、リカルドが背を向けている状況のなかで意識が戻った。

(やら…れた)

響き渡る第1ラウンド終了の鐘。

寂れた街に吹く風を浴びた気分に陥りながら、ゴンザレスは自陣へと戻っていく。

荒れたリングの跡に唾然としていた板垣が、ようやく飲み込んだ状況から言葉を捻り出した。

「本命は左ジャブ……!?!」

「右も全力だったよ。左ジャブは後付けに見えた」

「だからゴンは騙されたんや。」

左ジャブ打つ気配を微塵も感じへんかった」

渋い顔をしながら、幕之内と千堂は身震いさせられた2人の攻防を言い当てる。

「ポイント取ったんは間違いない。せやけど、それ以外をはたき落とすしていきおった。」

最後の最後、たった1発のジャブでな!」

「ゴンザレスさんの流れは!?!」

「顔を見れば分かるよ」

椅子に座るゴンザレスの表情は、勝負の分岐点に臨むものと同じだ。開幕の緊張感は抜けきれず、壁は未だ遠くにある。

「振り出しに戻された」

相手に勝利の種を持たせることはしない。常に自らが試合を有利に進めて、勝利に落とし込む。

ここまでするからこそ、リカルド・マルチネスのボクシングは無敗神話となったのだ。ならばゴンザレスに有利な雰囲気、観客の期待感すら与えないのは当然だった。

リカルドに傾いた会場の熱。

想像を絶する攻防を前にして、幕之内は震える拳を握り込むことしか出来なかった。

数少ない弱点

凶気を灼き払った最後の左拳。

ゴンザレスが焚き付けた優勢の熱意を、太陽の核爆発のような一瞬の熱量で吹き飛ばしていった。

身が凍えるような一手に震えたブラスは、コーナーに戻ってきたゴンザレスを座らせて肩を叩く。

「最後、何をされたか分かったか」

冷静に、しかし焦りを隠せない言動。

1ラウンドを軽々と否定する拳を見せつけられて、少なからず焦りに侵食されていた。下手を打てば、当たりどころが悪ければ凶気が暴走する。死に急ぐような事態だけは繰り返してはならないと、ゴンザレスの瞳を覗き込んだ。

「無理やり押し戻された。」

自分自身を見失わせるための拳だな」

「あ、ああ！そうだ。だが焦るなよ」

「ブラス。今の俺には効かない」

漢気良く笑いながら肩を叩くゴンザレスを見て、気負っていたのは自分だと気づく。

理性と凶気、共に心が強くなった。

「そして今の俺は、2敗した時と違う。大丈夫だ」

「…その通りだな。お前は最高の挑戦者だよ」

理性が返す眼差しを信じて、待つ者としての役割を果たすため、ブラスは不安の消えた心で力強く頷いた。



第1ラウンドで実力を発揮したゴンザレスはいま、第2ラウンドの

幕が上がったリングで寒気を感じていた。

『死神の超絶技巧を真正面から迎え撃つ太陽神！』

ひと時は味方についた観客ですが、無敗神話に再び取り込まれました。ここから巻き返せるか、それとも過酷な環境に果てるか!?

挑戦者の壁である第2ラウンドが始まりました!』

リカルドの様子はなにも変わらな。落ち着いて観察すれば1ラウンドの時よりも力みが無くなっている。神話の心理を見透かすという愚行を犯すような、物理法則を越える気概で観察に集中する。

(コーナーから1歩ずつ慎重に出てきやがる。

怖気付いた筈がない……カウンター狙いか?)

彼に生半可な心理戦は通じない。リカルドのボクシングは人間が到達する限界点である。対戦相手を観察し、思い描く理想像を前提に試合中に望む、"アインシュタインの理解力"が最たるもの。

(理想像を越えたら暴力に切り換えると思ってた。

データの想像以上の執着心を捻じ伏せに行った時、センドーの野性に応えたのを見てそう予想していたが)

どうやら違うらしい、と。

自分の考えが誤っていると判断した。

自惚れと言われればその通りだ。たかだか第1ラウンドを越えた程度で、リカルドの神判は――

(……バカか。アンタの判断に不満持つなんて)

神判なぞ知ったことか。

表に浮上しかけたミキストリを抑え込んで、潰されかけた調子を思いつく。第1ラウンドを有利に進めたのは自分だと自覚している。最後の一手こそ勢いを削ぐものだったが、2度目は通じない。

(ちよいと勇み足りない俺のせいだろう)

誰もが息を飲む睨み合いの途中、

『同時に左が出る――っ!』

観客たちの不意を突くような立ち上がりは然し、リング上の2人には読めて当たり前の行動だった。

ゴンザレスが自分の予想の過ちを修正していたように、リカルドも

またインターバルの1分では解けない疑問があったのだ。お互いに相手の出方を伺うことで確認作業を終えて、全くの同時に動き出しただけのこと。

第2ラウンドの開幕はスピード重視の左拳から始まった。同じ左拳でも込めた意味は違う。ゴンザレスは自身の迷いを吹き飛ばすためのモノ。そしてリカルドの方は、

「力業だ！強引に当てにいったー！」

「先に流れを作りにきおったか。打ち合いなら望むところや！やったれゴン!!」

フェザー級の頂点に君臨する腕力を以って、冥府の死神を神話の舞台に迎え入れた。

『第2ラウンドはゴンザレスが越えられなかった壁だ！』

攻勢に出るリカルドとどう対峙するか注目が集まる!!?』

2発目を先に打ち込んだのはリカルド。

眼前で受け止めたゴンザレスが押し飛ばされる姿に、暴力が現れたかと驚きと期待に観客が注目する。しかし観客の地元民の反応とは真逆で、千堂はいち早く暴力の姿ではないと理解した。

ただ、あまりにも暴力的な行動に観ている者は息を吞まずにはいられない。3発目、4発目と続けざまにリカルドが放つのは左拳、それも一辺倒。芸がない……と思ったのも束の間、ゴンザレスの身体が前に出ないことに気づく。

「なんやゴン……さっきまでの勢いはどないしたあー！」

千堂の怒号を掻き消すリカルドの左拳。

反撃の体勢を整えるゴンザレスがカウンターを合わせようとして、
(くそっ~~~~!!?)

リカルドの左拳が僅かに先に届き、反撃の体勢を無視して強引に左拳を振り込んでいく。

(予測は出来る……だが反撃は——)

左拳、左拳、左拳、左拳……左拳。

左足を前に置いて、右足を前に出しながらも、リカルドの左拳がゴンザレスの挙動を見逃すことはしなかった。

反撃の予備動作に、予備動作を利用したフェイントに、リカルドはお構いなく確実に打ち込んでいく。

(手数が——！)

裏をかくようなフェイントをリカルドはしない。愚直なほどゴンザレスのフェイントに付き合い、真つ向から肉体を穿ち抜く。多くの手数で以って流れを取り戻す：或いはこのままK.Oを描く、それだけのつもりで。

ついにゴンザレスのガードはリカルドの左拳の芯を捉えきれず、冥界を灼き尽くさんとする威光が地上を裂いた。頬を拭うような一撃に歯が揺れて、届きかけた神話の玉座が遠退いた。

(こいつ、ムチャクチャしゃがって……！)

そのボクシングは俺たちを倒すためのモンか!?)

ゴンザレスに表裏^{アスール・ミキストリ}・死神を許せば不利になる。そのために自分の経験則をフルに使い、飛び出さんとする凶気を沈めにいくのは合理的でリカルドらしい。

烏澁がましいとは思いつつも、ゴンザレスは表裏^{アスール・ミキストリ}・死神の対応をリカルドが避けていると判断した。だから分かってしまうのだ、その左拳が打ち抜いている相手が自分たちと別にもう1人いることに。

(俺たちに当て嵌まるボクサーだあ?) (説明つかねえんだよ。空振りだつて俺が避けようとした場所だぞ)

名前も知らないもう1人のボクサーごと、左拳の一打で焼き払える範囲に入ってしまう事実^{ミキストリ}に悔しがる。その誰かと重ねられるのは心外だが、実力を出せないようでは話にならない。

(チツ、しやらくせエツ!!) (ま、待て……！)

呆れるほど縮こまる理性の姿に腹を立てた死神が、勢いを閉じ込めるガードを放り投げて飛び出した。

(単純な話だよ、アルフ)

落とした盾、代わりに携えた凶気を見据えて。

ジャングルの奥底で対峙するような錯覚を受けたボクサー、ウォーリーを捉えるに至った結論をリカルドは思い出す。

理論の通じないボクサー、即ち“野性”を軸とする異例。千堂と

ウォーリー、2人との攻防がリカルドにもたらした成長値は10の防衛戦でも補えないほど稀少価値があった。

(アルフとミキストリ視点でボクシングをしているだけさ)

無敗神話が未踏という数少ない世界、野性。

リカルドは2人の野性と対峙することで、長年知ることのなかった野性の視点が見えてきていた。予測困難なスタイルで攻めるボクシングは、理性と凶気が混同する今のゴンザレスと似ている。

1人は千堂 武士。

そして、もう1人は。

試合1週間前、リカルドの過去の過去についてゴンザレスが語っていた頃。

リカルドはジムで最後の調整を行っていた。

限りなく試合に近い形で、既に5ラウンド目の終盤に差し掛かるとき。捉えた目標に向けて、左右のコンビネーションを絶え間なく打ち込み、同時に降り注ぐカウンターをステップとスウェーで避ける。

試合でも見ることにない技巧を駆使するほど、相手の動きはボクシングの理りを呆気なく壊す存在だった。

「暴力って名前なのにディフェンスも出来るなんて、やっぱりすごいね！」

そうして最後の3分間、リカルドが本気の手応えを確かめ終えたところまでブザーが鳴った。

リカルドとのスパーを終えて尚も揚々と笑うのは、WBAジュニア・フェザー級王者のウォーリーだ。

「凄いな。リカルドと1週間もスパーをして、尚且つダウンしなかったボクサーは君が初めてだよ、ウォーリー」

「それは光栄だね。実のところ、ウォーリーならダウンを奪えるんじゃない」

らないかと期待していたが、そう甘くはなかったな」

リング上を見ながら話しているのはリカルドのセコンドであるビル。そしてウォーリーのトレーナーであるミゲルだ。

リカルドとのスパーが実現した経緯は、ウォーリーがゴンザレスに試合を断られたあとすぐだった。リカルドに先を越されたウォーリーは、ミゲルに頼んでスパー相手を取り付けていた。

試合を断られた時にゴンザレスにスパー相手を申し出たところ、既に決まっていると断られたことによる腹いせもあるとか。

「帰ったらすぐに防衛戦がある。お暇しようか」

メキシコに来るまでは膨れ面のウォーリーも、この1週間で更なる天上を知ってご満悦となった。次の挑戦者が気の毒なことになるのは言うまでもない。

「次はリングの上で会おうね、リカルド！」

笑顔で手を差し出したウォーリーに応えながら、試合の返事については首を横に振る。

「まだ返事は出来ない。」

待ち侘びた試合なんだ、彼らに集中したくてね」

「ふーん、そうなんだー。だからゴンザレスは僕の挑戦状を無視したのかなー」

「…チヨウセンジョウ？」

「そーだよ！ニツポンの風習！心の底から試合をしたい人に送るメッセージのこと！」

身支度をしながら話すウォーリーの言葉に興味を示す。

ニツポン、チヨウセンジョウ、メッセージ。リカルドにとっては伊達から受け取ったリベンジが当て嵌まる。不意にあの試合を思い出して、力強く拳を握るリカルドを見ながら。

（本当はリカルドにも挑戦状を持ってきたけど、いま渡したらゴンザレスの二の舞になっちゃうね）

ウォーリーはバッグから取り出そうとした挑戦状を隠すように奥に押し込んで、皺くちやになる音を誤魔化すように立ち上がる。

「それじゃあね。僕も試合があるから帰るよ」

荷物を抱えたウォーリーを見送るリカルドは、野性を体験し尽くした感謝を込めて見送る。

「グラシアス、ウォーリー」

「うん！グラシアース！」

満面の笑みを受け止めて、凶気との予行演習を終えたことを確信したりカルド。まだ自分にも成長の余地があることを実感しつつ、最後の調整のためにジムに戻っていった。

—

—

リカルドにとっては偶然の産物だが、そのお陰で数える程度の弱点が補完されつつある。

『強烈なカウンターが死神に突き刺さる！このラウンドは完全に王者が流れを掴み取った！』

凶気を野性と重ねる強引な理論は、無敗神話の頭脳によって奇しくも合致されてしまった。

「ゴンザレスさんが後手に回ってる…！」

「対応が早すぎる。ワイはこれで一気にやられた」

理性の動きを単調化させることで、リカルドは凶気を炙り出して行動をコントロールしにいつている。

勝利への道筋をいち早く見つける、失敗からの学習能力の高さは正しく世界最高峰だ。

(…野性を体験した程度で倒れるなら、君は2度目の試合からなにも変わってはいない)

2つが重なる一点目がけて放たれる左ストレート。

躲せるはずの場面を直撃してしまったのは、ゴンザレスとミキストリの理論では解読出来ないリカルドの理論があるせいだった。

(君のボクシングは自傷の拳となる)

絶対の理論、その一端に2人は触れている。

出てくる感想は絶望。自分の過去を否定してくる現実には、身体と心が滅多打ちにされていく。ここで反撃出来なくて、いつ拳を打つというのか。やる事が分かっているのに、目標まで届く拳は出せない。

野性を知っただけで、たった2ラウンドの時間を与えただけで読み解かれるアルフレド・ゴンザレスに、意味は■■。

(……………これ、は…)

ひび割れた心の更に下から、電流のような光が走る。

イメージでしかないソレはまぶたの裏で確かに光る。

■■。ない。■■。ある。

ない。■■。ある。■■。

「頑張つてー!」「負けるな!」「あと10秒です!」

■■。ここに、言葉は要らない。

俺は、覚悟を決めてリングにいる。

(コイツはお前を倒す為に持ってきたんだよ!!)

無敗神話に取り込まれつつある凶気を、内側からの雄叫びで目覚めさせる。

(……………別に暴走してねえよ。潜り込むタイミングを測つただけだ。成果は無えけど!)

ミキストリは我を忘れている訳じゃない。どうしても癖で前に飛び出してしまふ。そこだけをリカルドに見抜かれて利用された。俺も焦っていたせいで制御に手間取ったが、センドーたちのお陰で思い出せた。

意識が繋がった瞬間、大きく飛び退く。

成果無し、1ラウンドのリカルドのような手は打てない。だからと打たれる訳にもいかない。だから、潔く退いた。

第2ラウンド終了のゴングが鳴る。

『過去の忌まわしき影を追い越した挑戦者!ですが表情に喜びは一切ありません!孤高の太陽神との距離を見せつけられてしまった!!?』

第2ラウンド踏破を成して無敗神話に近づいた筈だが、更なる聳え立つ壁を目撃したことでゴンザレスの表情には陰りが――

(なあ、作戦を変えるぜ)

——陰りを食い散らかした理性がいた。

まだ絶望に染まっていない部分がある。一方的に打たれ始めたとき、ゴンザレスの内側は確かに絶望が湧き出ていた。

然し、2人には絶対の骨子がある。千堂たちとの練習だ。絶望に片足が捕まったとき、もう片足は希望で固定されていることに気づいた。

(なんだあ、ビビったか)

(そーだよ。勝ちたいだろ？ビビってやろうぜ)

(……………聞かせろ)

コーナーに向けて浮かべる凶^{まが}つ笑みは、凶気が嫌な顔を浮かべるような最短距離を提示していた。



インターバルに入って「成る程」と呟いた千堂。

アスール・ミキストリ
「表裏・死神は見切つとらんな」

言い切った千堂に対して、板垣が純粹な疑問を投げる。

「どうして見切つてないって分かるんですか？」

いまのラウンド、リカルドが2人をコントロールしてるようにしか見えませんでしたよ」

左ジャブを掻い潜ったのはミキストリだった。

そこを何度もリカルドは狙い打ちしている。アレで見切つていないと言うほうが無理ではないか。

「なんや、分からへんか？」

幕之内はピンときたみたいやで」

「本当ですか先輩!？」

「狙い打ちだよ。ミキストリに狙いを絞ってパンチを当てに行ってる」

「そこは気付きました。けどそれって、見切られたも同然じゃないで

すか？」

「片一方をボコればいつか倒れるさかいの。やけど、ゴンの方は打たれてないで」

「ミキストリが出やすいコンビネーションで攻めていた。

あれはわざと受けたんだ。過去と同じ轍を踏ませないよう、狙われるパターンをリカルドに出させた」

「ミキストリは切り札と弱点を兼ねとる。体力のある序盤なら、被害を最小限にしてリカルドの手札を見れる。

どうせミキストリは暴走しとったやろしな！」

次の対応を取るために身を削った。功を奏するかは、知り得た情報を握るゴンザレスのみぞ知る。

「リカルドを相手に、身体で覚えようとするなんて…」

殴り勝つ、絶対の理論を組み立てているであろうコーナーの死神を見ながら、耐久力に乏しい板垣は身震いした。

あの拳は1発だって受けていい代物じゃない。幕之内のボディブローのような貫通力がある。受けの技術で誤魔化す限度はたかが知れているのだ。

「考えはあるみたいやし、暫くは見守るしかないな」

「リカルドにはバイオレンスもあります。長引けば不利になる……どうか、それまでに」

突破口を見つけて、と。

3人はゴンザレスたちを信じて待つのみだ。

化学への試練

リカルドと試合するにあたって、解消されていない問題がある。試合の反故だ。

3年前、ゴンザレスは世界前哨戦に勝利している。幕之内を降し、リカルドへの挑戦権を得たゴンザレスは、いまのキミとは、試合を組まない”とリカルドに返答されて試合を流された。

なぜ、試合を反故にする必要性がリカルドにあったのか。3度目の試合はそこまで神聖なもののだろうか。

(俺は…確信している。)

リカルドには3度目の試合をする覚悟が無かったんだ)

アーティットから聞いた話から想像するに、あり得ない心を読み取ってしまった。だが間違いなく、リカルドは故意に3度目の試合を……ゴンザレスの引退を遠ざけている。

(全部、自分の思う通りにいかねえと気が済まないか?)

余計なお世話だ。然し、センドーとの試合がなければ実力を出し切れなかったことも事実。

リカルドの思考を読めない自分に腹が立つ。そして、アーティットが自分に事実を話したあと、この事を言い当てたことを思い出すだけで悔しさが溢れてくる。

去り際にアーティットはこう言った。

”アイツ、お前の底力を測れてないぜ。自分では実力を引き出せないから、出来るやつを待つんじゃないやねえの”

それはリカルドのエゴだ、願望でしかなかった。

ただし、その願望が最も重要だから反故にされた。

なら3度目の試合を受けたのは、倒れるため…負けるためにリングに上がったということになるのか?

違う、それはない。俺が保証する。リカルドのやつ、”アーティット以外のボクサー”には罪が許されないことを証明したがっているん

だ。

何故かって、それこそ簡単な話だろ。そりや…。

——と、ゴンザレスはここで思考を止める。

今は第6ラウンド、2分間が経過したところだ。

ここまでの状況は拮抗の一言に尽きる。

ゴンザレスとミキストリのスイッチ、表裏・死神アズール・ミキストリに驚異的な早さで慣れ始めたリカルド。

そして表裏・死神アズール・ミキストリを駆使しつつ、リカルドの動きを見切ることに全力を注いだ2人。

無敗神話は、一光年の罪を償うために。

最凶の神は、一寸先の夢を掴むために。

前半戦を捧げて読み合いに徹して、最短でケリを着けるための材料集めに奔走した。

そのお陰でゴンザレスは被弾していないが、ミキストリの感情は被弾したように荒ぶっている。

(うざってえ……。俺以外のヤツを見やがって)
ここまで時間を使って見えてきた。

リカルドの野郎、意識を過去に置いている。

全部じゃない。ちよつとだ。砂場の砂を右手で掬い上げたときに残る、小さな砂山くらいの意識だ。

証拠だど？リカルドの理解力に任せて、身体が動くまま3ラウンドもノーダメで捌けたんだ。これで十分だろう。

(お前が立ってるリングはどこだ)

この拮抗した時間を生かしてやったと言われている気がして、つい苛立ちに揉まれそうになる自我を落ち着かせる。

僅か数秒、第6ラウンドの終わりを聞き届けるまで時間を費やした。

(まずは勘違いを叩き直す)

勘違いを終わらせて、その後はどうするか。

考えない、もう結論は出してきた。いまはリカルドが最も弱く、本人が意識していない程度の驕りがある。終わらせれば、否応にも知るだろう。リカルドの真の本気を。



冷ややかに進行してきたリング。

相手の判断ミスを誘い、ミスを起こさないと分かれば隙をこじ開けんと手を出し続けて膠着した18分間。観戦する民衆たちの喉が声を忘れて見守るなか、誰かが熱風の流れを感じ取った。

第7ラウンド開始直後から漂う、地の底から湧き出てくる滾り。血染めのソンプレロを羽織る凶気が、笑った。

アスール・ミキストリ表裏・死神を押し付けるだけでは越えられない壁に手が届く。

同時に、無敗神話が死神を墮とす準備が整ったことを意味する。

第2ラウンドの時点で、ゴンザレスはリカルドが表裏・死神を見切る経験を終えていると察知した。元よりウオーリーがスパ―相手になっっていることは知っていた。だが、理性と凶気のスイツチを見切るには早すぎる。いくらリカルドといえど、ウオーリーを：野性を経験したから順応するのは難しい。

ゴンザレスは日々成長して、刻々と戦術を組み替える知識がある。ミキストリは理性を見て、2人に合わせたスイツチに変換できる。それを、試合開始直後の2ラウンドで見切り始める？

バカを言うな、2人のコンビネーションは無敗神話といえども前半戦で捕まえられるほど安くはない。

そこを見切れるというのなら、リカルドはゴンザレスの可能性を理解していたということに――

(見切れるからこそ、無敗神話なんだろう?)

考えが甘かった。ヤツは1000を学んで1000を読む漢。

自分を倒せる可能性を常に見据える神なのだ。

自分で否定したい事実を受け入れたのは第3ラウンド序盤。

既にリカルドは捉えていた。暴力を使うまでもなく、化学の全力で倒せると確信されていた。

だから6ラウンドを使つて考えた。アーティツトの言う、自分の底力とやらを。なにを使えばリカルドの予想を上回れるのかを。

(……………やつと好きに出来るんだな?)

(ああ。もう遠慮はなしだ。勝算は4割だ)

ゴンザレスの太鼓判を聞いて、ミキストリが長い静寂を切り裂いて今際の際に向かつて駆け出した。

「ミキストリがテンポを上げた!」

「2ラウンド目のノリに戻った!」

「やつとかい、待たせおつて!」

最初で最後の機会になる。絶え間なく攻撃を仕掛けて、一瞬の隙をこじ開けるまでで成功率は5割。そこから一撃を打ち込めば状況は大きく前進する。

(先手を譲ろう、アルフ。カウンターで全てを貫う)

ミキストリが射程距離に入った。まだリカルドは拳を放たない。半拍だけタイミングをずらしたことを見抜いた。

これはゴンザレスの仕業だ、ミキストリには不可能な芸当というのはこの試合の最中で確信している。だから、これ以上の罫は張れない。

吐息が漏れる。

同時に、ミキストリの右肩のモーションを捉えた。

(……)

ガンマンの早撃ちクイックドロウよりも速く、精密機械のコピーよりも正確に右ストレートを放つ。

この6ラウンドで収集した情報から繰り出す、回避不可避のカウンター。試合中の相手の打撃箇所を記憶し、最も狙われる場所、そして狙われていない場所を常に把握する『「アインシュタインの理解力」』。

伊達のハートブレイクショットすらも見抜いた、リカルドの至高の頭脳を以つてしても、ミキストリが避けることなど読めもしなかつ

た。

(はっ！当てるのなんざ重要じゃねえよ)

(ミキストリがシヨルダーブロック…!?)

アッパークットがリカルドの顎を打ち上げる。

『つ……遂に直撃!!? 4ラウンドぶりの重低音がアレナ・メヒコに響き渡る!』

リカルドは読み間違えた。避けるのはゴンザレスの役目で、攻撃がミキストリの役目。替わらずに直進するミキストリ、そして黙って見ているゴンザレスに驚愕した。

面食らったリカルドに続けざま攻撃を仕掛けるのはゴンザレス。慣れてきた…と言うよりも、見切れると思った直後のスイツチだ。自分の自信が足枷となり、ステツプイン直後の左右の打ち合いを再び見誤る。

(酷え野郎だな!!? 俺が誰か分かんねえのか!?)

(またミキストリかつ!!?)

リカルドを一瞥するミキストリが右フックをお見舞いする。ダツキングしてカウンターを見送ると、重心を半歩先に置いて左フック。バウンドするボールを扱うように左右のフックを使い分けて、都度4度。

(大事なのは、コーナーでお前をブン殴ることだ)

自力で立つことの叶わなかった化学の瀬戸際に、理性と凶気は6ラウンドという最短距離で立ってみせた。

『お、追い込んだー!ー!ー!!?』

あのリカルドが! コーナーを背負わされている! センドーに続いて2度目の奇跡を我々は目撃している!!』

民衆が騒めき始める。

リカルドを追い込んだ数十秒の攻防に理解が追いつかない。気づけば神が祭壇の供物に捧げられようとしているさまに、ただ目を見張るばかりだ。

彼らの驚きは止まらない。コーナーを背負うリカルドという絶好の機会を前にして、凶気の構えが落ち着いたせいだ。

(なぜ止まる)

両者の動きが止まった……：ように見えるくらいに、時間が緊張感で圧縮される世界で。交差した視線が語り合う。

(コーナー背負っても玉座に座ったみてえな顔しやがる)

(私を待つのか?…：チャンスを捨てるのか?)

瞬きで意志を咀嚼して、自分で理解を深める。

小難しい考えに走ったな、とミキストリは神の思考を読んでから。

(神ぶってんじゃねーよ)

——と、笑ってみせた。

それはミキストリの悪い癖だ。驕りだ。

だが言った。態度で現した。そうしなくては、彼の逸話を打ち砕いたときの噛み応えを楽しめない。

加齢による肉体の衰えがない。

全盛期を永遠に維持するとも言われる “コアトル^不の身体”、そして

“インシユタインの理解力” によって世界最難関の壁を築いた。

それもこれも、どれもが心を過去に引き留めている。時の流れに逆らって、リカルドの心だけはアーティットを倒した時から動いていない。そんなヤツに……それすら越えられずに足踏みしてきた自分が立ってしようがない。

(どーしようが勝手だが……)

吹き飛んでくる最上最高級の左拳を両腕で受け止めながら、ミキストリが怒りで手を染める。ここに来て、リカルドが舐めプしていることに業を煮やした死神が強引に前に出た。

(テメエも試されてんの分かってつかア!?)

あからさまに変化した怒りの拳を見逃すリカルドでは無い。寧ろ、これを待ち望むための意思表示で放った拳に、即座に捕まった獲物を大歓迎する。

軸をゴンザレスの外側に置き、飛び込むような行動から放つのは右フック。左拳のガードはあるが関係ない。ミキストリのガードは元より手緩いのだ、ガードごと打てば自尊心ごとへし折れる。

鮮やかなステップインからの右フック、反応出来るタイミングじゃ

ないという自信があった。例えゴンザレスに替わろうとも、拳の着弾範囲から逃れる時点で捉えている。

だから、入れ替わったゴンザレスの瞳が諦めていないことに驚きを隠せなかった。

「……………?!」

ゴンザレスが上半身を頭半分だけスウェーして躲す。リカルドが想定していた、スイッチしても回避出来ない場所から…ゴンザレスは左脚力で強引に脱出してみせた。

そこから間髪入れず死神が空振った右拳を再び装填、折り畳み、直角に曲げてリカルドの顔面に右拳を叩きつけた。

『』

刹那、リカルドの聴力は断線する。

解説の声も、民衆の熱気からも隔絶された世界で、無敗神話に踏み込んでくる最凶を見つめていた。

(狙ってんのは俺たちもなんだよ)(ざまあみろ!)

2人の心の咆哮がコーナーストを越える瞬間、リカルドの頬は右拳に打ち抜かれていた。

「あのリカルドを騙し抜いたのか!」

「あの踏み込み…練習の成果が出てる!」

「クリーンヒットや!効いとるで!!」

中敷きを削り落とす軸脚の力を解放した直後、再び軸脚を前進に転換する。幕之内の突進を越える勢いが、リカルドの読みを大幅に狂わせた!

いつ現れるか不明の理性と凶気、表裏アスール・ミキストリ・死神がリカルドを圧している。

リカルドを試そうとしたボクサーは星の数ほどいた。だが、実際にリカルドを品評出来たボクサーは1人としていない。自身を越える踏み込みも、反射速度で捉えきれないモーションも未体験だ。

「よーやく壁を1つ越えたぜ…!」

この刹那の攻防こそ、ゴンザレスが脳内で導き出した最初の答え。崩れ始めた化学に勇み込んで、油断なく追撃を開始する。

無防備を晒したりリカルドに3度のコンビネーションを打ち込んだ直後、視線が交差したのを確認する。間髪入れず飛んできたカウナーをゴンザレスが見切り、ダッキングで躲して側面に位置付けた。リカルドの標準から外れるという離れ業を成して、立ち直ろうと脱出経路を模索する身体に渾身の一撃を次々と打ち込んでいく。

『攻める攻める攻める攻める!!!』

あのリカルドが復帰に時間を要している!

あのゴンザレスが一方的に神を追い詰める!』

十数秒の攻防を生き抜いただけで、思わず吐息を1つ挟みたくなくなる。

リカルドはまだ化学に基づいて行動しているが、既に暴力を出す機会を伺っているのが伝わってくるのだ。

側面から右ストレートを放ち、ガードを崩して左ボディを叩き込むときも、視線はこちらの足元と重心を見ている。

こちらが雰囲気呑まれたとき。

リカルドの見据える隙を踏んだとき。

若しくは、このラウンドが終わったとき。暴力は瞬間に姿を見せて、冥界の蹂躞を開始する。いま倒しに行くしかない、明確な機会を逃してなるものか。

「……せやけど、ここまですても倒れへんか」

「リカルドがいつまで許すでしょうか……」

「直撃してるんだ。攻め続ければいつか倒れる!」

打ったびにダメージは蓄積していく。

手応えはある。だが、顔色は変わらない。リカルドは冷静に自分が打たれる時間を過ごしている。その様子が人間離れしていて、この時だけは神のようだった。

ふと思った。

リカルドが疲弊する姿を見たことがない。

(んなワケ、あるか。こいつで倒してやる)

右拳を握り締める。

疲れない人間は存在しない。リカルドは超人的な肉体の持ち主だ。

膝を着くような衝撃を当ててしまえば、歴史が変わる。

だから、右拳を打ち出した。

リカルドの左フックに合わせて、最高のカウンターを着弾させる。誰もが頷く完璧なタイミングで当たった右拳にダウンを期待する最中、ゴンザレスの顔色が青ざめた。

手応えが……無い。

無いどころか、左フックに力が入っていない！

力が入っているのは両脚だ。

(こいつ、後ろに飛びやがった……！)

油断はしていなかった。そんなものはない。

だが、想定は出来なかった。あのリカルドが後ろに飛び退くことなど、過去の1度としてなかったからだ。

(私を越える……その夢を無謀だとはもう思わない)

天上の門が開く、陽光が地上に差す。

天に挑む愚かな漢を照らす。

現代化学を築いた人智を蹂躪する神が姿を見せる。

降り立つリングから、民衆は世界が軋む音を聞いた。

「……来おった」

「つ、遂に……！」

「バイオレンス！」

暴力を知る者たちが震撼する。誰が言わずとも、拳を掲げずとも分かってしまう。人が自然災害に呑まれるように、歴戦の勇姿が神に敗北することは決定した未来だからだ。

「歓迎しよう。私の好敵手として」

「よオ、待ちぼうけたぜ——」

だが、大切なことを忘れている。

ここに立つ存在は、天と地、隔てられた世界で畏れられる神だということを。

ここからが神罰の行方を決める、本当の頂上決戦である。

第7ラウンド、暴力降臨——！

暴力と闘神

世界王者として在るべき姿こそ、化学。

子供から大人へ、世界を納める頂点としての自覚から辿り着いたスタイルだ。過ちを悔いて、少しでもボクサーの未来を想えばこそ必要な檻だった。

罪人として彼に向き合える姿は、暴力。

最も強く、最も弱い。最も自由で、最も度し難い。本性を晒せばボクシングを愚弄し続ける。然るべき相手を選ばなければ、過ちを犯すこともなくなる。

相手を見定める、その表情は鬼気迫っている。

ブラスにも、千堂にも、幕之内にだってそう見える。特に幕之内は伊達戦のとき、リカルドの暴力が迫る瞬間を目撃した観客の1人だ。あの時と全く同じで、リング上の一切合切を殲滅する意志を感じ取っている。

そのせいで両拳が震えてしまう。ここまで、自分たちが暴力対策を担っていたのに、アレを見たら自分たちが見劣りするのは議論するまでもない。

だというのに、ゴンザレスは違った。

「俺は、赦してやんねえよ———！」

鬼気迫る暴力の顔に、青年の顔かこのすがたを見た。

『ここに來てリカルドが荒々しく前に出た！』

こ、これはバイオレンス……！遂に本気になった！』

2人の距離は歩幅にして2歩。

残り時間は10秒を切った。

ここでバイオレンスに乗り出した理由は1つ。

(1ラウンドみてえに流れを断つためだ)

逃げて、避けても、迎え撃つても、凶気を越える暴力で流れを止めにくる。

どうしようとも回避不可能のリカルドの意志。そう思っていたの

も、先程までの話だ。俺たちは1度、このラウンドでリカルドの意志を押し退けている。

だから怖くなんざない。

「凌いでくださいー!」

「やったれゴン!!」

「負けないで!!!」

激励に押されて、ミキストリも飛び出した。

リカルドはそれを確認して、右拳を振りかぶる。あの太振りは隙だらけだと相手に誤認させるためのもの。数少ない癖を確認し、刹那の間だけゴンザレスが前が出る。

一点、瞬く間に3点の挙動を穿つ。

前進する瞬間。

前足が浮いた刹那。

軸足が離れた合間。

暴力の最中に向けて、3種類の左ジャブを放り込んだ。

「ワイを止めた左やないか!」

「更にキレが増してますよ!」

「でもリカルドに届いてない」

リカルドに受け止められはしたが、勢いは弱まった。

2人同時に踏み込む、そのエネルギーに差は無い。

「シッ——!」

「フッ——!」

暴力と凶気、最強同士の太砲をガードで受け止めたとはいえ、2人とも微動だにしなかった。

「1ラウンドと同じ手は通じねエぞ」

たったの数秒とはいえ、神の暴力を真正面から迎え打った。何気なく実行しているように見えて、この時間の拮抗は2人の成長の証である。

『互いの右を互いのガードに打ち付ける!』

被弾無しの相打ちで第7ラウンド終了です!!』

ゴンザレスたちは第7ラウンドで大きく躍進した。

1度目の敗北を越えて、2度目の敗北を押し留める。
世界を見渡しても5人と届かなかった領域に、堂々たる進出を果たした。血の滲む努力と身を焦がす想いを引き連れて、天上の門を開放ったのだ。



「大丈夫かりカルド!？」

リングの上で、リカルドがパンチで効いた姿を見たのはいつ以来か。

世界王者とのスパ―でさえ被弾はないというのに。

「狼狽える必要はない。見ての通りだ」

「な、ならいいが。」

化学では反応が追いつかなくなったのか？」

「……………いや、それは無い。私がよそ見していたせいで遅れた」

「何を言うんだ。ずっと見ていたじゃないか」

「心の話さ」

その言葉を聞いて、ビルは半分を理解する。

(この試合で思い返していたのか、アーティットのことを。だが、なぜゴンザレスのときに……………)

リカルドの気を逸らせるモノは数少ない。

試合中、被弾を許すようなモノともなればアーティットくらいなものだ。原因は分かっても、理由は聞いても教えてくれない。アーティットとの問題が起きて以降、その話題に触れることはないのだ。

口を滑らないほど、頑丈に鍵をかけているからだ。

ビルが口を出せることは無くなってしまった。

(忘れたことはない)

…そのせいで君たちを怒らせてしまったか)

神は恥じた。

これは何年ぶりの感情だろう。分からない。最後にこの感情を出したのは、それこそアーツととのスパーのあとで……

(恨んでくれ、アルフ。君がどれだけ怒ろうとも、この想いを忘れて試合は出来ない)

思い出しかけた後悔を押し殺して、暴力が支配せんと立ち上がった。



ゴングと同時に殲滅に走る2つの頂ぎ。

陽光が侵入者を殺さんとする舞台は、神の積年の罪で造られている。

そんな場所を死神は開け放った天上の門を潜り、驕り昂る馬鹿野郎の根城を踏み荒らす。足元の石盤が壊れようと構いはしない。もうじきこの世界は闇に沈むのだから。

2つの頂ぎが中央で拳を交えた瞬間、観客は互いの影が消え去ったような幻覚を魅せられた。

『な、何かが弾け散る音が聞こえた!? 2人の拳の音の音はですが、なにを打ったのか速すぎて見えない!!』

2人は無傷で最初の衝突を終えた。

瞬きの間に終わった今の攻防は、どうすれば人間に出来る動きなのかを肉眼で見切ることは千堂でも不可能だった。

「はっは———!!」

「……………っ———」

力任せの舞踏会。

心血を技術に宿し、これまで研究し続けてきた想いに身体を重ねる。全ての信頼を受け取り、本性が姿を顕した。

直線、弧線が美しく咲き誇る。あまりにも完成された理想を、リカルドだけは次に来る動作を理解している。

いまでも自分が描くボクサーの終着点に登り詰めてくるのだ、あまりの成長速度に反射神経で理解するしかなくなってきた。

「っはあー！」

理想を越える直前、凶々しい星屑が神話の項に傷を付けていた。

幾つかの文字が掻き消される。代わりに赤いインクで危険だと書き記して、次の項に進む。

身体が破れるからどうした、とでも言わんばかりにリカルドは止まらない。切り札であるバイオレンスを使って1分、直撃は無くカウンターが頬や身体を掠めても顔色を変えない。

無敗神話の項を1枚破いても、死神は歓喜1つ湧かない。

いま心は押し殺している。いま優先するべきものはバイオレンスを倒すこと。直撃1つは相手の射程距離にいるということだ。笑みを溢すのは自殺と一緒だ。7ラウンド分で培った表裏アズール・ミキストリ・死神によるアドバンテージを刻一刻と消費しているに過ぎない。

(想定内だ。嵐を横断するような難業だが、準備は済ませてきた)

バイオレンスの圧倒的な手数を、表裏アズール・ミキストリ・死神の酷使によって手数で相殺する。これが想定内。

そして準備とは、肉体を磨り潰すような手数を相殺したうえで、あと1手、1つの拳を直撃させること。

これが難業！

「完全に2人の世界に入りおった…」

千堂の感嘆は空気に触れた瞬間に掻き消された。

「伊達さんが滅多打ちにされたバイオレンスに、避けながら打ち返してる…!!」

表裏アズール・ミキストリ・死神が拮抗…いや、僅かに上をいつている。

「早く…リカルドが慣れないうちに倒して…!」

リングを覆うロープが今は鎖に見えてしまうほどに、リカルドとゴンザレスたちは集中力の高さに気づかないだろう。

月を撫でる熱線を横目に、ゴンザレスたちは恐れを勇気で濯いで前進する。

虧けた心を取り戻さんという決意を、無敗神話が暴力で振じ伏せにくく。

これは時間との勝負だ。

3分間、自分の全力全霊を押し売り出来るバイオレンスと、無敗神話を破る確固たる決意で準備してきたゴンザレスたち。

圧倒的運動量で上回るもよし。残り15分間で相手の底が尽きるのを待つもよし。そんなデタラメなボクサーを、これまでの努力で突破する前人未踏の地に辿り着けば勝機有り。

根比べに負けた方が、神話の舞台から姿を消すのみだ。

第9ラウンド、2分が経過した。

リカルド・マルチネスの人智を越えた能力をこれでもかか全身に浴びて、既に身体の内側は悲鳴を上げている。

重心移動をするだけで喉の奥から熱く冷たいモノが込み上げてくる。血か、恐怖心かは気づかないことにしよう。ヤツを越えるため、同じ運動量に付き合って体力が尽きそうになっている俺たちと比べて、向こうは涼しい顔をして拳を振り放っている。

第7ラウンドの10秒はインターバルで回復したにしても、第8ラウンドから第9ラウンド、合わせて5分間も全力で接近戦をしているんだぞ。拳を絶え間なく打ち出して、迫る必殺を防御テクニクを駆使して躲しながら次のフォームに移って……細かい位置取りの他に気にかける数十のことを、ひと息も吐かずに行っている。

既に脳の処理は限界に近い。練習でやったモノは既に越えている。そもそも、エイジとセンドーの時に解放したバイオレンスとは運動量が違う。

答えは分かっている、ウォーリーとのスパーでバイオレンスを大幅に強化しやがったんだ。

まだ突破口は見えない。それどころか、

「ぐ、う、、ア、、オ……………」

10秒経つ、威力が上がっている気がする。

20秒経つ、ガードする腕が痺れてきた。

30秒経つ、気のせいじゃない。

さっきのラウンド中じや気付かなかったが、徐々にこっちの拳が届かなくなっている。

この野郎、打ちながらフォームを修正してやがる…。

(ヤバい、シヨートする……………きちい、身体が…暴力、に押し潰さ、れる……………)

飛躍したバイオレンスを前にして、ゴンザレスの心と身体は天上から押し戻されていく。

ゴンザレスが一呼吸必要なところを、リカルドは一息で打ち返す。

(諦めんな…ボケが！まだやれる…まだ…！)

拳に染み込んでくる熱は増し、打ちようちよう打とガードを砕きに徹するさまにミキストリの頬が引き攣り始める。

(私のボクシングに舌を巻くばかりだった君が、命なげうを擲なげうって私を砕きに來ている)

ガードする右腕を吹き飛ばすために右拳を放ち、その勢いは予想に反してゴンザレスの側頭部を打ち抜いた。

遂に足を止めてしまった2人を見ながら思い出す。

(似ているよ…凶々しい彼の指導とね)

リカルドが嘗かつて見た、アーティットが師事する姿と酷似していた。



アーティット・キングピッチ。

彼の名を知らないタイ人ボクサーは存在しないと言われるほど、タイ国ボクシング界に光を浴びせた人物である。

その名を知らないボクシングファンでも、「WBAフェザー級王者」と紹介すれば興味を抱く者は多い。その肩書きはリカルドが保有する名前と同じで、興味の目はリカルドの何代前なのか、というところが共通となるだろう。

その男は前々代の王者であり、「闘神」と呼ばれていた。

基本に忠実なボクシングで3階級制覇を成した彼に、記者が強さの秘訣を聞いたところ、迷わずにこう答えた。

「夢を潰せ、潰した数だけ答えに近づく」

紳士的な立ち振る舞いをしてきたアーティットは、どの国でも強さの秘訣を問われれば同じ言葉を返した。

多くの批判を浴びることとなったが、それでも毅然とした態度で答えを変えることはない。終始一貫した姿勢、3階級制覇という実績、そして「軍神」と讃えられる圧倒的な強さが否応なしに逆風を跳ね除けていった。

生きる伝説を創り出すアーティットとリカルドが出逢ったのは、リカルドが国内王者に君臨して間もなくの頃だ。

「痛え……完敗だぞ、この俺が！」

なのにピンときてないな、少年？」

晴れ晴れとした天気とは裏腹に、リングで倒れ伏しながら嘆いた男の身体は雨に濡れたような汗に塗れていた。

うつ伏せの男に声をかけられた少年：リカルドは、公開スパーで名目上格下に倒されたというのに、喜色を浮かべて話しかける男：アーティットに冷ややかな視線を向ける。

「倒れた貴方の顔が腑に落ちない。まるで勝者です」

「俺の夢を潰したって思ったか！ 甘い！ 甘い！」

嫌味が通じずにハツラツと笑う男に、やはり冷ややかな態度で返事をした。

メキシコ国内王者、リカルド・マルチネス。

彼は今回、メキシコで行われる世界戦の王者のスパ―相手として選

ばれた選手の1人だ。

世界王者の名前は、アーティット・キングピッチ。

WBAフェザー級の頂点として君臨する3階級制覇者。

立場が逆転している現実を、記者たちは様々な受け取り方をする。調子が悪かったとか、足を滑らせたとか、本当に実力差で負けたんだ…と。

リカルド自身、倒せるとは思っていなかった。国内どころかアメリカのフェザー級世界ランカーを難なく倒している。だから、自分がどこに挑戦すべきなのか…階級を変えるべきかの判断をするために、タイの闘神とのスパーに応じた。

その結果がこの有り様だ。

「答えて、どこにあるんですか…」

倒してしまっただが、達成感や罪悪感はない。

ソレすらも手に入らない今回のスパーに、なんの価値があったのだろう。疑問が口から突いて出てしまったと思ったときには、アーティットの笑顔が更に増していた。

「俺の言葉を知りたいか。見て覚えてみるか！」

「そういう話…ですか？」

「大丈夫、ピンとくるさ」

外野の…記者やセコンドたちの喧騒を押し退けて、アーティットは悩める少年を導くために外へ連れ出した。

「ここは……」

「地元なら知ってるだろ。シウダー・ファレス、世界指折りのスラム街のここは夢に満ちている」

足を止めるリカルドの問いは、説明を求めるものではない。なぜ自分たちが入る必要があるのか、という批難の言葉だ。しっかりと声

も低く、不審者を見る目もしているのにアーティットは笑みを崩さない。

普段近寄らない場所でも、アーティットだけが場違いだということ
は直ぐに分かった。ファレスでは、真夜中の騒音のような扱いになる
だろう。

更には少年一人が入るほど大きなバッグを膨らませて、撒き餌と言
わんばかりに歩いていけば憂き晴らしに襲われても文句は言えない。
中身を聞いても、リカルドには必要ないの一点張りだ。

「そうじゃない…。」

「ここがどれだけ危険な場所か知ってるんですか」

「ああ。昔、知人がファレスの窃盗団に襲われてさ。ソイツら捕まえ
て説教したんだ。ナイフで腕を刺された時は相手が悪魔に見えたね
！」

ファレスの人通りのある道を歩きながら、アーティットの経験談を
リカルドは聞かされる。

窃盗団を改心させたあと、親玉から逃げる方が大変だったこと。待
ち伏せされても逃げる方法、待ち伏せを回避するコツ、子供の扱い。
リカルドがこの先で必要ない知識を遠慮なく叩き込んでいく。

嫌な顔をしてみたが、笑い飛ばされた。

「麻薬売人。強姦魔。通り魔。殺人鬼。すり。」

それだけじゃねえよ。捨て子。捨て子。無職。夜逃げ。銭無し。
捨て子。お前らの土がここにいる」

そうして歩くこと30分。

「——いた」

裏道に入っていく普通からかけ離れた青年を見て、そう呟いたアー
ティット。リカルドが意図を聞いても答えはしない。

あとを追うと、裏道の脇にぽつりぽつりと立っている人影を発見し
た。彼ら彼女らは青年と同じくらいの歳で、全員の雰囲気死んで
る。ただ立っている以上は生きていて、何かを待っているのか忙しな
く手先を弄ったり、足元で埃を立てていた。

「……………あれは、しているんですね」

観察して数秒、異質な世界に気圧されていたリカルドは、彼らの雰囲気死んでいる原因を察する。

麻薬をやっている人間が、不安定な精神に陥る直前だ。話には聞いたことがあるだけだが、目にしてしまえば特徴を聞かずとも麻薬をしていることは理解できる。

「ここで見てな」

アーティットはリカルドの肩を叩くと、陰から飛び出した。

目標は、粉の入った小袋を渡して金品を受け取ろうとする、2人がつけていた売人の青年だ。

「——なっ」

あつという間の出来事だった。

アーティットに気づいた青年が刃物を取り出すが、青年の腹にアーティットの拳が打ち込まれていた。崩れ落ちながら奇声を発する青年から小袋を奪い、さらに青年の持ち物を漁って全ての小袋を抜き取った。

小袋に目を奪われる、死んだ目をする子供たちの前で、小袋の中身を一切合切捨てて、一言。

「悪に消費されんな。ここから勝ち残れ」

無責任で、いい加減な言葉を吐いて、麻薬に縋る子供たちの前にバッグを放り投げる。アーティットを殺意の目で睨む子供たちの1人が、藁にもすがる思いでバッグを開ける。

その中身は本だ。絵本から辞典、様々な種類の知識が詰まっていた。だが、この子供たちの識字率は余りにも低い。渡したところで麻薬の代わりになる筈もなかった。

「なにを……しているんですか」

「売人の夢を潰した。退路を絶った」

「な、なぜ夢があると分かるんですか！仕方なく売人をしているだけかもしれないのに！」

「麻薬売る理由？あつても死ぬ、理屈は麻薬捨ててから言え。俺たちプロボクサーは……いいや、俺たち人間はあの売人とやってる事は同じだ」

「……………まさ、か……………」

「限られた頂点の奪い合い。夢の潰し合いだ」

思わず目を見開くほど、リカルドは彼の行動の意図に衝撃を受けた。

その表情を見て「ピンときたか！」と喜んでいた。

「育児。おもちゃ。受験。入学。便所。遊び道具。学校。勉強。好きな子。成績。卒業。就職。」

どれもこれも枠が少ないくせに、俺たちは1つの枠に1人入ろうとする。ほら、夢の潰し合いをしてるだろ？」

「なら、夢を潰すなら今だ。俺がいるから諦めろって言える」

これが答えだ！と言わんばかりの笑顔を向けてくる。

いや、事実そう思っている。信じて疑っていない。

麻薬に依存する子供たちに読めるかも怪しい書物を渡したのは、貧民街育ちを嗤うためではなく、かといって彼らに教育を施す訳でもない。1人でも良い、このバッグごと持ち去って独学しろと言っている。

この男は大勢を大切にする聖者ではなく、肉親を捨ててでも這い上がる怪物を生み出そうとしているのだ。

もしも世界王者のトレーナーに彼がついていたら、リカルドはそのボクサーこそが最強だと思った。大半のトレーナーが実行している言葉では誤魔化す切り捨てる人材を、アーティットはこうも可視化してくれる。お前という最強を作るために、こうして生け贄は準備されるんだと、現実を突きつけてくる。

「どうせ戦うなら神になれ。世界に君臨しろ。」

じゃなきゃ食われる。アイツのように、気まぐれでな」

この指導に感化されてしまったら、もう元には——
「ヤクを捌いた金で……………」

どうして、気づかなかったのか。アーティットの背後に、腕を伸ばせば届く位置に売人の青年が腹部を抑えて立っている。

彼も目が死んでいる。こうして立ち上がっているのは、感覚が麻痺

しているからか、それとも自分がリカルドの生け贄になることを恐れたからか。ただ単に殺意に負けたからなのか。

「俺が生き抜くのを邪魔すんじゃないやねエ!!？」

理由に興味はない。リカルドにとって誤算だったのは、グローブを着けずに殴りにいったあとのこと。

「——どうだ、夢を潰した手応えは」

「……………素手は痛い」

「それはそう」

アーティットを追い越して、ナイフを振りかざす青年をひと息で殴り倒して、感想を吐き出した。

もし、青年が割り込んでいなかったら。そんなもしもを考える。リカルドは、アーティットの指導に魅入られていた。邪魔がなければ、彼の横に居たいと思ったままだったかもしれない。

人として尊敬は出来ないの、踏みとどまることは出来た。

そうして彼の破滅的な指導は終わり、帰路に着いた。

「俺はな、指導する方が好きなの。何故ここに来たか聞いたな。お前に世界最強の実力があるからだ」

フアレスの道を歩きながら楽しそうに話すアーティットを横目に、リカルドは自信の答えが早く見つかった幸福を噛み締めていた。

強いこととは何か。自分の想像していたものが混ざり合って、いまも様々な答えを出している。1つの答えに拘らなくなったことで、心がどんどん広くなっていくように感じるのだ。

「んで俺が指導する気になったのは——っ！」

だから、油断した。ここが平和から遠い世界だということを、忘れてしまった。

聴覚に打ち付ける発砲音と、リカルドの身体が地面に転がったのは同時だ。

「がっ……………!？」

リカルドを肩で飛ばしたアーティットが疼くまる。

後ろでは言葉にならない奇声を上げながら、子供の姿をした死んだ目の化け物が追ってくる。

リカルドの生涯において、思考が止まった唯一の場面で。

「ア、アーティ「走れ!!」ッ」

アーティットが怒号を飛ばして立ち上がる。すぐさまリカルドを引き連れて裏道に飛び込んで、苦悶の声を上げながら走った。とにかく角という角を曲がり、リカルドは途中からアーティットを抱えて全力で逃げた。

逃げ切つて、病院で手術を終えたアーティットは、すぐに退院した。弾が右股関節を貫通していたおかげだという。

反対するコーチ陣を「試合がある」と言つて説得した。なぜ説得を受け入れたのか問い詰めれば、今回の相手は次のPFPに選ばれる噂のある、最強の挑戦者だからと言う。

「これが、夢の潰し合いだ。

……ああ、ピンと来なくてもいい。いずれ分かる」

軽量のとき、パンツを履いていれば弾痕は分からない。

だから試合が成立してしまった。

そして、アーティットは負けた。

プロボクサーとしてリングに戻ることは…無かった。



幾つもの答えを見つけた。

結果として私だけが答えを得て、アーティットは負傷のせいで敗北して引退した。これすらも彼風に言えば「夢の潰し合い」なのだろうか。答えを得た代わりに分からないものが増えた。

(アーティット。貴方のように私もフアレスの子供たちに手を差し伸べて、そして勝ち残った漢を見つけました)

幾ら待てども彼は戻らない。

頭の中で分かっているながらもフェザーから動かないのは、心残りがあ

(……彼ならば、私を潰せる。そう思いたい)

生死の境目を生き抜こうと足掻く懸命な姿を見て、リカルドの右拳が止まる――

(だから、君の心を砕くことは躊躇わない)

――ことはあり得ない。

その姿が公開スパードで倒したときのアーティットと重なる。だから、尚のこと手は抜けないのだ。

血の滲む努力と身を焦がす想いを、風前の灯火だと言わんばかりに消し飛ばした。

『あ、ああ……！遂に倒れた……倒れてしまった！』

挑戦者、痛恨のダウンンンン!!?

神話の暴力に飲み込まれてしまった!!!』

ボクシングにおける、脅威という脅威が束となった男を本気にさせた。最早ゴンザレスは、どうしようも無い終わりに向けて走ることに許されない。

2度と同じ過ちは犯さないからこそ、罪を償える。

どこまで鍛えても、この罪が不滅だと教え込む。それがリカルドの自戒であり、バイオレンスなのだ。

なんだよ、リカルド

意識がリングの上に撒き散らされていた。

ここがロープ際な気もするし、コーナーに張り付いてみっともなく泣き縋っているとも思える。或いはリング中央で大の字に寝転がって、はらわたが飛び出しているのかもしれない。

ゴンザレスは直前の記憶を失い、忘れたモノを探して肘を立てた。

「4——5……！」

「な、にイ」

レフェリーがこちらを覗き込みながら、指を立てて数字を叫んでいる。

いま、5の数字を唱えていた。4秒も気を…!?

(な、にが起きた……!?俺は、なんで倒れてる!)

慌てて身体を起こして、リングに散らばった意識をデタラメに掻き集める。情報収集は終わり。まずは立ち上がるべく、一気に取り込んだ情報からロープ際にいたことを幸いと思い、のたくるようにロープへしがみ付く。

6——気づく。だが、懸命に気づかないフリをして、脳天を割るような痛みを振り払って、ゆっくりと姿勢を上げる。

いまは、7………3度目の挑戦。最後の挑戦。あと3つで終わる、もう次が無くなる、だからなんだ、気づくな。

(バカつたれ!呼吸が乱れてる!余計なことは考えなくていい!おい、まだ聞こえないのかゴンザレス!?)

ああ、気づいた。凶気の声がやつと繋がった。だが、会話が出来ない。いつものように、声帯を無視したコミュニケーションが出来ない。

なぜなら、俺は見上げて、しまった——

「………立て、ゴンザレス」

心の中から、見上げた。

心が、リカルドを格上だと認めてしまった。

(なん、だよ……リカルド……)

あんまりだろ、俺が記憶に留められないような拳を、こいつはいつでも打てる。なのに、俺はヤツを後退させることもままならない。

WBCの頂きを獲り、好敵手を見つけて、最凶との一体化を極めた。ここまでの経験を積んで、無敗神話の序章を越えたところで、こちらのリソース不足で物語は終幕する。

誰が文句を言う。そんなボクサーはいないだろ。エイジも、センドーもここまでは来れなかった。

誰も、無敗神話を破れないことが証明される。他でもない、この俺のせいだ。

(もう、届かない……)(おいゴンザレス!?)

理性が沈んでいく音を聞いた。

身体から離れていく音を凶気は聞いた。

以前に体験した、心が折れる音を聞いた。

(くそっ……とにかく立つからな!!?)

理性の主張は認めないと凶気が立ち上がる。この時に気づいたのは、理性が沈んだ身体を動かすことは存外に負担が大きいということ。早く解決しなければ、立ち上がったところで拳を振るうのは難しい。つまり、負ける。

「次のラウンドでその夢を粉碎する」

死屍累々のボクサーに告げられる死刑宣告。

立ち上がると同時に第9ラウンドは終了した。

まだゴンザレスは立っている。だが、誰が見ても戦意がないことは明らかだ。リカルドを前にして心身ともに衰弱したボクサーは大勢いた。彼に救う余地があるとすれば、その誰よりも奮闘したところだろう。

なら、誰ならリカルドに勝てるんだ。

そんなもしもIFを語る民衆は、もう現れない。



遠くで声がする。

よく聞こえない。

まあ、いいや…。

ゴングが鳴った。

ヤツには届かないけど、

周りが見えないけどさ、

立たなきや、終われねえもんな。

第10ラウンド開始直後、千堂たちの心配を絵に描いたような試合が展開されてしまった。

『ああー！ー！やはり一方的！守りに徹するゴンザレス、それを粉々に砕きにいくリカルド。勝負を決めにいった！』
『いいや、これは始めから分かっていたことだ。』

千堂や幕之内、板垣だってダウンの1つや2つは覚悟していた。ゴンザレス本人も4度倒れても試合に勝つ気でいたのを知っている。

「ミキストリだけで戦つとる。ゴンはどないした!？」

「——まさか、心が折れたんじゃ……」

「あ、あり得ますね……あれだけ接近戦で持ち堪えて、打ち返しもしたのにクリーンヒットが1発もないんです。」

「どう見たつて地力が……」

それでも立ち上がったのは、果たしてミキストリだけの意志だろうか。千堂の疑問を知る者は、リングの上にいる。

理性の心が本当に挫けていたら、自ら脅威に近づくはずが無いと、そう千堂は考えている。だから、「早よ戻ってこい」と叱咤した。

(こんなバカなッ——!)

終わり方があっていいのかよ……!?

俺は嫌だ! 戦意喪失なんぞ、死んでもゴメンだ!)

バイオレンスに立ち向かうミキストリ。

同じ神でも、格の差は一目瞭然だ。

多少の無理が利く身体と、人外規格を簡単に扱える膂力。ここに9ラウンド分の疲労を加味すれば、更に差が開く。

(起きろ! リカルドの野郎はまだ表裏アズール・ミキストリ・死神を見切つてない! バイオレンスの運動量で抑え込まれただけだ! あとはお前が作戦考えるだけなんだよ!!)

理性に声を掛けながら、目の前の理不尽を観察し続ける。

隙自体はない。だが、漸く身体が慣れてきた。こうしてガードでやり過ごしているのは確実に成長した証だ。今なら、やつと表裏アズール・ミキストリ・死神でリカルドに届くかもしれない。

(あああああ、あああ、あ——)

打ち返す隙がない……! 惨めだ屈辱だなんてザマだ……

1ラウンドの時のお前はどこに行った! 最後まで戦うつて決めたのは俺たちだろうがあああああ——)

ミキストリだけで反撃を試みても、やはり隙間を狙われて手痛い直撃を貰うだけだった。

(クソツタレ馬鹿野郎ゴンザレス!!?)

さっさと立てや、身体が重いんだよ!!?)

悪態を吐きながら、リカルドの右肩の動きに合わせてガードを固める。ガードをそのまま殴り飛ばしてきたが、慣れと技術を駆使して芯をずらす。

これで1秒延命した。次の1秒が迫り来る。

センドーとの試合でさえここまでの手数は要求されなかった。野性の直感というものは非常に恐ろしいが、これは野性をも蹂躪するもの。文明圏が100年も先の未来を見せつけられる気分だ。

いや、違うか。やっと100年まで差が縮まったんだ。そこを履き違えるとこつちの心が折れちまう。俺たちは確実に、リカルドの世界に近づいている。この拳と、これまでの想いで。

そして、近づいたら迎撃されるのは当然のこと。

過去の思い出を振り払うが如く、ミキストリの足を止めるために神速のジャブが放たれる。4度から先は数えられなかった。ひと息のうち最大速度で進路を潰し、ミキストリの足が止まった。

「ヤバい、リカルドが右を溜めた!」

「トドメを刺しにきた!」

ガードは固めている。だが、それが無駄な抵抗だと千堂たちには分かる。リカルドの右ストレートを1度は防げるだろう。ならば、2度目はどうだ。そう、2度目で終わる。リカルドは、自分の暴力を2度押し付けるだけで勝利する。いまのミキストリの疲弊は、心身ともにそれだけで倒れてしまう程度の強度に落ちた。

声を出そうとして、間に合わない。終わりへのプロセスを先に理解してしまつて、3人とも声援が遅れてしまった。

リカルドの右肩が動く。

この動作はフェイクだ。なぜって、既に拳は打たれている。気づいたところで、何もかもがもう遅い。

「あ、当たった!?!」

衝撃がリングの上で炸裂する。

“1度目”で響き渡る、3人の予想を裏切る音。

ミキストリのガードは、役目を果たせなかった。

「連れ戻せたらしいな」

代わりに、ガードから反撃に転換し、1秒後の生存を獲得したゴンザレスがそこにいた。



沈む。ゴンザレスの戦意が沈んでいく。

なにかを恐れて立ち上がったのに、身体は相変わらずリカルドと1メートルとない距離で無謀な戦いに明け暮れているのに、理性だけが遠ざかっていく。

(こんなバカなッ——！)

終わり方があっていいのかよ……!?

俺は嫌だ！戦意喪失なんざ、死んでもゴメンだ！)

ここは酷い世界だ。

現実で死に物狂いで抗っている自分の半身を見ながら、過去2回の敗北を1秒も余すところなく思い出させてくる。それがまた戦意を削って、現実世界に戻る理由を無くしていく。

(起きろー！リカルドの野郎はまだ表裏アズール・ミキストリ・死神を見切つてない！バイオレンスの運動量で抑え込まれたただけだ！あとはお前が作戦考えるだけなんだよ!!)

理性には届いた。届いたが……

——それはやろうとして失敗した。バイオレンスを封じるには、すまない、その後が続かないから無意味だ。

ゴンザレスの心の声はミキストリに届かない。深く、心の奥底に沈んでいくゴンザレスは、自分の声を届かせるだけの力が残されていない。

考えてもみてほしい。今回は表裏アズール・ミキストリ・死神を極めて、リカルドの化学を乗り越えて、10ラウンドまで戦って、そのうえで理性の心が折れ

たんだ。

最初と2度目、どちらも実力の半分も出せずに敗北した時とは違う。あんな、不完全燃焼で終わった試合と比べられないほど努力をして、好敵手も出来たのにこの有り様だ。

——もう、出し尽くした。

(あああああ、あああ、あ——)

打ち返す隙がない……！惨めだ屈辱だなんてザマだ……。

1라운드의時のお前はどこに行つた！最後まで戦うつて決めたのは俺たちだろうがあああああ——)

悲鳴が聞こえる。同居人の声だ。まだ諦めていない。

息絶えた死神を信じて、凶気は血に染まつて耐えている。

なんでそこまでするのか。深淵で負けを刷り込まれるゴンザレスは理解出来ない。思考を放棄している。

(クソツタレ馬鹿野郎ゴンザレス!!?)

さっさと立てや、身体が重いんだよ!!?)

なのに、どうしてミキストリは立っていられる。

お前の限界は俺が1番知っているはずなのに……。

「……………見つけたぜ、サボリ魔。あの時とは逆の立場だなあ？戻れんだろうなコレ？」

どうして、こんなところまで来るんだよ。

「お前っ、試合してんだろ!？」

「慣れに任せて動いてる。半分無意識だぞ、あれ」

「無意識……?」

「俺の声、聞こえてねえの？バイオレンスにも慣れ始めてんだって。あと少しのところまで来てんだよ。」

理性のくせして……本当テメエは……!」

あの日。センドーとの試合で覚醒した時のように、ミキストリの手

(作戦がある)

リカルドを止めて生まれた猶予で、起死回生の策を共有する。

「——それは作戦じゃねえ。賭けでもねえ。

ただの、自殺志願者だぞ……?!)」

ミキストリの動揺は、さつき俺を連れ戻したときの威勢からは考えられないものだ。

(だからって、ここで死ぬ勇気は無い)

(……くくつ、良い返事だ。行くぞ)

恐れなんて今更だ。怖いものは怖い。だが、ソレを越えた先にある僅かな可能性は、俺たちの恐れを上書きする景色だ。

天上世界に登るなら、迷うことは考えるな。

「——ああ、やってやろうぜ」

そうやって2人の答えを出して、笑いながら飛び出した。

一刻の猶予もない。

起死回生とは言うが、この身体が途中で尽きる可能性の方が大きい。現に、再び動き出したバイオレンスとガードの上から打ち合うだけで臓器が千切れそうなほど痛覚を脳に送ってくる。

焼ける、灼ける、肌が、心が、存在が硝化していく。

膝は折れ、一瞬で激情を流し込んで骨を作る。折れた隅から痛みを感じ取って、生存本能が働くよりも先に拳を打ち出して気絶を回避する。反撃を打ち込んで、リカルドに一矢報いるために。

太陽にすら焼かれない灰を積もらせていく。

『これがフェザー級の頂点！太陽神と死神が瀬戸際の攻防に命を費やしている！まるで最後のラウンドと言わんばかりの動きに瞬きする暇もありません！』
矯めつ眇めつ互いにリング中央を行き来して、必殺の一撃を繰り出すタイミングを推し測る。

その最中でリカルドは、自身の拳が再び当たらなくなってきたことを確認した。

(……まだ、アルフは成長しているのか?)

いまの動きに追いつくだけでも筋肉繊維はどんどん千切れている

のに、ここに来て一段と強くなっている。無駄な動きが減って、バイオレンスの抜け道を縫うように駆け抜けているのだ。

戦況把握を終えたとき、あれほど欲していたであろう一手が、バイオレンスを掻い潜って頬を掠め取っていった。

難業と設定していた領域に、ゴンザレスは既に入り込んでいる。

ならば、トリカルドは顎を引いて歯を噛み締めて前に出る。リカルドの意表を突いた行動は、ゴンザレスの左ジャブを頬で貰いつつ距離を詰めるもの。一瞬戸惑ったところを狙って、左拳がゴンザレスを打ち払う。

(この野郎、わざと貰いに来やがった!?)

(仕留めるなら、早めがいい)

動きを止めたゴンザレスを見て、右を溜めた。

明らかに勝負を急いでいる。あのリカルドがリスクを冒してまで勝負を仕掛けたのは、伊達 英二のような脅威が眠っていることを予感したからだ。

この心情を、ゴンザレスは見抜いた。

(ここ、だ――)

凶つ神は太陽へと生命を捧げに飛び込んだ。

誰もが目を見開いて、死神の選択を自壊だと息を飲む。既に正常な判断は下せず、憧れを抱いて原子まで焼かれるのだと。勇姿の最期の目撃者として口元を苦々しく噛み締めた。

(ガキの頃から、何も無い拳を作ってきた)

右拳を握りしめて踏み込む。

眼前ではリカルドも右拳を溜めている。

両者が狙うのは右ストレートだ。もう方向転換は利かない、お互いに足を止めている。

(負けてたまるかと、この拳で死を負かし続けてきた)

絶対に避けることはカウンター。俺の拳だけが空振りすること。

この時点で負けが確定する、俺は耐えられない。

次点で空振り、その次に相打ち。

これは次に繋がる一手が出ない可能性が高い。

狙うはカウンター。俺の拳だけがリカルドに届くこと。

無敗神話を破るなら、無敗神話の威力も乗せて返すのが手っ取り早い。これが狙える最初のチャンスが来た……!

(それが今じゃ……沢山の想いを握り締めている)

これまで見上げてきた太陽は、俺たちが墜とすべき目標だった。ここで見るものは空でも、宇宙でもなく、自分が這い上がってきた過程であるべきだ。

今からやる事を成功させるために、過程を思い出せ。

右ストレートはミキストリに託された。

カウンターを避けるのはゴンザレスが担う。

(だから信じろ、成功する……!)

やはり、スリップで躲す算段をつけていた。だが、ミキストリは笑った。避けるよりも先に当ててしまえ!と。

腰を回し右腕を捻り、速度が増す。ただの強引さだけでリカルドの算段を打ち破り、右のカウンターは成功した。

リカルドの右ストレートは反則的に速い。見ても避けられないから、身体で覚えた着弾のタイミングの直前に顔をずらす。避けることに集中してカウンターのフォームが崩れては台無しだ。

……いま!

前振りなく落とした顔面。直線上から外れるのを確認した――

――はが、リカルドは当然のように追いついた。

「ガッ――!?!」

終わるには、十分な威力。

リングを最大限に駆け回り、民衆の意識を釘付けにしていた2人が止まる。鏡合わせのように突き出され、顔面に着弾した右拳。

一瞬の静寂。

動かないということは、勝敗が決するということ。

次に動いた者の挙動で全てが明かされる。

「……………ぐ、そ、が――」

ぐらり、揺れて上半身が崩れたのはゴンザレス。

意識が、切断されて。

死神は、深淵に――

「ゴン!?!」

「(こ)まできて…」

「ああつ……倒れる!?!」

深淵に手を伸ばして、冥界の門をこじ開けた。

上から照りつける陽光が、門の奥に差し込む。

意識が朦朧とする最中で見たものは、千堂や幕之内と過ごした時間。プラスや板垣と交わした言葉。

そして、ミキストリと努力した日々。

(起きてるだろ、ゴンザレス)(…当然!!?)

――瞬間、会場は凶気が支配した。

今際の際で踏み留まり、地上に這い出てきた姿は、死神らしからぬもの。

それは雨上がりの高架下に居座る陽光の如く、漢たちの生き様を凝縮した背中だった。

(その体勢から打てる、変則的な拳を知ってる)

リカルドは読んでいた。この右の打ち合いに臨んだのは、ゴンザレスたちが1度だけ振り絞る延命を断つため。

結局この試合も、最後までリカルドが支配していた。リカルドの冷徹な視線を見て、誰もがそう思った。

(ここに右を合わせれば……っ!?)

両脚が震えていた。

息苦しさを問い詰めてくる拳に気づけなかった。

自分の右拳の反動が足枷になることを想定していても、体験したことがない。積み重ねてきたダメージと相乗し、ここにきて爆発する。

(まさか、か――)

(こ)ちとら慣れてんだよボケツ!!)

野性味のある笑顔を撒き散らす死神から、リカルドは目を離せなかった。

意識が吸い込まれた。足が動かないせいで錯覚が起きた。見ていては終わる、なんとか避けなければならぬ。

ウィービング、不可。ダツキング、欠落。スウエー、右に同じ。パ
リイ、膂力が足りない。ブロッキング、可能。

自分が置かれた状況から最善手を叩き出して、両腕を上げて顔を守
る。腹が狙われたら、受け止めよう。倒れる前に、受けた衝撃で両脚
の痺れが抜ける。だから一先先にゴンザレスを仕留められる。

だが、顔だけは未知数だ。その必殺が1番伸びる場所が顔面にな
る。威力が最も高いところで無防備に受けてしまえば、いくら頑丈な
身体といえども立てる保証はない。

倒れかけの身体をそのまま前傾姿勢にして放つ、その必殺の名はス
マツシュ。

ここまで理解しておいて、リカルドは気づかない。

自分が防戦を強いられる程の窮地はなかったことを。

「いけ、ゴン」

千堂の雄叫びを背中中で受け止めて、ゴンザレスの中でイメージは完
成した。次いでモーシヨン、位置取り、相打ちという不恰好な場面か
ら、ここまでよく持ち直せたと自画自賛して。

「しッ…あ」

好敵手^{とも}から倣った渾身の一撃を振り上げた。

灰色の汗が落ちていく向こうで、リカルドの盾が初めて意味を成さ
なくなつた。

文字通り、リカルドの両腕が吹き飛んでいく。

自分が何度も実行してきた理不尽な業を、まさか自分で体験すると
は夢にしか見なかった。

息を呑む。

顔面に迫る景色を目撃した直後、初めて太陽の光は地上から途切れ
ていた。

聳立する人物を見上げるのは、これが初めてだ。

「——なんだよ、リカルド」

リングに墜ちた太陽神を見下ろす死神。

この世に在ってはならない、然して世界中が夢見る瞬間が始まろう
としている。

「まだ、そこにいんのか？」

それ即ち、次の神話の序章だ。

神話の果て、星屑ダンス

景色が揺れる。

常識が敗れた現実には、民衆が鬨の声に熱狂を込めた。

ある者は涙した。

死神の最期を見届けるつもりで会場にきた自分を恥じて、彼の苦節と過程に感動した。

ある者は歓喜した。

自分が立っているか座っているかなんてどうでもいい。ただ感涙に声を上げて足をバタつかせて、目撃した真実を赤子のような挙動で表現した。

ある者は怒り、ある者は黙し、ある者は手を叩き、ある者は立ち上がり、ある者は天を仰いで、ある者は――。

リカルド・マルチネスは驚愕した。

(立た、なければ…)

これは自分が押し付けてきたことだ。
起き上がる光景も何度も見てきた。

なのに、力を入れる場所を探して四苦八苦している。
気分が高い。

呼吸は…正常だ。

身体に痛みはない。

少しの頭痛が意識に雑味を出している。

それだけなのに、地面から鎖で縛られたように身体が起き上がらない。

(重い…!!? 膝から立てていかないと、重心と噛み合わずに転んでしまう)

膝を付いて、膝を支点に上半身を起こす。

迫り来るカウントと、少しの冷や汗を流しながら、10カウント以内の復帰は漸く果たされる。

やっと立ち上がるリカルドを見ながら、千堂たちもまた民衆のよう

に興奮に染まっていた。

「だ、大胆……………」

なんて人なんだ、アルフレド・ゴンザレス!!?」

「あんの死神、この土壇場でワイを真似しおった!!?」

「リカルドと右の相打ち。」

崩れた姿勢を利用したスマッシュ!

並み外れた覚悟がないと、こんな芸当出来ないよ!

コーナーで待っているゴンザレスは冷静を装っているが、内心の喜びが雰囲気には滲み出ているのが見て分かる。

同時に、相打ちのダメージが大きいせいで深刻な様子を隠している。ここまで負傷して、あのリカルドからダウンを1つ奪った。あまりにも遠い…辿り着くまでを目撃したことの興奮は、深刻なダメージを忘れるには丁度良い麻酔になっている。

『リカルドが立ち上がって睨み合うこと数秒、狂瀾怒濤の第10ラウンドが終了です!!?このラウンドは歴史を揺るがす3分間となりました!』

ほ、本当に試合の行方が分からなくなってきたぞ!

残り2ラウンド、ここから待ち受ける結末から目が離せません!!?』

まだ興奮冷めぬ場内に微かに響くゴングが、次のラウンドの期待値を徐々に押し上げていく。

決着は目前に迫っている。



第10ラウンド終了と同時に、血相を変えて駆け寄ってきたビルを右グロブで制して、悠然とコーナーに戻ったりリカルド。

陣営は沈黙で出迎えた。励ましの言葉を送るのは違うと思ったのだ。戻ってきたリカルドに精神的なダメージはない。スコッチを飲

み込んだ後の余韻を味わうように、ゆつくりと口を開いた。

「ビル」

「ど、どうした」

「私はどう映っているか教えてほしい。動揺しているのか、落ち込んでいるのか、それとも……………」

1つ、1つ、自分を俯瞰して当てはまりそうな感情を並べていく。インターバルが1分では足りないほどに並べたい気持ちを抑制したのは、この気持ちに早々に色を塗りたいからだ。

「笑っているかな？」

残りの時間は、この気持ちを全身に浴びることにした。

新しい体験から生まれた未知の感情は、リカルドが人に堕ちたことを意味しない。

リングの上では人ならざる存在なのだ、気づかせてしまった。



「凄いぞ!!?あのリカルドが茫然としたぞ!!?お前たちが世界初のボクサーだ!!?」

「落ち着けよ!!?涙拭け!!?いや気持ちは分かるぜ!!?」

興奮の熱の最高潮は、間違いなくブラスの顔面だろうとミキストリは確信した。この顔は勝ってからしてくれなんて言わない。どんな結果が待っているようとも、この過程が無ければ終わるモノがあった。だが、この過程に囚われてしまえばリカルドの二の舞になる。

「それよりさ、俺たちを宥めてくれ…。」

のぼせて次のラウンド、調子に乗りそうだ」

「———そういうことか」

ブラスはゴンザレスの不安を即座に理解すると、両肩を叩いた。

「お前たちは勘違いしてる。その体温は、リカルドの眼差しが君を敵

と認識したから上がってるんだ。

その熱量のお陰でカウンターを耐えられただろ」

思い返せば、その通りだった。

リカルドのように、この想いはマイナスにならない。

俺たちを奮い立たせるモノは、背中を押し続けている。

「…助かった、危うく手札を捨てるどころだった」

「お前たちに言うことは1つだけになった。

悔いを残すな、諦めるな、たまには後ろを向け」

「3つも言ってるじゃねーかよ」

俺たちの日常を振り返るように活力を補給して、重要な3分間に向けて立ち上がった。



民衆の熱狂を他人事のようにして、2人はゆっくりとコーナーから出ていった。1歩進む、この1秒から民衆は目が離せない。

「これまでと違って、全身の筋肉が満足に動かへん。こっからは気力の問題や。体感時間は長いで」

「僕には未体験の世界です。

「ワイかてヴォルグとやった10ラウンドまでしか経験ない。そこだけ判定や、しんどかったわ」

ここからはフェイント1つ仕掛けることにも注意しなければならぬ。体力が底を尽きる前の決着を望むなら、試行回数を減らすことになる。これまでの試合を分析して、先に解を導いた方が勝利に近づく。

最も、彼らに常識が通用するかは別だが。

「あと6分しかない。しっかり決めてこい…」

千堂が柄にもなく勝利を祈ったとき。

リカルドの様子を見て、ゴンザレスは自らを点に変えるつもりで踏

み込み、リカルドに急接近した。勢い余らない加減を極めたステツプインから、左右を顔に目がけて放つ。これをリカルドはガードする：その両腕で前傾姿勢で受け止める様子から、先ほどのダウンが深い傷を与えたことを意味していた。

(ヤツの動きも遅い。コイツは効いてるぜえ…！)

続けて上下、左右と打ち分けて、偶に返ってくるカウンターを躲しながら試合を自分好みに展開していく。

『ローラウンドはゴンザレスが主導権を奪った！』

歴史を塗り替えるボクサーが勝利へ邁進する！』

興奮気味に攻めるミキストリを見ながら、ゴンザレスはリカルドの様子に警戒心を上げていた。

(…：静かすぎる。大振り待ちか？出さねえぞ)

あの目は放心状態に近い。初めてのダウンがそこまで衝撃的だったのなら、倒した甲斐がある。だが、相手はリカルド。ここまで尾を引くボクサーじゃない。

(…：寒気すら感じるぜ。このまま攻めていいか迷う)

モーシヨンすら見せてはいけない気がする。暗雲立ち込める雰囲気、に吞まれて手を出せば、太陽の熱量に灼かれて野垂れ死ぬ。

(だが、すぐそこに底がある。分かる、もうちよつとでリカルドの体力も限界がくる)

(ならよオ、答えは決まったな！)

リカルドの贖罪を断ち切る日は来るのだろうか。

いつか抱いた不安は今日で終わらせる。そうしなくちゃ、後ろを振り向けないと分かっているから。

恐るな、攻めるのが挑戦者だ。

灼かれるより先に仕留めればいい——！

(ダウンをした直後から、身体がどこか噛み合わない)

迫り来る世間を見上げながら、リカルドは身体の内側を駆け巡る亀裂に意識を向けていた。

普通に考えれば筋肉繊維の悲鳴だ。ダウンしたことで10ラウンド分の疲労が現れ始めている。外部からの衝撃で亀裂はその深度を増すだろう。

それを確かめるためにゴンザレスの左ジャブを受け止める。……その後、コンビネーションを数秒受け止めて、こちらも左右を返した……これは躲された。

どちらも重要じゃない。確認し終えたのは、内側の亀裂が筋肉繊維ではないということ。呆れることに、まだ動いても全力を出し足りないようだ。

なるば……アレか。

そう思って内側に意識を向ける。

(……前に、いる)

ダウンの衝撃で入った亀裂から、微かな光が漏れ出た。その光のおかげで、ずっとそこに居た、亀裂の擬人化したような人物をリカルドは見つけた。

容姿を見て判別することは出来ない。

意図的に情報が隠されている。

身体中に入った亀裂のせいで、何もわからない。

「アーティット……」

「ピンとくるのが早いな」

それでも、自分の内側で……前に立ちはだかる人物なんて2人しかない。いま現れたことを鑑みれば、必然的にアーティットの名前に絞られた。

「何故ここに居るんだって顔だな。最後に教えてやろう。お前が楽しんでボクシングするところ、観たかったんだ」

亀裂越しに、心に潜んでいた厚かましい漢が笑う。

今更出てきて、どう言葉を交わせというのか。アーティットが引退した時点で、この身は覚悟を決めている。

「お前さ、負けたら引退する気じゃん？」

10回だろうと20回だろうと防衛して、負けたらそこで引退とか強情すぎるぜ。だから楽しくないんだよ？」

彼を追い抜けば内側の亀裂は治る。

そう確信して歩いているのに、一向に距離が縮まらない。

聞きたくもない言葉を聞かされて、不愉快だ。

「公開スパーで倒さなければ、こんな事にはならなかった。過ちを繰り返さないように細心の注意を払ってきた」

「ッまだ、そこにいんのか？」

折り合いをつけるための言葉に、聞き覚えのある言葉を返される。私を見下ろしたゴンザレスが言い放ったから、忘れるわけがない。

月と見紛うほど傷だらけで、太陽を追いかける想い。

あの瞳に見抜かれたら、一生忘れられない。

リカルド・マルチネスの肉体は常に全盛期を更新し続けてきた。

だが、精神は違った。

常にアーティットを倒し、アーティットから学び、アーティットに責任を負わせたあの日にしがみ付いている。

その自覚はある。だから、亀裂の意味に気づいた。

ゴンザレスに見抜かれたことで、この亀裂を思い出した。

あとは、選ぶだけだ。

治すか、破るかを。

「償おうとするな。足を止めるな。」

そして、怖がるな。答えはすぐそこだ、行け」

「ああ…見ていてほしい。私の生き様を」

言葉を聞き届けて、亀裂が深く心に沈んでいく。浸透して広がって、やがてそれはリカルドの殻を破った。

重く、濃ゆい瘴気が霧散して虹を作り出す。

神をも挫いできた呪縛が、ゆつくりと解けていくことを光が祝福しているようだった。

『ゴンザレスのパンチが意のままにリカルドを打ち抜いている！一打一打に場内から歓声が湧き上がる！』

既に2分間、ゴンザレスたちはギリギリの攻防を制してリカルドにダメージを与えている。

(おかしい……ヤバいぜ理性！コイツおかしい)

(分かってる。だが殴るしかねえ！止まったら捕まるのはコツチだ、時間に釣られて焦るんじゃねえぞ……)

こちらは精神を擦り減らしているというのに、リカルドの挙動からは疲れが感じられない。

嫌な気配だ。打てば打つほど、自分の体験談が脳にチラつく。
アズール・ミキストリ
表裏・死神に至った時のような……まさか！

「——フツ」

予感していた事態は、突如として発現した。

リカルドの左ストレートで押し留められ、次の右ストレートで身体が後方に吹き飛ばされていた。

(いきなり——イ!?)

マツチの火を点けるような弱々しい火花が灯る。

内側に敷き詰めた活力が漏れ出る、満タンのバケツを持ち上げた時に溢れる水のようなものだと思ったとき。目の前にリカルドの輝くような瞳が迫っていた。

『激しいワンツで一気に挑戦者を突き放した!?!』

これまでは体力回復に専念していたかチャンピオン!?!』

まだ止まらないと左拳を持ち上げたとき、自然とカウンターを合わせにいつていた。リカルドとゴンザレスの左拳が互いを直撃し、その洗練しきった左拳と意識が撓しわりを見せる。

手応えがあるのに、ダメージは深いはずなのに……!

(お前の実力は底が見えていた……はずだ)

見えない……いや、底との距離が見当もつかないと言ったほうが正し

い。直線距離なら手を伸ばせば届く距離かもしれないが、無敗神話の世界は底に近づけば近づくほど複雑に入り組んでいる。心を見て、思考を読んで、勇者を喰んだもので構成されるボクシングの理想郷だ。ここに到達するまでに幾つもの試練があった。その全てを越えて、洗練された漢が辿り着いた場所は蠱毒のような地獄だと知る。理想郷を埋め尽くす物質は贖罪と罪人。リカルドを倒せる人物を想像して、最強を作り出し、自らで越えていく無限地獄。

その性質がいま、変わろうとしている。

立ち上がり闘う意志を示す両の拳から、微かに漏れ出る光を幻視していた。

(底が見えなくなった……こんちくしょう……！)

理解した、やっと疑問が解決した。

思考時間にして10秒。

存在に気づけなかった時間は、約6年間。

こいつ、身体がほぐれているんだ。

長年、凝り固まった無敗神話の殻に収まって、贖罪で押し付けてきたリカルドの本能が上を目指し始めたんだ。

これがリカルド・マルチネスに近づくということ。

止まった時を動かした証拠。終わりに近づいている。

無敗神話を終わらせるのは、生半可では叶わない。

(手数だ！雪崩れのような手数で迎え撃つしかない!!?)

(一撃だ！千堂を倒した右でトドメを刺してやるぜ!!?)

想定してはいた。ダウンを奪ったあと、眠れる闘志を起こすことになるのは見ずとも知っていた。

(なら2つ同時に出しやいい!!?) (大賛成だ!!?)

それでも、たったの一振り。

2人の全力を込めたコンビネーションを、真つ向から遮断する右ストレートで突き放されて、カウンターの痛みを感じるより先に乾いた笑みを浮かべていた。

この試合はまだ終わらない。

まだ終わってくれないと暗に言ってくる。

恐ろしい事態だ。
誰もが震撼した。

懊悩を解きほぐしただけなのに、リカルドは更にボクシングに耽溺していく。

「じよ……冗談キツイで、ほんまに……」

「そんな……!」

まさか、リカルドの實力はまだ上があるのか!?

啞然とするのは千堂。

両拳が震えて止まらないのは幕之内。

2人とも見えてしまった。肩を並べたゴンザレスを突き放し始めたりカルドの地力を。敗北の2文字が浮かび上がるほど、致命的な差が開き始めた。

「バカな! バイオレンスが本気じゃなくてなんだと言うんです!」

「リカルド・マルチネスが成長しとるんや!!?」

それ以外になにがあるっちゅーねん! いままで手芸抜いとった訳やあらへんはずやで」

「衰えるどころか強くなった…。なんで」

疑問に答えを探して、答えに当たる言葉を思い出す。

それは試合前にゴンザレスが出した、リカルドが無敗神話を築く理由。

「完成された神の過ちを償うために、自らに重い罰を課した。ダウン、若しくは——敗北するまでの防衛を」

てつきり負けの方だと思っていた。それくらいの重みでなければならぬと、あの時に結論した。

だが、ゴンザレスとの試合で、ゴンザレスによるダウンがトリガーだとしたら…罪を償いきったと本人が納得したら。

「強すぎる…」

冷や汗が止まらない幕之内の肩を鷲掴んで、千堂が立ち上がる。

「んなこと気にしとる場合ちゃう! 声出せ!」

「そ、そうですよ! 諦めないで! ゴンザレスさんなら勝てます!」

「僕たちがついてます!」

千堂の声で身体が動き始める。

冷や汗を応援の熱で上書きする。

嫌な予感を受け入れたらダメだ。

ゴンザレスさんが諦めても声を出し続けるんだ。

観客席で千堂たちが必死に激を飛ばすのを、ゴンザレスはしっかりと聞き届けていた。幾分か楽になった思考で、縮こまりかけた心に余裕をこじ開ける。

心が揺らいでいる。

弱くはなっていない。ただ、リカルドの興味を一身に注がれる体験に、悦びに似た恐怖で心が支配されていた。

切れた頸動脈から血が流れるように汗が流れて、迫り来る神の降臨に言葉が声にならない悲鳴を上げる。

前のラウンドまでのバイオレンスは、塵芥も残さない気概で攻めてきていた。対して今は、太陽のように眩しくて…光に呑み込まれてしまう。

(やばい、俺じゃ間に合わない…！)

頭を振り回して、カウンターの斜線から逸れる反動を利用する拳撃に捕まった。入れ替わっても間に合わない。意識が切り替わる準備を終えていない…！

星繁く意志が叫ぶ。

(打たせるかア——)

凶気が理性とのコンビネーションをかなぐり捨てて、身体の主導権を奪い取る。不恰な動きで、リカルドの意表を突いた左ジャブがカウンターとなり命を繋ぐ。

「なっ！」

これにはリカルドも思わず驚きの声を漏らす。

表裏・死神のカラクリを理性と凶気の交代によるコンビネーションと見定めていたのに、ゴンザレスをミキストリが強引に振じ伏せていた。

無敗神話の観察眼を欺いた。リカルドの警戒心は既に最大に引き上げられていた。

(ミキストリが主導権を奪ったように見える。ゴンザレスとの共存は完璧ではなかったのか?)

アルフレド・ゴンザレスの全盛期もまた更新される。更新され続けている。留まるところを知らない。止まることは出来ない。

(これは……今のは!?)(…どうだ、思いつきだが)

あと少し、まだ一年分の研鑽くらいの差がある。だけど第10ラウンドまでに10年分の研鑽に勝るものを得た。

「…間に合うぜ、夜明け前に」

両者、共に最後の領域に足を踏み入れる。

先に全盛期を更新した方が勝つ。

最後の力を振り絞る方法を知っている者に、勝利の女神が微笑むということだ。



リカルドと戦うことを糧にして、2回の試合をした。

無様に負けた。そもそも前提が間違っていた。

火を灯す原料がリカルドである限り、その火はリカルドに吸収される。彼自身が蒔いた種だからだ。

アーティットに真実を聞いて、まだ俺は誤った。

次は標準を間違えた。いまのリカルドに向けてしまった。

遠い過去、リカルドの心が立ち止まっていた日を見つけなきや届かないなんて、なんの笑い話だよ。

『運命の最終ラウンドがいま始まります!!?』

そうして3度目、あまりにも長い下準備が完了した。

間に合った、安堵している。俺の夢が、新しい夢に変わった。負けてから生まれる夢ばかりだけど……。

(兄弟、今の調子は?)

(スカッと晴天。今日はぐっすり眠れそうだ)

(はっ！今から太陽落とすのにか！)

(そのための試合だろ)(それはそう！)

最終ラウンド、拳を突き合わせて。

この夢を忘れまいと言葉にする。

「さあ、歴史を塗り替えてやろうぜ！」

勝利宣言とともに星屑は笑った。

「——行くぞ、アルフレド・ゴンザレス」

目醒めた漢が神域に進み始める。

WBAフェザー級タイトルマッチ、最終ラウンド開幕!!?

グラシアス

リングの中央に向かう時から、両者の構えは鏡合わせのようにスタンダードで決められていた。一部の隙も見せない油断のなさは、このラウンドの価値が替えの効かない……伝説的一幕になることを示唆していた。

これから行う最後の、命題の獲り合いをするために必要な意志を込めて。

ゆつくりと、天と地の拳がリング中央で挨拶を交わす。一瞬の密着を終えて離れる瞬間の切なさを、もう囚われてやるものかと振り払う。

實力差があつたとしても、ゴンザレスはひと時だけ忘れようと決意した。恐れを封じ込めるために、そして前に進むことを止めないために。

「調子乗らせつかア!!?」

「シッ——」

その決意表明を買って出たのは、人類未踏の地……リカルド・マルチネスの12ラウンド目に踏み込んで興奮するミキストリだ。呼応するように応えるリカルドの左拳は、ステップを刻んでもいないのに体重を乗せたときと遜色のない速さ威力で飛んでくる。

相変わらず巫山戯た漢だった。第12ラウンド、ゴンザレスたちがシフトウェイトで補っている体力の消耗分の威力を、リカルドは第1ラウンドと同等の威力で返すのだから。

ただ、当のリカルド本人は。

(いまは……が限界か……)

心の中で珍しく不満を吐いていた。

疲労が溜まっていることは事実だ。特殊な体質だとしても、カバーが間に合わないほどのダメージをゴンザレスは与えている。この状況を体験することも初めてだ、身体が思うようにいかない原因の1つ

だ。

リカルドは自分に問いかける。

(なんのための無敗神話だ)

喝を入れるというよりも、誇りの所在を問うもの。

アーティットが成せたであろう■階級制覇を台無しにして、自分の上にいくことを許せなかった。無敗神話の歴史はそのままアーティットへの罪の意識の大きくなる。その贖罪から解かれて、より鮮明になった思考で自分を見据える。

ただ勝ってきただけではない。アーティットの指導を終えて、自分の答えを出すときがきた。ゴンザレスとミキストリの視点に立つことも、ウォーリーの野性を当てはめる必要もなくなった。

なら、簡単だ。

ボクシングが好きだということを実現する。

(それが私のボク^取シング^柄だろう)

第1ラウンドの猛反撃の正体は、無意識下にまで浮上していたリカルドの覚醒の上澄みだ。

この覚醒がリカルドに与えたものを、本人は少ししか認識できていない。

性能はバイオレンスと変わらない。このラウンドでも1ラウンドのような威力を出せるのは元々からだ。

相手を観察する余裕が増えた。今はこれだけである。

(どこまで行けるか、私にも分からない)

ただ、見えている。ゴンザレスの表裏^{アスール・ミキストリ}・死神の連携を、どこで出来るのかを正確に把握出来ている。

無意識に連携^{スイッチ}が出来るほど練習した結果、スイッチが成り立つ僅かな分岐点が存在するようになった。言われても直しようのないものだ。天衣無縫の使い手になれと言っているのと同義だ。

ゴンザレスたちが懸念していた分岐点をリカルドはここに来て完全に見切った。この挙動を見切れれば、ウォーリーの野性も、幕之内のデンプシー・ロールもその手で粉碎するのは容易い。

詰まるところ、リカルドを倒す手段は更に減った。

この試合が終われば、無敗神話は完成する。
終わりへ向けて、リカルドは駆け出した。



冥界を侵食する。歴史を塗り替えていく。

ゴンザレスの世界を喰らいながら、長年封じてきた向上意欲が肥大化する。

視点が違う。規格の桁が違う。元々の度量が違うのに、リカルドのソレはここに来て爆発的に広がっていく。

どちらかが止まらなければ、リカルドの成長は止まらない。ゴンザレスが1秒でも早く倒れなければ、ゴンザレスが1秒でも早く倒さなければ。神の器は最終ラウンドで完成し、次に挑む者たちの勝ちの目は無くなる。

会場にいる観客たちの鼓動が震え出す。

リカルド・マルチネスの背中に確実に迫る敗北の2文字。そして、アルフレド・ゴンザレスが吐き出し続ける限界を目前にして。勝敗を度外視して、勝敗を決める瞬間が待ちきれないからだ。

(ぐ……見えてんだ……手応えは、あんだよ……！)

意識がギリギリ保てるように被弾を抑えながら、死力を振り絞った左右の拳を打ち続ける。

当たる、確かに手応えはある。だがリカルドはお構いなしに突っ込んでくる。

当たっている、手応えはある……はずなのに！ヤツは俺たちのK・Oレベルのパンチを平然と受けて、カウンターを浴びせにくる。

(いいのか、このまま続けて。ジリ貧だろ!?) (攻めたらカウンターで痛エ!!? 退いたら野郎のステップでボコられる!!? どう転んでもダメーじやべえぞ!?)

リングの原型を歪めそうな勢いで、突き抜ける暴風が会場を駆け抜

ける。それ程の威力を感じる。それ程の洗練されたフォームだ。あれを受けて尚も骨が砕けない方がどうかしている。

「迷うな………そのまま維持しろ!!!」

リカルドは時間が無くて焦ってる!!手数で相殺しないと倒れる証拠だ!!そのまま攻め続けるゴンザレス!」

「ああ!」

限界を迎えて死に果てかける背中に激が飛ぶ。

1回の瞬きで3歩置いていかれる。

越えられない太陽を倒すには、これ以上の速度とパワーがいる。ただそれだけのことが、第12ラウンドでは最も難しい。

その差を埋めるための方法が1つある。掴みかけた新しい境地がゴンザレスとミキストリにある。まだ不確定なものだが、最後のインターバルで結論は出した。ぶっつけ本番で成功させると。

少したたらを踏んでしまったが、ブラスの言葉で覚悟を再び思い出せた。

まだ身体は動いている。左右から同時に飛んでくると錯覚する速さのパンチを捌いている。

歯を食いしばり、さっきのラウンドの感覚を思い出して、ミキストリとの「連携を切る」。

アスール・ミキストリ表裏・死神に慣れ始めたりカルドを欺く、最後の一手。ミキストリの提案した最後の切り札、それを使う直前に灼熱の大地が視界を歪ませてきた。まるでこちらの手の内を見抜いたと言わんばかりに、リカルドの右ストレートが前触れなく放たれて。

(チツ、もうかよ……!)

瞬間、視界が、消し飛んだ。

「……………あ、……………あ?」

気がつけば倒れていて。

頭上を見上げれば、こちらを厳かに見下ろす漢がいる。

『た、倒れてしまった。痛恨……!』

限界に先に足が着いたのはゴンザレスか!』

1ラウンド目なら、7ラウンド目なら、10ラウンドまでなら耐えられた拳でも、突如として打ち込まれたら限界寸前のゴンザレスに耐える術はない。集中力が疲労で落ちている。この土壇場でやっついことじゃない。

(右から入ってきた。この試合で初めてのパターンだ。)

……けど、いまの衝撃で全部のプロセスが見えた)

やれる。表裏アスール・ミキストリ・死神の新境地、リカルドを倒す最後の欠片を掴んだ。

(ミキストリが庇ってくれたおかげだ。次からは…)

上手くやれる。そう感謝を伝えたとき、内側の異常にやっと気づいた。

(うそ、だろ、)

返事がない。

ミキストリからの返事が、いつまでもない。

立ち上がりつつ、何度か内側に向けて叫ぶ。

だが、カウントが終わるまでにミキストリが戻ることはなかった。ミキストリと2人でなら、という大前提がひっくり返された。心が折れたなら、どうにでも呼び戻せる。だが、ゴンザレスを庇って落ちた意識は、太陽の拳によるものだ。残り2分で戻ることは…。

「ゴンザレス！前だ、顔を上げろ！」

ブラスの声で先に身体が動く。

上げた両腕に間髪なく打ち込まれる一撃。疲労に蝕まれる身体に、更なる追い討ちをかけてきた。

この身体を埋め尽くしていく熱線、その1つ1つが手の届かない世界から放たれている。過去の仕業か、未来の暗示か、現実味のないほどに疲れを感じさせない威力と速度で、完璧な暴力が身も心も打ち砕きに来た。

「どないしたんやゴン！ここにきてビビる奴があるか！」

「体力が無いんです。意識を保つことに必死なんだ…」

「そ、それに時間も無くなってきました。本当にまずいですよ…判定ならダウン差で負けます。そうじゃなくてもK.O寸前なのに!？」

「不吉なこと言うな！ゴンが勝つたら勝つ！」

「そ、そんなこと言ったって……」

リングを駆け抜ける空振りの風圧が、観客席で騒ぐ千堂たちの視線を引き戻す。

ロープを揺らす振れ幅が大きくなっていく。大きくなるにつれて、ゴンザレスの身体も徐々に沈んでいる。

(少し……人間離れし過ぎている。)

だが、分かっていたことだ。覚悟していた)

頭上の遙か先、天上の頂きが見えたというのに、なんと皮肉な事実だろう。イカロスが空を目指し、太陽によって羽が溶かされたような当たり前の事実を目の当たりにしている。

太陽を見続ければ目が灼かれる。次に身体、最後に魂を灰にまで落とされて、冥界にも還らない存在となるのに。

(きつい………キツイよ………きついけど………少しでも、近づきたい……！)

このまま時間が経つのを待って、惨めに立ち尽くして死を待つくらいなら、リングの中で燃え尽きるべきだ。

ロープ際、リカルドが踏み込む時間を使って、大きく深呼吸をして近づいたための酸素を取り込んだ。

この試合で、何度目かのらしくないモーションを見せてきた。驕りかと疑ってしまうが、違う。いまリカルドは純粹にボクシングを楽しんでいる。籠から解き放たれた鳥のように、思う存分に身体を使い込みたいのだ。そんな姿を見て安堵はしない。逆の感情が沸き出るだけだ、どれだけ成長すれば気が済むのかと。

無駄だと分かりながら、最後の抵抗……リカルドの右ストレートに左フックを被せにいく。威力、こちらが下。タイミング、こちらがズレている。

当たる要素は、どこにもない。

—————(ここだ!!?)—————

そして俺の顔は、リカルドの右拳の風圧に押されて力強く右に回っていた。……ように勘違いした。目の前を通過する右拳を見て、咄嗟に

左拳に更なる力を振り込んだ。

(ここで…首捻り!?)
スリッピング・アウェイ

どこにそんな体力が残っている——)

縦に立てた左拳がリカルドの側頭部を打ち抜く。

そして、リカルドの右拳が宙を切った。

『ここに来て超高等テクニックがリカルドを欺く!!?』

この場で状況に着いていけている者はただ1人。

今まさにゴンザレスの身体を乗っ取って、リカルドにオマケと言わんばかりの左アッパーを見舞ったミキストリだ。

(流石だなゴンザレス。最後まで諦めないと信じてたぜ)

(おま、お前ツ!? 気絶したんじゃ……)

(フリだ!!? …まあ10秒寝てたけど?)

人が心配している最中、死んだフリしてやがった…!

(見ただろ、さっきのリカルド。表裏^{アスール・ミキストリ}・死神の入れ替わりを見切つてやがった。

俺たちが連携を切るとこまでは、ヤツにバレてた)

(インターバルで出来なかったのかよ…)

(ギアは止まってる時に変えられねえだろ?)

それもそうだが。…なんか納得いかない。

(ともかく)(…ああ)

相棒の復活に喜ぶのはまだ早い。

今の事実を受け止めるのが先だ。俺たちが入れ替わったのに見切れなかった、リカルドの今の限界を。

(成功だな、新様式)
モード

俺の意識が切り替わる。

いつか、誰もが思い描き、そして太陽の水底に沈んだ神話崩壊はただ目前ある。俺たちはこの意識を貫こう。

ゴンザレスとミキストリ、2人が1つの身体を奪い合つてリカルドを墮とす新境地、終式^{モード・ダイオオス}・死神を。

太陽の透視度を落として、神話を終わらせよう。

(もう一回追いつくぜ)

何度目かの確固たる決意表裏をして、最前線で戦う自らを奮い立たせる。

そうして、もう何度目かも忘れるほどに繰り返した、世界を圧倒する踏み込みでリング中央で待ち構えるリカルドへと最後の超接近戦を仕掛けた。

斬り込んだのはミキストリ。鎌のように左拳を伸ばして、リカルドの横を通り抜けるようにして拳を叩きつける。だが、距離があり、モーシヨンは凶気丸出し。いまのリカルドがこれを見逃すことはない。

半歩バックステップして、右のカウンターを合わせにいった瞬間、ゴンザレスの右拳がリカルドの顎を突き上げる。

(また、見切れなかった!?)

アスール・ミキストリ
表裏・死神を見切ったリカルドは、直後の2人の行動によって自分の技量に疑問を呈することとなる。

答えを知るために今度はリカルドが最短距離を突っ切ってバイオレンスを押し付ける。第12ラウンドでの非常識な高速ステップワーク、2人の隙を打ち抜く左右の拳を放ち、ゴンザレスがガードに徹した。隠れるのなら上から押し潰すまでと、雨霰のように拳を打ち込んで1秒。

(鬱陶しい!!)

いきなり……そう、檻を蹴破るような獰猛さでガードを取り払い、ミキストリの右と相打ちにもつれ込んだ。

ミキストリの暴走が始まったように見えて、別のものだと分かる。ここで暴走するなら2ラウンド目で退場している。されど3ラウンドまでできたなら、相打ちがいかにゴンザレスに深刻なダメージがあるか分かっているはずだ。

それなのに、ミキストリはまるで他人事のように殴りつけてきた。答えを言ったことを自覚し、自分の発言から逡巡を終えて、リカルドの背筋が震えた。

(成る程……両者が同時に前に出る新スタイルか)

お互いに反発し合い、自分のやりたいようにボクシングを描いてい

く。ゴンザレスとミキストリのデタラメな新様式モードを即座に理解した。
(仕組みを理解したが……見切れない。)

この試合中に見切れるほど甘い覚悟ではないか)

これが付け焼き刃のものであれば、リカルドは1分とかからず動作を見切り、倒してしまえただろう。

この会場内で、ゴンザレスたちの姿を正しく見抜いている者は片手ほどもいない。セコンドのブラスでさえ、ゴンザレスの決死の度合いを読み間違えている。

自らの命を顧みず、然して捨てることは是としない。その程度なら可愛げがある。そうあってほしかった。

今の2人は、互いに互いの魂を食らい合って、食った分を力に変えて一撃を打ち出している。文字通り精神を擦り減らして、肉体の限界を精神の麻痺で誤魔化して立ち向かってくるのだ。

(なんて覚悟だ………)

魂が浮かれ踊る。

あまりの高揚感から、更なる高みに臨むままに放たれる拳の1つ1つが、打っては当たり、打っては守られる。

そんなやり取りに飽きて、疲れるだけだと理解してから。ゴンザレスたちのボクシングを羨ましがる自分を知った。

(彼を見習わなくて、なんのための身体だ)

胸を掻き毟りたくなるほど酸素しょうそを求めている。

残り時間30秒を過ぎて、リカルドは命を削ってまで打ち合いを挑まれることへの高揚感と、全力に付き合ってくれらることへの感謝から、両拳の全てを殴ることに専念させる。

どれだけ打っても倒れず、また倒れることのない自分の限界を世界に知らしめるために。

(ガード下げた?だが当たらない、足捌きで補ってやがる驕りじゃない)(次はない。前しか見るな!)(でも当たる!俺が外してもお前が当たりやいい!)(ずっと心残りだ)(なにも満足してない)(だからいま俺がここにいる)(足りないからここに立ってんだろ!!?)(3度目は…考えるだけでゴメンだ)(そんな思考を伝達する脊髄は引き抜

いて、前に進め)

友と競り合い、拳の速度を上げて、身体中の血管が張り詰めながらも猛進を強行する。互いを賭けて、互いを隠れ蓑にして、互いを鼓舞し、互いを踏み台にして、互いを押し上げて、生き残ったほうが神話を崩落させる！

(意識が落ちない。キミはまだ輝けるといのか)

残星、灯る。

「よう……待ってた、ぜ」

夜が微笑む。

太陽を覆い隠すような笑みを広げる。

冥府の星が太陽の傍で輝きを増した。

(ずっとアンタのことが眩しく見えていた)(俺の憧れで、世界最強だからだと思っていた。けれど、それは違った)(曇りガラス越しに見てた。自分でずっと謙遜してただけだ)

リカルドとゴンザレス、左拳と左拳の相打ちで足が止まる。

アルフレド・ゴンザレスの確固たる決意が、残り10秒の世紀末のリングで勝機を見出した。

(君なら耐えてくれるか?)

——その全てを、無敗神話は記録する。

全てを望んだ。

あらゆる限界を押し退けて、最後の最後にここに立っていることも、ゴンザレスなら出来てしまうと1ー1ラウンドの時に解っていた。

だからこの場面が来ることは必須で、互いの右が、どちらかの右しか当たらないこともまた確定している。リカルドがそうするのだと意気込んでいるのだ。

「」

舞台が整った。

これまで研鑽したものの全ての積み重ねが、最後の一振りに装填される。

「リカルド!!?!!?」

「ゴンザレス!!?!!?」

右拳を握りしめて、打ち出す。

基本に忠実で、だからこそ差が出る技。

基本を極めるボクサーを相手に、それも第12ラウンドという場面での勝負は、ゴンザレスには余りにも勝機が無さすぎた。

一瞬、これまでの試合の最中で発生したどの場面の一瞬よりも時間を細切れにしたくらいに僅差で、リカルドの右ストレートがゴンザレスの顔面に打ち込まれた。

がきん。

リカルドの右拳から鳴るのは、相手の芯を打ち損ねた音。

（———手応えが）

ゴンザレスたちにとって、この場面は千堂戦の決着時と全く同じシチュエーションだった。リカルドが第12ラウンドでこの場面を想定していたように、ゴンザレスたちは試合前から最後の一騎打ちを想い描いて練習に励んだ。

その差が、ここに出る。ゴンザレスは首を前に倒して、失神する場所からずらした。

ここで、終わる。理性は、力尽きた。

既に、最初から、トドメを刺すのなら、お前だと。この場面なら死神に託すことを決めていたのだ。

（ミキストリー……!!?）

（あばよ、リカルド!!?!!?）

土壇場で死神の暴虐を見逃したりカルドに、冥界からの最期の一撃が太陽を闇染めにする。

ミキストリの渾身の右ストレートが、リカルドに2度目の失墜を押しつけた。

「倒しおった!?!?」

「じ、時間! 時間は!」

3人が……いや、会場にいる全ての民衆の視線が第12ラウンドの

残り時間を探す。

ひと息の間もなく見つけた板垣が叫んだ。

「2分58秒……ってことは！」

リング上で、レフェリーが「ダウン!!？」と宣告する。

『ダウウウウウウッ!!??!!?』

奇跡……いや奇跡じゃない!!?これは紛れもなくゴンザレスの実力!!?3度目のリベンジャーが無敗神話の領域に至ったことの証明が成されました!!?』

そのダウンに対する驚きと喜びは、アレナ・メヒコの地盤を揺るがすほどのものだった。

「——やったな」

「——もう動かねえよ」

ゴンザレスの拳が届いた。

千堂からの受け売りじゃない、生涯を賭して作り上げた最凶の一撃だ。この手応えに不満はない。

「——私もだよ」

そして、決着の仕方にも納得していた。

大歓声を上書きしたのは驚愕と感嘆の声。

口から血を流しながら立ち上がる漢の、ありのままの姿を真っ直ぐに受け止めた。

「あのカウンター受けて、立つんかい」

試合終了の合図が鳴り響く。

途方もなく長い、10年以上もかけてたどり着いた終着駅。ゴンザレスの全霊を懸けた最凶の物語に幕が閉じられる。

フルラウンドを戦い、K.O決着にならない。

ならば残すは、判定。

12ラウンドを戦った自分を信じるのみだ。

集計結果が出るまでの待ち時間はあっという間に過ぎていった。殆ど意識が落ちていたせいもあるが、なによりも全てを出し切った充実感で満たされた時間が幸せだった。

(なあ、どうだった。ここまでやって)
(………楽しかった。楽しすぎたなあ)
(俺にも聞き返せよ。言いたいんだよ)
(伝わってんだって。けど教えてくれ)
内側でのミキストリとのやり取りを聞きながら、ギリギリ意識を保ってられる。

ジャッツジ1

115 | 112

リカルド・マルチネス

(楽しかったに決まってるだろ！)

(俺と同じ感想だから聞き返したくなかったんだよ。疲れるじゃねーか)

(疲れ果てようぜ。今夜はぐっすり寝られるんだ)

(………それも、そうだなあ)

疲労こんぱいの身体のくせに、暖かい。

熱じゃなく、心が満たされている。

ジャッツジ2

113 | 114

アルフレド・ゴンザレス

アレナ・メヒコ天井を見上げながら。

両手を握りしめて勝利を祈る幕之内と板垣を見ながら。

そして、腕を組んでリング上を見守る千堂と視線を交わして。

もう、これ以上のないほどの笑みが溢れ出ていた。

ジャッツジ3

115 | 113

(やっぱり…俺の目標なんだ)

この試合で最も痛い一撃を、最後に貰って微笑んだ。地上に齎される陽の恵みは、やっと正常に戻った。アルフレド・ゴンザレスの全力が玉座に届いたのだ。

判定

2 | 1

勝者

リカルド・マルチネス

だが、ゴンザレスはあと1歩だけ及ばなかった。

リカルドに1歩先を歩かせるに至られない。

自分の勝利を信じてここまで来た。

それでも無敗神話を越えるには至れない。

「だが……」

だが、リカルドを以ってしてもゴンザレスの様式・死神モード・ミキストリ終式・死神モード・ダイオスを見切ることは出来なかった。

リカルド・マルチネスは無敗だが、完璧には至っていない。

「アンタがいる限り、俺たちの想いは続く」

無敗神話の心に死神の鎌は届いた。

命を刈り取るためではなく、停滞した価値観を切り裂いた。

リカルド・マルチネスは決して無傷ではなく。

ゆえに、身体に染み渡る痛覚が彼の闘争心を燻った。

「ありがとうグラシアス、ゴンザレス」

世の理をなぞるように。

夜が過ぎて、天に昇る輝きは太陽だ。

「さGood-bye、らリカルド」

12ラウンドを戦い抜き、幾度ものダウンをバネにして、神話樹立史上初の快挙、ここに達成。
しかし、無敗神話が潰えることは永遠にない。

最後の報酬

2—1、勝者、リカルド・マルチネス。

36分間を巡るアルフレド・ゴンザレスの結末を聞き届けて、幕之内は拍手も忘れて俯いてしまった。

握りしめた拳に大粒の涙がとめどなく落ちる。

(いま泣きたいのはゴンザレスさんのはずなのに……)

敗北した当の本人は微睡むように試合の余韻を味わい、夜空を見上げて笑っている。文句も、励ましの言葉も出てこない。

だから、涙が止まらない。この結果を呑み込めないんだ。リカルドに敗れてリングを去った伊達の姿を思い出してしまう。一緒だった。ゴンザレスさんの表情は、引退するボクサーの雰囲気と一緒になんだ。バトンを手渡した伊達さんのように、板垣君との試合を終えた山田君のように。

彼らの……全てを出し切った時の雰囲気もゴンザレスから感じた幕之内は、この結果を受け容れることしか許されない。勝利しか信じていなかった幕之内には、受け容れる余裕はなかった。

「泣くなっ幕之内」

それでも顔を上げたのは、背中を掴んで背筋を伸ばされたから。「最後まで目に焼き付けるんやつ。リカルドと12ラウンド戦った、たった1人の漢の勇姿をつ……」

あの後ろを追い越すために……目を逸らすなっ……」
そう言っつて、流す涙も忘れて見つめている。好敵手の背中を忘れないために。そして、宿敵の1人を倒すために。

両腕を組んで、脇の部分の服を掴み、これでもかと皺を寄せている。服から聞こえる骨の軋む音が、千堂なりの拍手の代わりだった。

『では最後に、今後の方針や意気込みをお願いします』

気がつけばリカルドへのインタビューも終わりを迎えようとしている。ゴンザレスはブラスに肩を持たれながらリングに残っていた。この質問を待っていたとばかりに、眼光を鋭くさせながら。

2人に合流した板垣に声をかけられて、会場をあとにする2人を追いつながら板垣は疑問をぶつける。

「良いんですか、ゴンザレスさんのところに行かなくて」

「ゴンがワイらに託したんや。ここで話すことはもうないわ。しつこいって嫌われんで」

いまゴンザレスに会いに行けば、感傷に浸ることが出来なくなる。

漢の涙は、独りで流すものだ。今日の残り時間は誰もがゴンザレスから離れて、彼に必要な場を整える。

人生で最後の、敗北の夜を快適に過ごしてもらうために。

「そうです、よね。あんなに努力して、リカルドの全力と渡り合えたんですから、休ませてあげなきゃ。」

あそこまで強くても勝てないのは、誰も予想出来ないですもん」

「リカルドの全力を見れた。ワイが無理やった姿や。」

…幕之内、あそこまでいけるか?」

千堂の問いに口籠る幕之内。

ゴンザレスのパンチは幕之内より威力は落ちる。だが、10ラウンド以降のゴンザレスのパンチは、全てが幕之内に匹敵するほどの威力だったように感じた。ダウンを奪ったパンチは、上回るだろう。

それらを考えると、ただリカルドを倒すだけでも途方もない物語になる。勝率は1割未満だ。

「……………僕があそこまでリカルドを追い詰められたとして。きっと手数で負けていました。」

僕のパンチが効く姿が想像出来なかった…」

「……………悔しいがワイも同感や。」

鳥肌が止まらへん、気が遠くなるで」

口には出さないが、板垣の正直な感想としては、「あそこからまだ強くなるなら、いくら先輩たちとはいえ…」という諦観。そして、「新型デンプシー・ロールなら、或いは…」という希望だ。

2人の目標は果てしなく遠い場所にある。リングの外でどれだけ練習を積んでも、決して届きはしない。リカルドと同じリングに上がって、初めて同じ地平の隅に立つことができる。

36分以内に凡ゆる試練を乗り越えて、ようやく同じ目線に上り詰めるのだ。

「ゴンザレスよりも強くならなアカン。

幕之内、先はまだまだ長いなあ……」

「絶対に追いつきます。伊達さんからのバトンを……ゴンザレスさんの想いをぶつけて勝ちます。勝ちましょう」

人間が相手をするボクサーじゃないと板垣は知りつつも、2人の背中を見ながら思うことがある。

幕之内から聞いた、鷹村の発言。『人のまま踏み込むな』とまで言い放った河川敷の“人外の境界線”。あれが鷹村の言う世界……リカルドの背中だとするのなら、既に幕之内に資格はある。

そして千堂も……人とは一線を画するものがある。先にリカルドと同じ地平に立ったボクサーだ、線の上には立っていた。

だから問題は、どちらが届くのか。

果たして2人が届くのか。

近々訪れる未来に不安を抱きつつ、人外2人の背中についていく。いつか自分も同じところに立つと決意を込めて、冥界の夜を見上げた。

「試合から2日しか経ってないのに、空港まで見送りに来てくださってありがとうございます！」

「車で送れないのが残念だ。流石にこのザマじゃあな」

リカルドとの試合が終わり2日が経過した。

メキシコ・シテイ空港にプラスの運転で送り届けてもらった3人は、右腕を包帯で固定し、左右の頬を湿布で覆い、服の下の脇腹をコ

ルセットで固定したゴンザレスに見送られていた。

「その怪我で立つとれるとは、流石は死神や！」

中身はスカスカやろ、人間のフリしくさりおって」

「皮ぶつ剥はがすぞティグレ？」「脅すだけじゃ足りねえ。最後に気合い入れてやらア!!？」

「絶対安静って言われてるだろう！暴れるな！」

センドーも煽るのはやめてくれー！」

重症患者のゴンザレス：今はミキストリが血を吐きながら襲いかかる。危うく警察沙汰になるところを取り押さえつつ、幕之内、千堂、板垣の騒がしかったメキシコでの生活も終わりを迎える。

試合の翌日、病院から帰ってきたゴンザレスがあっさりとプロボクサー引退を告げた。彼の表情に曇りはなく、冥界の主人に似つかわしくない晴れ晴れとしたものだ。誰も異論はなかった。

そこからお疲れ会と称して身内だけのパーティを開いて、これまでのボクサー人生を語り合った。千堂と幕之内のスパーなんていうものも勃発したが、その話はまたの機会としよう。

アルフレド・ゴンザレスは引退した。

その事実を受け入れる1日を過ごして、リカルドに拳を届かせるのに必要な言葉を受け取った。千堂と幕之内にとって、これからのフェザー級で戦うのに欠かせない1日となったのだ。

「俺は、リカルドを判定まで追い込んだ」

「——っ」

そうして、ゴンザレスは別れ際の言葉を切り出した。

「リカルドの本当の過去は伝えた通りだ。もうヤツは罪を背負っちゃいない。ボクシングが好きなのヤツが、やっとボクシングを楽しめるようになった。出鼻を挫きはしたが、次の試合までには立ち直ってる。だからこれ、やるよ」

そう言って取り出したのは中敷き。

3人にそれぞれ1セットだ。

「ありがとうございます。大切にします！」

「ボロボロになるくらい履き倒してみせます」

「マクノウチの足に合わないのはすまん。荷物の底にでも敷いてくれ！」

安物だからな、と笑うゴンザレスだが、恐れ多くて出来ないと幕之内は笑った。

「なんや、中敷きかい」

「不服そうだなあ。こいつのお陰で最後、俺たちの右は力を捻り出せたんだ。お守りだぜ？」

ま、2週間で使い潰してみろって。結局、お前ら滞在中で1つも換えなかつたもんな。そんなじやリカルドには届かねえよ！」

「はん、余裕や。2週間後にジムに送り返したるわ」

「着払い拒否するぜ？」

千堂とゴンザレスは最後まで冗談を言い合って、最後には肩を組んで笑っていた。

名残り惜しさを噛み殺したゴンザレスは、千堂の背中を叩いて前に送り出す。不意の衝撃に半目の千堂と、笑っている幕之内に右拳を突き出した。

「俺の拳はヤツに届いた。次は……頼んだ」

ゴンザレスは信じている。

千堂も、幕之内も、リカルドを越えるに足る武器を持っていると。だから2人に想いを託した。

「二次は僕／＼ワイが行く」

ゴンザレスの言葉を受け止めて、恐縮することはなかった。リカルドがデタラメな強さであろうとも、自分が勝つことを信じているから大きく頷いた。

「お前は早よ復帰せんかい！」

「あつ、いえその…気持ちが高つちやって、つい！でも復帰はすぐだし、リカルドに挑戦状を送ります！」

「ワイは一昨日渡したんや！ワイが先や！」

「それは分からないじゃないですか!!」

「うわー!?2人とも締まらないですよ！」

空港の前で騒がしい3人を見て笑うゴンザレスの声が響く。

今日は快晴、明日を見るには清々しい1日だ。

ゴンザレスとブラスに別れを告げた幕之内は、空港の入り口に向かいながら1人の人物のことを思い出していた。

(伊達さん……………)

リカルドへの打倒を夢見て敗れたボクサー。

ゴンザレスと同じく、想いを託されたあと、息子の雄二にリカルドへの挑戦を問われたとき。

「今のボクじゃ歯がたたないよ」

こう答えた。

答えるしかなかった。

「今のボクは……………あの頃のボクから見て——」

遥かに強くなったが、リカルドの底はまだ目視出来ない。見えるのは背中だけだ。……………違う、背中だけは。

「見えるよ。あとは、一歩でも多く進むんだ」

自分に向けられた想いに応えるために、幕之内は力強く明日へと踏み出した。

Next Champion編
完結



『Next Champion』で繰り広げた『取り戻す』物語は全て終了した。

ここから『ライトヘビー級』に込めた『王とは』なにかを問う激闘から未来へと繋がっていき。

『クルーザー級』で語られるのは、夢を追い、栄光から堕ちたボクサーたちの『もう1度』。

届くか、退くか、お待ちあれ。